



PL            Shin gunsho ruiju  
755  
  .35  
S5  
v.3

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---







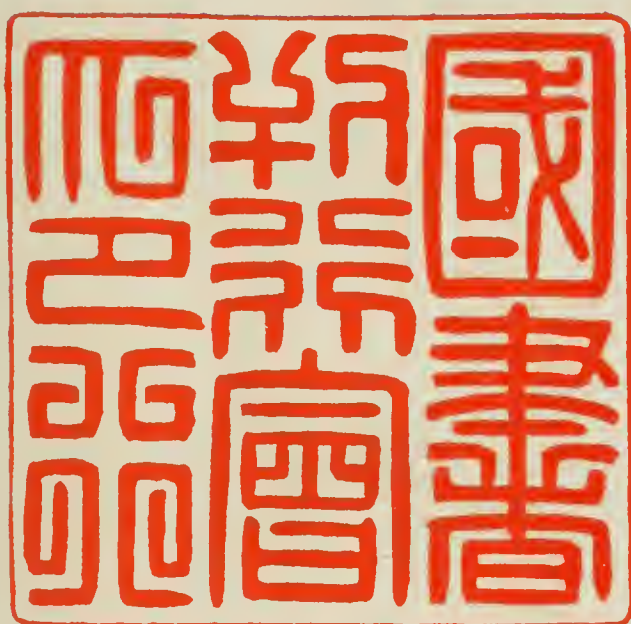


新群書類從  
第三





PL  
755  
.35  
S5  
v. 3



例言

一本卷には古名優の逸事傳記其の他演劇に關する雜書と、元祿前後に行はれたる狂言本とを収む。即ち演劇に關する雜書には、

役者論語

刊本

古今いろは評林

同

芝居乗合話

寫本

作者店おろし

同

並木正三代咄

刊本

岩井半四郎最期物語

同

永田氏藏本

正徳追善曾我

同

安田氏藏本

梅幸集

同

同

中山文七一代狂言紀

同

眠獅選

同

傳奇作書追加

寫本

小栗氏藏本

又狂言本は凡て刊本にして、其の外題は次の如し、

娘孝行記

富永平兵衛作

熊野山開帳

同

業平河内通

同

狩野氏藏本

御曹司初寅詣

近松門左衛門作

永田氏藏本

傾情一張弓

津打治兵衛作

同

傾城三鱗形

同

京ひな形

山下半左衛門作

同

一谷坂落

狩野氏藏本

當麻中將姫まんだらの由來

箱傳受

狩野氏藏本



今川かな手本

永田氏藏本

有卦人万倍曾我

一『役者論語』は、道外方金子吉左衛門の著「耳塵集」をはじめ、「續耳塵集」、「あやめ草」、「賢外集」、「佐渡嶋日記」等を合せたるものにして、坂田藤十郎芳澤あやめ、其の他、元祿前後における名優の逸事を載す、八文字屋板行俳優七書の一なり。

一『古今いろは評林』は、八文字屋の編並びに板行にして、忠臣藏淨瑠璃及び演劇に關する事項を細大洩さず集録したるものなり、實に戲曲忠臣藏の沿革史といふべし、

一『芝居乗合話』は、狂言作者中村重助の著なりといふ、重助は堀越二三治の門人にして、俳優を故一といふ、明和年間森田座の立作者なり。活東子編「燕石十種」中の「劇場新話」は、本書を後人が手を入れ、取捨したるものなりといふ、されば同書と大同小異重複の嫌ひ

なきにあらざれど、其の異本として特にこゝに収むることゝせり。

一『作者店おろし』は、狂言作者三升屋二三治の著なり、二三治は本名伊勢屋宗三郎と稱し、もこは淺草藏前の札差にして、代々家富み榮えしも、二三治に至り芝居を好み、殊に七代目海老藏を蟲眞にし、自ら狂言作者たらんと欲し、初代櫻田治助の門人となり、遂に文政の末年河原崎座の立作者となれり。狂言を作せし外、劇場に關する著書二三あり、本書は其の一にして、古來名ある作者の逸事を集めたるものなり。

一『正徳追善曾我』は、元祖市川團十郎才牛が、元祿十七年(寶永元年)横死の顛末を記したるものにして、正徳六年故人の十三年忌に、追善の爲め刊行したる由、錦繡堂の序に見えたり。されど此書は『寶永忠信物語』と題して、是より先き寶永二年(事件の翌年)板行され、

正徳六年更に改題したるものなることは、こゝに収めたる取合せ本にて知るを得べし。而も表題の異なる外、内容には少しの相違なきこと、七代目の跋に見えたる如し、此書は七代目が最初「追善曾我」の一三四の巻を有したるに、石塚豊芥子また外題變りながら「忠信物語」の一二五の巻を有し、二書合すれば完備すべきにより、七代目は懇望して豊芥子より譲り受け、こゝに同書は全部揃ひこなれり。よりて七代目は、其の代りにて、古河默阿彌に筆耕を托し、二三四五の四巻を寫さしめ、一の巻の板本を合せ、これに己れが跋を附して豊芥子に贈與せりといふ。

一「傳奇作書追加」は、先きに「新群書類從」第一冊編輯の際缺本なりしを、今回幸田成友氏の盡力により、本巻に収むることを得、こゝに傳奇作書の完備を告ぐるに至れり。但し同書中「難波土産」及び「操年代記」の拔萃は、既に歌曲の部に、二書とも全本を収めたれば、こ



こにはこれを省くこととせり。

一 狂言本は、後々の根本もしくは臺帳と稱するものとは素より同じからず、寧ろ筋書といふべきものなり。されど今日の筋書に比ぶれば、やゝ詳細なるものあり。今其の作者について一言すべし。

一 古狂言本には作者を記したるもの頗る稀なり、これ古浄瑠璃と同じく、元祿以前には、多く作名を附せざる習慣によるなるべし。然るに富永平兵衛といふ作者出て、延寶八年の顔見世狂言の番附に、はじめて作者の名を出せしより、一時は世の物議ともなりしが、これよりして後々浄瑠璃狂言本とも漸く作者の名を記す習慣とはなれり、「娘孝行記」、「熊野山開帳」、「業平河内通」の三種は平兵衛が作なり。

一 近松門左衛門の事は、世の洽く知るところ、狂言作者としては平兵衛とはゞ同時代なれど、やゝ後輩なり。都万太夫座の作者とし

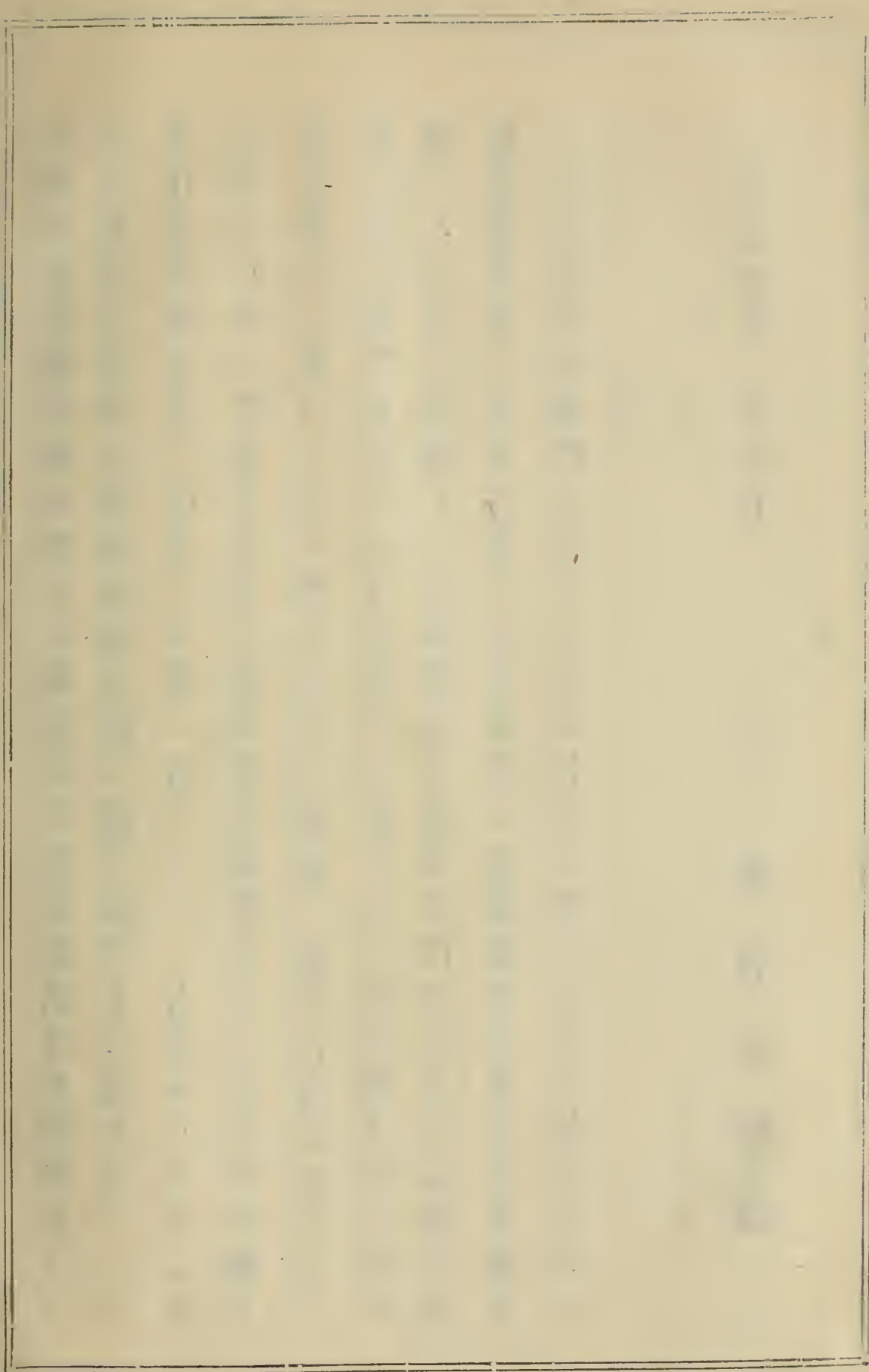
て、名優坂田藤十郎の爲めに脚色せし狂言數番今に傳はれり。されど本卷には、僅に「御曹司初寅詣」一種を載するに過ぎず。

一 津打治兵衛は、江戸作者の中興と稱せられし人、寶永元年廿二歳にてはじめて作者となり、正徳享保を世盛りとして、二代目團十郎の爲めに作せしもの多しといふ。傾情一張弓は其の作なり。

一 山下半左衛門は、京ゑびすや座の立物にして、坂田藤十郎と時を同うし、これと拮抗したる俳優なり、狂言を作りしここに就ては、是迄聞くところあらず、されど當時の座頭株は大概狂言を脚色したれば、半左衛門に「京ひな形」の作ある異とするに足らざるべし。

明治四十一年五月

水谷 不倒 識





# 新群書類從第二目次

## 演劇

役者論語……………	一
舞臺百箇條……………	二
藝鑑……………	四
あやめぐさ……………	八
耳塵集……………	一五
續耳塵集……………	二七
賢外集……………	三二
佐渡島日記……………	三九

古今いろは評林……………四九

芝居乗合話……………一一一

作者店おろし……………一五六

並木正三一代咄……………一七四

岩井半四郎さいご物語……………一八六

市正徳追善曾我（寶永忠信物語）……………一九四

梅幸集……………二二五

中山文七一代狂言紀……………二四四

眠獅選……………二六〇

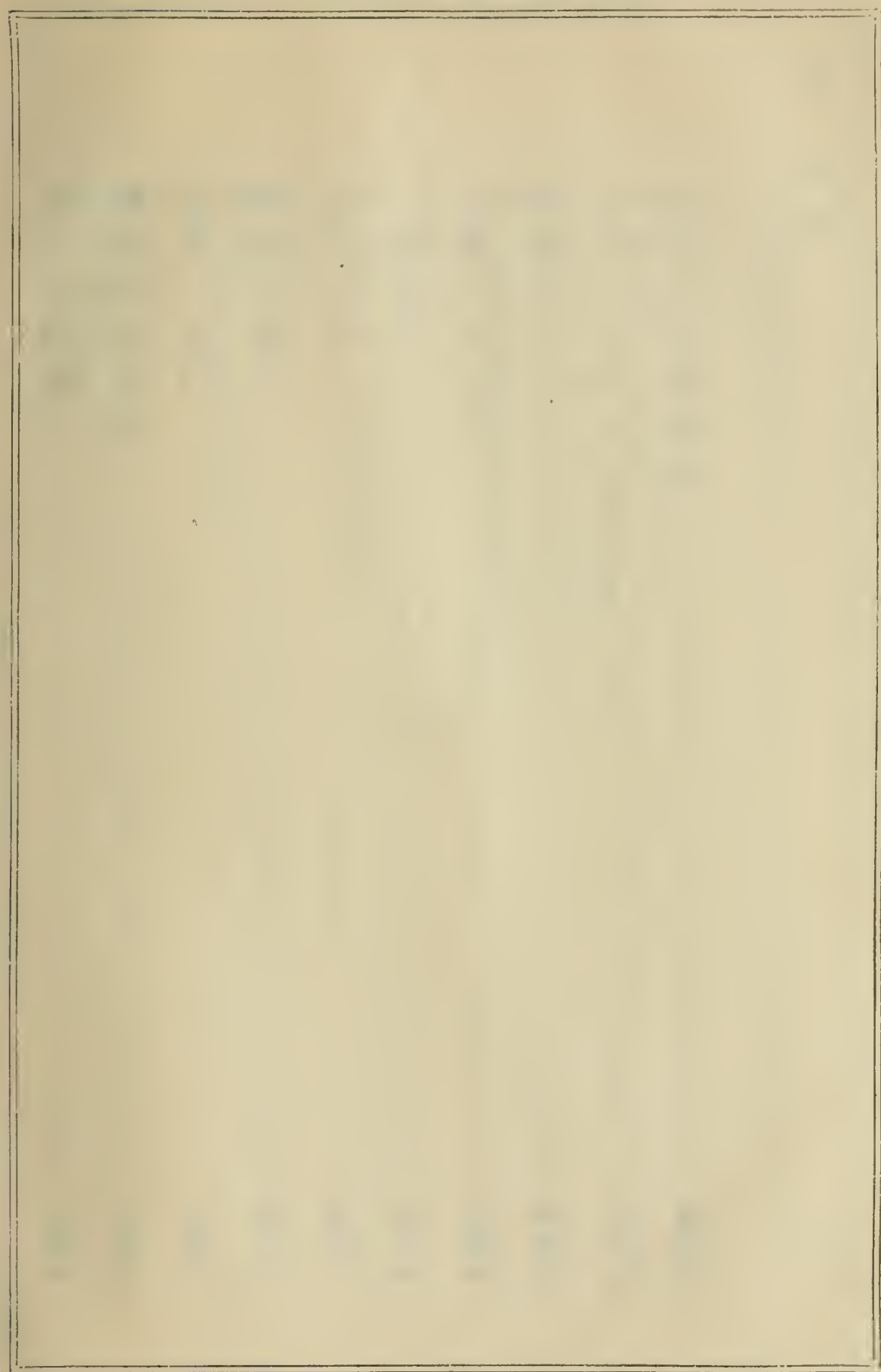
西澤文庫傳奇作書追加……………二八六

娘孝行記……………三三五

熊野山開帳……………三五三

業平河内通	三六四
御曹司初寅詣	三八六
傾情一張弓	三九〇
傾城三鱗形	四〇二
京ひながた	四二〇
一谷坂落	四三八
當麻中將姫まんだらの由來	四五四
箱傳受	四六五
今川かな手本 <small>(若後家卯の花重)</small>	四八〇
有卦入万倍曾我	四九四

目次終



# 新群書類從第三

## 演劇

### 役者論語

此書や、むかしより上手名人と稱せし役者のはなしどもを、古人書留め置し卷々なり

舞臺百箇條

元祖坂田藤十郎師匠杉九兵衛といふ花車形の書置る書也

藝鑑

富永平兵衛 むかしの狂言作者也 書置る

あやめ艸

元祖よし澤あやめはなしとも福岡彌五四郎書とめたる書也

耳塵集

上手のはなしを金子吉左衛門書しるす

續耳塵集

民屋江音四郎五郎事書留し事也

賢外集

染川十郎兵衛聞覺し事をはなせしを東三八(狂言作者也)書置る賢外といふは十郎兵衛法名也

佐渡嶋日記

むかし今の藝者心得に成べき事を蓮智坊が書置なり蓮智は佐渡嶋長五郎法名也

右七部の書は優家の龜鑑なれども梓にちりばめ付録に當時三ヶ津役者藝品定を加入する而已

嘉永丙申晩秋

八文舍自笑述



## 舞臺百箇條

杉九兵衛述

一今の立役のきつばをまはして、かたきをきめるは、かたち計にて心のきつばをまはさず、見物衆にほめらるゝ事をのみむねに持てまはすゆへ、かたきをきめるではなくて、見物衆へ廻すきつばになる、夫故敵役の身にこたへず、よはみの出し所がはづまぬのみなり、相手仕事なれば我は相手をたて、我も相手にたてらるゝ様にさへすれば、舞臺のおもてしつくりとなる故、自然と見物衆のあつと感ずる場へゆく也、相手にかまはず、我ひとりあてんとするを、孤<sup>こ</sup>自<sup>じ</sup>當<sup>あて</sup>といふ、孤<sup>こ</sup>はひとりとよみ自<sup>じ</sup>はみづからとよむ耻<sup>は</sup>べし

一精を出すといふは、ねても覺ても、仕内を工夫し稽古にあくまで、精を出して、扱舞臺へ出ては、やすらかにすべし、稽古に力一ツばい精出したるは、やすらかにしても、少しも間はぬけぬものなり、稽古工夫には心をつくさず、舞臺にて計精を出だせば、きたなく、いやしく成て、見さめのする事うたがひ

なし、扱惣稽古といふものは、初日より二日も前にすべき事也、初日の前日はとくと休みて、きのふの惣けいこの事を、ほつゝ心におもひめぐらし、氣をやすめて、初日を始れば、初日よりおち付て、間のあく事なし、前日にアタフタ稽古し、夜をかけて物さはがしく、翌日を初日とすれば、わるい事もかなりがけにせねばならず、此ヶ條大切な事なり

一狂言の實は虚よりおこり、おかしき事は實よりせねば無理あてになる也

一狂言をするは、心一ぱいにするをほむべし

一藝者其一人となれば、至らぬ藝者そねみ、あしざまにいふ事は、たとへていはい、數百の蟻の、蚯蚓をせゝるに似たり、甚あさましき事也、其長に至るものは、おのれが心をみがきて、其品に應ずる妙をあらはせり、甘柿の木に澁柿をつぎて、はやく實ののるをたのしまんとするゆへ、却て澁柿の惡名をとる、澁柿の木に甘柿を接合せ、生たつ時は本の味をうしなはず、万物も實<sup>み</sup>ばへより善惡しれがたければ、役者も物になれたる人にたより、接穂<sup>つぎほ</sup>のごとく修行せば、名譽の名を得べし

一役々の情をかんがへみるに、けいせいは位高みだかにして、心はしやれたるもの也、武士の女房は下をあはれむ心有て、人おどけたる事をいふ時は、きつとするかたちよし、よつて武士の妻とみへる也、すべて藝者は相手の氣に應ずるを第一とす、音の合ぬ狂言は名人たりとも、心に叶はず、されば其人の氣によつて、せわしくしてしにくきあり、又藝のかわる仕内有、又よくおぼえてせわしきあり、延過るあり、あるひは拍子きゝにて氣のはる有、しそんじあつても取直しできる有、うれしい事をする時武士の妻は、聲をあげてなくは見ぐるし、男も聲をあげてなくものにあらず、年より愚にかへるゆへ、思はず聲あげてなく事有、至てうれしい事するに、こらへてなく有、おさへてなく有、おさへてなくは人目をはばかり、こらへてなくはみれんにみゆる也、又ぢかい切腹手負などいふ時は、一調子高し、これよりのぼす故、前後いふ事さだかならず、次第くゝに聲もよはる也

一見物入なきとて、姿をいとはぬ事、其身のそん也、たとへば全盛するけいせい、さのみすがたを

粧ひなくとも、人目に立風、またはやらぬけいせいなりとも、衣裳はなやかに著る時は、おのづから人心迷ふ也、狂言の役の替りを、人に頼むたのまるゝ事も、人の役故そまつに勤めても、其身の誤りにならぬと心得るは、大きな違ひ也、万一本役の人より、一ト所成とも勝れたる仕内あらば、其身の會稽ならずや、おしひかな其一人に成るべき身をもつて、はじめ一ト足のふみちがひより、万里の迷ひとなる也

○是より下の箇條は虫ばみて見えす惜むべじく

舞臺百箇條終

## 藝鑑

富永平兵衛著

何事も時に随ふ習ひなるに、わきて狂言の風は、時代の品替れり、むかし狂言きやうげん盡の時あたりしと承り傳へ侍る浪人盃といへる、狂言を、左に記するもの也

一萩山の家中高坂采女といふ武士、馬上にて使者におもむく道の景色を稱し、旦那より小性家來までせりふ渡り、采女が曰、むかふの館は智君のお國なれば、國境より、行義正しく、いづれも麁相のなきやうにと申さるれば、皆領掌の答あり、諷うたひに成る也、馬をめぐらし、しとく行むかふへ、深あみがさ著たる浪人もの、あゆみきて、しほくと平伏すれば、家來とがめて、何者なれば慮外もの、笠を取て片付ろと、いへども更に答なし、イヤ推參なと侍ども立よらんとする所を、主人ヤレまでく、彼者我にむかひて平伏の躰ていとみゆれば、これ全く慮外にあらず、去ながら笠をとらぬは心得ず、コレそな男、それがしに向ひ用ありげに見えたるは、いか

なる人にて何の用事子細きかんとありければ、彼男謹て、采女殿には御堅固の躰先以大慶至極以前御懇意の拙者なれども、年へたれば聲もきゝわすれ給ふべし、今日此道筋をお通りと承りあまりなつかしく、最前より待うけ、お馬のさきに平伏いたしながら、御勘氣をこふむりし身なれば、顔を貴殿に見せ申もおそれ有、又面目なく存、慮外のみみ眞平御めん、と詞の内采女つくくおもひ入有てム、扱は貴殿こそ以前の傍輩轟辨右衛門殿な、此方もなつかしく存る、某は御用の道筋馬上は御免、あみ笠を慮外と申すにあらず、お顔が見たい、お斷のだん何かくるしかるべき、サアく笠をとり給へ、辨右衛門殿に違はあらじと詞かけられ、扱々よくこそ御推慮、いかにも辨右衛門がなれのはて、おはづかしやと、笠をとれば先は御無事でお久しやと、互にふりにし物語、いさゝかの事にて、勘氣を得られし貴殿、申出さぬ日とてもなし、何とくらし給ふやと問れて、辨右衛門ア、かたじけなき御詞、浪人の身なれば、朝夕の煙かつく、習置し諷うたひの袖乞、無念とは存ながら、もと諫言過て御勘當、かな



らず時節をまたれよと、其元のお詞をたのみに、  
今日まで命ながらへ候也、御上使とあれば、殿の御  
名代御目見へいたす心地仕る、これを浮世のおも  
ひ出と致す了簡、すいぶん御無事にお勤あれ、お急  
ぎのさまたげ名残はつきずおいとまと、泪ながら  
に立行をしばしと、め、仰の如く今日殿の御名代、  
追付御勘氣御救免有て、所領御安堵のしるしの盃  
を致さん、ハッアこれは有がたしと、又手をつけば  
采女扇をひらき、途中の馬上取あへぬ心ざしの大  
盃、いざ／＼つげと小性にいひ付れば、同じく扇を  
銚子としつ／＼おもひ入、呑こなしサアいざ參れと、  
辨右衛門にさす、此お盃といひお志しの深切いつ  
は飲ずとてうどたべんと、三度いたゞき呑思度有  
て、時刻うつると立ざまに、お志しの御酒に酔ひた  
りと、足元ひよろ／＼國を祝ひ、禮をいふに舌まは  
らず小飲ぶし、こなたは馬上に泪ぐみ、おさらば  
さらばと別れ行、此一段にて狂言大當りせしと也  
一むかしの狂言は多く衆道の趣向有けり、若衆形の  
立者は若女形より高給銀也、其時分は町々にも衆  
道はやりけり、むかしの狂言を又書付侍る、氏神詣

とやらん外題をいひ傳し也

殿様氏神詣遊ばさる、六法の出所作あり、跡に引馬  
行列おどり、其時分の歌二上り殿のお馬はさび月毛  
連錢あし毛鹿毛かすげ、しと／＼打てはかけあが  
り、お江戸そだちのひげ／＼男、お馬の口をしつか  
りと、つり／＼／＼ひげ男、つり／＼／＼つり  
りん／＼りん／＼／＼／＼りんとはねたるいさみ  
馬、つなぎとめたよ戀のせき札、皆々大義じや休め  
休め、家來が手をつき、先殿様には神主方にて御  
休足と、歌にて皆々はいる奴共はけしきを詠め、小  
性のきりやうを評判、艶之丞やまのじやうがよいイヤおらは友  
彌殿にほれたと、いろ／＼噂するを、侍出て、何を  
たはこと、御小性の噂今一言云て見よと、とがめら  
れてソリヤこそと、跡をも見ずに逃はいれば、かん  
なぎお神樂／＼と呼はりて、侍はいる所へ、艶之丞  
出、神前に向ひ拍手打、主君國家太平御武連長久と  
祈念する折から、茶道珍才うしろに立、艶之丞が袖  
を引小聲に成て、其元のお爲を申さん、殿さまの御  
寵愛は其元お一人とおもひしに、比喩よりつ／＼  
友彌殿に御鼻毛を延し給ふ、其元はお使に參るこ

なたは神主へ參れと、仰付られたは、跡にて友彌と殿さま、契らせ給ふはかりごと、御油斷有なとたきつけてお使にはしり入、艶之丞ははらをたて、扱々友彌めにくや腹立やとねたみのせりふ有所へ、殿様御立といふ内に、家來數多出、奥より殿は出させ給ひ、友彌に仰て艶之丞を呼給へども返事せず、殿見給ひコリヤ艶之丞、もはや歸らふこれへ參れ、ハウ爰へこいと手を取り、引よせ給へば艶之丞物をもいはず、殿の顔を見てふいとふり切、端がゝりへはいる、コレハさてきやつも、フイト行おつたと、草履取を呼給ひコリヤ艶之丞がしかたはどうじやあると思ふぞと尋給へば、草履取又殿の顔をみてふいとふり切、ツイトはいる、かくの如く家來どもを一人ぐゝ呼て問給ふに皆く同じくふり切はいる、扱もめんような事、今ははや引馬ばかりに成たと、馬を引よせコリヤ馬よ、何と艶之丞がふいといふ心はどうであると思ふととひ給へば、馬も殿様御前へついていとはいるが幕也〇今思へばか様の狂言へ、殿様御前へいしく侍れども、其時分の見物かゝる狂言をいふことも面白くおもひ、又役者も

かやうの狂言をよくこなし勤ける也

一明暦二年の丙申、其頃は京は女形のさげ髪は法度にて有りしに、橋本金作といふ女形、さげ髪にて舞臺へ出、其上棧敷にて客と口論し、脇ざしをぬきたる科によつて、京都かぶき芝居残らず停止仰付られたり、これによつて京都座本村山又兵衛といふもの芝居御赦免の願ひに御屋敷へ出たる事十餘年、しがれども御とり上なかりし故、又兵衛宿所へもかへらず御屋敷の表に起臥して、毎日願ひに出るに雨露に打れし故、著物はかまも破れ損じ、やせつかれて、人のかたちもなかりしなり、其頃の子供役者ども多くは商人職人と成、又は他國へ小間物など商ひにゆくものあまた有、わづかに残りし子供役者銘々に出錢して食物を御屋敷の表へはこび又兵衛をはごくみしが、芝居御停止十三年、寛文八年戊申にかぶき芝居御赦免なされ、三月朔日より再興の初日出せり、狂言はけいせい事也、此日は不就日なりとて留けれども、吉事をなすに惡日なしと、おして初日を出しぬ、十三年が間の御停止ゆりたる事なれば、見物群集の賑ひ言語に述がたし、村



山氏の大功後世の役者尊むべき事なり

一傾城事の狂言、今とはかくべつの風儀の違ひ也、先其場に口上出て、只今けいせい買の始りとふれてしまへば、村山八郎兵衛といふ立役、買人にて此出立白加賀の衣裳に銀箔にて鹿の角を蜂のさしたる所を、惣身のもやう也、一尺七寸の脇さしを向へ落る計にぬきさし、左ははりひぢ右の手に扇の要をつまみ、端がゝりよりゆらりと出、正面へ立ながらせりふに曰

八まん之が買人でやすと、扇にて脇ざしの柄をたけば、見物一同に、そりや買人の名人が出たは出たはと聲々に響る事暫く鳴りもしづまらず、時におくびやう口より、揚やのていしゆ、古き淺黄袴の腰をねぢらせ、てぬぐひを腰にさし、貝じやくしを持て出、エ旦那お出かといふ聲の内、偕見物そりや亭主が出たは、あの顔を見よ、おかしやと笑ふ聲、次のせりふもいひ出せぬ程也、漸笑ひしづまれは八郎兵衛、なんとまだ太夫は見えぬか、イヤもふあれへもふ追付是へお出と、端がゝりを打詠めアレ、只今これへ見えますといへば、ヤレけいせ

いが出てくるはと見物みな腰を立直し、物をもいはず揚まくを詠めゐる、時にけいせいの姿、おかしきいしやう金入也、其時分女形のかつらかくるはたまゝにて、多くは花紙をひようごわけにつゝみ、只壹人出て大じんさまお出かへといふを、扱もと悦び大じんと互に手にとれば、又笑ひ座敷のあいさつ、一ツゝこなしを、どよみをつくりて譽たり、扱亭主盃をめぐらし、酒の肴に太夫様一曲の舞所望ゝとせりふの内、頓てはやし形出ならば、女形舞の所作有、これは狂言一ばんの仕組なり

○右に書顯す狂言あまたあれ共事繁ければ畧之

藝鑑終

あやめぐさ

福岡彌五四郎述

よし澤氏は古今女形の上手なる故、あれ是へはなされしことを聞傳へ、又は自分にも尋ねて書置ける事三十ヶ條に成ぬるまゝ、あやめぐさと名づけ、此道のしるべとし、ふかく秘して人にもらさず、其ヶ條左のごとし

一或女形よし澤氏に問けるは、女形はいかゞ心得たるがよく候や、よし澤氏のいはく、女形はけいせいさへよくすれば、外の事は皆致やすし、其わけはもとが男なる故、きつとしたことは生れ付て持てゐるなり、男の身にて傾城のあどももなく、ぼんじやりとしたる事は、よくくの心がけなくてはならず、さればけいせいにての稽古を、第一にせらるべしとぞ

一歌流<sup>かろう</sup>もとは香龍<sup>かうりゆう</sup>と書たるを、女形の名にはつよすぎたる龍の字と、よし澤あけんにて歌流と書替られたり、歌流あるとき狂言の仕様を尋られしに、よし澤氏曰、家老の女房にて敵役をきめる時、武士

の妻なればとおもふ心あるゆへ、刀<sup>かたな</sup>のそりを打事かならずりつばなるものなり、武士の女房なればとて、常に刀をさす物にあらねば、刀の取まはしりりし過たるは下手の仕内なり、刀をおそれぬといふ計が仕内なり、何としてかとしてナンと、いふて、ぶたいをたゝいてつかに手をかくるは、ぼうしかけたる立役なるべしと、度々申されしと

なん  
後ニ芳ニ改ム

一吉澤氏の曰、女形の仕様かたちをいたづらに、心を貞女にすべし、但し武士のつまなればとて、ぎごつなるは見るしきつとしたる女のていをする時は、こゝろをやはらかにすべしとぞ

一中の嵐三右衛門吉澤氏と夜ばなしの時、とろゝ汁を出されければ吉澤氏箸を取かねられたり、三右衛門いはく、女形は此たしなみなくては、さてくわれらあやまり入たり、晝夜心易く致すゆへとの存ちがへとわびことをせられしよし、後に片岡氏に三右衛門あいて、あやめは名人なりと申されしは、かゝることまでに、たしなみふかゝりしゆへなり

一十次郎申されけるは、女は右の膝をたて男は左の膝を立る、あゆみ出しもおなじ事とぞ、弟子へおしへられしもその通りなるを、吉澤氏ひそかにゐけんせられけるは、それは其通りなれども、見物衆の方へむかふ方のひざをたてず、又見へによるべし理窟ばかりにては歌舞妓にあらず、とかく實とかぶきと半分／＼にするがよからんとぞ、十次郎もそれより見へしだいにせられしなり

一武士の女房に成て刀を取廻す事、大勢に取こめられ、たとへばお姫様をかばふての仕内には、いかにも男まさりに刀をさばくべし、こゝを大事と忠義の心せまるときは、さすがものゝふの妻なり、座敷にて敵役をきめるはいまだせんのつまりにあらず、刀さばきおだやかなれかしと、さい／＼玉柏への咄なるを聞たり、これは玉がしは大勢に取こめられたる仕内かひなき故の異見とみへたり

一女形は色がもととなり、元より生れ付てうつくしき女形にても、取廻しをりつばにせんとすれば色がさむべし、又心を付て品やかにせんとせばいやみつくべし、それゆへ平生ををなごにてくらさね

ば、上手の女形とはいはれがたし、ぶたいへ出て爰はをなごのかなめの所と、思ふ心がつくほど男になる物なり、常が大事と存るよし、さい／＼申されしなり

一敵役をきめつけることはまづは女形の役にはめいわくなる事と思へども、狂言の仕組によりていやといはれぬばあれば、其役を請取る事なり、かたき役をきめて勝をとれば、見物衆はさてもよいぞと、その女形を譽るものなり、これにくし／＼と思ふ敵役を、よはかるべき女がきめるゆへ、うれしがるはづにてはあれども、これに乗て見物へのあたりをこのみ、又しても／＼此格な事をしたがるは女形の魔道なり、つゝには筋道へゆかぬ役者に成べしとぞ

一あやめ十次郎へ申されしを聞てゐたるに、さりとは見物のうけもよくてめでたし、しかしおかしがらする心持を止め給へ、仕内にてしせんとおかしがるはよし、おかしがらせんとするは女の情にあらずとなん、十次郎少しはらをたてられたる躰なるが、其のちわれらにあふて、あやめは此道のまほ



り神と存ると申されしなり

一 女形にて居ながら、立役になつたらばよからふといはるゝは耻のはぢなり、女形より立役へなをつて、立役にてともかくもよいといはるゝは、女形の時はわるかるべし、立役に直つてあしきは、女形の時よかるべしと、常に申されしが、あやめ立役になられてはたしてわるかりしなり、女にも男にもならるゝ身は、もとになき事故とかんじ侍りぬ

一 女形にてゐながら、もしこれでゆかずは立役へ直らんと思ふこゝろつくがいなや、藝は砂になる物なり、ほんのをなごが、をとこにはならぬにてがてんすべし、ほんの女もはやこれではすまぬとて、男にならるべきや、その心にては女の情にうときはずなりと申されしも尤ぞかし

一 女形にて大殿の前へ出、夫に成かはつて、事をさばくといふやうなる、女家老の役あり、いかにもしつかりとせぬ様にすべし、しつかりとしては男の家老がぼうしを著たるに成べし、申ても大勢立合の所へ、いかに家老の女房なればとて、心おくせぬ理

はなし、身もふるふほどにあぶなく、かゝり、敵役がどつとつゝ、こんだ悪言をいふた跡にて、それよりきつとすべし、女は其場に成てはおとこよりいひ度ことをいふものなり、但シ少は上氣したるていにて、狂言をすべしと申されし

一 女形は貞女をみださぬといふが本體なり、是を以てほんの女とおなじ道理を合點すべし、いかやうに當りの來べき狂言にても斷いふべし、女形より役をいぢるといふは、此場が第一なるよし、若き衆へ咄されしなり

一 所作事は狂言の花なり、地は狂言の實なり、所作ことのめづらしからん事をのみ思ふて、地を精出さぬは、花ばかり見て實をむすばぬにひとしかるべし、辰之介など上手は上手なれども、此場の工夫なき様に覺えぬ、花のさくは實をむすぶ爲なれば、地を慥にして花をあしらへと、若き女形へ度々異見せられし

一 藤十郎と狂言する時は、ゆつたりとして大船に乗たるやうなり、京右衛門と狂言する時は、氣がはつて精出さねばならず、三右衛門と狂言する時は、ひ

つはつてせねば間がぬけたがるといふ事、さいさい申されしなり

一人の金をかへさずはらひもせず家をばかい、けつこうなる道具を求め、ゆるくと暮す人と、相手のそこねる事をかまはず、我ひとり當りさへすればよいと、思ふ役者が同じ事なり、金をかしたる人何ほどか腹をたつべし、相手になる役者、みぢんに成ことなれば、つるには身上のさまたげともなるなりと申されし

一左馬之助申さるゝは、まりをけるやうに、相手へのわたし方を專にするがよしと、あやめ申さるゝは、鞠を蹴る様に渡し方を專にはしがたし、相手をそこなはぬやうにするといふは、我が當りをと心がけぬことなり、上手に成るやうに精出さば、一場のあたりはなくとも、全牀の人がらにあたりあるべしとなん

一あやめ申されしは、我身幼少より、道頓堀にぞだち、綾之助と申せし時より、橘屋五郎左衛門様の世話に成たり、五郎左衛門様と申は、丹州龜山近所の郷士にて有徳なる御人、いかふ筋目ある人な

りしが、能をよく被成たり、親方は三味線方にてありしゆへ、さみせんに精出せと申さるゝあい／＼に、五郎左衛門様を客にすること幸なれ、何とぞ能をならひおけと申されし故、二三度も頼たれども、五郎左衛門様とくしんなく、女形の仕内に精出すべし大概人に知らるゝ迄は、外の事むようなり、それに心があれば本体の仕内の心がけが外に成べし、其上能といふものはなまなかに覺へては狂言の爲あしかるべし、なぜになれば、仕内はぬらりと成、又しても所作事が仕たく成らんか、かぶき方の舞をもよくこなしたるうへに、能もして見たくば、かつて次第とてをしへ給はらざりしなり、其のち五郎左衛門様世話にて、親方を出、三右衛門どの取たてにて、吉田あやめと、我身よし澤あやめにて、一度に出、吉田に仕まけぬる事度々なりしが吉田は北國屋様といふ御方に、能事を少し習ひしゆへ能仕立の所作をもつて、さい／＼當りをとらんとせられしに、わが身は又地の仕内にのみ骨を折て勤し、いつとなくわが身名をしられ、吉田はとりあへぬる人もなく成て、今は役者もやめたり、



さてこそ五郎左衛門様の言葉思ひ當りたり、此心わすれがたく、我身家名を橘やとつき、五郎左衛門様のかへ名をもらひ權七とつきたるよし、ひそかにはなし申されし

一下手を相手に取たる時、その下手を上手に見する様にするが、藝者のたしなみなり

一仁左衛門方へふるまひに行しに、三八わが身に向ひ、申はいかなれども、ちと新町へ御出候て、太夫のてい御らんあるべし、五年まへとは大きにもやう替りたり、きさまのなさるゝは五年まへの太夫の躰なり、只今はよほどそれよりはおちたる風なれども、諸見物それを見てゐる故、風があふのはぬのと申よしののこたへに、御ゐけん忝し、しかし太夫は高上なるがよし、たつた五年の間に、それほど風俗が替りたらば、二十年まへはうつとうんしやうなるべし、よき御異見にて心つきたり、五年まへをりのりこし、廿年まへの風に致度候、けいせいは古風にてだてなるがよし、茶やふろやは、當世過てするがよし、此心得より外はなしと申されば仁左衛門どの茶やふろやは當世過たるとある、

過たるの言葉かんしんと申されしと、あやめのものがたりなり

一仕内が三度つゝいてあたると、その役者は下手に成ものなりと、若き衆へ申されし、當りたるかくをはづすまいとするゆへ、仕内に古びがつくと見えたり

一女形はかく屋にても、女形といふ心を持べし、辨當なども人の見ぬかたへむきて用意すべし、色事師の立役とならびて、むさゝくと物をくひ、扱やがてぶたいへ出て、色事をする時、その立役しんじつから思ひつく心おこらぬゆへ、たがひに不出來なるべし

一女形は女房ある身をかくし、お内儀様がと人のいふ時は、顔をあかむる心なくてはつとまらず、立身もせぬなり、子はいくたり有ても我も子供心なるは、上手の自然といふものなりとぞ

一あやめ申されしは、頃日天王寺へ花の會を見に行しに、いろ／＼のめづらしき花共あり、したが今は梅のさかりなり、梅はめづらしからずとて、ゑもしれぬ珍花共ありて見物の衆手を打てめづらしが

りぬるに、我身は梅花をよく立たるにのみ心とまりたり、ありふれたる花にて仕立の上手なるをかんじぬ、仕内もその様な物にて、女形は女の情をはづさぬやうにするが根本なり、めづらしくせんとて、おかしみをたてとし、つよい事を柱とせば、花は珍き花なれども、いつみてもよき花とはいはれまじきなり

一 玉川半太夫は、上手ではなれども、すぐ成仕内にて名を取たる人なり、岩井平次郎は上手なれども、曲が過て後には、見おとされしなり、心得置べき事とぞ

一 小勘太郎次くせに、左の手にて膝をたゝく癖あり、去とは見苦敷と人々あけんせしに、尤なりとて心を付てたゝかぬやうにせしに、扱仕内にはり合がぬけて、俄に七ぶぎりも仕内下りたるやうなり、それより又膝をたゝいてすればいき返りたる様にはり合が出来たり、しかれば癖といふものあしき事なれ共、無理直しはならず、無理に直せばいきほいのぬける事ありとぞ

一 澤村小傳次若衆形にて、藤田孫十郎芝居へすみ、わ

が身は都万太夫へ住たる年、小傳次何か腹を立てて、わが身方へきたり、涙をながし、同座若衆形鈴木平七と、鑓の仕合の所へ、女形浪江小勘かけ入てなだめる事あり、其所へ敵役笠屋五郎四郎來り、ヤア／＼わけまい／＼、すでつちめらがほでんがう、互にてこねさせたがよいとの口上、いかに狂言なればとて、色をたてる我々を、すでつちめとはわるきせりふ、もはや明日より座本へ斷ことわりいふて、出まじきとの儀思ひ出せば久しき事なり、狂言のせりふにすでつちめといふが、色の障に成るとある心入、今時の若衆思ひもよらず

一 ひと、せ早雲座にて、座本は大和や甚兵衛なりしが、立役藤十郎京右衛門いまだ半左衛門と申せし時なり、一所に住べきはづを、夷屋座へ取たて、座本にせんとの事のへ、半左衛門は別になる相談より、辰之介とわが身兩人早雲座へすみたり、辰の助は夷屋座のやくそくなれども、半左衛門と入替りの心にてのこと成しが、辰之助をとりはなしてはと夷屋座へは、萩野右馬之丞岡田左馬之介を抱へ、其詰に十次郎かもんをかゝへたり、時に藤十郎申

されしは、今京都の芝居三軒の内、夷屋座には半左衛門といふつは一ものに左馬之丞左馬之介あり、藤川武左衛門若けれども長十郎あり、此方芝居には座もと甚兵衛かくわれら次郎左衛門にそなたと辰之助あり、か様に牛角かくなれば、二軒ははり合ふこゝろ出来る物なり、万太夫座には、中村四郎五郎を立役のかしらにして、生島新五郎、古今新左衛門、三笠城右衛門、女形は霧波千壽、浅尾十次郎、よほどしはるがら落たり、此芝居こわものなり、二軒ははり合まけになり、万太夫座は脇ちよつかひらはずに精を出すなるべし、座がすぎると外を直下に見るゆへ、あやうきことあり、これ狂言の仕内第一の心得とのはなし、果してその年万太夫座は大入にて、二軒ははきとなかりしゆへ、座本せきが來て、いろ／＼狂言の相談有を藤十郎いふはいやく／＼こゝをせくはあしゝとて、長十郎を山形おりべの助に仕立、新よめかゝ見を出されけるに、打て返すほどの大入、長十郎初て地の舞臺へ出られしときにて、澤村小傳次おとゝの由ひろうし、新役者へ大役をさせて入をとる工夫、はたして仕當てられしを思へば、こゝ

ろへ置べき事と、あやめの物がたりなり  
一女形といふもの、たとへ四十すぎても若女形といふ名有、たゞ女形とばかりもいふべきを、若といふ字のそはりたるにて、花やかなる心のぬけぬやうにすべし、わづかなる事ながら、此若といふ字、女形の大事の文字と心得よと稽古の人へ申されしを聞侍りし

あやめ艸終



## 耳塵集上之卷

今の歌舞妓は名護屋三左衛門といふ浪人より始りしとなり其故は雍州府志第八十章之内

一又一種歌舞妓といふ者有、元出雲大社の巫女國女と號するものあり、神樂を一轉して歌舞す、是古に所謂白拍子の類にして元神樂の變風なり、永祿年中名護屋三左衛門といふ者あり、元武人にして落魄生や京師に有て、則國女と密に通ず、懇にこれ謀て歌舞妓の曲をなす已上雍州府志

聞書

必能院敬信

一山下京右衛門曰、坂田藤十郎は天性の名人にして、三ヶ津心有藝者のゆるしたる名人、今上手といはる、立役の中に、藤十郎に及ぶ藝者一人も有べきとはおもはれず、我も又及ばず、然れども天性の名人成るが故、却而師匠には成まじきや、その故はたとへば木作りの名人が松にてもあれさまぐに枝をねぢたはめ、見事に作りなしたる松と、又天性ふりよく見事に生たる松のごとし、余の上手は下手をねぢたはめ能藝にいたしたる上手なり、それゆ

へ今の上手は下手をねぢたはめ能藝にする事を覚え弟子にをしゆる事あり、其故に師匠とたのまるべし、又天性の名人は生れながらの名人なる故、我ねぢたはめられたる事なければ、我又人をねぢたはむる事をしらず、去程に師匠にはたのまれまじきなり

一又曰實事をして上手にといはるゝは云がらにならず、實事は初心の藝者もその狂言の筋をいふがゆへすこしはまざるゝ也、いはんや、上手をや、誰ならぬはおかしき事也、さればこそ耳取て鼻かむやうなことをいひて笑はすはあれど、藤十郎ごとく實をいひて笑はす藝者はあらじ

一坂田藤十郎曰、おかしき事が實事也、常にある事をするが故なり、今の藝者の實事を見るに、互にそりをうち鼻とはなとをつき合、ぬけぬかんなどの詰合、實の侍のすべき業ならず、此心ゆへせりふづけも又々右に同じ、是をさして實事といふへき歟

一又曰身ぶりのよしあしを吟味する藝者あり、尤見物に見するものなれば、あしきよりよきはよからん、予は吟味なし、身ぶりとて作りてするにあら

ず、身ぶりはこゝろのあまりにして、よろこびいかるときはおのづからその心身にあらはるゝ、然るに何ぞ身ぶりとて外にあらんや

一或藝者藤十郎に向ひ、貴殿諸藝達し給ふ中に、別而べつして道外どうがいのあど名人なりしとほむる、藤十郎曰道外のあどとは何んの事なるや、予は道外と狂言する也、手前さへ實らしくまんぞくに狂言すれば、道外もしやすく、おのづからあどになる也、あど、おもひあどをうてば、道外師は狂言の邪魔に見ゆるものなり

とかく道外師と狂言を大事にかけよくせんとおもへる也

一大坂道頓堀にて勸進能ありし時、京よりほねや庄右衛門とて、名人の小鼓三番目を打れしに、諸人こぞつて是を聞く、尤上手とは思ひしかどもおどろかず、則初日の事なりしに、藤十郎は庄右衛門弟子殊に無二の懇故、見舞がてら見物して、諸人の評判を聞、すぐに庄右衛門旅宿へゆき、此度の能大坂の衆中の心ざす所は御身一人、しかるにさのみほめもそしりもせず、心得あれかしとなり、庄右衛門心

あかれ、明日よりはほめられて見せんと有りしが、案のごとく二日めより日本第一の上手とほめたり、藤十郎又行て今日の評判格別、何んと心得鼓を打給ふやと尋しに、庄右衛門曰初日は大事にかけ、御身が狂言する様にほめられんといふ事をはなれ、まんぞくに打たり、今日はさらばほめられんとおもひ少し曲を打たり、それ故ほめるならん、ほめさすやうにはうちやすきもの、まんぞくには打にくきものとかたりぬ、予同座に居て是を聞、ほめられふとほめられまいと自由になるは是名人藝なりと、つくぐ顔をうち守り居たりぬ

一藤十郎曰、藝者によりて狂言をされ相手に笑せる有、是心得がたし、我仕習の時より今日舞臺にて仕なれたる狂言を今日は此心にてせん、明日はかくやせんと、常々舞臺にてけいこせり、其故はあたらしき狂言の稽古初日は相手も我もせりふ覺へざるがゆへ、狂言の仕様あらかた也、随分よくせんとはおもへども、なか／＼仕なれたる狂言とは格別也、夫ゆへしなれたる狂言をされ、相手笑はせる藝者は此心なきやとなり



一或藝者藤十郎に問て曰、我も人も初日にはせりふなま覺なるゆへかうろたゆる也、こなたは十日廿日も仕なれたる狂言なさるゝやうなり、いか成御心入ありてや承りたし、答て曰我も初日は同うろたゆる也、しかれどもよそめに仕なれたる狂言をするやうに見ゆるは、けいこの時せりふをよく覺へ、初日にはねからわすれて、舞臺にて相手のせりふを聞、其時おもひ出してせりふを云なり、其故は常々人と寄合、或は喧嘩口論するに、かねてせりふにたくみなし、相手のいふ詞を聞、此方初て返答心にうかむ、狂言は常を手本とおもふ故けいこにはよく覺へ、初日には忘れて出るとなり

一高安友之進といへる能の脇師名人のきこへ有、大坂道頓堀にて勸進能有し時、初日の前日友達をいざなひ舟遊びに出、酒にみだれ放埒の躰也、折ふし京より津田三益といへる醫師見廻に下り、同船に有しが、友之進にむかひ、此度の能御身獨の目當也、則明日は初日然らば今日はきんがく有べき處に、油斷の躰明日の初日大事ならずやと異見ありしかば、友之進答て曰、初日は大事のものにてはあ

らず、大事は常の稽古にあり、稽古の時魂を入能覺へ込、初日はわすれて出るなり、初日を大事とおもへば我藝にあらずと答へければ、三益感じ入たるとなり、予がおもふ事藤十郎日頃仕なれたる狂言にて稽古を仕覺へ、あたらしき狂言初日にせりふをわすれて出るとかたられしと、友之進初日はわすれて出るとこたへられしも同意也、名人の詞は自然と當れると

一或人藤十郎に問て曰、せりふははや口なるがよきや、またおそきがよきや、答て曰はやかろわるかる大事なし、おそかるわるかるなをわるしといふ事あり、同じわるき内ならば、早きはこらへらるゝ、おそきはわろき中のわろき也

一淨るり太夫加賀掾弟子共寄合て曰、師匠の淨るりは、ふし所になれば極て見物ほむる、我々は何ほど節をかたつてもほむる事なし、さればとて我々が付たる節にもあらず、師匠のふし付をよくならひてかたれどもほめざる事はふしぎといへば、加賀掾打笑ひさにてはあらず、我は何となく淨るりをすなほに語ふし所にてふしをかたる、おぬし達は

淨るりをかたり出すといなやほめられんとおもひ、初手から終まで面白くかたる故、ふし所に成てもはやおもしろふかたるふしなきゆへに譽る所なし、第一ほめられんと思ふて語るはわろしとなり

一耳底記に細川幽齋の曰、ほめさせんとするは下手藝也

一藤十郎曰、ほめられんとおもはゞ、見物をわすれ狂言を誠のやうにまんぞくにいたしたるがよし

一又曰嵐三右衛門は名人なり、性根もなき狂言に手くせとしてうそらしきせりふをつけ、そもく狂言といふものは、此三右衛門がやうにするもの也といはぬ計に眞面になりてする故、おもしろし、其上藝もゆるくとする事ならぬものなり、とかく我には藝に分別有てわろしとなり

一京右衛門曰、我等しならひの時分、能心を付て見るに、三右衛門はうそらしき狂言の仕様にてしかも名人なり、藤十郎は誠にして同名名人なり、とかく藤十郎と三右衛門と二人を一所にして仕習はんとおもひ精を出したるとなり

一或時十二段狂言仕組の時、淨るり御前霧浪千壽、十五夜袖崎源次せりふの時、藤十郎曰源次狂言の仕方心得がたし、千壽は淨るり御前にて主也、源次は十五夜にて家來なり、然るに今日狂言の仕様主從のわけ見えず、根心に千壽は一座の立女形、我はそれより二三番目、何シのその藝になつたら仕勝てくれん、かく屋の心が舞臺へ出る、千壽に仕かたんとおもはゞ、淨るり御前は主、十五夜は家來なる程に、その家來をいかにも家來らしく能すれば、千壽に仕勝事もあらん、家來の分として主に仕かたんとおもはゞ、十五夜にもあらず、本より淨るり御前にてもなく、もし今其様な奉公人あらば隙をいだすべきより外なしとしからなければ、一座の人々感心源次はあやまりぬ

一佛の原三ノ後日の狂言に、梅房文藏請出したる奥州といふ女郎を、家來望月八郎右衛門が女房につかはしたるに、月日かさなれどもいまだ枕をならべぬよし、文藏心に扱は日頃いひかはせし詞をたがへじと、此文藏にたてる心中成るべし、返而八郎右衛門がおもはん所もはづかし、奥州に異見をく

わへんとはおもへども、人めをいとひ夜陰に及びかづきをきて女の姿にさまをかへ、八郎右衛門が屋敷へしのび入、奥州に出合右いけんせしかば、奥州大ときにはらを立、枕をならびやうがならべまいが八郎右衛門殿と私との詰ひらき、一度女房にやつて置いていらざる御氣づかひ早々御歸あれといへば、文藏心に誠にあかさぬはこしもとどもあまたそばに有故ならん、今お隙をとり奥州とさし向ひに心底を尋んと、さしてもなき事にいろ／＼と隙を入ることおかしき事にて文藏がしこなし也、初日七月十五日見物このしこなしにたいくつして、おけよ引込よと口々にいひて、其段狂言わけもなかりしが、芝居はて、予藤十郎かたへ禮に行、貴殿今日おかしき段、門左衛門我等談合にてせりふ付たりしかども、見物其意得ざれば力なし、せりふ半分御ぬきあれかしといへば、いや／＼明日狂言の仕様ありと、十六日見物思ひ多くして有しが、かのおかしきだんだん大きにおもしろがり、藤十郎様ながふ／＼と口々にいへり、其暮に藤十郎同道にて大文字見物に參らんとさそひに立より、扱々昨

日とは違ひ結句は長々とせりふをつけそへなされ候が、ながふせよとは常々とちがひ、七月の見物の御きげん取くるしと申せしかば、いや／＼見物にむりはなし、此藤十郎がさいくにおかしき所と心得たる故也、高が奥州が心底を聞んがためにいろいろと隙どるしこなしその氣を持狂言すればよしと工夫して、今日いよ／＼せりふをながくつけてせしに、あんのごとくながふ／＼といふてほめたり、とかく本心が大事なり、當年五十三になりがいまゝであがらぬ藝、もふあがらぬ事かとくやまれぬ

耳塵集上之卷終



## 耳塵集下之卷

一古嵐三右衛門常に酒を好で呑る、故、舞臺にても誠の酒をのまる、やうに見ゆる、扱々名人かなと譽る人有しが、かたへの人此度最上藤八鍵にてつかる、所、實にも誠つかれたるやうなり、定てあれも常々鍵にてつかれたるらんと笑ひぬ

一或藝者十二三なる實子の物をならふに、役者のならわひでもくるしからざるは、天露盤手跡其外是是はならはひでもくるしからずといひしかば、藤十郎聞いていや／＼さにあらず、役者の藝は乞食袋にて、當分いらふが入まいが、何にても見付次第ひろひ取、袋に入て歸りたるがよし、入ものばかり用に立、いらざるものはとつて置、入る時出すべし、ねからしらぬ事はならぬもの、巾著切の所作なりとも能見ならへとなり

一或藝者曰、下手役者の藝を見ても、心あらん人には修行になる也、其故は下手を見てわろき所をよく覺て我はせぬ也

一耳底記細川幽齋曰、一曾がいふ事は小笛に我笛を

似せたらばくせ事なりといふなり尤也、年寄てと若き時とは違ふべき事也、一曾が曰我も若き時はゆたりと吹たる也、又我をしへぬ手をふくならば、をしへまじきとなり已上

一中川金之丞は、藤十郎京右衛門其外心ある藝者が名人とほめられし名人、金之丞予にたいして曰、人は舞臺へ出る度毎日ほめられんと申おもひ、けん物數多くいへども我はきらひなり、一所二所計り心をつけ念を入、其外はうけ返答いかにもまことしらしくせんとおもふのみなり

一或人香を聞習は、蘭奢侍を手本にして、それよりは淺き濃きあるひは聞がなきなど、分別する事あり、藝者もさもあらん、しかし手本になる藝者は唯ならんと問しかば、側なる人我も不知とや

一荒木與次兵衛金子六右衛門は、手負の名人なり、六右衛門曰手負とて刀を杖につき息つぎせはしく苦しげにする計にては有まじく、かたきいまだ近所に居ると思はゞ、隨分氣を張り、四方に眼をくばり、しかも深手と見へて苦にせぬ身ぶり、又かたき逃歸りたるとおもはゞ、初て手疵苦になる躰、又味

方かけ付看病せば、口にては強き事をいひながら、おのづから氣ゆるまりよはりたるてい、又手負の間刀を杖につくとも小足にあるき度々刀を杖につくは見へあしく、刀を杖につかば二足も三足もあるき、又刀を足本より二三尺先へつき立、それも刀に二足も三足も先へあるきこし、又右のごとく刀を二三尺ほど先へつき立たるがよし、刀の長さはつか共に乳切ちぎなるがよし、刀みじかければ、腰かゝみてわろしといへり、尤成ル吟味なるべきか、其時分手負をして大分入たり

一京右衛門曰、藝は狂言のよしあしにかまはず、力一ぱいふんごんで致したるがよし、しかれば六七分の狂言も、十分にも見ゆる也、とかく窺うかがてするは損也といへり

一藤田小平次は實事に名を得し藝者なりしが、或時刀の反りを打には、相手の目の中をにらみ付たるがよしといへり

一仙臺彌五七といふ道外師、京都にて高給銀をとり、並なき上手なりし故、予道外仕習の時分、ねがはくは彌五七程の藝者に成たしとおもふて居たりし折

柄、藤十郎曰、一向道外するとも、必彌五七まねをいたすべからず、其故は此程の狂言に、只今大殿様御死去なされしと聞て皆々おどろく、彌五七道外の南無三ぼう寐耳へ牛の入りたる様な事かなといへり、いかに笑へばとて道外のいふまじき事也、先道外の役はいつとても不調法者亀想あほうなり、ねみ、へ牛が入たるとは、或は大鼓もちなどの帥しの輕口なり、たとへ帥なりとも大殿御死去と聞てね耳へうしが入たるとはいふべからず、ねみ、へ水の入たるといふは常なり、同はね耳へ水の入たる様な事といふて笑せたとはいへり、予が左様に申さば見ぶつ笑ひ申まじと申せしかど、そこが工夫なり、云所によつてわらふべしとなり、其後予がせりふに、たゞ奥様若君様を御誕生なされしといふを聞て、南無三寶ね耳へ水が入るやうな事かなといひしに大きに笑ぬ、かやうのせりふ付、格別よかりしとは此様成ル吟味故歟

一或書物につんぼうは人々寄合て咄有に、人の口元を見て唯にこくと笑ふなり

一大津ならやといふ狂言に、藤十郎あきじりなりし



が、目の玉をまん中におけば、あきじいの様に見ゆると也

一村松といふ狂言に、藤十郎どもり癡の役なりしが、初日に見物癡度毎に見物おかし笑ひぬ、則能狂言にて評判宜敷ゆへ、或人初日の夜悦に行、癡大どもりきに出来たりとほめぬ、藤十郎其意を得ず、此度癡をせんと思ひ付しは見物のこゝろにいつもの狂言には藤十郎はよくものをいへり、此度は癡故おもふ事もしかじかと得いはず、不便の事やおもはせ見物に泣せんとおもひしに、今日笑ふたり是は予が工夫たらざる所、明日より泣せんとあんのごとくなかせたり、ある藝者行て問て曰、いか成工夫にて今日の様に見物なきたるぞやと、答て曰、癡はおのが心に我は癡なると思ふが故、人のきくをはづかしくおもひ、たしなみて癡ぬ、しかれどもうれしきとき、或は腹の立時、我を忘れ癡るなり、夫故今日は癡ず、嬉敷ときはらのたつ時又はおかしき時に癡る計也、答て曰、然共初中後癡の様に見へしはいかに、答て曰口の内にて癡りいふ所は癡ず、口の内にて癡が故それ程せりふのあいだをぬく計也といへり

一古嵐三右衛門ぬれ口舌などの狂言の仕組に、相手の役人を我が内へ呼寄せ、本より酒ずき成ゆへ頓て盃を出し、其座に懇して居る子どもあれども、それには目もかけず、外の子供につぶやさ、やさ或はほうずりつけざし、後には酔て正躰なし元より若衆は愀氣して様々のしれば、同子ども立役あいさつに入中を直し盃させり、此時は藤十郎親阪田市左衛門眞野や勘左衛門座本にて有しゆへ、其座へ藤十郎來り、是はくそうく敷事かな、初日も近日ぞや、若衆と口舌所にては有まじき事、はやくけいこせよと笑ひく申されしかば、三右衛門我も左様に存じ、最前より稽古を致したりと、初日盃を出せし時より、今なか直しの盃まで、若衆のりんき人々の挨拶にいたるまで、ことごとく皆覺へ、是替り狂言の稽古也と其通に仕ぐみたり、いづれも役人にはいかにといへば、作りたる事はわろし實よし、その義をおもふが故に、日頃は稽古の場へ盃は出さねども、此度は替り狂言のせりふ付のため盃をいだし、若衆が是非愀氣をせねばならざる様に仕かけかくのごとし、いづれも舞臺にて

唯今の様にいたされよといへり、是又よき思ひ付なり、古人はかほど迄心をつくせり

一松本名左衛門我がと人と立ならび所作をするに、獨舞ふ時今一人は囃の前に住ひ居る、此時多くは休み湯などを吞り、我は休ず囃の前に住ひ居ても心の内にて舞ふて居る也、しからねばうしろすがたあしく所作切ると也

一彌五左衛門といふ有、役は花車形にて、狂言作者の名人なり、むかしははなれ狂言なりしが、今の二番つゞき三番續はこの彌五左衛門作なり、則非人かたき打の作者也、藤田小平次も此彌五左衛門吟味によつて實事師の名をとれり、荒木與次兵衛中川金之丞金子六右衛門其頃若き藝者寄合てとかく彌五左衛門が手にかゝらねば、本の上手には成がたしといへりとなり、則彌五左衛門曰、今上手の中に、相手のせりふをいふ内に、休である藝者多し、よからぬ事にや、第一狂言ゆるまり、其身のからだ死るなり、とかくせりふをいふ相手の顔をよく見てゐるか、但耳をそば立聞てゐるがよしといへり、一片岡仁左衛門敵役致されし時曰、いつとても狂言

の詰ぎには敵役のせりふにゑゝ口おしい、たくみし事があらはれた、家來どもそれ一人も残らず討てとれといふ事は、敵役をはじめいづれも役人狂言の詰ぎは成ゆへ、鹿相になりぬ、一番の狂言の詰際は大事也、我はそこに心をつけているにもせりふに力を入さらに詰ぎはとおもはず念に入るなり

一富永平兵衛は右彌五右衛門に次での作者にて、今顔見世の役者附に、狂言の作者と書事富永平兵衛初り也、延寶八年の暮の顔見世成りしが、其當座は諸人こぞつてにくめり、夫より平兵衛打つゞきおもしろからぬ狂言に見物あきはてぬ、今一入工夫致され能き狂言を致されよと申せしかば、平兵衛曰、わろき狂言を出すは能こゝろならねど、座本衆の大き成ル仕合なり、替る度毎に能き狂言を出し、もし其よき狂言に見あきなば道頓堀に草はゆべきといへり、いへばいはるゝものかおかしきへらず口なり

一高野山万燈といへる狂言の中の口明に、嵐三十郎腹を切る、藤十郎此看病をよくいたしぬ、或藝者は是を見て、京右衛門に語つて曰、藤十郎は常に外科醫



をよく致さるゝ故、手負の看病自然とよし、外の役者の及ざる所といひしかば、京右衛門いわく藤十郎は外科をよく致さるゝ故手負のかん病よく致す事をして見物にほめられぬ、我は本より外科をせざる故随分不調法いたし、京右衛門は外科をせざるゆへ手負のかん病得せぬ所をよくするといひて見物にほめられぬ、いへばいはるゝものなり、しかし是誠なり

一寶永四年亥の年、江戸村山平右衛門京都万太夫芝居へ登り、十月江戸へ下る時坂田藤十郎私宅にて立振舞致され、予も相伴いたせしが、平右衛門藤十郎に向ひ御かげ忝し、我始て下りし顔見世より、貴公様を手本と致し、實事ぬれ事によらず一切貴公様の御まねを仕りしに、よき事は何國にてもよし、今江戸二三番切の藝者に成りぬ、是皆貴公の御蔭と申せしかば、藤十郎かぶりをふり、幸定而わるからん、藝は我性根より一流仕出したるこそよけれ、我を手本にせば我よりおとりぬとおもへり、今少し工夫致されよと申され其場しらけたり

一京右衛門曰、狂言により中入より出る役人の事を

前にいはねばつまらぬ事有、是よからぬ事也、今する所より外に跡の爲にいふ事其場のさまたげ、口は調法なもの中入にていかやうともいわるゝものなり、狂言はいつとてもおもしろく出来る様に致したるがよきとなり

一藤十郎曰中入に出る役人の事、前にいはでかなはずばその役人の事表にいひたて、今のせりふは次にいふべし、その故は中入の役人の事、前にいふは見物に能覺させんとの事なり、しからば表にいひ立よくおぼへさせたるがよし、又今いふせりふを次にせよとは、今いふせりふは則今の狂言にして居るゆへ、見物をのづからよく覺るとなり

一或時替り狂言近松氏我に談合にて、樂屋に役人を集め、狂言を咄したるに、我が役よき人は狂言をほめぬ、役悪き人は吉惡をいはず、狂言のよしあしをしらざる人は、いつも顔を見て多分に付べきてい、中にも文盲にして狂言の心なき人は先一番にはらを立我が家來をしかり、きげんあしく人々にいまごひもせず立歸りぬ、其ころ藤十郎座本にてありしが、きやうげんのよしあしをいはざれば、外よ

りいひ出すべき事もなし、藤十郎曰先上の口明より稽古の致されよと立歸られぬ、翌日より稽古にかゝり、四五日の内に上の稽古しまい、其後四番目の口明をけいこする日に至り、藤十郎今一度狂言の咄しを聞事をさんと有しゆへ又はなしぬ、然れども吉あしをいはず、木履をはき傘杖にて出る程狂言成しが、樂屋番にいひ付、右の品々取寄、木履をはき杖をつき傘をさし、さあせりふを付られよとありし故、近松氏予かたの如くせりふを付一遍稽古を通したり、藤十郎曰扱々よき狂言かな、初て此狂言の咄しを聞ても又今聞なをしてもわるき狂言と思ひぬ、しかれども作者の心に能き狂言をおもへばこそ役人をよせて咄されたり、我心にあしきと思ひても見物のほめる狂言あり、我當年五十に餘れども、狂言の咄しを聞て善惡を定めがたし、我是をしらば、今時分は長者にも成ぬらん、仕手の心作者の心格別なれば、先せりふを付させんと思ひ、木履からかさ杖を取よせ、はじめより立て稽古をせしなり、是縦横のまんといふ心、然るに今作者のせりふ付によつて、正しくよき狂言としれり、兎

角狂言の稽古は我がごとく初手から立たるがよしといへり、此おもひやりは、もと藤十郎能き狂言を拵らへられたる故なるべし、いつとても藤十郎狂言のはなしを聞るゝに、我が役の多少にはかまはず、狂言の筋を能きかれたり

一京右衛門狂言の咄しを聞るゝに、よしあしにかまはずまづ狂言をはめられ、作者にむかひせりふ付よくたのむとなり、若氣に入ぬ狂言あれば、ひそかに作者を呼付、今一度聞なをし善惡の談合有て仕直せり、かりにもはなしの場にてあしきとは申されず

一藤十郎曰、若まづしうして金銀ほしき時、金銀はぬすみても有べし、又道なかに落てもあるべし、狂言計はぬすまんとおもひても、拾はんと思ひてもねからなきもの也、此事をしらぬは文盲なる下手の役者なり

一其頃女がた若衆がた立役道外親仁方に至るまで、藤十郎相手になるもの皆上手に見へたり、其故はせりふのいひやう、いきづき立居に付て、藤十郎立てをしへぬ、何も藤十郎に歸伏して居る故に是を



そむかず、をしゆるにまかせ致すが故格別によく見へたり、しかも藤十郎役すくなくでかしばへなき事あり、或人藤十郎に對して曰、狂言は面白くはやれども、貴殿役すくなく是のみ残り多しといへば、藤十郎打笑ひ、狂言さへよくばかにんあれ、藤十郎が藝の善惡はかねて見物によくしれり、全く藤十郎を見する芝居にあらず、狂言を見する芝居也といへり

一延寶六年午の正月に、新町あふぎや夕霧過行たり、同く二月三日より、夕霧名殘の正月と云外題にて、則坂田藤十郎藤屋伊左衛門といへる買手に成りぬ、此時藤十郎三十二才、又所望有て同六月に右の狂言を出せり、又同十月二日より右の狂言をいだし、同廿九日迄大入、おなじく中頃より右の狂言いだせり、是は來る正月二日より、夕霧一周忌致さんが爲見物に思ひ出させる爲也、一年の内同狂言を四度仕る事およそ是はじめの終ならん、寶永六年己丑霜月朔日藤十郎死去生年六十二歳、右延寶六年午年より、寶永六年丑のとし迄三十二年、此間に夕霧名殘の正月、同一周忌、同三年、同七年、同十三

年忌、同十七年忌、其外右同じ狂言、くりかへし致したる事以上十八度、是又珍らしき狂言也、其外けいせい玉手箱、又堺大寺、傾城江戸櫻、傾城阿波の鳴戸、けいせい佛原、同三の後日、壬生大念佛、同後日、同三の後日壬生大念佛、同後日同三の後日の壬生秋の念佛、かやうのけいせい事かぞふるにいとまあらず、又其頃毎年七月に曾我を出せり、是は春二の替りに傾城事致せし故、一年の内に二度はいかゝとおもひ、大磯の虎とかはらん爲也、かやうの事を思ひまはせば、凡一代の間傾城事を致せり、藤十郎は得手成故なるべし、見物ゆるしてよく見て居たり、尤今實事師は一代實事を致さるゝたぐひならんか、然共藤十郎ごとく同じ狂言を度々致さるゝ事まれなり、京右衛門曰、藤十郎は名人にて我得たる狂言いたさるゝ、我に得たる狂言なし、とかく藤十郎は名譽の藝者也と、藝咄しの折ふしいつとても此事のみなり

一林九兵衛といひて花車形の名人あり、藤十郎二十餘りの時分、九兵衛方へゆき狂言の仕様をならひ度よし申されければ、九兵衛曰、我は花車形なる故

随分女子のまねを仕る、貴殿は立役成程に男のまねを致されよ、今の立役を見るに男はすくなし、もとより女形にてもあらず、何やらわけなし、今よりして随分男のまねを致されよとなり、此詞を工夫して少し藝を仕習ひしと也、やゝもすれば右の咄を仕出し、杉九兵衛は三ヶ津に有まじき名人とほめられたり

予つたなき耳につくる塵の言葉書あつめたれば  
なのづから耳塵集とも思ふべきなりし

### 耳塵集下之巻終

## 續耳塵集

民屋四郎五郎名俳  
江音撰

一山本京右衛門は下かゝりの事をいふて毎度あたりを取り、坂田藤十郎はいはねばかなはぬ場にて、それを底につゝみて當りをとられたり、元祖三右衛門は見物に、さし合の人も一所に給ふ事有べし、其まへにてけいせい買をして見せる程さし合なる事はなし、狂言なればこそさし合ある人見ても居たまへ、仕内を風流にして、言葉にさし合はいはぬはづと申されしよし

一藤田小平次常にいひけるは、刀のそりを打つ時は、左のひざを引、相手の目の内をにらみ付てうたざれば、立派になしとぞ

一或人坂田藤十郎に、切狂言を別に出すときの、役者の心もちはいかにと問ひければ、初の狂言とは其人が生れかはりたる心にて、切狂言に出べしといひけり、何れ名人の心づかひは格別とみへたり

一坂田藤十郎説に、女形はやわらかでわろひはいつぞには能成物也

一元祖澤村長十郎旅行の時、道中にて枝ぶりよき並木の松を見て曰、直をすける人、此松を植おかば一しほの詠と成べし、此並木の中に交りあれば、枝のみ邪魔になるとて切とるべし、たまぐゝ其長に至る藝者ありといへども、此松のごとく却而下手の爲に悪名をとらん事、残念なりといはれき

一今の敵役にめりはりの差別なく、つゝこんで狂言するのみにかゝわるゆへ、立役も又敵役にさそはれてするどきを表とす、たとへば蟬螂の友喰ひといふ事あり、たがひにあらそひ手を出してはくれ、足を出してはくはれて、終には其身をはたすの道理なり、古片岡仁左衛門狂言の序びらきの後々には、我か巧みのさまたげになるものと知つて、小柄をしゆりけんに打しを實形の立役是を見あらはして、其意趣を聞かんと思ひかけなく、彼小柄を仁左衛門に見せけるに、仁左衛門色めにも出さず、扱見事の細工かな、随分大切になされよとほめて歸しければ、立役も仁左衛門しわざと心得て出せし小柄なれども、其色め少しもなければ、相手の仕内いろゝ工夫ありて、大出来にてありしなり、ま

りをけるに上手より渡せば請取やすしといふがごとく、敵役は仕内なくとも、此心得第一なり、さればこそ仁左衛門舞臺の仕内は、千石取とみへたりとかや、小佐川十右衛門は七百石取と見へ、音羽次郎三郎は三百石取とみへし

一元祖澤村長十郎狂言に、長持のうちに忍びの者あるをしつて、鍵にてつく仕内ありて、長十郎袴ののもだちとり、思入してつかゝと行、なんのくもなく長持をつきしに、坂田藤十郎其時いふやうは、扱長持のつきやう心得がたし、ちとゝ工夫せられよといひければ、長十郎其夜工夫して、翌日袴のもゝ立ちを取、長持の傍へつかゝと行、又跡戻り袴もおろし、そろゝとさし足して長持の傍へより、耳をたて、内に忍びある様子を考へて一ト鍵につきければ、藤十郎手を打て、さてゝ驚き入たり、後々は其一人たるべしとほめられけるとかや、はたして三ヶ津に名人の譽れ高し

一音羽次郎三郎が曰、坂田藤十郎せりふのくせとして、かわいやくゝおれじやくゝなどゝ詞を二ツづつ重ねていへり、是は大入の時よく聞へさせん爲



又口拍子にもよりての事也、然るを後に伏見藤十郎といふ役者、よく似たりとて坂田と名のり、勤めし狂言に相人地藏何の佛と問へば、彼伏見藤十郎答へのせりふに、六道能化の地藏ばさつじやくと、長き詞を二ツかさねたり、是非に二ツはいはねばならぬ事と覺しにやおかし

一音羽次郎三郎は上手のうへ狂言立る事も達者也、太平記五日替といふ狂言をかんばん出し、五日の五日めに新狂言を替へて出せり、又大坂歌舞妓四軒ありし時、角の芝居にて篠塚次郎右衛門大石宮内の役、万菊は力彌の役にて、外題は鬼鹿毛武藏童といふて四十七人の狂言を始てしたる時、大當りせしかば、中の芝居も又取組、西の芝居は柳山親小四郎柴崎林左衛門三軒共に同シ趣向なりけるに、音羽次郎三郎は東の芝居に勤のし所、人まねをせず格別に本曾義仲の狂言を作り出し、評判よく當りし也

一音羽次郎三郎は、淨るりに仕たる事をつるにせず、其故は凡操上るりは元來歌舞妓をまねて語り人形もかぶきをまねして行ふ事也、然るを歌舞妓より

操をまねぶる事かぶきすいびのもとひ也といへり、澤村長十郎も其心にや、上るり事を勤る事嫌ひなりしに、銀主より望つよく國姓爺始めて竹本座に出せし時、新四郎和藤内にて役合す、長十郎かんの役也、元より心に入らぬ故にやあたらす、中の芝居竹島幸右衛門希有成役にて大當りせし也

一以前は親父方にも、花車形にも名人有て、一場を受取よく勤し也、今はよき役なれば、立役よりつとめ、又花車方を若女形も勤むる本意にあらざる事も、小勘太郎次といへる花車形、三十ばかりの女房の姿、ひらりぼうし著て付舞臺より、替前に向ふ棧敷の下に立ゐたりしを、其初日同座の役者も向ふへまはりし時、彼太郎次が女姿の風情よきを見て、誠に見物の女と思ひ尻をつめりしとかや、太郎次はかゝる名人ゆへ、元祖芳澤あやめ太郎次をまねて、極上上吉の惣藝頭の女形となりし

一むかしの役者は揚まくより出端を大事にせし事も、出てむかふを切るに名その風情流義あり、其替時はや名人と思はれ、其狂言もしつかりとおもしろく有しとかや、三原十太夫といへる敵役は、小男



成しに長さ大小をさし、出端にきつと表を切り、扱ねりてあるく所大きに見え恐しかりし也、今は出端に流義なし、これも時にしたがつ故ならん

一むかしの役者は肌を見せる事なし、大はたぬぐ心のときは上著をぬいて白むくになる也、刀を腹へつきこむといふにも、白むくごしにつきまはす、此事は今もあり、然るに白むくごしに腹を切るは無理也と難する人なきは、是白むくを肌としてむかしよりつたへ見なれたるゆへ、自然と見物承引するは、又自然なりけらし

一役者の尻をからげる事、いにしへは稀也、立合のときは上裙を帯にはさむ計也、それゆへ江戸詞に尻をはしよるといふは、端折るといふ詞にて侍る、音羽は裾を右へ引上はさみ、櫻山庄左衛門は裾を左へはさみたり、誠に尻からげする事は、小佐川十右衛門より始る、片岡仁左衛門との出合にて、兩人ともによき男にて見事也、白<sup>しろ</sup>緇<sup>ね</sup>にて三里紙をあて、足のかざりとす

一狂言の中に太刀打立入する事、只少し立まはり計にて、今の役者の宙返り事水車かりそめにも立入

する事なし、宙返り事とんぼうがへりの類は、輕業仕のまねにて嫌ひ、とんだりはねたり太刀打する事下作也とて立者はせず、近世音羽次郎三郎澤村長十郎親大和山甚左衛門などは、尻からげる事太刀打は稀也、只狂言の致かたにてよく當たり、其前荒木與次兵衛非人敵討の時、手負の身ぶり太刀打はじめてこなしありしゆへ、珍敷あたりし也

一立合あるひは太刀打の時、かげを打とて大きなる拍子木にてぐはたぐとたぐとたぐ、むかしは加様の事はなし、或は龍をつかふか、鬼神など出合ふ時には、たゝきならせり、始には物蔭より打ならせし故かかげ打といふならん、今はかげ打者、舞臺へ出て打ゆへ、田舎人はあのやかましく打人は何の爲じやと心得ず、當地の見物夫に答へて、アレハ役者のはたらく音の心也といへば、役者の手足がはたらくとあの様に鳴はいかなる事とて、いよくがてんせざりけり、されば今は聞なれたればかかげ打ねば、役者も見物も淋しく、同じくは見物に隠して、物かげより打たきもの也

一金子一高曰狂言末になれば、役者ざれ笑ふ、我は末

に成ても大事によく勤む、その故は東國西國數百里あなたの人、今日の見物の内に有、其遠方の稀人は、又と見る事なし、名ある役者のざれて見せるは、残念の事也、藝者のたしなむべき義と、同座の人におしへけり

一 櫻山庄左衛門はせりふ付に便有ゆへ、古歌をよく覺しとて、此人三千餘首古歌をそらにて覺たり、それゆへ庄左衛門はせりふ付上手也と、役者よく用ひたり、俳名は鶯山と申せし也

一片岡仁左衛門曰俳諧を仕習ふべし、神祇釋教戀何にても役にしたがひ、心も詞も文盲ならず藝のたよりとなるは、はいかい也とすゝめしと也

一 ある老翁曰、役者に五徳あり、貴き御方の前にもゆるされ出、諸人に賞せられ自然と古語を覺へ、又勤めて脛脉をめぐらし嗜て年若く見ゆ

一 凡新狂言相談きはまりて後、一ト場づゝしぐみ立る時、其役人を呼よせ、圓居して、せりふを口うつしにをしへ、一旦はゐる時まで立、又小かへしとて再遍けいこし、又次を作者せりふ工夫して口うつし立る事也、其座の立者出る場合は、其立者狂言を仕

組し也、中興狂言趣向むつかしく成てより、執筆頭書せよとてせりふ付のいひ出しを、一くだり程づつ書たり、狂言本とてくわしく書事は、金子一高よりはじまりける也

一 立役女形等何役にもあれ、出端を譽詞あり、又見渡はやしに景色をつらねせりふはやりけり、わか立役を女形の譽詞に云〇よう／＼立髪姿に伊達風流股だち袴すそ高く、たつたの川にあらねども紅葉の顔にうすげしやう、淺黄羽折の紐きやしやに、結びとめたる戀のくゝり、目はありはらのなりひらも、あんまりよそにはござんすまい、やりたい命切たい小指かはるなかはらじ、二世までと、かはす枕にくまれて、浮世も後生も後の日も、思ひの淵に身はしづむ、扱も／＼見事な御器量ではあるはいな〇又若衆せりふ〇むかふに見へゝしたはくらま山でござります、あの山へ心不淨なるもの参りますれば大小の天狗いかりをなし、惡風魔風しきりにして、にわか引さき梢にかけ、おきまする、まつた心有侍は僧正坊に願をかけ、これをいのるともがらは、異國のはんくはい張良も、あざむく程の

いせいあり、なんぼうおそろしき御山なれば、これよりはるかに御拜禮なされまして然るべう存ます、かやうのせりふにて大當りせしとかや、其外數多聞傳へ覺へ侍れども、ことしげければこゝに略す

一中川金之丞といふ立役は、おかしき事天性の上手也、ある狂言に使者奏者物語の所へ、金之丞茶の給仕役にて出、茶わん差出し引下り、傍にゐる内ふとてんがうに茶臺を左の手にさしこみ、使者用事言付る所に、金之丞かの茶臺手におしこみし故、俄にぬけずいたみ難儀なるをかくし、うちたいる思ひ入、見物ことの外面白がり、どよみをつくり譽たり、かゝる事にて大當せしとなり

續耳塵集終

賢外集

東三八述

立役染川十郎兵衛聞覺へし事をはなせしを東三八狂言書置る一冊にして賢外といふは十郎兵衛作者也法名なり

一坂田藤十郎はけいせい買の名人と、もてはやされたる稀人、ある年夕ざりの狂言に、ふじや伊左衛門役を勤る筈に極り、今度の狂言には上草履いるなれば、早々あつらへ然るべしといひわたしける、扱ざうり出来あがりたりとて見せければ、藤十郎見てこれは大き過たり、仕なをすべしと云付ければ、男申けるはおまへのお足の寸を取詔候へば、違ひ申さぬはづといふ、それにても大きなりとひたすらいひければ、買物方の者これにいか程ちいさく致さんと尋ければ、一まわりちいさくと申より、すぐさまあつらへ直し、惣稽古のせつ彼ざうりちいさきゆへ、指にはさみ出られたり、初日にも同じく指にはさみ出る、樂屋口に居たる役者名はわすれたり、若ざうりへお足が入りませぬかと、氣を付



ければ、其返答は仕ながら、其儘にて舞臺へ出たり、ある人此事を不思議におもひ尋ければ、藤十郎いはく、此度の草履は揚屋の庭にてぬぐ事あり、舞臺にぬぎ捨たる時ざうり大きければ、諸見物藤十郎はさてもきつい鍬足なりと見出されては、重てけいせい買の狂言はならざりしと、答へられし、すべてか様な事までも氣を付、狂言仕ける名人の心得は格別の事なり

一坂田藤十郎心安き祇園町料理茶屋へ行、これほどの座敷に茶所なきは如何といへば、亭主さればの事でござります、何とぞ年頃望ますれども、ちつと左様のならぬいはくがござりますといふ、藤十郎いかほど入候やうと尋ければ、五十兩程かゝり候と答ふ、それはいと安きことなり、其金子は此方より遣し申べく間、急園<sup>きつにかこひ</sup>を御建あれといひかへり、夫より藤十郎懇意の方へ金五十兩借用申たしと、手紙にて申遣しければ、早速先方より調達して、手代持参しける時に、藤十郎とても御世話に、歩<sup>あ</sup>に被成下かしたのみ、残らず歩判にして奉書の紙二枚出させ、ひんねち持参して、件の茶屋へ

行、亭主に逢ひ右の歩金五十兩袂より出しあたへけり、右の金子調達せし人、一兩日して藤十郎方へ來り、件の譯をありのまゝに咄す、時に用達せし人、左候はゞ歩にてなくともくるしかるまじといふ、藤十郎云、袂より出し、人に遣す金子小判にては下卑てよろしからぬと存、それ故歩にかへ遣候といひけり

一坂田藤十郎稽古の節は、いつとても藤十郎方へ皆皆行ける、ある時替り狂言の稽古に、相手の女形水木辰之介、山本歌門、金子吉右衛門同道にて、朝飯後行けるに、いまだ床あがらざる故、次の間に待る、程なく起たるや、戸の明く音又は手水の流る音など聞、やがて座敷掃いて、暫有てこれへお通りあれといひければ、やがて皆々座敷へ通りてみれば、どんすの鏡ふとんの上に座し、茶せん髪にて提たばこ盆をひかへ、扱一禮すむと、此度の替り狂言は中々よう出来たるとの噂、どのやうな趣向と狂言の筋を聞かれたり、毎日相手の女形に終日の馳走をして歸されけり、此稽古の間毎日の獻立を自身好み、常の女の喰よきやうに取合、女形の



あしらひも、やはり女同前の心得にて、はなしなどもあり、甚深切行義なる事ともなり

一坂田藤十郎高給銀をとり大坂へ抱られし時、京より水を樽詰にて取寄、飯米を一粒ゑりにさせて用ゆ、其事を見聞人々、扱も藤十郎はけふがる奢ものかなと専ら噂ありし事誰いひ聞するともなく、耳へ入たるが、ある人に逢ふていはく、私飯米を一粒ゑりにさせ、水を京都より取寄候事、我がこゝろしらぬ人は、定ておごり者なりと沙汰もあるべし、全く奢にあらず、當芝居主、拙者を抱らるゝに、大切成金銀を出し置れたり、米に砂あつて若噛合せ齒を損じなば舞臺にて、せりふ洩て聞えかぬべし、又年ごろのみ付ざる水をのみ若腹中など悪く成一日にても舞臺を引なば、芝居主へ義理濟す、加様に身持養生心を付て、此うへ身分に故障出来ることは是非なし、よつて斯は申付るなりと語られし

一中村四郎五郎若ざかりの頃山下京右衛門一座に居けるとき、京右衛門大イに出来たり、見物ほめける其夜坂田藤十郎京右衛門に逢ひ、今日の初日見物にゆきたり、貴様はいかゝる下手なりと云、京右衛門

諸見物の評ばんとは大イに相違したるにより、肝をつぶしながら、左候はゞ二日め見て給はれといふ、心得たりとて藤十郎二日めも見物に行たり、京右衛門樂屋に入ると藤十郎の棧敷へ人を遣はし御苦勞ながら樂屋へちよと御出給はれといひやる、すぐさま藤十郎がく屋へ行、京右衛門に逢申ける、は、貴様御頼ゆへ今日も見物致たり、其元はとかく下手なりと、昨日にかはらぬあいさつに京右衛門も大きにこまり、芝居果より、我家に歸らずすぐさま藤十郎宅へ行、藤十郎に向ひ初日の御批難により、今日又工夫にて致たりしに、やはり其元御氣に入らず、此上は我力にも及はず、御指南うけたしといふ、藤十郎左候はゞ申さう、中村四郎五郎は今若手には日の出の役者なり此度の狂言、其元は四郎五郎よりさきに役あり、あれほどに當られては四郎五郎次へ出て何をかせん、なせ若手をたすけるやうには心がけせられぬと教訓仕けるに、京右衛門手を打てかんじぬ

一右近宇兵衛といふ役者、旅にて所作事の上手、後に京本舞臺へ出たり、澤むら長十郎も元來旅役者を

修行して、勢州の芝居より京本ぶたいへ出、二ばんめを勤、精出し上手に成たり、中古まで二番めは中通りの役者出たるを、近來は脇狂言同事に、二ばんめも小詰より勤る也、これらとても古實なく成たり、江戸は今に餘風ありてゆかし

一坂田藤十郎曰、歌舞妓役者は何役をつとめ候とも、正眞をうつす心がけより外他なし、しかれども乞食の役めをつとめ候は、顔のつくり著物等にいたる迄、大概に致し、正眞のごとくにならざるやうにすべし、此一役ばかりは常の心得と違ふなり、其ゆへいかなとならば、歌舞妓芝居はなぐさみに見物するものなれば、随分物毎花美くわびにありたし、乞食の正眞は形までよろしからざるものなれば、眼にふれておもしろからず、慰にはならぬものなりよつてかくは心得べしと常々申されし

一坂田藤十郎、金子吉右衛門と連立、芝居より歸りがけに高瀬の橋の上に立とまり、水の流れをつくづく詠め居て、漸時を移す、金子氏思けるは、何ぞ下へ取落されしか如何と、共にのぞき、或はふしぎに思ひ、供人云く何ぞおとし給たるはと問ふ、答な

し、暫あつて扱も清々とした物かなと、高瀬川の流水を感じて、夫より歩行し、其比の宿元河原町四條上ル町へ歸られしとなり、

愚按、儘ならぬもの、加茂川の水双六の箋と申傳へ侍る、此事思ひ合され侍る歟、元來坂田氏は生得やくにたつた、ぬの差別なし、物事を鹿略に見ぬ人なり、ある日河原町四條下ル町に、いにしへ豆腐屋あり、最中豆腐をこしらへるに、ふと眼が付腰もかけず、見せ先に立盡し、とうふといへるものはいかやうにすれば喰やうには成やらんと、くわしく尋熟得して、扱もと感心して立さりぬ、とかくかりそめの事にも、鹿略にせざる氣質信實なる生得なりと皆人沙汰しあへり

一坂田藤十郎、祇園町ある料理茶屋の、くはしやに戀をしかけ、やがて首尾せんと思ふに、件の妻女、おくの小座敷へ伴ひ、入口の灯をふき消たり、時に藤十郎すぐさま逃げ歸りけり、其翌朝右の茶やへ行、妻に打向ひ、御影にて替り狂言の稽古を仕たり、此度の狂言は、密夫の仕内なり、つゝに左様の不義



を致たる事なければ、甚此仕内にこまり、此間太夫元よりはやく初日を出し申度と、再三せがまれ、日夜此事にあぐみ、密夫の稽古を男に出合もらひては、其情うつらねば、ひとつも稽古にならず、我願ひ成就致けいこ仕たり、今朝太夫元へ、初日明後日御出しと申遣はしたりと一禮申されし、一座の人人扱々名人と呼ぶる、人の心がけは、凡慮の外なる事と手を打ぬ

一坂田藤十郎、鳴物御停止にて、芝居休みの間、心安き一座の内の女形二三人供人引具し、江州石山へ誘ひ行、酒盛して居ける、向ふに武門の御歴々とおぼしき御方、御忍びに御參詣遊ばされたるや、御近習打ませ若殿原五六人、其外附々上下十二三人御酒宴あり、暫有て、若き侍來、それなるは藤十郎ならずや、酒一ツふるまひたしと、旦那の仰を達す、有難仕合と速に御幕の内へ伺公して、御盃を頂戴仕、さまざまの咄しなど申上、殊なき御機嫌にて時をうつす、日も西にかたぶきければ、明日より又芝居始ますれば、追付歸宅仕申度と御暇を乞ひ、元の同行の氈の上へ戻る、程なく若侍かけ來り、何成

とも望あらば申べしと承る、何も所望に無之候へば、宜敷仰上られ下さるべしと申せば、それにてはかへつて御機嫌よろしからず、是非何成ともと達而との事ゆへ、左候は御幕の内の邊なる松の樹拜領仕たしと申、其儘皆々駕籠に打乗京へ戻りける、夫より日を経て表に大勢人聲、何事やらんと勝手へ尋ねければ、松の木の來りしといふ、門違ひなるべしと思ひしに、坂田藤十郎方はこれなるかと、松の樹の宰領這入、いつぞや石山に於て約束せし、松の樹送り遣すとの口上、夫にてやうく思ひ出せり、日外拜領申上し、御歴々の賜物なるべしと存當り候へども御名も承らず、ありがたき旨を宰領に申かへしぬ、我等執心かけし松の樹と思ひ贈給はりし段有難き事かな、御大身とは見請ぬれど、ちいさき木にてもあらばこそ、大木といひ猶以一山へ届なくては、理不盡に掘る事叶ひがたく侍らん、扱々有難き御こゝろざしかなと感心し、早々庭へ植べしといひ付けければ、路次口殊の外さはがしく、いかなる事とたづねければ、先刻の松の木、塀につかへ路次口へはいり申さぬよし答ふ、藤十郎聞て、



さて／＼埒もなき事かな、つかへてはいらぬならば塀をこぼち入べし、跡にて塗りおけば濟事と男共をしかられる、此事金子吉兵衛居合せ、上手の名を得し人の心は別なりと、ほとんど感じ、此事を人々にはなしけり

一中村七三郎は元祿年中、江戸にて諸人に譽られ評ばんをとりたる、やつし方の名人、元祿十年卯霜月京四條山下半左衛門後に京右兵衛門といふ座へ上京し顔見世は

坂田藤十郎方、大イにはやりて七三郎甚不評判にて、よからぬさたのみすくなからず、馬の跡あしといふらくしゆまで、人々諷ふほどの仕損ひ、一兩日して追々藤十郎方へ一座の役者共來り、少長七三郎さんぐのとり沙汰あり、又江戸より登り、俳名也京にてやつし事をせらるゝといふ事、大きなる丁

簡違ひ、そこが下手のしるしななど、少長をそしりける、藤十郎申けるは、成ほど下手なり、京の見物は、大イに下手なり、七三郎は先近來の上手、此人の上に立もの當時一人もなし、少長のぼられしゆへ、我等も精出したば、今年中にはちと藝もあがるべし、顔見世は此方仕勝けるゆへ、二の替りは大きな

るこはもの也、けつして二の替りには仕つけらるるならんと、顔見世なかに申居られしが、はたして翌辰正月廿二日より、二の替りにけいせい淺間嶽といふ狂言を出し、少長ともへの丞の役、ごばん編の羽織をしき、茶碗のわれにて、ひとり恭を打、太夫奥州とのくせつの段、いやはや外に、まねの仕手なき仕内、京中の見物うへをしたへかへし、顔見世とは打て替へての大當り、さても七三はきつい上手かなとの大評ばん、此狂言百二十日興行仕けり、隣芝居の一座、さてこそ藤十郎に申されしごとく、扱々上手の胸中はおそろしき事とかんじぬ、藤十郎金子吉左衛門をひそかにまねき、顔見世より申すごとく、今年少長といへる大敵あれば、一座の役者は勿論、先狂言に骨をおらねばならず、貴様狂言を作らるゝ故、油斷もあるまじけれど、一座の者よりも随分貴様勢つよく、狂言工夫あらねば、芝居の爲にならず、顔見世を仕勝しものゆへ、作者の氣ゆるみ出る物ゆへ、わけて申とくれぐゝ内意ありける、さて替りめ度毎藤十郎七三郎が仕内を見物して、天晴の上手なりと云、又七三郎は、藤

十郎が藝を見て、さて／＼藤十郎といへる役者は、聞及びしよりも、いたつて上手なり、我等是までに、藤十郎の仕内を見て工夫つけなば、藝をあげん物を、何をいふても今はかひなしと悔まれし、藤十郎は七三を見て、先舞臺の行義はなほだ正敷見え侍る、嘸かし不斷の身持よろしからんと、心底床しく、それよりちかずきに成、互に心安く度々出合申されし、七三郎元祿十一年同十二年二とし山下座をつとめ、同年の暮に江戸本挽町山村座へ下らるるに相續きはまり、七三郎より藤十郎方へ置みやげを贈りたり、藤十郎餞別に何ぞおくらんとかねて思へども、あの方より置みやげを贈られたるに、はなむけを又送りなば餘りしつべいがへしにておもしろからずと、何も沙汰なしに暇乞に行、心よく見立別<sup>レ</sup>ぬ、其暮極月廿九日に七三郎江戸の宅の門口に、歩行荷<sup>かち</sup>六人して持こむ、少長此よしを聞、添狀を見れば、坂田藤十郎よりとあり、其荷を見れば、わくに入たる大壺を出す、少長肝をつぶし、何を送られたるぞ、藤十郎の送りものなればさぞや、心をこめられたる物ならんと、書狀を急ぎひらき

見れば、加茂川の水一壺しん上仕候、大ぶくに御遣ひ被下べくとの文牒、少長ほとんど我を折、さてもさても我在京の内出會、多方<sup>おほかた</sup>こゝろを知りたると思ひの外、此度の送り物にて心の底深き事、はかりがたしと、家内は勿論人々に語り申されし、さしもの少長だに送り物にて、藤十郎の心底ふかき事量りかねたり、其餘の人、藤十郎の事など一向論じがたし

一山下京右衛門曰、歌舞妓芝居のせりふは、隨分言葉にさし合がましき事、これなきやうにこゝろがけ肝要なり、其故は親子兄弟一所に來る見物人まゝあればなりと、若き役者への教訓尤なる事なり

一坂田藤十郎曰、舞臺にてけいせい買の狂言を勤るさへ、さし合なり、然れどもこれは是非に及ばずと申されし、しかるにいつの頃よりか、次第にさし合のせりふおほく、近き頃は舞臺にて二人變る狂言など粗あり、かやうの趣向を作る作者、古人の示教をしらず、たとへ作者いかやうに作り出すとも、其仕内を吞込勤る役者も同罪なり、藤十郎申され

しごとく、二三十年過なば、やくしやの行儀大きに  
亂ぬべしと、未前を察し申されし事、日々に思ひ當  
りたり、狂言に差合の躰あらば、其場に及ばぬう  
ち、いかやうにも仕様あるべし、近來のきやうげん  
は、親子兄弟一所に見物成がたし、扱々にがくし  
き事なり

一坂田藤十郎曰、歌舞妓やくしやといへるものは、人  
のたいこをもつ氣しやうにては、上手になりがた  
し、そのやうに心降ると、後は役者同士の出合も、  
はなはだ疎遠になる物なりと、若き者どもに毎度  
申されし

#### 賢外集終

### 佐渡嶋日記

蓮智坊著

一六法といふ風俗は、むかし信州歷々の武門より出  
たる人、伎藝を好てつゐに浪人し、上京しける、  
其頃名古屋や山左衛門といへる、武士の浪人もの、  
出雲國の巫女、於國と夫婦に成、京北野にて芝居  
興行仕けるに寄、彼山左衛門とひとつに成、江戸  
さんちや通ひの風俗をして見せけるより起りける  
となん、江戸にては丹前とひい、大坂にては出端と  
いふ、それより傳り、其後立役、荒木與次兵衛、右  
の六法をふり入を取たるなり、それまでは今の六  
法のごとく、舉を廻し、振し事はなく、左右ともに  
眞直に振たり、今も江戸に古風残りあり、與次兵衛  
より元祖嵐三右衛門請續是を工夫し、いまのごと  
くを仕はじめけり、其のち古人大和屋甚兵衛ちん  
ばにて、六法を振る工夫をして當りを取たるなり  
二代目あらし三右衛門、三代目と相傳して、毎度勤  
しなり、其のち予又工夫しけり、其振筆には書取難  
し口傳



一予始て六法ふりたるは、大坂道頓堀芝居にて、座本より顔見世に六法ふりくれといふ、是まで三右衛門甚兵衛など振たる跡にて、我等など中々思ひ寄らずと僻遣せしに、せひといへるにいなみがたくて、衣裳の切付も物數寄して、初日の夜の顔みせ、六法ふる半より、見物おけやいゝと、聲々いふより、半疊の五六枚打ちむといなや、追々ばらばらと爰かしこより、半疊數多打ちみける、夫もかまはず勤仕廻、樂屋へ入たる時、惣座中首尾能く手を打たんといふ、予は甚其こゝろなきゆへ手を打たず、二日目三日目までおけよゝといひゝ七日つとめ、掛晝に成ても、やはり見物さんぐに打ちむゆへ、こは口惜く當かほみせ六法にて仕損ひては、後々まで耻を残す事、無念やとなほゝしんぼうして精を出し勤ければ、いつともなしに評ばん大イに立直り、よいやゝのかけ聲、それより日々に取沙汰よくなり、端々の評判よろしきと聞き、とかく工夫をこらすしんぼうが肝心なり、しかし初日より仕様替ることなきに、評ばんなをりし事はいかゝと、尋し人あり、此事我に問ふて我

はしらす

一予五歳の時より、親傳八所作事をおしへ、東武へつれ下り、碁盤人形と名付、ごばんの上にて我に藝をさせしに、あなたこなたより召され、春より九月までつとめたり、去御方の御機嫌に入、毎度召れ碁盤の上の所作を勤ける、御きげんの餘り、肥前國唐津へ、予がごばんの上に座しゐる人形を焼につかはされ、三ツ出來して御とりよせ遊ばされしほど御興に入たり、其としの十月京都へ登る道中筋ごばん人形の所作を聞および、宿々にてこれを望む、のぞみ次第に此所作事をつとめたり、九歳に成りたる時、最早ごばんの上に乗かぬる時節より、傳八工夫仕出して、七ばけの曲といふ事を案じ出し、おしへ込し、後長五郎が七ばけと我仕出せしやうに成たり、親の厚恩筆に書つくしがたし、思へば一むかしと成にき、所作秘傳奥に附す

予出家して、建仁寺御門前に住し、法花經讀誦朝暮おこたらず、佛の道を願ふより他事なし、ある時三條新地頂妙寺へ日參の折柄、ほとりの古道具やにて、彼五歳の時勤しごばん人形の唐津焼、

店に出あるにおさなこゝろに見覺し人形なれば速に價をきはめ、求めたりけり、先年御前御氣に入の御側仕の衆、一つ拜領仕ける、定て其行すへならめ、これをつくぐ見るに付ても親の粉骨碎身せし事をおもひ出し、涙をとむる導とは成けらし

一ある年勢州の芝居へ下り、はやし方など殊外無人、勿論道具等不都合にて、小鼓一挺あれども大鼓なし、是にあぐみ居けるを、予細工に竹を切り付け物をして大鼓をこしらへ、それよりの工夫にて、一人して二挺鼓と名付、はやき事など打たりしに、二挺鼓といひならはし、何とやら一曲と成りたるもおかし

一澤村宗十郎江戸にては、長十郎と成、後に助高屋高助と改、俳名を訥子といふ、此人元來は京都御歴々より出、若年のみぎりは仕官して由緒ある血脈なれども、生得心和らか過て、身を持崩し、歌舞妓芝居の役者とは成たり、初のはどは左もなく流浪して、あちこちと漂泊し、抱らるゝともなく、他國めぐりの芝居の笛吹、又何かの助けなどに頼まれ行、

夫より勢州の芝居へ出にける、其時は澤村藤五郎といへり、予勢州へ下り、はじめてちかづきに成、仕内つくぐと打見るに、餘の旅役者と違ひ、全躰面白き藝ぶりあり、後々には立ものと成かねまじき者にてもなしと心を付けるよりある夜ひそかにまねき、役者にて終らば、江戸へ下り精出すまじきやと申ければ、答に我身も其望なれども、心にまかせずといへるより、當所の事は此方引受申べし、せひ當暮江戸へ下らるべしとすゝめて、其年の冬下しぬ、程なく宗十郎と名を改、次第に評判よく、つゝに海老藏に次ての立者と成たり、予其後に江戸へ下り、一座に住ゐたりしなれども、今は此方より手をついて挨拶する程の立もの、以前の事は鼻息にも出さず居たりし、樂屋にて大勢聞ゐる前にて訥子はいく、扱々めづらしき事かな、其元様と一座致事、思へば一むかしなり、先年勢州にて御世話に罷成、御蔭にて先今日これほど迄に、立身致たりと、予に一禮をいひ、扱海老藏其ほか立ものゝ役者に向ひ、拙者はいかゝ恩を請し者など、ふいちやうしけり、その時思ふに名をあげる人は、丁簡格別



の事なり多くの人いにしへの事など、いさゝかもあらはさず、今よき身分になれば、禮を失ふものなるに、大勢の中にてかくむかしをあらはす人おほからず、其のち大坂へ來り、上手と評判をとり、其幕京都南側の芝居へ十日が間、京見物へ目見へに立けり、棧敷の直を上るほどの大評ばん、大入にて近來の賑ひ、江戸へ下り、其幕又上京し在京の間、上手くと賞美せられ、其のち又江戸へ下りたり、在京の間女形の心得に成る書を編みたりこれを訥子四十八條といふ

— 近年所作事をする役者、おびたいしう衣裳を著かさね、所作の間々にはやし方の並ならびある方へ向ひ見物をうしろになして、伴の小袖をひとつづゝぬぐなり、所作事に上著をぬぐといふ心は、見物長事を見詰て居れば、なんぼう面白き事にても、すこしは眼にそむものなれば、其ねふりを覺さんがために脱ものなるに、中古より餘慶著重ねるを全盛にして、餘りさいくぬぐゆへ、せわしく却て眼のさまたげに成なり、はやし方に、向いて衣裳を脱だり、衣紋をつくるへば、其間見物の眼あくなり、と

かくさまあかぬがよきなり

一大坂竹田出雲、子供に六法ふらせたきと、予を頼みに越されたり、所望に任せて下りければ、出雲殊の外悦び、扱子供に指南仕けるに、振やう首の遣ひ様思ふやうにゆかず、時に卽座に工夫出來、六法のふりやうの程拍子は、鶏の首のつかひやうに、ひとしと申聞せければ、忽に合點して、稽古満たり、物はたとへ程よき導はなし、しかれども是とても實ならでは用に立たし、扱六法の指南の跡は、さまざま古人のはなしなど仕けるに、此時節竹本筑後芝居には、淨瑠璃かたり目にて、竹田家内は、道具立其外萬事、こしらへ最中にて、あまたの人數銘々役々を相勤ゐる、道具立あつらへ方の者、ちよと御出あれと次の間へまねく、出雲こたへに何の用なるぞと尋しかば、柳の樹出來致候、御覽なさるべしと申、それを此方が見るには及ばず、正眞の柳に似さへすれば濟む事と申されし、さすが竹田家相續せらるゝ人ほど有て、不斷の心得かくべつなりと感じける、芝居は萬端藝の仕内道具立等に至るまで、正眞をうつすより外なしと、古人のおしへ尤な



る事かな、善惡とも不斷の事あらはるゝ物なれば、人は常に心得が大事なり

一非人敵打の狂言は、中古姉川新四郎此仕内を始めて、仕出せしやうに、若き人は思へども、非人かたき打の狂言は、むかし荒木與二兵衛といへる立役仕始たり、其時のすがたは、病かづらにて、随分くろぐろとあぶらを付、顔のつくりも白粉濃くぬりうつくしく、衣裳は白小袖の無地、大廣袖紅緋もみうわうら、花色の丸ぐけ帶を前にむすび、手足も随分白くして出立せられしよし、是予が親傳八はなしにて聞つたへたり

愚按、元祖坂田藤十郎申されし、非人の心得やはり自分の考にてなし、古人申置たる事此荒木與次兵衛のせられし非人かたき打の出立にて、藤十郎申されしと附合せり、これをおもへば、姉川致されし非人の心得は、雪と墨ほど違ひとは此事なるべし、新四郎非人の仕内よきゆへ、人々毎度申出すなれど、こゝろへは甚つたなし、是姉川を譏るにはあらず、古人の説と合しての論なり、仕内も古へとは甚野卑なり、ためしものに來

りし加村宇多右衛門がせりふに、敵打といふは命おしさにいふと、さんぐせめかける時、竹に仕こみし刀をぬきさし付、青江下坂二ツどうにきうですんとう切れます、へ……………と笑ふ、荒木氏始めてせられしは青江下坂二ツ胴に敷腕といひ聞せ、さし付たる刀を両手に持ながら、左の方へ引寄、調子を低く、ずんとよふ切れますへ……………とゑしやくする、此善惡は後の藝者かんがへ見るべし

一親傳八子若き時つねぐいひ聞せしは、藝者といふ者は金銀に眼をくれる物にあらず、一生涯の内名をひろむるが、肝要なりと、毎度耳かしましき程さいく堅く申付たり、此事子供のじぶんより年來聞こみ居しゆへ、予何國より相談に來りても、つゐに給銀の相對は致さず、頼なれば何方へ成とも二言となく約束極めたり、銘々業相應に給銀のわかち有て抱ゆる程の者は、夫々に相當のせるなるべし、しかれば給銀相對におよぶ事にあらず

一年中芝居ふあたりにて、年中勘定ふそくに見えけ

れば、此方より給銀をまけ、了簡付ケ出たり、芝居主は役者と違ひ名を上る事はいらす、第一金銀をまふくるが、其身の肝要といふ物、役者と芝居主との心得は、格別なり、夫に近年は、少しの給銀のあやにて、相談不濟方多しと沙汰を聞侍、此心底いぶかし、いにしへの役者中途に、出よの出まいのと、もめる事は皆役或は仕内に付ての申分なり、近來は金銀の事に付て、もめ粗おほしとかや、双方持なし惡敷は成たり

一地狂言は勿論所作事など、人の工夫して付たる事、後に又すべからず、近年は向ひに出すなど聞ゆ趣向を、又こちらにもまけじと急に稽古などして、張あひ仕ける、見物同事を二軒見て、何なぐさみにならんや、官女などいとみやびやか成風俗にてせば、薪を負へる山賤の老たるさまなど然るべし、一日の狂言にても、堅き武士の詰ひらきあれば、けいせいの意氣地などの事、又はおかしき事など、とかく同じ事のならばざるやうにすること、此道の專一なり、むかしの當り狂言、佛原、淺間嶽、岡幡松、嫁鏡などにてみるべし

一ひと、せ備中國宮内といへる所の芝居へ罷下り、不計當所にて死去せし、古人金子六右衛門が吉左衛門の師古墳に參らんとこゝろざし、少しのよすがを求めやうく方角を知て、叢の中に分入、ちいさき石塔あり、花をさし水を手向、それよりほとりにて、人をやとひ塚の前の薄など刈とらせ、ほそき板をひろひ得て、矢立の筆にて金子六右衛門墓と書つけ、さしおきたり、天地は萬物の逆旅といへど、取わき役者は一所不住にて、何國にて終をとるやらん空しき身の上にてぞ有ける

一近來所作事をつとむる人は、所作の間々に右左より扇づかひさせ、又は湯をのみ、休息する人多し、これはいかん、見物へうしろを見せ居るうちには、正面にて舞より猶大事なり、此間のぬけぬやうに、心遣ひなをく苦しきものなりと、古人もいひ置たり、さすれば湯を呑、扇つかひなどせねば、勤まらぬならば、所作事をせぬがよし、近來の人を、自呵責するにあらず、古人の教訓を用ゆる人なき故に、書しるし侍る、親傳八子におしゆる時も、此湯など吞事、五歳の時より堅くいましめたり、近年所作

事、執心なる人々、物事聞に來る人に、先所作事の  
聞に湯を替む事、左右より扇つかひさする事を、最  
初にいましめ置たり、石橋などの所作事を、舞終  
り、舞臺に打ふし、後見の人々寄てかいて樂屋へ  
入、此事一圓其意を得ざる事なり、先見物に對して  
不禮、そのうへ歌舞妓といへる物は、あれほど野卑  
なる物と、其身一人にて、此道の人々をさげしまる  
る事、芝居道のかきんたり、元來歌舞妓といふも  
の、左様なる不行儀の物にあらず、古實を能知たる  
人すくなく、近來年々に持なし惡敷成たり、坂田藤  
十郎云、元祿の末寶永に至り、今二三十年も年立た  
らば、芝居大いに衰と成べしと、その時分より、歎  
き申されし、夫にたがはず、享保年中より段々持な  
し惡くなり、一向今は論に及ばず、今たま／＼古人  
の教へを守る者あれば、あれはあほうのたわけの  
と譏ものゝみ多かりき、藤十郎存生のうちさへ、後  
者不行儀に成たるとて、毎度歎申されし、いはんや  
今におゐてをや

一人形芝居にては、大坂石井飛驒といへる者、尊み申  
さねばならぬ事也、元來操人形は、首ばかりにて著

物を打きせ、手も足も遣ひ人の手にて仕たるもの、  
近來まで子供の翫びに、でこのぼうといへる物は  
なり、此石井氏、おとなの手を、人形の袖へさし込  
遣ひ申故、甚袖見とむなしと工夫して、人形に手を  
拵付たり、夫より是に習ふて、足をつけ手の指をう  
ごかし、眼を遣ひ眉を動すなど、近來はさまざま、白  
由に作るなり、これ石井氏工夫の根元なり、今は飛  
驒の名は、濱芝居の名代計に残たり

一元祿寶永年中まで、初の狂言して居る内に、替り狂  
言の稽古して、もはや申分あるまじと、替り看板を  
出したたり、それより銘々役柄の工夫して、さあこれ  
ではよいと、おも役者二三人心得すむと、來ル何  
日よりといふ初日のはり札を出したる事なり、近  
來は替かんばん出し置、俄にかんばんをかけ替、外  
の狂言に替る事、折節にあり、是は何ゆへなれば、  
次の替り狂言の稽古も出來ざる内、先替り看板を  
出す、扱相談に懸り、役廻りなど打寄り申合見る  
時、何か万事差つかへ多く、一決ならず、夫故に  
狂言替り看板を又出し直す事有となん、初日二三  
日前より急に稽古して、誠に足本より鳥の立とい



はん計に惣座中甚さはざなり、此龜末成事、古今の相違をかんがへべし

一 今時の若き役者衆のいへる事をきけば、誰が仕内は古風なり、あれにては當世人々のみこまずなど、毎度人事に付ていふ人多くあり、此事一圓其意を得ざる事なり、狂言の仕内は、老若男女貴賤の人情をうつすに、古風當流もわかつ事、吞こみがたし衣裳の物ずきは時分の流行有ものなれば、其時々を用ゆべし、心持に古今の風といへる事あるべからず、すでにかづらに諸分あり、老人あたまでは、古風なりとて、皆黒髮計にても成難し

一 役者の仕内に、あるひは功者根生名人などさまざまに號あり、しかし古今稀なる物は、市川海老藏なり、予此人を妙人と號たり、中々餘人のうつす事も及ばず、玄妙の役者なり、予江戸在住の時、柏蔭海老藏俳名也申されしは、そこもと太夫本をなさるゝならば、いつにても登るべしと、いひける事の有し故、一とせ大坂道頓堀にて座本をせんと思ひ、柏蔭を相談に、書狀下せし時、返狀に給金二千兩にて、手付金五百兩下さるべしと申來る、歌舞妓芝居始り

て以來、給金二千兩取やくしや聞も及ばず、稀になる事を申越されしと、甚おもしろく、手付金五百兩調達して差下したり、あの方にもよもやと思ひしやら、大坂へ來りて其うつり挨拶をせられし故、予答曰二千兩の給金取らるゝ役者古今になし、夫を押出して申越さるゝゆへ、定てそれ程に格別の事、有べしと存るなりと申けり、予も物數寄なりと思ふのみ、顔見せは、ういろう賣のせりふ、先めづらしく、大入にて二の替曾我を出せし所、さんぐ不當りにて、子息團十郎病氣を幸に、十日餘りにて相休、扱三の替の相談何をがなと樂屋おもてども、彼是申合けれども思案おちず、時に柏蔭申けるは、此次は鳴神を出さんといへり、予も鳴神なれば、狂言案じるにも及ばずと、古き狂言を序へ繼合せつゝり、四番め鳴神上人をやつこがころす事あり、詰に鳴神の亡靈、雲のたへまに、つきしたがいがいこつの所作と思ひ付たり、柏蔭生得狂言に切殺さるゝ事を忌てせず、予是をさせんと思ひ、四ばんめのがいこつの所、影法師にて拙者勤べしといひければ、左候は、殺され申べしと相談出來て稽古云合濟、

初日出せし所に、久米彈正といふ侍に成、使者に來りての仕内、あつぱれ誠の武士と見えたり、外に此まねをする人なしと大坂中の評判、扱も上手なりと感心し、四番めは二役鳴神上人の段、家の藝なれば手に入たる仕内、鳴神のひいき近國は申に及ばず、遠方よりもいざ海老藏が鳴神見物せんと、わざわざ大坂へ來る人、數を知らず、押も分られぬ大評判大入、京の數寄人は大坂にて見物したる人多し、然れどもつゝに京出勤なく、是のみ殘心なり、顔に藝あるは奇妙の生得也、いづれ妙の字は遁れがたし、しかし歌舞妓役者の殺さるゝ役を嫌ふも、いか成事か是とても妙なるべし

○しよさの心得

一ふりはもんに有、もんくの生なき時は、品をもつてす、又もんくなく、ふしにてのはす時は、ひやうしにのる、なすわざはしよき成が故にふりに誠を本とす、何によらず其しよきがらのこゝろを、わするべからず

一しやうぞく大口事、たれら大かた能をする心持にて、風のくづれぬやうに舞ふべし、くだけたる風は

あしく候

一侍の弓矢をたづさへておどりさはぐやうなるは見苦し、此しよさにかぎらず、すべて謠など入たるか、能かゝりのしよさを、諸人一どうにどよめき、譽るはあしく、只一言二言はむるは、ゆかしくてよし

一柴かりなどのやうなる、下々の親仁のしよさは、ふりの間に、むかし若き時の風を年よりて叶はざるふうの心持、あいだくに入これもしよさがらをしほらしく、するを第一とするなり

一婆々の所作、若き時のだて者の品を、年よりてかなはざるふりの間々に入、しほらしきを第一とす

一翁、老女、申におよばす其心持

一女形風は申に及ばず心をつくべきなり、立身に成り候時は、わに足に成べし、腰ほそにすそびらきよし

一鍵おどりは、隨分足を、片わに、して、ひらけるがよし、身をそりおもたくと、ひやうしにふりを大きく、又間をせわしくして、鍵のまわるがよし

一きつねはかりう人、又は犬などに、おそれるやうに  
すべし、獅子は王なれば、こゝろたくましく持事、  
かんじんなり、一さいどれともに、頭をつかふべ  
し、ふりのしなにより、たまかしく又は大間にもす  
べし、頭をつかふを第一にすべし

一著ながししよさは申に及ばず、其身著のまゝにて、  
それぐにしよさの仕わけ見へ申やう肝要なり、  
すべて男のしよさに女のふりをする事、又はをん  
りやうの中にて、おどろいむべし、諸人ほむると  
も、其所作の事わざより外の事すべからず

一ふりは目にてつかふと申て、ふりは人間の體のご  
とし、目は魂のごとし、たましいなき時は、何の  
用にも立ず、ふりに眼のはづれるを死ふりといひ、  
所作の氣に乗てふりと眼といつちにするを、活た  
る振とは申なり、夫故ふりは目にてつかふと心得  
べき事第一也、はてしなき故、筆をとめぬ

佐渡島日記終



## 古今いろは評林

陳眉公的評西廂記、李卓吾的評琵琶記、千古撮當、後人尙且有紙鶴泥龜之愷、是个甚麼緣故、謂其翅不施足不縮也、原來院本的評論、世人唯知介做乾扮做坤、未<sub>レ</sub>知凍暖蒸寒之趣意、是故到底、不免膠柱鼓瑟之見識、噫嗟、蠢子無<sub>レ</sub>眼、知情有<sub>レ</sub>僻、是个古今通病、遂入膏肓、況且後世灰飛煙滅不<sub>レ</sub>見一個扁倉、平安自笑主人、原是插趣的元帥、其論俳優真個似擔尹君平的善卜、唐舉子鄉的善相一般、些寸花嘴、說<sub>レ</sub>綠談<sub>レ</sub>紅、遇<sub>レ</sub>人所喜、登塲子弟縱然、做<sub>レ</sub>套做<sub>レ</sub>圈、能<sub>レ</sub>敲得青龍擬<sub>レ</sub>白虎麼、件々有<sub>レ</sub>君眼中、如今這忠臣藏院本、生則上從澤邨訥子、下至尾上芙蓉、三都四十餘次拘攔、一座之且淨丑渾、論其本事、頓盡其明辨當論誰入<sub>レ</sub>筏麼、啊噫、恁地的咱、自笑主人的才、却在陳李二公之右者可知、俺於自笑、一路友班、故人所<sub>レ</sub>謂酒兄肉弟也、諺道狸子打<sub>レ</sub>鼓、猫子舞、得<sub>レ</sub>不下爲<sub>レ</sub>左氏<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>玄晏麼、奉<sub>レ</sub>勸當今趨<sub>レ</sub>情步<sub>レ</sub>趣的徒、死心塌地、熟讀<sub>レ</sub>這書、他日做<sub>レ</sub>那知情的掌盤<sub>レ</sub>者、不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>七十三八十四呢、于<sub>レ</sub>時天明乙丑之冬日書<sub>レ</sub>于淨福門前一

## 條衒術之寓居

平安第一風流才子宿<sub>レ</sub>花眠<sub>レ</sub>柳幫襯主者 出生子

## 發端

己を發して自盡すを忠と云とかや、其心を盡して欺ざる也とは自然の字論、忠を躰として義を要となすの作意々々どう取なしても、當らざるといふ事あらず、抑元祿十五癸午年、東武なる俳諧師寶晉齋其角のもとより、浪華の何某へ來りし文中に

此程の一件も二月四日に片付候て甚噂とり／＼花やかなる説も多く候て無上忠臣と取沙汰此節其事計に候境町勘三座にて十六日より曾我夜討に致候て十郎に少長五郎に傳吉いたし候へども當時の事遠慮も有べきよしとて三日して相止候前後略

但し少長は元祖中村七三郎、傳吉は二代目宮崎也是ぞ此趣向の始として、大坂にては寶永七寅年、篠塚庄松座におゐて、吾妻三八作にて、則篠塚次郎右衛門大岸宮内の役、方彌には中興までつとめし佐野川万菊、若衆形の時これを勤しが、歌舞妓狂言にての始として、此狂言大當りなるよしとて、中寺町正法寺日親堂へ、繪馬に此圖をあらはし、次郎右衛門悦びの餘りに、是を奉納なし、今に残れりとぞ、京都にては同じ

く寅年の秋、二芝居共右狂言を出す、一方は大岸宮内に山下京右衛門、一軒にては小佐川十右衛門、此役をなす、小佐川跡より初日出たれども、大にあたりを取しとぞ、其後享保二酉年、大坂にて古澤村長十郎大岸と成りて、姉川新四郎寺岡平右衛門の役をぞ勤め、大あたりを得て、同十一年の秋、大坂嵐三右衛門座にて、又も澤長此役をなせど、此時は狂言少し、替りて不破數右衛門に嵐勘四郎勤し也、享保廿卯年四月、大坂にて中村十藏則座本にて大岸宮内の役をなして、此時堀部安兵衛に藤川平九郎、夫より後狂言いろ／＼とかはり作る、或は大岸に姉川新四郎などの勤し事もあり、後延享四卯年、京都中村糸太郎座本の時、大矢數四十七本と外題して、澤村宗十郎後ニ屋高助元祖訥子大岸役にて、六月朔日より初日出して大入を取し也其矢聲大坂にひゞき、同じ外題にて市山助五郎、宮内の役にて狂言勤たり、今の假名手本七ツ目は、此時澤村宗十郎が形と成りて、凡其係を手本と成來れり、其後歌舞妓狂言にも

寶曆十一年巳十二月廿二日

泰平たいへいいろは行烈續十段ぎやうれつ

大坂角ノ芝居座本中山文七

明和八年

小袖藏こそでくいろは配てくはり七冊物

京北側西ノ芝居  
座本尾上桑助

安永六年酉十二月八日

日本花赤穂鹽竈四十七段續

大阪角ノ芝居  
座本小川吉太郎

是等も追々出て、各當りを取るといへども、兎角忠臣藏出て後は、此狂言を第一として、仕内も是にこそ、工夫物好を入、大きに委しく成たり

一操あやつり淨瑠璃狂言にては、其比近松門左衛門作にて、

寶永三戌の年五月五日より、竹本筑後掾の座に、兼好法師物見車といへる切りに碁盤太平記と外題し、此趣意を出したり、尤此淨るりには、高師直、鹽谷判官、

また大星由良之助と出し初たり、又豊竹越前少掾の座にては、享保十八丑年十月朔日より、忠臣金短冊と

外題を出したり、此時は小栗横山の時代にて、大岸由良之介の名で出たり、夫より後寛延元辰年八月十四

日初日として、同竹本座にて初て假名手本忠臣藏と名題を出して、大當りの評判つよく有しが、其比太夫

かたのもめ合出来て、此太夫嶋太夫など半にして豊竹座へ入替りて、大和掾初内匠太夫  
後有隣軒上總太夫入來りて、

しばらく勤といへども、自分の節付ケなせし程にも

あらねば、おのづから勢ひうすく成りて、思ひの外に其年十一月中比迄して、蘆屋道満にぞ替りたり、されども始に云ごとく、此狂言のほまれつよくして、始の大岸宮内の名は、是にて消て、是よりして大星由良之助にぞあらたまりたり、故吉田文三郎此大星の人物を遣ふも、彼澤宗訥子が風儀をあらはし、並木宗助の作意に、丸にて七つ目を其まゝにて用ひ入たりとぞ

一操淨瑠璃にて同趣向の狂言の外題其年記をしるす

竹本座は

碁盤太平記

上下  
寶永三戌年五月初日

假名手本忠臣藏

十一幕

寛延元辰年八月十四日初日

太平記忠臣講釋

讀切  
十一幕

明和三戌年十月十六日初日

方武士鑑

十幕

明和九年辰四月廿八日初日

いろは藏三組くみさかづき續十幕

座本  
安永二丑年七月廿八日初日

曾根崎新地芝居にて

竹本染太夫

豊竹座は



忠臣金短冊

五段續

享保十八丑年十月初日

難波丸金鶏

五段續  
十三段

寶曆九卯年五月初日

此狂言の大序夜討の討果せて幕前に首を手向  
る計也

いろは歌義臣兜

十一冊物

明和元年壬十二月十七日  
初日

忠臣後日漸

上下

明和九辰年四月初日  
堀江市側座本豊竹此吉

合詞四十七文字

十段續

天明二年寅九月初日  
堀江市側座本豊竹此吉

太平義臣礎

十冊物

天明四辰年正月初日  
堀江市側座本豊竹此吉

忠臣いろは實記

續十一段

安永四年七月十五日  
堀江市側座本豊竹此吉

其外女ゆらの介になしたり、又は中芝居或はあ  
やつりなどにてても、其係を端くれに加ふる事有と  
いへども、今是を略して、彼忠臣藏の各仕内のかは  
りめをしるし、それに評を付て、古今いろは評林と  
題する物ぞかし

一寛延元辰ノ年より、今天明五乙巳年まで年數  
三十八年の間に、假名手本忠臣藏を三个津の  
芝居におゐて四十一度興行也、其役割残らす  
左に記す

天明五年乙巳霜月吉日

八文舍自笑述

京 忠臣藏  
都 役 割

北側芝居  
中村松兵衛座  
寛延二年  
三月十五日  
北側西ノ芝居  
嵐三右衛門座  
寶曆二年  
四月十七日  
南側芝居  
澤村國太郎合座  
染松松二郎合座  
寶曆十三年  
三月十三日  
北側西ノ芝居  
尾上久米介合座  
尾上紋太郎  
明和五年  
三月十五日  
北側東ノ芝居  
三樹徳次郎座  
明和九年  
正月廿九日  
北側東ノ芝居  
姉川千代三座  
安永二年  
二月十一日  
南側芝居  
中村万勝座  
安永四年  
三月三日

大星由良之介

中村十藏  
山本京四郎  
山本京四郎  
尾上菊五郎  
坂田半五郎  
市の川彦四郎  
藤松山十郎

加古川本藏

嵐七五郎  
櫻山四良三  
櫻山四良三  
中村歌右衛門  
嵐七五郎  
江戸坂京右衛門  
市の川彦四郎

天川屋義平

二代目  
嶺山小四郎  
山本京四郎  
山本京四郎  
尾上紋太郎  
坂田半五郎  
市の川彦四郎  
坂東満藏

寺岡平右衛門

古  
嵐七五郎  
櫻山四郎三  
中村十藏  
中村歌右衛門  
坂東満藏  
江戸坂京右衛門  
市川才藏

鹽谷判官

二代目  
嶺山小四郎  
澤村言治  
嵐吉三良  
尾上紋太郎  
尾上新七  
澤村宗十郎  
市川才藏

早野勘平

竹中兵吉  
古  
染松七三良  
尾上紋太郎  
嵐三五郎  
姉川みなと  
市の川彦四郎  
嵐七三郎

桃井若狹之助

竹中兵吉  
中村正藏  
富士松山十良  
嵐三五郎  
澤村宗十良  
市川辰十郎  
小佐川加賀藏

石堂右馬之丞

古  
中村四良五良  
古  
染松七三良  
尾上紋太郎  
嵐金才  
市川友藏  
江戸坂京右衛門  
市の川彦四良

原郷右衛門

坂東助三郎  
澤村清十良  
嵐藤十良  
坂東彌介  
嵐藤十良  
嵐藤十良  
小佐川加賀藏

千時彌五郎

太和山甚兵衛  
水木吉三良  
松屋新十良  
嵐金才  
大和山林左衛門  
山下幸四良  
市川權十郎

與市兵衛

坂東助三良  
中村正藏  
嵐藤十良  
市川宗三郎  
嵐藤十郎  
松本友十郎  
篠塚惣三

てつち伊五	坂東助三郎	嵐彦三郎	今中村十藏	藤川山吾	大和山林左衛門	江戸坂正藏	玉川此藏
高師直	古嵐七五郎	今古村七三良	桐島儀左衛門	市川宗三良	坂田半五良	古嵐七五郎	古浅尾國五良
斧九太夫	古笠屋又九郎	古笠屋又九郎	桐嶋儀左衛門	大谷友右衛門	嵐七五郎	坂東滿藏	坂東滿藏
斧定九郎	篠塚磯五良	今古村七三良	藤川半三良	中村熊五郎	嵐	武左衛門	山下俊五郎
巖師寺次良左衛門	篠塚惣三	山本七藏	藤川半三良	松本友十郎	嵐	武左衛門	松本友十良
瀧坂伴内	篠塚惣三	山本七藏	山中平十郎	松本友十良	山下俊五郎	松本友十郎	山下俊五郎
大田了竹	篠塚惣三	笠屋又九良	桐嶋儀左衛門	松本友十郎	山下俊五郎	松本友十郎	山下俊五郎
與市兵衛女房	竹中兵吉	澤村言次	富士松山十良	大谷友右衛門	坂田半五郎	山下幸四良	山下六三郎
となせ	中村八重八	中村富十郎	中村喜代三	尾上菊五郎	澤村國太良	佐の川花妻	藤松山十郎
おいし	浅尾元五良	浅尾元五良	山下六三良	桐の谷秀松	姉川みなと	姉川みなと	姉川みなと
おその	浅尾元五良	中村富十良	中村喜代三	中村桑太良	三樹徳次良	姉川みなと	姉川みなと
おかろ	中村松兵衛	嵐富之助	澤村國太郎	中村久米太良	澤村國太郎	姉川みなと	山下八百藏
かほよ	中村喜代三	山下金作	嵐松之丞	生嶋菊次良	澤村國太良	姉川千代三	山下八百藏



小	な	み	大和山仙介	山下岩之丞	嵐	松之丞	尾上久米助	藤川山吾	澤村宗十郎	中村萬勝
大星	力	彌	三代目 榊山四良太郎	嵐	三右衛門	澤村國太郎	市川吉太郎	三樹徳次良	姉川菊八	中村八重八
京	忠臣藏	南側芝居 三升次郎吉座	北側東ノ芝居 山下八百藏座	北側東ノ芝居 名代部万太夫 座本布袋屋	天明五年 巳九月廿五日					
都	役割	安永八年 亥三月十六日	天明二年 寅三月十七日	天明五年 巳九月廿五日						
大星	由良之助	中山文七	嵐	雛	助	尾上新七				
加古川	本藏	山本儀右衛門	柴崎林左衛門	嵐	雛	助				
天川	屋義平	中山來助	嵐	三五良	嵐	雛	助			
寺岡	平右衛門	中山來助	嵐	山十良	嵐	雛	助			
鹽谷	判官	中山他藏	嵐	三五良	嵐	三五良				
早野	勘平	中山猪八	淺尾汶藏	嵐	三五良					
桃井	若狭之助	淺尾豐藏	中村京十良	尾上新七						
石堂	右馬之丞	中山來介	淺尾汶藏	嵐	雛	助				
原	郷右衛門	尾上宗九良	嵐	山十郎	中山榮藏					

千崎彌五郎	中山他藏	中村京十郎	嵐染七				
與一兵衛	尾上宗九郎	柴崎林左衛門	中山榮藏				
てつち伊五	中山猪八	嵐音八	嵐染七				
高師直	淺尾爲十良	嵐難助	嵐七五郎				
斧九太夫	淺尾爲十良	中村東藏	嵐七五良				
斧定九郎	淺尾國五良	嵐難助	三國富士五郎				
藥師寺次郎左衛門	山本儀右衛門	嵐音八	中村岩藏				
鷺坂伴内	澤村國十郎	桐山紋次	坂東岩右衛門				
太田了竹	淺尾國五良	桐山紋次	中村岩藏				
與一兵衛女房	嵐菊次郎	嵐三五郎	尾上新七				
となせ	澤村國太郎	嵐難助	山下金作				
おいし	嵐菊次良	姉川みなと	山下八百藏				
おその	澤村國太郎	澤村國太郎	山下金作				

お	か	小	大	江	戸	大	加	天	寺	鹽	早	桃
か	ほ	な	星	忠	役	星	古	川	岡	谷	野	井
る	よ	み	力	臣	割	由	川	屋	平	列	勘	若
山	山	澤	三	森	已	山	坂	岩	岩	花	嵐	富
科	科	村	升	田	二	本	田	井	井	井	小	澤
甚	甚	千	次	座	六	京	藤	半	半	才	六	辰
吉	吉	烏	良	市	日	四	十	四	四	三	六	十
澤	山	山	嵐	村	年	良	郎	郎	郎	郎	五	郎
村	下	科	三	座	寛	坂	松	大	古	今	尾	古
國	八	甚	右	中	延	東	本	谷	二	羽	上	二
太	百	吉	衛	村	二	彦	幸	廣	代	左	菊	代
郎	藏	藏	門	座	年	三	四	治	目	衛	五	廣
山	山	嵐	嵐	座	已	良	良	市	今	藏	郎	治
下	下	直	村	村	五	後	市	古	勘	松	中	歌
八	金	藏	次	座	日	助	川	海	三	島	村	川
百	作		良	森	方	高	宗	老	郎	八	七	四
藏				田	年	屋	三	藏	九	百	三	郎
				座	寛	高	良	市	鶴	藏	郎	五
				座	延	助	澤	古	屋	松	古	古
				森	二	高	村	雷	南	山	雷	の
				田	年	屋	音	藏	北	三	藏	川
				座	方	高	右	升		十	升	市
				座	亥	助	衛	藏		郎	藏	松
				森	五	高	門	升	今	松	古	古
				田	日	屋		藏	長	山	雷	坂
				座	方	高		市	十	三	藏	東
				座	寶	助	富	二	澤	今	古	三
				森	曆	高	澤	代	村	市	古	八
				田	五	高	辰	目	傳	川	佐	市
				座	年	助	十	川	藏	百	の	松
				座	方	高	郎	團	藏	藏	市	古
				中	午	高		藏	今	今	今	古
				村	閏	高	市	古	長	幸	幸	市
				座	四	高	川	雷	十	四	四	川
				市	月	高	雷	藏	郎	郎	郎	雷
				村	二	高	藏	今	喜	今	今	藏
				座	日	高	今	エ	十	エ	エ	な
				市	方	高	エ	藏	郎	藏	藏	し
				村	明	高	團	今	今	今	今	
				座	和	高	十	エ	長	幸	幸	
				市	二	高	郎	藏	十	四	四	
				村	年	高	富	今	郎	郎	郎	
				座	方	高	澤	エ	喜	喜	喜	
				市	戊	高	辰	藏	十	十	十	
				村	九	高	十	今	郎	郎	郎	
				座	月	高	郎	大	今	今	今	
				市	九	高	郎	谷	長	長	長	
				村	日	高	郎	廣	十	十	十	
				座	方	高	郎	治	郎	郎	郎	
				市	年	高	郎	治	郎	郎	郎	
				村	三	高	郎	治	郎	郎	郎	
				座	方	高	郎	治	郎	郎	郎	



石堂右馬之丞	澤村藤三郎	水木九十郎	市川新四郎	市川新四郎	坂東磯五郎	市川團五郎	富澤辰十郎
原 郷右衛門	富澤辰十郎	古津打門三郎	古市川宗三郎	桐の谷藤十郎	坂田左十郎	市川伊達藏	今長十郎 澤村喜十郎
千崎彌五郎	荻野助三郎	八代目市村羽左衛門	市川金三郎	坂東伊三郎	中村七五郎	坂東鶴五郎	坂東吉藏
與一兵衛	古嵐音八	鶴屋南北	市川團五郎	市川新四郎	岸田東太郎	市川團五郎	佐川新九郎
てつち伊五		中村八十太	北國屋京五郎	北國屋京五郎	澤村字十郎	市川久藏	古嵐音八
高 師 直	大谷龍左衛門	古中村助五郎	古中嶋三甫右衛門	古二代目 中嶋勘左衛門	澤村音右衛門	今團十郎 松本幸四郎	なし
斧 九太夫	市川勘十郎	古中村助五郎	古二代目 中嶋勘左衛門	市川勘十郎	今三甫右衛門 中嶋三甫藏	今中嶋三甫右衛門	坂田左十郎
斧 定九郎	大谷龍左衛門	今エビ藏 松本幸四郎	今長十郎 澤村喜十郎	中島虎藏	中島虎藏	坂東又太郎	中村仲藏
華助寺次郎左衛門	中島虎藏	古三八 坂東又八	今市川庄五郎	澤村嘉十郎	澤村今藏	松本大七	澤村今藏
鷺坂伴内	大井川又藏	今半五郎 坂田左十郎	中村平十郎	中村權次郎	坂田左十郎	中島三甫藏	坂田國八
太田了竹	大谷龍左衛門	宮崎十四郎	市川團太郎	市川勘十郎	坂東磯五郎	宮崎十四郎	松本藤十郎
與一兵衛女房	花井才三郎	八代目市村羽左衛門	澤村源二郎	松山三十郎	富澤辰十郎	市川團五郎	富澤辰十郎
となせ	嵐小六	嵐富之助	今八十分 澤村小傳次	嵐和歌野	姉川大吉	今里好 中村松江	尾上菊五郎

お	い	し	嵐	吉	彌	尾上菊五郎	二代目	芳澤あやめ	吾妻藤藏	古	さの川市松	吾妻藤藏	中村秀松					
お	そ	の	吾妻藤藏	尾上菊五郎	瀨川菊二郎	さの川市松病氣	古	さの川市松	吾妻藤藏	古	さの川市松	吾妻藤藏	中村秀松					
お	か	る	吾妻藤藏	さの川市松	中村久米太郎	吾妻藤藏	今里好	中村松江	二代目	瀨川菊之丞	尾上松助							
か	ほ	よ	嵐	吉	彌	玉澤才二郎	古雷藏	嵐	玉	柏	澤村歌菊	三條龜太郎	龜谷十次郎	今市松	坂東愛蔵			
小	な	み	山本岩之丞	嵐	松五郎	瀧中富瀧	三條龜太郎	中	今里好	村松江	今岩井半十郎	藏	中村富次					
大	星	力	彌	岸田幸太郎	古	さの川市松	菊川大吉	都小富士	坂田吉之丞	市川	辨藏	澤村菊湏						
江	忠	臣	藏	中	村	七	三	郎	二代目	中村七三郎								
戸	役	割	明和五年	丑四月十六日	明和六年	丑四月三日	明和六年	丑五月五日	明和八年	卯四月七日	安永二年	巳九月九日	安永三年	午五月五日	安永五年			
大	星	由	良	之	助	中	村	七	三	郎	坂田半五郎	澤村宗十郎	市川高麗藏	尾上菊五郎	澤村長十郎	中村仲藏		
加	古	川	本	藏	な	し	坂田佐十郎	市川團藏	中村仲藏	坂田半五郎	中村十藏病氣	中村津多右衛門	市川團藏					
天	川	屋	義	平	な	し	坂田半五郎	大谷廣次	市川八百藏	な	し	な	し					
寺	岡	平	右	衛	門	今	エ	ビ	藏	市川團十郎	坂東三津五郎	坂東三津五郎	市川團藏	大谷友右衛門				
鹽	谷	判	官	な	し	森	田	勘	彌	今	八	十	介	市村羽左衛門	市川八百藏	市川團三郎	坂東三津五郎	市川團藏

早野勘平	市川八百藏 <small>今</small>	尾上松介	大谷廣次	岩井半四郎	尾上菊五郎	市川八百藏	嵐 <small>三五郎</small>
桃井若狭之助	なし	嵐小式部	坂東又太郎	市川團十郎 <small>今</small>	大谷廣次	澤村淀五郎	中村助太郎
石堂右馬之丞	なし	岸田東太郎	中村勝五郎	市川團十郎 <small>今</small>	市村羽左衛門	笠屋又九郎	嵐 <small>三五郎</small>
原郷右衛門	なし	富澤辰十郎	市川友藏 <small>今團藏</small>	市川昭右衛門	山科四郎十郎	山科四郎十郎	松本小次郎
千崎彌五郎	市川文藏	坂東鶴五郎		坂東鶴五郎	市村龜藏	市川春藏	尾上紋三郎
奥一兵衛	市川團五郎	岸田東太郎	坂東三八 <small>古</small>	市川團五郎	富澤半三郎	山下門四郎	市川團五郎
てつち伊五	なし	澤村宇十郎	中村傳吾	嵐 <small>今</small> 音八	なし	なし	なし
高師直	なし	坂田半五郎	中島三甫右衛門	市川團十郎	中島勘左衛門	尾上松助	中島勘左衛門
岸九太夫	中村助五郎 <small>今</small>	坂田佐十郎	中島三甫右衛門 <small>今</small>	山下次郎三	坂田半五郎	大谷廣右衛門	中村助五郎
岸定九郎	中村仲藏	鳴川三左衛門	古澤村宗十郎	中村仲藏	鎌倉長九郎	三國富士五郎	中村仲藏
縣師寺次郎左衛門	なし		坂東三八 <small>今三八</small> 又八	市川昭右衛門	坂東三八 <small>今</small>	中村津多右衛門	中村津多右衛門
鷺坂伴内	中村此藏	中村大太郎	中村嶋五郎	中村此藏	尾上松助	坂東善次	大谷友右衛門
大田了竹	なし	中村大太郎	富澤半三郎	松本大七	なし	なし	なし



天川屋義平	加古川本藏	大星由良之助	戸役割	江忠臣藏	大星力彌	小なみ	かほ	おかる	おその	おいし	となせ	興一兵衛女房
中村仲藏	市川團十郎	三代目市川團藏	安永八年 亥八月十六日 安永十年 丑十一月十日	森田座	市川門之介	なし	なし	二代目 瀬川菊之丞	なし	なし	なし	なし
市川團藏	中島勘左衛門	市川團藏	安永十年 子九月九日	森田座	龜谷十次郎	岩井半四郎	龜谷十次郎	岩井半四郎	尾上松助	嵐小式部	今八十 森田勘彌	坂田半五郎
坂田半五郎	市川團十郎	尾上菊五郎	中村座 安永九年 子九月九日	かな忠臣藏名残 て本外だい勢申候	今澤村四郎五郎	山下京之介	中村秀松	今里好 中村松江	吾妻藤藏	今さの川市松	吾妻藤藏	古坂東三八
市川八百藏	市川團藏	市川團十郎	天明三年 卯九月九日	中村座	山下八百藏	市川門之介	山下金作	今里好 中村松江	山下金作	山下金作	芳澤崎之介	中村少長
大谷廣次	中村仲藏	松本幸四郎	天明三年 卯九月廿三日	市村座	今坂東彦三郎	瀬川吉次	嵐羅次	中村里好	なし	吾妻藤藏	尾上菊五郎	尾上松助
森田勘彌	中村勝五郎	森田勘彌	天明三年 卯九月	森田座	森田又次郎	瀧中岩之丞	山下秀菊	中村のしほ	なし	中村富十郎	山下金作	山下門四郎
市川團十郎	市川團十郎	澤村宗十郎	天明四年 辰十七日	中村座	坂東彦三郎	瀬川菊之丞	中村里好	瀬川菊之丞	なし	山下金作	中村里好	山科四郎十郎

寺岡平右衛門	中村仲藏	坂東又太郎	坂田半五郎	市川團藏	大谷廣次	二代目 江戸坂京右衛門	市川八百藏
鹽谷判官	澤村淀五郎	市川團藏	市川團十郎	市川門之助	尾上紋三郎	澤村淀五郎	市川八百藏
早の勘平	市川團十郎	尾上紋三郎	市川門之介	澤村宗十郎	松本幸四郎	小佐川常世	市川八百藏
桃井若狭ノ助	坂東又太郎	坂東又九郎	中村介五郎	市川八百藏	市川高麗藏	嵐 七三郎	尾上紋三郎
石堂右馬之丞	澤村長十郎	坂東彦三郎	市川門之介	市川團藏	松本山十郎	江戸坂京右衛門	松本小次郎
原郷右衛門	中村津多右衛門	山科四郎十郎	大谷廣右衛門	松本小次郎	山科四郎十郎	嵐 七三郎	中村勝五郎
千崎彌五郎	坂東又九郎	坂田佐十郎	尾上政藏	市川八百藏	市川高麗藏	坂東三木藏	市川升五郎
與一兵衛	山下又太郎	市川團藏	音羽次郎三	中嶋三甫藏	中山清次郎	大谷團八	中村勝五郎
てつら伊五	松本秀藏	大谷徳次	仙國彦介	中村傳五郎	大谷徳次	大谷團八	大谷廣八
高師直	中村仲藏	中島三甫右衛門	尾上松助	中嶋勘左衛門	中村仲藏	三國富士五郎	市川宗三郎
斧 九太夫	坂東又太郎	中嶋三甫右衛門	中村介五郎	坂東又太郎	中村介五郎	市川宗三郎	嵐 音入
斧 定九郎	中村仲藏	市川團藏	坂田半五郎	尾上松助	中村仲藏	三國富士五郎	松本小次郎
藤崎寺次郎左衛門	中村仲八	市川友藏	尾上松助	中嶋勘左衛門	坂東熊十郎	澤村喜十郎	松本大七

大星 由良之助	大 忠臣藏	大 役割	小 なみ	か ほよ	お かろ	お その	お いし	と なせ	與一兵衛女房	大田了竹	鷺坂伴内
二代目 嵐三十郎	嵐三五郎座	寛延二年 巳十二月一日方	坂東米五郎	尾上多見藏	小佐川常世	尾上多見藏	小佐川常世	尾上多見藏	市川團藏	中村津多右衛門	中村此藏
山本京四郎	市村さの八座	寶曆四年 戌二月十三日方	山下松之丞	中村桑次郎	中村桑次郎	小佐川常世	中村桑次郎	市川團藏	中島勘左衛門	坂東三八	大谷徳次
山本京四郎	北ノ新地芝居 中村八兵衛座	九段目まで 十月十五日方	瀨川吉次	中村桑次郎	岩井半四郎	山下金作	山下金作	尾上菊五郎	尾上松助	松本大七	中嶋三甫藏
中山文七	角芝居 姉川菊八座	明和三年 戌八月廿八日方	瀨川三代藏	岩井半四郎	瀨川菊之丞	岩井半四郎	岩井半四郎	三代目 瀨川菊之丞	松本小次郎	中嶋勘左衛門	中嶋三甫藏
尾上菊五郎	北ノ芝居 嵐松次郎座	安永三年 午十二月三日方	芳澤三喜藏	中山富三郎	中村里好	二代目 吾妻藤藏	中村里好	四代目 芳澤あやめ	山科四郎十郎	大谷徳次	市川幾藏
嵐 雛	中ノ芝居 三樹松之丞座	安永四年 未十二月二日方	瀨川徳次	山下松之丞	中村桑次郎	小佐川常世	中村桑次郎	二代目 小佐川常世	江戸坂京右衛門	江戸坂京右衛門	坂東嘉十郎
助 藤松山十郎	東芝居 中村十次郎座	安永四年 未十二月七日方	岩井春次郎	中山富三郎	岩井半四郎	中村里好	中村桑次郎	岩井半四郎	尾上紋三郎	音 八	大谷廣八



加古川本藏	片岡仁左衛門	藤川平九郎	櫻山四郎三	中山新九郎	中村歌右衛門	三桝大五郎	市の川彦四郎
天川屋義平	姉川新四郎	山本京四良	な	し	藤川八藏	藤川八藏	三桝大五郎
寺岡平右衛門	山本小平次	藤川平九良	櫻山四良三	藤川八藏	嵐吉三良	嵐吉三良	坂東満藏
鹽谷判官	市の川彦四良	市の川彦四良	竹中兵吉	松山三十良	嵐吉三良	澤村宗十良	嵐三十郎
早野勘平	嵐 <small>二代目</small> 三十良	坂東豊三良	山下又太郎	中山來助	嵐 <small>難</small> 助	嵐吉三良	中村喜代三
桃井若狭ノ助	山本小平次	坂東豊三良	藤井長九良	市の川門三良	藤川柳藏	嵐文五良	中村十次良
石堂右馬之丞	姉川新四良	坂東豊三良	山下又太良	中山來助	藤川八藏	嵐吉三良	市の川彦四良
原郷右衛門	山本小平次	嵐藤十良	澤村桝五良	藤川龍左衛門	市山助五良	嵐文五良	市川幾藏
千崎彌五郎	ヤサマ <small>十太郎</small> ニテ 市の川彦四良	坂東幾藏	中川正五良	市の川門三良	坂東市松	桐山紋治	芳川音五良
興一兵衛	市村三甫右衛門	嵐藤十郎		藤川龍左衛門	市川宗三良	市川宗三良	藤川東九良
てつち伊五	嵐勘三良	大松百助	大松百助	岩井春五良	坂東市松	桐山紋治	嵐七三郎
高師直	市村三甫右衛門	桐嶋儀左衛門	染川此兵衛	淺尾爲十良	坂東岩五良	坂東岩五良	中村歌右衛門
芹九太夫	二代目 片岡仁左衛門	桐嶋儀左衛門	桐山紋治	淺尾爲十良	坂東岩五良	三桝大五良	中村歌右衛門

斧定九郎	二代目 民屋十三良	藤川入藏	藤川半三良	笠屋又藏	藤川柳藏	三枅他人	中村歌右衛門
藥師寺次郎左衛門	二代目 民屋十三良	三名川彌平二	染川此兵衛	桐の谷拾十良	市川宗三良	坂東岩五良	坂東滿藏
鷺坂伴内	二代目 民屋十三良	三名川彌平二	藤川半三良	三名川半五良	中村友十良	桐山紋次	中村武十良
大田了竹	二代目 片岡仁左衛門	桐島儀左衛門	な	し	桐の谷拾十良	坂東岩五良	坂東岩五良
與一兵衛女房	二代目 片岡仁左衛門	市の川彦四良	竹中兵吉	松山三十郎	嵐七三郎	嵐	難介
となせ	富澤喜代崎	二代目 芳澤あやめ	岩田染松	佐の川花妻	尾上菊五良	姉川大吉	藤松山十良
おいし	三代目あやめ 芳澤崎之介	三代目あやめ 芳澤崎之介	三代目あやめ 芳澤崎之介	二代目 芳澤あやめ	姉川大吉	三枅徳次良	市山七藏
おその	二代目あやめ 芳澤崎之介	三代目あやめ 芳澤崎之介	な	し	三代目 芳澤あやめ	嵐	難介
おかろ	吉田萬四良	市村さの八	岩田染松	澤村國太良	尾上久米介	尾上久米介	市山七藏
かほよ	小野川龜菊	山下六三良	桐の谷秀松	佐の川若松	三枅徳次良	三枅徳次郎	嵐
小なみ	山下六三良	芳澤萬代	桐の谷秀松	花桐豐松	市川吉太良	市川吉太良	中村槌五良
大星力彌	嵐三五良	生島金藏	中村小才三	姉川菊八	生島柏木	三枅松之丞	中村十次良
大忠臣藏	角ノ芝居 芳澤いろは座	中ノ芝居 嵐他入座	角ノ芝居 藤川菊松座				

阪役割

安永八年  
亥十一月廿七日

天明三年  
卯正月十五日

天明四年  
辰正月十七日

大星由良之助

三保木儀左衛門

尾上菊五良

市川團藏

加古川本藏

中山文七

三保木儀左衛門

市川團藏

天川屋義平

中山文七

尾上菊五郎

三保木儀左衛門

寺岡平右衛門

藤川八藏

三保木儀左衛門

中山他藏

鹽谷判官

小川吉太郎

嵐三五郎

三保木儀左衛門

早野勘平

嵐山十郎

嵐文五郎

染松七三良

桃井若狭ノ助

藤川八藏

中村京十良

中山他藏

石堂右馬ノ丞

中山文七

三保木儀左衛門

加賀屋歌七

原郷右衛門

芳澤十三

嵐文五郎

今村七三良

千崎彌五郎

坂東豊三郎

山下又太郎

三枅松五郎

與一兵衛

藤川十良兵衛

嵐七五郎

加賀屋歌七

てつち伊五

嵐新平

嵐文五郎

中村次良三



高師直	山村儀右衛門	嵐七五郎	市川團藏				
斧九太夫	山村儀右衛門	坂東岩五良	中村次良三				
斧定九良	三升松五郎	加賀屋歌七	市川友藏				
藥師寺次良左衛門	中村次良三	嵐七五良	大谷廣右衛門				
鷺坂伴内	三升傳藏	嵐三八	中村次良三				
大田了竹	中村次良三	坂東岩五郎	今村七三良				
與一兵衛女房	嵐新平	嵐三五良	姉川大吉				
となせ	中村富十郎	三升徳次良	三保木儀左衛門				
おいし	山下龜之丞	姉川大吉	山下金作				
おその	中村富十良	山下八百藏	山下金作				
おかろ	よし澤いろは	山下八百藏	芳澤いろは				
かほよ	藤川山吾	嵐三右衛門	山下金作				
小なみ	中村のしほ	嵐三右衛門	芳澤いろは				

大星 力 爛 芳 澤 いろは 嵐 村 次 郎 染 松 七 三 郎

古今いろは評林卷之上 藝品定

假名手本操あやつりにてにぎはひし其翌年、寛延二巳の春、江戸森田座に此狂言を出せしは二月六日也、大にはんじやう有て大入を取しは、山本京四郎由良之介を勤たり、時に市村座五月五日より初日出せは、中村座つづいて六月十六日に初日出す、三座共評よく賑ひし也、京都は中村松兵衛座本にて、同年三月十五日初日出す、大坂は其暮間あひの物にて、十二月朔日より嵐三五郎座本にて初日出す、此五軒いまだ人形のうつしのみにて、銘々の思ひ入少しづ、替りし計にて、さのみ思ひ人性根など、いふ氣持事はなかりしに、近來次第しに仕内こまかく成て、見物人も少しにてもわきめなどすれば見はずすゆへ、氣苦勞に成りしもおかし、先最初に三ヶ津にて、五軒の興行の役を、始に評して、次に其役々の次第を記す

高の師直役

森田座は

大谷龍左衛門、

市村座は

古中村助五郎、

中村座は

古中嶋三甫右衛門、

京にては  
古嵐七五郎  
大坂にては  
市村三甫右衛門

すべて此役は高位の姿にて、底意に戀をもつて意地をふくみ、言葉しつこう憎がらるゝやうにするを本意とする也、さるによりて、江戸にては素袍にて、斯る次第見る事もあらねども、聞はつりし事もあらん、上に右の心持を以てなすゆへ、取合ひ凡宜し、別して中嶋三甫右衛門などは、功ありて其中にしても沙汰よし、勿論龍左衛門助五郎共其頃上手の部なれば、心持よきゆへ見よくも有しとぞ、七五郎至て上手にてもあれ共、其上手にて實惡の役の押のつよきを専らとして、殿中の係は思ひ量る計也、三甫右衛門とても左のみ仕内はかはらず、其後は江戸にての此役

二代目

古五粒

後ノ

中嶋勘左衛門、松本幸四郎、坂田半五郎、三甫右衛門、市川團十郎、中村仲藏、各二度三度も勤しなり澤村音右衛門、尾上松助、市川團藏、三國富士五郎、市川宗三郎、京にては  
古今村七三郎、桐嶋儀左衛門、淺尾國五郎、



坂田半五郎、嵐雛助、嵐七五郎

大坂にては

浅尾爲十郎、坂東岩五郎、中村歌右衛門、今の市川團藏

山村儀右衛門、

思ひ／＼に少しつゝ性根といへる物を用るは、序はさしてかわりし仕内も見えず、三つ日本藏にまいない仕られし所の悦びてのそゝり、次に若狭之助に出合ふて、急に誤まる次第など也、右に云ごとく、凡江戸役者の方が此役にては見よし、素袍にてもあまり大なるを好まず、しとやかにてそゝりを付る事多し、鹽谷を云ほぐす仕内などは、只同じ事を幾たびもいふばかりにて、さのみ是ぞとかわり目もなき也

頭書 諸役甲乙之次第

師直役

古舍丸 眠獅 古魚樂 今市紅 岩子

龍左衛門 歌七 魚山 五登

其外論するに不及略之此已下諸役同斷也

師直 舍丸

評に曰、嵐氏は花うすく實を專とする藝風にて、衣裳など物好せぬは、仕内に手丈夫の覺ある故

なれ共、少し花やかなる出立有も可成べし、大序師直の役は、赤地の錦の口付も、ちとうそよごれてきのどく、かほよにぬれの場、少し入事有て古歌などひき、歌のかうしやくなどの物好ありて、夫よりのぬれはうつり有てよし、三つ日本藏にまいない受てからの仕内は、あまりざつとして有ふれたる仕様にて、平敵めきたり、大序の仕様とは、きついちがひ様、こゝは位高うして、ついしやういふてこそおかしみあり、ちやり過て面白からず、工夫有べき所也、鹽谷に惡口の所は赤城の鹽竈の俵を立入ての仕内なれど、是は眠獅の仕て置し跡ゆへ目立ませなんだ、全体にくみうすし、大切夜討の段も、夜著をかぶりふるふてゐるも小口なる案しかた、西の芝居にて、忠臣講釋狂言なれ共、師直に五登勤たれど、此方にはにくみ有て、大切りなどは落付てよく、山良の介をだまし打にせんとする所は見よかつた、是は大坂にて岩子のせる近年の出來なり

(以上頭書)

桃井若狭之助役

江戸三座にては 富澤辰十郎、二代目 大谷廣治、歌川四郎五郎

京にては  
竹中兵吉  
大坂にては  
山本小平次

此役はすべて大名の氣持をはなさず、小身にて無念成るを底意に置いて、師直に惡口せられてより、初一念の短氣を専らとする也、江戸二代目廣治、至て氣持よくありし故、殊外評よく、小平治などは中々先人品にても負る也、其後は

江戸は  
佐野川市松、古坂東三八、古市川八百藏、嵐小式部

坂東又太郎、今ノ團十郎、三代目廣治、澤村淀五郎、

今中村助五郎、後ノ八百藏、市川高麗藏、嵐七三郎、

尾上紋三郎

京にては  
中村正藏、富士松三十郎、嵐三五郎、澤村宗十郎、

市川辰十郎、小佐川加賀藏、淺尾豐藏、中村京十郎

尾上新七

大坂にては  
坂東豐三郎、山下又太郎、市野川門三郎、藤川柳藏

嵐文五郎、中村十次郎、中山他藏

此役も凡江戸の氣持すべて宜敷、御膝元にある事ゆへ、萬事心いきよろし、されども上方は又上方の風儀有といへども、坂田半五郎上京の時、今の澤村

宗十郎勤しは、至て評判よくぞありて、本藏今一度顔を上げい、最うあはぬぞよといふてはいる仕内に、大になみだをうかめさせし也、其比いまだ年もいたつて若輩なるじぶん、其仕内のよろしきは、まつたく江戸の氣持を見およびし物とぞ、其餘相應に出來るといへども、師直を殿中にてたづぬる間などめつたむしやうに短氣にて、喧嘩もすべき仕内まゝある也、近比江戸にて中草など宜きといふも、其心持を考し故也、新七至て役によくはまる上に、彼二代目廣治をよく吞込まれて、一しほ見よくぞ覺ゆる也、され共是までにも有事ながら、奥にもよそながらいとまごひせんといふ心持は、大名にしては少し憶したるにも似んやと申せど、只相應の位有る男にて、情をもつて無義道なる方に仕内あれば、誰にても勤る時、いつとても評よく、仕榮へのある役ながら、先此三人をよしとす

頭書  
桃井役

古十町、芙蓉、三升、今訥子、栢車  
素桐、今魚樂

若狹之助 芙蓉

評に曰、近年めき／＼と仕上られ、別して武道事の仕内よく、さつく／＼となして、其内に味はひをこめて、黄金鱗の齋藤たつおきの色情をしらぬぬれ事にて大に評を取、此度の若狭之介役は、しごく持まへによくはまりたり、大序さしたる事なく、二つ目我がやかたへ歸る、出端も衣裳付も、上下の幅もせばく、小みじかく著たるはさすがに、江戸にて武士風を見なれたるしるし有て、物すぎよし、力彌使者に來りし時、返答の仕様もかくべつ腹立てゐる様にもなくてよく、本藏にうつぶんの事を物語問より、本藏のお覺の刀といふ、すらりとぬきはなしたる仕様りつばにてよし、それよりおくへ入らんとして立もどり、おくにもよそながらいとまごひせうかと、本藏にたづねは、ちと思ひ入ちがひ成べし、おくをはじめ、其方も兼て短慮なりといへ共、我遺恨計ならず、師直の我がまゝは、諸人の難義世上の爲ゆへやむ事ならぬといふほどの武士が、おくにもいとまごひせう歟と、家老にさうだんは手ぬるふきこえたり、夫より又ちよとおくへ入らんとす

る心持有て立もどり、本藏もうあはぬぞといふてはいれ共、最初おく方の事いふた跡故、主従の情見物へのこたへうすし、此所は今の訥子つとめし時は、大いに諸人に涙をふくませたり

(以上頭書)

鹽谷判官高貞役

江戸三座に  
花井才三郎、市村龜藏今羽左衛門、松嶋八百藏

京江二代目  
柳山小四郎

大坂は  
市野川彦四郎

此役勿論姿に諸侯たる所専らとし、始随分しとやかにて、後こらへく、こらへ袋の破れる思ひ也、四つめは銘々仕内のかはりめあれ共、出端に優美をもつて心中に無念も残念もこめて取みださず、うれひを付ての切腹をするが狂言の本意なれば、さのみと思へと上手の入役也、又桃井の役とは前後心持ちがふなり、八百藏一入よく勤たり、小四郎人形のうつりを一入とせし也、其後江戸にて

松山三十郎、中村傳藏後八百藏也、市川高麗藏、大谷廣治、森田勘彌、市村羽左衛門、市川八百藏、市川團三郎今ノ團藏也、坂東三津五郎、澤村淀五郎、



市川團十郎、市川門之助、尾上紋三郎

京大坂にては

澤村言次、嵐吉三郎、尾上紋太郎、尾上新七、

澤村宗十郎、市川才藏、中山來助、竹中兵吉、

松山三十郎、嵐三十郎、嵐三五郎、三保木儀左衛門

小川吉太郎、

彦四郎三度、嵐吉二度、嵐三五郎三度なり、三十郎は切腹の水を結びて座に直りし也、江戸の高麗藏三津五郎との團十郎門之介などしとやかにてよし師直に悪口せらる所、聞ながしする思ひなどおんわにて三五郎能見へし也、四ツ日の始、黒羽二重羽織同じ姿也其外は凡縫もやうなど多し、山良之介來りてより、物いひがたく無念を告る思ひ入、後は言葉すくなく見よく、彦四郎吉三郎迄は淨るり文句の通を言ひしが、今は數すくなくて、見物も合點すれば、三三郎功ありて、一しは宜し、吉太郎は思ひ入もなく、宜しかるべく思ひしに、存の外此役あしかりしぞ

頭書 鹽谷役

來芝、元祖八百藏、里環、二代目中車、小太

鹽谷判官

來芝

評に曰鹽谷判官役は、度々勤られしゆへ手に入た物ながら、三つ目勘平と早がわりにて、見物に目をおどろかさん爲に、師直へくわし箱を持て來る時、るぼしすほうにて出立が、あまりしほたれ見すばらしうて見ぐるしかつた、切腹場はこれまでいろ／＼思ひ入あつて、狂言長く成、見物たいくつの來る所なるを、狂言のすじは諸人がしりぬいてゐる事ゆへ、長事のせりふをいはずに、むねんなりといふ氣味を見せて、切腹をみじかくせしはさすがの手だれ、功者のほどがあらはれしなり(以上頭書)

石堂右馬之丞役

始メ江戸は

澤村藤三郎、水木九十郎、市川新四郎

京は古中村四郎五郎

大坂は姉川新四郎

此役檢使にて、人品専らなれば、随分落付て得と切腹を見極め、其後一家中の愁情を察して、ことばをのこし、心をこめてかへるまで猶更優美の俤入る也新四郎不相應と思ひの外、功つもりしだけ甚以しとやかにて思ひやる風情、至て感せさせし也、後

江戸にては

坂東礪五郎、市川團五郎、岸田東太郎、富澤辰十郎

中村勝五郎、市川團十郎、市村羽左衛門、笠谷又九

郎、嵐三五郎、澤村長十郎、坂東彦三郎、市川門之

助、市川團藏、松本山十郎、嵐七三郎

染松七三郎、坂東豊三郎、尾上紋太郎、嵐金才、市

川友藏、江戸坂京右衛門、市野川彦四郎、中山來助

藤川八藏、嵐吉三郎、三保本儀左衛門、加賀屋歌七

中山文七、浅尾汶藏、嵐雛助

わるう心得たるは、めつたに子細らしうて見にく  
いかだ多し、なんでもない様にてはまるとはまら  
ぬ塲、此役など一入多し、江戸は凡此にはまる事多  
く、見聞事も多くあれば、仕内にさのみかはりめな  
く、優なる所る専ら也、依て仕損じすくなし、上方  
にては仕て見る事多ければ、仕損ずる事々有る  
也、され共古八藏思ひの外に仕内ありて、判官切腹  
にかゝる時に、床几をはなれ、傍によりかしこまつ  
て、おごそかに勤めしは至つて珍らし、左も有べく  
思はれたり、文七儀左衛門などはなはだよくはま

りたり、來助團藏は餘り子細らしくして見にくし、  
雛助しとやかにてよけれども、人品家老位に見へ  
たり、彼一家中の心を察し、我も涙を思はずも、催  
して別る、花道にて、それをかくさんため、涕をか  
みて入りしは、知行にはふさうおう也  
春藤次郎右衛門にて、此斯を當られたれど、夫とは  
直勤倍臣のわかりもなくて、心持ちがひし歟とも  
思はれぬる

案るに、此後山良之助勤し役者、此役に廻る事あら  
ば年恰好の見合せ有べくも、必竟此塲は山良之助  
の役がシテなり、同じ年頃にては、山良之助先きへ  
出たる様にては、後の見榮へなく思はるれ、心得有  
べき事

願書 石堂役

古新四郎 山男 素桐 古八甫

右馬之丞 眠獅

評に曰、石堂役最初姉川新四郎勤めたれど、其後  
さして立者のせぬ役乍ら、近比は歌七、山男、素  
桐など勤たり、此度の仕様すいぶん落付て、何も  
物好なく、五十計なるきれい成仕立故、見物一ど

うに悦びしなれど、先年大星役も勤めしゆへ、其  
うへ當座の大立物ゆへ、どふか由良之介が先へ  
出た様に見へたり、鹽谷腹切を見とゞけ、此通り  
言上せんといひ、立歸りしなに花道へ少し行て  
立もどり、諸士へ用事あらば申越されよと、こん  
せつのあいさつ、是はやはり立もどらずと歸り  
さまに、直にあいさつありたきもの、立戻りて申  
ては思ひ出した様で、諸士も不満足ならん、夫よ  
り一家中のしうしやうを思ひやり、落涙するを  
かくさんため、涕をまぎらかしかんで立かへる  
おもひ入は、了簡達に見へたり、先見物に涕をか  
んで見せるといふは、大いなるぶしつけことに  
大名が袂より鼻紙を出し、はなをかみ、又たもと  
へ入立かへるもおかし、逸風が東鑑の朝比奈の  
時、扇にてはなをかみて、大いに落を取し、眠獅  
も朝いなを勤めし時、其おもむきをしたり、是と  
は役がらのちかひもあり、すべて此やうな思ひ  
入事は工夫有べき事也(以上  
頭書)

江戸にては  
市川庄五郎

中嶋虎藏、坂東又八古三八なり、

京にては  
篠塚惣藏  
大坂は二代目  
民谷十三郎

此役石堂と同格にもあらぬゆへ歟、淨るりにても  
敵を専らとして、さがなくとりなすは、判官との喰  
違はすを、意地としてさして思ひ入の有べきやう  
もあらず、其後江戸にては

澤村嘉十郎、澤村今藏、松本文七、坂東又八今三八  
市川昭右衛門、中村津多右衛門、中村仲八、市川友  
藏、尾上松助、中嶋勘左衛門、坂東熊十郎、澤村喜

十郎

京にては  
山本七藏後藤川半三郎に成、松本友十郎、嵐武左衛門、

山下俊五郎、山本儀右衛門、嵐音八、中村岩藏  
大坂は

三名川彌平次、染川此兵衛、桐野谷權十郎、市川宗  
三郎、坂東岩五郎、坂東満藏、嵐七五郎、中村次郎  
三、大谷廣右衛門

市川庄五郎

岩子 五登

市川庄五郎

評に曰、薬師寺役は、誰もさして大出来といふ場  
もなし、あるべかりにすいぶんにくていに、有



さへすれば、女などの見物はにくがるゆへよし  
とす、此度は立者ぞろへの中へ出ての出合、お  
くれもなくつゝ、こんでせられしは氣丈にてよし  
(以上頭書)

かほよ御前役

江戸始は

嵐吉彌、玉澤才次郎、嵐玉柏古雷藏也

京にて

中村喜代三

大坂は

小野川龜菊

大序尊氏の兜を撰るに、少し仕内もありて、師直に  
れんぼしかけられ、耻しめ、次に四ツ目のうれひに  
さまぐ有計ながら、さかなくせぬやう、餘り若過  
るもあしく、御前様らしきを專要とする、其後江戸  
は

澤村歌菊、三條龜太郎、龜谷十次郎、坂東愛藏、

中村秀松、山下金作、嵐雛次、山下秀菊、中村里好、

尾上民藏、中村兼次郎、岩井半四郎、中山富三郎、

山下松之丞

京にては

山下金作、嵐松之丞、生嶋菊次郎、澤村國太郎、

姉川千代三、山下八百藏、山科甚吉、山下金作 此度

又も勤む

大坂にては  
山下六三郎、洞野松秀松、佐野川若松、三枅徳次郎

嵐雛次、嵐三右衛門、山下金作、藤川山吾、

山下六三郎大聲の愁よくこたへしと噂する、其後  
佐野川若松後姉川千代三とて、京大坂にて勤し時  
も、腹切後上使の歸るを待出ての愁、至て張込し聲  
也と、後々迄も評せり、其餘さしたる仕内もなけれ  
ども、程々の思ひ入あり、江戸里好龜太郎半四郎な  
ど、姿と共によく入、上みがたにては、金作國太郎  
至てよし、金作乗物に付そひ送る所、女乗物にて女  
六尺にて付行しが、京にては只泣々葬のごとくし  
て行に、始には引かはりて襲うちかりも著ず行しはいか  
や、初の程は三都にて、此役此人程よくはまりしは  
覺へす

頭書

かほよ役

里虹 棣不 古同

かほよ御前 里虹

評に曰、かほよ役は少し花やかなる仕立にて、き  
りやうもよき女形ならではうつりあゝし、もつ  
とも里虹見おとりはなけれども、よほどの年功  
ゆへ、其上病後とやらにて、うき立かねたり、大

序師直にぬれかけられ、なん義の所は仕内に難  
はなけれども、年功故師直に色情がうつるまい  
と、見物の方から思はるゝ也、夫より若さの介が  
いきどほりてゐるをなだめる所、手にて拜みと  
かく了簡なされ下されませといふ仕様ながら、  
あれは茶やの花車が客のかんしやくおこせし時  
わびごとする様にあつた、大名のおく方には似  
合ぬ、下作なる仕様、四ツ目鹽谷せつぶくの後し  
うたんのあまりうつとりとしてゐて、夫より上  
使お立と聞、はしりよりしがいのそばへよりな  
げき、大聲を上てなかんとして、諸士の手まへを  
耻せりふ計にてかなしみ、後ゆらの介が焼香せ  
よといふ時、のり物のそばによりて、夫より大に  
とりみだして、泣かなしみてのしうたんは、きつ  
と功者の程が見へたり(以上  
頭書)

斧九太夫役

江戸にて初は古  
市川勘十郎、中村助五郎、中嶋勘左衛門

京にては  
笠屋又九郎

大坂にては  
片岡仁左衛門 古藤川半三郎也

老人姿にて、大に取合ひを好みて、始末とも惡に程

らい入て、成程取締りも有べき姿でなければ、城わ  
たしの相談にさからふ場も取合す、七つ目尤猶其  
心係多くぞあらん、江戸にて其後も又

市川勘十郎、中嶋三甫右衛門、中嶋三甫藏、坂田佐

十郎、中村助五郎、山下次郎三、坂田半五郎、大谷

廣右衛門、中村助五郎、坂東又太郎、市川宗三郎、

嵐音八

京にては其後も

笠谷又九郎、桐嶋儀左衛門、大谷友右衛門、嵐七五

郎此度も勤る、坂東滿藏二度、淺尾爲十郎、中村東藏

大坂にては

桐嶋儀左衛門、桐山紋次、淺尾爲十郎、坂東岩五郎

二度、三村大五郎、中村歌右衛門、中村次郎三、山

村儀右衛門

四ツ目善心と見せ、御金配分と聞て立もどり、本心  
を顯はし這入が此役の情、七ツ目幕明から意地わ  
るき言葉をつかふて、獅子廻しの不調法を専らと  
し、蛸をはさんで喰ふにあきれるなどはおかしみ  
をふくむといへど、餘り仰山なるはわろし、由良之  
介との取合ひ、一方拍子過たれば片方は不拍子と  
歟、喰ちがひにて、面白さも増やらんと思ふ事まゝ  
あり

頭書九太夫役

古茶谷 魚樂 一光 奥山 歌七

今魚樂 今舎丸

九太夫 舎丸

評に曰、鹽谷切腹の間は、よほどてらされたる藝也、上使立し跡にて、シビリの切レしちやりはさも有べき思ひ入おかし、城わたし相談の内も、しつくりとしてよし、七ツ目さわぎの間も大ていのぶびようしの物好はよく入たり、とかくにくみがうすく残念く、(以上頭書)

斧定九郎役

始江戸は大谷龍左衛門、後の海老藏也松本幸四郎、澤村喜十郎父長十郎也

京にては篠塚磯五郎

大坂にては民屋十三郎

四ツ目はさしたる事なし、五ツ目追剝の場は、淨りの文句にしたがひて、左のみ是ぞといふ事もあらね共、幸四郎は又何となく、仕内のなきにもあらず、其後江戸にては

中嶋虎藏二度、坂東又太郎、中村仲藏以上六度此役を勤る

鳴川三左衛門、一代目訥子澤村宗十郎、鎌倉長九郎、三國富士

五郎、今市川團藏、坂田半五郎、尾上松助、松本小次郎

京にては

今村七三郎、藤川半三郎、中村熊五郎、嵐武左衛門

山下俊五郎、古淺尾國五郎、嵐雛助

大坂にては

藤川古八藏、藤川半三郎、笠屋又藏、藤川柳藏今の

八藏也、三枅他人、中村歌右衛門加賀屋歌七と成ても勤む

市川友藏、三枅松五郎

始にいふごとく、初の程は只の追剝にて、大嶋の廣袖にて、夜著の様な物を著て出しが、古訥子など身を捨て出せし故、少しづゝ物すきもかはりめも出初て、仲藏二度目あたりより、黒羽二重の古き著物に成やぶれ傘さして出るなど、仕はじめたり上み方も東武の俤うつりて、其姿にて仕内至てこうしやうに憎い事を專とせし也、仲藏至てよきにつき、友藏などさへ大坂にて、其うつりをなして當りを取し也、雛助も此形を聞て勤るといへ共、すこし取合はず、不評判にありて、鐵砲にあたり、死やうまでも奇妙也といはすは此役也、此役におゐて、三都にて只仲藏一度くに妙ある仕内を増て、大に評判を得たり



頭書 定九郎役

秀鶴 五粒 友藏

定九郎 鬼洞

評に曰、定九郎役は、江戸にて中村仲藏大當りせしより、京大坂にて折ふしは立者も勤たれどさしてかはりたる事なく、近比大坂にて、市川友藏評を取たり、是は江戸にて秀鶴が仕内をよく見覺へゐしゆへ、其趣にて當りたり、此度も定て仲藏が仕内を取ませでの仕様ならんと思ひし所、始終五ツ目狂言不出殘念、江戸仕入が見せ度もの也(以上頭書)

鷺坂伴内役

大井川又藏、坂田佐十郎、中村平十郎

京にては 篠塚惣三  
大坂にては 民屋十三郎

是もさしたる事はなけれ共、いづれもあたりめを取る役也、本藏に賄賂せられてより、そゝり出す間が仕内也、後勘平が戀をさまたげあふはいづれ共凡同じ格なり、それより後江戸は

中村權次郎、坂田佐十郎又勤る、中嶋三甫藏三度、坂

田國八、中村此藏三度、中村大太郎、中村嶋五郎、尾上松助、坂東善次、大谷友右衛門、大谷徳次、市川幾藏、坂東嘉十郎、大谷廣八今

京にては 山本七藏、山本平十郎、松本友十郎、山下俊五郎、

澤村國十郎、嵐音八、坂東岩右衛門

大坂は 三名川彌平治、藤川半三郎、三名川半五郎、中村友十郎、桐山紋治、中村武十郎、嵐三八、三枅傳藏、中村次郎三

此役に付て咄しあり、中村武十郎は歌右衛門弟子也、同座にて此役を受取し時、不承知の顔なりしと作者歌右衛門に告るによりて、歌右衛門武十郎を呼びて、伴内の役不足也と思ふは言語道斷の事也、よく思ひ見るべし、鹽谷判官短氣にて、師直に殿中で手疵を負せしゆへにこそ、此通りの狂言につゝり來れり、若師直が短氣にて、判官に手疵を負せなば、師直館斷絶すべし、其時は主人の歎をむくふは誰がすべきぞ、伴内ならではないか、さすれば大事の役ならずやといひしもおかし、さすがは歌七也とも、それにて得心せしも又おかしくもありしと聞傳へたり

伴内役

鼠顔

其外いづれも大ていに出来たり

伴内 高岩

評に曰伴内役は誰がつとめても、それぐにおかしみありて、落を取りし也、岩右衛門京初舞臺ながら、中村次郎三を手本として、顔つき口跡身ぶりまでよくうつす故、まづ愛敬ありてきたもよき方也、地にて見れば、きれいなが男ぶり立はきついもの(以上頭書)

原郷右衛門役

江戸にて初は古  
富澤辰十郎、津打門三郎、市川宗三郎

京にては古  
坂東助三郎

大坂にては古  
山本小平治

是は鹽谷の用人役にて、仕内よりは人品を專要として、おだやかにあまりやかましくないやうに勤るを可也とも、尤城わたしの場、さして役もなくてらされたるものにて、引はり計りゐる役也、それより後江戸にては

桐野谷藤十郎、坂田佐十郎、市川伊達藏、澤村喜

十郎又も辰十郎勤む市川友藏今の團藏、市川昭右衛門

山科四郎十郎四度、松本小次郎三度、中村津多右衛門、

大谷廣右衛門、嵐七三郎、中村勝五郎

京にては古  
澤村清十郎、嵐藤十郎三度、坂東彌助、小佐川加賀

藏、尾上宗九郎、嵐山十郎、中山榮藏

大坂にては古  
嵐藤十郎、澤村併五郎、藤川龍左衛門、市山助五郎、

嵐文五郎二度、市川幾藏、今村七三郎、芳澤十三

さして仕内もあらねど、初にいふごとく、此役相應

すれば、一ト切おさまる程の事也、勘平の内にて

は、此役さはぎ方也、何程小利口によくするといへ

ども、文五郎にては姿はまらず、始の古市川宗三郎

などを、先第一ともする、嵐藤十郎度々ゆへ少し言

葉數多きともいへど、役に俵はまりて見へたり

郷右衛門役

古和尉 呂久

郷右衛門 榮藏

子共の時分、榮藏とて竹田につとめ居られし事を  
おもへば、近比の様にありしが、其後大坂中芝  
居へ中山榮藏とて出られ、京大芝居は此度が初  
上り、男ぶり請よくお仕合

評に曰、郷右衛門役は、是はといふあたりめのなき役、年若ゆへ年配が取合かねたり、此役は嵐藤十郎度々つとめし故、家の藝と成て、今に諸人が云出す事になりぬ(以上頭書)

矢間重太郎役

千崎彌五郎役

竹森喜太八役

大鷲文吾役

小野寺十内役

不和數右衛門役

堀邊彌兵衛役

是等の役は鹽谷切腹の時、由良之介到著と聞て、各ばら／＼と出て、普代外様分りて、力彌もろとも光明寺へ送り、或は隨身の諸士は残りて、屋敷わたしの相談などありて、次に勘平に、途中にてあふは、大かた千崎彌五郎也、依て次に勘平内の場へ、金子を戻しに來るは、原郷右衛門と彌五郎、同道する筈ながら、役廻りによりて名のかはりめあり、又は七ツ目、三人づれにて平右衛門召連出るも同じ、役廻りによりてのちかひめあり、誰にても仕廻ふ所は段々あやまり入ましたにて、其場はすむ、天河屋の場へ、捕人姿にて來りて、いどみ合ふは小野寺を先として、凡來れども、由良之助儀平二役の時は、郷

右衛門或は堀邊彌兵衛長持より出る事もあり、又

大鷲文吾にて出しも有る也、凡中通りより勤る事多し、依て最初の江戸は、千崎彌五郎役

荻野助三郎、八代目市村羽左衛門、市川金三郎

大和山甚兵衛、市野川彦四郎、其後を略す

今の團藏此役ともに七役つとめあたりを取し也

加古川本藏役

江戸にて森田座は市村座は坂田藤十郎、松本幸四郎後の海老藏也、古市川宗三郎

嵐七五郎

大坂にては片岡仁左衛門

二ツ目主人に金打して見せて、言葉を聞て驚かず、心を察しておくれさせぬ、心をはげますため、松を伐て見せていとまごひをなす風情より、主人入て後賄路の思ひ立に、いろ／＼仕内あり、三ツ目猶更陰ながらの案じと、師直の機嫌をはかる仕内、九ツ目虛無僧にてのつよみ、鑓で突かれてより、師直やかたの縮圖を渡す仕内迄也、其後江戸にては

澤村音右衛門、富澤辰十郎二度、市川團十郎、坂田

佐十郎、古市川團藏二度、中村仲藏二度、坂田半五郎

二度、二代目市川團十郎二度、中嶋勘左衛門、市川團藏、



中村勝五郎、市川團十郎 今の

櫻山四郎三郎 京にば ついて二度、中村歌右衛門、嵐七五郎 今の

江戸坂京右衛門、市野川彦四郎、山本儀右衛門、柴

崎林左衛門、嵐雛助 大坂にば

藤川平九郎、櫻山四郎三郎、中山新九郎、中村歌右

衛門、三柙大五郎、市野川彦四郎、三保木儀左衛門、

中山文七、市川團藏 今の

右團藏團十郎半五郎仲藏など、各別よく出来たり、

藤川平九郎至て宜しく、中山新九郎手づよく見へ

て、九ツ目は至て沙汰よかりし、歌右衛門大五郎な

ど至極宜しく見へたり、文七万端相應せりとも、其

中に思ひの外さくら山此役評はよかりしが、師直

にまいないすると、師直ついしやういふと、おつと

よしといふ顔を仕たり、是物好違ひ也、三ツ目もよ

く取合ふたり、九ツ目は早く終りをとげ、切落して

早替りの由良之介はよくもせしかど、早がはりの

みにて見よきとも申がたし、雛助九ツ目はさほど

にもこれなきながら、二ツ目は主人に刀を持せな

がら、革巾著にてねたばを合せ、松を伐て見せ、別

れて後小浪にさゝやき入らせて後持出る、釣臺を  
改め見よき程に持來れといひ付、衣服上下を改め、  
花道の口にて辯の音させかけゆかんとするを、女  
房袖をひかへ、いづくへと問ふに欲にふけりし師  
直、まいないをもつてつくろひ見んと行くをとや  
め、それで行かずば、殿に御手を下させるまでもな  
くと趣向を顯はし出る幕。しほ、此場は芙蓉里虹  
三人の合は、又見る事も希ならんかし

■頭書 本藏役

一蝶 茶谷 和尉 古舎丸 五粒 山男

眠獅 秀鶴 歌七 三升

本藏 眠獅

評に曰、本藏役の仕立は申ぶんもなくありしが、  
二ツ目若狭之介が無念の次第を云出し、まぶた  
をしばたゝく時、本藏も泣たり、本藏はよほど丈  
夫なりといふ、狂言なれば此所にて泣心持はよ  
ろしからず、後に松の木を切る時、カケを打たせ  
スリ足にて松の木のそばへより切しが、是は何  
事もなくつか／＼と寄て、切てちよと刀を見て  
主人へもどしたきものなるに、大工のさしかね

でものをにらむ時のやうにしられたは面白から  
ず、いつも馬にのる所をくつわの音をきかして、  
馬にのらぬ工夫は大いにできたり（以上  
頭書）

古今いろは評林卷之上 終

古今いろは評林卷之下藝品定

大星由良之助役

四ツ目 鹽谷館之段

江戸森田座は山本原四郎也、黒小袖に小紋の上下、印籠巾著迄も提て、大小とも帶し、兩手をふつてかけ付、花道の真中程にて、急度見やり、大小拔捨、本舞臺の末座に、平伏して、言葉を待てにじりよるなり

同市村座は坂東彦三郎、此役一たび辭退せしよし、達て乞はれてしからばと、初日の姿上下大小勿論さはやかにして、も、立を取、三里紙迄も當て、後に馬鞭をさし、樂屋にしらせを待つを見て、いかいといひし人もあれ共、先づ受取候からは、まかせよとて頓て出て、花道切幕を出るより、鞭を捨て、立を引さげ、馬より飛下り直にかけ付し體にて付舞臺の口までかけ付、大小を抜すて遙下で平伏する

中村座も兩家とも出せし、此藝元來仕内は古訥子を立にして作りし淨瑠璃なれば、此方にも出ざればとて押てすゝめられ、此狂言を出すも、大星にむかひて

也、勿論此役澤村長十郎後に助高屋高助といふ此時此人の狂言大星由良之助に改めて、忠臣藏四ツ目を其まゝにつとめる、茶小紋上下に脇差計をさし、刀計手に持て袴のひもむすびく出、花道の半に平伏する京にては中村十藏、大坂にては嵐三十郎、凡同じ出立にて、操の俤を守りて勤む

元來此塲が由良之助の本體也、されども狂言なれば七ツ目を見所となすものか、萬事物がたく魁ずして主人の無念を察し、我が心におさめて見ぐるしからず、心靜に此塲をおさめるを專要とする役也、よつて物を云はず、鹽谷の顔をながめ、死後九寸五歩を取納めしなに、或は血を手にひたし、舐るなどは古薪水是を仕初めしとぞ、可中など此事なく、其外もあらずとも、上使を見送るまでを先一切として

其後江戸にて是を勤るもの續て助高屋高助大に當る、二代目市川團藏、明和三戌年に始て尾上菊五郎勤て大に當りを取事、以上三度、夫より中村七三郎、澤村宗十郎、坂田半五郎、市川高麗藏松本幸四郎に成て又一度勤澤



村長十郎、中村仲藏、市川團藏、今の市川團十郎、松本幸

四郎、森田勘彌、澤村宗十郎

京にては山本京四郎二度、尾上菊五郎、坂田半五郎、市野川

彦四郎、藤松山十郎、中山文七、嵐雛助、尾上新七

大坂にては山本京四郎二度、北ノ座共ニ、中山文七、尾上菊五郎二度、嵐

雛助、藤松山十郎三保木と成、市川團藏

古納子の狂言といへど、是は七ツ目をさしていふ

なる歟、尤此場に似よりの場もありて、家老職の躰

ほど位を考へて、菊五郎を最上ともいふなるべし、

茶の熨斗目にて、かちんの上下、手をこまぬいて出

て、花道の中程に平伏する、石堂のくるしからず近

うとの言葉を待て、主人の右ににじりより、しかと

顔をながめ入、とかう申上るに詞なし、御心中の程

推察する、唯此上は御心靜に御生害をと計、後腹切

刀を巾紗に巻き納しは、初手の程也、後に出して血

を手の平にぬりてなめる事あり、上使を見送り、骸

を乗物に納め、焼香などの仕様靜に嚴重なり

半五郎は比八ツ時分と覺ゆる、少しよごれたる空

色の婦人、けんぼう小紋の上下の上へ、ものんの腹

帶くるく巻にて、大小とも柄袋引はた共かけな

がら出て、花道半迄に引はたを抜、柄袋を取りて直

にかけ付、にじり寄顔をながめ入、湊川の引言など

聞きく、腹帶を平伏仕ながらとく後短刀を共も

めんにつゝみて懷に入れる

文七なども、花道まで柄袋をかけ出半ばまでにと

り捨る、彦四郎は、上下の上へ馬鞭をさし込出る、

雛助およそ梅幸の癖あつて見よし、新七大小の下

齧とも、口にくはへ袴しひもむすびくかけ付、花

道の半ばに平伏する

如此發端より思ひよりの工夫有なん事、此狂言にか

ざる様に成たり、次に残りて城渡しの相談、可中梅幸

共諸士の口々いふを聞く間伏向て取あへず、九太夫

にいさめられてより頭を上る、始終は彦三郎十藏三

十郎など、萬事堅き事計にて人柄よく、其序に取合

ひよくも、訥子梅幸大がい同じ形にて、少くづゝの思

ひ入ちがふ計、彦四郎は城わたし評定の内、居眠りて

ゐたり、九太夫が心を引見んための思ひ入れとおも

へども、一向やくたい成物ずき、すべてかくのごとき

心得ちがひまゝある也、九太夫歸て後、本心を明し、

九太夫をさみし、樂師寺に惡口せられ、屋敷を明わたす迄は人柄多く入場也、小男にては役取合ずして、物頭以下其思はれては此間至てわろし、成ほど訥子梅幸を最上とする事尤ぞかし

諸子光明寺より歸り來て、討死せんといふを制するところ、銘々仕内心持かはる也、文七など大音上で怒り、刀を門の如く横たへ持て押へるなどよくこたへたり、又中へ押わりて入て、短刀を出し見せて、是こそ主人の御かたみ、此血が目にかゝらぬか、何足利殿に恨有て、討死せんやなど、ふせぎなどめるなど、梅幸といへど度々の事なれば、毎々其姿かはれり、新七子供のじだんだ踏やうにわざとして、はや各は我が詞を用ひられぬやうに成し歟、とくやむもおかしく珍らし

跡に一人残りて、遠く城を見かへりく、館の名残をおしむ風情にて、イしほれて幕を切るは梅幸より始れり、團十郎宗十郎今の宗十郎など、此係にて大に評よくぞ聞ゆ、京四郎人品至てよく見へたれど、此場にては少しぬるし、十藏三十郎時分只見かへりてはつたとにらみといふ、三重に合はせし計也、上方は梅

幸いろく工夫ありしともいへど、半五郎登りてより、此役銘々工合ある事ども也、半五郎が此幕は、彼にらみての三重にて幕を切、幕の外に獨り残りて、短刀を出して無念の相をあらはし、又元のごとくおさめ、何やらつぶやき指折などして、花道へ入りし也、其外銘々いろくあるといへども、右にいふ年ばいと功と、其知行の程々を第一として前後の心配りの行とくこそ首尾するともいはんや、但し團藏江戸にて鹽谷と大星との二役は格別也、よくも取廻し出來たり

案るに評して見る時は、梅幸熨斗目を著て出るも、屋敷の閉門の場所へは心なし共いふべき歟、半五郎案じ過たる様ながら、取合はさもあらんとも、されども引はたまで上使の御前迄はいかゞ共、幕前は梅幸別れの情多くて感ずる事深し、半五郎がつぶやき、指折などは早速過たりと覺ゆ、其餘是に准じてしるべし

### 七ツ目 祇園町の段

發端にもいへるごとく、此場は古澤村宗十郎大岸宮内にて、仕内を當たるを、此淨るりに取りて作り、古



吉田冠子、則古宗十郎の形を以て人形をつかひし也、去によつて、竹本此太夫かけ合にて語りしも、むかしの澤村長十郎の俤にて、青海苔もらふた禮に、太アイ太神樂打やうな物とも語り置し也、人形の衣裳紫ちりめんの著付羽織なるゆへ、大方其色を用るとはいへども、又銘々の思ひ入にて、京四郎は黒ちりめん、菊五郎は茶ちりめん、半五郎はもへぎちりめんをこそ用ひて、羽織片肩ぬぎて取締なき姿の生酔にて、めんない千鳥の出端は、京四郎一入不拍子にてよきとぞいへり、梅幸は少し拍子利過たりともいふべし、彦三郎は至てかく見へてあしく、三十郎はとかく人形をまねびたり、十藏は所詮此場は取合あしきと思ひけん、此一場は書かへて此通りはせざりし也

山良之介の本意は四ツ目にありといへども、心を亂して本意を崩さずなま酔の心持もとより歌舞妓狂言の趣意にては、此場を第一の見所とする也、後には性根と號る思ひ入は氣のかはりめともなれり梅幸數度つとめて、居つゞけの酔ごゝろ、平右衛門に相手になる間一入、此間は見よく、京四郎は常に茶屋にあそぶも、凡此俤にてうたゝとせし姿、自然によ

くはまりたり、半五郎雛助新七等少し堅き方にぞ見へたり、次に力彌來て、刀の鯉口を鳴らして、目さます間一入思入ありたり、手にてしらして、切戸の外へ追ひやりて、そつと起て手を鳴らし、中居を呼び廻り、或はかくれんぼをうたひ、謠などにて路次下駄にて、何となくけしきをかくす仕内、文七など一入思入多し、梅幸始は其有さまながら、後は力彌來ると寢入し顔にて、我が方より鯉口を鳴らしての仕内は、少し思ひ入過しともいふべしや、大きな聲をするやつではとの言葉にて、いづれも聲をかけられたり、次に九太夫の出合ひ花やかに、場を引立るといへども、是も拍子すぎては家老の場を失ふも又あり、とかく其仕内姿ともに、梅幸よく入たり、京四郎は只地を用ひて不拍子の程よくはまりたりと、かへすぐも其事のみ残れり、見立或は獅子廻しのおかしみをそへて、引立ゝし所、蛸の肴に本意を顯はさぬ仕内は、梅幸至て和らかにてよし、此間に京四郎は九太夫に、足もたされて怒る相を顯はして思ひ直す仕内あり、是は大に誤れるならん、思ひ入のみにて、是にて此場の自然と此男にあひしを思ひやるべし、夫より燈籠の灯



にて文よむ所、三保木は此所にて、道具引分させて、  
數寄屋の様なる一間を突出したり、半五郎は羽織の  
肩をはづし、其中へ入てよみたり、思ひ入尤とやいふ  
べき、笄の落たるにおどろき、左の手のよみためたる  
を取落せし思ひ入よし

おかるを梯子よりおろす仕内、何となきわるじや  
れの思ひ入、少し銘々かはりめあり、洞庭の秋の月  
さまを拜み奉ることばは、古長十郎の傷をいづれ  
も残せり、受出さんと約束して、鯉口をぬきかけな  
どする、仕内に思ひ入過る事多し、夫よりおかるが  
自害をとめ、平右衛門に供をゆるすといふて、九  
太夫を下家より引出さしてよりは、いづれともか  
はらず、由良之助殿、だんく誤り入ましたとい  
ふ、三人を押しつめるに、扇をひらいてちよとなだ  
める風情、團十郎など和らかみの功者氣持尤よし、  
往ケエといふ幕を輕くなすは、其功くの程にこ  
そあるらめ

### 九段目 山科の段

此場に太星、さして仕内はなけれ共、朝もどりの風情  
ゆつたりを好所、後本藏鍵にて突とめられしを、力彌

を押とめ出るは、羽織ばかりにて出しは、其始めより  
の出端也、近年梅幸一ト度は袴羽織にて出、後又繼上  
下にて出る、半五郎團藏等も同じ、梅幸雨戸をはづす  
工夫の言葉、本藏が耳の根へよつて、小き聲にていひ  
聞かせ、矢聲にて本藏殿と呼活る仕内などは、近正性  
根第一ともいはんや、我は幸本藏殿の、しのび姿を我  
すがたと、虚無僧姿になる所は、或は九寸五分を額の  
裏にかくしたるを、お石にとらせなどする事儘あり、  
雛助今の宗十郎など、さしたる仕内もなくして、此所  
見よきとぞ沙汰せし也、半五郎は爰に力彌に云付け、  
草鞋をはいて後をあづまからげにして、綿勘進とも  
いふべき姿になしたり、異様ながら珍らしくも見へ  
たり、新七など尺八よくまはりて、爰にて拍子のよき  
もかへつて日立てよろしからず

### 十段目 天河屋の段

天河屋の内に長持より出る所、京四郎半五郎近年菊  
五郎等、天河屋と二役にて外役よりつとむるといへ  
ども、雛助此度の新七など至てへり下りての仕内、こ  
していづれともかはり目なく、論ずるにも及ばず

### 十一段目 畝討の段

至一菊五郎、此場見へよく、力彌が右の手にともし火をもちたるを、呼かけてとがめ、敵に出合ふて、左に持かへる歟と呵りし思ひ入など、格別に感じさせたり、其外かはりのさしたる仕内の有べきやうもあらず

近來すべて、衣裳物好萬端本間事を用ひ初たり、甚面白からざる事、至て上手の好まぬ所なり、元祖訥子大矢數の狂言に、はじめて大岸役を勤めし時、白地の上下に城のさいしきもやうの衣裳を著たり、是にて見物事のかぶき狂言といふ事をはづさぬ上手名人の場を知るべし

山良之助役

元祖訥子 梅幸 可中 古薪水 少長

古市紅 眠獅 獅々吼 杉曉 三升

市紅 素桐 訥子<sup>二代目</sup> 由男 今訥子

秀鶴 錦江

由良之助 芙蓉

評に曰、師匠梅幸三回忌追善として忠臣藏を出し、由良之助役は、近年追々工夫思ひ入を付ての仕内のへ、此度は何もせず、正本の通りを勤めん

とありしを、眠獅それも然かるべき歟、しかし忠臣藏狂言、毎々大入りを取、大當りなるは、役々色々物好あるゆへ、此度はどふするぞといふて、諸見物くんじゆする事なれば、やはり新意をくわへたる方も然るべしと、相談ありしよし聞傳へたり、是は芙蓉の心持もおもしろく、又眠獅は新らしき思ひ入は、宜しからざる事をしりながら、芝居はんじやうを祈る志ありて、いやみを知つてする所は、英雄人をあざむく場有て、此了簡も可成るべし、扱初日には、四ツ目かけ付の場、大小とも下緒を口にくわへ、袴の紐を結び結びの出端、ちと齒ぶしのつよき大星なるとの評、鹽谷切腹の間、上使もあれば大に平伏してゐねばならぬ所なるが、ちと頭が高かつたなどとのさたもありし、鹽谷しがいをのり物へうつし、焼香をする場に、自身最初に香をつぐはよけれど、一炷して又炷する時、いたゞきてのり物へすぢかひに向ひてせられしは、かほよよりさきへ焼香する様に見へてきのどくなるもの、夫よりかほよに焼香なされといふ時、御焼香といふ

て舞臺をとんとたゝかれたが、是はかほよ役しみ付てゐる故、氣を付ん爲かしらねども、ちとげうさんにてひれつに見えたり、其外諸士大せいに焼香させたり、しうしやうをかくさんと、鼻をかみし事もあれど、眠獅が石堂にて、同じ思ひ入ありし故か、後にはやめたり、扱かけ付の出端も一通りにて出、焼香もかほよ一人計にて、何事もせず思ひ入事をのこらずぬかれしゆへ、甚見よく有しが夫だけさみしきゆへ、場の請はさもなく、是にて最初聞つたへたる、芙蓉眠獅の談話相當せり、城わたしの跡、諸士いきどをるをせいせんため、わざと大聲上て、我いふ事を用ひぬと、花道にて子供のする様に、じだんだをふまれしが、是もあまりつたなくありしが、後にはせりふばかり早口にいふて、さはがれなんだもよし、七ッ目ぎおん町の場、平右衛門にあふて、扇をつかひくゝゐねぶり扇を落しながら、ひちが張つてあつたが、是はがてんの行ぬ仕やう、全躰ちと遊び様が手に入、粹過て見えたり、おかるを身うけせんといふ前、すこしぬれ事を用ひ、たき付て

の仕様は、身請せうといふうつりよし、大詰かも川で水さうすいをくらはせといふせりふの時、水の字をわけて、かも川で水くらわせと、平右衛門にがてんの行様に云はれしは、耳立てよろしからず、諸人がしりぬいてゐる事なれば、たゞやすらかにせりふをいひたい所なるを、平右衛門ハアトいふて、顔にて幕を切、由良之助顔を横へなして、平右衛門が幕を切りしは、眠獅おとなげない仕様、是はやはり由良之助が幕を切らねば、工合宜しからず、九ッ目本藏せつぶくを見とゞけ、大丈夫といふて、工夫を是ならば見せ申さんと、庭におりるはちとはがねがうらへ廻りし氣持なり、雪の五りんを見せる時、本藏に突込ありし鍵の柄先を持そへ、後むかすはきめこまかに氣が付過て面白からず、すべて是に限らず、かぶき狂言と云場を、取はづさぬ様にして、こまぐしたる性根事は、やめたきもの也、こも僧姿にならないとして、定紋付の衣裳に氣が付、上著をぬいで下著の上へけさかけて、尺八をふき、淨るり文句に合し花道へはいるは見物大に悦びたれど、



餘り人形の身ぶり過てうつとしうありし、十段目大切まですべて、師匠梅幸の趣をよくのみこみつとめられたり、由良之介にはちいさいの何のかのと沙汰もあれど、是は人間の大小によりしものにもあらねば、新七よりからだのちいさき嵐文五郎が勤めても、仕内がよければやつぱりよいといふ物なれど、しかし先見物するものなれば、少しは見えも入る物なれば、可中の梅幸などいふかつこうが至極せりと思はるゝ、惣座中の手柄といへど、先此度の大當りは、きつと師匠の追福にも成べし(以上頭書)

大星力彌役

江戸三座は  
岸田幸太郎、古佐野川市松、菊川大吉

京にては三代目  
榊山四郎太郎

大坂にては  
嵐三五郎

是はたい見へた通りの役にて、いかにもしとやかに見えよきを専らとし、場によつていさぎよく見

へる事計也、佐野川市松よろしきとぞいへり後  
江戸  
郡小富士、坂田吉之丞、市川辨之助(今門之介也)、澤村菊治、

今  
龜谷重次郎、澤村四郎五郎、山下八百藏、坂東彦三郎、森田又次郎、坂東米五郎、山下松之丞、瀬川吉次、瀬川三代藏、芳澤三喜藏、瀬川徳次、岩井春次郎

京大坂にては  
四代目

嵐三右衛門、澤村國太郎、生嶋金藏、中村小

才三、市川吉太郎、三樹徳次郎、姉川菊八、生嶋柏

木、三枅松之丞、嵐村次郎、中村八重八、染松七三

郎、嵐三右衛門、三枅次郎吉、芳澤いろは

二ツ目は人形の次第とも、四ツ目由良之介の来る

迄に、心ばかりの仕内、七ツ目ちよとながらも、は

げしきを専らとし、九ツ目さのみ仕内もあらね共、

全體見えを好む役なり、彦三郎國太郎門之助徳次

郎柏木などの評尤よし

頭書力彌役

其答 漁江 柏木 古三右衛門 市松

門之助

力彌 龜丸

久しぶりにての上京、先年のあいごの若の事を  
思ひ出す計、力彌役さしたる事なく、大切の鍵の  
仕合ひなどはり、しく見えしました(以上頭書)

早野勘平役

始江戸にては

市村座は

嵐小六森田座女形

尾上菊五郎同女形時

中村座は  
中村七三郎

京にては  
竹中兵吉

大坂にては  
嵐三十郎

小六大にあたりを取し也、菊五郎若盛りの時にて至てきれい也と噂す、七三郎もとより上手のやつしの部なり、兵吉少し堅過しこも、三十郎も凡同じ、三ツ目おかるとの色事より、伴内と互にだまし合、後御殿の騒動を聞て、裏御門をたゝいて様子を聞、腹切らんとするを、おかるにといめられ、其場をあら事めかして立のく所は、和らかみを専らとする也、五ツ目狩人の場は、さして仕内もなく、我内へ戻りかゝり、女房の賣られ行をいぶかしがりて、後親十一兵衛を、我が手にかけてしかとおどろき、郷右衛門彌五郎に耻しめられてより、腹を切る所仕内さまへ、又母に恨らみらるゝ間など、何となく見所有役也、され共此狂言中、此場はしゆみし場にて見にくきト場也、依て姿にてうつきりと

さゝねばめいる様也、爰に心得もある歟、是により女形の方にあたりめ多くある也、其後江戸にて

市川升藏、古佐野川市松、市川八百藏上四度勤、坂代日

東彦三郎、尾上松助、大谷廣治、岩井半四郎、菊五郎後又

立役にて、嵐三五郎、市川團十郎、尾上紋三郎、市川門之助、澤村宗十郎、松本幸四郎、小佐川常世

京にては、染松七三郎、尾上紋太郎、嵐三五郎、姉川みなと女形時

前髪にて、市野川彦四郎、嵐七三郎、中山猪八、淺尾

汶藏

大坂にては、坂東豊三郎、山下又太郎、古中山來助、嵐雛助女形の時

嵐吉三郎、中村喜代三、嵐文五郎、染松七三郎、嵐

山十郎

始江戸にて小六幕際にて腹切ながら、とんぼうか

へりして大にあたりたりとぞ、腹切る迄に一徳が

せりふを聞てより、其術なきをしのご間が狂言也、

只和らかみを第一とするのみ、菊五郎彦三郎八百

藏半四郎門之助三五郎古染七みなと豊三又太郎ひ

な介吉三郎など至て宜と評せり、其中にも喜代三

仕内只ひこゝして、目立てあしく覺たり

勘平役

古魚光 胡録 梅幸 古盛府 二代目薪水

勘平 來芝

評に曰勘平役は度々勤めしゆへ、四ッ目おかる  
としやらくらは手に入たもの、鹽谷との早がは  
りは皆我を折ました、段切の立はお骨折ながら、  
御商賣違ゆへどつともいわなんだ、おかるがか  
かへ帶を二つに切て、ほうかぶりにして立のく  
は、心中の道行ゐて氣のどく也、五ッ目六ッ目  
不出は残念、しかし鹽谷にて切腹して、勘平にて  
又腹切も重ねんの物なれば、ぬけたるはけつ  
く氣がぬけてよいとのさたもありし(以上  
脚書)

おかる役

江戸にては  
吾妻藤藏、古佐野川市松、古中村糸太郎

京に  
中村松兵衛

大坂に

古田万四郎

一體の此狂言一日のつもりして見ては、戀をする  
ものは師直と勘平計也、堅い狂言といへども、趣向

に愛を持て、七ッ目の和らかみに、戀なくて戀の情  
をふくみてのみ、戀の有無を覺ぬ計の出來狂言也、  
市松糸太郎松兵衛万四郎共其比の情一入深し、其  
後江戸にて

又も  
藤藏、二代目瀬川菊之丞二度、中村松江里好と改て又  
ともに五度、尾

上松助、岩井半四郎三度、中村野鹽、小佐川常世、

中村糸次郎二度、今の菊之丞二度

京にては  
嵐富之助、澤村國太郎三度、中村糸太郎、姉川みな

と、山下八百藏三度、山科甚吉

大坂にて  
市村佐野八、岩田染松、澤村國太郎、尾上糸助二度、

市山七藏、山下八百藏、芳澤いろは二度

三ッ目文箱持出る所、或は振袖の時もある也、此間  
に大きに戀の情をもたして、幕前は勘平と共に少  
し計立をしまへ、六ッ目身うりの場、戀とうれいに  
意味合を持、七ッ目筈を落してより、山良之助との  
せりふには、少しおやまの姿をあらはす、じたい其  
功次第にてわつさりとさす役也、平右衛門に親夫  
の死たる噂を聞て、癪に取つめられ氣をうしなふ  
事、大がい今では同じ様に成たれども、六月晦日と



聞て、母の狀共出し、日を見合せて誠にせぬ事などは、今の菊之丞半四郎などより出て、芳澤いろは、此情をうつす事甚見よし、又由良之介の言葉を聞て、扱はと思ひて後に癢をおこす事も、近頃のわざごと、はなれり

**頭書**

おかる役

其虹 鯉長 元祖盛府 其答 杜若 古路  
考 今路考 巴江

おかる 其虹

評に曰、一比は評もなくいかゞと案せし所、大坂へ下られてより、あの地にてめつきりと仕上られ、大立者と成ての上京、當時の花方いや又めつきりと仕上られたり、こせついたる事なきゆへ、大芝居の立者らしく、末頼もしう存る、おかる役は三ツ目ふり袖にての出端、ちとゑつくろしいとわる口もあれど、先美しいにて取かやし、きつと色氣有てよし、七ツ目は成程やしき出のこしもとの新嫂にて、ぎおん町せんせいの人素人と見へ、おぼこでもなくなめすぎもせず、其程がよく入ました、ゆらの介としやらくらも花やかにて

よし、身請と聞悦びわらをでなどの所も、しやらく過ずして、夫より悦びの餘り、狀を認め親里へやらんとして、平右衛門にあひ、とうわくしてかんざしを多くさしゐるをぬき取てかくす思入は、まへどもせしかども、此度の其虹の仕様は、甚實情に見へてよし、親與一兵衛死たりとき、ほんまかへとおして尋てのおどろきの仕様もよく、勘平もさいごと聞、びつくりして氣を取うしなふも、近比は誰々もすれどみじかくしてよし、嘸あいたかつたで有ふにといふ時、ひしごき帶をくひさくもあしからぬ思ひ付、平右衛門がころさんといふ時、大におどろき、花道の方へかけ行、夫よりこわがつて、大小ともにあづかつてより、つか／＼とよりて平右衛門にしがみ付、兄さん用は何じやとせり立いふ物ずき至極できました、始終此度の様に出来る物ならば、上上黒吉の代物ぎおん町の段計は、鯉長も其答も及ばざる出来、先此度の忠臣藏第一の出来といふは、其虹のおかる成べし(以上頭書)

與一兵衛役或は十一兵衛とも

始江戸にては  
古嵐音八、鶴屋南北、市川團五郎

京は  
坂東助三郎

大坂は  
市村三甫右衛門

娘の不便さに娘を賣て、夫の役に立んと思ひ、其金  
を持て通る、山中にて定九郎に殺さるゝは、さして  
性根と云場もなく、物哀れ計なる役也、其後江戸  
は

市川新四郎、岸田東太郎二度、市川團五郎四度、佐川

新九郎、古坂東三八、富澤半三郎、山下門四郎、山

下又太郎、市川團藏、音羽次郎三、中嶋三甫藏、中

山清次郎、大谷團八、中村勝五郎

京にては  
中村正藏、嵐藤十郎、市川宗三郎、松本友十郎、篠

塚惣三、尾上宗九郎、柴崎林左衛門二度

大坂にては  
嵐藤十郎、藤川龍左衛門、市川宗三郎二度、藤川東九

郎、嵐七五郎、加賀屋歌七、藤川十郎兵衛

評するにも及ばねども、よき役者よき程に殺さる  
るに惜みあり、尤情を持計也

### 第十一兵衛役

いづれも相應

十一兵衛 榮藏

評に曰十一兵衛役割はあれど、五ッ目不出、是は  
さしたる役にもなければ出ぬかたもよかるべし

(以上  
頭書)

與一兵衛女房役

始江戸にては、八代目

花井才三郎、市村羽左衛門、澤村源次郎

京にては  
竹中兵吉

大坂にては  
片岡仁左衛門

是もさして評する迄もなけれども、聲をあはれみ  
娘を不便がるより、親のもどらぬ案じと娘のいと  
ま乞のかなしみの中、聲のおどろきし、けふりより  
うたがふて、親を手につけて、殺したる恨み泣、元來  
見物はよく知りて、役者はしらすにする仕内なれ  
ば、情すくなうして厚くするゆへ、親父の役よりは  
仕内深し、後江戸にては

松山三十郎、富澤辰十郎二度、市川團五郎、坂田半

五郎、古坂東三八、中村少長、尾上松助二度、山下

門四郎、山科四郎十郎二度、市川團藏、中島勘左衛

門、松本小次郎、江戸坂京右衛門、尾上紋三郎

京は

澤村言次、富士松山十郎、大谷友右衛門、坂田半五郎、山下幸四郎、山下六三郎、嵐菊次郎、嵐三五郎大坂に市野川彦四郎、竹中兵吉、松山三十郎、嵐七三郎三度、嵐雛助、嵐三五郎、姉川大吉

元女形にて今立役と成候者、此役等をつとむ、口甚情あり、半五郎は至てむさく、田舎のば、こしらへにせしは、思ひの外情ありし、少長松助などはよし、富士松雛助三五郎などは、至て和らかみ有て恨る情に見所多し

第十 兵衛女房役

名曉 雷子 古少長 三朝 眠獅 素桐 朱藤

十一 兵衛女房 芙蓉

評に曰、十一兵衛女房と役割なれども、短日の砌故最初より五ツ目六ツ目ぬきての興行、此役は雷子松曉など請よくありし事なれば、白石嘶の母親役をつとめられたれど、此は、のかはりめを見たいばかり

(以上頭書)

となせ役

始藤田座は市村座は

中村座は

嵐小六、嵐富之助、澤村小傳次

京に中村八重八

大坂にては富澤喜代崎

此狂言にて女形での立者役也、二ツ目ちよとながら本藏が馬をこゝめるは、操り歌舞妓ともに同じ俤ばかり、九ツ目は出端より末迄出詰て、いろ／＼の情ありて、尤見えを大にふくむ役也、小六富之助など先手本とも成べき姿也、後江戸にて

嵐和歌野、姉川大吉、中村松江三度、尾上菊五郎三

度、森田勘彌、吾妻藤藏、芳澤崎之助、山下金作、

今

三代目

四代目

尾上民藏、市川團藏、瀬川菊之丞、芳澤あやめ、小

代目

佐川常世、岩井半四郎

京にては

中村富士郎、中村喜代三、尾上菊五郎、澤村國太郎

二度、佐野川花妻、藤松山十郎、嵐雛助、山下金作

大坂にては

二代目芳澤あやめ春水、岩田染松、佐野川花妻、尾上

菊五郎、姉川大吉、藤松山十郎、三柳徳次郎、中村

富士郎、三保木儀左衛門

此役富士郎常世菊之丞半四郎國太郎あやめ金作徳次郎など、女形にては屋敷風俗にての思ひ入を専



らと見せたり、其中にも大吉は、雪ふりを女合羽にて出る也、一しほ其情あり、由良之助と二役にて出るは、梅幸より始りて、雛助團藏富士松など一しほ屋敷風俗の係うつる也、襲にて出て後、祝言と聞て襲替替るなどの思ひ入れはよけれ共、末に至りては本藏に別る、時迄も、やはり額綿にては取合ずもや有なん、娘の情を察して、身につまさるゝなどは位の程々也、金作大小を袋に入ながらもたして、門の口にて佩は仕内珍らしき姿、此人よくはまりたり、地狂言の多く入場ゆへ、かへつて慶子にてはうつきりとせぬ係もあれど、先富士郎をよしとす、梅幸手に入てぞ見へたり、末に至りては色々の仕内、近北出来たる也

戸無瀬役

杉鳥 三汐 慶子 梅幸 古春水

となせ 里虹

評に曰となせ役もアイタ／＼も餘りくど過たり、本藏が衣裳を改め、かけ行を引とゞめ、様子を聞て承知して、お出遊ばせといふは、是迄の馬の手綱をとらまへ、ひきとむるよりは成ほど家

老の奥方と見えてよし、九ツ目おいしとあいさつの間は、成程女らしく見へましたれど、小浪を切らんとのおうれいの所は、見物にかなしみかこず、もそつとおもしろかと、諸人の思ひなしか、さしての事なく本意なし（以上頭書）

小浪役

森田座は 山下岩之丞、市村座は嵐松五郎、中村座は瀧中富瀧

大和山仙助

山下六三郎

二ツ目ちよと出れども、力彌と見かはす計ながら、しほらしきを第一とす、九ツ目只可愛らしき計、下司近うならぬ様が仕内なり

後江戸にては 三條龜太郎、中村松江、松本七藏今の岩井半四郎也又半四郎に成ても訥、

中村富次、山下京之助、市川門之助、瀨川吉次後蜀之丞に成

とむ、瀧中岩之丞、坂田菊の井、中村萬代

山下萬菊、市川辨之助、芳澤五郎市、山下松之丞、

中山富三郎

京にては 山本岩之丞、嵐松之丞、尾上糸助、藤川山吾、澤村

宗十郎立役之時、中村萬勝、澤村千鳥、山科甚吉、嵐

直藏

大坂

芳澤万世今の四代目、桐野谷秀松、花桐豊松、市川吉太

あやめ也

郎三度、中村槌五郎、嵐三右衛門、中村野鹽、芳澤い

ろは

**頭書** 小浪役

松之丞 五嶺 今訥子 路考 杜若

小なみ 直藏

嵐直藏殿は是迄子供芝居の立者にて、評判を取  
て、去春は薄雪姫などは甚しほらしくよく仕た  
り、此度大芝居へ初舞臺、小なみ役はおぼこらし  
い娘なるが第一の所なれど、此度の仕内はとか  
くりこうに見へて、かしこ過たり(以上)

おいし役

江戸三軒

嵐吉彌

尾上菊五郎、二代目春水あやめ

京は

浅尾元五郎

大坂は三代目一鳳

あやめ其比崎之介也此人此役其後も二三度も勤る各評判よくぞ

聞えたりさして仕内あらぬ共がらうの奥方の浪人して

の係をよく

其後江戸にては

吾妻藤藏、古佐野川市松、中村秀松、嵐小式部、

後の市松、山下金作三度、中村富士郎、小佐川常世、中村

近い比は

桑次郎三度、今の岩井半四郎二度、中村里好

京にては

山下六三郎、桐野谷秀松、姉川みなと三度、嵐菊次

郎、姉川大吉、山下八百藏

大坂にては

姉川大吉二度、三軒徳次郎、市山七藏、山下金作、

山下龜之丞

此役操淨瑠璃の通りにて、仕内なくして恰好取合  
ひにくき役也、凡由良之助 妾の様に見へるもの多  
く引こなしての仕内多し、姉川大吉調子といひ、口  
姿共に至て見よし、とかく二代目あやめ元五郎な  
どを可也といふべし、幕前に成て祝言の取結びさ  
せたりなどいそがしき中にての思ひ入多きのみ  
也、襲著て出る所になれば、各よく見ゆれ共、幕明  
のすがたは大方おやまの受出されて、入られてゐ  
るやうに見ゆる方多し

**頭書** お石役

春水 一鳳 浅尾元五郎 桐の谷秀松 讃

多 古園枝 杜若

おいし 其虹

評に曰、おいし役はうつくしきより、ちと年増なる一鳳などの趣ある方よし、ちとはしたなくもありしが、みなとよく取合たり、此度其虹もやしき風の趣にて、かづらもふくわけにして、飛色ちりめんに黒じゆすの帶の物好ながら、兎角うつくし過て妾宅めきし也、となせとあいさつの間、地向の調子にて取合わるし、やはりてうし高くどこまでもせりふの聞ゆる様にありたきもの也、祝言さゝんと云て立出る時、著物の上へ又著物を著て、帶せずうちかけにて出られしは、何ぞ故實をしられて、わけの有事やいかゞ、もし急なる場所也とて、帶のしらぬ間は有まじ、後にうちかけも上ぎもぬぎてしまはるゝ時、下にきてゐる著物に、帶も最初とはちがふて有しが、夫ほどの間もあらば、まんぞくに著かへて出たきもの也、扱となせに本藏が首もらはんと、三方を持てつめよせる時、あまりつよ過はしたなき仕様、どふかねだれものめきたり、すべて此一段は氣持違にて、全體役が合ませなんだ(以上頭書)

### 大田丁竹役

江戸初三芝居にては  
大谷龍左衛門、宮崎十四郎、市川團太郎  
京大坂は  
篠塚惣三、片岡仁左衛門、藤川半三郎事也

其比は平敵の仕内にて、左のみ是ぞといふ程にもなき役の所、近年は色々と敵に道外を取交りての思ひ入つよし

其後江戸  
市川勘十郎、坂東礪五郎、松本友十郎、中村大太

郎、富澤半三郎、松本大七、中村薦右衛門、坂東三

八、中嶋勘左衛門、大谷徳次、江戸坂京右衛門、嵐

音八

京にては

笠谷又九郎、桐嶋儀左衛門、松本友十郎、山下俊五

郎、浅尾國五郎、桐山紋治、中村岩藏、

大坂にては

桐野谷權十郎、坂東岩五郎三度、中村歌右衛門、中

村次郎三、今村七三郎

此役貧乏醫者を情にして、一たくみ有て道外にて無理に去狀書す計が趣意なれば、至て貧なる體にて、藥の紙袋たばこ入を持、もめんの居士衣にても出る、又四枚肩で來て、皆雇人と見せる仕内、思ひ思ひに有る、門口へ儀平に投出されてより、狂歌をしたりする事は、岩五郎より初る也、此役は凡此岩



五郎に越す仕内は有まじ、敵を情にして、至て貧乏にて能狂きの思ひ入ありて、甚手に入し事を感じる計

了竹役

岩子 九十

了竹 虎岩

評に曰、了竹役は近比色々工夫付て、此度も口のり物にのりて出、とかくりきみすぎてせわしなくて、見物もいきどしくあるし、是は大坂にて岩子がせしが第一ばん也、しかしながら此度の仕立こしらへはよし(以上頭書)

了雅伊五役

始江戸にて市村座は  
森田座は此役なし、中村八十太、北國屋京五郎

大坂にて  
坂東助三郎

嵐勘三郎

此役さして仕内もなし、すべて芝居のあほうは、地にかしこき所顯はるゝ様子多し、根からのあほうと考てする事専らならん、おそのゝ相手になる間をこそ、狂言共思ひの外、塲をしめやかにせぬ事の

考有るをこそよしとて

其後江戸にては

澤村宗十郎、市川久藏、嵐音八、中村傳吾、松本秀藏、大谷徳次、仙國彦助、中村傳五郎、大谷團八、

大谷廣八

京にては

嵐彦三郎、中村十藏、藤川山吾、大和山林左衛門、

江戸坂正藏、玉川此藏、中山猪八、嵐音八、嵐染

七、

大坂にては

大松百助、岩井春五郎、坂東市松、桐山紋次、嵐七

三郎、嵐文五郎、中村次郎三

了伊五役

古和考 助三郎 今舎柳

伊五 嵐染七

評に曰、此度はあまりちやり過もなく、あつさりとしてよし(以上頭書)

天河屋義平役

江戸森田座は市村座は  
岩井半四郎、二代目大谷廣治、古市川海老藏柏庭

京にては  
二代目榊山四郎太郎

大坂にては

姉川新四郎

此役打揃ふて立者の勤し役也、半四郎は功有なが

ら相應せず、廣治取合よし、海老藏仕内は各別なりと評判ありし、さして仕様に替りめもあらねども、名人故に一器量ある俤なり、京での小四郎もよきとはいへど、新四郎又役に相應せし也、元來操人形にても、少し男だてめきし俤も有るといへども、義心のみを丈夫にして、後妻がもどつてよりのせりふに、地狂言の情を専らとする也、其後とてもつよみを専らとする事、凡新四郎を形ともなりしもの也、其後江戸にては

雷藏事

市川升藏二度、二代目市川團藏、今大谷廣治二度、坂田

半五郎、市川八百藏、中村仲藏、市川團藏、森田勘

今の

彌、市川團十郎

京にては

山本京四郎二度、尾上紋太郎、坂田半五郎、市野川

彦四郎、坂東滿藏、中山來助、嵐三五郎、嵐雛助

大坂にては

山本京四郎、藤川八藏、三升大五郎、市野川彦四

郎、尾上菊五郎、三保木儀左衛門、中山文七

升藏半五郎などは海老藏の俤を残せしとも、仲藏今の團十郎等、功者の思ひ入まゝありて請よくも有し也、初の團藏手強くして當りを取し也、京四郎

尤相應せり、彦四郎袴を付しは、實意の役柄の約束を合せしものぞとも、其後菊五郎町用を兼て出品に、袴を付て行し也、其後捕人の相手に成所、存の外手丈夫にて和らかみをふくみて甚見よく覺へし也、其後お園が戻りしより、去狀をもどす所のせりふ、尤客あるゆへながらも、茶を焙じてゐてのせりふは、性根ともいふ歟、機轉の利たる様には見ゆれども、手に持をもたねばならぬやうにて、少し狂言の仕内うすき俤も見ゆる、勿論半五郎も大根と大根おろしを持てせりふをしたり、其様子きれいにて見よくもあれど、何も持ずに同じくばせりふしたきものなり、彦四郎尤仕内和らかにてよし、八藏は手丈夫ながら長持の上へのりし所は、立派は此上もなければ、少し男作めきてよきともいひがたし、文七は其中に和らかみありてよし、儀左衛門小兵ながら、功者に取廻したり、雛助尤男相應して、仕内丈夫にてきれい也、尤極りし通のこしらへにて仕内萬端をなしたるは、かへつて新意にて上手の程を顯したり

### 頭書 義平役

古新四郎 柏庭 古十町 古市紅 梅幸  
可中 可慶 眠獅 柏車 十町 三升  
秀鶴 杉曉 舍柳

義平 眠獅

評に曰、此度は何も思ひ入なく、上るりの通の仕立にて甚宜しく、長持の上へ上りし所のりつばは、さすがの大立者と見えたり、先年古八甫せしが、是も長持へ上りし所見えは此上もなく見事に有しが、ちと男作めきたる方多く有し、此度は四役の内の出来なり、色々工夫の付た上を、此一役計何もせず正本の通をせしゆへ、かへつて新らしくてよし(以上頭書)

義平女房お園役

江戸始は  
吾妻藤藏、尾上菊五郎、瀬川菊次郎

京にては  
淺尾元五郎

大坂にては  
芳澤崎之助

菊次郎至てよくはまりし仕内也、菊五郎其比若手にて、尤請よく元五郎藤藏は相應とも、崎之助は姿とともに役甚相應せり、此役もとより伊五を阿堵

にして、子をしたひ來てかなしむ、中におかしみを持、其後のせりふにて、夫婦の情を専らとする事を、一入とする役也、其後江戸にては

萩野小才三、古佐野川市松、吾妻藤藏以上三度、萩野惣吉、尾上松助、山下金作二度、尾上民藏、小佐川常世二度、岩井半四郎、二代目吾妻藤藏、中村里好京にては、中村富十郎、中村喜代三、中村糸太郎、三井徳次郎、姉川みなと二度、澤村國太郎、山下金作大坂にては

三代目芳澤あやめ二度、やはり初の崎之介也、嵐雛助、尾上糸助、中村喜代三、山下八百藏、中村富十郎、山下金作

各立者の仕内なれば、銘々少しづ、思ひ入も無理に、内へはいはる仕様、親の惡をうとみ、夫の機嫌をはかりかね、子にあひたがるの情、功次第のみにてかはりめも見えず、相應不相應にて見よきと見にくきとある也、古市松今の金作など又は喜代三雛助みなと八百藏などは、甚姿相應せり、慶子功者に、情あるといへど、形夫程に取合ずともやつぱりあやめ、其中にてのよきといふべし

頭書 お園役



仙魚 一鳳 一幸 里虹 古園枝 今盛  
府

おその 里虹

評に曰、年配かつこゝ義平女房に甚よく取合たり、しうたん申ぶんもなく、さのみ是はとかんしんする程の事もなく、持まへ一通の事にて有し、久々にての上京故、京中一統大イに待かねゐし所ゆへ、何でも目ざましき事あらんと思ひし所、大塔宮以來さのみの事もなきゆへ、どつとしたる沙汰もなし、慶子一鳳をよくのみ込し仕内にて、手あつき所もしほらしき所も兼備したる藝成しが、近比はちとせりふなどには、花曉のおもかげをうつさるゝゆへ、折にはつよ過たる所あつて、女の情うすくなりし、此所は工夫有たきもの也(以上頭書)

寺岡平右衛門役

江戸始は岩井半四郎、津打門三郎、中村傳九郎

京にては嵐七五郎

大坂にて山本小平次

半四郎天河屋とはちがひて相應せり、門三郎しごく當りを取りし也、傳九郎も相應の評を取たり、七五郎尤よし、小平次は人形をうつすのみにてさのみよきともいひがたし、此役は甚むづかしき役也、五兩に三人扶持の足輕にて、しかもよほど浪人してゐての俵を作るが専也、其後江戸にて

鶴屋南北、澤村喜十郎二度、市川團十郎二度後の海老藏也

古坂東三津五郎、古坂東三八、古市川團藏、大谷廣

治二度、市川八百藏二度、大谷友右衛門、中村仲藏、

坂東又太郎、古坂田半五郎、市川團藏、江戸坂京右衛門

衛門

京にては櫻山四郎三郎、今中村十藏、今かいや歌七也中村歌右衛門、坂東滿

藏、江戸坂京右衛門、市川才藏、中山來助、嵐山十

郎、嵐雛助

大坂にては藤川平九郎、櫻山四郎三郎、藤川八藏、嵐吉三郎二

度、坂東滿藏、三保木儀左衛門、中山他藏、今の藤川八

藏

團十郎廣治形はまり評判ありて、ふたゝびもつとむ、古團藏功者専ら也、八百藏奇麗にして評を取た

り、三津五郎前後のしまり、上方の愁ひを持込みて、役はまりて請よく、仲藏半五郎など尤評よし、櫻山彼足輕の風情をよく心を込れたれども、凡此役にせうぶ革のはつびを著て出るが人形の通り也、されども足輕とのみ氣が付て、しばらく浪人してゐたる足輕と心の付ぬ風情もある歟、平九郎黒加賀の單羽織を著て出しなど、思ひがけなくよく取合ひしともいふ歟、しかし衣裳の物好は、二段の事なればやつぱり有ふれた通りの人形の著たるせうぶ革染のものを著て、仕内を足輕の情の専らと有る様に仕たきものなり、當時のならはしとは云ながら、近年すべて衣裳物すぎ過て、歌舞妓狂言といふ場うすく成たり、由良之助寢入たるを見て、三人を鎮め置、二人のこりて枕をあてがひ、ふとんを著せはいる所に、いろ／＼あり、ちり紙を枕にあて、入は平九郎仕はじめたり、八藏吉三郎ふとんの表をかへし著せて入る、尤吉三郎鍔刀をぬいて見たるは大に丁簡達成べし、儀左衛門は中居を呼て來てふとんを著せさせしはよくぞ入たり、今の八藏大がいといふべし、他藏思ひの外に此所よく仕

こなしたり、雛助も中居を呼ふとん著せさせて、もしや寢入たるはうそにてもやと、幾度も同じ事いふて見て、得と寢入たると見て案じ入し風情にて、刀をそつとよせて置所、又工夫付たり、八藏は願ひ書を手にもたせはいるは、少し行過たり、夫より妹おかるにあひて、忠義に身を賣られたるをほめて納得させ、由良之助の心をうたがひ、勘平が女房ともしらず、請出すは誠に性根のくさりし歟といふ時、おかるが御臺よりの文を見た咄しに、一圖に忠義にこつてのうたかひゆへ、それと聞て思はず嬉しがりて、おぼえず奥を拜してそうとせず、忠義に妹の事もわすれ、思はずしらずうれし涙をながして、奥にゐる由良之介のかたへ向て、辭宜する仕内は、雛介工夫よくなしたり、與一兵衛勘平の死たるやうすを語り、あるひは癢の介抱などせしは凡一通り也、供をゆるすと聞て、椽よりおどろき落たるなどは、平九郎が俵をうつしたれど、場當り過たり

頭書 寺岡役

古舍丸 逸風 門三郎 五粒 古八甫

眠獅 市紅 三升 古平久 古中車 是  
業 秀鶴 杉曉 十町 南雅 舞鶴 今  
市紅

平右衛門 眠獅

評に曰、場の見物一統に悦びしが、ちと場あたり多く見えたり、おかるをころさんとする場、最初は思ひ入事度々なりしが、後はみじかく成て見よくありし、ゑりもとをつかまへ、さしころさんとするは出来たり、後由良之介にあふ所、椽より落んとおもふ思ひ人あるゆへ、そばに平伏してゐるはつまらず、はるか下り平伏有たきもの也、さい初の由良之介を、うやまふ様にては、ちとそばちかく出過たりと思はるゝ、由良之介が九太夫をちやうちやくする内、はがゆがり、にぎりこぶしにて、九太夫をくらはすまねは、場當りを好たり、此七ツ目まくを平右衛門が顔にて切て、芙蓉に切らさぬは、シテワキノ了簡うすくありし(以上頭書)

古今いろは評林卷之下終

其外尾州名古屋、伊勢の山田、高田、松坂、桑名、讃州金毘羅、備中の宮内、或は宮嶋、南都、堺、紀州などはよく芝居を見極めて、役者の位相應の評をなす事、誠に三ヶ津の見物も耻るは、是等にとゞめざれども、事繁ければ、三都を以て其差略を記す而已諸國にて芝居興行の内にも、名古屋にての忠臣藏數多度ゆへ、役割を附録にしるす



假名手本忠臣藏

役割

寶曆十二年壬午三月廿四日

大須芝居

座本

千崎彌五郎

坂東菊藏

大星力彌

小倉山百助

若さの介

芳澤市十郎

原郷右衛門

柳山次郎三

よくし寺

萩野六三郎

了竹

豊松かもん

小なみ

佐の川宗吉

おいし

津打門三郎

となせ

三保木七太郎

師直

藤川金十郎

九太夫

嵐三四郎

定九郎

今五郎事

おかる

佐川今右衛門

おその

坂田藤十郎

由良之介

座本

はん官

坂東菊藏

かん平

今村七三郎

伊五

座本

おかる母

座本

平右衛門

座本

本藏

座本

義平

座本

よし松

座本

尾州名古屋にて興行之部

寶曆十三癸未年八月廿四日 座元

大須芝居

與一兵衛

郷右衛門

直よし

十太郎

一力大い

伊五勘平母

竹森

千崎

丁竹

女郎小まき

かほよ

女郎しげの

となせ

石堂

本藏

小なみ

力彌

おかる

おその

かん平

はん官

大ぼし

よし松

富士松民之助

嵐 助十郎

中村笛藏

嵐 多賀八

富士松八百藏

嵐 兵次

松本友十郎

杉本國藏

大和山定助

嵐 仙次郎

中村吉十郎

藤川金十郎

嵐 此松

佐野川若松

三保木七太郎

大和山甚左衛門

山本京四郎

座本

富士松民之助

明和九壬辰年二月廿一日

稻荷芝居

一千ざき

一矢間

一竹もり

一 おかる

一 おいし

一 力彌

一 若さの介

一 伴内定九郎

一 やくし寺伊五

一 九太夫

一 師直

一 はん官

一 かん平

一 儀平

一 大ぼし

一 となせ

一 本藏

一 右馬之丞

一 かほよ

一 中居とみ

座本

嵐 雛 松

三升善五郎

杉本忠次

市川小傳次

榊山四郎太郎

嵐 小ひな

桑名谷八重松

坂東 藤藏

中村丑右衛門

山本京藏

尾上紋三郎

大和川元藏

市野川門三郎

大谷 廣八

坂本豊三郎

座本  
嵐 雛 松

安永三甲午年二月廿四日

稻荷芝居

一 勘平母

一 郷右衛門

一 竹森

一 力彌

一 やくし寺

一 伊五

一 千ざき

一 石堂

一 師直

一 與一兵衛

一 はん内

一 小なみ

一 おかる

一 本藏

一 九太夫

一 おいし

一 大星

一 大ぼし

一 となせ

一 かほよ

座本

姉川千代三

山下嘉六

松屋新十郎

中村折藏

染松かん太

桑名谷八重松

市川 升藏

江戸坂正藏

櫻井喜代藏

大和山甚左衛門

市川 佐十郎

山下新五郎

藤川 山吾

大谷 廣八

姉川みなと

市川 才藏

市野川彦四郎

座本  
姉川千代三

安永四乙未年四月六日

大須芝居

郷右衛門

十太郎

直よし

力

小なみ

かほよ

大わし

おいし

千ざき

昔さの介

石堂

おかる母

やくし寺

與兵衛

定九郎

九太夫

了竹

となせ

大ぼし

かん平

りきや

座本

松山小源太

松屋新十郎

染松勝藏

浅尾万藏

大和山善吉

山本岩之丞

小佐川勢藏

嵐菊次郎

今染松七三郎事

嵐玉とく

松山三十郎事

松山屋山松

大谷廣八

大谷今三郎

竹十郎事

中村竹右衛門

市川幾藏

佐の川花妻

嵐三十郎

座本

松山小源太

安永七戊戌年五月五日より

稻荷芝居

十太郎

竹もり

伊五

力

と

兵衛

師直

やくし寺

おいし

小なみ

おかる母

郷右衛門

若狭之介

千崎

九太夫

定九郎

かほよ

となせ

おその

右馬之丞

かん平

大ぼし

おかる

座本

中村千藏

中村吉藏

中村松之助

小倉山三千藏

嵐菊四郎

中村吉太郎

傳藏事

三升國藏

桑名谷事

荒木八重八

今澤むら

中村龜きく

中村富三郎

中村正五郎

藤岡瀧五郎

中村吉十郎

山下吉三郎

尾上小三郎

中村京十郎

山村義右衛門

中村十藏

座本

中村千藏



天明三辛卯年四月十四日

座本

大須芝居

大須芝居

十太郎

一力てい主

ばん内寺

かほみ

伊五

千ざさ

かん平

石どう

おかる

おかし

郷右衛門

定九郎

了竹

義平本藏

九太夫

與兵衛

力彌

若さ之介

おかる母

はん官平右衛門

堀部安兵衛

六ツ目郷右衛門

おその

となぜ

大ぼし

師直

よし松

其他は略之

澤村徳三郎

中村喜藏

嵐熊右衛門

桐山紋治

嵐房次郎

今の入甫弟のよし

藤川柳藏

淺尾豐藏

山下龜之丞

中村瀧藏

山下新四郎

中村歌右衛門

澤村竹十郎

中村喜代三

嵐此松

嵐三十郎

姉川みなと

嵐雛助

座本

澤村徳三郎

古今いろは評林卷下

百九

右凡に筆するもの歟、あまたゝびの事なれば、思ふ程に盡しがたし、此狂言にかぎりては、濱の眞砂ともいふべきや、其次第くは若俚諺抄とも拾遺ともいはんや、由良之助京四郎都鄙かけて生涯廿三度勤しとは自身の物語也と聞傳ふ、梅幸怠らずも數々勤る度毎に當りを取て、其功をあらはす、されども古宗十郎が俤を寫し、それを頭とせし風情多し、左あれば先古訥子を最上とするもの也、さりながら次第くに残れるを拾ふ處は、もだしがたし、たとは、芙蓉恰好山良之助には少し翦たるといへども、前後は梅幸を題としての仕内、夫が中にして屋敷渡しの幕際にて、手を組ながら伏向て花道へ入は、則梅幸が姿ながら、半までもあらずして入相の鐘に、見物に思ひを察しさせ、うつとりと仰向て見るとなく、見ぬとなくふと遠く屋敷を見かへりて名残をおしむは、又梅幸が城わたしの見返りく、後足に二タ足三足あゆみての名残の情よりは増れり、かく思ひつゞけ見れば、いつまでも其情の盡る事はあらじなきも、又立者らしきといへども、次第に其思ひ入を見んと思ふ、見物計にてなきも、又物さびしからんとも、只情の厚きを考あら

んもの歟、誠に忠臣藏の狂言いつとても大當りならぬ事なきは、全く實は實情の忠臣の功ゆへならんかしとも

天明五年巳霜月吉日

東都

つたや重三郎板

浪花

いづみや卯兵衛

平安

八もんじや八左衛門元

## 芝居乗合話

過にし春のことなりしに、長閑なる空にまかせて、予年頃信仰なせし、下總國千葉の妙現へ參詣せばやと思ひ立しが、誰誘引人とても、酒と餅とのわかち有て、彼是として心よからぬ、旅行せんよりはと、年々參り馴にし船路なれば、小網町より野夫と船に便船と心ざし、彼地へおもむく船人を頼みて便船なせしに、いづれ何方の人やらん、四五人の乗合ありて、一夜の友と挨拶し、燈火の影さへもなき短夜の夢も結ばぬ物がたり、はや明近き鐘の音とともに、もやひの綱ときて、船は川口をはなれて、佃の海に鹽まちす、程もあらぬに、鳥の聲實に春風の音も靜に、滿來るしほと諸ともに、出行船に乗合の、顔とくにしるもあり、しらぬ人のみ多き中、かたへの人こなたの人とは、兼てしたしき人にて有けん、これはくと手を打て、何かたへ參らるゝやと問しかば、こなたの人われら事はしらるゝごとく、佐倉出生ゆへ親類どもかたへ、年頭やら用事かたぐゝ、とりまちへての思ひたち、そなたには何かたへと尋ねに、されば我等事はしらるゝごとく、家業場にて成田山の不動尊信仰ゆへ、

大勢にて月參講を初めしに、その月參に當りし故有がたく、成田山へ參るよし、それはよろしき折からとて、しばしの内と言ひながら、心置なき能道連ばなしのうち、船ははや沖の方へと走り行、浪靜に風も程よく、是やまことに四海波、しづかなる御代の御恵み、海原を打詠め、心ゆたかに行折から、佐倉へ行と言し人、成田へ參る人にたづねしは、御身家業いたさるゝ芝居、また役者などいふものは、いつの時代に初りし事にや、猶又今も御江戸三芝居と定りし事、且又歌舞妓といふは、外にならぬわけはどふしたる事にや、はなし給へと問しかば、成田へ參へる人答て、是はくおもしろからぬ尋ね事、くわしき事はわれらもしらぬといふものゝ、見馴聞覚えし事どもは、嘶し申べきか、われらとても人のはなしに聞覚えし長もの語り、跡や先とも成べきが、心に浮みし有たけを、船の著まで嘶すべしと、既にはなしに掛る時、予も好る芝居ばなし聞耳し、其あらましを聞書と、やたてとり出し書付るに、先役者のはじまり芝居の最初、役者大全といふ書に有事ながら、又その上に古老の好人に聞て、覺へし事のみを、誠に是ぞ聞とり法問、茶一つ吞で



## 芝居乗合話一

## 芝居の初の事

上代の事にや有けん、南都南圓堂の前に、大き成穴出来て、其内より煙り夥敷おこり、天が下に覆ひ、其氣にあたるもの、ことごとく疫癘におかされける、是によつて、南都の芝の上にて、翁三番を舞せ、その邪氣をはらひ退けしより、芝居といふ名は始りたり、今に至て南都の能は、故實にまかせて、芝の上にて行ふ、名古屋三左衛門お國歌舞妓の初は、北野の芝原にて興行し、また出雲のお國、織田信長公の免許を蒙りて、則北野にありし人升是は陣立けいこ場也を拜領して興行せしより、芝居といふなりとぞ、又甲陽軍鑑にいはいはく、仕場居は勝軍ならでは、ふみといまられぬものなりと、高坂彈正の述べられたり、何れも芝に居るの意なり、其後祇園の南ばやしにて取行ひ、また其後五條河原橋の南にて興行しけるに、秀吉公伏見より上洛の時、かならず此橋を通り給ふに、見物群集しさまたげになりしにより、四條へ移されしと也、男女うち交り

の狂言、亂りがましく相聞し故、御停止となりしより、京都にて村山又兵衛といふ役者、數度御願ひ申上たてまつり、承應二年三月、歌舞妓ものまねづくし、若衆交りの儀御高免被成下、明暦二ひのへ申の年、四條河原中橋にて興行、今寛政十二年まで百四十七年におよぶ、さすれば上方芝居役者たるべきもの、此村山氏の丹精を尊むべき事なるべし、又大坂の芝居は、寛永のはじめより若衆歌舞妓とてあり來りしに、道頓堀九郎右衛門の裏下難波領に、そのころは傾城町ありけるが、此所の傾城どもを多く集め、舞臺へ出しおどらせなどして、是をお國歌舞妓と云ひし事にや、此芝居は則鹽屋九郎右衛門芝居にての事なりしとぞ、女歌舞妓の事ながく御停止となりける故、其後度々御願ひ申上、前々の通若衆歌舞妓の芝居の再興相叶ひ、今に興行す、今の角の芝居は大坂太左衛門といひしが、福永屋新十郎是なし、又大和屋甚兵衛といふ名題ありしが、元は鹽屋名題故元へ歸り、今の中の芝居也、斯のごとく京大坂の芝居は、有來たる芝居名題をかり請て、いづれの役者にても、金かた宜敷輩は座元を勤める事也、さるによつて、名題誰座元誰と印す

也、三芝居は又格別の違ひ、三座共元祖より大夫元一名にして、役者までも主人と稱す、江戸三芝居の事は末にしるす、

### 役者の初の事

漢に趙飛燕が名曲あり、唐に至て散樂數十種、みなもつて奏覽す、其部に戲優ありて、古今の治亂を狂言綺語にあやつりて、其發頭を孟優と號し、明の代清の代にいたりても、狂言會を催せばこそ、繪番付折ふしは渡れり、我朝の昔神代にては、火の酢芹命、御弟彥火火出見命と御位をあらそひ、海上に惱されて、さまざまに苦しみ給ひし躰を舞にこしらへ、其子孫の隼人等、大隅薩摩より都へのぼりては、禁庭に舞かなでたるを、續日本紀第七三十四に、風俗の歌舞妓とも、又は俗妓共連たり、猿樂方の能には、面は著れども直白粉丹を顔にぬる事なし、火酢芹命赭といふて赤土を掌にぬり顔にぬりて、神代の卷に見えたれば、今の役者の濫觴なるべし、中古もふるき合戦などを取組、狂言にしたるさへあれども、是等は士林のなぐさの藝にして、役者の事にはかゝわりがたし、室町家の御時、斯波殿におゐて天竺左衛門といふもの、六七人の

能者を集めて、佛廂にて狂言を盡したる番組み、今に傳はれり、近くは永祿の頃にあたりて、江州の住人名古屋三左衛門といふ人、京都北野に於て小舞を覺へたる女を集め、説經に合せ舞せけるが、出雲のお國といふ風流女と夫婦と成、歌舞妓と名付て男女立合の狂言を始め、その子孫お國といふを太夫として、五條の西にて興行す、難波にては、太夫藏人といふもの、是も男女入交りての狂言也、抑此お國といふは、出雲の神子にて女踊を始め、其後嶋田万吉といふ女名題をはじめ、又六條の遊女も、芝居能とて興行しけるよし、山城名跡志に見えたり、此遊女におしへける家筋を佐渡嶋と號す、然るに男女入交りの狂言、みだりになりしにつき、御停止と成、其後御免許書前に記す、御當地にて、歌舞妓芝居の始りは、猿若勘三郎也、元祖勘三郎といふものは、生國は山城の産にて、幼年より此道を修行して、御當地御繁榮につき、元年中御當地へ下り、歌舞妓芝居を御願ひ申上候、則寛永元甲子二月十五日、忝も天下泰平國家長久の御吉例として、中橋におゐて、初めて歌舞妓芝居太鼓櫓御高免なり、其後中橋は御城近きに依て、引地を被下置、芝



居引移るなり、其節の地所を彌宜町といふ、今長谷川町横町なり

又其後上堺町へ移る、上堺町といふは、今の葺屋町の事なり、昔は堺町上下とて二町ありし、葺屋町の所上堺町といふ、下堺町は今の堺町なり、上堺町は後に葺屋町と改りし也、上堺町には猿若勘三郎、村山又三郎と芝居二軒兩側に有て、下堺町には彌之助芝居、操芝居又は小芝居のみにて、上堺町ほどには賑ひかねしより、兩町とも同支配の事ゆへ、町内相談の上、大芝居一軒づゝ上下へわけ度旨、是又御願申上たてまつりて、猿若村上鬪取して、勘三郎は下堺町の鬪にとりあたり、今の所へ芝居を引移りし也、此節堺町名主は帶刀にて近藤喜兵衛と言ひし此節勘三郎といふは、元祖勘三郎猿若の名人ゆへ、猿若／＼と呼ならはせし故に、猿若を名乗る也、又中村といふは藝名にして、勘三郎本名は三間氏、家の紋は抱澤瀉也、しかるを此もん所を用ひず、角きりがくに銀杏を付る事は、元祖勘三郎歌舞妓芝居御願ひ中、ある夜夢に木具の上に、銀杏の葉を乗せ、鶴是をくわひて富士の嶺より、勘三郎が家の内へ舞入しと夢見しゆへ博士に是を問ふに、正に大願成就の瑞夢なるよし、將して願成就す、依て中橋にて芝居を建

し折から櫓幕に舞鶴を付、木戸幕には角切がくに銀杏を付來りしが、恐れ多くも上様に御名の憚有て、舞鶴のもん所を改め、櫓幕へもすみ切がくに銀杏を付る事と成し、元祖勘三郎より當勘三郎まで十一代、年數は寛永元年より、當寛政の十二年まで百七十八年相續、寛永年中御城様へ被爲召、猿若を御上覽被爲遊、其節金入の装束を頂戴被爲仰付、今に此家に拜し傳ゆる也、

同寛永九壬申年、伊豆國より阿武丸の御船、御當地へ御入津の折から、元祖勘三郎へ金の麿を被下置、則此麿を持て御船の艫先に立て、櫓拍子船唄の音頭をと

もに勘三郎願にて勤る

但市村森田と

りし也、其節の金の麿も、勘三郎家に持傳へ、寶とするとかや、此節御船手御奉行は、向井將監様にて候、御指圖を以町御奉行様へ御禮に罷上る、此例を以て今に於て、年頭并五節句等に御禮に罷上る也、但市村森田と慶安四辛卯正月より四月迄の内、御城様へ被爲召、諸藝相勤め、鳥目六百貫文并青地の金人、猿若の衣裳を頂戴仕る、此又此家に今に拜し傳へるとかや、扱また明暦三丁酉年正月十八日、江戸大火の砌、芝居



類焼に依て普請の内、五月中悴を召連て、久々打絶し生國の親類を弔はんと、山城へ罷登り、京都に暫逗留の内、忝も吾妻の猿若在京の趣勅聞に達し、おそれ多くも内裏様へ被爲召寄、其日御樂屋は日野大納言様御とり持にて、既に猿若の所作事を奉入叡覽の折から、猿若の上帶をわすれたりしに、聊時うつらんとせし其由、日野大納言様聞せられて、此事なるかと御簾のあげまきとつて下しおかれし故、則是にて相勤る、しかるに叡慮殊にうるはしきあまり、恐れ多くも黒きびろふどに三ッ柏の紋付たる羽織、又紫裙濃の衣裳、金糸と銀糸にてすゝきに露の玉縫ひたるを下し給はり、又勘三郎一子は、新發智太鼓といへる所作事を相勤るに、幼年の子としてけふかる舞を舞ふ事、猶更天氣おかしくおぼしめし、見るにあかぬ御心にや、明石といふ名を勅定下され、恐れ多くも有がたき事どもなり、右下しおかれし猿若衣裳、御簾のあげまきともに此家に代々拜し傳ふるとかや、さればこそ此勘三郎家にて、一子出生し、惣領に限り明石と名づくる事を規模とす、又下しおかれし猿若の衣裳に、三ッ柏のもんありし故、家の紋所をあらため、三ッ柏にす

べきか、是又おそれ多く家に秘して、則家名を柏屋といふ也、扨京都首尾よく同年九月御當地へ歸府し、相替らず大夫役、三十四年の間相勤め、万治元戊戌年に死去す、

○元祖中村勘三郎 本名三間氏山城産

猿若名人

二代目

明石勘三郎

元祖勘三郎子

父と共に上京し、恐れ多くも明石といふ、名を拜受して家相續、十七ヶ年の間、大夫役相勤る、此時弟子市村竹之丞、ふきや町にて芝居相續す、依て勘三郎方より、鶴の丸のもん所を譲る、これによつて勘三郎、市村座にて諸見物へ、竹之丞を引合せ、口上を勤めし也、是又鶴の紋所は、憚る事有て、竹之丞家の紋橋に改る、今におゐて年々顔見せ、入替りの新役者付のやぐら、臺輪に中村座は舞鶴を付、羽左衛門方にては、鶴の丸を付る事は昔の遺風なり、

中村勘三郎

明石ノ子

此勘三郎五ヶ年ノ間大夫役勤ル

中村上旁忍脱三代目

四代目

中村勘三郎

三代目勘三郎男

此勘三郎は、延享<sup>正寶</sup>より貞享元年まで、大夫

役相勤め、後に隠居して、傳九郎と改め、藝道の

名人ゆへに、直く舞臺を勤めて其名高く、ことに

奴丹前朝比奈役の元祖なり、今以朝比奈を勤る

役者は、紋所鶴の丸を付る事は、勘三郎隠居して

の紋所にして、中村の中といふ字を、四つ合せし

もんにて、世の中のよしとしゆくして付しと也、

朝比奈は和田氏なるがゆへに、紋所は三ツ引な

るに、今の世までも鶴の丸を朝比奈のもん所の

よふになり行しは、全く傳九郎藝術のいさほし

なる也、

五代目

中村勘三郎

四代目勘三郎男貞享元年ヨリ元祿十四年迄

八ヶ年ノ間大夫役相勤

中村仁右衛門

四代目勘三郎男狂言作者舞臺のせり出し廻道具を始る

中村重助

同三男表仕切場其外芝居一體の仕法重助より定る外芝居も順之

右四代目勘三郎隠居して、惣領へ大夫役譲る、五

代目の勘三郎是也、此勘三郎家は、元祖より代々

浄土宗にて、寺は本所押上大雲寺にて、勘三郎代

代の石碑あり、然るに此傳九郎は、至て日蓮宗信

心なるによつて、本家勘三郎は、浄土宗にて建、

隠居家は日蓮宗にさだめ、寺は本所妙源寺とし

て卒、則妙源寺に傳九郎石碑を残せしなり、尤隠

居家は三男たる重助に譲る、是によつて傳九郎、

名前は重助より譲るなり、

六代目

中村勘三郎

五代目勘三郎男俳名冠子

七代目

中村勘三郎

六代目勘三郎男俳名雀堂

此勘三郎の時、三男居申合せ、芝居を瓦葺土藏造りに仕度、殊に十一ヶ年以前、繪島一件に付、芝

居棧敷一ト通りに相成候義、何卒下棧敷御免被成下候様、享保九年辰ノ三月廿六日、御願申上候所、同四月十八日願之通被爲仰付候、

八代目

中村勘三郎

七代目勘三郎弟幼名勝十郎

後傳九郎俳名舞鶴

女

十一代目勘三郎

冠子妻

女

九代目

中村勘三郎

實は二代目中村七三郎孫八代目舞鶴

勘三郎智養子に定家相續之所早世

十代目

中村勘三郎

九代目勘三郎早世に付熊吉を縁類より智養子として家相續之所病身に付大夫役隠居して弟傳九郎に譲る

十一代目

中村勘三郎

幼名傳藏後に傳九郎と改俳名冠子

當勘三郎實は二代目市川八百藏一子也、八百藏妻は舞鶴勘三郎、内縁有によつて、一子傳藏幼年の砌より、八代目勘三郎養ひ置て、傳九郎の名跡とす、然處十代目勘三郎病身に付、大夫役勤り兼候故、傳九郎へ

大夫役を譲る、これによつて、八代目勘三郎娘に娶合、十一代目相續之所、數年來之内、度々の類焼等、又は狂言不當り之節の損毛相重り、大借に及び、興行差支に相成、無是非去る寛政五丑年より、休座致す所、勘三郎芝居之義は、御當地におゐて、數年來相續之椿株中絶を相歎き、諸金主一同格別之情心を以、無借同様の用捨有之、同寛政九巳年九月十二日、芝居再興相叶、今日におゐて相替らず芝居相續す、尤芝居休座より、再興までの内、當人勘三郎之心配、言葉に述べたきよし、殊に再興之上、芝居も新規に普請し、間口十五間の大芝居、眞に中興といつべき也、市村羽左衛門由緒

元祖村山又三郎

右又三郎、生國は泉州の産にて、御當地御繁榮に付、藝道指南の爲罷下り、歌舞妓定芝居を御願申上、御高免の上、かみ堺町に於て、初て芝居興行す、元祖勘三郎芝居より十一年後なり、はじめは踊子供五六人、其外能の間の狂言などやつし相勤る、此又三郎は、承應元壬辰年に卒す、

二代目

村田九郎左衛門元祖又三郎智也



右二代目九郎左衛門は、元祖又三郎鯉にて、又三郎卒後家相續す、しかしながら九郎左衛門は別家業にて、芝居の事にはかゝはらず、手前名題を持て、座元名前をかして、興行せし事也、是に依て明石勘三郎の弟子、市村羽左衛門ならびに彦作といふもの、相座元にて芝居興行す、此節上方より踊小唄三味線の藝者罷下り、一切づゝのはなれ狂言を勤し也、猶又右近源左衛門といふ役者、上方より下りて、練絹の染ゆかたをかむりて、女の形を始て、此芝居にて仕初しよし、元祖又三郎男子なきにより、鯉九郎左衛門、芝居名題相續せしが、藝道の子として、瀧井山三郎といふを養子せしが、此山三郎も子なくして、玉川主膳といふ役者を養子として、宇左衛門と相座元を勤し也、是まで芝居は九郎左衛門名題にて、座元は追々替りて、興行は出来しと也、

三代目市村祖

市村羽左衛門

名題は村田九郎左衛門にて彦作といふものと相座元又瀧井山三郎といふものも相座元

右羽左衛門は明石勘三郎弟子也

四代目

市村竹之丞

宇左衛門養子實は宇左衛門妻の弟也先は村田名題にて玉川主膳と相座元

此竹之丞も、明石勘三郎弟子也、玉川主膳といふ役者相座元勤し所、寛永慶安の頃、御城様え被爲召、狂言づくしを仕、烏目百貫文または御時服頂戴仕候由、此竹之丞事實は明石勘三郎弟子宇左衛門妻の弟なりしが、宇左衛門養子として、藝道を仕込しに、至て器用、殊更すぐれての美少人にて、諸見物の最負つよくして、金方の餘情を以て、村田九郎左衛門養子と成りし、四代目より市村竹之丞、一名の大夫役となりし故、此節明石勘三郎より、鶴の丸のちん所を遣はし、櫓幕に付し所、後に鶴を憚る事ありて、竹之丞家の紋所、橘にあらたむる、右の通竹之丞大夫役となりしに依て、諸見物へ竹之丞を引合の口上を、日々明石勘三郎勤しと也、然る所其後竹之丞を改めて宇左衛門とし、又後年羽左衛門と書改る、

六代目

市村竹之丞

七代目

市村長三郎

八代目

市村竹之丞

實は菊屋某の男菊屋六代目竹之丞の近き縁者なる故に家跡相續俳名何江

右竹之丞は、元祿十三年より大夫役相勤め、元文二年に宇左衛門と改め、又羽左衛門書改、寶曆十二年五月六日卒、

弟

市村茂兵衛別家を建

弟

市村善三郎

市村羽左衛門

八代目羽左衛門男幼名滿藏延享二年より龜藏と改寶曆十二年より大夫役相勤る

女福石善兵衛妻

市村善藏

市村善五郎三代目坂東彦三郎と改

右九代目羽左衛門俳名家橘は、和實所作事の達

人、近代の拍子聞にして、其上古人柏薙の風をよく吞込て、既に寶曆八寅の三月、柏薙一世一代の狂言に、矢の根五郎の神異を勤し時、舞臺にて柏薙家橘に矢の根を傳へし故、翌年古人柏薙追善として、則矢の根五郎を勤しに、大入大出來成し事、又元祖文字太夫の淨瑠璃の振事、古人楓江の唄にての所作事、いつも大出來なりしは、古今奇代の名人なり、

市村羽左衛門

九代目羽左衛門男幼名七十郎後龜藏と改る俳名龜全

女九代目森田勘彌妻

十一代目

市村

元祖村山又三郎よりは是迄十一代年數百六拾七年に及

森田勘彌由緒

元祖宇奈木太郎兵衛

萬治三千年木挽町に初て歌舞妓芝居を建る

右宇奈木太郎兵衛といふは、小うたもんさくの名人にして、所々の御やかたへ召されしが、木挽町へ歌舞妓芝居を御願申上、御免許の上、萬治三

子年より芝居興行すといへども、役者ならぬ太郎兵衛故、坂東又九郎と言し、どふけ所作事名人たる役者を、萬の相談相手として、芝居興行せしが、太郎兵衛事實子なき故、すなはち又九郎の次男又七と言しを養子として、これを二代目森田勘彌として、大夫役とす、其後芝居を坂東又九郎に譲りし也、依て又九郎も、一子へ名前を譲り、大夫森田勘彌座本坂東又九郎と兩名にて芝居相續、右のごとく兩名なれども、一體は兄弟也、元祖太郎兵衛、本名は森田氏にして、宇奈木といふは藝名なり、然るに後年享保の頃、兩名を改の勘彌一名になりし也、

二代目

森田勘彌

座元坂東又九郎

三代目

森田勘彌

座元坂東又九郎

四代目

森田勘彌

座元坂東又九郎

幼名福松後に又次郎

五代目

森田勘彌

座元坂東又九郎

幼名鍋太郎地所の事に付九ヶ年休座假芝居河原崎權之助相勤る俳名眞鳥

弟

藤川平九郎

四代目坂東又九郎妻は藤川武左衛門娘也、依て母かたの名跡相續して藤川と號、

女

女

七代目勘彌

六代目

森田勘彌

四代目勘彌母方の内縁あるをもつて九ヶ年休座の上芝居再興して大夫役相勤る俳名杜光

此勘彌幼名金藏といふ、六代目大夫役相續之内、病身に相成、大夫役勤り兼るに付て、五代目勘彌の娘へ元祖中村重助一子小傳次と娶合、大夫役譲り、隠居して又左衛門といふ、

七代目

森田勘彌

俳名殘杏

此勘彌は、三代目澤村長十郎後に助高屋高助弟



子にして、初は瀧中重の井といふ、又小傳次と改め、後に七代目勘彌名跡也、

八代目

森田勘彌 七代目勘彌男幼名勘次郎  
後に太郎兵衛俳名千蝶

女 元祖坂東三津五郎妻死後  
に三代目中村重助に嫁す

九代目

森田勘彌 八代目勘彌弟幼名又次郎  
後坂東又九郎俳名眠舎

此勘彌は兄の八代目勘彌早世に付、九代目家相續之所、去る寛政元年より九ヶ年の間休座せしに、跡假芝居、河原崎權之助然所當寛政九巳年芝居再興す、

女

又吉 九代目勘彌男

元祖太郎兵衛より九代、年數當寛政十二年迄百四十年に及ぶ

右江戸芝居、往古は四座なりしが、去る享保元丙午三月、御城女中繪嶋殿一件に付御詮儀之上、木挽町山村長太夫義、遠嶋に相成芝居斷絶、是によつて此節より

三座に相定る、然所時節として三座共休座致せしは、中村勘三郎四ヶ年、市村羽左衛門以上十ヶ年、森田座九ヶ年、右之内假芝居左之通相勤申候、

中村勘三郎休座跡假芝居

都傳内

市村羽左衛門休座跡假芝居

桐長桐

森田勘彌休座跡假芝居

河原崎權之助

右之通暫くの内、三座共に休座致候得共、先年より江戸三座と御定ありし故、休座内も芝居一件の御糺事に、是ある事には休座ながら被召呼、御尋之筋書付を奉差上候事なり、尤年頭御禮は申に及はず、五節句御禮相勤る也、假芝居のものは此儀におよばざる事なり、

## 芝居乗合話二

## 芝居年中行事

君が代は、千世にやちよをさゝれ石、いわほと成て苦のむすまで、斯治り御代長久と、かざりつきせぬ有がたさ、士農工商ともに去年の掛け乞も、一夜明れば初霞、扇々の聲もさへ、ゆめ違ひ寶船、そのたからさへつきぬは花の江戸むらさき、先新玉の元日には、年々かはらぬ三芝居のはつ舞臺仕始の賑ひ、座元は式三番叟を相勤め、大夫の翁、恐れ多くも御代萬歳を祝し奉る、此式は正月三ヶ日、霜月顔見世朔日より、三日迄は同様也、其勤かたに座元別火にして、身を清め慎みにつゝしんで相勤る事ぞかし、扱正月元日三番叟過て、子役の花かとり賑し、其年の役者、一座の座頭たるものより、立役若女形まで、上分のもの、麻上下にて舞臺に居ならび、則座頭たるもの、座付の口上あつて、春狂言名題ならびに役割をよみあげ、當正月十五日よりとか、其節の芝居成行次第、日限を定め披露致事也、尤昔は正月三日より、例年曾我ものがたりの

狂言いたし來りしか、近年は其年の座組の振合によつて、曾我にも限らず、殊更日限も二日より興行致す事なく、先は十五日と成行、當日より相始め、狂言の出來不出來、また見物の氣に叶ひかぬる、當り不當にて、早々二番目を出す事也、しかし其狂言の模様にて、當り狂言は五月迄も、春の名題にて相用ひ、ふあたりにも其名題又は後日として、跡新狂言を出す事也、如何様に當り狂言にても、三月節句よりは新狂言を出し、其狂言のもよふに依て、さらがへと號して、新狂言をあらためて致事もある也、其狂言も見物のうけ惡敷おりからは、是非なく操狂言を取組事、年にいづれ替らぬ事ながら、狂言にて操狂言をする事は、至てはちらふ事なれども、昔と違ひ近年は、江戸生立の役者より、上方生立執行の役者多きゆへ、兎角操狂言に成たがる事とはなりし、上方にては、年中の狂言新狂言よりは、操狂言のかた時行ゆへ顔見世過てあいの物といふ事ありて、十二月の末に至り、芝居興行いたす事有て、其狂言思はしからぬ節は、初春早々操狂言いだす事故に、年中操狂言かた多く、夫ゆへ上方役者は操のかた手覺有て、勝手よきと思ふ心から

は、江戸生立の役者、むかしは操狂言珍らしき事也しが、近年はまたしても年々に操り狂言に立さわぐが故、上方役者程には手覺もなきよふに思ふに、また今の若手の役者は、心得もさしく天晴に見え、諸見物の目にとまりて、かけよきは器用なる事也と、芝居見巧者の賛嘆いたせしなり、扱又春狂言の節、三座共に一體に衣裳の御改めは、御見分被爲入候事、公の御事故、おそれて是を略す、此御改めは、顔見世と春と是非新狂言ゆへ御改めなり、役者衣裳は、古來より絹つむぎに限るべきの御定の也、春狂言の曾我の名題にて、新狂言を出すにも、右の名題を用ひて、曾我後日とするは子細有事なるが、是も御改め事にかゝはる也、扱五月にいたり、年々春狂言曾我もの語りの狂言取組事故、曾我の兩社を祭り、五月廿八日を祭日と定め、五月中旬より曾我祭りと名付、惣役者かつらかけず、素顔にて揃ひのゆかた、又は染帷子を著し、子供の花おどり、夫より段々と仕ぬきの狂言、俄のおもひ付、はては雀躍、手踊、女形は花笠おどりの賑敷、曾我兩社の御輿を留場口より本舞臺へかき出す、役者のこらず神いさめをして、先今日は是切と打出しの太

鼓を打事成しに、過にし假芝居都傳内座の砌にや、此曾我祭りを大そふに取組、役者の外に芝居掛り合のものまでも、美々敷衣裳にて、本祭同様に芝居の町内表裏をはやし歩行し、大形のいたしかたに付、御咎めを蒙り、今はその事相止む、しかし芝居内の曾我祭り、舂のけやうげん、其模様によつて御差構なき事にや、扱五月も終り、六月に至り、牛頭天王所々へ御出興の頃には何れ兩座共に相休むなり、是より暑中休みとて、惣役者のこらず相休み、七月十五日より秋狂言に定める事也、しかるに其年の座組によりて、土用芝居といふ事近年はありて、重達し役者は休て、中立ものにて狂言いたす事あり、古來は役者一ヶ年極めの事ゆへ、六月休みといふ事もなく仕來りしに、いつの頃よりしてか、土用中休むよふには成行し也、勿論故人市川柏蔭に限り、土用中相休みし事なりしに、今は一體の休みとはなりし也、扱この夏中顔見世人替りの役者、あれ是と相談いたす事、是は芝居の支配人、金主との相談にて極る事なり、しかし時として評判よろしき役者、きゝもの、部は、春中より内々相談に掛る事也、扱また秋狂言も七月十五日より初る事も



あり、殘暑つよき折からは、八朔よりはじむる事也、秋狂言も九月にいたれば、あらまし更替りの新狂言に成事ぞかし、扱又九月十二日を、來る顔見世の世界と名付、三座共に顔見世に相定めし座頭、ならびに狂言作者、大夫元、帳元、頭取打寄て、顔見世の狂言を相定むる事也、此世界といふは、先顔見世の狂言太平記、平家物語か、伊豆日記又は鉢の木かと、狂言の躰を極むるを、世界定めるといふ也、此九月十二日を、三芝居共に世界と定めし事は、昔寛永年中猿若勘三郎、御當地に歌舞妓芝居を御高免有て、中橋におゐて初て芝居を建、狂言の相談を極めしは、九月十二日なり、夫よりして此日を吉例とせし故に、外座にても定日となりしよし、右の當日は夜に入、座本宅にて致し、また茶屋にてもいたす事也、其節は表裏町の茶屋、又裏々の小茶屋までも祝して、挑灯を出す事也、扱顔見世も、近年より段々と座組もとより極るに付、それぐに手付金を相渡、十月上旬までに、芝居も打納むる也、尤役者手付證文の事は、其座ぐにて、少しの相違はあれども、あらまし左之通

## 手附證文之事

## 一金

右金子之儀は當何ノ十一月より來何ノ十月迄貴殿御芝居え相勤め可申義定仕候に付爲手附金體に請取申候所實正也然上者無異變相勤可申候尤壹ヶ年給分之儀は別紙極書之通に相定申候上は外芝居は不及申田舎芝居等決而相勤申間敷候爲後日手附證文仍如件

年號月日

誰印

何座

帳元誰殿へ

右之趣にて年々相定る事也、扱新役者付の下繪等取掛るに、此役者附は至てむつかしく、古來は座本帳元狂言作者にて、下繪等定めし事なりしに、近年は時の座頭たるもの、彼是と差圖して、猶更にむつかしく、此役者付の事は、依怙ひゐきなきよふにすべき事也、役者付初摺出來の上、板元より大夫元帳元方へ内々にて差出す事也、扱配り出し、定め通り相濟て、其翌日賣出す定めなり、前々は役者付出せしは、十月十日前後の様に極りなりしが、今は彼是と引延して、日限も定らず、十月十七日は三座共に、囃初とて惣役者麻

上下にて寄合事也、それゆへ寄そめともいふなり、尤重年の役者は羽織袴也、その寄初のいたし方、三座共に同様ながら、堺町は芝居の三階へより合、ふきや町木挽町は茶屋へよる也、此當日は極り役者手付金の外に、渡し金の事あつて、帳元かたにて金子出来、不出来によつて、六ヶ敷日なり、役者給金一ヶ年極の之事は、例へば金三百兩の給金たる役者に候得ば、三分一の割にて、顔見世に金百兩相渡、残り金貳百兩を來年五節句拂に、五つに割一節句拂ひ金四拾兩づゝと極めしものにして、金三百兩の役者、顔見世に金百兩わたすは三度なり、其渡方手附金に三拾兩、十月十七日寄初に貳拾兩、十月晦日に五拾兩と定め、渡し方致す事也、右の極めにて、中役者又は詰はやし方に至る迄、此割合のごとく也、扱寄初當日は、暮時より大夫人、麻上下若大夫同様に、緋もふせんを敷て、上座して片かわへ座頭二枚の三枚めと、段々座ならびず、扱又片かわへは、中二階若女形の座頭上座にて、是又立役同様に居ならび、三階中二階兩かわへわける也、三階といふは立役の分は三階に居て、女形の分は中二かひに居る事故に、三階中二階といふ、また下立役

ははやし方のものは、下家兩側に居る故に、おした又兩側ともいふ也、扱又寄そめの席に出るは、下立役の頭はやしのかたの頭出る、中役者も頭分一人出る事なれば、此寄初の席へ出る事を願ふ事也、斯座も定りて、頭取たるもの、大夫人の前に盃持出て銚子熨斗こんぶを持參して、頭取は羽織袴にて罷出、先づ三階の座頭より、大夫人と杯事ありて、大夫人座頭への挨拶は、來年中萬事を相頼のよしにて、頭取銚子を持、大夫人座頭と盃事ある其節、はやしのかたの頭罷出で、小謠あつて肴を頭取はさみ、夫より順々に盃をする、斯のごとく残らず相濟と、狂言作者次第あつて、中役者下立役の頭、はやし方の頭まで惣残りなく盃も相濟と、狂言立作者裏付上下にて罷出る、其跡より狂言方のもの袴羽織にて、白木の三寶へ顔見世の大名題を乗てうや／＼敷持出ると、立作者大夫人座頭へ挨拶して、右の大名題を明年の恵方へ向ひてよみ上る、小書大名題小なだい迄もよみ終ると、二枚の狂言作者罷出、惣役者役人替名をよみ上る、是迄は狂言の大名題、役者も初て聞、其役々も承知する事なり、かくのごとく漸初までは狂言を秘して、外へ洩れぬよふにするを第



一とする事也、近來はなき事ながら、古來は右のごとく名題替名をよみあげて後、狂言の筋を立作り噺に致せし故、噺初といふなり、此噺初には、阿答打あとうつといふもの有て、三立目よりの狂言正本を持て、其筋くを殘らず噺時、役者の内より古老のもの罷出、其狂言の噺を一々挨拶する事を阿答打といふ、近來は此事もなく、役者役々の替名計にて、狂言の義は追てと申斷、其夜は日出度、皆々手を打て、それより本膳出て、給仕人は棧敷番の者勤る也、中酒あつて膳も引ると、立者の役者の分は、上下を改めて羽織袴にて打くつろぎ、大夫元若大夫挨拶有て退座あり、夫より座頭より、段々と退座する是を噺初とも、寄めめともいふ也、扱十月廿日は、ゑびす講、此日は入替り、新役者の分ならびに、狂言作者下立役はやかたに至るまで、紋看板を出す也、勿論其年の役者は、紋看板出さぬ事也、尤紋看板にも、三尺二尺五寸の高下紋所にも、紺上緑青の品々ありて、一體紺上をねがふ事なれども、上分ならでは紺上はかゝぬ極め也、夫より狂言の本讀にかゝる、此節は役者はその役に出勤のもの、ならびに衣裳かた、道具かた、小道具方のかゝりのものま

でも、狂言を聞事也、此本讀の節、役廻りあしきものは、彼是不承知を申て、狂言方と相談におよびなをす事もある也、しかし此事は、一座の内一兩人ならではないものなし、扱段々に本よみも納ると、はや稽古にかゝるも、はや十月廿五日には、三芝居ともに大名題を出す事也、これよりは大道具方掛りのものは舞臺にかゝりて大道具方のこしらへ、看板は鳥居へ走り、小道具方は夜を日にかけて小細工する、衣裳かたは染物のあつらへ、幕廻り小紋の衣裳、加役の聞合せいろくくと日數にかゝり、限りある事故、中々少しの隙もなきこと共也、尤衣裳の事は、一體に立ものはいふにおよばず、中通とて三階に居る役者のぶんは、衣裳にはかまいなく、いなり町とて下立役のものへは、座元より衣裳をわたす事也、又三階の役者、立役、敵役にて、女形を勤る役有か、また婆々形を勤る時、また化身變化其外片袖切落すか、血に染り打擲されて著類を破る事なれば、引ぬきとて此類は衣裳方よりわたす、右の外に藏衣裳とて、狩衣白張も、引類あれども、三座それくゝに風儀替りてわたすもの極めある事也、此藏衣裳といふは、昔は樂屋内に藏をこしら



へ置て、數々の衣裳ゆへ持運びも日々の事故に、則此藏へ入置きし事故に、いつとなく藏衣裳といひならわし來りしなり、勿論右にいふ加役事、其役を勤る役者によつて、至て渡しものに甲乙ある事也、扱稽古の内は、其役々有て、中通の役者は立仕とて立をよくするものは、立ものへも立に付る、振付はうた淨瑠璃に合せて振を付る、立三味線のもものは、新唄のこしらへもの、めりやすの節付する、扱大小の鳴物太鼓すりかねの稽古何れ隙あるかたもなく、あらかたに稽古出來て、中ざらいといふ事あり、同廿八日には、表惣看板出る、茶屋にては思ひくの飴りものをして、小の月は廿九日、大の月は晦日、芝居町の賑ひ、誠に目をおどろかす計り、夜の更るもしらで茶屋ぐの酒盛、三味線の根じめおもしろく、長唄役者の聲いろ、けん酒の聲かまびしく、芝居の木戸前、山に山こす人の山、押合ひおしおふ有さまは、餘國に稀の賑ひにて、書七つ時過れば、木戸前にては言立の聲をあげ、狂言の名題役者の役人替名をよみ立、終りには役者のこわいろ、仕切場には青すだれかざるや花の臺のもの、打や拍手いさましく、樂屋は稽古鳴物人の大ざらへ、

役者の家々には入來る客のもてなしやら、手打連中への挨拶して、見事にかざる衣裳の數々、はや一番の太鼓の音、木戸には一同の聲をあげ、二番太鼓に程もなく、座元式三番をはじめ、是また正月三ヶ日同様にして、別火に身を清めて、つゝしみをかさねて勤る事も、斯のごとく顔見世三日の内は大夫元相勤め、四日めよりは下立役より勤る事也、問て曰、芝居といふものは、一ヶ年何程の仕入金高にして、何程ぐらい上り金はあるものにや、答て曰、芝居の凡見積は、當顔見世より來十月迄を二百日と見つもりて、其時くの役者の座組に寄る事ながら、大概一ヶ年七千兩位、内外の積りにて大入中入不入をならして、興行一日を金四拾兩あがりとならして、二百日にて二四八千兩と定しもの也、尤顔見世大入の節は、八九拾兩程も揚るものにて、一ヶ年の内三替り大入あれば、金主の損毛は是なきもの也、しかしながら金主の仕合不仕合にて、是又定めがたし、芝居にては大金を損毛もするよふに皆々心得たる人もあるなれども、是又定りたる事にてもなし、大金損毛致されし御仁もあれば、其中にて仕合せよくもふけられ、芝居ゆへにてはある

まじきなれども、抱屋敷の十四五ヶ所も出来されし仁もあり、尤それを残らず、芝居にて徳付られしといふにはあらねども、時として折よく運もよく、人の損して捨たる跡にて相談し、其狂言が大入大繁昌して、夫か拍子のちから金、かねが金よぶ道理にや、段々と仕上られしといふ嘶もあり、一體芝居といふものは、一ヶ年の出入の積りは、随分引合勘定のものなれども、其支配するものまたは、金主の心得と上運不運もあるべき也、芝居は金主一人か二人にて惣くゝり能する事ならば、利潤のわかちもわかるべき事なるに、大勢の金主寄合にて、持寄同様に致さるゝ故、利潤もわかりかね、損毛も多く引合かねる道理也、先一ヶ年の芝居六千兩高のくらひの見積ならでは、引合かねるものなれば、役者給金を金六千兩の積にしても、一ヶ年の内新狂言の替りめ、道具看板藏衣裳、芝居地代等あらまし金千兩と見積りて、都合金七千兩也、此七千兩を三つ割の勘定にして三步一、金二千三百三十拾兩餘を顔見世拂にして、残り四千六百七拾兩餘は、來年中五節句拂にして五つ割、五節句一拂ひが金九百三十四兩餘になる也、是にて一ヶ年七千兩と成、扱一

ヶ年興行の日數、凡二百日の見積にして、右のごとく拂ひ切勘定ながら、五節句の拂にも五月九月の拂は、分をかけて拂ふ事、役者ども方にてても、年々心得し事故、談し合により分を掛けて拂ふ事なり、扱また一ヶ年の入金は、右の趣にて、興行日々揚り高の事、其月其月に多少ある事にて、顔見世は三十日と見切、一日のあがり金六拾兩ぐらいの見積、三十日のあがり高金千八百兩とする、扱正月は十五日より初めて、二月晦日迄が一拂ひ故、此興行の日數凡四十日と見て、三日のあがり金三十兩のならしにして金千二百兩、扱三月節句より晦日迄一拂ひ故、此興行日數五十日と見て、三月は顔見世同様の月にて、格別に入も有事故に、二日金四拾兩にならしては、金高二千兩と成、又五月は節句より六月五日六日あたりまで、興行の日數三十日故、一拂ははらはぬ事、夫に順じて揚り高も一日金三十兩ぐらいの見積にて、あがり金九百兩、扱また七月十五日より、八月晦日迄、興行の日數四十日、二日の揚高金四十兩ぐらいに見て、金千六百兩となる也、扱又九月八九日よりの日數にて、十月十日頃迄の興行にして、三十日の見積り、揚り金一日に金三

拾兩ぐらゐの勘定にして、金九百兩あがり也、此九月の一拂ひは、昔より居なりの役者と、外芝居へ行役者との差別有て、たとへば居なりの役者へは、一拂を六分位出し、行役者は七分位と高下して拂ふ事なり、右のごとく一ヶ年七千兩の芝居にても、その年の振合、五月九月のわかち有て、詰る處六千兩位の芝居の高に成なり、凡の仕入金、また興行日々の揚り金を、高平して見る時は、七千兩の芝居にてあがり金、内羽に見積りて金八千兩餘となる、勿論興行日々の入用、また臨時事ながら凡右之通を定式とするに、格別の違ひ有まじき也、是故に役者の事にても、一ヶ年金三百兩の給金とする役者も、五月九月のはらひにならず時は、正味貳百五拾兩内にあたる割合なり、

右乗合噺一二卷以河竹新七藏本自摸了

以下三四五卷者去冬金藏所寫也

乙丑花朝

反古張庵主



## 芝居乗合話三

問ていわく、芝居一ヶ年の出入金高のわけ損益のよふす、あらましにわかり候、右の内揚り金の高下三座とも同様に候や、

答ていわく、三座ともに一體の揚高に候得ども、少々宛の違ひはある事也、先堺町中村座は、再興後新規に普請仕置して、間口も廣く外芝居よりは格別大きく、尤裏行は三座とも町並替りなく、葺屋町は其次、森田座は市村座より少し手せまく、素人かたの見積にもたとへて見る時、堺町百兩にて、葺屋町九拾兩、木挽町八拾兩ぐらいの相違はあらんかとの噂、夫ほどには違ひも有まじきか、少しき違ひはあるべき也、しかし見物人入かたの事、いろ／＼と手練有て、其芝居の支配帳元心得にて、格別違ふ事也、是ゆへに金主方の氣に叶ふ帳元は、茶屋または芝居掛り合のものあしさまにいふもの也、

問ていわく、芝居にて帳元といふは、至て重役に聞へ候が、何様に六ヶ敷役がらに候や、

答ていわく、帳元といふは芝居の惣支配人の事にし、芝居一式の重役にて、古來は短才無智無筆無算下根のものにては、一向に相勤りかね候由ゆへ、此人を撰しに、近代はまた左のみ夫に限りし事にてもなきよふになり行て、無筆無算の上、芝居道もふたんれんものもよろしき也、其下役有て、相應に間に合す事也、先此役義は、芝居一式を引請て、萬事我心得を以て取計ふ事ゆへ、一々座元へ聞合するにもおよばず、成程外目より見る時は、下賤匹夫此上もなき、下々の身分ながらも、芝居道にては、皆々尊敬して恐れおそれ、身分也、大金のこしらへかたゆへ、座元にては何事によらず聞合せには及はずと、萬事帳元任せと、大夫元より帳元へ威を付て、冠を著せる心持ならねば、芝居の大金は出來ぬ道理にて、今の芝居の有様、古來とちかふ事あり、先大夫元は、芝居一體のつかさにて、茶屋は申におよばず、掛り合のものまでも、主人とあがめる事ゆへ、其大夫元帳元へ位の付よふに致し來りしもの、左様になれば、芝居一體の事取極り兼ねるものなるに、近年は支配人位を大夫元よりくちきちやう元を度々取替る事故に、此末とても能帳元

は出來ぬの道理也、先以帳元といふ役は、六ヶ敷役に  
て、古來は其人を糺し見て、其役とせし事なりしに、  
今のていは金子の少々も働くものあれば、早速に其  
者を帳元にもする故に、物事のとりしまつあしく、芝  
居出かたの者どもの行儀などあしくなる、是また種  
種わけ有べき事にや、芝居の事不鍛練無筆無算の帳  
元ならば、その下々を働く役の者どもには、よろしき  
事も有やらん、くわしき事は其人ならねば知れぬな  
り、しかし三座ともに芝居掛り合大勢の中、其渡世す  
る身にては、一度は帳元をして見たきと思わぬもの  
はなきよふに見ゆる、然れども至て六ヶ敷役にて、第  
一に金主のおもひ付あしきものは出來ぬ役、其上芝  
居興行の日々金主の手前よろしき様、萬事を心付し  
て、揚り高能よふにせんと取計ふ時は、茶屋掛り合の  
爲あしく、又茶屋掛り合のものよろこぶ様に致す時  
に金子あがりあしく、金主かたの手前あしくなるの  
道理にて、中々六ヶ敷、そのほど能よふにとりはかる  
ふ事、双方よき様には參らぬもの也、年々の事なが  
ら、芝居興行の内よりも、來年の座組の心がけ、内々  
にて、手附金の心懸、九月ころに至て、あらかた座組

も出來、十二日の世界もして、程なく十月十七日寄初  
にもなると、跡金才覺してよふく嘶初もすぎ、役者  
付も出し、廿日の紋看板大名題惣看板も出して、早晦  
日にいたりて、明日の金こしらへ、限りある日とりゆ  
へ、言葉にも述がたき心勞にてやうくと金主方よ  
り金も出る、鶏の聲をもまたずして、一番太鼓打込ま  
での其苦しみ、いふにいわれぬ事にして、此心遣ひ、  
金主への氣がね、金主も心々あつて、同ならぬ人  
心、それぐに氣を配りての心遣ひ、誠に此役義を勤  
る思ひをして、外々の勤致ならば、いつかとよろしき  
親方、主人よりして、元手のふれんをも貰ひ、相應の  
店持ともなつて、老を養ひ申へきに、夫には引替、此  
義を勤しものえ、末のよろしきわかれせし者を見ず、  
是ゆへにこゝろあらんものはせぬ役、誠に情も氣根  
もつゝく事にてはななくと思へども、根を糺して見れ  
ば夫程くるしき事をわきまへながらも、是を捨かね  
てよろしからぬ役をするも、此道のすきよりおこり  
て、古來より此役勤しものに、終りに金銀をたくわへ  
て、身退きし者一人もなし、すきの道とは言ひなが  
ら、心遣ひの渡世して、子孫へも譲られぬ事、能々あ



しき世渡りと、心には思ひながら、すきよりおこる心の苦み、興行の日々迎も、毎朝未明より茶屋／＼にせめられて、棧敷土間を割渡し、是又依怙ひるきなきよふに氣を付ての心遣ひ、其棧敷土間も割渡して後には、仕切場へつめ、跡口／＼の場所のあがり氣を配り、または出入の行儀等までも、心にあらぬ目に角立て、萬事を改め、少しにてもあがり高能よふにして、金主かたの都合よろしき事の心掛、兎角大勢のものの的となりて、にくまるゝ事大かたならず、一體芝居といふものは、役者の外給金を取ものなく、興行日々の渡世人、二百四五十人宛の出入有て、其内日々拂錢とるものは、幕引髪結衣裳まで、小道具方道具方にて十四人ならではなく、みな／＼無給の渡世人ゆへ、見物人の入かたの事に付、いろ／＼のわけある事、その役々に預る役人掛りあれども、詰る所は帳元一人にといまる事故、その程々を見はからひ、渡世人も相應に家業にとりつかるゝ様に、目こぼしもなくてはならぬ事也、扱また芝居打出しの太鼓につれて、諸金主がたへ引金の割に掛り勘定して、一日の揚りしめあげ役者へも引金とて金配る事有て、金主方へも夫程夫

程の割をして、納めかた專一とする、此金主の納にも、新古の差別ありて中々六ヶ敷ものにて、一日のあがり金にては、さばきかぬる事故、彼是とする中へ、諸拂かたの足不足、金主方よりは割金の大小にて是又足不足の言ひわけ、又有時は見物人の喧嘩口論、打捨ならぬその事まで何一つ耳に入らぬ事なくして、漸々に夜の九つ時頃には、先暫し休息と思ふ中に、はや茶屋／＼より、あしたの棧敷割にかゝるなり、先此棧敷といふも、上下にて六十間餘づゝ有事ながら、上下の中によろしき場所廿五六間ならはなきゆへに、茶屋／＼我がちに、客大事と能場所へ入らん事、願ふ事なれども、依怙ひるきに決してせぬ事を、第一とする事故に、此割かた至て六ヶ敷、大入の折からなどは、此割には枕をくだく事なり、扱漸々割かたも出来、少し心のやすんずる折からに無據かた、金主よりも頼みの棧敷申来る、是をけじやうといふ、役者のかたよりも頼みのありて、此事には三座の帳元至てめいわく致す事、今まで種々として、割付し棧敷を割直すゆへ、六ヶ敷割の上、猶又六ヶ敷、これにも筆を捨て、いかせんと思ふ事日々の事にて、此時穴なしと



いふことをして、朝の内帳元かけを隠す也、棧敷帳とて日々の割帳は、割元といふ役人あつて、帳面を帳元より受とり、割揚といふ所にてひらき見て、手前々の名前の棧敷、善惡にとつて客の手前、申わけ立がたき棧敷遠ふして、茶屋は帳元をうらみ、又割元は棧敷のよしあしを繰合する役ゆへに、彼是ともみ合ひ押合ひ事なれば、舞臺は三立目の幕明ごろまでも、棧敷へ見物は居付ずして、茶屋は客の申譯、戸をしめるやら混亂してもみおふうち、舞臺は幕あき、拍子木につれて聞ゆる鳴もの、に見物人は心も空、先棧敷の惡敷も打捨て、夫なりに成事は是もおかしきならわせかや、棧敷に限らず、土間引船いづれ大入の折からは、我人ともに能場所へ我客いれんと心がけ、帳元一人を目あてにて、其日々のせりあふを、聞にきかれぬ事なれば、暫くかげを隠し、漸々見物も居付し時分を見て、又仕切場へ詰る事にて、憎まれ役とはいふものの、外目より見る時は、掛り合のもののどもには敬ひかしづかれ、金銀もつかみどりもするよふにみへて、うらやましくも思ふ人もあらん、なれども中々左様の事にてはなし、糺して見る所が、すきからかゝるにく

まれ役、短才無智下根無筆無算なるものにては勤まらぬ役ながら、今更思ひば人の目に立役がらゆへ、夫となくにか善惡を構わず、上根にてぐにやくとわからぬ方よろしきかと存らるゝ也、其中にも古來は、此帳元役を九年十年勤めしものもありしなれども、世がらもせちがしこくもなり、金主とても今の金主の如くにてもなく、また第一は座元の心持による事にして、久しくも勤る事也、大切の役がらゆへ、一度此役にせしならば、座元より其帳元へ威を添ふるよふにするならば、芝居掛り役大勢のしめしも聞道理にて、座元より帳元々と威を添ふるならば、金子の出来かたもよく、芝居の行儀等も正しくなる、夫故芝居滞りなく打續くなり、夫を近年は帳元支配人の威をかきくちくよふに成行し事故、帳元の身分かるくなる故、芝居も六ヶ敷なる也、とはいへ帳元の心持と、いろ／＼にて根を糺して見れば、元が一夫の事故に、人の尊敬するに任せて、我をわすれ心のおごり、身分もあらぬ事のみ多く、遊興に長じ、金主方の思ひ付もあしくなる事あらば、其節は座元の心得にて、何様にもいたしかたあるべき事ながら、よろしからぬ

渡世ゆへか、大勢の寄合家業にて、トクせなきものは一人もなく、親のおしへし商賣を振捨て、此道に入事ゆへ、人氣あしく、我また人をねたみこばむ心からは、金主へ手を入付添て、人の善惡をもわきまへず、また座元へ諂ひ昔をその跡部長坂を習ひて、座元金主の心をまよわし、帳元の心をあしくする事は、全く座元の愚よりおこりて、年中芝居むつかしく、度々支配人替り故に、終に芝居も休みがちになりて、大勢の人の家業のさわりと成事は、なげかわしき事ならずや、去ながら此渡世する身分のもの、一度は帳元を心がけぬものなきや、いらざる事とて、昔より帳元の子帳元と成しものを見ず聞ず、子に譲らぬに極めてつたなき役がら、利發のものゝする役にてなし、只すきからとはいふものゝ、いらぬものゝ、近年の事にて聞覺へしは、此帳元役勤めし人も數々有が中にも、珍らしき人物にて、今に茶吞噺にも出るは、木挽町森田座の帳元たりし、平田初丸とやらんいつしもの、元は心もあら／＼しく、若き血氣にまかせて、あらぬ身持して心の儘の世過して、車五郎と仇名してあらもの成しが、風と森田座の木戸番となりしが、少し役者の

こはいろも心得し故に、言ひたてといふものを勤めしが、一度芝居渡せいするからは、芝居惣頭たる帳元とならんと心懸し所、連に乗せしや、よき金主の目に付て、段々と取立られ、終には芝居の帳元となつて、滞なく芝居も打續て、四五年は相勤めしが、此役いつ迄も久しく勤るものならずと思ふ心から、顔見世の座組も出来かね、身退しといわれんも口惜しき事、何卒來る顔見世の座組をして、心能跡役え譲らんと心掛けて、追々役者へ相談して、手附金の渡かた首尾よく、手付證文とり極め、座元へ申込には、病身に相成て役義勤り兼る趣を相斷、跡役をも見定め置て、跡目の帳元權兵衛とやらんいふものに役義を譲りし時は、九月十三日なりしよく割金主かた初め、座元仕切場惣茶屋／＼を呼集めて、相應の料理を出し、盃の上帳元を跡役へ譲りしが、其砌床の間へ一軸をかけて、其前に役者手附證文を乗たる二寶を直しおき、其節みな／＼其掛ものを見しに、軍配團扇を畫て

また照れと軍配わたす波の月

初 丸

斯如にして、帳元役を人に譲りて、我身は隱居して身終るころには、谷中日暮里に石碑を殘し、今に申出す



近代の帳元、其外今まで見聞するに、斯のごとき人物稀にして、中々及びかたき事とも也、是や誠に巧成遂名で、身退くの道に叶ふかや、此末かゝる人物もあらんや、能金主ありて、芝居もどん／＼打續くならば、人情として身退きかぬるもの成に、彼の初丸の心はづかし、

問ていわく、芝居にて仕切場とて、大勢きらびやかに出立てなみ居るものは何役のもの、また何程の給分とるものによ、大勢なくてならぬものによ、

答ていわく、成程御尋のごとく、仕切とて大勢はあるは、惣體三芝居ともに、座元の手代にて、給分といふもなく、興行に少しづゝの事あれども、中々一通りにては勤りかぬるものにて、外目よりは至てよろしきやふにも見ゆるといへども、内證は六ヶ敷出續きかぬる事にて、數年來久しく勤るものは、彼是と暮し行なれども、新參ものは浮氣半分にして、思ひ付ていろいろと手筋を頼みて、此道に入て見て、初めて驚くばかり也、素人目からは、おもしろき渡世と見ゆるも無理ならぬ事なり、尤此仕切場手代の中にも、段々高下役ありて、其役付になるよふに迄辛抱すれば、暮しか

た渡世にも成るもの也、其中にも新參ながら、能金主にても手引すれば、其手筋より古參のものより、早く役付ものも有也、此仕切場は兎角金働が專一にて、その事ならねば出世は出來かぬる也、今の仕切場も昔とちがひ、殊の外身姿も見ぐるしく、昔の仕切場は仕切場男とて、人品も相應の上、物書算用等も夫々になるものならねば出さぬ事、殊更浮氣の渡世ゆへ、物事花々しき様に仕立しものなるに依て、年丈しものは仕切場へは出さぬ事なりしに、しかし年寄で勤るは前々より勤め居るもの故にあらためず、新參に年寄を遠慮せしと也、夫に引替今の仕切場は、年寄無筆の差別もなく、仕切場の風はどこへやら、自身ばん同前のなりかたち、其心からは、外の商賣に思ひ付方がよろしからんといわれし人もありしと也、

問ていわく、扱また其仕切場手代の内に、當ばんといふもの見へ、此ものは萬事にたちさわるよふすに候が、何様のものに候や、

答ていわく、是は仕切場の内にて、帳元の下役として、帳元替りを勤る役ゆへ、至て六ヶ敷役にて、芝居の成行六ヶ敷時節に、帳元を病氣にして、萬事をとり



さばく役人にて、多くは宵より帳元にも成る事也、此外に仕切場手代の中にも、夫々の役柄の高下ありて勤る事、まづ當はんより表方、高場杯其外にも其芝居芝居にて設しも有事也、是にても昔のさまとはことかわりて、今は振合も違ふ事なり、先當番の役は、其時々帳元の善惡によつて、至て心遣ひなる役、しかしながら其時の帳元、芝居道ふたんれんか、無筆無算なるものならば、下役のもの勝手よろしき事ありや、その役ならねばしらぬ事なり、昔はちやう元の役至て大切の役柄ゆへに、其人物を見定て、座元金主相談の上、帳元と極めしことなるに、近年は少しの金口をちからに、其器量ならぬものにて帳元とする處に、樂屋表方ともに、芝居一體のとりしまりあしく成行事也、其帳元の下を働く當はんのものども、勤かたに格別のちがひ有事ぞかし、去ながら俄帳元の方がつとめかたよろしき也、又勝手にも成事やらん、是にても是人ならねばしらぬ事なり、先は出來合の帳元とあつらへの帳元とは、差別あるべき事ならんか、扱又此當はんの役々は、日々順ばんに帳場を引受けて、棧敷のとりしらべ、代金の集かた、其外には立者役者を

二三人宛も割ふりして引請、給金の取引等は、此役にて致す事、是等の事にはいろ／＼の手段もある也、是また其役ならぬ事故に、委細は言聞がたし、問ていわく、芝居は口々にわかりて勤る事、其口々に高下ありや、答て曰、芝居口々とわかる事は、仕切場、木戸、留場、棧敷、表働き、はん疊、させる賣、樂屋かゝりとわかりて、先仕切場を萬事の改め所としてとりしまりかたする事故に、仕切場を重んじ、其次を木戸と極め、夫より留場、棧敷ばん、表半疊と夫々にわかりしもの、故に、口々と唱る也、往古より芝居は、木戸ばんにて萬事のことを世話せしよし、さるに依て、帳元を木戸ばんを話人と云しとなりぬ、又此木戸ばんの役かゝりは、毎朝芝居初る前より木戸口へ詰て、一ばん太鼓三番更より聲をあげ、一幕ごとに聲を揚る、扱第一番目の大詰には、言立といふ事有て、人よせのため、狂言名題役人替名をよみ立其次には役者の聲色をつかひて人寄する事、第二ばん目の幕明までに仕舞ふ事也、扱又此木戸を勤るもの、其日／＼のばん／＼にて、木戸の入口へ口ばんとて、兩人宛居て、仲の間また一幕

見の人を入るゝは、木戸口より限る事にて、少しづゝの渡世あれども、其身分ならねばくわしくはしらず、勿論木戸のものは、一幕見仲の間の見物計りに限り、外々へ見物を入れるゝ事はならぬといふ事にてはなく、棧敷土間切落しなりとも、いづかたへも見物を世話して入るゝ事也、木戸ばんを勤るものにてても、年久敷勤の居るものは、馴染の人も多く有故に、随分と渡世にもなる事也、何方の口々を勤るものにてても、馴染の客なくては、渡世にならぬ也、尤此木戸を勤るものとても、種々の手くだも有べき事やらん、なれども人の噂また性は道によつてかしこしと定らぬ家業故、其日ゝの仕合不仕合もあるべき也、

扱又留場役といふものは、若手の者計にて、見物人の酒狂人なるか、または喧嘩口論などのとりしづめをする役にて、年寄ては勤りかぬる場所故に若手を撰む事也、是とてもその日ゝに急度何程づゝと云拂ひ錢とりといふ事もなき事故に、馴染の客なくては出つゝかれぬこと也、此口々の役々、舞臺ばんといふて、狂言の内舞臺に居て、見物の非道をせいして、狂言へさわらぬ様にするが役、其外一ヶ年に一度なが

ら、顔見世役者の入替り、十月十七日寄初の節、當年まで手前芝居に勤居し役者を、外座へ送り届る留場の役にて、其節は羽織袴にて送る事也、尤送る役者は、立ものに限る事にして、三座ともに同様也、扱また顔見世入替り濟て、役者立もの一人へは、送りと定めて留場一人づゝ差添ふこと、是又三座ともに同様にして、役者樂屋より花道へ出る折から、棧敷下より上ヶ幕に掛る時、棧敷下の人をはらひ、また早替り有時は、なくてはならぬ事ども也、其外に外芝居祝儀事、不祝儀等の節は、此口より勤る、其役々を割付るを役あてといふ、是は小頭の下役にて、始終は小頭にもなるべきものども也、此外に切落し札の上かた、切落見物の入かたの事には、種々の事どもあらんか、昔と違ひ切落といふ物少しにて、残らず土間縄張となりし故、切落も少分の事ゆへ、留場の出入もむかし程はいらぬ道理ながらも、出入は多く成は如何なることや、此留場口を勤るものは若手故、外口よりは手あらくも成事ゆへに、興行中は酒を禁じたる事ながら夫までも行届きかぬる事にや、一體に芝居の出入の定りは、むかしより同口へ出入に、親子兄弟を出さぬが

極めにして、其外帳外ものならびに宮地芝居、又はさ

かり場見せもの筵張の芝居等へ出しものは、相糺し

て決して出さぬを第一の定めにて、三座ともに是を

吟味する事なり、とりわけ留場を勤るものは、とし若

のものの計にてなければならぬ事ながら、若手故に兎

角手あらになりて、見物等へも手あらに取扱ふ事は、

高場役仕切場よりして、其人を見定め置いて、家業をさ

し留べき事也、扱又此口にも口ばんといふ事ありて、

毎日／＼替りばんに、兩人づゝにて勤る事、當ばんの

日にあたり、其日見物人のせいし方の事か、又は傳房

といふて無錢の見物有て、兎角見物人共また留場の

ものども、口論杯ある事、無錢の傳房を押とめ、彼是

に付口論あるか、何様の事にても、疵人等ある節に

は、此口ばんのもの相手當人となる事也、かよふにあ

ふなき渡世ながらも、若き心からはおもしろくもお

もふや、兎角此口へ出たがるもの多し、此口とても定

りて拂錢給金といふもなきが、何様の事にて家業に

も成やらん、目立著類をかざりて、ぶら／＼して居

は、何か種々の手くだもあらん、なれども是またその

人ならねばしらぬ事ながら、尋ねて見たらば、穴さが

しの様ならんとひかゆるなり、



## 芝居乗合話四

扱又棧敷番の役も、昔は兩側の棧敷十五六人ならでなき事なりしに、いつの頃より兩側にて四五拾人程つゝある事のよふになり、尤此棧敷ばん勤方は、用向多き事にて、中にも折ふしは芝居御掛りの御廻り方御出のせつは、鹿相これなき様萬事大切にいたす、上棧敷に御入被成候事ゆへ、棧敷の者御大切に氣を付る事也、此口にも、小頭役當といふものあつて、夫々のしめし方を致す事にて、先日々の遠使、または祝儀事、不幸の名代等は、いづれ此口より勤る事なり、扱また芝居休みに相成ても、用向此口のみ多く、夫故に番割をして、日々小頭方へ詰ること也、其外寄初はいふに不及、何事の寄合に有ても、給仕人等も皆此口のもの勤る、勿論家業あるせつ、何方の口々も同じ事にて、客なきものは渡世に成かぬる故、年々出る人あれば引もの有て、大勢家業する事にやしらず、芝居定りといふは、棧敷土間ともに一間のかし切百文はね、切落は土間札詰、棧敷の札詰までも十六文のはねとい

ふが定り也、しかし大入の折からは、夫相應の高下もあるべきか、夫は札詰見物に限る事にて、棧敷土間は何程に大入にても、直段は定り通りより外上る事なき也、右の通りにて、わづかのはねせんにては、渡世にも成まじきか、年久敷ものは客も多くある故に、其餘情にて過行事もや、また此外にいろ／＼と手段もあつて、其日／＼家業にも成事ありや、はなばんならねば夫をしらず、表半疊の者といふは、興行日々に早朝より出て看板を出し、また打出しには看板を取仕舞、また夜に入ての遠使、金主方の送り、其外夜入ての事を勤め、扱また狂言のせつ間中に成、せり出し廻り道具、其上にも狂言初日前には、荷物の持はこび、種々の使を勤る事にて、是にも小頭役當といふもの有て、夫々に役を割ふる事也、尤此勤かた、三座にて少々宛の違ひあれど、大概斯のごとし、此もの共の家業とするは、興行日／＼表東西南北にわかれ立て、見物人を遠目より呼かけ、合羽からかさ其外の座帳あつて見物をすゝむる、是を仕切るといふ、勿論此仕切方も一幕見、又は張出し向、正面杯といふて、札錢下書の場所をすゝめ、尤切落土間の札詰等へも仕切事

ながら、兎角田舎人杯をば格別の札錢をとり、居所も定めで、其人にめいわくさする族、折々ある事のよし、此義は仕切場より、せんさく吟味して、急度差留る事なるよし、かく少ぶんの渡世ながらも、年久しく出るもの澤山なるは、如何して渡世とするやらん、又半疊方者は、一幕見の半疊錢をとり上る役にて、是又少分のはねにて、中々渡世にはならぬ事ながら、是も見物を仕切事もあり、其外には種々の手くだあらん、相應に妻子をはぐくみ、暮し行はふしぎなる渡世也、扱またきせるといふは、火繩賣の事にして、是にも小頭役當ありて、その役々を勤る事也、先口の役といふは、役者出這りに聲をかけ、淨瑠理所作事の相の手毎に、其役者くをほめる、其外幕毎に、道具立の手傳、またきやう言初りかた前、普請道具拵へのせつは手傳ふ事が役として渡世とするは、切落し見物、土間札詰の見物へ、火繩を賣事にして、是も定りありて、少分の割合を取事也、其外には馴染の見物有て、相應の家業にも成、また込合節は、見物を近き所へ割込をして、先より居付し見物にしかられながらも、是を渡世とする也、其日とてもいろくの手段有べき事な

がら、其仲間ならねばいさいはしれがたし、扱また樂屋を勤るものは、前書に印せしごとく、幕引髪結衣裳著せ、小細工がたは興行、日々仕切場より拂錢あるなり、其外の者はなし、樂屋口番といふものあれども、昔は年ひさしくしばいを勤めしはたらきのもの杯を、此口ばんとせし事なるに、近年はさかんのわかもの勤るは、時代の相違いろくと替りし事なり、尤樂屋定番といふもの兩人有て、是は拂錢の内にて、日々の用事をたし、打出して後夜のばんを勤る事、芝居休日折からも樂屋のばん人也、扱先衣裳かたの役は、頭たるもの久しく勤居て、役者へわたし方の衣裳の事、いろくと定り有て、夫々に見わくる事也、扱また新狂言本讀の節も、狂言の筋を聞て、子役の衣裳立もの、加役の衣裳等を心得て、その役者役者へ掛合て取極る事、いたつて六ヶ敷役がらなり、扱又興行日々にて、役者出るまでに寄て長上下、すはふの付かた、上幕より出る役者は上まくまで持運びて、すはふ長上下をきる事、其外何一つ手のかゝらぬやくしやなく、いそがしき役也、是等の外引ぬきのぬひかた、泥入の洗ひかた、種々の事書盡しがたし、打



出しには衣裳の改め取仕舞て、數多の品々ゆへ、うせもの有べき也、其事にも心を付て取入り能いたす事、是とても少分の拂錢計にては、渡世もなるまじき也、扱小道具方のもとても、其幕くに入用の小道具を預り、幕毎に入用の物さしつかへなき様に心懸る事なり、此外鐵砲の玉、せうちう火杯、いふ事はこの役の者する事也、

扱かづらをする者を床といふ、此かづらも立者役者は一人く手前にて抱へ置事ながら、中役者下立役の分は、樂屋に髪結有て、かづらともにする事也、若女形の分は又格別の事にて、三座とも寄親といふ者ある事にて、古來よりの定りなり、

右の外に、芝居人數多くありて、其役々あれどもあらまし斯の如く、此外に仕切場に定ばんあり、是は表働き役にて年中の定り人なり、又茶ばんといふものありて、仕切場入に用を達す、其外に仕切場の用向を、晝夜共ようを達するものありて三座共呼聲を違ひありて、中村座にては若衆といふ、市村座にては詰ばんといふ、森田座にてはおくりといふ也、此もの共はてうもと仕切場のつかわれ者にて、興行の日々拂錢有

也此外仕切場の中に高場表かた坏いふ役々あれども昔とは違切落し少し計にて土間多くなりし故也此兩役ながら名ばかりになり行し也

土間事も昔は帳元にて、割付借付しものなるが、今にては土間番といふもの有て、日々の賣かたする故、此下役の者ありて、萬事とりさばく事となりし也、金主とても、昔の金主方とは相違して、芝居もの同様に其日く附居て、自身に取引するは、むかしと今とは格別に、人の高下して違ふ事にや、

問て曰く、樂屋にて小高き所に居所をかまへ、頭取と號して居るものは、何様の役を致候ものによ、

答ていわく、頭取といふは、三芝居ともにいたつて大切の役がらにて、其芝居の大夫元、名代をも勤め、興行日々樂屋にて、御定の外の衣裳等著致す役者をあらため、早朝より役所くへ詰て、萬事を司る役ゆへに、大夫元の弟子筋か、何か少しの由縁ある、古老の役者を此役と定むる事にて、樂屋一式の定例を心得しものならではならぬよし、興行日々掛り合はいふにおよばず、事によつて無用のもの、二階三階へあげざる事にして、興行日々差支なき様に、萬事を改め、



日々役者への渡しもの、紅紙夫々に渡し方をして、役者または下兩側の不行跡をあらため、何事によらず古法を守る役にして、其上出がたり淨瑠璃ある節は、其淨瑠璃の名代または役人替名、大夫三味線までを口上にいふ役なり、此外役者病氣等のせつは、此頭取へ斷の人を以申來る、則座頭へ達し替りを立る事也、彼是と六ヶ敷役義ゆへ、依て其人を撰み頭取とすべき事、昔より定りなり、然るを近年は此役もいつとなく見くだして、段々役がら輕くなりし様に思われ、おのづから樂屋もふとりしまりに成行は、先此頭取を年々替る座頭の依怙ひゐきにて附たがる事も有故に、その座頭が外芝居へ行時は、頭取も連て行、其芝居の頭取とする、有まじき事なるに、夫を座元よりならぬと申斷はる事ならぬは、大夫元も昔より輕くなりし也、又帳元たるもの、器量なき彼二つ成べし、頭取といふものは左様に輕くしたるものにてなし、座元迄も禮儀正しく重んぜし役なりしに、いつともなく斯くなり行しは頭取のかたよりも、いろ／＼と我身を安くする事ある故に、斯くは成行しにや、問ていはく、役者の給金千兩取八百兩と申事、誠に千

兩とるものにや、答ていわく、成ほど役者給金の事、段々と高下ある事にて、座頭の立役女形の座頭となれば、千兩取と申事もあるなれども、一體役者といふものは、顔を賣る渡世ゆへ、とらぬ金も取よふに、人に聞ゆるかたよろしき故、是には種々の口傳あらん、問ていわく、役者の心持はいろ／＼、外人とは替りものの、様に聞へ候か、如何様のこゝろ持にて、暮しかたも何様に暮し候や、答ていわく、是はかわりし尋事にて、役者もいろ／＼にて、是も定りし事はなく候儘、此答へにはこまり入なり、しかし役者大立ものと成しもの、素人より座頭になりし者は、昔より稀にして、多くは立もの、子中立者の子、幼少より舞臺を勤て、段々と成長して大立もの、座頭にもなる事故、十人が九人迄世間をしらず、人のおもひやりなく、氣儘氣隨のもの多きゆへ、是には芝居世話人、仕切場の者こまるよし、是等は幼年より立もの、子にて、人の下に居る事をしらずして、芝居中にては上みぬ驚の生立から、立もの座頭とも成事故に、持まへの氣隨のみにて、人中をしらぬ族

まゝ有が中にも、行わたりよろしき立ものありて、誰人にかぎらず芝居世話人、帳元または仕切場、手代にても能人といふ役者あれば、役者仲間にて夫をゑすみ、あしざまにいひなすは、全く我身の善惡が見へぬから、其人をあしき様に思ふ事也、芝居道には、種々の事あつて、しろうとかたに噺はならぬおかしき事多く、能し<sup>り</sup>し人<sup>に</sup>たづねて委敷き事は聞なるべし、扱また暮しかたの事は、其仁くにて違ふ事ありや、しかし近年は役者の身分を女房まかせにして置やから多く、是は損のゆかぬ事故、勝手よきゆへ、第一女といふものはおろかしき生れる故、我連れ添ふ夫の人に尊敬せらるゝ身分ゆへ、夫に乗じて我身も高ぶり、もの毎に差出、男まさりを働らきたがる故に、都てわが夫の顔のあしくなるをしらぬ族ありたがる也、役者立ちものと成ては、金はとれる人にはもてはやさるゝ客はある、芝居よりは給金はこすり付て持かける事なれば、縦令のごとく、寶さかつて入時は盛て出るの金言むべ成かな、入目おほきものにて、年々大金を取ても衣裳に大金を入、相應に人には遣わしする事故に、家屋敷を持て、身を退きし役者多からず、

しかし役者の身分として、素人商人の心掛しては、年長じて紅粉を顔にぬられぬ筈なるべし、其中にも若き役者は身持あしく、酒色をすごし、舞臺にては肌をいためる故に、長壽ならずして、身を果すもの多し、随分と身持を大切にいたしたきもの也、また役者たるものゝ暮し方は、とりしまらぬも道理ならん、此渡世するものゝ、棧敷ばんや火縄賣の女房が髪結ひに髪をいわせる事故、役者は随分暮し方、下手がよろしきかしらぬ、

問ていわく、役者の心持もあらかた分り候、今上かたはしらず、江戸にては、女形上手立ものといふは、濱村屋也、大和屋、綿屋、大見屋など此上こす女形もなきよふに思われ候が、上方には上手の女形あるよふ承及び候が、江戸へ下りしならば、今の四人と引くらべし時は、甲乙あらんや、江戸の目からは、ひみき目ありてわかりかね候はん、

答ていわく、御尋のごとく、當時江戸上手の女がた無人にて、此段その地その地にて、江戸にてよろしきも上手にて請あしき事もあり、又上方の女形とても、江戸へ下りて請あしき事も有事にて、いづれ四五年も居



なれし上ならではわけがたきものなるや、一體に昔より申ならわせしは、女形は上方の生立がよく、立役は江戸がよひといふ事にてありしが、江戸生立にも名人の女形もありし故、是に限し事にもあらねども、先は女形は上方のかた、能見ゆるぞかし、昔今と違ふ事、女形には多くありて、役がらの損とくをしらぬよふ成事折々見ゆる也、先女形は、假初にも男らしき事をせぬが心掛ゆへ、平生とても其心持にて暮す事なるに、又しても菅原の狂言に、女形より覺壽役を勤め、景清が妻あこやの役にて、景清の仕うちある時は、平井權八の役を勤むる事、折としてありたがる、是等は心得違ひとやいわん、仕手かたの大き成損なるべし、先ひやうばんよろしければ色を失ふ事、またあしき時は惣座中の疵となりて、其身の損たる事にしたる事なるべきに、夫に心の付ざるは、外目から一向にしれかぬ事ども也、善惡ともに損を捨て、持まいの女形の方宜敷事なるべし、元祖芳澤あやめは、若女形の名人として、三ヶ津に其名高く、今に今にあやめ仕置きし事いろ／＼ありて、人のゆるせし名人なりしが、年長じてより女形はつとまらぬと心

付して、元服の上芳澤權七と改名して、立役と成しが至て不評判にて、漸々一ヶ年勤めしに、翌年には抱へてもなきくらひにて、また／＼思ひ直して、元の女形と成て、芳澤あやめにて出勤ありし所、大評判にて誰續くものもなき大立もの、自然と色を含みての仕うち、昔に見増程にして、見物の請よく、是身終るまで評判替らざりしよし、古き人の物がたり、さすれば女形はいつまでも若女形の方よろしきか、女かたの躰をくずさぬがよきと思ふ也、又近年にては、尾上梅幸女形より元服して立役となりしに、評判よかりしに、上方にて元服するならば評判もいかゞにや、其地其地にての違ひも有べき事にや、立役も持前が宜敷、敵役は愛敬をとらぬもの、よし、實惡はすぎかた宜敷と、芝居見巧者な人申されしとかや、さればこそ昔より申傳へしにも、時代狂言は江戸がよろしく、世話話狂言は上かた役者が手に入たるものといふが、中にも女形は上方仕入がよく、立役實惡敵役は江戸仕込がよひといふ、其中にも江戸根生にて、二代目瀬川菊之丞といふ稀もの有しに、世をはやふして極樂の舞臺へ行事、今に／＼申出しぬ、是近代のわか女形お



しむべし、扱又役者にも、上運下運もあるや、いろ／＼にして思ひの外早き出世あり、またいつ／＼までも出世の出来ぬ役者あるは時節もあしく、座組よき芝居へすみ合せ、役廻りもよく其役をでかす時、段々と見物の目にも付て、出世も早い也、折として下役者なども其下る時節によつて、大に違ひありて、損徳も有べき事にや、縦令堺町へ我に類する役者下る時に、役廻りあしく、江戸氣に合ぬ狂言などするならば、不評判にて取かへしは六ヶ敷もの也、下り役者にさへ時節ある事なれば、江戸に居付の役者は座組を心得べき事なり、近き事にて、上方にて名人の聞へありし淺尾爲十郎、ふきや町へ下りし時、堺町へは四五年も待にまちし中村仲藏下りし事なれば、江戸根生のひろき強き秀鶴の下りし故、奥山上手ながらも評判どつとせず、是折と時節のよしあし、下り役者のくだり下手ともいわんや、扱其中に片岡は弟子ながらも、折よき時節に下りて、おしや正月屋が死去せしも歎きの中によろしき評判、夫には引替淺尾の評判、芝居見巧者の人申されしは、随分下手にはあらず、舞臺のてい藝のいみ合、成程立もの上手のしなしながら

も、下り時節あしく其上役廻りあしく、おしや評判どつとせずして、上手を空しくのぼられし事よと咄されしと也、役者といふものは、至てむつかしきものにて、上手名人と呼ばれても、其役者狂言の模様によつて、不評判を請るもの也、しかしながら役者といふものは、藝道の中にも、其身に花實とも揃らねばならぬ事のよし、其花實とも揃ひし役者は稀にして、花はあれども實すくなく、實ありて花なく、花實そろふ役者はなきものなる由、其花實と揃ひし役者は、年長じても老込事おそく、花ばかりの役者はしまらず、また實計の役者はきみしく、是につれて舞臺もはやく折るもの也、扱狂言に目のきく役者は、顔に狂言を持つ故に、心にはなをさらなるべしとは、いゝ目がきくとて、舞臺に出ると白眼廻ることにてはなく、狂言を心に持て、目顔でする狂言は、いくらも有事也、心がけあしき役者、出世は成がたし、役者の立役實惡によらず、病氣に是ある節、中役者より替りをして、其替りを出かして、見物の目にとまれば、自然と出世の小口となる也、昔より此類數々見聞したる事なり、其外に役者も心ごゝろにて、種々さま／＼の心持ありて、お

かしき事もある也、氣持によつて、舞臺も夫に應ずるもあり、又平生の人付あしく、狂言にかゝりて、けん物に愛敬ある者もありて、定りし事ならねども、多くは平生の心持と、身持にしたがひたがる者なれば、役者のつゝしむべきは、身持なるべし、平生は心持が多くば、舞臺へ出る事ある者也、古人の嘸しに、ある時秋の狂言の相談に、古人澤村訥子<sup>高助</sup>宅へ、古人市川柏庭、元祖坂東薪水三人寄合て、暑氣の時分たる故、物干へ出て夕涼みながら、狂言の相談して居る折から、夕立雲おこりて雷しきりに鳴出せしに、柏庭には兩人え斷り母の雷嫌ひと急き宿許へはせ歸ると直雷鳴わたる、其時彦三郎には、自我經をよみ出す、亭主訥子は、夕立のけしき心のすゞしさと、家來を呼て、是々ぶつかけを百があつらへてこいと言ひ付しとなり、是等は藝道の事にはあらぬ事ながら、役者の心ころを思ふに、心持は夫々違ひて、舞臺も其心持に隨ふにや、扱又役者の覺よきあり、覺なきものありて、これには相手になるもの至てこまる事也、夫に付ても古人市村羽左衛門家橘といつしは、若大夫の節は龜藏とて、和事所作事の名人とよばれしものなりし

が、いたつても覺へあしく、淨瑠理の所作事または長唄の所作のけいこに、いつもく覺へあしきゆへ、手前宅へも招きて、けいこしても兎角覺へかねしが、大夫元の事故に、樂屋にてけいこの外にも、手前宅へも囃子のもの、淨瑠理大夫を呼てけいこしても、兎角覺かぬる、其内に外役者は、けいこも熟して、はや中さらへ大さらへといふ折からにも、相手になる役者は勿論、そばくのものまでも氣のどくに思ふ程覺へかね、翌の初日を氣遣ひあんする事にて、早初日にいたりて、本舞臺にかゝり、はや淨瑠理所作にいたる所に、けいこの節とは違ひて其間拍子のよさ、見物はよねもなく、相手の役者はいふに及はず、淨瑠理大夫はやし方のもの迄もきもをつぶす事度々ありし事、今にく言ひ傳へし、誠に名人といふべき也、



## 芝居乗合話五

問ていわく、狂言作者といふものは、至て博學ならずとも、諸事讀かぬる事にて、作者はならぬ事と思ひの外に唐詩選もよめぬ族見請候が、いかよふなるものにて、狂言をつくり作者を致事にや、

答ていわく成程作者の事はあらかたにも、儒佛神の道をも辨へ、軍書をもよくそらんじたるものならではならぬ事といふものゝ、あながち夫にも限らず、此狂言の作意は、古來より狂言作者の名人と呼ばれし近松門左衛門、近來にては津打治兵衛など、いひし名人、文才のものもありしが、兎角書籍にかゝる事にもなきとはいへども、赤本のむかし物語のみにもあらず、神祇釋教戀無常のわかちを第一と元とりて書事ゆへ、一通りには參らぬもの、殊更に役者／＼の人物を見計ふを專一にする事なれば、文才よりは時の作意、景様をのみとせしものゝよし、昔より名人の作者の物がたりを聞つたへ見るときは、その作意の心持は大きに相違せし事のみながら、是も時につる

る事ゆへ、是非もなしとはいへ、此程にては名作者は出來ぬ道理也、昔は三座ともに顔見世座組に掛るには、先第一に狂言の立作を抱へて、其作者相談の上にて、役者誰をさがしら女形敵役誰々と相定りし事也、しよじまた狂言も、其作者の思ひ付をあんじて狂言をつゐるも、誰へ聞合もなく書上る事なれば、名作も出來しと也、今は夫に引かへ、座頭女形の手引をもつて、作者の身分極候、誰が座頭ゆへ作者は誰といふ様になり行、扱又狂言の事とても、座頭若女形の座頭へ、當顔見世の狂言に、何ぞ思召もあるやと、狂言作者より役者へ尋ね、其役者いろ／＼好み事ありて、當春はかよふの役、また秋は此役たりし儘、此顔見世は目の替るよふに、是をあれをと役々のあつらへ有て、中々狂言出來ぬ筈、夫故近年の狂言、二ツ目より打出しまで、一幕／＼切の狂言のごとくに相成て、見物には一向わからず、夫は何故なれば、作者の意味とんとすたりて、幫間同様に立ものゝ、役者の袖にすがりて仰せ書にする狂言故、一向にわかり兼ね、又其中に上方より、數代の古狂言本を買出し、此狂言は誰がしたの、古人中山新九郎と三枡大五郎、女形は二代目よし



澤あやめの仕置し役、是を誰にしあれを誰にしてと、狂言を作らせし類する族もあり、是等は狂言作者ではなく、古本の買出し、看板屋、板附には狂言作者とあるは笑ふべき事也、其作者を高金にて抱へ、古本の狂言に金をこしらへ、芝居する人もあり、是等の役者よりは、江戸の幫間作者のかた少しはとりへあるかと思はるゝ、しかし今狂言の名題なども、輕薄のみ聞へて、大名題に座がしらの名をあらわし、又は女形の名をしゆくし、見物の思わくにも構わず、此名題といふものは、狂言の躰をふくみ、又はあらわすものゝよし、中昔顔見世の大名題に、木每花相生鉢木といふ名題、梅櫻松をあらわせし名題、狂言作者のはたらきと、今に咄し傳へるよし、狂言の事よりは我身の上を大切にする事にや、座頭の名を片取し名題故か、今の有形にては、名題もよくは出来ぬ道理也、役者を名題にとなへこむは、あまり／＼輕薄らしく聞へると、芝居見巧者の人いわれしと、その上新狂言上りても、先座頭又は女形の座がしらへ、内よみを聞せ、あしき所はあれこれと差圖を請、直し／＼した上にて、惣役者へ讀聞する事ゆへ、二枚目三枚目の役者は、氣に入ぬ

役ながらも、それなりにすます事故に、座頭の外役がらあしく、見物の目にも氣にも叶ひかね、不評判の元と成事、とかく餅屋はもちやのたとへのごとく、狂言の事は作者に任せ置は、其役者の持まへ又はなりかたち相應に役をふりわけけるが作者のもちまへ、我つらの惡敷をしらず、なりふりにも應せぬ事を作者にあつらへ、狂言に取組ゆへ狂言までさん／＼になる事、我身にはしらず、いつも／＼狂言の好む事、そばからは輕薄に譽そやせば能く心得、又しても／＼狂言あつらへ能事もあらんが、先は我身の事は作者まかせにしたきもの也、是も根を糺してみれば、作者より此様に役者にくせを附しもの也、全く作者の本意を失ひし時代の成行、今更いふてかへらぬ事ながら、作者の威おとろへしは、昔元祖柏蔭團十郎並ひし時座頭たりしに、作者の立は津打治兵衛とて其中合よからず、顔見世前本よみの當日に至て、先一通り本よみいたせし所、團十郎氣に叶ひ兼し様子、其時又本を一通り本よみせしに、またもや團十郎心に應せざる趣、其節津打氏少しもいからわす、三度目に又候や本を出して讀みかゝらんとせし時に、さすがの團

十郎感じ入、誠に名作者かな、一通り二通りと本よみ納りかねしに、少しもいらわす、一通りさへなか／＼ならぬ事成に、二タ通り三通りの心がけ、外人のおよばざる所也、此上は貴様思召の狂言、いづれ成とも差圖有べき也、其狂言早々けいこにかゝり度よしにて、早速稽古に取掛り、其狂言大當りなりし由申傳し、さすれば其時分も座頭へも相談の上、狂言を書しとは見へず、今にては人もさかし、先我書あげし狂言をつかれぬよふに突そふ成所へは、聞合／＼して氣に叶ふ様に書事ゆへ、狂言もよくは出來ぬはづ也、扱又近來にては、淨瑠理の文句は、堀越榮陽ふしぎに珍らしき文句を書出し、文字太夫さかんに時行しも、文句の書出しよろしく、其上文字太夫の節付おもしろく殊には仕手かたにも、家橘慶子二代目露孝、杯の拍子きゝの名人、三拍子揃ひとはいふものゝ、一には淨瑠理文句より出て、堀越氏の手がらなるべし、當時にても段々上達の作者多き中にも、淨瑠理のもん句は櫻田左交なるべし、狂言作者も堀越金井までは少しは昔のかたち残りて、作者らしくもありしに、いつしか時として狂言作者立もの役者の筆取同様になり

行し、しかれば昔の躰に打過なば、時代につれて芝居を浪人するよふに成べき事、せひもなき次第也とはいへ業さへよくば、人もうち捨てまじきや、ア、おしひかな時節いたらず、秀才の作者隠れて、此末名人の狂言作者出來まじきや、はかりがたし、

問ていわく、芝居にて座頭と成役者は、至て重く取扱ふものにして來りしは、何様の譯合にせしものにや、又年若にてもなるものにや、

答ていわく、座頭といふものは、樂屋一式惣役者を支配する役なれば、藝道の功を積で自然と此役に至る事にて、芝居道にての重役にして、狂言の事まで心得て相定故、役者はいふにおよばず、芝居掛り一體に重んじらるゝ身分にて、此座頭たるものゝ心得にて、芝居も六ヶ敷なり、興行も續きかねる者也、扱また年功もなくして座頭に居る事は、當時江戸にては市川團十郎の名前一人に限ること也、此市川團十郎といふ名は、御江戸根生の名にして、京大坂にても役者の惣卷頭たる事誰かいなやあらんや、當市川團十郎も、若年にして座頭の位に居りしが、おしいかな花の盛を無常の嵐に吹ちらし、廿二才を一期として、極樂の芝



居へ趣き、しばらく團十郎の名前中絶せしは残念の事ども也、其外當時座頭の役者、彼是とあるが中にも、師匠の名を繼、又は内縁によつて大立もの、名前を譲り請て、猶又藝道執行の功を積みて座頭とも成事也、然るに近來先中村仲藏は、舞鶴勘三郎の弟子にして、藝術執行の力を以て、中役者よりの名の其まゝ、座頭まで經上りしは、當代は此一人なり、先中役者といふは、一ヶ年の給金三十兩ぐらい迄とりあがるには、藝道をはげみ心がけねば、其くらいにいたらぬ事なるを、其中役者より段々と經あがりて、給金八百兩の座頭にいたる事は、中々通りにてはならぬ事也、其外にも、中役者を勤めて、今座頭に成し役者もあり、其役者は昔の事を思ひあたりて、いま座頭の位に居ても、萬事に行わたりて、芝居の事も支配人帳元とも相談して、一日も多く日數を興行するよふに、芝居掛り合大勢の事をいたわる故、其心からは大金の人芝居、あたり不當りによつて、金子の調達出來不出来の節は、我取給金は跡へ廻して外役者へ渡させ、其上にも高金の役者へは、帳元ともぐく無心をいふて、興行の初日をはづさぬやうにする、座頭の心入と

する事にて、兎角座頭が悪敷芝居は興行六ヶ敷ものよし、役者とても藝道の事、かりそめにも金銀にかかわらぬやうに致したき者也、座頭まで經あがる中は、大給金をとりし身分故、心あるべき事ぞかし、たまぐに右のごとく、芝居の爲を思ふ座頭あれば、却て役者仲間にてあしさまにいいひなす族心に耻べし、近代にての座頭は、木場の柏庭にとゝめたり、此人の有し内は、芝居もおだやかにてありし由、いまに申しぬ、扱又近來はやゝもすれば、座頭たる立役をかきのけて、女形たるもの萬事を作略して、思ふままの振舞、かりそめにも女のかたちを寫す身すがらにて、夫とたとへし立役を尻にしき、時としては身にも應ぜぬ役がらにて、立役の事を仕、また有時はかげ清が妻あこやにて花道へかゝり、六法振ての引込、打出しに先今日は是切をいふは、女がたにはあるまじき仕内ならずや、むかしは女形の身分にて、立役なりの役をして、當りをとりしを耻と心得し由、斯あるべき事也、此外にも座頭たるものは、狂言の事にも我弟子または引立てやりたきとおもふ役者たりとも、依怙ひゐきなく、作者にまかせ、至て仕がたき役廻り等



あらば、其節狂言かたへ差圖して、その役者の役立よふにして遣したきもの也、狂言の事とても、作者に任せ置よふに、手前より仕て見せると、役者も其心入にてなるものよし、狂言も若手又は見物の請よき役者に、役を廻して我仕打は、狂言のしまりくを引請てする事、また狂言ふあたり等の折からは、座頭の役一幕引ツかへてすべき事のよふに言し人も有し也、又舞臺にても不入の節、外役者の狂言をなげやりにする事を心をつけ、大入は格別不入たりとも見物を大切に思わば、きやうげんをする事は有まじきと、古人名ある役者は言ひとかや、夫に引かへて、當時の座頭は、九月前にはあらかた出替りの定る故に、我身分重年ならねば腹あしく一ヶ年は惣樂屋を預り預り身分を顧ず、彼これと少しの事に難澁をいふて、九月中より病氣と號して、舞臺を引て心あしく、其座を別れる族も儘はあるは何事ぞや、夫きりにして役者をやめるといふ身にてもあるまじ、又來年は勤る事もある、江戸三座の事まわりくしても、又勤ねばならぬ芝居を、あひそふわるく一生もつきあわぬよふに別るゝは、ざがしら迄上達したる身分には、有ま

じき事ならずや、來年外芝居へ極り行身也とも、定り月までは其舞臺を大切に勤て、狂言舞納には口上を述て、きれいに別かるゝが座頭の身の行といふ所へ氣を付たらば、ならぬ事はあるまじ、何事も役者の風儀古來とは大に相違せし事なり、江戸根生の役者は、其身計りにあらず、師親ともに此三座を勤執行して、段々と立身出世して、大給金をもとるよふになりし、全三舞臺と思ふ心からは、大切に心掛けきれいに別れたき事なり、たまゝにも其心掛けある役者あれども、是を稱美する座元帳元もなきや、おしむべしおしむべしと、芝居物巧者の人、者かたられしと成、問ていわく、當代の役者は昔の役者より巧者にて、上手のよふに思はるゝが、我等見違なるや、答て、成程御申のごとく、當時の役しや、むかしの役者より物事器用にて、上手にみゆることはむりならぬ事也、しかし其事には、いろく差別ある事にて、芝居巧者の老人もの語いたされし事、一ツ二ツを御咄しいたさん、まづ昔の役者と當代の役者、藝道に違ふ事はあるまじきか、藝をこまかにするは當代の役者にて、心で藝をするは昔の役者、是ゆへに内外に

藝道の違ひあれども、當時は人氣もかしこくして、自然と見物の請るより、はやく見物の見た目のよろしきかた見物の氣に叶ひ、聲も掛る事ゆへ、損とくにはまづ近頃の方をとくと心得、譽らるゝやうに心づく役者おほく、また昔の役者は、一流を心がけて、名人の仕置し事にても、人の眞似をせず、立役は格別、和事師などいふ年長じても、拵へをすりはがし忤にする事なし、今も其事を守る役者もある昔の風を崩さず、善惡ともにむりにこぢつけのあたりを思わぬ故也、古人中村少長は、年終るまで色事仕の躰を崩さぬ心持の藝、古今の相違ある事のよし、先年堺町中村座にて、二代目木場の柏庭、顔見世狂言に本名秩父の庄司次郎重忠にて、假に梶原が家來あねわの平次となりて、秀ひらの屋形へ上使に來り、よし經の首請取のひら敵にて、かろぐとしたる敵役にて、則義經の身替りの首を請取て、花道の中程まで來り、尤一人舞臺にて、上下衣裳其姿もかへずして、本名重忠となりし所、誠に心持の仕うち、是やはらの中が重忠と見物へ見ゆる仕打、みな人感心して、今に申出す事也、此仕うちは中々外にする人はあるまじ、あねわの平次の

形にて、姿をかくす心の重忠、藝術の裏表名人ならでは出來ぬ事なるべし、又古人中村慶子は、娘道成寺または七變化の所作、其外種々の所作を勤ても、舞臺におゐて見物を後にして、湯茶を吞し事なしとかや、夫はいかにといふに、所作事に掛りても、心のあらたまらぬ故に、いき切も格別にもなしと言ひしとかや、また古人中村秀鶴は、舞臺の心がけも格別のものにて、縦令ば狐の狂げんを勤るにも、終りには狐をあらはさぬ狂言にても、肌には狐の形の縫ぐるみを著て、本體きつねの心持にてせしよし、近代の名人にて、中役者より段々立身して、既に先年木挽町森田座にて、安達が原の狂言の節、八幡太郎の役を出來せし砌り、四十兩の中役者たりしに、其翌年葺屋町市村座を勤め評判よく、夫より堺町ふき屋町つとめて日に増の出世にして、九ヶ年目に森田座初の座頭と成、八百兩取となりしは人の知る所、其後上がたへ登り、評判よろしかりし名人、此秀鶴中役者の名のまゝにての大立もの、先中村魚樂兩人のみ、外々はよろしき立ものの名を繼てより、段々と出世して、座頭にもいたりし事也、しかしながら、能名前を請繼し役者も多くあれ



ども一體の下手ならば、出世は出来ぬ事、名前よろしきを、其人によつてけがす族ありたがるもの也、

或役者、古人訥子へ尋ねけるは、色事仕といふものは、いたつて六ヶ敷、仕がたき役に候が、如何いたしてよろしからんとたづねければ、其時の訥子の答には、どふけがたの心持よろしきと答へし由、古人嵐雛助、和田合戦の狂言にて、則雛助板額の役たりしに、門破りの段におや嵐小六見物して居たりしが、打出して宿へ歸り、今日板額の門破りの仕うちいかゞ心得たるや、門を破らんと押勢ひ見ぐるしといふてかゝりし儘、其翌日心を付ていたしけるを、則小六見ぶつして、又打出し雛助に向ひ、門破りの所いかゞ心得しや、きのふより見得あしといふて歸りしまゝ、其夜いろ／＼とこんたんして、門破りをいたせしに、また／＼見物して宿へ歸りて、今日の仕うち初日よりなを／＼悪敷、如何心得あるべしといふて歸りし儘、其夜は寐もやらず、いろ／＼と工風して、第四日目に門破りの幕、心を附て勤、宿許にて小六にむかい、今日の仕うち御心に叶ひしやとたづねし時、小六答る

には、こん日の仕うち至てよろしく、定めて見物の氣にも叶ふべしと言しが、はたして大評判にて、大入りなりし由、其仕方を親小六もおしへず、又眠獅もその仕うちをとわずに、工風をこらし、こんたんせしは、板額にて門にかゝり、長刀をかひこみ、其長刀をかひ込し手にて、上著の裾をつまとる様に持添て、片手は門を押たるよし、今に／＼思へば、少しの事ながら、門にかゝり押破るに、女子のちからを入る心得にも至て能みへなり、斯のごとき事どもは、役者道にはまゝある事のよし、見巧者たる人申されしよし、

又昔古人市川柏庭、大佛供養の景清にて、重忠は古人助高屋調子にて、景清法師武者の出立にて、長刀をかひ込で、本舞臺より花みちに掛るとき、後の幕をしばりて、訥子重忠にて立出、くせものまてと聲をかくると、景清柏庭本舞臺へすら／＼と立もどりて、何がなんと、いふ仕内の所、初日景清本舞臺より花道へかかりて、重忠の聲をかくるかとおもふに、聲をかけずもはや聲をかけそふなものと思へども、兎角聲をかけぬ故、是非なく花道をあげまくの方へ行しが聲をかけず、いかにや思ふうち、はやあげ幕際にいたり、



最早あげまくへいらんと氣をいらち、今一足にてまことに入らんとせし折から、後よりくせものまでと聲をかくる、其時景清思わず振かへりて見へある、おなじく本舞臺にて、平家の侍悪七兵衛景清までと聲をかくる、其時柏庭花道より、本舞臺へ來りて、訥子重忠に詰かけて、何がなんと、言ひし勢ひ、すさまじかりしよし、今に咄し出す事、これ訥子の心持、我役重忠よりは景清に藝のはづみ譲りてのし内ゆへ、柏庭の振かへりし身ぶり至て勢ひをまし強くみへし故に、景清の出來よろしかりしとかや、役者の仕内には、いつもく有事にて、我より相手の役者仕よきよふにせりふ廻しまでも、心を付て渡したきもの也、せりふ廻しのわたし様にて、相手の役は格別見物のうけよくなるものよし、上に立ものは下の役者を出來させたきもの也、兎角人にはかまわず、我のみ聲のかゝる様に心掛るは、下手のうち成べし、昔は敵役はにくく敷、少しにくみもおかしみなきよふにせし故に、どふけがたといふものなくてならぬ事なりしに、近年は敵役よりおかしみをおもとする故、どふけがたはいらぬ様に成し、どふけはなくてならぬとい

ふは、昔の狂言にしうたん事の筋、長々とありて、見物の氣めいる時には、どふけがた何かおかしき事をいひちらして、見物の心持を引立てる事なりしに、今は敵役よりおかしみをする事とは成しと、時につれていろく替り行事、むかし大評判大當りの狂言も、今は見物の請あしく、折節助六又は鳴神の狂言、何れとも毛貫の狂言は、今の人には請けぬも道理、昔の赤本金時朝比奈地獄めぐりは、今の子供には氣にいらす、景清が善玉惡玉の手に葉、左交が狂言の和らかみと、年々に替りゆく事なれば、役者たるものもむかしかたぎ計りにても參らぬ也、その心くにて、くわしき事は好人に尋ぬべし、長ものがたりを聞書せし折から、少しは風の吹出て、思ふみぎわに船も著きかねし故、船人帆を廻して、名良中嶋とやらんいふ海邊によつて碇をおろし、暫風待せし儘、猶ゆるくとのものがたりのありし、其内に風心よくなりし故、思ふかたへ船も著しに、よもののがたりも聞書も、己がさまく別に別れ行、乗合の咄さへ、跡と先とに書文字も、假名遣ひさへしらぬ、身の耻を思ふ也、夢になれ、其夢漸を書集め、夢ばなし

乗合船と題して、唯他見を耻る、もしや見る人あら  
ば、笑ひ給へゆるしたまへ、

芝居乗合話終

## 作者店おろし

### 凡例

歌舞妓寛永元甲子年中橋、同じく九申の年に禰宜町へ行て、慶安年中に堺町へうつる、今天保十三寅年に、淺草新地猿若町三丁に櫓をあげて、御恵みの芝居興行と成る、かわる世のならゐにて、昔の狂言作者はいざしらず、寛政の頃より、我したしみのものゝみ、業は捨てて其人物おかしみなど、数々のはなしを残し置んが爲にしろす者、由縁ある人見てかならず腹たつ事を免し給へ、高下は年々の番附にあれば評さるに云ず、其物がたり其まゝにのこし置も何の爲にもならぬむだ書は、天保十四卯のとし五月雨に筆添ふる事

初代櫻田の門に入て四十歳の間  
噺ししろす者は

三升屋の翁



作者店おろし

櫻田治助

東都歌舞妓作者、近年の高名櫻田氏として名を治助と呼び、俳名を左交堀越二三治の門人菜陽の跡をしたひ、世話狂言名題の書物杯に、當世を加へ古今の稀ものなり、四十年來達者作者勤て、中にもまた豊後節淨瑠理の文句に妙を得て、筆に數る冊の青表紙に残す、柳嶋妙見の境内に淨瑠理塚を建て、其碑名に發句辭世を残す

花清し散ても浮む水のうへ

左 交

左交は松本幸四郎錦江をしひて、幡隨院長兵衛などせりふの口合に妙を得て、世話狂言の時代遠趣向を取組んで面白し、春狂言曾我物語の名題は、五月迄殘して、一番目より四番續を出し置ねば、心に叶わぬ人なり、古來の誼を專とす、

曾我まつりの句に

神祭る皐月を曾我の世界かな

狂言作者

左 交

この老人、度々店がへせし事を好む、淺草花川戸に住

作者店おろし

で、老後辨天山にて卒す、花川戸の宅に柳の井の隣故、柳井隣といふ、

法名

默了院左交日念信士

文政三丙寅年六月廿七日

七十三歳

左 交

下谷わら店法養寺に送る、

左交門人いづれも達て作者勤る、

笠縫專助 米夫

村岡幸治 龜玉

木村園治 園夫

後に紅粉助又るんふ

曾根正吉

清水正七 左曉

松嶋半二 調布

後に田川章助

又二代目

櫻田治助 左交

又其後

松島てうふ

其餘の門人は略す

一代々嘶しは口分をしるして其名の跡へいたす、

附ケ文の事

左交はよし原好にて、夜毎に這いらねば寐られぬといふ人、中の町をへん通りて、兩側の茶屋女房呼かけるのを嬉しく思ひ、江戸町より二丁目京町の格子で嘶して、なじみの女郎あそこからも、爰からも、左交さんくといわれたく、新造禿に仇口いふて、中にも鶴屋の見世でいまだ知らぬおいらん一人有て、どうかしてアノおいらんに物を言かけられたると、ここに思ふて趣向して、其春の正月に作り花の梅の枝に文を書いてくゝり付、けそう文の心にて名宛をして、こまぐと認め、格子から梅の枝を内へなげ込み、あしたの晩また格子へたつと、その女郎立てモシエゆふべの御返事をといはれて、逃出せしはなしもおかし、

## 木挽町歸り船

顔見世に、花川戸より木挽町へ行歸りとして、江戸橋から小船に乗、船宿へ錢を出して、炭一俵買ふて、右の炭を火鉢へ入、火をくわつくとおこしてあたる、小あみ町通り行合ふ家根ぶね、深川通ひの客など、アレ小舟に炭をおこして櫻田が乗て居る、あつたかいと思ひ付、きついさくら田じやアねへかといわれる

を、是評判の第一とする趣向なり、

## かばちやの嘶

葛西のせんざい賣、かばちやを籠に入、長屋へ賣に来る、内より左交立出て、モシかばちやをみんな買ませうといふて錢を出し、のこらず買取て其内のかばちや二ツ残して、コレくこの二ツはどこぞへ持て行、賣ッて行なさいといふ故、商人びつくりして、なせ又二ツ残してお買被成ませぬと云、イヤその二つは洒手に進ませうといふ故、この商人嬉しく、夫は有がたふござりますと、荷をかつぎ又町内の長屋へはいり、今残らずかばちやを買ッた内は、何商賣か聞たいと、路次口に立て居たかみさんに、モシあそここの酒屋の裏の三軒目の内は、何御商賣でござりますと聞けば、其女房三軒目の内なら櫻田治助といふ狂言作りの内だといふ、是にて葛西の商人田舎へ歸り、村中へさくら田の嘶しせし事、まつた、かばちやの惣仕舞にて名を賣し工風なり、

## 米櫃

淺草の地内、辨天山の池のはたに住し時、戸棚の内に後口へ穴をあけて有、いかと問へば、この内の米び

つへ米を入るとき、貳朱が米見ぐるしく、前の戸棚の戸明た時、米屋が來た事人にしれる故、後口へ穴明けて米を入るこんたん、至てみへぼうと知るべし、

#### 門人正七の異見

北山先生は、數冊の書を日々に見てひまなきゆゑに、雪隠へ行時は義太夫本を讀しといふ、貴様本をよむ事嫌らひにして、心掛あしく、兵書をみれば心に和らげ、歌書をみれば心にかく持て、俳書をみる時は心に風流を用ゆべし、このころにて狂言を考へて、せりふ付べしといふ、この異見は正七我が師匠におしへられたる事、人に語りしをしるす、

#### 金井三笑

近代三ヶの津の歌舞妓作者にして、江戸狂言の仕組、作者の誕、其異風誰あつて及ぶ人なき、古今の稀者なり、世に三笑風と殘せし人、櫻田も譽たる事聞及ぶ也、尾上松助小詰の頃より、取立たるはこの三笑にして、家名を井筒屋といふ、與風亭と名に高し、

#### 増山金八

達テさく者にて、白銀の半四郎金太郎三日月おせんを名のこす、豊後節淨瑠璃を數冊書て、安永天明の

頃さくら田と肩を並らべし作者なり、

#### 並木五瓶

寛政の末大坂より都座へ下りて勤る、宗十郎座頭らの顔見世間霜月に有て、間訥子名歌の譽といふ名題、小町の世界前に嶋原の世界はふ入にして、間月に狂言かわる、翌年春江江戸砂子吉例會我、二ばん日に宗十郎源五兵衛、下り仁左衛門三五兵衛、菊の丞の小まん五大力のはじめ、芳村伊三郎のいつまで草のめりやす、今に残りて五瓶の名高し、是より年々手柄ありて、數多狂言いだす、辰岡万作の門人にして、上がた狂言江戸へうつしたるはこの人より始る、風流人なり、

#### 五ヶ條の誕

第一氣てん

第二きまゝ

第三上根

第四大たん

第五愛きやう

作者は此五條を守るべしといふ、

#### 名題の辨

江戸の作者は、名題の書物に流義有て、おもしろき作意を取交、かたりといふもの筆に顯す、上がたの作者、名題の書物はさらにかゝはらず、土地風儀と知べし、或年中村座達作り櫻田客分、並木は二番め、左交



一番目の名題に、富士三升幸會我、幸四郎團藏と不和にして立別れ、五瓶は團藏の作者故、櫻田並木にいふには、五瓶さん二番めの名題は如何といふ、五瓶ハイ二番目は幡隨院長兵衛といふ、櫻田又いふには、イヤモシアノ名題はなんと申ますといへば、五瓶また幡隨院長兵衛といふ、櫻田は悔りして手をうち、さすがは五瓶大人なり、中々江戸の作者に向ふて、名題なぞは付られぬもの故、斯幡隨院長兵衛とばかり付しは、適れの作者なり、並木を譽る兩人名人にして、後の噂さに残る、五瓶は作者仲間を我が宅へ呼集め、かほみせの顔寄せといふ事を始めしは、此五瓶より今に残しぬ、

天神祭

二月廿五日は北野天満宮菜種供にして群集する、五瓶毎年其自宅にて、菜種供を催し人を馳走する、此日の客に酒宴して、菜種の飯を出す、菜種飯といふは玉子のきみをこまかに粉にして、飯へかけしたじで喰する、其いろ黄にして菜種に似たり、作者はいふにおよばず、役者一座の衆中呼、當日天神祭行ふ、又作者の部屋にて近年天神祭行ふは木挽町より始る、

風流

並木五瓶は並木舎といふて、江戸座の俳諧を專にして、日比樂しむ附合に、

兩國の二人り禿は柳橋

この句通り句にて人よく知る處なり、附合至て面白し、

横店樂見世

並木といふ名から思ひ付て、横店に表間口二間の樂見世を出し、淺草雷神門の通りに、雷神風神の門、破風作りにして敷石とみせたる半疊のたゝみを敷、雷香といふ丸樂に、風の振出し樂をあきなふ、門人に並木陸六を雷次と改、また高柳宗次を並木風治と改て、雷風の神兩人弟子にして、己れは觀音の芥の心にて商せしは心奥ゆかしく、五瓶が嘶爰に略す、横店住宅にて死す、

法名 善丘淨巧

寺は下谷池の端正光院

村岡幸治

文政二己卯年七月七日

俳名を龜屋幸四郎、錦紅の甥左交の門人にして、寛政の末江戸町中にびいどろひよう草のかんざし流行する、此年の森田座の顔見世、太閤記の世界にて八百藏

座頭の大名題に、八百八町ひさごのかんざしと云を出す、師匠左交この名題を聞て、逆もの事にひさごのさし物とすればよい手強くてよしといふ、さすがは櫻田と譽る、其頃までは外座の芝居名題出る時は、作者みな見物に行しものなり、

#### 木村園治

同じ櫻田の門にして、園夫といふ俳諧を好み、松花堂を書、この人至てそゝかしくさしてせわしなき産れ、面鉢口先鳥によく似て、仇名を鳥といふ、淨瑠璃の文よくして歌道を學び、達作者勤て常世に付て、其後團藏の下り年より、三河屋付と成る、紅粉助と改名の年に、赤の口付赤か羽織袴へて、新宿へ女郎買に行、道にて人赤イ形をみて、人々指さし笑ふ、赤イ姿は紅粉助の名故、實は六十一の賀といふ、

#### 役者付

紅粉助木挽町に勤て、其年の内故ありて首を切られ、身上を失ひ、翌年の顔見世に割こみ、跡より這いるもはや役者附にかゝる頃なれば、箱少さく、名前出て三枚目四枚目の作者よりもほそく出て、番付ははや配りとなる、是を紅粉助見て大にいかり、立服して常世

へ欠こみ、一分立ぬ譯と成り、大もめにもめる、此時の地口「紅粉助さんはなせばそひといふ、

#### 道具見世

園夫女房お八重といふて、高輪路考といわれたもの、至てよきおんなにして、女房自慢故、お八重から思ひつきて、芝口へ道具屋をいだす、此邊はやしき近く、御國侍多く女房をみせへ出して、道具を商ふ、後に住吉町にて死る、門人に松六改名して出來嶋松露といふ、湯島天神前に住て、角力の行司を勤る、紅粉助の至つて愛臣ゆえ、爰に記るして餘は略す、

#### 鶴屋南北

元文の頃の役者元祖南北、孫太郎といふ、寶曆年中鶴屋南北の娘お吉といふ、初名勝俵藏の時分より女房と成る、今の南北よりは年號多くして、俵藏の始は乗物町にて、紺屋の源さんといふは南北が幼名なり、近來迄此紺屋海老屋といふて、材木町に残る、俵藏改名して女房お吉が親の名を起して、大鶴屋南北の家を立て、近代きせわといふもの、世話狂言の手柄多くして、中にも半四郎杜若女清玄、七役のお染、幸四郎榮賣足駄の齒入、三津五郎白藤、團十郎田之助など其外



評判の狂言數多あれど、俵藏の昔しはおかしみの狂言を書いて、徳次をつかふて、其後坂東彦三郎に付て、その子鯛藏を薪水の弟子にして鶴十郎と改める、此忤を相手として工風せし狂言のからくり、親の南北に書せて、役者を納めさまぐの狂言を出す、尾上松緑夏芝居大入、ゆうれい早替りに松緑と共に、相談あいてにして手柄多し、年々評よく、後々には南北三ヶ津の一大作者と成る、古今の稀者今に此人の狂言、年の内に一度か二度は出ぬといふ事なし、深川黒船稻荷の地内にて死す、

## 表札

南北は、本所龜戸村植木屋清五郎の隣に借地をして、表に小門を建、表札に南北とばかり印す、龜戸村は在るかた故、近所にて表札を見て、どこから越してござつたおかたなど、いふ内、このとしはやり風にて、村中醫師を頼むにも、龜井戸橋の向ふまで行ねばならず、幸ひ此頃おらが村へ、よいお醫者さまが、引越して來たと悦ぶもおかし、

## 火難水難

同所引越早々の秋、出水して疊を上たり、道具をはこ

ぶやらつかれたる所、筋向ふの内より出火して、わら葺の家根へもえ上り、それ火事だくと村中の騒ぎ、こいたご持て水を入れるやら、こいのひしやくにて水をまくやら、その匂ひ鼻をつらぬく計りなり、此年は水火の責に逢ふといふ嘶し、

## 女郎買

南北年六十餘の年の頃、駕籠屋新道に住、女房お吉は南北より年かさの老婆故、よぼくれて日には何度も同じ事ばかりいふて、殊の外老ばれと成り、しかし多年の夫婦合いたわり居りしが、いまだ男の事故少しは色氣もあり、ある時ひそかに辨天女郎買に行、しらぬ顔にて暮がた内へ歸り、夏の事故帷子の汗しみて其儘そこへぬぎ捨る、女房かたびらをたゝまんと袖に手を入れれば、やはらか成紙手にさわるを出してみれば、みす紙なり、是を見て老人同士夫婦喧嘩となるもおかし、

## 芝あたごの市

十二月廿四日、あたごの市にて、ふじうらの草履裏の付たるを、貳百廿四文にて買求め、歸りてその晩内の角に置て、翌日みれば草履の裏残らずなし、いかゞ不



思議とよくみれば、するめのまゝ皮にせしゆゑ、内の猫のこらず喰ふて仕舞し事こそ残念なり、

### 蚊屋

俵藏のむかし、高砂町に住時、机にむかひ書物にかゝりいるとき、女房の釜の下を焚付て、モシ湯がわきましたが米はどふなさるといふ、此事聞つけずやはり書物によりかゝり居る故、又女房米はどうなさるといふ、此さいそくに俵藏じれて、今少しまでといふ、薪がむだに成升といふゆへ、又むつとして、いま／＼しいやつ、ドレとつて來よふと、筆を捨て立かゝる、秋の末の頃なれば錢はなし、戸棚をあけて蚊屋を引出し、そのまゝ抱へて下駄をはき欠出して、横店の黒屋へ行く、四ッ角にて知りた人に出合、俵さんどこへ行なさると呼かけられて、その人俵藏が顔をみれば、顔色かはりかん癩の跡ゆゑ、又もやふしんにおもひ、どこへ行なさると問へば、ハイ殺しに行ますといふ、是にて其人は猶更恟りして、マア待なさい、ころしに行とはどふいふ譯で、俵藏イヤサ今蚊屋をころしにゆきますといふ、

### 文字の相違

勝俵藏見習に出た始めより追立に随ひ、金井三笑を師とたのみ、三笑風を專にして、出世立身して大作者と成る、高名もまつたく三笑が影なり、此人文字のはたらき見え、俵藏の昔より「その旗渡世といふせりふをかくのに、其畑をわたせと書、旗と畑との文字違ふ、又打出しに待ッ、今日は是ざりと書く、是もまづといふ事待と書も不思議、此事誰もいふ人なし、斯覺へしも大人にして稀者なり、

### 福森久助

始玉卷恵助の門人、後に喜字助、久の字憚る事ありて斯改る、本所の生にてたちまち出世して、三津五郎の取立にて、中村座今助引請の時分、始終此座を去らず、達作りを勤る、玉卷といひし頃、木挽町へ通ひける時、中橋南傳馬町左側に福守といふ筆屋あり、今に其内に残る、福盛久次の頃ふと思ふには、此うちの名こそ福守の文字を書替て、福森と苗字改て名のるべしと、久助自らの物語聞しよりあらわす、門弟に吉助喜市兩人ありて、狂言かた勤る、喜市後に中村を名のる、久助並木櫻田と同じ、作者と成りて三座に別れて、達作者勤る、寅年大火に淺草中代地へ別宅して、

本宅は本所安宅にあり、其頃吉原藝者おこよを連て來て代地に住、一人の出生を七郎兵衛といふ、或顔見世に、田名亦八を筆取にして、書物にかゝりいる、又米助といふ見習有て、七郎兵衛が守をして路次口に遊ぶ、亦八筆を（脱字あるべし）路次口の七郎兵衛が尻をば思入つめる、七郎兵衛わつと泣出す、此事三三度にして、久助夫婦其度毎立て我子をだます、亦八米助はおもしろがり、後にはこの事顯れて、兩人の者家を追出されける事こそおかし、

## 燒キ印

福森俳名を一雄といふ、詩歌連俳に心なし、一雄といふ文字を燒印におこして、手桶たらいへ燒キ印したるも、無風流なる男と察すべし、

## 松井幸三

初名鴻三と書、出勤の間もなく兩三年の内に立身して、源之助宗十郎の取立にて作者と成る、元は出家出にて佛學をして、江戸狂言にさそくよく、南北にしたがひ後々おのれが才智にて、適れの作者と呼れる、元祖幸三本町の新道に居宅して本町といふ、

## 二代目幸三

囃子の内より出て、若年に三味線を弾はじめ新幸といふ、本町の門弟なり、近來の出來作者なり、南北直江屋に隨ふ、まつたく鶴屋の影とおもふべし、酒を好み藝よくありて、座敷を勤るに妙を得たり、吉原揚屋町に住んで、たいこ持專にして、作者の業にはあるまじき事、しかし二代の幸三と云れし男なり、

## 本屋宗七

初武井藤吉、後豊嶋大東、豊嶋は豊嶋郡にして大東とは大作者といふ心、日本一と自名乗故に宗七を日本と人々いふ、元は龜井戸天神の社家より出たる人物なり、氣性たくましき男故、一寸見に恐るゝなり、

## 天國の劔

宗七社人の若年の頃、吉原通ひに差支て、或夜の頃ひそかに寶藏へしのび入り、天國の寶劔を盗みいだし、中の郷の質屋へ持行とて、道にて俄に空曇り、雨降て來り、大雷して足元へ雷落る故、宗七は寶劔を抱へて、業平橋に立ちすくむ、コレハ天の御咎めありしか恐ろしき事と、劔を持て元の道へ立歸り、其儘寶劔は元の如くにして、寶藏へ納奉る、

## 清水正七

櫻田の門人、三立目書にて、一度淨瑠璃も書たる作者、三立目まで出世する、始めは高麗藏錦升に付て、高麗屋釜といふ、中村座表手代奥役天王寺屋治右衛門が聲と成り、清水は本よみ、ひやうし幕の銘人にて、納らぬ狂言も正七が本よみにて納る、又拍子幕も幕に成らぬ仕組を、チョンと頭らを入れてキザミよく、引ッ立よふに拍子幕にして打ッ事は古今の銘人、其頃の役者拍子木をうつ者は、此正七に聞合、差圖を請て拍子幕打つ事三座一人と名を残す、其後團藏に付て、ひやし幕を打ッ、市紅幕のあんばいよく、心になひ氣に入となつて、拍子木にて外座より、身分買に來る者は此人一人にかぎる、

### 里蝶の嘶

清水日頃三味線を好みて心を寫し樂む、或とき上るりに、鳥羽屋里蝶出勤、舞臺にて後口より、正七里蝶が糸巻をまきて、モシ里蝶さん、三が下りておりますとてうしを上てやる、さすがの銘人里蝶も、此すうなしにはおそれ入ッたといふ事、

### 山門大道具

市村座五三の桐、山門大道具の時、長谷川勘兵衛名代

のがんどう大仕掛の始りにて、幸四郎石川五右衛門にて、山門の上にてながせりふ有りて、高欄へ足を掛けて恐れ入、鳴物成りチョン／＼としらせに付て、次第次第に此道具せり上るとて、此時下より出る、山門のひさし少しこだわり、ぎつしりと道具とまら、正七扇を抜て、右の扇にてひさしをチョイとつく事、是程の大仕掛竹田の口上じやが、からんだよふに、扇でつくとはおかし、此つゝめた心を正七に問へば、大道具のつかへた故、扇にてあしらふに此場の景よふなりといふ、

### 拍子幕

ひやうし幕の銘人と名を取し始は、仲藏宅間玄藏といふ役勤たるときにせりふに、婚禮のト拍子木のかしらチョンと頭を打こむ、仲藏いろ直しと白刃をみる思ひ入のキザミにての此拍子幕なり、正七ある時、持たる拍子木をうして一ッ落す、落たる一ッの拍子木とらんとする内、仲藏は婚禮のといふ、是はしたりと持たる一つの木にて、大盡柱へチョンと打かけ、其頃は柱けやきなり、此音よくして仲藏振かへりみれば、やはり右一つの木にてキザミを合せて打た



る故、人々譽てこれより拍子幕の、古今の銘人といわ  
るゝ、昔は拍子幕一日の内一つか二つ有てたまゝ  
事、役者も大達者でなければ、ひようし幕に遣はぬよ  
しの掟と知るべし、

## 柳川忠藏

増山金八の出にて、福森並木の取立同様にして、忠藏  
は書物うとく、業にかゝわらず、不斷遊所に居て遊  
ぶ、ト賀といふ、久助ト賀を頼み、世の中の人に交る、  
ト賀久助をたのみて、又芝居家業を任せる、後に此業  
を引て、淺草茅町二丁目へ、柳川左司馬といふ菓子店  
を出して、しばし繁昌する、ト賀は人を遊ばせる事古  
今の銘人、おかしき大鼓持にて、少しにくみ有て、ひ  
とに嫌らわれるなれども、世の中の通り者は、ト賀を  
連てしやれる事とはなりぬ、専ら流行して、ト賀く  
といわれし人なり、一代の嘶し多あれど、作者にかゝ  
わらず事故爰に略す、

## 篠田金治

元は御武家野々山大膳様御子息なり、上方の狂言能  
覺知りて、並木にしたがひ出世して、二代目五瓶と成  
る、二三年立て死す、江戸にてはさのみ手柄もなく、

三枚目の内薪水に付て評判よし、いつたいおかし  
の仕組書て愛敬ものなり、和泉町裏越後屋長家に住  
で歌川豊國の子ぶんなり、

## 蓮の葉

御旗本の御次男、本所割下水に屋敷有、七月盆前には  
吉原の揚代につかへ、いかゞ工面も出來ず、ふと隣の  
屋敷を伺ひみれば池に蓮咲て葉見事にあり、是幸ひ  
の蓮の葉と、ひそかに屏を乗越、蓮の葉を盗み賣なら  
ば二分や三分は盆前の助けに成べしと、十一日の宵  
月に頬冠りして、鎌を口にくわへて忍ばんとする時、  
隣りの中間侍ひ見つけて、曲セ者なりと立さわぎ、早  
速からの捕らへてよくくみれはお隣屋敷の御次男  
様にて、恠りして此趣を殿様へ申上る、まづ其儘濟け  
れども、野々山にては隣家へ濟ざるよし、金治は早速  
屋敷を追拂はれ、是よりぶら付と成りて、作者とはな  
りぬ、

忍ばんと思ふ今宵の月明り

捕らへられたて人か寄蓮

斯狂歌して家を立さる、

松嶋半治 後ニ櫻田治助

笠縫專助米夫の手から出て、元左交にしたがひ、尾上松助音羽屋に付て大坂町に住、櫻田年老て始終苗跡は半治に譲ると言傳ふ、後其名を繼て、櫻田死後は後家おりせを引受取て老母とする、二代目治助左交と改、三津五郎付と成、日本橋三嶋屋敷に住、櫻田の流儀覺へて、名題書物至て面白し、數多豊後節は師匠の跡をしたゐて三家に名をのこす、中にも常盤津の源太、清元のくわいらい師、又はうさぎ、歌右衛門三番叟とばへなど高名し、半治のむかしより、至て正直者にして、左交元祖に恩を受、出世して丑年大火より吳服町にうつる、芝居も殊更昔にかわりておどろく半二の氣に叶わず、亡師の後家引受て送り物して届かざる故、後々櫻田の後家と不和に成、櫻田治助の名をかへし、松嶋てうふと改る、元より半二の俳名を調布といふはでつくりといふ心にて、左交より付たる名なり、後の出火に櫻田吳服町にて類焼して、次第におとろへ、市ヶ谷本村町門弟松嶋陽助の介抱にて、本村町へ假宅して、てうふは氣うつにて病に伏て、終に市ヶ谷にて死す、むざんなる行末、谷中瑞林寺へ送る、作者も爰らあたり迄なり

### 半二の由來

半二が親は、ごみ船の株を持し人ゆるゑ、ごみ半といふ、若年の頃は御留守居寄合有て御給仕を勤たる者故、行跡能き近代の作者、世の中の噂中三などの座敷見た事ないものばかり残らずなりさがりにて、なり上りはなし、此二代目までは作者らしき人にて、始の名は陽助といふ、二代目を化され陽助、後に半二と改る、三代目の半二音助、今三代目櫻田治助左交と名乗る、深川仲町山城屋なり、四代目市ヶ谷の陽助、五代目半二は下立役市平といふ、烏半二今櫻田の門弟なり、半二の名爰に残る、なれども二代目櫻田の心に叶ふまじ

### 田嶋齋助

御馬屋別當を勤る、二枚目の作者半四郎杜若の内縁有て、女房をおふくといふ、杜若の兄弟なり、田嶋書物に馬を出す事好ゆへ、悪口に馬作者といふ、深川六間堀に久しく居て、難波町新道にて類焼して、假宅扇橋にて死す、妻子散々と成て今は跡絶てなし、

### 槌井兵七

南北の弟子にて、八九年の間出世して、宗七か口添に



て師匠の名を次せる、増山は大和屋の由縁あるゆへ、同じく兵七を杜若紫若を頼み、増山金八と改名させる、旅行にて死す、元來兵七は本挽町樂屋口に勘次といふ者の世話にて拂取にして、大道具へ出して勤させる、力業つらく思ひし故、勘次また小道具方へ出す、初日に小道具の出物多くありて部屋取こみゆる、此道具は此幕のアノ道具は跡の幕と、一々寄分けて半切へ書認め、張出しにしたるを、南北始めてみて、この度の小道具方は中々氣てんの利たる者、そのうへ手跡もよくしておいしいもの、小道具へいだすよりは、仲ヶ間へ出して見習に遣ふたらどうだといふ、早速勘次へ嘶をして、翌年の春萱屋町へ狂言方に出す、幸三正七まづ當番の槌屋へたのみ、出勤させるには名を付る事第一、なんと付やうと皆々相談して、マア槌屋の子分にして、槌、井は松井の井をば用ひて、兵は兵藏の兵、七は正七の七がよからうと、四人の名を一ツに寄て、名たる名にこそあらねど、槌井兵七と名跡を残す、しかし一代男と知るべし、

## 田名圓八

エンバ〜といふ故、大王と唱る席びらき書の銘人

にして、趣向有てせりふに地口おかしみ有て面白し、見好者の役者に至る迄、初日に見物する氣どりの達人福森はこの人ならではの筆をとらせぬなり、机の上にて作者たいくつの時は、思ひ付などいふて氣をなぐさめ、二ツには心に考させ、そのうちきやうげんせりふなど出る事有、是一つの妙を得たる男、六十近くなれど年の事聞のを腹を立、さらに若イ者の通り大酒にて、居酒屋へばかり這入、至て風流の男なり、

## 銀の香箱

兼てあつらへ置たる銀の香箱、いかゞの事やら此よふな品を好み、初日の給金を取ると、此香箱へ二分入て、その夜早速本所安宅の切見世へ泊り、酒の上にて女郎にねだられて、その香箱のまゝ、金をやりて歸りし親父なり、

## 朱鼻緒の塗下駄

大嶋の袖を留めたるどてら著て、塗下駄に朱鼻緒、肩へ手拭かけて、あたまは奴本田に髪を結、端手成姿にて本挽町出勤の時も、淺草材木町の髪結床迄通ひける、たわけものなり、手跡は見事にして、酒のうへにて筆に龜相したる體にて黒をつけ、白紙のうへに落



し、この墨を直に文字に直して、本歌狂歌發句などの文字に直して讀せる、至て面白き筆の藝は外になし、

### 増山良助

大の酒のみ、しだらなきもの、唯酒さへ吞ばよしといふ故に、二代の圓八と改る、元御旗本の御次男故、御せんくといふ、此人死後に御屋敷より、迎ひの侍來て、乗物にのせ引取行何の何様やらといふ事明カしていわず、至て重き御方の御次男様と跡にて噂する古今の噺、

### 穗住勝助

元祖櫻田より出て、二ツ目迄書たる作者、元の身分は淺草瓦町の御書替所の手代にして、中頃作者と成て、身を引て剃髪してタンスイといふ、江戸座の執筆と成、今江戸宗匠の一人、深川永機なり助作者を思ひ止りて後、砂村毛利公の御抱と成、御隠居御かくれ遊ばして後、今にても宗匠の名高し、下谷中おかし町に庵をむすぶ、

### 松井由輔

金井三笑の男、後に金井を松井と改る、狂言淨瑠璃に

作者店おろし

名を残す、元祖由輔なり

由輔と名乗る、大和屋兄弟の取立にて作者の數に入、ふくろ半二といふ、あたまの髪の風ぶくろ、付かづらの如くゆえ、斯は名づけし者、むき腹立の大野暮人なり、三笑の血筋、おしいかなく、無學俗物なり、

### 音羽助

初代羽介は梅幸の門人、始めあんましたる男故、羽介をあんまとよぶ、堀江町に住で、音羽屋の影にて身分能してむなく終る、二代目羽助は澤田屋利助と改帳元となる、

### 二代目

### 重扇助

同音羽屋の出にて、八丁堀杉浦何がしの子息、芝居好故此道に入る、日頃そくさしたる氣性故、梅幸にしかられて度々しくじり、少も恐れぬ大丈夫なり、居候のうちうばをばらませて出生出來て追はらはれる、夫婦立退て、深川靈岸寺の裏門に、金山寺をしてかつぎ商ひ世をおくりける、後に音羽屋へ出入出來て、一兩年相立本宅へ歸り病死しける、至りておしき人物なり、

### 立川馬馬

狂歌大人世の人知るところなり、白石噺シセツ目に名を残し、一代の内一ト度歌舞妓に入、作者勤度願ひによりて、市川家が由縁有故、男女藏の手引にて木挽町え出勤する、顔見世の淨瑠璃書て振袖山姥の富三郎金時の男女藏、此時出て早速引込み、歌舞妓の作者あきらめし噺し、中の作り物よみ本と違ひ、焉馬先生程の人さへ此業ばかり出来ぬといふ、山東京傳先生は始より見切りて思ひ止まる、烏亭泉次といふ門弟を出す、

## 二代目焉馬

右に同じ、一ト度出勤して成駒や山姥の淨るり、木挽町忠臣藏八段目の道行、訥升の出もの書て、出し始の出納めとする、其昔鬼武近來桃園など出勤して、左のみの事なし、たへて此道あきらめし事と知る、

## 二代目

## 勝俵藏

南北忤鶴十郎、今深川櫓下に直江屋重兵衛といふ役者出故、狂言に目が届き、仕組入組おもしろし、筋は届かぬ事あれど時代違を組合る事上手にして、親の片腕に役者の内より、さまざまの狂言工夫して、筋書を出してあたへる、筋書の銘入是にて、役者をだまし

て納る、中にも半四郎七役のおそめ、早替り女清玄など工風して、松緑夏芝居のうれいの仕掛物は、皆鶴十郎の相談趣向至てよし、工風を増して考へ、いろ／＼のこんたん外の人には及ばぬ事、一年三座の達作者一人にて勤しも、餘の人の是又及びがたし、其上仕組にかゝり、早き事早手廻し、夫故七代目團十郎杯の相談手助かりして、めつぼうかいの思ひ付、又は悪る思ひ付有て不評を受た事あり、作者の業をかづせしは、此親子なり、キゼワの書物しみつたれの狂言、昔の狂言は南北おぼへて居て是を加へ用ひし故に、狂言にあらすそ出づ、まつたく親南北の三笑風を用ひたるとしるべし、

## 勝兵藏

初め龜山爲助の頃より、出情して正本を能書、舞臺の事書物一式狂言方の業は近代の祖なり、南北の習となりて出世を待、業を止めて素人と成り、富の札賣をして、後にむざん成かな奥山の芝居へ手を出しむなしく終る、今南北の養父なり、至てむづかしき人物なり、

## 奈川本助

初め元助と書く、上がた篤助の門人、嵐徳三郎に付て布子一つにて、篤助の女房の供をして下る、開運して冠十郎取持三津五郎とり立にて、二代目櫻田死後に達作者と成る、歌書をよみて、風流ある嘶多くあるうへ江戸を譽て頼母しく大人に成べき者なり、ある時本助の嘶に、七代目海老藏のひたいに、少さき空あり、是を見ていふには、扱恐るべき事あり、三升さまの額の疵は後々に正しく公難を請て身に障り出来て、尤今の事ではなし、五七年も相たちなば、身にさわりできて、家々も疵の付事ありと語りぬる、はたして天保度にいたり、御咎蒙りて、江戸より十里の御構と成る、本助の一言思ひあたり恐るべし、この相見た事は餘人はしらず、三升や爰に顯はす、

### 寶田壽助

初欠出しは松川寶作、神田の質屋の息子にて、義太夫の文句を書いてぶら付、品川に遊ぶ、二代目幸三連て來て見習に出す、元來操の作者をしたるもの故、歌舞妓の道もはやのみこみ、早速四五年の内立身して、寶田壽助と改る、寶田は元神田より出たる名、昔關の戸の淨るりを書たる寶田壽來カンガといふ、沙門自阿彌

壽助と改めさせる、自阿彌も神田の住人なり

### 三升屋四郎

始は上方の太鼓持にて、江戸へ來て狂言方へ出、半四郎の出内と成、早速とり入て又木場の人と成り、初名は井筒屋彌助、井筒といふ苗字上がったの井筒といふ茶屋より出たる名、白猿旅行の時、加賀の國にて筆取して、忠臣藏の裏表筋書を江戸へ送る、たいこ持ゆへおかし、その嘶たつぷり有、後三升屋我よりあたへて、白猿門人となる、深川寺町の正行寺に墓を建る、

### 紫の女胸著

彌助といひし頃、上方より下りたて身の置所なく、我が娘におどり踊らせて、女房に三味線弾かせて、口上をいひ、駄鳥といふ見世物觀音の奥山へ出た時、前狂言に娘の踊り勤めさせ行通ふ道、名にしあふ御藏前通りを、紫ちりめんの女胸著を著て、下駄がけにて出合よく、みれば此彌助なり、尤其頃より言こみの有し男ゆへ、もの言かけ、扱々けしからぬ端手な姿といへばわしは大坂者故、人の目に付爲には、此位な姿で歩るかねば人にしられぬといふ、人をば馬鹿にしたる男にぞ、後には名を出す、



## 奈川篤助

大坂よりはじめての下りには、堺町にて半四郎歌右衛門の三勝半七、後に三津五郎十次兵衛の二ツ蝶々の書直し大手柄ありて、又後に金主京橋今助篤助を呼び、此時は鰻十郎に付て顔見世、どうやらこうやらやらかせども、三月に至り御所櫻の操を出し、鰻十郎辨慶の大しくじりより、ふ入にして今助立腹にて、早上がたへ登らせる、京都にて小芝居の作者となり坊主あたまにて一洗堂といふ、後に都まぐづが原へ茶店を出して、往來の人に茶をあたへて、爰に身を送る、適上がたの大作者なり、

## 奈川七五三助

篤助の師匠、奈川の家也、寅年江戸へ下りて、間もなく大火有て住吉町にて類焼する、此出火のとき机を脊負、福森が代地の宅へ逃て来る、希世の姿おかし、後に御當地に居て、給金取留め衣服諸道具出来て、ふきや町がしかづらや友九郎が土藏へ品々預ける、此友九郎火事を出して火元と成る、此噂聞て七五三助あしたの朝ヤレ嬉しやと、早速欠行みれば、友九郎が土藏の戸前ひらく、近邊の人々來て、火元のうへに我

藏を助けしと人々惡みて火をうちこむ、七五三助はおのれが衣服助かりしと悦ぶ甲斐なく、見て居る前にて火をうち込め、かなしき聲をいだして泣ながら、わしが預けたつゝ計は、どうぞ助て下され〜と大音上て泣ければ、傍の見物始七五三助といふものしらず、うぬ迄がふといやうだと棒、鍬など持て打かかる故、早々逃て立去り、扱も〜情無き、せつ角火元でも土藏が助り、わしが運の強さと思ひの外、助りた藏へは火を入れられ、みす〜見る前でおのれが衣裳道具を焼拂ふとは、運に盡た事と、其年ほう〜逃、大坂へ登ることあわれなり、

二代目

## 福森久助

初名成田屋助、七代目團十郎の出内、後に木挽町へ出勤の節、すしやの娘と色事有て、成田屋を取上られて足守彌助と改る、夫よりあちこち役者のうちに居て、引負取逃など有て、諸々へ居候がへして、高麗屋へ這入、松本幸二と改る、又子細出来て高麗屋を立去りて、大和屋へ這入る、三津五郎女房おでんに付て、後に菊之丞に付て人と成る、此男度々名をかへ、出たり引込みたりして、二代目福森久助に成て終る、元祖

福森さぞかし我が名を付しを恨みつらん、

勝井源八郎

勝浦周藏といふ、中仙道浦和宿の生にして、江戸の氣性受て作者に成たく、南北の弟子と成り、こつけいの有る人にて、席びらきを書時分手柄あり、師匠の心に叶ひ、次第に評判よくして取立られ、作者と成て松緑などに付て重兵衛、南北の片うでと成て、淺草日應院地内にて終る、

故人作者近年の中村重助故<sup>本マ</sup>へを始めとして其外下迄數多あれど、爰といふ嘶是と云事更におかしき物語なければ記さず、又當時の櫻田今南北てうふ佐助周藏その若年の者は、行末久しければ後の噂として、役者立身の評はいわづ、遠慮して餘は追追考へて、第二冊の操りを待たまへ、

作者店おろし大尾

## 並木正三一代咄序

今年如月中の七日は當正軒正三が十三回忌にして、  
わなみも共に庭神樂<sup>ニバカ</sup>の寄合、金毘羅講の文彌ぶしに  
なつみ、席キにすゝし交りの深きをもて、何を泉下  
の手向にとは思ほゆれど、生キ世の風流に導かれな  
がら、今更何の觀念もなく、ほゐならぬ折柄、何人の  
著作にや、友なりける人、幸に此草を得させしかば、  
机上に閱みするに、其ぬし戯場に勤仕のはじめより  
終焉を異にせざるの操は、篤實にあやしからず、物く  
るおしからぬさへのたくましきを、そこはかとなく  
ねもころにあかせしはくきやうの追薦月日にはおく  
れながら、殘香ひを櫻木にもものしなば、古しへをこゐ  
ざらめかものいれ首、強力躰の作意の數を四方にふ  
れんは、牌前の下緒納めにまさりなんと、書肆のもと  
めに應ずるも、大きな洒落にして根にかへる花の  
塵塚はき捨る帚目にもれぬ言くさ、かき集めし狂言  
櫻<sup>さくら</sup>と號せし趣き、爰に斷り侍らんと、あめあきらけき  
いつゝの年、皐月雨のつれづれに、我茅屋にふり込  
れ

題 入我園主人



正

天羽衣  
三十三石  
関取  
八松  
並木正三



## 並木正三一代咄

並木正三なみき狂言きやうげん撰せん

嗚呼おしいかなおしむべし、おしける難波の江南に育ち、よしあしのまさな事を書集め、妓藝わぎぎの作文を顯はせし中にも、古今に獨歩して此道の流れを汲る輩は、孫子吳子が肺肝に入しかとうたがひ、諸葛亮がいさおしともおもほゆるほど、功名をとげ身まかりし正三といへるは、おふけなくも往昔慶長御治國の惠を蒙りたてまつり、名左衛門太左衛門など櫓を道頓堀へ御赦免あり、下し置れし以來、多くの狂言作者にも事かはり、一流の譽れをのこし、あまねく古今の俳諧歌、史記の滑稽にひとしき作意を、又當世に滑稽せし妙手とやいはん、淨瑠璃に門左衛門、歌舞妓に正三とならべいふとも耻しからず、其父もとは雲州の仕官にて、いさゝか仕へを辭する事侍りて、大阪堀江へ漂泊し、諸木あるひは草花金石などより油を取法、南蠻の秘傳を鍛練し、いやしからぬ家業をいとなみ、正兵衛と呼れくらし内奴正兵衛とて人の知たる男なり道頓堀元堺町、扇

子屋方の遊客と成しも、しかるべき値遇ちぐうにや、扇子屋の娘に契り、正三をもふけ、幼名を久太と呼しに、其後故ありて正兵衛、右扇子屋娘のいもうと、いづみやといへる芝居茶屋へ入贅して、連子の久太を養育せしゆへ、襤褸の内より櫓太鼓の音を友とし、竹馬の頃は歌舞妓の樂家をあそび所、又は操芝居へ入込かこ介惜かじやくのたすけに成、からくり芝居の下屋へ這入、せんまい積りものゝ糸ざりを見おぼへ、其節親正兵衛、出羽の芝居世話せしとき今の角丸芝居の向ひに有し若水千歳狐といふ、手づまからくりの水船のしかけは、久太十四五歳の工夫なりと聞及びぬ、夫より後元服して正三と改め、はたちにたらずして大西の芝居にて今の筑後の西大長あたりに芝居ありしなり中村喜代十郎といへる女形、中ウ芝居を興行せしとき、中橋筋大寶寺町西がは枅子屋の隣、鍛冶屋の娘手をおひし噂を、三番續の狂言に取組、寛延元年辰八月右喜代十郎芝居へ出せしが、正三歌舞妓狂言の書はじめ也、則其時狂言作者泉屋正三と名前を出し、同年霜月角の芝居坂東豊三郎座へ出て、冬籠妻乞軍の顔見世狂言おもしろく、二の替りは其節の噂ものかしくをとり組、戀淵こひちち血汐ちしほ絞染しほりぞめといふきやうげん、笛十



と共に拵へといふ高田瑞庵巳の春中大入をとり、四月が

はりの與作の作りかへは、笛十計りのよし評判たぎ

らず、同七月には正三男作養老瀧といふ水狂言を出

し、黒船忠吉放駒長吉を故三柵大五郎、獄門の庄兵衛

野手の庄兵衛を歌右衛門にて今の歌七事此本にては始終歌右衛門といふなり

兩人の早替り、又はんじもの、喜兵衛を、親仁にて豊

三郎にさせし事共大きに當り、巳の霜月より大西三

柵大五郎座にて、今黄金勝軍といふ顔見世狂言、故岩

井半四郎江戸より登りて評判よく、二の替りに大和

國井手下紐、これ又大きにはづみ、午の四月まで大入

其つぎに若翠結相權現松、これは檜皮屋心中の一夜

づけ也何によらず急に仕組て初日を出すを一夜づけといふ樂屋詞也これも大がい入をと

り、其跡がくり返しもの、同じく七月より作り替の薄

雪遊撰染、水狂言にて猶も評判よく、其内芝居相休當幕

より淨瑠璃作者故並木宗助の門弟と成これあまねく並木苗字の元祖にて一

名千此人に隨身して、豊竹操座へかゝえられし所、未

の七月より中村歌右衛門座、角の芝居へ豊竹より、正

三をスヶに借受け、則早川又兵衛蝦夷の新介鹿洞右衛門三人組染貫模

様の狂言當り、其後おりく十兵衛の一夜づけ、雨防紅

莞蔭はなごころ大きに評判よく、九月かはりは藤川平九郎、京よ

り江戸へ行、暇乞に三十日のスヶに成り、織田軍記紅

葉蔭これ又大入、しかるに宗助當十一月中旬、一谷嫩

軍記の三段目を書ながら病死致し、師の遺命によつ

て、申の年は豊竹を離れず、同年霜月心にそまぬ事あ

りしや、角の芝居故三柵大五郎座へ住、並木正三と姓

を改め、藤川平九郎江戸よりのぼり、名護屋織維鶴錦

の顔見世よろしく、二のかはり三河國照田姬昔物語

おもはしからず、酉年二月より高臺橋鮫島、らいでん

源八喧嘩のきやうげん大きにはづみ、四月には西東

合見臺、これは竹田の三切ものをうつせし趣向にて、

舞臺道具を奇麗に仕立はり込みしゆへ、これも請よ

く、跡へ河堀口の心中、冥途一里塚とて又切狂言をつ

けしより、六月迄持越七月替りに、金比羅御利生幼稚

子敵討、雛助故他人子役の姉弟にて豊三郎をたのみ、

故大五郎を力に、敵平九郎をねらふ狂言、嵐小六の仕

内など、みなく大々當りにて、跡はくり返しもの西

の霜月大西三條定助座へ行、顔見世泰平木曾譜中村

十藏後に吉右衛門といふ能登守にて氣違水こぼさずのつかひ方

大きによく、同暮疫病の呪に門々に張札せし、キノニ

ノヤノハノモノといふ事を思ひより、二のかはりけ



いせい天羽衣といふ狂言を出せしが、正三一代名を  
あげし根本にして、大切に三間四方のせり上を工夫  
仕出し、大坂町中を悦ばせしも、全く幼き時より竹田  
のからくり、積りものゝ糸どり、万端見おぼへ置し發  
明ならん、尤其以前寛保三年癸亥年の暮、大西故中村  
十藏座へ、江戸より故澤村宗十郎登り後に助高屋高助といふ齋藤  
山城にて、油計りの狂言の時、二階座敷を一面にせり  
上しは、故並木永助作りし狂言なれ共これも元祖其時宗助弟にて  
のせり上ケは、幕明よりかざり付の二階にて前とふ  
り椽がは高欄の兩方へ摺柱をこしらへ、上に立しは  
故宗十郎計り、おもさはいつも下家より一人前のせ  
り上ケに、椽がは高欄つけし同然、今度キノニノせり  
上は、飾り付揚屋の道具を引取り、奥より三間四方  
の板ぶき屋根を突出し、上にて故中山新九郎、大勢と  
立有て追込み、一人残る所へ、中山文七松嶋喜代崎出  
て、故新九郎をいさめ、腹を切り自害する内、これな  
りに三人一所にせり上る、下の家臺に故十藏、歌右衛  
門、定助、故四郎五郎立ならびて、定助へ文七、喜代崎  
が流れ落る血汐を呑し瘡を直す趣向なれば、此七人  
をせり上る前には、大せい屋根での立故、宗十郎一人

が長袴のすつくり立を、椽がは計り上しとは何ほど  
重さ違ふ事ぞや大工棟梁のさんだんも有ふなれども  
正三ならずして万力の仕かけ、眞綱の取やう、此工夫  
が付べきや、凡人の及ぶ所に非ず、此とき春正月中の  
上り銀高を書顯はし、樂屋の鎮守の繪馬に上ケしは、  
前代未聞といひし事也、此狂言戌の四月まで大入し、  
其跡へ三莊太夫、愛護若、小栗、菊萱、隅田川を一ツにして五説經といふ看板  
出し、狂言本出來せしに後に此本をうつし取正三死期に新狂言として京都にて出す其時  
故有て不出、其跡へ七條河原茶湯の釜入と外題してこれに後に出されし事看板出しかど、これも初日不出、座中もめ  
合くり返し物に成り夫より五月に中の芝居、故嵐三  
右衛門座へうつり、丹波屋助太郎館今年東の芝居にて女大學と出したるは是也  
此狂言も故あやめ平九郎大きに出來され、其内又角  
の座本故大五郎親友にて、據なく頼まれ奥州遊行柳  
の四九次郎塲を仕組つかはし、七月替りは此一塲で  
大入を取らせ、九月に中の芝居にて一休ばなしを出  
し、下福嶋の人ごろしを持込んで大に當り、此時の上  
り銀を以て、亥の霜月顔見世を、銀主より取立、同  
芝居故三右衛門座本にて天照太神宮岩戸曙と神代の  
顔見世狂言評判よけれどはねめなく、二のかはり、道

中千貫樋故十藏平九郎の出合めづらしく、螺貝わりの場受よく、勿論切りには大道具見へもよろしく、夫より芝居伊勢へ行、亥の五月より皆々歸りておそめ松戀の盃蘭盆、七月よりはくり替しもの、子の霜月よりやはり中にて坂東豊三郎座本、顔見世時代世話黄金榮といふ狂言座附終りに、盛衰記の役割を、役者に富にて突せ、とんつな役にて仕込し顔見世甚だ大入、尤此年は一方の作者の立者永助と正三同座にて、二のかはりには定めて目ざましき趣向有べしと、みな／＼こぞり居たる所、鳥邊山の心中に、茨木屋幸齋を取組むらからずとのねりめ村鳥廊音聲といふ二のかほりを出し、大きに評判あしく冬の内三四日相勤め、正月初芝居よりもめ出し、一向出来かね、三月を待す座中伊勢へ行し也、正三も四月中頃より思立、參宮して念頃成中なれば、故三右衛門部屋に逗留の内、故三右衛門淫性の傷寒を煩ひ付、他事なく正三介抱すれ共次第におもひ、五六日の内に死去いたし、泣々其跡取置遣はし、五月の末に正三大城へ立歸り、其七月は角姉川大吉座をスケ、草津小女郎の水狂言、跡は古物、寶曆六子年霜月より大西芝居を取立、切かはつた座本の名前、大松百助たんぜん壽六法はふ

と顔見世狂言大きに當り、二のかはり天竺徳兵衛聞出往來、極月廿八日大いれの惣稽古して、丑ノ正月二日より初日、是又大入大評判故新九郎文七ともに當りを取り、同年四月より、四天王寺伽藍鑑、此狂言は新淨るりに取組、舞臺に手すりを操り同然にこしらへしゆへ、又々町中の氣を取て、大きに評判よく、はじめて大字七くだりの正本を出し、七月迄も持こしたるに、芝居出来かね残念に、其年を送りし内、京都扇子屋孫八芝居より抱へに來り、丑の霜月京都へ登り、大社結納三番續、此顔見世大當り、則染松松次郎座本にて、あいのはものは其頃豊竹の新淨るり、祇園祭禮信仰記、これ又うけよく、三月より二のかはり、けいせい飯綱八文字、正二月前びろに仕組の手つがひよく、故十藏、故大五郎、豊三郎、嵐小六、ひな介、など大にあたり、五月かはりは西陣織物屋の心中、一夜附ケ、夏紅葉血汐紅といふ赤い盡の外題を出し、入を取り、七月かはりは業平、東下向大入、その跡はくり返しもの、其霜月大坂へ歸り、豊竹より角芝居を取立、中山文七座本にて稀藤原系圖の顔見世狂言を出し、文七川太郎と成、大吉と掛合の口合せりふ大きに人



をよろこばせ、板に彫りて町中を賣りたる事隠れなし、其うへ故中村喜代三郎、江戸より登りて受よく、二のかはりは三十石燈始、古今の大々當り、文七故大五郎始ての出合はなぐしく、大切に砂ぶたい共一面の廻り道具を工夫し、芝居は極月上旬より下屋をほりこの大仕かけ、法善寺床の前なるたらくおり、又濱千日角のたらくおりまで、皆此土にて平地となし、破風口の大柱柱を取置に差圖して、序の御殿の引道具、切の淀の大廻りは、誰しも舌を卷たる手段、此時も銀主大きにたんのふして、其跡くりかへしの信仰記、夏かはりに錢屋の噂を持込て、伊勢や日向の物がたり、めづらしき地獄のせりふに腸をよぢらせ八朔からが大坂神事揃、文七故大五郎の取合よく、無筆の女房が書置を稚子に覺へさせ、死後にいわせる趣向あたらしく、うれい見物によくこたへ、こつすいの涙を流させ、九月より大吉、故喜代三郎が暇乞、これ又評よく、卯の霜月よりやはり文七座本にて、中村富十郎、市川升藏、江戸より登り、顔見世は福源氏壽卷大入にて、二のかはり、九州釣鐘岬の狂言、文七鯨つき灘八にて、鐵砲をひらい耳をふさぐ幕にて、氣を取

り、升藏が死骸の腹なる勘合の印を取出す趣向、面白く、大切には富十郎娘道成寺の所作事、つゞいてぶたいを破風ともに東西へ引分ケ、山門を突出し、故大五郎文七たての内よりせり上て目を驚かせしに、辰の年正月十日頃までは、さのみ入もなかりしが、十二三日ころより大入して、後にはぶたいに棧敷をかける程の大當り、尤富十郎久しぶりの所作事ゆへとはいひながら狂言わるくては中々もてる物にあらず、正三手からはいふも更なり、四月の頃まで大入して、跡富十郎吉三、金作お七にて戀の緋櫻のくりかへし、七月替りは樂屋より注文有て、江戸風の曾我の狂言、これはおもはしからず、八月より戀女房のくり返し大きによく、顔見世前までつゞき、霜月も又文七座、生如來金顔見世大ていにて、二のかはり急に出來かね漸巳の五月十五日より、霧太郎天狗酒<sup>さかもり</sup>醺の狂言、これも大きにあたり、切に惣二階座敷の引道具、後には舞臺を突出して又大廻り道具、かれこれ此場は道具動詰にして、富十郎彦四郎道行も受よく、故新九郎霧太郎の仕内に我折らせたるも、此人の遣ひかた著作に秀でし故の事也、其砌居宅は吉左衛門町にて、親正兵



衛に孝心深く

此夏剃髪して法名正朔といふ

隱居の座敷をしつらひ、

又は二階へ庭をつき、植込飛石などを置、井戸をすへ

て下の板もとの窓とし、釣瓶をおろせば酒さかな、煙

草盆までくみ上るやうに仕かけ、料理茶屋を企て、活

氣なる親の心をいさめ、芝居の銀主をすゝめ、夏祭り

の折からは、役者中をねりものに出させ所を賑はし、

其七月より富十郎くすの葉又は文七、故大五郎二人

の奴見事なりとて、ますく大入、秋の末江戸より市

村龜藏、上方見物に來りしを頼みスケさせ、おはつ德

兵衛富十郎と出合にて、切は龜藏所作事あまりたぎ

らず、其跡もくり返しもの、寶曆十一年巳の霜月、同

文七座惣追捕使鎌倉鑑には、故新九郎を顔見世より

謀反人につかひ、二の替りは泰平いろは行列、中村吉

右衛門

古十歳事

由良之介にて忠臣藏の作りかへ、次の女

鳴髪にはひつばら艸をくらひて人間馬と成おかしみ

七月には竹篋太郎怪談記、不景氣にて、次に國姓爺の

くり返し、切が板屋橋噂の一夜づけを、大經寺に取直

せし此仕組の評判よく、跡はくり返しにて、午の霜月

京都へ登り、顔見世は川太郎のくり返し、二のかわり

はけいせい花城山、七人の片袖を一度に引ちぎる序

の幕よろしく、狂言も花やかに、大入してそれよりは

大坂の古物をくりかへして、餘り新物聞及ばず、癸未

のとし子ぶん松之丞を座本として顔見世、源平通寶

丸二のかはりに所作事させ、則けいせい熊野山の狂

言大きにあたり、跡は又くりかへしもの、或は敵討仙

臺訛などにて入を取、申の霜月は尾上紋太郎座、其後

祇園林の心中の一夜づけより、松之丞病氣にとりか

かり、程なく死去せしより、大坂へ立歸り、酉の正月

より竹田芝居へ出て、おどけ狂言曾我最負惠方果報

とて、七福神と矢の根五郎の出合に腹をかへさせ、

外にけいせい十三鐘、關取二代鑑の三切りもの、故三

枰他人巳之介立合の引はりよく、酉の七月には恠り

浦嶋、天上返りのおどけ狂言、そんてんびるのせりふ

をはやらせ、外には小栗と月山の肝取、いづれも故他

人已之助の仕内に合より、趣向を立て出來させ、同年

八月に竹本芝居にて、投頭巾北濱育といふ淨るりの

外題出しかど、さはり有て看板を引、急に新淨るりの

取組を頼まれ、正三永介其外の淨るり作者打込に相

談して、姻袖鏡を拵へ、俱々書立達者をあらはし、同

年霜月中の芝居にて、二座本

中村歌右衛門隔晩の顔故三枰大五郎

見世の内、三枳座の方にて娶しのだ妻の狂言を當、それよりはくりかへし物數々出て北へも行、戊の四月惟喬親王魔術冠を出し、是二座打込に成り、道具も大形にて、大てい七月より男作後日帷五郎八と瀧川の行衛を、故吉右衛門小六にてうれいの仕組評判よく、夫より又古物を出て、戊の霜月より角の芝居雛助座へすみ、往古大坂村在所由來、此顔見世大當り、其次ぎ合のもの、亥の年春の二の替り、世話料理鱸庖丁、看板出るから噂よく、初二日目は大入人の山をなせしが、障り有て相やめ、夫より義經蝦夷語を出しけれどもつかず、芝居も有なしにて、漸八月より大坂日記鹽の長次郎を出し、十月には竹本へスケに出て、石川五右衛門一代斬を出し、これ先年かんばん出せし七條河原茶釜入なり亥の年霜月角にて、中山來助座の顔見世、男女相生鑑座付の跡にて、縁引の役割を定めけいきよく、合のもの千本櫻故芳澤あやめ、はじめの名崎之介、れ三代目のあやめ也忠信の受よく、明和五年春は京都中山文七より頼まれスケに登り、二のかはりけいせい桃山錦を出し、秋は大坂へ下り竹田芝居にて宿無團七時雨傘、其頃の噂いわ井風呂の一夜づけ尤大入、九月に龜谷濱芝居跡にて相合橋南つめ東へ入る所に有しなり

淨るりあやつりを取立、子分正吉名前にて連管三番叟、壽館狐馬懸姿競、唐土噺、關取二代勝負附、其外古物合して六切の淨るりを出し、太夫三絃操り方の一座をかへ、夫のみならず、芝居の向ひへ新宅の茶屋を組立、妻に勝手を計らはす、二階座敷に又々植込中庭こしらへ、大きに端手なる仕かけ成しがたもちがたく、芝居と俱に立消して丑の年夏より思ひ立、菱屋といへるに内談して、座摩の一座を阿波へ引越させ、其身も弟ぶん三勝其外昵近の者を引連て阿州へ立越、看板に大坂歌舞妓芝居惣頭取と英名をあげ、又々故來助雛介其外の役者を呼下し、秋の末に立かへり、夫より父が吉左衛門町に居て、丑の暮より角芝居にて、富士松山十郎今は三保木茂左衛門也座を取立、顔見世遅ければ、納めの庚申待と外題して暫らく初め、寅の二月上旬より二のかはり、阿波みやげの心にて、東山殿女狩大きに町中評判して夏までつき、其跡正徳年中淀屋橋の喧嘩を出し、此時分より難波へ引こもり居て、富士松座の七月に夕涼蚊追店とて、夏衣裳の座付をさせ、同霜月より中の芝居小川吉太郎座へ行、眞一文字魁評判の顔見世、難波にての思ひつき骨つぎのお



かしみ當り、夫より又布袋町へ宅替して、小川座二のかはりが桑名屋徳藏入船物語、切に面影六歌仙とて、故中村桑太郎所作事まで古今にすぐれ入つめ、跡は追々くりかへし物、卯霜月はやはり中にて、市山助五郎座顔みせ、中睦妖藏宮嶋臺、歌右衛門猩々の役、これもおかしく、二のかはり三千世界商往來、三月末より近江源氏駱講釋、皆々大當りにて辰の秋頃より正三胸痛みの病症、時々おこりけれ共たじろかず、まへ廣に江戸表へ人をつかはし、來ル顔見世に故尾上菊五郎の相談成よし通達有て、中の芝居へ中村歌右衛門名前を上故菊五郎前かんばん出せし所、俄にへんがへ故かゝりの者ども大きに廢亡し、術計つきたるに病中ながらちつ共ひるまず、頓智の外題を思ひ付、尾上菊五郎不登嘶と顔見世狂言のかんばんを出し、坂田半五郎を呼寄せ、出來にくき、難義の所をわかやかし、思の外大入して、合のもの新うす雪も相應に入たる内胸痛日々に増長し、此頃は腹中にてやぶれ鼓を打ぐとき音を出し、昵近の内に醫心ある輩も有ば、養生に如才なく、病氣の内にも二のかはり、狂言に心をつかへば次第に重るといふ迎もかるふはならず、

時々は堺の醫家へ導引の療治にかよひ、打臥とはなしにぶら／＼せし内に、漸二のかはりの時候世界を思ひより、夫より日もつまりあれば、せり付て三ッ目四ッ目を相定め、序二ッ目もあらかたにきはまりし時惟安永二年癸巳二月十六日、いつにかはりて甚病氣こゝろよしとて、昵近の者をよせ、四方山の咄しの内にうかみしや、日本一和布刈神事と外題をしたゝめ、脇付までもたま／＼と書付、病氣もいとはず座本中村歌右衛門方へ持行けれども、折ふし富市道頓堀名のりやうり方にて御屋敷の振舞の座へ立越しと留主の様子を聞き、明日迄も延されぬ急なる家業づくなれば杖にすがり、富市の勝手へ行是使にても事濟べきなれども大事の外題の内談なれば直に行し也歌右衛門を呼出し、密に外題を見せたりしに大きに氣に入ければ、看板あつらへの手つがひまで、其座にて内談し、こゝろよげに立歸り寐たりしが、其夜八ツ時分に、俄に心痛取詰たりしや、妻をおこして水を乞により、打おどろき親正朔七三郎共に三勝元服しし七三郎後に新平と改名近所の知音へしらせしうち、伊勢屋又右衛門、大村屋九八、中村歌右衛門、市山助五郎皆々多年の親友なれば早速かけ付、醫師も彼是其外昵近の輩まで思ひ



思ひに介抱すれ共相叶はず、さのみ苦痛の體共見え  
ず、大喝一聲南無三寶と一句を残し、ねむるがごとく  
息たへ畢ぬ、ア、此夜いかなる時そや、凡三十年來道  
頓堀京都に及んで、狂言戯作の譽れ高く、一生の述作  
七十餘番、其外濱中ウ芝居の作文、又は一夜づけ、顔  
見世など數多ければもれもやすらん、剩へ京都の出  
勤、伊勢鄙のさきぐにも急なる替りに望んでは見  
捨る事なく、筆作に助られし端本なども多かめれど、  
是を記すにいとまあらず、ことばの花筆の林のしげ  
しげ成、並木の主も痰火のせり上にせまり、ふさぎし  
ぶたいも廻り道具と目くるめき、四十四歳の春秋に  
おしまれ、一期の夢の幕をさらりと引とりしかば、是  
を傳へ聞役者はもとより、かの遮羅双林に佛をうし  
なふ涅槃會より間もなければ、女形も立役も羅漢の  
ごとく取まはし、天のたすけの樂はふれども中のり  
しかけの針がねに引かゝりて、此座にいたらず釣看  
板の人形も俄雨にあふたるごとく、木戸手代塲廻り  
は極樂の通り切手をさゝげ、半疊うりは蓮臺の丈夫  
なを吟味し、世を宇治山の賣子ども、みづからをけま  
んにむすんでもち運び、目頃大入大あたりをさせら

れし恩とくをしたひし月日も立やすく、むかしを戀  
ふる面影は法善寺の石牌に朽ざる机おしむべしく  
緒を斷て手向とせばやいとざくら  
時天明乙巳年二月十七日

以上は「並木正三一代噺」の小冊子に載する所な  
り、次の本讀は十三回忌當時の刷物にて「異本南  
水漫遊」に出たるを爰に附することゝしたり

並木正三  
述作之狂言 追善之本讀

廿三日 兩夜番組

井手の下紐 本よみ 並木十輔

三十石 同 並木翁輔

天羽衣 本よみ 惣作者かけ合

輅講釋 同 竹本三郎兵衛

ひがし山どの 同 奈川七五三助

幼年敵討 本よみ 惣作者掛合

天竺徳びやうへ 同 奈川龜助

しつへい太郎 同 爲川宗助

天狗酒盛 本よみ 惣作者かけ合

まつりぞろへ 同 近松徳叟

桑名屋徳藏

同

並木五兵衛

よどやばし喧嘩

本よみ

惣作者掛合

めかりの神事

本よみ

惣作者かけ合

右之外懸意の衆中手向として

琴

雲霞

三曲

胡弓

白綾

尺八

萬葉

所作事

富山捲足

管絃

近松東南

淨るりふしこと

市山志山

右本讀に歌三絃鳴物はやし相加へ并に諸藝兩夜  
共相替外にスケ罷出來御覽に入候以上

巳二月吉日

千穗万歳樂叶

弔

並木正三之十三回

父に別れてのくり言まだ乾かざる間に

はや

淺尾正三

指折はあらまた若よ草に露

朋友のしたしさを思ひ出る事の

あまたゝひに

加賀屋歌七

琴の緒も梳や返さんかつら艸

年回をくり返しつゝも

奈河龜助

道を法ぬるむに甲斐ものほり舟

吉田屋宇兵衛

つくくゝと弔ふや顔鳥かはよ鳥

當時追善

亭主

因云、本よみ會の權輿は、寶曆十二年午之春、東武  
之作者堀越葉陽淺草の寺内におゐて興行す、其後  
明和四年亥の秋深川汐濱にて興行、大坂にては天  
明の初め奈河龜助、かぶき講人と名付て本讀を興  
行す、(此の註は「南水漫遊」に載する所なり)

上 大山寺のきやうげんは町中への名残

井にやくし如來もいしやぼんく

中 わかごけよとぎのはなし

井に浮世のみおさめかめ松が式三番

下 ごくらくの道まつすぐに行實方

井にわつさりとしたまた二代のかほみせ

岩井半四郎

かりの世をかゑすやことし四十八

さいご  
物語

正本屋  
九左衛門

上久寶寺町  
三丁目



# 岩井半四郎さいご物語

〔上〕大山寺のきやうげんは

町中様への暇乞

難波のはまに座本として、名も四しばいの高やぐら、あふぎくるまのあかねぞめ、名は三國にはいくわいして、いくひさしく岩井半四郎と、山がの山の山がつまでしらぬ人なく、名のみのかしてかうせんのためにおもむきぬ、おしやいとしゃと聞人涙ひまなく、たもとしばらぬあかつきもなく、せめて此人の物語してゑかうをせんと、にわかに一冊をこしらへ、日のもとのあらゆる國までやり水のながれよる手にふれ給は、一邊のゑかうのみたのみ上り、以上、すなはちかいみやうは

浄譽宗甫

俗名岩井半四郎  
當年四十八

念佛宗寺は下寺町  
源正寺

正月二十三日より當春二の替、播州太山寺薬師如來開帳三ばんついきと、やぐら太こかしましきにみ、おどろかせ、なん女くしのはをひゐてけんぶつに行

あしのはやさ、時は五つに木戸をうつ、是あたりきやうげんのきつさう、一座の役者がくやにてよろこびのたけ、かななをすにひまなし、ついき前に文左衛門がふれ、役人替名の次第迄つまやかに、左様にお心得なされませうといふしたより、しのつか次郎左衛門はかまの折めをただしかめ松をつ、出、又く口上、右大山寺三ばんついきの内に、わだのみさきの舟ぬす人をさしこみ、おめにかけませうと存、まへよりかんばんにも出しましたれ共、さるかたよりぎよるなされますは、大山寺かいちやうのちぶんと舟ぬす人は、時代はつくんのちがいあり、是をやめて、只まっすぐに薬師の御事ばかりを、いたしたがよからうと有おさしすにまかせ、にはかにしぐみをかへ、如來の御ゑんぎのとをうり、とりもなをさず仕ります、座本半四郎罷出、おことはりを申上りますはづなれ共役まへ、殊に此程ちびやうさしおこりましたに付、若太夫岩井かめ松おれいのためやら、おことはりやら、なにやらかやらに、たこうござりますれど是からお禮申あげます、先是より大山寺のかいちやう、三ばんついきのはじまり左やうにお心得なされませうとがくや

にいる、それよりじよびらきのせりふすんで、中入、座本半四郎は玉水いなばの助が下人又左衛門になつて、しゆじんにあほうめといわれていゝわけ半四郎申だんな様、私もむまれつきのあほうでもござりませぬ、久々のびやうきにあらしやうねをとられ、殊に口もとおらずぎやうぶかなはねばさだめしうつけましたでござりませう、いせんは私一ぶんの口上など、さうおふに申かねはいたさね共、何を申てもやまいにはかたれませぬ、おまへにかざらず、御けんぶつ様がたもさぞおめまだるうと思召ませう、おなじみとあつて、あまたおいしやにかけられ、やうじやうを仕り、此間はすこしげんきをゑました、其うへりよぐわいをかへりみず、ぶたいでかはたびをはきます事、一つは此身を大じにぞんじます、其段はおなじみ御ひいきの又左衛門と、ながくめんどろをごろうじくたされませと狂げんのぶつるでに、けんぶつゑのいゝわけ今おもへばなをあらはれなり、町中いよく評判よく、きやうげんはできる、半四郎が尤なる口上、みねばたまらぬ、そなたもいきやあのかた様もいかしやれと、となりからむかいをさそひ、二月十五日まで兩ぶたい

に人をあげ、ごてんさじきを口口うつて、ゑいやゝのこゑやまず、其明十六日に座本半四郎、玉つぐり石薬師のかいちやうにさんけいし、かゑるさの道むすめかたにてのもてなし、ぐわんらい病氣にて心すゝまずたか枕して只ふすことのみなり、され共しばゐのつとめは一日もかゝさずがくや入もかごにのりて行歸りぬ廿日より心地あしきとて床にふしぬ、半四郎かはりとして西國兵内、是も役めさうおうなれ共下地名人の半四郎がつくしたるうへには兵内ぐらいにてはおもしろからぬとてか、それよりけんぶつ一日〰とおち、あたりきやうげんのこしをおる事、かうした不仕合のまはりとしなり、但し二のかはりにははやいこといふ人あれば、いや〰さうでもおらない、京のはとけの原も、正月廿四日がはりなれ共、はやれば今迄もはやるぞかし、とかくしぬるほどのとしなれば、きよねんおとしあたりなき事もつ共もつ共人云此きやうげんのまなこは半四郎役目一つにきはまりしを、此人つとめずんば、いかではんじやうすべしと、かたいじにいふ人有もおかし、半四郎びやうきおもきにしがたい、難波にてゆびおるほどの



いしや、かど口にのりものたへず、あるひはきよぶ  
ん、又はしゆどく、いや／＼はいきよ□□かたなんど  
と、いづれかおとるまじき見たて、いやといわれぬり  
やうじ、のこるかたなくつくしぬれ共、命のかぎりは  
ぎばふつき、やくし如來のへんさましまし、ほつきや  
う道悦になり來り給ひても、いかな／＼いしやぼん  
ぼんかなはぬうきよと其身のたんめいをうらむより  
ほかなし、もと半四郎くわほうなる身にて、あまたの  
子をもつ、そうりやうはかめ松町中御ぞんじの若衆、  
弟とら松女子ふたり、一人は太左衛門橋筋ききやう  
のがくうつたる所ゑやうしにやりぬ、其つぎはひん  
がしのかた、山より出る月のかほ、只丸かれといゝな  
づけて、ふたりともに花もみぢ、おとこたる子は梅  
かさくらか、びやうかさらにはなれず、いともかしこ  
くつかへまつるもとをはなれず、よとぎひとぎのひ  
ねもすにも、びやうきへいゆうじゆみやう長おんと、  
日本六十餘州の佛神にりうぐわんひまなく、かけた  
てまつる御ほうせんに、あふぎぐるまのちやうちん、  
是半四郎つね／＼しん／＼おこたる事なきしるし、  
いはねどしれた事なり、かねてふもんばんの心して

ほけきやうをどくじゆし、いゑのうちには三百五十  
四ケ日、とうみやうのひかり日夜にたへず、其心より  
かみをおそれ、しもをあはれみ、情第一にして出入も  
のにも小心やさしく、じひをほんどするしるしにや  
御見まい人まくらもとにたへず、きぶん次第／＼に  
あしおもくなりけるにぞ、我と身のかくごうをきわ  
め、百八のじゆずをくびにかけ、しやうめうのこへや  
まぬうちにも、しばいの事をあんじ、作り津打治兵  
衛、とうどり岡本七郎左衛門を枕もとによせ、きけば  
けんぶつおちたるよし、何とてゆだんめさるゝ、新狂  
言はか／＼しく出ずば京都へ人をのぼし、半左衛門  
座の狂言にても、當地のかくにあはいとりにのぼら  
れと、今をかぎり迄しよげいの事をわすれず、それよ  
り作者京都へのぼり、山本座のきやうげん名古屋山  
三をとり、そ／＼じぐみをかへて、けいせい八丈が  
嶋とげだいあらため、三月十六日を初日とする事よ  
しなし、其夜かねおやかたより扇子ばこ一つに文そ  
へてもたせこしたり、半四郎書狀をひけんし、何とな  
くおしいたいき涙をながし、女ぼうかめ松、其外一も  
んまくらもとに近付、かの狀をよみきかせ、かめ松に



いふは是は我借用したる金子二千兩の手形なり、然るに我とても本ぶくする事あるまじとあつて此手形をくださるゝ、御心ざしのせつなる事をおもへば、今一度命をのばわり、此おんのほうじたきねがいなれ共、といまらぬ命はせひにおよばぬ、かまへて御おんのわすれず、ながく出入こそおやゑのかうなり、たとへていはゞ今のあらしを手本にすべし、たゞしよげいに心をくだき、けいこゆだんすべからずとま事有いけん其心より大ぶんの手形をもらいぬると、町中にさたしてしらぬ人まで佛神にきせいし、命ごひする人いくたり共かずしらず、人げんにむまれて是ほどまでおもわるゝ物やと聞人かんじけるとなり

〔中〕若後家夜とぎのはなし

しばい過て一座の役者、びやうきいかゞと見まいけるに、次第よはりに只何となくうなづけるばかり、あるよ高嶋おのへ、今村くめの介、玉川十三郎、夜とぎせんと四つ打ころより來り、枕もとになみいて、おのへはくすりまいらせければ、十三郎くめの介は、手あししづかになでまいらす、女ぼうかめ松はしぢうそばをはなれず、ようきくかた手に、もしもの事もあら

んかとむねせくるしく、よもすがらとのいする物がたりに、みなさまきいてくださんせ、ま事に人の身ほどしれぬものはござんせぬ、こちの人ほどまめな事はなかりしかど、いつのころよりやみ付、それからはずつこりとした事がない、かりそめながら座本をめされ、ことしまで十年かと覺へぬ、十二年いせん「たつ」としは、京万太夫座に有つかれ、坂田藤十郎と、けいせい玉手箱と申ました狂言に、みやこ人をなづませ「みの年當地にて、大和屋甚兵衛座本のととき、三百兩のきう銀とつてなにはにくだり、いせ御せんぐうにめをおどろかせ、又々うしろしのげいなど、申さぬとてもかくれのない事、およそじつがたきう銀三百兩のとりはじめ、其あくる「むまの」としより座本にとり付、村山平十郎中川金之丞上むら吉彌などかゝへ、かほみせのきやうげんふぢはらのはる姫、あたまからの大あたり、正月にはさかばのわうじは村山平十郎殿のお手がら、梅のよし兵衛と中村かづま、三原十太夫どのゝあたり「ひつじの年は、平十郎坂田藤十郎などかゝへ、角のしばいで、さかい大寺にて町中のせにをとりこみ、又そがなげしまだの大いり、其あけ

「さるのとは、役者ぐみあしく、おとは次郎三郎、杉山かん左衛門殿などかへ、やうく佐太のらくわうじ一つがあたりもの」とりのとしは杉山勘左衛門殿いなりに、又村山平十郎をとつて、二のかはりまや山のかい帳、百五十日のきゝもの、そのみかかの雪姫にてつゞけどり、其時だんななどは、さゝめのせんわうと申たとねりのやく、うしをとめんとせしとき、ふとけがをしられ、それよりぞんびよづかれました「いぬの年は江戸ばんどう又太郎、おの山うぢ右衛門などにて、さい寺のかいちやう、としのくれにまたくせんくわうじのかい帳、ざいしよのばゝかゝたちのせには、こちのしばいとせんくわうじ様にみなおさまりました」いの年も坂東又太郎、おの山其ままかへ、かほみせよりはるなつ迄一つもあたりなく、六月より村山平十郎をかゝゑ、やつぐら長者といふきやうげんが、其年一つのきゝもの、其ぢぶんきしよくあしいとて役をひき、かわりにはる川庄左衛門がめされた「ねのとし江戸より市川だん四郎をかへ、おもはしからぬとしなりしを、杉山勘左衛門、花井あづまふたりして、三かつが心中、ふゆきよりはるまで

もちこし、百五十日のあたり、それよりほかなんにもなし「うしの年きをかへ片をか仁左衛門をかゝゑて、杉山勘左衛門は其まゝいなり、此年も酒天どうじと、ふじ川はたる見がしばらくはやり、かいくれひくれ」とらの年には山下又四郎と、藤川武左衛門、是もはかどらずして、やうくせみ丸ばかりがきゝました、當年のしばいはかほみせと、大山寺があたりにて先は中といふものなり、とかくぬしのやまいゆゑ、町中のおもひいれもちがい、しよじきのとくにおもひますと、半四郎が出世ものがたりしけるに、半四郎よろこび、おもへば此身の出世大かたならず、其うへうしの年此家迄とめし事、これわがちからにあらず、町中のごひいきつよきゆへなり、もはやおもひのこす事もあらねど、たゞかめ松が事のみなりと、いゝのこすことばの下に、しばらくまどろみけるに、ふしぎやまくらもとに白こあらはれ、としごろしんぐするいなり大明神の神ちよくなり、しかるになんぢがびやうきひゝにおとろへ、今をかざりとみゆる、かねて長命とまもりしかど、しするやまいは神のちからにも叶はず、かざりなきやまひはとゞむる事やすし、

たび／＼しなんとせしを、今までとめ直事は神りきなり、もはやうき世のかざりとおもへ、そちこそしするとまゝよ、かめ松が行すへめでたくまもるべし、心やすかれさらばよと、いふかとおもへばあけがたの、鳥のこへ／＼ほのきこへけるに、半四郎めをさまし、一ねんほつきし只何となく、廿六日には申置事有、一もん一座の役者衆、のこらず参り給へとくわいぶんまはしけるに、何事やらんといづれも相つめけるにぞ、半四郎きよくろくによりかゝり、先一家にはひそかにいゝ置、次に村上平十郎、櫻山庄左衛門をまねき、此ていにては近日相はつるにきはまりぬ、それゆへかめ松にげんぶく致させ、すなはち私が名をゆづりました、けふかう私じやおもひ、ふびんのかけてください、又弟とら松には、兄かめ松が名をとらし、私になりかはつて、ひとりの弟をひきまはしてとらせと申事じや、又おの／＼にも心かはらず、私より猶大せつにおもひ、つゝがなく座本を致やうにたのみます、べつして平十郎殿庄左衛門殿をくれ／＼頼申ぞかし、扱津打治兵衛殿には、かりそめながら久々／＼のなじみ、申はくだなれ共きやうげん万事に心を付、

いつ迄も念比して給はれ、今生のいとまごひに、いでさかづき仕らんとめん／＼にさし、扱かめ松げんぶくのしうぎに、しき三ばそうを一さしみんな、もしし、たらんにはうきよのかざり、千に一つながらへなば、我身のきとう、はや／＼とのぞむにいぎなく、おきなに若太夫かめ松、三番叟はむら山平十郎、せんざいを櫻山庄左衛門と定、にわかにしやうぞくをあらため、はやしかたのこらずぢうたひ、皆／＼どうおんに今日の御きとうなり、ちはやふる神のめぐみに今一ど、命ながれ、千秋ばんせい／＼と、先はしうぎをおさめけるかな

〔下〕いわるかめ松二代の座本

廿七日のあけがたよりびやうきいよ／＼おもく、卯月三日に佛前なるとうめうのひかりをまし、西にむかいてがつしやうし、今日こそわがわうじやうのときなりと、ねんぶつ口にやむ事なく、たつどきちしきをたのみ、りんじう念佛ごくらくの道びき是ならん、みぬ人此おもかげみたくば、過つる大山寺のきやうげん、又左衛門となりかすへが身がはりにたゝんと、我とがつしたる有様さらなり、いづれかわうじやう



する人あまたあるといへ共、身のとりおきかくべつにして、あいじやくりんゑのきづなをはなれ、かのきしにいたる事をわすれず、さいご今なりとみゆるまです手をあはし、卯月三日を此世のかぎりとし、ついにむなしくなりしとなり、皆くはつとむねふさがり、せんごとりみだしけるは、あとにのこりしつま子なり、いづれも是にちからを付とても返らぬしでのたび、あけなば卯の日、こよひにしがいをほうむれと、其夜八つちぶんにそうれいのいとなみ、ゆいげんにまかせゑびすばしをわたり、しばいのまへをとうりけるに、これしるとなく四座の役者、ひとりものこらず六道のとも、どうとんぼりがはにはいゑくよりちやうちんいだし、只につちうのごとくかゝやきぬ、おしや四十八さいの命を、千日寺のけむりとなして名のみのかしぬ、しばいのならひせひなく、明五日よりしばいを取たて、二代の座本、かめ松とら松を、古今新左衛門かいほうし、物あはれなる口上、心なきものまで袖をしぼらぬものも、なくくやかたにかへりて、よそならぬゑかうに、いよくあとめを頼みりく、南無あみだ佛く

## 岩井半四郎さいご物語終

追付はやり歌古今集と申本出し申候

但し古今新左衛門しやうがのこらす直之ふし付口傳、まかに致當月中に出来仕候

御評判く

## 大阪上久寶寺町三丁目

正本屋九左衛門開板

楊屋町

市河

正德追善會



## 追善曾我序

明六つからたゝく櫓の太鼓は與藏が夢をやぶり、五日の風聞に芝居の沙汰止む間なく、十日の雨にぬれの仕組を評する人更に絶ず、今市川が去年うつくしき虎無僧姿は江戸中男女の心に叶ひ、正月より七月迄入一盃の大當り、それより打續たる模様身振りに、親團十郎亡魂枕神に立て、我身は不幸にして刃にかかるといへども、汝ともに天を載ざるの徳により、今衆人愛敬を得たり、いで我往昔討れたる意恨、汝が幼立のあらゝ語聞すべし、筆に止て卷となし、追善の三部經ともなせかしといふ聲耳にとまりて、夢さめ聞ばほのゝと明はつる鐘もかすかに、はや十三年忌となりぬ

正徳六ツの年 丙申五月

綿繡堂序



市川正徳追善曾我一之卷

發句 市川の孝おとなしき花の兄

げいは名を潤す、富貴屋町は身過をもよをす、若女形  
よき木挽町を、家とのみして、見物に行ものは、かた  
のごとくか晝夜をわかつた、役者つき逢をするもの  
を、野良ふらす子じやと言、以何者よく内外を見すか  
すとにやあらん、折に觸ては、彼をまね來て役しやう  
わさを問ひ慰に、役者雀囀りけるは、古しへより今に  
至る迄、名人の名を取たる者、是多しと申せども、吹  
直しの新きんだい、市川程なる者はまれなり、上を申  
さばうば玉の、夜の錦のしとねのうへ、下を申さば親  
の讓の、あら金を遣ひ捨て、非人と成、蚤飛で頭ちや  
うてんに至り、虱懷におどる、小屋の隅迄、または割  
付飛脚も、事をわすれて、終立寄て回天地の間に知ら  
ぬ者もなく、扇子うちわの風流繪にも、見しりごしな  
らざる人なし、かやうに名を發る事は、親に孝ある印  
なるべし、市川常々父母に、孝成るしこなしをみる  
に、こまるちやば、初て鳴かぢやの仁藏、豆腐とう

じが水道の水汲ころ、くちすゝぎ手あらひ、持佛堂に  
打むかい、念佛數遍あみだ經、心にかのふほど讀じゆ  
し廻向過ぬれば、直に蓑茗盆に火を入、父母の寢屋に  
行靜に起奉り、ぬれがましけれどもなごや三郎が葛  
焼或は手作焼飯の茶菓子など奉る折も有り、それよ  
り手をこまぬき、今日も勤に罷出候間、留主の内うち  
の者に仰付られ、御心まかせに、何事をもあそばされ  
候得、晩ほど御目にかゝり奉らんと、次の間へすさり  
て、ふさいに向ひ、留主の内、隨分我に成替りて、御心  
に入候やうに勤られよと、日々／＼に新に、日に新  
に、孝の勤を言ば、昔々も御座た堅凍を、力をも入す  
に、くだいて、魚を取り、深雪に手もぬらさず、足にあ  
かいりもきさらず、魚を取り、錢入らずに穴を掘て、  
金の釜を見付取る、たいより安物はなし、舜子はべい  
べい言葉の士百姓の土座を離て、きんら羅りやうの  
しと寢にて、しかもがこうぢよるゑいの兄弟の、およね  
を愛、遠他の國より大和な國まで、かくれなき孝に、  
おさ／＼おとらぬ程の孝第市川に、常々身軀はつ  
ふを、父母に受て、敢て損破ざる孝の初と、二月二日  
の灸を遠慮して、勤のためぞと、それさへ聞ねば、す

へぬほどの勤者に、此度の刃はどうした因縁ぞ、問たけれども貳千餘年前に、涅槃の空雲隱おはしませば、今時のあかい衣や馬の尾の蠅、拂持衆に問たぶんでもしれぬ、付てもなをく佛法ほど、有難事は御ざるまい、我等が時愚痴愚鈍な奴は奉存候畢

陽にさそわれうぐめく虫の色くさまぐ成に飛ではおごりを知らざる蚤の終爪の爲に市川の底深因果はどうじやうわばしりに因果經をうなづきて

昔蚤爪をつぶせし報にや今又爪につぶさるゝ蚤

脇 鶯判も盃に飛

つれづれなるまゝに、ひとり住家を立出て、心のうつり行方へ、そこはかとなく歩行ば、堺町に至りぬ、あやう社物澡けれ、出や此所に浮れ来て、おもしろからん事社多かんめれ、見物のお客衆は、目出たし、竹之丞が芝居は、末々の役者迄、人間の業とは見るんぞかし、市川が藝は、殊更稀なり、賓人の棧敷杯の、野郎まわしを召れ、肴に貳朱判下さるゝきは、ゆゝしと社見ゆ、船頭馬形などは、あぶれ來るとも、かまわぬぞ能、其外下つ方は、藝入の時に逢嬉し顔成も、鼠木戸

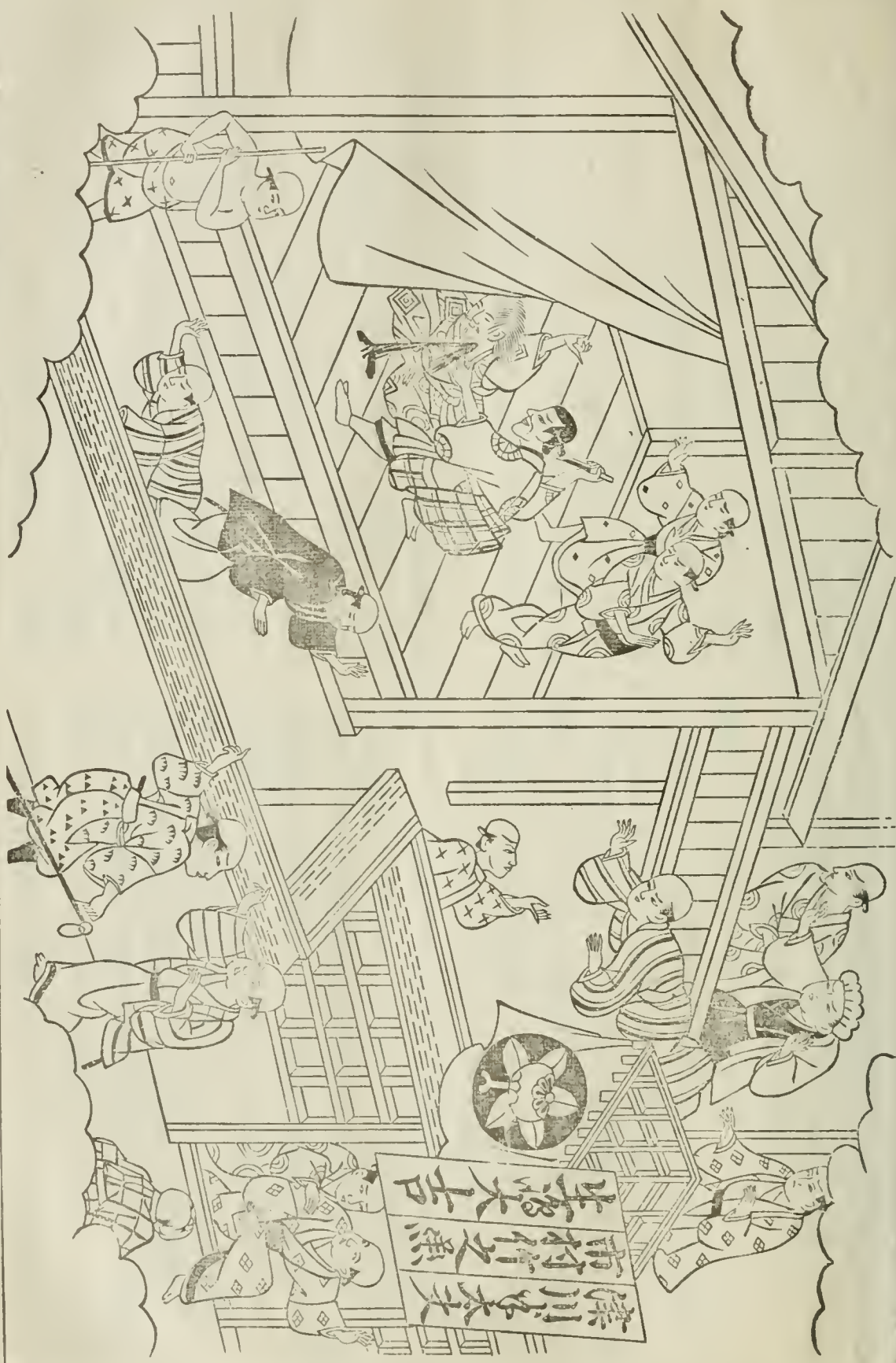
の口におしおふ法師計、浦山敷おらんやうにはすれども、人に見らるゝを、氣の毒さうに思ふと、せんせうもの、言けんも、實にさる事ぞかし、と口づさみながら、鼻紙袋を内懷に入、腰の印籠に氣をつけて、繪看板の見居たる所に、竹之丞が芝居に何事やらん殊出來ぬと見へて、見物の貴賤、鼠木戸を猫脊に成て押破り、缺出、年寄たるものは、棧敷よりつき落され、女童子は、踏たをされ、茶辨當の湯にて身を焼、火繩の火焼指にて、羽織著物のすそをこがし、螢などの飛にひとしく、飛ありく有様、興覺て何事と問ども、其分知たる人なし、かゝる處へ三十歳計成男、かいしく見えにしが、月行持と言者にや、金棒をかまひそしく、挽來る彼を招て、ひそかにいか成故ぞと問ければ、彼者申様は、意趣の次第は未知れず候得ども、樂屋にて市川の團十郎を生嶋半六指ころして候と語捨て、いそがしく行ぬ、偕は三國市川上手と、ひいゝふく口にもかたこと交りに、ほめ言葉付、紐に木太刀横たゆる童士、團十郎が風俗を真似人々、我市川に三升の紋所付ぬはあらぬ、下部水師の族まで、江武に言あへるほどのはやり役者なれども、そねみを得たる物



か、または顔を紅にて染たる色事でもあらふか、彼まどひの止がたきは、老たるも若も、知有も愚成も、貴となくせんとなふ、替事なし、神さへおくら子、ほとけにもやしゆたら女、近代はぼう主殺、戀の山には孔子も引るゝと、むらさき式部の口すざみ、其外三國數多にして、筆にまかせるにいとまあきあらず、されば女のつかひ捨し紙くすには、鼠も能巢に引込、また或書には、女のはける草鼻緒の足踏雪踏をば、犬も能くわゆると、言傳はんべる、實謹可恐は、此まどいなりと、つぶやきながら、人の心の我がちに、商人のすまぬ穢、ゑど橋の方へ歩行ば、時しも後の藪入の頃なれば、やうがんびれいの女郎花の、袖をつらねてかりの匂ひなんど、すり違ふ色にむげなる親仁も、廻向院へ日參しよさくりじゆずを落し、手代の平兵衛を疑、自身米買出しの兄きも、米指をうつちやる、隔夜道心の夏念佛は、前のいたこのかねを打そんじて、しもなくにて金玉をなやまし、口を廻して、所の世話に成たり、むかしは父母愛孝のために、當時は戀慕愛著の爲に、家をなくし名を流す耳、つれなやゝと、思ひながら行ほどに、しとみ下頃、我家に歸ぬ、ちし

もんに、土産ねだる袂より、編笠焼、丁子焼杯とらせ、草臥をはらさんと、湯あみ杯して、ともし火かゝぐる頃、友とする人、ひとりふたり來かゝりて、四方山の咄なりて、亭主申されしは、今日堺町にて、市川生嶋か果事、舉世おしまぬ者なき世の、野邊のおくりの通町も狭く、店下迄もこみ合おし合、知るも知らぬも袖のなみ越す沖の石佛となして、手向の水はかわく間もなしと語ければ、其中に市川と同國の人有りて、微細に出性を咄ける、彼が父某とかやは、四十歳に餘迄、子なき事を歎て、夫婦諸に、所の氏神成田不動へ、一七日參籠して、子種を祈に、七日満曉夫婦の者の枕神に立給て、汝ふうふが前生は、ある國の米藏奉行成が、我知ずも藏の内のねづみ、また米虫を多く殺因果にて、子種さらゝなし、然れども、前生菩薩をたいせつしつ、今もまた後世心是有、多年我を念づる故、子種を今度授といへども、成長に隨て、劍の災難のがれがたし、一度歎のかゝる事有也と、仰有て大小の升三つ重、女房の懷に御入有と夢見て、得てし子なればとて、幼少時は升之助とぞ申ける、扱また役者に成因縁は、御夢さうに劍の災難有べき御つげをおそれ、他





の手に渡し育てんと、花のお江戸へ越けるに、何が不動の申子にて、器量こつがら人にすぐれし故、少智をも取ほどの事耳、數多なりしかど、きうせん災難をいとひおそれて、武士の業をよけしに、因果の業のかんずる道理のかれがたく、此度世上にまた藝市川と名をとり、夢そうの三升の紋所、所々の神せんかしこの佛前、かみなが下に至る迄、付ふらしたるも、夢現とぞ四十歳に過て刃にかゝりしを、おもひあわすれば、佛神のかご權者ごんじやの傳記、疑べからずと、兼好の書れし事、誠に神國なれば、すきかへしの淺草紙をも、不沙汰に遣ひ捨ぬぞ宜しかるべけれど、重口のどうけ交りの輕口咄かろくがしゆんて來て、團十郎が生死のいしゆ、口々に我知り顔がほに、慢勝に娘の色事さわり故と言へば、いやそれではない、内々藝の威勢あらそいで、果たせうこには、此度の狂言に、八嶋だんの浦の仕組思ひ合は、やしま生嶋且浦だんのうら、團十郎是兩人にたゝりたり、市川は次信役にて、幾とせ過しよしつねならぬ世の中、あんだ辨慶が力も落て、生嶋が手にかゝり平家の大将のどぶへ、大脇指にて突つきされ、御てんやくの藥、菊王丸も入は社こそ、かめ井は終になくなりぬ、なら

び居たる役者は、生嶋をくまひ太郎、外面の者は、ひたちぼうをふりまわし、お見物はひよ鳥ごるを立て、逃行、讃岐圓座半疊錢仕切札錢は、かいぞんに成ぬ、なつたら大事か市川程の名を得者えしものも、浪の泡と消ぬ、かりの浮世に、鶴龜の齡ほども、いくしまの身でもなし、のめやうたるやざゝんさと、濱松の音聲々に、さいた押おさた、あひ引に、ひく鹽かげん能者、大和にあらぬとうがらし、醬油のなみもむれ高松、奴豆腐くづしやうの萌喰もくひ、砂鉢淋しき杉箸に、横雲かゝる明方に、順の肴につまりつゝ、藝なし猿屋の大黒舞、扇子追取立上り、一に市川末繁昌、二ににぎあふ富貴屋町、三にさんじき明間なし四つに四座に入多く、五ついくしま名も絶ず、六つむさしの大盃、七つなんぼものみ次第、八つに役者ははやるべし、九つ子藏こくらは親まさり、十で富たり堺町、大黒舞は是までと、乾の隅をてうくと、打治給へば、國も動ぬあらがねの、つちの車の我等まで豊に住る嬉しさよ

### 第三 懷の中杉白き雪解て

かくて團十郎がうわさ咄もさる者は日々疎うす、一日二日と過ぬ窓の前の北面は、雨封じて寒空ながら二月



廿六日、彼岸名残りぞと、四方の寺々に佛事の鐘の音、念佛の聲も聞えて、俗も法師も飛ずはね題目の、太鼓は耳にふれ次で、おかしく、神明の神樂なんど拜し、眺望して水茶屋藥賣に、増上寺のにぎあひ尋しに、常念佛の御寺へ頃日珍數佛の來て、にぎ合候と言より早ふ其所へ行ぬ、誠に説法の會座につらなつて聽聞せん、諸人の心ひとしくして、蟻の如くに集り、東西に走る南北へ行、高き有り賤き有り、老たる有り若きもあり、彼慶安賣藥師が告し、今日は團十郎が一七日成とて、皆ねん佛堂へ參詣の人々多し、思はずながら立寄指のぞきて見れば、おびたしき群集居ならびたり、住寺高座に上り給ひ、發願と鐘打ならし、廻向まします亡者の團、十念も過ぬ内に、四十歳計りの女性、下には雪の肌を惡む、白無垢春の空のほめきたる、淺黄縮緬の上著、あけをうばゑる、紫糸にて、誰を回の五所紋縫たる、小袖を著、白沙綾に墨繪の帶、今やうにむすびさげ、參詣の人中を押分かさわけ、高座の前へ立寄て何やらん一卷をなんさゝげゐる、住寺取上げ給ふ、誠に佛在世に八歳の龍女が、法花の會座にて寶珠をさゝげしも、かくいちはやくや有け

んと思ふ所に、住寺彼卷物を押ひらき、聲うち揚て讀誦なされける

### 誤て申諷誦紋之事

夫倩おもんみれば、朝に看板を出して、井籠の花をつむといへども、夕べには齒骨にくだき、腹中に入て朽ぬ、うゐてんべんの堺町、正直大ちやくは江戸のならひ、狼籍不出來は浮氣のならはし何國の人かまぬがれざらんや、今弔所の門譽入室學榮、頓性菩提の爲なり、俗名は和國無雙の藝、市川團十郎素性は、下總國いへども、上手の藝者に、成田の郡のそだち、後絢の頃より、遊藝を好、其道に達し事、誠に孔子の食事に、そとうをつらねられしも、かくこそ、和國にては、彼楠庄五郎が竹馬に、むちを打しに事ならず、わづかの星霜の中に、四座の大黒柱として、役者の衣裳を、打出し鹿子、辨才天の笑顔、もゝの木挽町につらなり、ゑびす三郎殿の、釣針に見物いとめでたいを、鹽干の浦堺町の棧敷に釣揚、四座の富貴町の、布袋屋が菓子はおうせんの上に満、五番續の長狂言は、福祿壽の頭にかゝやき、また有時は舞臺のはりだし、かきの根の貴増上、見物を寄太鼓の、なるかみ上人と成て、嗟



しやらくさいにんにくのぢひの相形をあらはし、其心法の十界をとり出して、修羅事にはのりつめたる、坂田が常に數寄なる、大武藏或は、極貧乏なる曾我どの、まへ、時宗驚貧前の、せき面したる顔色、四股を紅に染、大太刀を帶し、そのがうせいを眼前に、あらはす、荒事を以ては、天地をも動、目に見えぬ鬼神をも鎮、しうたん事は猛捻髭の武者の兩眼に、涙の雨をもよませ、吹ばとぶほどのかる口には、老若男女の心を浮かし、種々の遊藝、實を虚になし、虚を實にいいしこなして、人の心を慰るは、皆是かれが諸作により、折に觸ては、花の都に上り、京わらんべのそしり口を閉させ、讃言葉に逢、また關東に下りては、武士の人々の氣を延、樂と成、然といへども生有ものは、一度は滅穢土のならひ、初有者は終をゆるさず、されば佛靈鷲山のきやうげん八箇年御世話やき、種には、三じきにして一川の流て早さ月日を忘、藝の繁昌を樂、威勢は四座の舞臺に餘、見物ははめをばづして提重の煙たへず、所々の毛氈は、夕日に映じて紅葉のこどし、貴賤の吸蓑茗は、榮る民の、竈はいそなり、芝居の繁昌爰に、喻は山崎千軒寶寺、大津の浦花の都

の、花盛と言はん、されば易に交龍有、梅、佛經にも師子身中の虫ついはむ、源氏の友喰とやらんで、生嶋半六市川をそねみて、時を兼うかごふ、出其頃の仕組鞍馬の僧正化して忠信四ばん續の手中ばに半六兼て打べき意趣孝を立て、四目ごろしに打と死生の、二つ川渡り名代をあらそふ、竹之丞座の、ふし有る石をきらふかと、うかごふ、眼の白黒の磯馴貝する狂言の、他波も引幕の影に、しちやうにかけてちしごを待て、一刀に突市川は木太刀なれば、ぬき合にせんぞなき、是ぞまことなきを實に仕なした報ならめ、矢さきにあらずして、五十四さいにて息たへ、生嶋が手にかゝり市川野邊の露と消おわんぬ、嗟無下なるかな狂言のならひとて日々に死を致すといへども、夕べには宿にかへり、妻子とおしのふすまに、秋の夜の長枕をかわし、また朝には藝をつとめしに、冥途黄泉往て二度かへらぬ仕組、面白からぬ廿五菩薩、柏子聞もいやかなおしいかな、百年の半ばに、人間の油火夢と消へ、今生の榮花忽に散て、ながく本來の道に歸る、ひくわらくやうの風の前にはうゐてんべんの了、でんくわう石火の聲の内には、生死のきよらいを見ると言事、

今更初ておどろくべきにはあらねども夫婦恩愛の契り、人間八苦事成といへども、逢別離苦に越事なし、殊にはきうせんにかゝる事、非業の致所か、定て定業の印にや一七日彼岸今日に相當の、折を悦て、一通を授せうだいにぎするものなり、經に曰、極重惡人むた方便、ゆいせう彌陀とくせう極樂といへば、いま弔所の功德にこたへて、九品淨性に生、すせん、蓮花の上に座せん、歸命阿彌陀佛、むひの樂にはこらん、誦文依如件、年號月日前に同じくと讀もあへず上人かんるいを流し給へば、參詣の貴賤袖を絞らぬはなかりける

追善會我一卷終

寶永忠信物語二之卷

發句 あかの水一時に來る石佛

黒鬼とは謂とも、後生願とはいわるゝなと世の世話言ぬれども末世に成ても、朽てもすたらぬ金拵の小にて中もくだ、鍵に桐の大狹箱持せらるゝ方は、愚なり唱名念佛、或は御たすけの御恩御さいそくにと、一向にかたむき、あみだ様に身をまかせ女犯肉食を表へつき出し願やから、或また修多羅の經さうにかかわつて月をさす、指にて黒大豆座禪の茶請にくう空を了て、俗も出家もおかしいぬり笠にて、わそくとやら、かごぬけとやら、かね太鼓にてはやし立て、分別くさいもの、烏ののまぬ水そこぬけたるまの添狀にても、門より内へ入ぬと、石の看板、白好みの六藏が、家督取の様な顔をして、團十が荒事の、顔のあかいけさ衣を貴愚痴やおろかのと、他力の宗旨をうつちやりすてゝ、十露盤粒か巾著の、緒締琥珀の十八粒の、念珠げにとは愚に見へず、武士の、のちの世の事わすれぬ、便りには脇目よろしく、きいまちゝ

なれば、後生はねがひがち、頃日は女順禮、胸に木札のたゆるまもなく、爰の開帳かしこの社の、縁日しやみせんに乗ぬ計、つれふし歌、後生願ひのひる中、俗も坊主も秋ならねども、松虫の鐘を少しもくにて、手の内に鳴せ孫四郎節のねんぶつ満々て、後生願のさかななる時なれば、此寺の聽受の多、にぎやかなるも、斷とかくおもひつゝけるうちに、説法も過ければ、聽受の人々、團十郎が墓所へとて、念佛堂の後へ皆參ぬ、我も人なみに行て見れば、きのふにきやうは引かへて、誠に一体とやらんどうけ法師の

佛にもなりかたまりていらぬもの

石佛らを見るに付ても

と詠じられけるなん思ひ出で、團十が藝の立ふる舞の仕成も、苔むす石に何のせんか有、春の風は墓の頭の松にこたへ、ひとり苔の下に聞らんといと哀を催す、つかの上には他人あらぬ、内輪よりそとばを立、一念發起の氣をあらはす、參詣の諸人立置たる、しきみの花恰も森林のごとく、手向の水にては、陸の海となし、二町立ならんでは、はよふ立寄かだし、其邊木々のこすへを見れば柳櫻の植交に、引さき紙のし



きしたんざく、はては品川松右衛門や、紙くす買の氣  
ゑんとなるてふなどと、惡口交には追善にもと寄て  
見れば

波やうつ生嶋かけて引鹽の

流たへけり市川の瀬に

またかしこのつかのほとりには、さすが名を得し程  
是有て、唐の大和書ども見給ひたる、人のなすにこそ  
七言四句八苦のうれいのけんとにや

高名流述市川藝

有實有忘口上叙

畢竟無常生嶋劔

世間皆惜九藏獻

きのふ見し花の姿はきやう散て

はかなく殘る松風の音

かしこにはまた俳諧發句

散花は發願の氣のいろはかな

よしともに散身は花の山嵐

霞とも白道苦なし不動心

なきあとを幾日に問や呼子鳥

此中の櫻むにする嵐哉

世の哀日の櫻香の山の散り

祥風堂

易螢

一巴

司夕

議螢

細吟

翼珍

春の雪消て一字の雫かな

また爰にも

某

紅陰

花散不還人死塋

袂濡評判呼二其名一

市川流去有何處

轉變堪レ看觀二覺榮一

およばずながらそれ、是どれあれ見るうちに、右の詩  
歌取交て、覺ぬ我も年もいまだ經ねども腰折歌を曲  
なりに

思ひきやひいきも高き市川の

流の早くたへぬべきとは

と三十一字を、ならべて、立あがりて見れば、永案じ  
致けるにや、日も丸山の五重の塔の、影にかたむく、  
本堂の入達は、地の底からしんぞうめき渡る程に、驚  
て立出宿に歸りぬ、光陰矢のごとし、羊の歩ひまの  
駒、つなかね日員重りて程なふ上巳の祝儀取行頃  
成ければ、家ごとに雛立ならべ、蛤吸物あさつき繪に  
て、桃のさけ祝ふ、氣儘に蛛めが巢をくふぼどの、貧  
家にて内儀の張箱の底をはたきの草の餅、おも白  
酒など爛鍋に買取て、子供の心をいさむ、ましてや暮  
兼ざる娘の親は、乳母にひそうをいだかせ、芝邊の輩

は神明前の店、節句も頓ておわり町へも行て、高々金銀の費をいとわす、買取て、歸る族多き事なり、扱々子故には欲をも忘、斯事もしつべきものなれ、子を持ざる奴の無下に思ひ謗は、ひが事なりとひとりうなづき、表を見れば品川浦の鹽干とて、諸人袖を連治る御代の殿作り、二階三階四海なみ靜に、天地くれを動さず、やたけ心の武士の弓は袋に、刀に伽羅の皮づめ、ぐそく櫃には錠をおろす、好時代に生相て、白米をも洗せて喰、黒小袖のよわきをもいとわす、著こなすは皆是君のとく厚にきすと、舌打ならしうつむき居たれば、門に物もふと言聲しぬ、誰成らんと見やれば、古しへ春は花の根にて連俳せし人よ、秋は月のまへにて交好で新酒をのみたりし朋友成が、二年も見へざる人の來られ、偕珍敷事や、命あれば海月も骨に逢とかや、是々と座敷へ請じ、心のおよぶほどもてなしぬ、それより何角四方山の咄終ば、一樂申されけるは、けふ參事よのぎにあらす、それがし今生に有ながら、六道四生地獄の有さ。殘らず、一見致、久敷の友頃日みまかられたる人々に深相なれ候へば、其射得のために、俗名戒名をしるし、明日高野山へ罷登り

候、貴公にも心ざしふかききうゆうのよしみ、また越べきも知られぬ命、飛鳥川の常ならぬ世の中なれば、今生の名残りを惜ために來りたりと申されければ、是は不思議の事を承者かな、善知識ならではなきやうに聞およびたり、いかゞして一樂には六道四生の有さま御らんあそばされしやと申ければ、其時一樂きせるの吸口がらりと打すて、膝立なをし扇子追取説法のごとく、疊に煤拂のやうに火焰を立て足引の、山鳥の尾のながき日に、猿猴の手をのべたるやうな長物語をぞ初られける

協 迷ばかすむ六道の辻

そもく此一樂と申は、源は四面のさわがしきに立て、渡世を業然といへども、常に靜なる事を好、一芋の閑居而已心がけ、四十歳に不足頃身退て、世のはかなき事を悟、一跡を手代仁兵衛に譲、其身は武藏の國にして、かたくならずかたよらざる中野とかやに、居住して一樂と名を改、山笑ふ春の野にひばり囀り、雉子鳴殘の雁の求食頃、かわづの聲を便りに、孤燈の下に書を開て、見ぬよの人を友として、あかしくらされけるが、此ごろ世間のありさまを見るに、玉

の盃の底へぬけて、代は皆酔り、予孤ひとりつくぐ物を案ずるに、吉田の隠士が、つれぐの筆にまかせし、言葉にも鴨の祭に、小法師が大樹の枝に、眠るを愚かとの笑しに、我身にもあやまりあり、生死の至來、いまにもあらんに、かくゆうきやうの見物は、油斷成と書かたり、唯兎に角に、樂を餘所に見なせる、かつらぎの峯の白ゆき身にふりて、つもる老木の予なれば、若木の枝に交て、花見に行もおとなげなし、または鹽干は殺生なり、夢の浮世を春とても、長閑に思ふは愚かぞと、持佛堂に閉籠、座禪衾を引かぶり、浮世の無常を觀じつゝ、むねんむそうに成ければ、夢ともなく幻ともなふ、廣き野原に出にけり、いづちともなく歩み行ば、娑婆にてなじまぬ大川有、扱はしにても有るやとて川の上下見渡せども、渡わたべきはしもなし、みぎわに小船一そう存めり、見れば渡わたりもなく、定てあまの捨舟ならんと、ちいさき舟なれば手づからさほざしてをし出す、川の中ばにて、上のかたを見ればかざりたてたる舟の有り、指寄さしより是をながむれば、觀音勢至二十五ふたごばさつなみ居給ひて、狂言きぎよの遊覽、娑婆にては三股みつまた、あの代よ此代國さかひ成る、兩國橋の花火

見る、夕すゞみかと思ふに、是なんぐせいの舟にてぞあるらめと、いととうとおもいながら、乗たる小船を押ほどに、彼岸に著にけり、それより陸に上り、二端ばかり歩み行ば、道のちまた六筋に別、其まん中に自身番か中番か杯のごとくなるちいさき小屋有、立より見れば、破菅笠など著たる、月行ぐわつぎやう持打見へて、金捧持たる御僧六人有り、一樂かのそうに問けるは、極樂へはどうぐ參と申されければ、御僧申されけるは、されば六筋のちまたは、六根表して六つの道、汝が心に尋て、行度かたへ行べしと、おふせられければ、一樂兩眼のふさぎ心に觀念し、迷が故に六つの道、まよわざる則すなはば、たゞ一筋ならんと、うなづき眼を開て歩に、道筋一つ成橋の欄杆より下を見れば、紅の水みなぎり落流是社、血の池より、餘て落川おちるにてぞ有けらし、あらおそろしやと哀に念佛申行ば、まちの中程に、やねの上に大きな看板あり、打あをのきて讀は、冠前句付と見へて、古今の秘事の三夕宿と書れたり、さてはうたがいあらしの、しやばにての俳友なれば、嬉しくて直に案内こへば、うちよりもびんが玉子に聲立しごとく、三夕よろこび座敷の障子をあく



るをおそしと一樂が手を取り、互に是は／＼と計りにて、跡に聲なふ奥へともない、色々のもてなし咄に成けり

### 第三 誹諧の花に契りを二世かけて

朋友は信を以て交、三夕一樂二世迄の縁深き事三途も及ず、何のかの茶話過て、一樂申されけるは、何と冥途にてもはいかいや繁昌かと問ければ、三夕答て、それがしみまかりし頃まではさまなかりしが、頃日地獄の衰微立なをりし故、いかんとなればしやばに後生願多がなす所なり、尤年毎に開帳の功德故、ごごくの鍍札朽て、淨玻璃の鏡くもり、誰有てとぐ人もなく、鬼達も金棒を盗出し、賣代かへし故に、ゑん王よりたゝり有て、血の池へどつと奥の嶋ものと成しも有り、虎の皮のふんどし質に置しよりせんき町々にて、質屋の惣札取あげられしも有<sup>あるに</sup>よつて、鬼ども露命つなぐべきやうなきが故なれば、あみだより黄金のはだへ、澤山に拜借しける、好時節には吹付るやうなる事、皆世間のならわし、爰に荒井の閻魔は、しやばにて其身焼づり乍ら、火宅を出來られしに、大王殊外<sup>ことほか</sup>悦給ひて、荒井の閻魔を世に立て、其御身は死手の山

の奥に草庵のむすび、自樂法王と名を替、行なひすましおわします、扱また荒井の閻魔様高座を請取評談これ有、何角に付て鬼ども、身代を皆々なをし、拜借の黄金にて金棒虎の皮のふんどしなどの質物請かへし、嬉涙こぼすによつて、鬼の目にも涙とは申なるらん、新王の判談に、鬼どもを召れ、ごごくの罪人これなきやう子問せらるれば、ごくそつどもまたは九聖人何れも一同に申あげられしは、罪人とも今まで住なれし所々にて、もろ／＼のさいなんに逢、こと／＼く所々にて、生ながらさきへとりこして來る罪人なれば、つみなすべきやうも是なくと、答申せば、責べき罪人なければ、鬼衆達隙明て、數年骨折どき至りて、休みにぞ定し所に、また／＼あみだ如來の方より、觀音菩薩を御つかいにて、おふせ下されやうは、此度のみしな、罪人つみをまへに請し故、つみなしとはいへども、女順禮多くして、十二大から蓮花に入事なれば、蓮臺ふさがりたり、今度ごごくのよき地を新極らくにしつらい、指置鬼どもの苛責を止よとありければ、新王悅佛勅そのい奉と、御受申あげられければ、觀音は白雲に打乗て、西のそらへかへられける、いよく

鬼達隙明ければ、いざ打寄、おもい／＼の慰事あるみ  
ぎりなれば、宜敷時分と互にうなづきて、冠付を出し  
ぬ、殊外はやりて、今程は一蓮の十万億西方にあまり  
て是あると、咄もはてぬに一鬼切紙持参しぬ、さんせ  
きひらき見れは

以手紙申入候今晚六道之辻地藏菩薩新王申請候  
につき貴殿を宗匠に願度候あいだ御出可被下候  
則發句脇第三迄致出來候惡所有之候は加筆いた  
され可被下候必々御出待入候也

### 三夕返事

即答におそれながら穢土より客來得候是も誹友  
に御座候間此仁をともし追付伺公可仕候間左  
様御心得可被成候已上

それより一樂同道にて葬頭川さしてぞまいられける

## 忠信物語卷一終

市正徳追善曾我三之卷

發句 入逢に三夕來や花の友

俗の世話にも逸物の猫は出家もかわひがり、はやる上郎は親方の白鼠、一げいに名あるものはあげられずと言事なし、娑婆に名にあふ三夕冥途宗匠とよばはれ時得顔成出立<sup>でたち</sup>かな、十徳のゑりを握でさつと著、右手印籠巾著のうせん扇子、指まゝに、一樂をともしなひ、三途川へ參られ、案内をこひければ、姥様はよろこび給ひて、何も奥へ請じ、大王二十五菩薩、ぢぞうぼさつも、御列座にて、三途川の珍物ぢごくどの菓子<sup>こ</sup>を調、新王をもてなし給ふ、其時新王おふせけるは、九聖人文臺に向執筆いたさるべし、穢土の客來もし三夕も遠慮有ては、おもしろからず、出がちに句付られ候得と、打とけおふせられける、まことにたつとやらすして、高位に交は歌の折の、只とくとかや

王ませば地獄も花の都かな

みつ瀬の川にいさむ若鮎

修羅の太鼓聞も長閑に道の記に

御

地藏

姥

劔の山は娑婆のふじ山

三夕

淨玻璃の鏡に見立月のてい

一樂

紅葉を疊む血の池の波

筆

表六句も終ければ、大ぐれん氷こんにやくの、にしめものなどにて、盃など出ける所に、幽に太鼓の音しければ、いつもの修羅の、太鼓柏子とは違ふたりと、銘銘外面へ立出ぬとし給ふに、太鼓近よるに隨て、一樂三夕耳なれし娑婆のふれ太鼓に、高々と呼聲を聞ば、市川團十郎坂東又太郎兩人の新芝居、さいの河原に於て、大狂言明日よりつかまつり候と、ふれながす、新王申されけるは、その市川とやちんは、我娑婆の淺草へ出し頃、さかい町のあら事上手な、役者と聞つるがと、仰有ければいちらく申けるは、なるほどその團十郎にて御ざ候、近きころこゝもとへみまかり候に付、新芝居取立、申にこそ候らめと、こたへければ、その時三夕、貴おうおふせられ候ごとく、しやばにて名取の藝者にて御ざ候間、明日そうく、御一覽しかるべしと、申あげければ是はゆゝしき、見ぶつなれば、そうくまいりぬ、さひの河原の事なれば、さじきは、ぢぞうぼさつを御出し是有るべし、辨當破籠は、



姥どの、御もてなしに、預かるべし、諸事世話ながら、言事これなきやうに、十王十體勤らるべしと、其座は過ぬ

脇 地藏の袖につれて舞蝶

扱またさいの川原には、ひだのたくみと、たけだの番匠かりもやうをし、二百三十六間四面にちぎやうをきづく、さいのかわらの川口より、地ぎやう土をば血池の、上下の女中、もつかうで、さしもちにするもあり、極らくじんの隠居は、蓮臺にてはこぶもあり、餓鬼どもははすの葉笠にて、一荷六道錢にて、是を運ぶ、さいのかわらの子供は、また小石を拾て、つちにませ古錫杖の柄を持て、千本づきに出るもあり、とうば五輪石佛に、素麵の繩をつけ、三十六地ぞうはあまくだらせ給ひつゝ、どうづき木やりの其聲は、朝もなんば日もなんば南無しよきらいちやときとゑい、ゑいやゝゝあみだ様、ゑいいくとう音にはやし給ふ、さればいそぎのふしんなれば、夜に入時はきりこ折かけ、高どうろ、丸てうちんの數々は、只まんだうのごとくなり、舞臺のはしらや構の板、その外丸太材木に至まで、死手の山路の奥よりも、畜生道の牛馬に、さいりやうな

しに付て来る、或は十二因縁の大八に、御用の小ばたさしつらね、またはぐせいの船につむ、千石船の入こんだ、万石船のみなと入、三升もいらす見ではかる、釘金物はかちやの地獄三藏が、そのほんやくの因果經、通に付て取つかふ、せんつくし美盡して、きやうける竹の弓、はやぬのを引はり、おがらのかりまた、矢をはげて、せがきの色紙幡さいはいけそくやたらひに、四十九の餅を、山より高く盛揚て、血池諸白はや桶に、なみとくみ入て、棟梁の鬼は、虎の革の上下著して、西方に打むかい、あいづち三度打ならし、六道錢に白餅を追取交て、東西南北鬼神の上へ、雨あられとなげちらせば、餓鬼がひろへばくわゑんとする、さいの河原の子供ども、鬼の孫子につきたをされ、なくよりほかの事はなし、地藏菩薩は御らんじて、ひろいゑざる子どもには、極らゞ淨土のもりもの餅を取寄て、菅笠にて下し給ふ、さてまたぶたいの場面、生靈ごぞをしきならべ、はやぬの、四方大まくうちはりて、二十五の菩薩の客來には、はすの葉にこわめし盛、もみ大根の汁のみに、ひうのあひもの干瓜や、な

すびの香物、御くわしには、割きざりなすびに焼米入、かなべには、またみそはぎを結付て、水向酒もりてうじつ、銘々そのやくくの鳴物をしらべさせ給へば、地藏菩薩は錫杖追とりたちあがり、さかなに舞をぞなされける、そのかみしやか太子御説法の折節、かたじけなくも如來のこがねの御手を指のべ、地藏坊がつむりをば、せんざいなれや、せんざいと三度まで、さすりて今より後の衆生を、地藏にあづけおくなりと、おふせを罷かうむれば、此度慈悲の心にて、此新芝居取立て、一さい衆生の罪人を、うかめなぐさめうれしさに、五斗かわらけにだぶくと、一つたべ二つたべ、縁日にまかせて廿四盃のむだれば、こうじの花が目にあがり、右のかたへはよろこ、左の方へはよろこ、よろこくと、よろめき悦ぶ地藏が棟あげの、いわひをいわふたを見さいなと、舞治給へば、亡者の役者餓鬼菩薩だちに至るまで、三世不可徳の、御取なり、拍子聞の、御肴と、ざんざしばしやまざりける、千秋万歳さいの河原に住む龜、劔の山のひな鶴の、巢を喰つる、松が枝の政木の葛、長居はおそれ、有るとて菩薩は此雲に打乗り給へば、餓鬼ともは

はすの葉笠ひつかふて住家くへかへられける

### 第三 若鮎の吸物鬼の丸喰に

それ娑婆も地獄も、世は似たる事、新王仰けるやうは、義理とふどしはせねばならぬとの世話の有なれは、太儀ながら我等方より團十郎かたへのはなには

一 源平兩家之太刀 十フリ

一 無間の金 百枚

一 血之池諸白 壹樽

右之通つかわすべくと仰られ、兎や角と言中に明がたに成ぬ、直にさいの川原へ、さうくしかるべしと、御出なされ、道すがらの賣物、數多く相見へける品々に

一 三瀬川流の五文取四十九之餅 有り

一 血之池之 上諸白 有り

一 三瀬川之鮎鮎の鮓 御酒之肴色々

一 とうしみにて掘し竹の子のあへものあり

一 なむあみ豆腐のでんがく 有り

一 木魚之たゝき

一 うなぎのかはやき 有り

一 六道錢盛のそうめん

賽の川原屋

右之通御望次第早速仕候 隠居地藏坊

此看板の底をさしのぞきて見れば、鬼ども無間の大釜、とうくわつの火を焼立て、顔をまつかいにして、鬼が味噌するやせ鬼が

一はすの葉のかしあみがさ

色々

一邪けんどん 新そば  
なら茶

有り

一魚類御料理御のぞみ次第

ういらうち  
さんせうもち

賽之川原二條通角

一地獄土御菓子所

一ざうひあめ  
あさちあめ

冥途屋鬼助

扱また芝居の其構、事もおろかや娑婆にては一世いちだい、四座の能にもまさるべし、三界無庵のさんしきをあげ、一枚かんばんには、万日惣廻向の大そば、しゆ羅の太鼓をやぐらあげて、餓鬼どもにおからのむちにて、うたせらるゝ、既に三番そう初まりければ、新王地藏三夕、一樂ともに銘々、大夫さんじきへあがられつゝ、右のはな抔出したもふと、かくやより進物持参して、一禮拜申あげ入ぬ、かくて狂言初まりぬれば、東のかたの引幕のうちより團十郎又太郎、

花井才三郎、猿若三左衛門、その役々勤に出る、また西のかたより、伊藤小太夫玉川千之丞荻野澤之丞、岸田小才治とうけには、してゝん孫太郎坂東又九郎、生嶋半六なかむらん三郎、森田勘彌交に出揃、淨瑠璃大夫はとらや永閑、説經大夫には天満八太夫、長歌源右衛門その外、三味線はやし方、並居たり、かくて團十郎、二三となく一文字に大刀を帶、四方の目くばり、五法破り六方七難、即滅八文字ふつてくゝもり聲にて、大口明十唐は知らず、二世の金平事

團十郎せりふ

娑婆よりも地獄のとをるひと芝居、雨ふらば風にはもろき白露の、身はうき草をさそふ水のなあら事のかいさんさんごく市川初きやうげんの顔見世、あかいはめいぶつあほうらせつにものかぬ中、鬼のむすこに山姥が孫、朝敵や扱はいるある所の鶴を見付て、金平六道がよい、血の池にぬれにぞぬれし腰より下はあかいがすぎて、色にそまぬは是さない、さんせ諸佛いんにの色、いわずと御ぞんじからだせん地藏も、錫杖を質に置いて忍び菅笠此里の鬼様も、節分の夜娑婆のいろ毎に、ひらぎおほそのかしらのそのかげ



の、儲わけいやとは言れまい、鬼様の目にもなみだほ  
つろいは色のわけ和つちが朋輩ほうはいは石の吸物よりも堅  
屋の竹綱も色には同氣もとむる燈心で竹の根掘とぬ  
れの沙汰名はひとりむしや二人寢の枕も聞よ夜こそ  
ねられね、とつぶやくいろさだかげ事ではござりま  
せぬ、契なかゆくる中行すへ竹と名がつきや紫竹しちくもいとしま  
して、四道四生の流の色、竹に首竹はまつて、ちごく  
の太鼓質に置いて、とうくわつちごくのどらうつこん  
てるまとほゝつんでるこんだ

市正徳追善曾我四之卷

發句 世の夜見せ地獄も花よ晝の色

過去現在未來三世の色事は、忍ぶにあかぬふかあみがさ、ともをもつれずひとりむしや、よせいにつくや細しちく、竹綱たけづなすぐな末宗も、曲道筋まがりみちすじかよひ來て、ふすませうじや、びやうぶのさだかげで、諸らちがないとうたいの、しり、四天王其外地獄の色男、とんとはまつた血の池の、下にこがる、どろ町の、にごりてしまぬどうてつが、爰でも土手の歌念佛、地獄の惡所と言ながら、娑婆の名をかる吉原と、その名は地獄にあげや町、ほう八町にかこいをなし、三つば四つばは磯、百千万億また屋形を立のきば、ひよくのはをならべ、あまたの女郎かこひ置、浮世の人をなぐさむる、いか成かうしのつめのはし亦しやくそんの孫弟子も、うわきの友にさそわれて、一度通輩かよふともがらは、ながくさんやに氣を引れ、車のしじに通わる、四書や五經や文選も、易なき事と打捨て、古文をやめて眞寶に好色の道に入、庭鳥初てなく頃より、湯あらへ口すゝぎか

みけづり、びんをなでほうをなで、父母の前をばいつわりの、その數々をつくしつゝ、屋敷の内を忍び出、くまかへ笠にて顔かくし、小六にあらぬ竹のつゑ、白むくきむく淺黄むく、黒縮緬くろしゆもんにもみの裏、はつばの大小七所、あみだやすりのてつじんは、寺小性とや人言わん、扱御供の太鼓衆は、おで入のとり賣なばばやりのやふくすし、浮氣の風をつよく引、ひやうきんの熱理に落て、いけんの脉もきれければ、やくたいたなしの藥箱、蜘蛛のいとにからげさせ、我金銀のつきぬれば、人のおひげの塵とりて、扱今日の御首尾は、てんとひやくらい日本へ、ほくしうの千年も、命おわれは夢ぞかし、一日の樂は萬日の榮花ぞと、千里もかけるとらやが船、松ち山を吹おろす、浮氣の風にとんてきの、ほうあげたれば程もなく、土手の入江に著にけり、船より上り詠なぐさむば、互に忍ぶしのぶ笠、面計おもてはかりはつゝめども、姿は人目にあまるらん、子ねにふしとらの朝がへり、土手のほそ道右は田のあぜ、あぶないがてんじや、あぶのふてならぬとうたいつゝけて、行も歸るも是や此の、互につくるゑもんざか、知るも知らぬも大門口、是ぞ誠に好色の、とくに入の門なり、諸人欠落

をする身代をつぶすべきもの、みな此邊にてそんするによれりと口ずさみつゝ、すぐに上やへ著のれんのかゝげうちに入る、女房立出ひさしふりにての御出、先日の御首尾はいかにといふ、過し頃の首尾はさんざんであつた、内のひいらきにつゝかれて、めいわくをしようした、これのひげはまめるとて、すぐに座敷になをる、てい主立出色々にもてなし、すぐに大小をもぎとらるゝ、あほうばらいのすいそうとは、後にぞ思ひしられたり、それよりも女郎の方へ、つかいを立つるやゝあつて彼まれものやりてかぶろに、そへの御ともにて、ごらいかう有ければ、彼客人九品淨性に生れたる心ちして、悦の眉をひらく、此女郎のおん姿、日々新にして亦珍しき心ちぞすれど、つみもむくいもかんどうも、忘れはてゝ面白や、其時太夫盃をとりあげ、たぶぐと引うけ、すこしすふてぎつぷとあけ、ひさしふりにてござんすと、大人の方へさす、貴人高人より、下さるゝ盃よりもありがたく、謹ついで而ちやうだいし、引うけさし請はじまのむほどに、くだをまき繪の大盃、いけぬくせつも初れば、上やがかゝは罷出、いかやうに入くんたくせつの埒も、私が腰のかぎにて

あげますと、出來口上の高笑、そばより大鼓にはやされて、女郎も、三味線の糸も、たへなる聲をあげ、どうした事の縁じややら、忘るゝひまもないわいと、はやり小歌をうたひつゝ、其時客のみこゝろは、がもうよりもかろく、とんでひやうきんとぞなられる、法師は衣を屏風に懸、武士は袴をぬぎすてゝ、まのあたり成るぶれいかう、すいきやうのあまりには、やりてぎうを召出し、さす盃には肴をはさみ、治る手には花をにぎらせ、千秋樂には遊女をやしなひ、萬歳らくには鼻げをのばす、老風の二丁立、さつさの聲を樂、やつさの聲ぞたのしむ

### 脇 高東風さます化夢の春

されば三世の人心、死に交ればあかく成顔、はちわうじの炭やきは、黒くなる誠なるかな、色にそみてはあほうと成る、樂師もともに舟ゆすり、ぐせいの二町立、いかな新狂言きぎよの、たわぶれおもしろいとは神の出來口と、佛も薩たも同音に、歡喜涌やくの頭あたまをたゝき、南無阿字くゝとのゝしりて、一蓮宅生のさんじき、ゑんざよりすべりこけ落て、悦ぶ折節、俄に修羅の方より、大鼓せめつゝみ、時の鐘をつく、北のさ



んじき打たあみ、あれはあれはと言うちに、三階にかけたる、棧舗の見物のうへたをれかゝる、新王ぢぞう姥様も、ともにあわてふためきて、はしごよりころび

おちながら、やどや／＼へかへり給ふ、三夕も一樂も漸々に外へはふくして出ると思へば、夢はさめて、寢屋の薙、座禪ふすまの下に、もくねんと一樂は夢さめて、たゞぼうせんと聞つる、役者の聲は、坪の内なる袖摺の松の音、舞臺さんじきと見へしは、持佛堂の繪像木像ふしぎなり、はかりがたしや、能々ものをあんするに、是皆浮世は夢なりと、さとりぬ、さるによつて、冥途にて逢なれたる、人の戒名俗名過去帳にかきあつめて、高野山へ登り候也と語ければ、夜はほのぼの明渡る、鴉鳴て月は入る、殘こんの雪庭の枯木も白妙也、何事も妙なり／＼とて、立出ぬ、我も鈴の森まで送らんと申されければ、それがし團十郎と一所に成田不動を、常に信心致候へば、此度夢の中の世の中なれば、道中にてみまかり申べくもしれ申さず候間、目黒不動へ參詣致、それより山傳に品川へ出候得て、登り申べくとの心がけにて候と申され候間、其時てい主も春の名残りに、御同道いたしせめては、戻りに

高野屋舗成とも見物致申さん間、まづ／＼ふどうへ御ともせん、それ／＼とてやき飯など、わりごやう子わらべにたづさへさせ、もろともに出られける

### 第三

目黒道なすひの二葉詠らん

愛宕より目黒道行淨瑠璃也

頃しも春のそらなれば、霞の關を跡になし、愛宕の山の朝まだき、高き御願をふし拜、薨びしき屋形町、道知る人は脊くゞめとをる天徳寺、知るも知らぬももろともに、皆身のための神もふで、東からして西の久保、長閑にめぐる春の日に、なが／＼敷も出ほうだい、口にまかせてい／＼ぐら町、獨つぶやく言葉は、物がついたかいなりの宮、何れ願ひをかけの場、淨土の水の底清く、流れ絶せぬ新堀の、橋のうへより詠ば、人の心は丸山の、五重の塔は美つくせり、右手は麻布一本松、めてはあらたの門前に、民のかまとは賑わひて、誰松もとの町とかや、遠くも來ぬるか四國町、はじめて三田の春日山、ならの都の八重ざくら、さかさかの江戸ざくら、うれしき御代のひじりさか、萬代かけてかめづかの、かしらに授て女意寶珠光を運ぶ寺の場、春めきながらさいかいじ、つねのともしび明らけき、月のみさきをながむれば、のぼりくだりの

ほかけぶね、海士の仕業のつり小船、波にたゝよふその風情、どうともかうともいさら子の、魚籃ぎょらんの南むや観世音、りしやうあまたのそのかずを、ゆびをれむすび員なぞをれ葉はひとふた三つや四つ五つ六まる殿の御長屋、前は海水漫々と、萬里波濤に打つゝき、音高輪の眺望は、天竺れんだん三國一、二本榎のふしんのみ、彼術法師の御ゑひ堂、諸事世話ながら疑ひの、心の濁り猿町や、名を聞もいや地獄谷、おりて田のもの縄しろの、水にあされる鷺の森、雷屯の宮あれとかや、氷川の鎮守これもまた、本地は小六ついた竹の、杖を便りに日吉坂、のぼりくゝて白金の、うてなに座せんずいしやう寺、けんせう成佛ちきしゐん今はむかしのおとふりて、此世をはよふゑんり穢土、ごんぐ増上寺の下屋しき、むぢやうのけぶり横をれて、よそのあわれに袖ぬれて、南無めうゑんじ八軸の、法花めうしや福知まん、岩屋のせんじゆ観世音、子やす八まんなにし逢、子をおもふかやきじのみや、元三だいの道しるべ、心のうちにねんじつゝ、よきときしもにあふさきむら、ながみねといへど、みじかき六間茶屋、しづかしわざの世わたりの、阿部川流の五文どり、御家のご

きとう、それごきとう、行人ざかの常ねんぶつ、かねの聲そへて橋本の、茶屋のよび聲たへまなく、田もに残る雁の文字、ついて愚閑おがしく狂歌仙

九品佛の道社みちうじあなれ思ひ入る

身の奥一字不明も鹿そなく成る

紅葉の茶屋、蜀のろせいのだのしみの、夢をさませしあわもちや、木毎に花の呉服もち、いづれねがい色ふかき、きみにいつかはおふとりの、みやいはことにかけまくも、りしやうあらたといふだすき、けんどん茶屋のもてなしに、さけのさかなか蛸薬師、かけし繪馬はとりぐゝに、鴉や小がらや四十から、つくね人きやう六尺の、水打花やかけねなし、佛商賣あらとうと、頭北面西ねはん像、安養院の念珠のつぶ、くりから不動瀧前の、川口ちかき下部奴のみやげの飴、治る御代はあら金の、土の車のわれらまで、あゆまでめぐる百番の、観世音のふし拜み、幽に笛の聞ゆるは、彼ほろゝの風呂といふ、尺八ふくとの縁ならめと、口すゝぎして一休やすみ、腰かけ松にそ著にけり

追善曾我四卷終



# 寶永忠信物語卷五

## 發句 山笑ふ大黒てんや吳服餅

唐土の虎は皮を残す、和國の熊は胃を残す、團十郎は三升の紋を、繪馬に残して名をとゞむ、御前を立てうしる當、諸佛菩薩は後の世の、まよひを願ふ道心者、かくやつとめの印の堂、爰ぞうき世の品ものを、見もらさじとは色のよく、深くふかいぞ三面の、大黒天の女坂、おりて向ふの山のうち、さみのしゝらの糸による、ものならなくに小びくにの、小歌さいもんしやれ聲色、聲おかしくて拍子とり、うたいかむたいか尻つゝみ、松の枝には孔雀鳳凰、四季折々のそめ小袖、やみはあやなし、梅の立木の朧染、霞たな引をら色に、きゝすなく蝶足引の、山は淺黄に東風吹て、花色散るや春過て、夏來にけらし白むくや、卯の花垣根ほとゝぎす、しげり此まの夕立に、秋こそかよへ水色に、月のかけかも石飴や、桔梗かるかやわれもかう、錦かど見るもみうらに、冬は時雨のぼろくこぼり、はん女が寢屋の戸、あふぎながしに水ぐるま、あみの

手菊水八丈嶋、羽織ましりの當座幕、うちより匂ふ伽羅の香に、あらそい立や酒の間、さいたおさいたざざんざと、濱松山の夕景は、心言葉もおよばれずと、詠やればいつとなふ、首の骨かいだるさに、連誹の浮世法師が發句、おもひやられたりと、つれの清兵衛に打むかい、もだへのちくど計の樂を、ひらき給へと言ければ、あたり成茶屋に寄て、酒なんどのみながら、一樂やたて取出し、茶屋の柱に一首

立別れ登る雲井はへだつとも

月の目黒にまたもかへらむ

その言葉のかわかざるうちにつれの清兵衛も

あきらけき月の都のまた爰に

めぐりくゝて歸れまつ山

脇 田がへす男鍬で案内

かくて一樂は高野山への心ざしなれば、山また山を直道に、品川さして出こそ、一步よりして千里まで、行かんものかわ世の中の、竹の林はなけれども、とらやが前を打過て、旅の出立のきつきやうや、のむ盃の猩々舞、つばやの庭の裏ざしき、入來る客はにぎあひて、伊勢屋日向の物語、よさく丹波屋馬追の、咄に知



るや徳藏寺、内神佛の觀世音、いま此里にぢげんして、所のためのあんらく寺、花有は則入て、小ぞうに花の名を聞ば、あみだの御手の糸ざくら、名木成と答ければ、その時一樂

花の雪見よからかさの糸櫻

またつれの清兵衛も

歸るさのもすそをつなく糸櫻

とつぶやきながら、きせるくわへて行道の、案内しらねばそこはかと、野七里山里、田がへす男の袖引て、爰をば何と言なると、とへば男は聲高に、べい〜言葉のつかふごとに、我知り顔の言やうは、爰はそなたにあふさきむら、あれに見へしは大佛、下高輪や二本板、こずへをつとふ猿町や、こなたに見へしはうつわに口の、元三大師、うへのはこらは雉の宮、やうすは茶屋におたづにやれど、霞ごもに見へざりける、教にまかせ兩人は、茶屋がさしきに揚つゝ、男はくちをやき豆腐、酒など吞てそれよりも、きじの宮居の由來聞ければ、茶屋の隠居と打見へて、米の守を出す頃、過し親仁か珠數操、縁起とても是あらず、われらわきあけ後ひばの頃ならん、其節の風聞位も高く威もつ

よく、天下をしろしめすほどの、その御方の鷹狩に、御こぶしにかけられしに、きッす此のみやに遯込ば、御鷹はそれて飛さりぬ、里もの人々は狩出さんと立よれば、そのきじ狩出べからず、定てきじの宮ならんと、御言葉もはてざるに、また鷹は御こぶしにたちかへる、それよりも此里のわらべのよびし名を、今に言傳て雉子のみやと申なりと、言ければ、清兵衛貫さしのくちをとかんと手をつくれれば、一樂清兵衛に打むかい、やみなん〜とくべからず、此ほうより拂べしと申されければ、清兵衛うそばかりと言てさしきを立ば、一樂みけん眞實に四十四文豆腐さけのわけ立てぬ

第三 舞遊ぶ蝶屋の座敷一樂に

一樂清兵衛兩人茶屋を立出て、雉子の宮へ詣て信心にかしわでなご打て拜み奉りて、神前の出、諸方見はらしちいさけれども、景よき山かなと一つ二つ言うちに、いちらくさいせん少し紙に包て

此度はぬさもとりあへずたちながら

もみ手のさいせん紙のまに〜

と言ながら、品川の出口の山のそば、細道をつとふて

行に、清兵衛も精出してあゆむ、清兵衛我が袖と言ければ、いちらく追付はきき帯にて、ごてん山のこし、めぐり／＼のぼり／＼て、つい品川くちへいづれば、はれ／＼として面白や、爰にも茶屋多く、のふれん家名の印有言ば、いちらくれの口拍子、まかせて、春は先咲花屋の庭、木陰に蝶屋遊らん、知る人有て一樂が袖をひかゆれば、さすがうわきにあらざれど、心よわくも立よりて、座敷へ通り座を組ば、三五よりしもまだあかひ、盃臺に小盃二千里響く手を打ば、子どもの手毎に持出る、肴なに／＼ゑびごしに、なりしとしまのざせん豆、さどれば玉子の輪切形、己が衣の角のくわら、かまぼこ本來朽木とて、喰てつけさし何盃も、のむおんしゆかい、やぶれかみ子の袂より、朝倉山升取出し、人目忍びてつみけるが、むせてぎく／＼言ながら、目を白黒として見まわして、つれの清兵衛がはげあたまにかぶりつく、あね女郎も新造も、是はいかにと立さわぐ、それよりてう水を目にかけて、ゑんがわにはしり出、ひしやくにて水を含み、ぬからぬ顔のあし拍子、御家の御きどうそれ御きどう、夕べも貳朱判はりこんで、それではだか

のだいまいり、いかいたわけの三年忌と、どうけ交の大さわぎ、かしこを見れば角かづら、つくり髭などかけて有り、さいわい也とはづし取り、家來の門助呼出し、一樂女郎へ御ちそうに、此道具にて市川が五郎の眞似をさ皆一同に所望あれば、ちたいはすきなり御意はよし、それよりかづら引かぶり、おめすおくせず罷出「その時朝比奈ずんご立、相の障子をさつと明け、扱こそ貧乏あふれの荒五郎、さかおもたかの太やうい、五尺八寸候へける、我ま、づくりの大刀を團十風にこねまわし、たべぬ料理の高楊枝、そらうそ吹て立たりしは、持あつかふたる客來なり、其時朝比奈ぎよつとして、心よわくてかのふまじ、なんでもきやつめはちやくはい者、そゝりこがしにもてなしで、小歌ぶしにてやつてくりよ、なんぼかくいても五郎殿は知る、心こみじこでごつこいそつこい、長刀、面はあかふ聲高なり、ごこの田舎の御若衆ぞ、ひらに一座を頼むにと、じやきやうになして引出す、時宗につかりともせず、や、たあ／＼びやくゑに候、御免あれ、いかさまきやつめはなにしおふ、大力どうけたまわる、ついでに力をためさんと、する／＼とはしり



寄、くさづり三枚かいつかむで、ゑいやつと引ども、ちつともさらにはたらかず、箱根別當はとりちき、あけし手本は百六つ、小うたい合て十六番、されども師匠の恩にきず、すつへりかやしてなんにもない、あとに残るものごては、力こぶに千人力三枚のくさつりの、はや緒かきれて水のむか、ゑんの板をふみぬいて、三里の灸を摺むくか、二つに一つはじやうのものど、びつくともせず立にける、其時朝比奈身姿をかく、胸にはへたる力毛は、ごばんの面に銅の摺針、ならべたごとなり、扱又五郎はいちつはり、きうちうの藤かづら、松をからんで小からしに、もまれてたつがごごくなり、朝比奈ごらの威をふれば、五郎は獅子のいかりをなし、互にゑいやと引力に、三枚の草摺切、そうへばつごごのきにけりと、勝手をさして逃入けり、是を座しきの興にして、うたいさわけば鳥なく前の鐘のおと、分能頃わけよきころと角文字戴く男出て、ふすま障子を立てまわす、それから後はゑ申まい、早白雲しめいぐもに成ければ鴉の聲もさらはかと、旅の寒さをしのげとて、手づからわかす名残酒、子ごもてこいてうしやの、さす盃の數そへて、くめごもつきぬ和泉屋の、夏

はすゞしきあふぎやの、そてつのかせの夕まぐれ、君が手にふる團扇やに、おてきごんど、車屋の、秋は菊つた桔梗屋の、つゆの玉屋をふみわけて、くりのいかやをひろうらん、冬は大和屋雪ふりて、みな白妙に笹屋來て、たれを待やら井づ、やの、うへに桐屋の花さきて、千代萬屋の龜の齡に重點ちうてんを、いくつもかけてかわらじなかわるまいとの、たかいちんく、ちかいの御手打違ひの御手枕、いや木枕は木毎にて、鶯女郎の雪の肌も春くれば、下紐とけて、流のうき身の床はなれかな、目をすりくの朝まだき、旅人あまた喰ひちらせるを、洗みかくやたくあんでう、あさのふきんでせんふく寺、橋のはごりの其みやを、とへばうき世の人心、ゆかみ文字のふたつもじ、神の心はすくなもじ、いたゞきまします午頭天王、或詩に二月中旬、瓜すゝむご是あれば、時節違ふはうぬがまゝ、まくわ瓜はなれれど、さわらばひやしそうめんや、切強飯きりかじめに大和にも、とうがらし味噌のでんがくや、豆腐串餅やきだんご、うなぎのかばやき、こんにや、くわねばならぬとは、ばかな吸物、煮賣あへものいもがしら、何に菊田の賣藥、萬よしなの御ざるとて、知るも知らぬ



もおしなめて、よれのはいれの念頃に、親子のごとくまねく袖、いやといわれずたわむるゝ、よそにも色は有明の、日月のはんせいくもりなく、御影をうつせ水月の、觀世音は是かごよ、むかひはるかに詠れは、あわやかづさや、いづのうら、かすみにつゝく入舟は、ゑんほのきはん爰なれと、ひつじのあゆみひまのこま、いざむかしのすゞの森、八幡宮につきにけり、いちらく心靜にふし拜み、つれの清兵衛に申されしは、是よりもかへられよ、さらばくご有ければ、清兵衛申やう、せめていつかわ大もりまで送申べしと、鳥ゐを打つれ出ければ、一樂茶屋に腰掛けて、茶碗に一盃かうの池、暇乞じやとのみてさす、清兵衛酒をひかへつゝ、申迄はなれども、うそにあらず本宿泊りしたもふべし、道をば急せ給ふなよ、いそげばまわるものごいふ、川々にては錢をおします、錢をたいきにはなれやの、神のやしろやはこらあらばぶ禮ふいふさだをなさず、節角無事に豆にても、でかさぬ様に霄又ふいふさだ、足にあぶらをぬり給へ、やがて下向をまつの葉のくはせにて候と、でんがく餅を調て、いちらくにもすゝめつつ、古しへ今の物がたり、つきぬ涙をおさへつゝ、別

れになればいち樂管笠を引かぶり、ひら包をせおふて、あゆみ行、清兵衛しばし見送りて、なくく宿所へ歸りつゝ、只何事も夢のうちの樂なりと、されば經にも、女露亦女電ととかつれたり、夢の内に怪しくも、此物語を筆にまかす、市川夢の浮はしも、夢の間の言葉なり、狂言きぎよの道すぐに、三佛てうのいんならめと、ふりくらしたる春雨に、反古の裏にそこはかとなく、書あつめたるもしほくさ、

おわらひぐさ  
御可笑草の種とも成なん力を思ひかくは

そめまゐらせ候めてたくかしく

寶永二乙酉歲正月吉辰

江戸芝神明前

山田屋三四郎版行

晋子が塗顔の雉子こよまれしは、家祖才牛の遠行を  
いたむる元祿の昔語也、のち正徳六申のとし遠芳忌  
なれば、ある人追善曾我といふ五部の書を著作せら  
れ、世に梓行成も、其書一三四部は愚が手に入て珍藏  
せしかども、残る冊はいづ方にあると響も影も所を  
得ず、尋もごむるうち、石塚豊芥君の文庫に表題は替  
れど、同じ道のしるべして寶永忠信物語と名づけ、小  
祥をいためし書一二五之部ひめ在この事、二蝶君の  
由縁にをしてねがひて是を合せ見るに、誠や百三四  
十年前のありさま眼のあたりおもひ出て、且は嬉し  
く又悲しみに數行の泪袂をしぼりぬ、今泥中の玉を  
得しこゝちなれば、少しも傍をはなるゝ事くるしき  
を、石塚君の御恵みに板本のかたはゆづり遣すゆへ、  
氷の下なる魚を寫し取て其書をもごせこの有難き仰  
をうけ、影はかげ象ちのかたちと分、こゝに譯書を  
するは牡丹の末葉七代目白猿

かけ法師は祖のかけにあり盆の月

天保九戊戌魂祭る秋

此忠信物語の寫本を四冊、石塚氏へ海老藏が贈りし  
は、則跋に記せし如く、天保九戊戌年なり、今を去る  
事四十八年、其頃己は五代目なる鶴屋南北の門に入  
り、作名を勝諺藏といひ、河原崎座へ見習ひに出し折  
柄、海老藏の頼みによりて寫せしが、計らず四十八年  
目にて今見る事の耻しく、顔さへ赤く染るにつけ、思  
へば平家の世盛といふ狂言の有りし年にして、夫よ  
り廿餘年の間古本盛んに行はれ、豊芥文庫の珍書と  
成しも、浮世は夢の浮線蝶没後書籍を乞ふ者が彼鏝  
引同様に引張合ふて求められしも、都落の瓦解此方他  
へ讓られて年久しく、八島の船の此處彼所此書暫く  
漂ひしが、源氏に因みの白紙の間丸柄崎君の藏書と  
なり、己が寫せし故よしを記しくれよとお頼みゆゑ、  
筆は探れどもせはしき街は年の市川に組入升や海老  
を售る、聲勇ましき十七日、觀世音の御縁日に、以前  
に替らぬ惡筆兵衛が、五條坂の名にかへて、三疊の間  
の机に向ひ、傘に時雨の音ならで、ぼつ／＼書に記す  
になむ

時明治十八年十二月年の市の日

河竹默阿彌

梅幸集

大宮人は何といふらむ、此んめの噂、それ優伶のこのかみどは、花實のさかんなるに、顯はれ侍るともいかなる歟、此週年明ぬれば、叔氣其霄の價だに一刻にちらずとは、憎い哉梅香、惜いかな梅幸、外山の霞さたらずもあらなんに、軒端にたくる霄飾も、物悲しげならずや、八文字自笑、その生涯の伎功を擧筆しあるに、夫に端書せよとぞ乞はるに、比することもおそれみ申ながら、名たゝる信者、又一情の追福ともならむかしとて、

飛梅の跡もやかくそこつもあり

天明よつたつのうるう初春

浪華二斗庵下物述



江府  
策薪水画

四季分句

物

梅嶺之使方城 古音新傳  
冠戎者其心乃一白牡丹  
月更一粧一五者十三根  
此枝乃乃乃乃乃乃乃乃



梅幸集

追悼

解脫院信士とあらたまる事を

浪華

寒梅の飛行かたそ安樂寺

巾 絲

涙しく梅にも雲のたへま哉

泉 明

木枯の吹すはちらし冬の梅

心 午

逢坂の關や年越え梅に雨

ふらん

梅か香や西へ送れる四極東風

銀 獅

○

涙にて氷りしかさね扇かな

雷 子

何となく胸にこたふや寒替

其 答

悔言は盡せず盡し三冬哉

里 虹

誠に三十餘年の師弟の名残もおしつ

まりて憂卯のとしの廿九日は

跡どふや西へ師走の一つ鉦

芙 雀

はかなさよ經帷子の衣かはり

幸 朝

きのふにかはるけふを翌日よりは何

をたよりともとて同じ事をくりかへ

しゝつゝも

この年を聞悲しさや手向水

小梅幸

梅幸を悼に數句を申出すもくたゝ

しけれと渠か名譽一句に盡すへから

す就中秀たることの三つを擧て是を

手向とす

寒けに凝たる雲のたえま哉

西宮

青 魚

大石か忠も名のみの寒かな

同

かたみには葵下坂とし暮ぬ

同

追悼

梅に來て經よみ鳥の手向かな

花洛

吞 獅

なきからを終の煙や夕かすみ

德 埜

○

おとかけや名のみのこんの雪佛

心 頭

古夜半翁はになく梅幸を愛せられし

か物故の後日あらすして又菊五郎も

なくなれり

呼かけよ道筋同じ年の暮

晋 明

○

おしや只名のみ残して雪の梅

慶 子

年浪の流をひたす手向かな

眠獅

文のたよりに言贈られけるを

東都

一枝の梅や手向のおしまつき

文魚

梅か香や見しを記念の後影

心牛

あくる名も西の舞臺や二の替

秀民

なきと聞紙鳶の行衛や西の空

萬輅

西へとて梅の浪花や身の行衛

阿能

來る顔見せは必同座せんと約せしも

三升

まつ甲斐もなき正月のたより哉

三子

線香の匂ひも梅の手向かな

訥子

程隔たる別のいとほいなし

十町

残る名の梅みるたひやおもひ猶

三笑

年玉の残る扇もかたみ哉

三朝

師の恩の余寒身に染寺參

薪水

積る高恩を振捨て東都に歸往て

追加

雪の山去年の別や目に殘

さ

とし足らぬ者の外艱にこれるあはれ

香園

こと業に親にはなれてなく聲は

はるともいはすものうしの介

ことしはいかなる年にや有けん、去年の四極廿五日は、年比したしみ交ける蕪村には別れ、悲しみの泪に暮行年も忘がたく、とやかくとあら玉の春をむかへし折から、四日の初たよりに梅幸身まかりぬと告こしぬ、只かりそめのいたはりこのみ聞へしに、永き別とはなりぬ、

梅ちりし浪花たよりや夢の春

と口ずさみて、心ならずも夢人の伏見よりして、舟にうち乗到るに、過し年太宰府の聖廟へ詣てたりし時は、舟を諸ともにせし事なご思ひ出られ、いと老の腸もたゆる心地し、猶妻子を見るだに胸ふくれ、きのふは野邊に送りしなごかたり出て、更に袂をしぼりぬ、

終に行年のねがひか西の空

と彼が日頃の存念を手向、追悼の吟を人々より言贈られけるを、其儘に反古となしなんもほゐなしと、自笑にあたへて梅が香を櫻木にうつし、世に廣ふせば、せめて亡跡の追福にもなりなんか、且生涯のよしあし等とは、八文舎が筆に書あらはせば、予はた何をか云ん、四十年來因深、我洛に遊は彼も洛に棲んで相か

たらひ、しらぬ火の筑紫の旅さへ再び舟を同じう  
し、今一たびは又もやもふでんと、日比約せしも甲斐  
なく、あな卯の年も暮行名残とはなりぬ、

天明四甲辰正月

花洛  
不夜庵五雲識

附 録

○尾上菊五郎一代狂言記

抑尾上といへる苗字の紀原を尋るに、京都宮川町に  
丹波屋空右衛門といへる人あり、其子美麗なる生れ  
付にして尾上多賀之丞といひて、貞享の比若衆形に  
名高く、しかも三絃の達者どころ聞つたへたり、則其  
比評判記の畫を摺して爰に顯はす、





右多賀之丞弟子に、尾上右近といふありて、其弟子左門といへるも、生れつきあてやかなりとぞ聞へたり、今の尾上菊五郎俳名梅幸は、此左門の弟子にして、すなはち宮川町音羽屋半平といひしひこの子なり、

○享保十五庚戌年酉霜月 顔見世京櫛山四郎太郎座へ、色子の部に入て出しが始にて、翌十六亥年都万太夫座へ、江戸より佐野川万菊、中村新五郎に、中村富十郎俳名慶子連られ歸り來りし時、梅幸も若衆形にて同座也、夏の頃、娘捨山を立入し狂言に、古澤村長十郎、二挺鼓にて女房に万菊雀眼の檢使役に新五郎にて、若殿に慶子二人の子兄は水木辰之助、弟は梅幸にて、慶子の身代りに、切腹せんと肌を押脱たる時、格別に膚の色の白かりしと沙汰せしと、古老の物語りも残れり、夫より三四年過、同廿一辰年、嵐小六座へ出て、始て若女形の部に加はり、翌元文二巳年、水木竹之助座にて上上の位と成り、顔見世傾城小大部の役、殊の外はしかき仕内といひ出、同三年年は芳澤玉妻座にて上上と成り、一の替り心中狂言染松七三郎 甚評よく、其暮相手にて姉川座へ出、同六年、さの川市松座にて顔見せ花子の役、間の狂言に十二段に、常盤御前と冷泉との二役

とも受よく、

○同七酉年は、大坂中村富十郎座の顔見世に、始ての下りに万菊菊之丞との一座、作り氣違ひにて、烏帽子長絹にての所作が、市野川彦四郎 笠谷又九郎より沙汰よくして、其秋久松の役富十郎 おそめ大きにでかし、翌寛保二戌年は、佐渡島長五郎座にて、江戸より市川海老藏俳名栢進登り來り、同座にて鳴神の雲の當摩はなかんづくの大評判にて、其暮海老藏江戸へ歸る時、ともに付添行しが、江戸への初下りなり、

○寛保三亥年戌霜月 顔見世江戸吹屋町市村座へすみ、顔見世振袖信田妻に、白拍子なにはづと葛の葉の役ともに噂よく、上上青の位にすゝみて、此年瀬川古路考、女鳴神をして吉例といひて、若衆形にての當摩の役、にめつたに評よく成りて、其暮同座居なりの顔見世、石居太平記においての役、いよく沙汰よく、瀬川菊次郎俳名仙魚下り、同座して上上黒吉と成り、仙魚と釣合して評したり、同四年の春、七種ソカヤキ蛸會我に、あこやと吉三郎役菊次郎 お七實は時宗也との狂言受よきより、其頃はやゝもすれば、若衆形を専らとして、其方にてはあたらぬといふ事なきによりて、芝居よりも又自分

もすゝみて勤めし様に聞へて、女形狂言にては、評う  
すく成りし事あまた度也、され共其頃市川古栢、東  
武歸郷に同道なす程の事なれば、同座ならねども専  
ら引立つよく、これによりて古訥子は勿論、松本幸四  
郎後の海老藏始  
海丸後五粒古大谷廣治本町なご一しは世話をし  
て、樂屋までも取沙汰よき故、既に坂東彦三郎俳名  
薪水の  
聲とはなれり、かくて延享二丑年の春、初曆會我  
に、刀屋半七二代めあや  
め豊清ののこや、其暮顔見せ女楠粧鑑に勾當の  
内侍二代めあや  
め豊清の相手ながら、此狂言にて少し評よろし  
からすといへど、同三寅の春狂言に、聞往昔會我物語  
に、大磯の虎と若衆形にて助六を勤めし所、大に評を  
取戻し、

○翌同四卯年は、始て河原崎森田座へすみ寅霜月  
顔見世大鳥

毛五十四郡にお照役、春狂言は妻和唐會我に、時宗と  
小むつの二役ともでかし、當座は只一年にて、

○翌同五辰年は、始て堺町中村座にすみ卯霜月  
顔見世女軍

勢に、女八はたの役、春は鑑會我にて時宗 同五月千  
本櫻に助の局の役、沙汰よく是又一ヶ年にて、

○翌寛延二巳年は、市村座に歸り新參、同五月假名手  
本忠臣蔵に早野勘平とおかるの二役とも甚評判よ

く古薪水由  
長之助是より寶曆六子年まで八ヶ年是より寶曆六子年まで八ヶ年同三年の春、衛會我  
に小性吉三郎役よく、同四未の春、隅田川に斑女と雲  
のたへまの役ますく出かし、翌寶曆二申年より、太  
夫元市村羽左衛門のすゝめにより、元服して未霜月  
顔見世梅  
櫻仁蟬丸に、梅王丸と千壽次郎の役も、大ていとはい  
へど、或はぬるいともいひ、又は女形で居ての若衆形  
を勤て當りを取りし程にもないともいひ、又訥子の  
俤有て、薪水に和らかみを入たを見る様にて器用也  
とも、色々の沙汰ありて、先は役替の事なればとて、  
當顔見世より上上とこなれり天明卯年迄  
三十二年翌同三酉の  
春、以呂波會我に二の宮判官の役大てい受よく、三番  
目熊谷小次郎にて首繼の仕内訥子  
相手見よしとて、栗嶋狂  
言にて彌陀次郎是以て大がいの仕ぶりともいはれ  
て、六月よりひらがな盛衰記に、ちゝぶの重忠と龜井  
六郎二役、此時松右衛門に五  
粒權四郎に訥子是はあまり出來ぬとも聞之  
しが、此秋替りに松本五粒いふ様、梅幸には當させや  
うこそ有べしとて、工夫をして自ら巖流と成りて、梅  
幸始は信田左衛門とて上方にては馬  
淵角左衛門役にて巖流に殺さ  
れ、後に二役月元武者之助役、薪水の形を専らとさし  
て大に當りをこらし、誠に元服の榮を顯はしたり、



昔より女形の立役と成て、成課せたる者すくなく、早川初瀬も權三郎となりながら、程なく又若女形に立戻る、玉澤林彌、藤村半太夫、元祖芳澤あやめ、近くは山下古金作なども、一度は又四郎と成りて、間もなく皆元の役に立戻りし也、梅幸は誠に天満宮信仰の沙汰高き奇特にや、成課せる例と見えたりと悦ばせ、されども此月元武者之介、人品相應して薪水の俸を第一として、所々訥子の和らかみを加へ、甚見よくはあれど、願はくは今少し申ぶんありとは、巖流にあってこすられ、無禮を聞流し切かけたる刀を、扇にて打落し、きめ付る武功の仕内、成程見へはよけれど、物にたどへて見れば、兎角長短の評入べき也、引つまんでいは、今一兩年立役の執行足ての上にて致されなば、坂東の仕内共午角とやいはん、惜い哉此一段に成りて、遙に見劣る所ありしと、其頃の評記にも、序に又申事とてあれど、少し言葉遣ひあしく、せりふのしまりすくなく、聞えかねるご頭取やら、所々のふしふしも、全くひいき強きによりてや、次第に狂言せりふごもに快くかたまり、其一兩年は、只梅と空ばかりいふても、町々を悦ばす色取男と成り、其暮の顔見

世は、和黒主に頼風役殊の外でかし、同五寅の春、愛護會我に、始て工藤祐經役をしてより、はたゞと評判よく成り、其冬顔見世吉例會我に、會我太郎、同六子の春、狂言二葉會我に、再び工藤の役いよ、沙汰よくなり、大當りを取り、此冬顔見世は、中村座へ再勤して、將門に俵藤太役、至て大人にて、翌七丑の春、鶏音會我に工藤と佐野の次郎左衛門役もよく、其暮同座歸陣屋敷に頼朝、佐々木三郎と盛久の二役、いづれも皆できるごはいへど、入頼朝の仕様大に見所ありて、上上黒吉と成り、次の替り入船會我に、八幡三郎本名京の次郎にて、平野や徳兵衛の世話事も大出来にてありしが、いかゞしてや、其七月より出勤なく、其冬顔見世又○市村座への出勤、鉢の木狂言に、秋田城之助本名さの、源左衛門役までは、ますく沙汰よかりしが、翌同九卯の春、梅土の役にて身うち眞赤にぬり、角かづら黒禪にて見物の方へ、尻を突付し見へは、大十町の形とは見へたれど、梅幸には似合ぬ事をするご、諸見物の受あしく、尤其節三役にて、白き顔にての角かづらで、櫻丸の仕内はかはらね共、梅王の見にくきには替がたしとて、上上と評



記になしたり、其次の春狂言篠田十郎にて、吃の又平  
ご成り、梶原に手疵を負せ逃來り、急難をすくひ下さ  
れど工藤が乗物見掛けて頼み、祐經が乗物にかくま  
はれ、大勢追手來て、彼乗物を取卷あやしみし所、乗  
物の中は工藤壹人也と、早替りにて頭を出せし所な  
ご、殊の外見よきご悦び、次にまた又平にて打擲に合  
ひ、後女房が三味線にて、臺頭を舞しなど、よいく  
この沙汰もあれども、顔見世の赤尻に、黒禪の評判戻  
り兼て、少しは噂も薄やぎたり、其比しも、舅古薪水  
も過行しを見送り、忘記念を養育して、古名を繼せ、  
万事營の事も奇特にせしご聞へたり、其冬阿國歌舞  
妓に細川勝元、翌十辰の春末廣源氏に入幡三郎、當六  
月に團三郎よきごもいひ、又大ていごも、町々の沙  
汰もさま／＼なりし、此冬顔見世伊達大木戸にかつ  
た次郎、同十一巳の春、根元曾我に鬼王、此暮顔見世  
故郷錦に手塚の太郎、同十二年の春、河津の亡魂ご鬼  
王の二役、次に佐々木の盛綱にて、鹽焼兄弟に對面  
の場二人祐經の思ひ入と、至て評よく成りて元の上  
上黒吉ご成り、此冬やはり同座にて、小町の狂言によ  
し峯宗貞よく、同十三未の春、榮曾我の工藤は大て

いごもいへど、八幡三郎にてお七吉三の取持にて見  
物によだれを流させて悦ばせ、すべて近年色々の役  
廻りもあるごはいへど、只一統古薪水の形こそ、此人  
にあへば、是ぞ見たきくこの取さたの所、當暮は珍  
らしくも、十七年ぶり立役ご成ては始て○森田座に  
すみて、顔見世伊豆入船に、曾我の太郎と梶原平三  
役、大きにでかしめつたに取沙汰つよく成り、七つ前  
より切落しをせり合ての見物、彼梶原にてふし木の  
傳大場との問答に弓矢に狩衣かけかたげての出端、  
ノック其女性に申べき事のありといふを珍らしき  
出端ごてうれしがらせ、ごかくに入を取事奇妙  
を得たる仕合男ごて、専ら受よく、芝居の福の神也ご  
もてはやさせ、同十四申の春、粧曾我に京の小次郎ご  
まんこうご十郎祐成と工藤祐經の四役、工藤はもご  
よりの事、十郎と祐經との役を、一人にて勤るもの  
は、當時にはこれなしなごて、女中の見物迄も悦ば  
せ、當八月市柳硯に、道風の役も評よく、此壹年にて  
當暮又々○市村座へ歸り、新參顔見世須磨の初雪に、  
おがたの三郎と熊谷次郎の役ますくよく明和二酉  
の春三組曾我に、小栗十郎と工藤祐經、并にひたちの

小萩にて、女形三役に大當りを取りて、末張りに入つよく、此年も續て評よく、當冬顔見世同座にて二代源氏に仲光と三條宗近、同三戌の春狂言相生會我に會我的老母と鬼王と矢の根鍛冶畑右衛門三役、是又揃ふて受よく、老母にて工藤屋敷へとりこ成りしを、鬼王にて其よしを聞、犬坊丸が供の鍵持がもちたる鍵を奪ひ取、髭を作り、生酔の程にて入込み、賈朝比奈と成りて、兄弟を屋敷へ引入れ、對面さす仕内、仕にくひ所をよくするさて、至て評判高く、兎角に入を取が音羽屋の徳にて、此秋久し振にて、京都へ登る相談あるさて、江戸一統に残念がりしが、程なく談合極り、暇乞狂言は假名手本忠臣藏にて大星由良之助と本藏、女房となせこの二役、何が彼殘多がるのと、狂言の仕内と、近年めきくと沙汰よく成り、する程の事を、よいといはるゝと合體しての、大入のすさましさは、たとへるに物もなき程の事、元來此由良の助狂言は△去ル寛延二巳年、江戸森田座へ山本京四郎（俳名）下り來て、此狂言大に當りしが始也、其已前古澤村宗十郎（後助高屋高）大岸右内にて此仕内ありて、京にても此人此狂言を出せし也、其仕内をよく覺

へ、大坂操芝居竹本座にて、人形に名を取し古吉田文三郎（俳名）此忠臣藏をつゝらせ、彼助高屋の姿をよく寫し遣ひしとは、芝居好見功者のよく覺へ褒美せし事也、其頃江戸中村座に、彼訥子住居たり、大坂より可中森田座へ來りて、此假名手本にての大當りを取シ事也、根元の訥子に、此狂言をさせなば當りを取ルは極めし事なれば、張合て同じ狂言を出すべしと、ひいき連中のすゝめにより、一座一決して出せし也、其時に至り、市村座に古薪水珍らしからんさて、此座も相談極りて、江戸一統此假名手本にて三役とも勤めし、もとより薪水由良之助役は、少し堅きとはいへども、堅き所に摸様を工夫付て、此由良之助狂言は、坂東彦三郎に團を上たり、（此時梅幸はあさる勘平二役）されども訥子の和らかみに理屈あり、薪水の堅き中に風情をこめ、可中の酔中の仕内に差別もありて、此三つを合體して、梅幸彌工夫をこらし、今十七八年の後に、あしきとよきを身に合せ、勿論人品に據を得、狂言の榮合もよく、もとより已前の持前の女形に、屋鋪風俗のりしき取合もよく、今此時に至りては、此梅幸が狂言とも成りし程の事にて、九月節句より十月廿日前迄は、



十日も前に場の吟味もせずしては、見物のならぬぞ  
て、見ぬを耻ぞいひいはれして、首尾よく大入續き  
にて、連中の見立もますく賑ひしは、きつい大手  
柄く、

○明れば明和四亥年、京山下合座本の座へすみ、女形  
にて大坂へ下りしは廿七年ぶり也戊霜月大坂より中  
山文七由男上り、珍敷出合の同座にて、大に賑ひて曙  
入船東海といふ外題にて、田原武者之助にて、初の小  
幕の場に著付紫地に繡、上下白地にて八ッ藤の繡も  
やう、先出た所に大に落をさり、賈勅使を見出し、し  
め殺して衣類を脱せ取りしを、家来が見付し所、挑灯  
を叩き落しての幕、マア上方にて近世なき人品にて荒  
肝を取りて、次の場は公家の姿、もごより賈勅使に  
て田原の屋敷へ入込み、思はずも古主に出合ひ、恨ら  
れて機嫌を取り、公家の儘にて、主人の肩をもみ、き  
せるを通しなごして、其場を補ひ、主人の懐の子を取  
りてすかしなごして、時代世話辛抱一時にして見せ  
らるゝ和らかみ、久しぶりにて訥子の係を思ひ出  
させ、切りに玉取の謠に合しての花やかみ、誠に久し  
く東武に放さるるも無理ならずと、京中一統に悦び

し故、位大上上吉と改め、二のかはりけいせい大内  
櫻にて、山名が家来竹垣勇助と成り、先年大坂にて  
の今織大貫島の狂言に、古中村十藏子吼の役△其時  
の姉川新四郎の役は、中山文七にて右衛門云當二の  
かはりは、由男へ狂言を譲りての仕内、誠に立物ら  
しくして、俱に面白きを顯はした、嵯峨大井川にて船  
中饗應の場、佐五右衛門兄弟の難義をすくひての引  
張り甚見よく、後手燭を持出て、曲者見付し體へ手裏  
劔を取上、親甚五平が殺され居るに驚きの幕、花や  
かにてするごく、後勘助島狂言の客招待の場も受よ  
く、奥にて勇助が急難をすくふは、山名左京大夫に  
て乗物の内にての早替り、二役も前に江戸にて出せ  
し工藤の仕内なれば、もごより次第に沙汰よく、此次  
物ぐさの不破の伴左衛門の實悪は、珍らしくはあれ  
ど仕内は大ていともいひ、ぬるいともいへど、此暮  
は尾上久米助座にすみて顔見世、名古屋山三の狂言  
にて、歌舞妓狂言の和らかみをしかと見せて、大に出  
かし當りを取、翌同五三の替りに、忠臣藏を出して、  
彼暇乞の時の二役の儘にて、大に當りを取、訥子より  
は姿見よきとて、京にても同じ取沙汰、此年千本櫻



に、梶原平三と狐忠信役廻りの新らしきに入を取、此暮中村歌右衛門、江戸下り暇乞に巖流の役にて、梅幸は月元役、誠に大出来といふものは此事とて、町も川東も、幕明より肝を潰せし事成しが、時分あしくして入りかひなきを、一統に残念がりし事也、其幕中村松代座にすみ、翌同六丑二の替り、けいせい金花山に、今川男之助にて、長袴著て櫛笄さしてのせんなく狂言、切は油賣正九郎にて、古納子の油はかりの仕内、何はともあれ花やかにて、花實をこめたる役者也とて、立ちゐざる子迄も、菊五郎くこの取沙汰のみ、

此秋江戸へ歸るこの噂も程なく極まりしとて、暇乞として秋田城之助にて二挺鼓、彼むかしの澤村古長十郎の役にて、古老の人迄も杖に肩にすがりて見に行て、残多がらせし事也、慶子相手にてむかしを思ひ出て、大夫のとりなりに俱にうかるゝ兩人の仕打、又此出合で此狂言、誠に見る事は再び叶はぬ事とての、大當りも尤ぞかし、首尾よく京都三とせの勤の、菅相丞は勿論、松王丸が憎みの味はひ、菊水卷の宇治の常悦、一の谷の六彌太、北條の時頼役、雪の段奇麗にて見へよく、薄雪にては園部の兵衛など、兎

角思ひ入レ過た所も有ルとはいへど、始終が人品と奇麗と、彼花と實の所を専らにして受よく、又世話事にては、桂川の心中に長右衛門役、出入の湊にて五郎八が兄八木孫三郎などは、とり分て見心よく大に出かし、薄雪の丑藏の五平次なども、輕うさつくくして、海老藏の形ありと江戸しりの人の評ありて、先此三年凡當り通しに入を取、誠に芝居の福の神といひしも無理ならず、されども其内、月元武者之助こそ、就中見榮ありしと、跡迄もいひなせり、

○明和七寅年、江戸市村座に三年ぶりの歸り新參<sup>年霜</sup>顔見せ、外題も則梅の顔見せに、泉三郎の役に、衣裳先裏付の長上下に大小、江戸にて此取形の所謂なしと咎ぬる人もあれど、上方より歸りし時なれば、其儘の姿も尤ぞかしといふもあり、されどもかはらぬ花やかみに、ひいきも馴染もかはらぬ思ひ、春狂言もかはらず、京の次郎と常陸之助もかはらぬ、工藤の姿の花々しさ、當六月一の谷にて、熊谷も大てい當、暮伊豆著錦に、祐信時政の二役も評よく、同八卯春和田酒宴にかはらぬ祐經の役は、兎角見心よきといひ、殊更横山に調伏せられ、いざりと成りて車にて

出、次に朝比奈と三男の三郎が取持にて、曾我兄弟小栗主従に對面の場、上段に吉田少將と範頼、十人の女形を高欄の上にならべし、其筋付の花々しさは、近

勘平との三役、やつぱり沙汰よくて、前年にかはらず、大に入を取り、名残もいよく惜まれつゝも旅立

年に覺へぬ仕立、始終のきらびやかに我を折し、舞臺付の端手ささ仕内に評を取り、此冬顔見せ世嗣鉢の木に佐野の源左衛門と、青砥左衛門二役ともに受よく、同九辰正月二日より、菅原傳授にて菅相丞の役は、善惡の評まろくにて、當二月瀬川菊之丞出勤に付、衣更著曾我に又も祐經、大に出來ましたが、二月晦日より芝居類焼に付、此年休みにて、其暮市村座顔見せ、綱坂狂言に渡邊綱と仲光受よく○翌安永二巳春三月、名所曾我に祐經、勿論祐成の和事大に沙汰よく重忠の三役に、切にかさねにての所作事も評よくありしが、此前年辰の暮、大坂中村歌右衛門座へ登らるゝとて、看板も出たれどもいかゞ間違ひしや、市村座の居なりと聞て、大坂も力を落せし計り、されども顔見世外題に、尾上菊五郎不登漸と出して、間違ふたるゆへ趣向となる程の聞への勢ひ也しが、漸此巳の暮大坂登りの相談かたまりしとて、先例に任して暇乞狂言に、又も忠臣藏にかはらぬ二役に早野

○安永三年大坂へは三十二年ぶり、十月廿六日の乗込の勢ひ花々しく、川船のかざりも艀おびたしく、牽頭持并に所の若手くも川舟にて出迎ひ、迎ひ出る船は前以て云ひ合せ、船幕の染立艦には吹抜幟なごかざり立て、はやし物して賑はひしに、船陸とも人群集いふもさら也、此後大坂乗込の迎ひ船は、凡此幕幟なども用ひて、是を賑ひの例の始ともなりし程の事ぞかし、兎角此仕合男ともいひ立、やぐら太鼓の勢ひも高々どひきて、三番も鳴やならず、待兼山の人群て大木戸のエイトツく、顔見世狂言は京へ來たりし時にかはらぬ田原武者之助、始の小幕の間拍子には大に手ごたへし、次に公家姿にての世話事の混雜も和らかにて、はつきり事のあざやかに分かりし仕内と、人物のよいに大に受よく、纏上上吉に成り、次の狂言表方も、町方も、待兼しすゝめの忠臣藏を、間イの物として、由良之助となせの二役、江戸京をならして洗ひすゝぎも足りし、此藝幾度でも



飽のない狂言に、人品仕内にいひ分なければ、末の敵討迄も拔目なくて、何度も見に行が、又大坂質氣にて、二のかはりは今川男之助にて、彼櫛笄の見事さ、切に油はかりは訥程にはないとはいへど、又も歌右衛門相手にての巖流にて、月元武者之助に棧敷も場も一統肝にこたへさせしは、いかさま此事ぞかし、次に九月より菅相丞と松王の二役、松王は少し泣過しともいへど、菅公の年比といひ、位高き所申分なく、是を暇乞として當地残多くも、只一年にての上京も、十月廿八日迄入通しは、きつい手柄者この取さたにて、

○安永四未年、京都藤川山吾座午霜顔見世は、津守常陸之助、やつぱり和らかみを專にして、しつかりとし、武道に和事仕の衣裳のあるは、此人ならでとて悦ぶ事もかはらず、爰を以て花實對したる役者也と京中の悦び、殊更當年此座は、尾上新七尾上松助俱に登り來りし、同座各弟子にて、補助心も有りしや、間の物久米寺彈正使者之場から、鳴神上人もよく、二の替りはけいせい鐘鳴渡に、築地多門之頭と成り、夢殿にこもりし場、姿を見せず障子の内より聲計にて

幕を切りしなど、新らしき物好にて、下手のこんならぬ所とて嬉しがらせ、次に尼子一ぞく難儀の場へ、乗物にて來り出し、人品立髪に上下姿は、先指のさし人もない事と、手を打てとぞらせたれども、二役七艸四郎にてのむほん人は、ちと持前に合ぬとも、大役ながらはつきりめかぬ評判も有りて、次の替り双蝶々に、南與兵衛と長吉が姉おせきは又沙汰よく、此度はつくし詣とやらにて出勤なく、宮嶋を助られたとも噂し、歸りて又も巖流出て月元の役、其次の替りに、菅原傳授仕内は、前にかはらねども、同じ出物にて珍らしからぬ故敷、何とやら評も少し薄やぎたり、都て芝居方は、さかく先年出て沙汰のよかりし物は、馴染たる狂言のあたりめマア見へてよきとてくごうにすゝむるもの、頼まれて異義なきも又立者のならひにて、據なくも珍らしからぬ役續きにて、此人の科にもあらねども、此頃は只取沙汰のみ、此冬顔見せ同座にて佐野源左衛門にて、紙子仕立に手籠提て出し所、さりとては見へよく、此一段隨分受よく、同五申春狂言に増浦兜軍記に景清の役、殊の外よく、三段目あこや役尾上松助梅幸は重忠の役にての琴責などは、手に入



し物にて大に出かしたれども、二の替り新狂言は、けいせい柳鷄鳴に、かけや茂三郎と成りて、珍らしくも辛抱事にて、嵐七五郎相手にての泥仕あい、若手の仕内を年ばいにての苦勞程に見物も見心よからず、何とやら氣のどくともいひしが、二役の細川勝元は、持前のはんなり、捌もゆつたりとして見よく、殊更此度は牛之助始めての出勤にて、からくり人形に仕立の少計り所作事有りて、末に至り舞臺にて、大字に一行物を書し見事さ、大に受よくて嬉しげにも見へたり、次に戀女房に、定之進役三重の井との二役とも大ていともいひ、色々の沙汰ありし内、此冬大坂下りの相談に、暇乞は又も娵捨山、二挺鼓、先年も此藝を以てさて、是もそこくの噂のみ、前後只狂言に苦勞多くて、夫程の常りめも見へざれども、只花やかみは失せず、

○安永六酉年、大坂小川吉太郎座にすみ申霜顔見世は東儀要之助にて、取巻し相手の首を切、引きげ出し上下姿、先はかはらぬ嬉しからせやう、木蔭に鐵炮にてねらふ者有ルを知りて、百姓六作が持居る藁苞ごつて筒先をよける仕内、兎角花やか也、此出端去々

年、京にて津守常陸之助と同しく、後小川吉太郎相手にて六作に肩もませ居るうち、後ろに立し妹の戀をさとりし和らかみは、三人ともにさりとは申分もなく出かし、春狂言は新薄雪物語りに來國行の役、小川と二人清水の出合にて涙を流させ、園部兵衛と正宗との三役、殊更正宗湯加減を教へ、得々と覺へたる歟といひて、風呂へ水打込などの思ひ入は至極く、夏替り鍋祀に、田上三左衛門にて茶の湯の傳授の前、殊之外の出かしにて、ぐつと取沙汰よく、切に弟十内にて、鬨所を守る處、さつくくいさぎよくてよく、次に千本櫻の梶原至ていさぎよく、江戸仕立とて悦ばせ、四段目義經の役難助大に受よく、此冬同座にて顔見世は、恩地左近の役忠信はさしたる事なし、同七段の春、日本花赤城鹽竈に、大星由良之助役は、兎角身に應じ、狂言かはりても由良之介といへば、斯うこそ有ル男ぶりならぬと思はるゝ思ひ難助にて注進の役、我子の性急なる場を示し、矢を折て見よと投出せし二人の仕内は大に感じさせたり、仁木多門頭と與茂作が妹にて、振袖娘にて小川との拔參りの道行、ひねくろしき娘にて、振袖姿はわる口の評も有しが、只

何さなく奇妙がらせたり、次に山門五三桐にて、眞柴久吉役は甚よく、二段目木村常陸之介にて、久次に諫言の仕内手づよく、後唐人姿にてのむはん顯はれし仕様は、同じむはん人といへど姿かはりて甚取沙汰もよく難助五右衛門にて、此狂言大に當りを取りし也、次に勘介嶋狂言、涉し守三十郎の辛抱、狂言世話事甚見よくて我を折らせし也、和田合戦にあさりの與市難助大に評判よく、此幕又も江戸へ歸るごて、久米寺彈正と鳴神上人、切に不動明王の三役も大ていにての旅立、

○安永八亥年市村座へ歸り新參戌霜顔見世梅愷樂に安達左衛門とあさりの與市の二役、仕内はかはらず悦ばせられども、いかなるや當顔見世不入にて、春狂言わかやぎ曾我に、工藤祐經は誠に不易の仕内、二役十郎祐成の役も、此度は夫程にもないこの事ながら、當八月に薄雪出て、園部兵衛と刀鍛冶正宗二役、是も評うすく、此幕同座顔見世、榮楠に正成と備後三郎役、同九子春狂言曙曾我に、まんこうと工藤の二役、四十二の年恰好もよく早がはりの所など、別て下り後の仕内とも申たが、五月より女伊達浪花帽子とい

ふ外題にて、黒船狂言に八木孫三郎役、隨分沙汰もよかりしが、いかゞしてや舞臺にて障り出來て舞臺を引、自分の申分もさわやかなる噂も取くにて、五月廿五日より芝居も休みこはなれり、依之其秋京都への思立ありて、九月九日より改て中村座におゐて暇乞として、是も吉例の假名手本に由良の介となせの二役、皆人名殘をおしみ、先年にましてかはらぬ繁昌の大人にて、十月十七日迄首尾克勤メ、

○安永十丑年、京都山下八百藏座へすみ子霜顔見世も五年ぶり、其噂菊旗擧といふ外題にて、楠正成にて雪ふりの傘さし上下の出端、若黨文助奴國平兩人召連し姿、さうじは見飽ぬこの取沙汰、後文助が紙子ふさんの吟味の間甚おかしく、次に女房を文助に近付にせんと呼出せし所、文助が已前の夫とさとりし所など、格別の仕内と、五年已前登りしよりは先は取沙汰もなく、此勢ひによつて眞黒極上上吉と進み、二の替り都濱荻に細川勝元ながら、左官と成りて雷子との出合、いよく受よく、三の替りは赤城鹽竈にての由良之助は、やつぱり我をおらせ、娘お光は大坂の評と俱に色々と申計り、次に和田合戦のあさりの與



市、非人の高市武右衛門は少し思ひ入の違ひし所も、存の外なる事ともいへど、秋替り鍋祀に、田上半左衛門役は、大坂にかはらず出かし、ひらかな盛衰記二段目にて、延壽の役源太書子、千鳥少し年寄其答、平次眠獅させ過たともいへど、四人が四人とも揃ふての出来に見て置きとて、大坂よりわざと登る人の多き程の事、三段目重忠は、万才烏帽子、小素袍にての股立に、武者草鞋は源太の歸りし所も凡同じ姿、少し仕内にも心得違の有やうにも申たが、何は格別打揃ふての大入△當暮も在京にて天明二寅年は、中山猪入座にて顔見世、富貴礎に尼子左衛門と成り、同じ様なる俤の出端、仕内も兎角見飽ぬこの沙汰、其上珍ら敷當年は慶子同座にて、春狂言は妹春山の太判司役、何は格別出立つた所に大立者同士の出合、當暮大坂へ下ると有りて、暇乞かたく、鬼一の三段目、鬼一の役花畑へ出る姿から切迄申分もなく、二役四段目の口、大藏役は思ひ入違ひもありしが、息子丑之助相手にての鞠猿、おこなげなひといへど奇麗にて、猶切に成てすつぱりとした仕様にて年功を顯はし、

○天明三卯年、大坂嵐他人座にすみ寅霜顔見世は伊藤祐清にて、雪の傘さして、若黨奴連出しは、去々年京都にての楠正成と同じく、猶雷子嵐三右衛門など同道にての同じ役、當地にて、もかはらず、此上下姿を皆悦ぶ事にて、春二の替り、又雷子相手に、細川勝元にて左官に日雇の狂言、當地にては少し俤堅過るともいひいかや、此狂言不繁昌にて不入故、間もなく替りて假名手本、由良之助はいつとても申迄もなき事、此度は珍らしく天河屋儀平役、甚手強くせられての其中の和らかみに、場校敷とも一統聲を上て悦ぶ事日々、次に競伊勢物語にて、いかるが藤太役は赤づらにての立髪、江戸作りの若々にも年功つもりし仕内顯はれ、三段目紀の有常は例のさはやかにて、時代世話の取交にも嬉しがらせ、非人敵討治郎右衛門役、前後色々といへど、何かはしらず人を取り、次に布引瀧にて、木曾の義賢役、始は甚見よく後は少し道具過て思ひ入も鬱しけれど、續ひて鬼一の三四は京にての二役受よく、次に小いな狂言に、いななのや半十郎は大てい、次の替り秋葉權現に玉島逸當と、同幸兵衛兄弟の二役先年古三升大五郎役是も始はよく、後



の幸兵衛役は少し合ぬやうともいへど、日本駄右衛門に人油ごらるゝ所の辛抱は手ごたへさし、當暮も居なりの相談にて、息子丑之助を若女形になし度とて、摺物なご出されて、顔見世は、蘭菊女夫狐の序に膏藥賣と成り、誠ははくごう仙人にて、加茂の家を守護するのみにて、さしたる仕内もなく、めでたく顔見世の日數も濟み、間もなく間の物とてひらかな出て、京のごとく延壽と重忠の二役のさた、増々よく源太に雷子平次に滝尾爲千鳥其答、十郎俳名奥山打揃ひし顔の大當り也、元來此人の僻として、道具にもたるゝ事多し、又一つには首筋にてしやくりあげて、愁情つよくて、時代事も世話事のやうに見へ、只泣キ過ると見物の思ふ事多し、或人心易せりと遠慮もなく、此人に問ふに近年はたばたと舞臺こまくなりて、何となく大手に見へぬやう也、工夫ばし有りての事にや、算ふれば更なれども、其一二條を申さん、定之進乗物に逆様に乗つて、幕際と成一ツ二ツしやくりをして終る仕内、或は薄雪の園部の兵衛に、幸崎より送りし刀の切尖の血と、我腹を切て其血を合し見る事、又云京にてありしひらがなの重忠に、我家來が樋口捕たと廻るを、抜

打にして紙を出して其刀を拭はせ、素袍の袖を切て駒若に敷かせ、敬ふけしきある事、是等は見物にしらすにもあらずして、狂言の趣意とは却て背ける様にも見へんやといへば、有難しとて落涙の俤こそありて、左も有る事も御座あるべし、後の海老藏俳名五粒我を引立くれて、其方は兎角舞臺に永く居ぬやうにせよ、永くせば沙汰あしかるべし、其かはりには、舞臺に居る内は随分心を利して、狂言をせよと示し呉られたるゆへ、思はずも用ひ過す事の有ならんごぞ、いひし事實も記念とはなれりと、爰に記し斯筆し侍るかたはらに、又一人有りて、追福ならば其人のよき事計りをこそ舉てこそといへど、譏るも譽るも其人の實情を賞美ありての事、さればこそ都て京都に有りし間、樂屋入の行義といひ、棧敷の客を見舞ふ事はいふに及ばず、惣稽古足揃へなごにも下袴を著し、人の場の仕内を見るにも、謹で寒暑に姿を崩さずなす故、其出入にも心を付る人こそ多し、平生諸事を學ひ、鞠は無地の格濃乍ら、誰レ友と云事もなく、夫婦連にて垣有ル方を尋ね求めて、休みなる日は蹴て遊び、誹諧も少しづゝ學び、將基は手直りを定め、

茶は石州流と見へて折々は釜もかゝりし、亂舞は勿論、折しも聞へる事多く、誠に物に嗜みて、しほらしき生れ付也、手跡は拙くも有りしと思ひしや、息子丑之助へ幼稚の時より教へ込しとぞいひなせり、立者といふものは、斯こそ有たきものともいふ人ありてや、其ひゞきにいていひこそはあらずとも、自然と上方役者の行義もよく成りし事也、右せいすい記狂言、舊冬より出て今を半なるひらがなの重忠は、本文のこく陣羽織にて、何の事なくせられしは年増といへども、心のすなをなる所の顯はるゝ事正やと、今更いひし人も耻て涙を流しぬ、惜い哉帥走の廿日過、時季に障られて病臥、十日とも立たで醫療盡ていかんともする事を得ず、つゐに此小つもごりなる日、黄泉の旅立も余りこいへば、思よらずもして、息子丑之助の爲に、せめては今三四年もあらばとも斯も、残るも心の程と思ひやり、且は當時ならび人もなき三津にての大立者に、名残を惜む計り、行年六十七才にして法名すなはち解脱院清譽淨薫信士とぞ、往事江戸を勤めし事年數、中村座に三年、森田座に二年、市村座に已上廿五年の勤、合て三十年、始め

古薪水智と成、後大十町始の大谷治事娘に縁を組、依之此二人の縁を以て、東武に有、間は日蓮宗旨にて、淺艸大專寺に妻と俱に逆修の石碑を建置たり、此戒名還癡院永持日實とぞ聞へし、右にいへる京地を古郷として、親音羽屋半平の宗旨なれば、京大坂に在す間は淨土宗也、是にて生れ付の直なる事も猶思ひやりつゝ、誠に三佛乗の因縁ともいはんもの歟、

## 附 錄 終

如是我聞、不夜庵五雲叟と梅幸とは、鳥が啼あづま路より交り厚く、筑紫の果までも杖を同じうし、或は句欄のいこまには、不夜の扉を月の爲に訪うひ、雪の朝にはいざさらばとて、簑笠に姿をかくし、あるじの病耳を打おごろかしなごして、むかしくの名家大家の古言などを討論し、深く狂言の眞如海の底を探り、優戯の奥儀を極め侍ぬ、去りし卯のとしは、浪花の戯をつとめしも、日頃信し奉る大慈大悲をいのりし應護にや、千手のひいきも多かりしが、聊か風の心地とて、病に臥して終に年のたそがれに、音羽やの瀧の音もたへくしき、尾上の鐘の聲を菊五郎といふ、名ばかりをのこしぬ、嗚呼痛哉優道の響はとんど絶ぬといふべし、ことし不夜の翁、渠か冥福のためにとて、小冊子を編て予をして梓にのぼさしめぬ、予やそのよしあしの名とげて、身退きしむかし、今のことをおもひ出し幸か、生涯狂言のあらましを、願以此功德に、八文舎自笑これを書記侍りぬ、

梅 幸 集 終



中山文七一代狂言紀

予とし頃、三都に來往して劇場を好む事久し、或日浪花に遊びて、一冊子の寫本を得たり、是を庫中に秘め置て、希魚の餌となさむことのはいなさに、いさゝか彫刻の費を補ひ、櫻木に鏤め、世の好士に與ん事を希ふ、もとより書林の家にありて、世に鬻ぐものにはあらずといふことを、初めにことはり聞ゆものならし、

尾陽不二本氏某施印

序

梁塵子嘗稱中山氏之戲術曰、寔惟中原之人龍乎哉、咨厥辭之偉哉、予於茲有<sub>レ</sub>感焉、夫龍也者、生物之神而不可<sub>レ</sub>測者也、厥見也、或雲、或雨、或雷、厥潛也、爲<sub>レ</sub>虛而無<sub>レ</sub>迹、倏忽乎、以變、影響之不<sub>レ</sub>當、鑿其神者也矣哉、今且有<sub>レ</sub>言於此、大藩所<sub>レ</sub>鬱<sub>二</sub>生<sub>一</sub>人龍、蓋夫謂<sub>二</sub>中原<sub>一</sub>而已、中山氏之於<sub>二</sub>戲術<sub>一</sub>也、起<sub>レ</sub>雲、則吟聲頻焉、降<sub>レ</sub>雨、則風色動焉、鼓<sub>レ</sub>雷、則電光霹焉、有<sub>レ</sub>時乎飛、有<sub>レ</sub>時乎揚、變化之自在、亦得而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>測、則果梁塵子所謂人龍者非耶、其友某彙<sub>二</sub>修其術數<sub>一</sub>、而弘<sub>二</sub>於中原<sub>一</sub>、厥業亦不<sub>レ</sub>偉哉、予於茲有<sub>レ</sub>感<sub>下</sub>龍吟起雲之言<sub>上</sub>、喜龍乎、龍乎、含<sub>レ</sub>龍獲<sub>レ</sub>龍、寧見龍乎、潛龍乎、飛龍乎、臥龍乎、予稱<sub>下</sub>以<sub>レ</sub>龍喻<sub>二</sub>龍之非<sub>レ</sub>龍<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>若<sub>下</sub>以<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>龍喻<sub>二</sub>龍之非<sub>レ</sub>龍也<sub>一</sub>、而彼瞻<sub>下</sub>望於人龍之潛見<sub>上</sub>云爾

武昌

無點居士題

壬寅  
多勢を納めず

雪主齋画



花  
ささるも

仕  
ねむ

み  
ち

新  
ね山



由男



## 中山文七一代狂言紀

頭取扱今日各様を御招き申ましたは、御なじみの中山文七殿、此度一世一代のなごり狂言を出されました所、古今まれなる大あたり、何様妓道の冥加になふたる人と存るに付て、此人幼少よりの狂言をかぞへ、よしあしの品定をいたし、時代違の御方様までも、一同に御嘶のたねに成りまするやうにと、去御かた様の催ふし故、廻狀を出しました處、大勢様御寄り被下、頭取催主共大慶に存升る、各様にも御存のほごは仰られ、御助勢下さらば忝う存升る、芝居すき先頭取開口なされい、御たのみなうてもだまつては居ますまい、文七ひいき頭取早うはじめておくれ、頭取しからは左様仕ませう、エヘンく、凡物に始ある人は多けれども、其終りを能する人は少し、然に此文七殿と申は、故中山新九郎一蝶の子にて、誠は松屋來助といふ狂言作者の子をやしなひ、スイカクフウ役者大全にも、新九郎先妻の甥をと有た、樂やしりいで、いや左様では御ざらぬ、新九郎の妹を泉川千之助方へ嫁

らせました、千之助と松島兵太郎二人は、上手とよばれし女形にて、作者の來助と兄弟なる故、此縁から文七丈をもらはれましたのじや、頭取てもくはしう御存、即おさな名は與三郎と號け、元文二年巳のとし、大坂子やくにて、妹脊の舞扇といふ外題にて、三かつにいづみ川千之助、茜屋半七に嵐新平で、此人はおつうのやく、懷にだかれて出られしが初舞臺、延享元子のとしより色子の部、同四卯のとしは、市川龍藏座にて若女形、上上の位が評書にのせし初かと存升、ガクヤシリ夫はたしか由男丈十六七才の時じやとおもふわい、頭取寛延元辰のとしは、京あらし座へ登、角前髪にて中山文七と改め、眞田與市のやく、妹とやつし櫻山四郎三郎とつれ立出られしが、大に評判よく、同二巳のとしは男作、牛の尾の文七やく大出來、同三年午のとしは休み、同四年未のとし、都座のつとめ、元服して親新九郎と二人、與勘平やつしにて沙汰よく、間のかはり玉藻の前に、非人大六大出來にて、するたのもしき若ものとはめられ、戀女房の一平が弟六藏にて、孝行塲をでかし、申のとしは北がわ東の芝居にて、座本となり、大峯さくらに山上治



郎大出來、大ごもの王子は別してよろしく、好人達にほめられ、上上きんとなり、ガクヤシリ此人十八か九の時かで有た、せにかけ松の仲秋は、やくがらあはぬとて上上白吉にもどり、シバイスキ其時分は、評書もきつしりとしたもので有たじや、頭取同三年酉のかほみせ、和歌山と改め、大坂三條定助座へ下り、相合枕にはなれ駒長吉、この外の評判、又上上きんとなり、同四年かほみせ、伊達の二郎大に沙汰能く、二のかはり天の羽衣に今川仲秋と、あほう與五郎大あたりヒイキキ秋は五説經に、小ぐり判官とさなへ三郎大出來、同五亥のとしは、大坂の初座本かほみせ、うごろもちの與五郎、里の子故若殿と成て扇で鍬遣ふ仕内など、こまかに氣のつくといひ出し、三木之丞の大あたり、同子のとしは、元トの中山と成り、坂東座明神丸のどみ藏にて、松右衛門といふ仕内を出かし、するほどの事にひいきあつくなり、同七丑のとしは、大松百助取のつとめ、頭取長事御くろう千万、さらば御かはり申ませう、二のかわり天ちく徳兵衛に、將軍よしてると紺屋四郎九郎、ふちべ六郎の三やく大に出來、同八とらの年、姉川座にて草津小女郎に、火の玉の源五郎

大あたり、スキこれく丑のとし、みろくの五作にて、すへ物切もあたりましたぞや、頭取でも能う御存、出し下されたひめ小松のかめ王丸、東下りのりやうしやすがた大評判、同九卯のとしより、角の芝居の座本となり、かほみせは河太郎のおごけ大吉、相人にくち合、段々のせりふ大にはやらせ、二のかはりに三十石の大入、爪長屋權九郎にて、見物の腹をよぢらせ、スキ神道源八にて劔術の段にはて、こぶしをにぎらせ、大五郎文七と一對のあたりやくしやと嬉しがらせ、上上きんとなり、コトシリ兩人よりはみるものが、双方のよしあしをいふて、せり合ふたほどの事、今におもひ出しますぞ、江戸衆嶋原の泥仕合は、もどりの觀音を立入たで、つがもなく落が來たて、頭取三のかはりに、いせや日向の惣がたり、磯八のむすこやくおかしく、同十辰のとしも、座本二のかはりに、かねの岬の獅師なだ八にて、てつぼうのまく宜しく、慶子の兄と成り、しつこの意見をでかし、女鳴神筆坂城之助をでかし、九月より戀女房奴一平大出來、同十一巳のかほみせはあみだ如來にて笑はせ、一のかわり天狗酒もりに、キノ平とひろえ大出來にて、上上吉

となり同十二年のかほみせあたかの關の奴ほご内  
スキ一鳳とはじめての出合、關所の段はごうもいへぬ  
おもしろみ、頭取二の替りいろは行列、大わし文吾早  
の勘平も能く、ことさら鹽谷判官、見功者師直に切つ  
けるに、疊に爪づきころぶなどの仕内かんじ入た事  
で有た、頭取いかにも町中一同に、其沙汰で御ざり  
升た、次に磯馴松にかちや太郎七、めいごの飛脚には  
りまや喜兵衛大出來、未のとしもやつぱり座本かほ  
みせのくづの兵内、双てうくのぬれ髪は、故八藏と  
男くらべの花やかさ、八わたの段のしうたん大出來、  
大上上吉にすゝみ、スイガク夫はよしお丈三十一二の  
比じやが、其時に足をいためたど此度の口上書に  
も大ぜいそのやうな脇事をいはずと早う藝評頭取い  
や私も息休め、折々は御助け下されませ、忬此とし  
は大入大當がつゝき、和田がつせんのおさりの與市、  
菅原の松王、スキ其時中の芝居でも同じ狂言、松王に  
歌右衛門で有た、これは家の物極て能いであらう  
とおもひの外、實に成てのうれしい、文七方が大出來、  
コマカイズキ全躰松王といふものは、おもてにくてい  
をみせ、内には親をうやまふ心より、菅相丞に誠を

盡し、時平には主従の禮をなすもので、大ぜいいらぬ  
筋沙汰、おかれいゝ、頭取東西く、小ぐり判官に横  
山太郎、かしくのふく清、皆あやめごの出合にて、す  
るほどの事大あたり大入にて、明和元申のとし上  
上吉にすゝみ、かほみせ妻鹿孫三郎にて二王のやく  
いさましく、二のかはりは天の羽衣に北川宗左衛門  
のやく、すこしにうわにてはまりかぬるといひなが  
らも、太入大あたり、かさねの與右衛門大出來、夏か  
はりのたけ綱評能く、雷天源八花々しく、非人かた  
き打の春藤治郎右衛門、スキ御しかりなされな、又申  
さう、其時中の芝居にては三枿大五郎、姉川のいきう  
つしにて、治郎右衛門役よかりしかど、文七はこゝ  
ろに新四郎をふくみ、仕内は我ものにしてせし故、う  
つとしみなく、張合の狂言も十日計、文七の方長く  
つとめしは手柄で有た、フルイススキ奴のみち行八南と  
兩人見事な事で、高市武右衛門は獅々吼と角は可慶、  
場よりこれく、いらぬむかし、扣てゐやつしやれ、カ  
ノモノマハリ宇田右衛門に歌七と、大ぜいおけやいおけ  
やい、頭取東西く、西の年は、白極上上吉となり、桃  
太郎に小兒より中年老人、三段の仕分ケも能く、戀女



ぼうに一平のやく、大あたり、スキ上方にてならぶものなき大立物となり、此人を引かぬ人はあほうのやうにおもふほどの勢ひ、スイカクあきなひみせでも、きれもの、手代をみては、あれがあの店での文七じやと、世間一同にこのやうにひいき厚く、コトシリ其折ふし、何か芝居にさはりが出来て、翌戌のとしまで引こまれ、いかならんと案せしに、頭取四月十五日よりの出勤、なつ祭に團七のやく、久々引込みし身のうへを、團七出牢のすがたにて目みへの口上、大坂中の悦び、初下りのかほみせ、同前の大はづみ、あつさもいどはず大入にて、仕内もともに大出来、盆がはりの神原三左衛門も能く、九月より忠臣藏のゆらの助は、年配にはちと不相應、いかにあらんと思ひの外大出来なりし、スキ城わたしのまく切より、一力の場刀の鰐音文の見やうなど、都てゆらの助にこまかい仕内の初りしは、凡この人がはじめかと存る、江戸の人いかにも長十郎や京四郎、彦三郎が仕たまでは、一通りの事で御ざつた、既に其とし尾上菊五郎も京都のぼり、暇乞にはじめてのゆらの助をつとめたが、右三人の仕内の通り、其のち京にていだせしゆらの

助は、早仕内がつき、力彌がしらせ、城わたしなどのまくつがもなう、細かひ事をしましたて、頭取左様な事でも御ざり升ふ、扱文七丈ゆらの助、彌大あたりにて、京のぼりの暇乞も別に出さず、口上ばかりで済すほどの繁昌、明和五年いのはしは、京都山下座へ菊五郎と同座のつとめ、扇子紋のほうかぶり出ておどはの先生が登られたで、さしもの宇治屋もうぢくで有た、スキいやかほみせの櫻井新兵衛、仕内は随分よけれども、何が此六七年、大坂にてあたりつゞけの此人、ごのやうなもの早う見たひくごまちかねて、評判過たのど、菊五郎方は前の噂、夫はごになうて見た所花やかに、所の氣に叶ひたるに、内のり外のりの違ひが御ざるで、スイカクそりや大佛は大い物とおぼへて、初て見たときにおもふたはごにないと同じ事さ、大ぜいきつとく、扇組何でもきく五郎におされ、よしをもあしをで有た、キリノトウほうかぶりあほういやらな、其かはり小舟入の由兵衛にて、梅幸もへいかう、頭取つゞいて物ぐさ太郎、一の谷の熊谷ぶんぶく茶釜の裸身のうれひなど、さあ上手じやといひ出し、菊水の巻のまりかせ秋夜、かくべつのあたり、



秋がはりの黒船もよく、スキ此三四番の狂言、由男にのみ評判有て、外に役者はないやうに有た、スイカクミる度く、に、大佛の大うなると同じ事さ、ヒイキごうで御ざるの扇さん、頭取同五年は菊五郎退座にて、親新九郎上京し、信仰記に此下藤吉、奴より唐冠迄の出世姿も能く、ムダモノゑんま様くといふて、來るものが有たが、大ゼイ何の事じや、譯もないすつこんでいやれ、頭取二の替り桃山錦にて毛利元成大出來、小の、道風のかわづ場、二の切のうれいなご、仕内ほごにあたりめなく、盆かはり團七九郎兵衛、京中一同の評判大入にて、白極上上吉の處きつと見へたとなつとくさせ、こしごへ狀にて五斗兵衛、忠臣かう釋の十太郎、いづれもく大出來にて、功者いごま乞の惟茂、曲水の所作事など、いかにも是迄、大坂ではめた所があらはれ、珍重致した、スキあふみや治郎右衛門といふ所も、外に仕人はないぞや、頭取同六丑のとしは、大坂三枿他人座へ下り、金作相人にやつはり曲水うけよく、間のかはり双てうく、叶のほうかぶりいで、おつとひな助がぬれ髪に、おもひの外のうきあし、功者ひな助は女形よりめづらしき役廻り、殊に口上書

も文七をたて、の事で有たに、おとなしうないといふ氣ざりの、必竟芝居師のあやまり、よしをの難といふでもないてスキいかにも左様、所詮文七の仕内の能い事はしれた事、二のかはりさごの金山にあたけ仁平、をだ卷のまく切けしからぬおもしろさ、今に申出しておる事で御ざる、頭取忠臣かう釋の石屋五郎太は、表方よりの望にて、若かへりの役大出來、十太郎は元よりの事、夫よりほり江の淨るり、黒舟の作りかへ忠右衛門のやくもよく、戀女ぼうの一平大出來、同七年とらのとしは、子息與三郎に座本をさせ、横山太郎かちや太郎七あしや道満、一の谷の熊がへ、いづれも前かごよりは工夫有て、ひとしほの大出來、秋つしまは故八甫、故清兵衛とおごこ揃への大あたり、スキおにが嶽と秋つしまは、八十島とならびての立引の出合、此のちみる事も叶はぬ事、頭取同八年卯のとしはやすみ、コトシリいせの芝居へ行かれたれど、御かげまいりのさわぎ最中、ムダ太神宮におされて、文七八藏も御板ばこ脊負たわい、頭取何さ譯もない、同九年辰のとし、小川座眞上上吉に改り、スキ此譯はなにらやら評書にあれど申に不及、三拾石に爪長屋、已

前より又々おもしろく、けんぼうの束帶姿も、能く切の立は家のもの、二のかはりの味方が原に、嶋むら弾正大出来、ワッロ切のむほん人といふ、おそこではなひ、功者仕内に置ては申分なし、狂言すぐれず、全躰にくていな事させて、其氣にのらぬといふやうなもの、頭取夫より千本さくらに狐忠信、カクマシリ此みち行格別のおもしろみ有しと、相人の鯉長に承つた頭取九月より親新九郎一世一代に、伴左衛門を出して大入、此人は例の物ぐさ太郎と、切狂言奴蘭平けしからぬ出来やう、スイカクフウ今度の舞臺納にも、物ぐさ蘭平を出されたは、此吉例と聞へたわいの、頭取安永二巳のどしは、京よし澤座へ登り、コトシリ此かほみせのつみ物は、前後おぼへぬ仰山な事、繩手もいしかけも通りのならぬほどの事で有た、頭取かをみせは一鳳どうつば猿の狂言評判よく、二の替をた卷のまゝにて、目をおごろかし、三のかはりかぢや太郎七太當、スイカク其春は高だい寺のかいてう故、京登り多く、古今ないほごのはんじやうなりし、頭取次に國性爺に和藤内、かり金備に文七やく大出来、近江源氏の佐々木も能く、暇乞の蘭平大あたり、ガクヤシリ此時向

ふさんじきにかけ出しが出来、棧敷の直段の上りしは、京地にてまれなる事、全く此人の手がらと存る、頭取同三年午には、大坂小川座間のかはり、やはづの紋日にかぢはら源太、叶扇の二へ出ておつと此大臣姿は、キリノトウいふなく、其代りにひ口の治郎を見なんだか、スキ何様源太は同し座に小川といふやつし形をのけて、持まへにあはぬ事をしられしゆへ、功者又して見るも器量かい、扇グミ全躰はおとはやの忠臣藏に押れて、九州細見もついやすみ、スキくはんねう門兵衛は、少し譯の有ての事、此人にかゝはらぬ事、三のかはりむつの玉川に、うき世渡平と秋づか帶刀にてうちかへしたる大入、こしごへ狀に、キリノトウ後藤におされて、梅幸の三曲油はかりもついやすみ、頭取盆がはりかり金染に文七のやく大出来大入、久米の仙人、守彦やく、此人計は評判よく、同四年末のどしも同座のつとめ、かほみせのかつこほうくも能く、万歳の姿より楠正成となる仕内、かくべつの所有とかんじさせ、ガクヤシリ此せつ家をもとめ、故一蝶へ孝行の噂も高く、つゐに一蝶を老の入まひ能く終らせ、野おくりなごのけしからぬ事、スイカク太



左衛門はしが、二間程へこんだ計の仰山な送り人で有た、頭取夫よりもせ山の太判事は、はじめての白髪かつら、しうたんは家のものとて大當り、二やくふか七の丈夫さ、かさねの與右衛門大入大當り、在はらけいづにむら雨の女姿もめづらしう、蘭平はいつもの事とて嬉しがらせ、布引の實盛大出來、千兩幟の千羽川、角力おとこに應したる仕内大評判、忠臣かう釋の十太郎までかはりめごとによろしく、同五年も小川座間のかはりのぬれ髪、故八甫と久しぶりの出合も大入、筆水の巻にて刎川主膳評判能く、信長記の花子、松下やくの半白かつら、一蝶其まゝと受能く、秋かはりの水滸傳小平治大出來、また北川宗左衛門も出來、同六西のとしは、あらし七三郎座のつごめ、かほみせの大ごくに目をさませ、二のかはり

居といへばいがごへで御ざつた、ひと、せほりへのお染がはやり、諸國一同にお染をいたしたと同じ事、扇より夫はかめ助がつくりのよかつた故、叶おく山がよかつた、カハより舎柳が内記があたつた、ムダ新平が石森慶安もよかつたぞや、スキ東西く惣もち合とは申せども、第一座がしらの出來がにぶうては、久しうたもつ物ではないて、リヤウリ人なんぼ庖丁に手を盡しても、立もの、魚鳥がよからねば、ほつこりさせぬ物、ムダ本にいがめし、スイカク伊賀曲、ウレシガリ其春のいせ参りも、伊賀越がはやり、かたき打の有た上野の寺は、ごごごこやと、孫八が石塔までさがしたほごの事、ヤシキ衆政右衛門の鎧傳授、此方共もおごろき入た、功者妙なる事の手ごたへをさせたもの、むかしのあら木又右衛門も、まづかうあらんと本ンの事に思はれた、京の人いかにもすさまじい評判、故新七儀左衛門が此うつしを仕てさへ大入りで有た物、頭取續いて三の替、仙臺萩にしげ忠の之人姿、かたくら武道、鐵之助の荒事、三やく共大出來、スキ二の切廊下の下にて大立入、四段めがんつ埜を打殺す氣味よさ、又かつら川の長右衛門も評判能く、功者しかた講



尺の佐々木は先達て、故八甫のやくで有しを、又々手だれの小手き、格別な所が有たぞ、頭取其冬京都へのぼる暇乞に、田はらの又太郎にて、頼政の執心うつりての物狂の能仕立も能く、同七年戌には、京三枳座のつとめ、顔見世頼政間の替り、布引の實盛評よく、二のかはりはかたおりに小平治大出来、つゝいて伊賀ごへ大入、スキ此狂言などは崩るゝほどの事で、有うとおもふたが、儀左衛門新七が前のごし仕たと、同日の論ではなけれど、残念は出しが早うてうつごしいといふもの、藥やいで、本家根元の功能は有がたしい處がござる、ごくと味うて御らん下されい、見功者違ふたものといふもくだかい、頭取ひらがなの松右衛門は御家の事、いへぬし鹽太おかしく、盆狂言の土佐又平、此人計は評判能く、仙だい萩の三やく又々大入、スキ大切の對決場が出いでこのこりおゝい、頭取しかたかう尺の佐々木もやつぱり嬉しがらせ、同八いのごしかほみせ、國太郎ごこたつの立入おもしろく、此ごし元トの白極にもごり、遠國の人我ら芝居が大好きで御ざるが、少しふしんが御ざり升は、かやうにいつもあたりまする人を、久しう眞の字にしておいたり、

漸に白極にもごしおくなごゝは、スキ御尤の御さつご、いかに先年白極にすゝめた時分までは、評者ご世間の眼一同せし處が有たが、近比は此人にかざらず、十目の看る所ご、功者成はごちがふて御ざるが、唯世間の眼が鏡、まごこの上手といふは此文七丈、ガクヤシリ見物よりはかく屋方の請る處は、又々かくべつで御ざるごの事、ヒイキ何でもかでもおもしろがらずが證據、外事なしに藝評く、頭取間イのかはり、信長記に花子の段にてかんじさせ、二のかはり外題のはじまりにながいや山左衛門やく大出来、つゝいてかさねの與右衛門大入大あたり、ヒイキまつたり頭取さん、五月がはりに雷天源八大あたり、六月芝居にめづらしき大入、頭取いかにも前後仕りました、忠臣藏のゆらの助もなにかといへご大入、蘭奢待の伊賀守はきつと仕内をみせ、其後あしのいたみごやら引込れ、大坂へ下ルいとま乞に後藤、功者これは打わるほどの入で有うとおもふた所、初日延引で拍手ぬけがして、かくべつのあたりはなかつたが、當時此やく外にまね人のない事ごかんじ入た、頭取同九子のごし大坂いろは座へ下り、かほみせ奴熊平にて足を

いためて、駕を借る狂言にて大當、間イのかはり忠臣藏、スキ久しぶりにて慶子との同座、石堂のやくも能く、かこ川本藏のやくいかゝあらんとおもふた所、故一蝶ふたゝびあらはれ出しかとうたがふ計のてつゝりさ、序の中九ツめ、慶子と兩人くらんでもつやうな味あじひ事共、コトシリ天川屋のやくは、これまでかぶきあやつりにて四十八度せしうち、隨一の義平にて、町人の節儀を守る仕内、見込でたのんだゆらの助まで、あつぱれの知者なりとおもはれるほどの事、スキ二のかはり、大内言葉に胴師彌助にて、我子をもしらでころす仕内しうたんにて、一同に泣かせ、二やくよしの三郎は、きつね忠信の立入、評書になにかといふたれど、外にいらい人のない事、大切慶子が立やくのあしらいやうまで、小手の利たもの、頭取次に衣紋かゝ見に、角力取孔雀三郎、スキこれはかぶきにて、古今獨歩ともいふべし、功者このやうにはまつた役は有まい、關取からだのこなしかつこうまで、おらが中間にもめつたにない、きつとしたかみこりじや、小角カトモおいらがからだとかへてほしいなア、ヒイキ仕内の事は、功者いふに及ばずしれた事、頭取ばんがはり

渡海屋銀平のすごみ大評判で御ざり升、切狂言戀のぬきがきに、伊東空兵衛の世話武道、スキこれは又格別の大出來にて、地髪地がほにての辛抱狂言、功者家内にて丸ごしの内も、きつと武士のうつり宜しく、麻上下にてうれひ、墓目の傳授の場のするごさ、狂言の眞といふは此事、スキ女中衆やおこ連も、目の赤うならぬ人はなかつた、コトシリ隨分の此人ざらひも、芝居ざらひの衆迄も、本シの涙をこぼしたぞ、ヒイキたまらず立上りなんどかういふ處もするじや□□る上手名人外には有まい、頭取其次に行ひらの太郎七も能く、同十丑のとしも、同座のつとめかほみせの肴屋鯛介は、惣八もごきの事をして笑はせ、二のかはり曲輪文章に、すゝ木喜多頭も、しつかりと出來、反魂香のごもの又平、手水鉢の場は一同に泣せ、サンシキ幽靈の段は凡をはなれたるといふものにて、慶子奇をあらはせば、由男妙を盡すといふもので有うかい、見功者の老人出むかし、姉川新四郎、瀬川元祖の菊之丞と兩人が、此狂言を見てから、たれがしてもおもしろうなかつたが、スキ今度のは何と御らうじたぞ、老人其時の兩人よりは、スイカクごふじやなく、老人慶子よし



をの方は、大ゼイ何とく、老人二段も能いかとおもはれ升じや、ヒイキア、嬉しい、いづれも御聞なされたかな、スキさあ能い事には魔がさすとやら、人のおもしろがる脰ぶくら、芝居の類焼ふしんの間は、曾根崎にて同じ狂言大入、次のかはりかしくのふく清、又又前かごよりは功のつもりし處有とほめられ、南へもごりひらがなの松右衛門といへぬし二やく共出来た、内三段めは舍柳と二人、きつしりとしたもの頭取次のかはりにいもせ山、二段めの芝六ざんぐりとしてうれしいに手ごたへさせ、三段目の大判事、前年の役から見ては拔群のうまみ有て、スキ相人さだかは慶子、久我之助に巴紅、ひな鳥に蘭耕にて、姿かつこう仕内まで打てつけた同士、四方髪慶由龍虎の術をなすといふものかい、場より又してはちんぷんかん、夫よりは其前の雷天源八きみがよかつたぞい、スキ慶子いごま乞の最中、又々足の痛み有とて引かれしが、そぶく噂するは、もはや役者を止らるゝの、いや新九郎に成て出るのと、ごりぐの風説、力をおとしてゐた處、ごらのとしは名古屋へ下り、ひらがなの松右衛門大入大當り、次にあたけ仁平と、雷天も

此人計は大出来のよし、是では又々大坂へ出らるゝよと、たのしみあるうちヒイキ大坂も中の芝居は休み、角も不繁昌にて有かなしのやうにめいつた所へ、九月九日より一世一代狂言のかんばん出しかば、京大坂はいふに不及、近郷他國なり渡りての評判、スキ見事な摺物が出るやら、盃を配るやら、前狂言は、頭取即物ぐさ太郎、大切は蘭平にて、初日からくづるゝばかりの大入、日にまし夜にましての大評判、功者蘭平は毎度の事ながら、ひとしは手に入たる大出来にて、ごかう申に不及、物ぐさの一の口、姿いやしく心雲上なる仕こなし、屋形物がたりなどは、皮肉のはれた事、頭取三の口のめつたせりふ、スキ山下金作助として出勤、かつらきの役、兩人共に拍子有てそゝらず、かへつて見物の尻が、ひよいくごうくやうに有た、頭取三の切の上使やく、かこひの内にて姿をかへ、千の利休となゆる姿の古び、スキいかにも大徳寺に姿をのこせし、木像と云處が有、功者切のうれしい、金作と二人無言の仕内、ほめるに詞のたらぬほごじや、ヒイキ大切のらん平、大丈夫の仕やう外にまねするものは有まい、功者後日狂言はかたおりに小平治



やく、我弟に異見の段、又よのつねならぬ處が有て、見るにむねのふさがる様な、場よりかみなり場の立入、大切の雀おどり、もうこんな姿は見る事成まいと思へばのこり多い、他國の人あしの痛い、多病なのといふは、うそであらうとおもはれるはいの、叶組物ぐさ三の口切、共に山下が相人に成て出来たのじや、ひとり常テとは思はれぬ、扇組夫々はかたおりは、奥山がはこの藝故大入じやわいの、スキさやう仰らるゝは、筋ちかいと申もの、いかにも里江丈大出来でかづらきしがらみ共におもしろう有たが、去年已來中の芝居にて、さしたる事もなかつたに、此度は江戸のぼり此かたの大出来と申は、全く由男の相人に成た故、カクヤシリおく山が毛剃九右衛門も、はるから出したふても、此人を平がたきにして、遣ふ程の立物がなかつた故じや、ヒイキ角の芝居も、去冬已來はつこりとした入もなかつたに、これほどの大入も、功者最前伊賀越への場で申た通り、一人して引立てとはこの事、先物ぐさは作りあほう、利休に成ての向上躰のしうたん、蘭平は大丈夫のむほんがかり、もぎだうなる似せ物狂ひ、小平治は世話事の實儀藝、扱これ

茂の所作の雲上なるぬれ事の和らかさ、はげしき立入に二挺つゝみの手に入たる武道の忠臣、所作しうたんやつし、道外おごこ立、時代の向上世話事の仕内まで、夫々にわかれたる縦横自在、妓家の一大家、天然の上手といはむに憚有べからず、各いかゞおぼしめすぞ、惣一同ちつとも申分ない、名人く、コトシリ次手ながら申ませうは、凡かぶきあやつりにて、一世一代と申事、寶永五年子十月、京榊山しばらくにて、坂田藤十郎一世一代とかんばんを出せしは、藤屋伊左衛門の藝の一世一代なりし、延享三ごらの歳、大坂市山助五郎座にて榊山小四郎、つりふね三ぶ、一世一代と申て、五六日つとめて休たり、又豊竹越前一世一代の女はちの木、延享丑の十一月より出し、大入なれば又なき事にもてはやせしも、聲がらも老年に及びし故、人のおしむ心もうすかりし、寶曆七丑のとし、豊竹筑前一世一代はた揃へをかたりしもかくべつの評なかりし、安永四申五月、大坂中の芝居にて、嵐小六一世一代、山姥の狂言つとめたれども、日數少しの間なり、同未のとし、豊竹島太夫一世一代をつとめしも、所々にてかたりし故、なにかと人の噂もあり

し、同京にて加太夫ぶしの大和も、一世一代をかたれども、久しひものといひふらしけるに、明和九年辰九月故中山新九郎一世一代大入にて、なごり狂言の親玉ならんと思ひしが、此度のやうなるは、むかしも今もならびないかと存る、スキいか様、仕内もおここぶりも、今を盛に人のおしめる年配といひ、ムダ人のほしがる物も大分持ていらるゝといひ、ヒイキ書はよし、文才も有、氣質はよし、小事フルヒえらひ油じや、由男から何ぞもらふたかい、ムダいや又めつ□□□人でもな□□、頭取東西く九月九日より十一月四日まであたりづめ、さんじきうり高、スキまつたく、めいめいおぼへた通りをいふぞ、九月九日より十三日まで、さんじきのぼり、千十六軒のうり高、せんば同十八日まで五日の間に千二十一軒、中のしま同廿三日まで千廿七軒、シン町同廿七日まで千廿九軒、ザコバ廿八日より十月二日まで物ぐさ太郎、六日より後日狂言、此間三日の休み、都合五日の間千三拾二軒、スキいかにも左様、七日より十一日まで、千百四拾五軒、上町十六日迄が千二百八拾五軒、堂シマ廿一日迄が千三百五十四軒かい、北バマ廿六日より廿八日まで、千四百三

拾壹軒、かやうに段々入のつめるは、残り多さがかさなる故かい、遠國の人しかし十月の末では入りもゆるみ、霜月へ延したが、不評判で有たやうに申ましたが、コトシリ夫はあんまりはやつた故、よしをぎらひの衆がそねみての風説と、芝居茶屋もいそがし過て、奉公人の息する間がなかつた故、むりむたいな悪説、スイ論はむやく、現の證據は十一月二日まで千五百八拾九軒のうり高、伊達もかざりもいらぬうれた處が、本ンの事と御らうじ、田舎人ウナツキさやう有さふなもの、□□ノ人最前からの千軒のぼり、べて見ましたれば、五十一日の間に、一万千九百貳拾九軒といふ事は、これがはじめのおはりで御ざろふ、スキ中の芝居へ梅幸雷子が、久ひさぶりのかはみせ初りしにかまはず、夜半過から見物がおしかけ、スイガク是まで芝居といふと、目玉をむきしかた親仁も、文七とやらいふもの、仕廻の能さ、奉公人共へも出精のため、手本にみせむと出してやり、内儀娘のかくして見て仕まふたるをもしらず、かはりくに見せにやり、ウレシガリ芝居茶やは、さんじきの手に廻らぬを、ほね折て草臥るやら、小女郎ごもはねぶたがつてばやくや



天明二千寅冬十月

作者浪華蘆陰軒

ら、ガクヤシリ江戸の役者からは、あやかりものとて、いろ／＼の物をおくるやら、スイガク評判所からは、目をさまして至極の二字をおくるやら、ヒイキ揃藏他藏が連管の三番叟、咲藏が白びやうしがゝりの翁やく、其外太四郎金七小三郎榮藏新七なんど、中山をなめる者は残なくはやすかた、ムダ中山の観音様も、何ぞしやうかと仰られたほどの事、大ぜいハア／＼、頭取狂言の噂大入のにぎわひ、此人の事を千々の夜咄し、彭祖が菊もふたゝび匂ひ、和清が鶴もこゝに來て、悦びの舞をやかなづらんかしと、評判すでにみつる比樂屋のごろごろねごりの笛／＼もに、かけいづるは天冠かけし中山咲藏、水干に大口姿、金幣うちふりのう／＼と上座に直り、善哉／＼、我は是いつものお國が神靈なり、今度中山文七が一世一代、芝居冥加に叶ふたる道の名譽なれば、妓道をつとむる末々まで、文七が終にあやかり、妓家の正道を守り、芝居繁昌の基をなせよとおもへば、神去て、ガクヤ方大ぜい行するぞ守れど、其神託の告をしらす大鼓も、拍子木も、久しき芝居ぞめでたけれ、



# 跋

舞樂てふものは、もろこしの聖の御代にはじまりて、我朝にも上古より、雲上の御遊には行はせ給ふとかや、中古にいたりて、猿樂なるもの、室町殿の比より世に弘く行はれて、武門以下の翫ものとなされけり、これに續て、能狂言てふものあり、さるは漢土の俳優朱儒の類ひなるものにや、こゝに歌舞妓狂言といふ事は、亦其後に發りて、もつばら世に流行す、これまたもろこしの地にもありて、勾欄戲場などいへりとかや、其趣猿がくは、四拍子謠曲をもて、これがために加ふ、舞奏る事其曲々の文段章句により、髣髴として風姿あるを堪能とす、又歌舞妓といつば、喜怒哀樂の情を實にうつし、しかも風姿風情を備へ、人をして感歎せしむるをもて、此道の上手とも名人ともいふとかや、所謂中山文七なる戲子、其ひとなり清白大音聲爽にして、其業におけるや、實を捌く時はよく喜ばしめ、恩愛節義に沈んではよく哀しめ、怒る時は猛虎も恐れ、笑ふ時は嬰兒もよくなつき慕ふ、はた兵衛角力の所業をなせば、見るもの左袒毛髪をそら

にす、復々俳優談笑の戲におゐては、万人腸を蕩かし、て大笑す、さは此業に妙を得たる堪能の一人にして、いまだ知命の壽を残し、功成名遂身退き、去秋一世一代の舞臺納をつとむ、こゝに好事の人ありて、渠が一世の狂言記を編て予に跋を乞、全編預從來の狂言を集め、年月時日を委す、されば芝居を好むものゝ爲には、臥遊の袖實ならんかしと、かの好人が需に應じて、しりへに筆を採ものならし、

天明三年癸卯仲秋望日

平安巨通道人書之

## 中山文七一代狂言錄終

眠獅選叙

雖は仕干の切にて、鳥の子の生せしをいふとぞ、しほらしくこそきこゆれ、獅は猛獸にして、虎豹を食とす、其やさしさにたけきを和して、身の自由をなすやらん、眠が師佐渡島が所作の傳に云、狐は出るに狩人或は犬の恐ありて、頭をおさめ居る事をなさず、獅子は物におそれぬものゆへ、暝暝に首をつかふとぞ知るべしとや、其一睡の夢の間も、金毛の光をまふくる、榮花の工夫も齡も、五十年の歡樂も、極位になれば悟るべしとぞ、示さんものは、

安曇散人

云々

ゆたかなるまつりこともふたとせの春のあしな





眠獅選卷之上

八文舎自笑著

或人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的にむ

かふ、師の云、初心の人ふたつの矢をもつ事なかれ、

後のたのみて始の矢に等閑の心あり、毎度只得失な

く、此一矢に定んと思へと云、わづかに二の矢、師の

前にひとつをおろかにせんと思はんや、懈怠の心み

づからしらすといへども、師は是を知る、此いましめ

萬事にわたるべしとは、兼好法師の筆まめにまかす

も、習ふ身のしめしには、有がたくも聞得ぬべし、今

の役者の馴しにまかせて、役の數々受とる時は、ひと

つを捨てひとつを大事にすれば、一日を見飽かず、數

毎に大事にすれば、其一日に鬱<sup>うづ</sup>しさをまして倦ども

いはんや、むかしと今とは斯ばかりのかはりも又あ

る歟、眠獅は此心をするやしらず、係は化粧ひを以て

替れば左も有ぬべし、氣持のかはり時代と世話、序破

急のわかり所は及ぶものもあらじ、其中に立役、實

惡、平敵、老女、親仁方、若衆形、且若女形は寶曆より

出て、安永迄の年數、凡二十四年の生も立なれば云にも及ばねども、此部も又其内の功に應じて、立役となりての夫に對せしを引上て、其位を正して書ならぶるも、各其位に合休して、今大至極上上吉の、嚴重なる事を知るべし、

○立役之部

極上上吉

春藤次郎右衛門

つゞれの錦

幾度出ても、正月の場の情のはまりよく、立役の係の極るを以て、此役を卷頭とす、

至極上上吉

竹中官兵衛

狹間合戰

狂言と姿との取合より、軍師の丈夫の係より出て、無念と愁ひの取廻り、古今此上や有べくとも、

大上上吉

鷺坂左内

戀女房

捌役のいさほしとても、奇麗にして情深く、

至上上吉

福島屋清兵衛

八重がすみ

世話事の軽く取なしで、男氣の愁の付かた、此餘は是にて可知、

大上上吉

武藏坊辨慶

堀川夜討

大上上吉

齋藤太郎左衛門

大塔宮

至上上吉

放駒長吉

双蝶々

上上吉	濡髮長五郎	雙蝶々
上上吉	朝比奈三郎	東かゝみ
上上吉	安部貞任	安達原
上上吉	天川屋義平	忠臣藏
上上吉	毛谷村六助	眞顯記
上上吉	小野道風	青柳硯
上上吉	鬼一法眼	三略卷
上上吉	かげ清	娘景きよ
上上吉	菅丞相	菅はら
上上吉	大星由良之助	忠臣藏
上上吉	和藤内	國性爺
上上吉	安倍保名	あしや
上上吉	千羽川吉兵衛	千兩幟
上上吉	帶屋長右衛門	かつら川
上上吉	唐木政右衛門	伊賀ごへ

○實惡之部

大至極上上吉	藤原時平	榮種御供
極上上吉	石川五右衛門	金門
大上上吉	石川五右衛門	釜ヶ淵
上上吉	石川五右衛門	狹門合戦

上上吉	かちや團九郎	新うすゆき
上上吉	松王丸	すがはら
上上吉	やつこ佗助	鍋まつり
上上吉	印南大膳	播磨巡

○敵役之部

極上上吉	高師直	赤穂鹽竈
上上吉	梶原平次	ひらがな
上上吉	梶長兵衛	かしく
上上吉	稀世	すがはら
上上吉	ひぬかの八藏	戀女房
上上吉	ごくもん庄兵衛	出入のみなど
上上吉	石川惡右衛門	あしや
上上	斧定九郎	忠臣藏

○道外形之部

極上上吉	一條大藏卿	鬼市
上上吉	物くさ太郎	十帖源氏

○花車形之部

大上上吉	覺壽	榮種御供
大上上吉	岩手	安達ヶ原
上上吉	みめう	近江源氏

上上吉

覺壽

菅はら

上上吉

山姥

鶯塚

上上吉

岩ふち

かゝみ山

親仁形之部

上上吉

鮮屋彌左衛門

千本ざくら

上上吉

竹村定之進

戀女房

○若衆形之部

上上上吉

大星力彌

赤穂鹽竈

上上吉

捨若丸

兒ヶ淵

太上上吉

鬼若丸

鬼いち

○子役之部

上上吉

怪童丸

姫山姥

○若女形之部

大上上吉

板額女

和田合戰

上上吉

間淵角右衛門女房  
おくら

嚴柳島

上上吉

たそかれ御前

愛護若

上上吉

繁の井

戀女房

上上吉

はかた小女郎

けいせい鐘鳴渡

此狂言は、女形の名残りに評よかりし故跋に記す、  
凡衆人の見物の沙汰よきと、又役のそれしとを爰

に出す、されどもあそこか爰かとの論は、絶すも  
あらんかし、  
夫レ春藤は、はじめより眼の定まる、正月の場あまた  
たびくり返したれどもかはらず、大安寺堤も次第に  
評よくありしといへども、只正月の場程よくもあれ  
ば、外になく○狭間合戰は京都にては○齋藤道三○  
來作○官兵衛○五右衛門四役、後來作の役は片岡仁  
左衛門へ譲りて三役を勤める、又大坂にては齋藤道  
三を譲り、來作との三役を勤める、各其役々の氣持  
よく、五右衛門の若々しきも、一入よきとはいへど  
も、竹中は前後此役を、是程に勤むるもの外に仕人な  
し、  
或人問て曰、京都にては大清の役嵐來芝、大坂にて  
芳澤巴紅なり、來芝誠に此上もあらんといへば、巴  
紅よく間を合すといへども、見物一統來芝ならば、  
又一入よくもあらんと思へば、下地よき相人有  
りて、少しは甲斐なくもあらん歟、眠答て云は、當  
時來芝程の者無之あれば、狂言には上なくもあれ  
ども、いろは女形より勤る、時に應じてよくせり、  
相手になりては、此役は來芝は、計略に落し兼ね所



あり、いろはの計略には掛りがたくもあれば、欺された時の無念さは、百倍にして向ふへのこたへよく覺へて、いたしよく候ごぞ、かゝる次第も、上手となりていへば、唐木政右衛門は由男當り狂言にて、爰に出すにもあらねども、此狂言二度出し時、眠獅此役を勤、しかし故障ありて初日の夜より暫く引しが、假に中山他藏是をつとむる、大に評判よく、しかも師の流義を守り、見付たる仕うちに大に悦ばせし事、凡十四五日もありなん、眠獅よりも能するごぞ沙汰せり、程なく再勤有て、此役をつとむるに、中山の一流を用ひず、鎗の傳授も品かはりしごて、其風儀ご倅の別なる事、由男に障らずも、感じさせし思ひの評多かりし故、立役の部の殿に居たり、

一眠獅親父は、世にしれる通り、嵐小六の事也、此小六事往昔吉田小六といひし、小兒の時より諸芝居にて名をとり、後には上手に可成仕打ごもいはれて、享保十二未霜月、京戎屋名代芝居にて、則師匠後に新平ご云ひし、二代目嵐三右衛門後見ごなりて、座本をつとめしが初舞臺にて、段々立身、元文四年より上上黒

吉ごなりて、三ヶ津にて名の残る狂言多く、無程黒極上上吉ごなりて、山姥、重の井、岩手の女非人、きばのお才、土手のはる、春藤次郎右衛門女房お春、金毘羅御利生民谷新左衛門女房お町、是等の狂言にては、外の役者のねぶつて見る事もならぬ仕打、もごより所作事にはしかく、石橋などは菊之丞、富十郎の風儀にかはりて評よく、やごごなき御方よりごして、鍔細工にて叶ご云字を紋に彫り給はりしより、叶の丸を紋に付來りしが、寶曆十四年より、角に小の字に戻り、明和六年丑霜月、大坂山下八百藏座にて、嵐三右衛門ご名乗、立役にて六法を顔見せに勤め、其年の夏より休み居たるが、安永四年未十月より、京都にて子息雛助元服の舞臺にて、一世一代に山姥役を勤め、則先年逸風ご勤られし快童丸は、雛助勤て大入をごりて、其暮大坂へ下り、翌年秋大坂にて、又も京の通りにて暫く山姥を出し、彌沙汰よくめでたくも引て、其後雛助益繁昌に付て、隠居くごもてなされ、法名是心ご自ら唱へ、毎度物詣のみにて、ゆたかに暮せしも、老ごつもりて天明六丙午年七月廿三日、遠國の客ご成しごぞ、舞臺勤めし事四十一年、行年七十七歳、

一眠獅父母に孝心深くして、付添ふ事三十四五年、凡同座漸寶曆十三末年、中山由男濡髪長五郎勤めし時一座有て、其時傾城あづまの役を勤めし時、其年親小六、京都に別れて勤めしばかり也、さあれば彼叶と云字苗字に改、門人各苗字を分るといへども其禮嚴重也、爰に記す、

關 三十郎

嵐 小 六

柴崎林左衛門

嵐 源之助

嵐 新 平

嵐 菊次郎

嵐 龍 助

嵐 權三郎

片岡仁左衛門

中村 仲藏  
名付て自万と呼ぶ

此仲藏は、元中村岩藏に續くといへども、當中村苗字預るに付て、眠獅門葉となる事、奥に委し、

一 中村十藏二代目、元は京にて振付にて、上手と呼ばれし小倉山百介と云し人の子にて、小倉山千太郎と

いひて、寛延の始より出て、京染松七三郎座にて、黒船忠吉となりしより沙汰よく、寶曆十辰年より、實父にはなれ、中村吉右衛門の子分と成て、中村十藏と改、暫く江戸に居て、又大坂をつとめ評よく、歸參して猶沙汰よくも有しが、江戸に由縁をもごめし沙汰もあるなり、大坂をつとめ、天明八年申の夏比、不圖病ひ付て弱りながら、赤穂鹽竈の山良之介役を勤、終りて病に臥、自分覺束なくも有しや、眠獅を病床に招きよせて、師父と家名を見立頼むよしを頼み置、其年六月十二日に終りをとりぬ、眠獅是を受て、門人の内にて、其名を續さん事をなす事、二度に及ぶといへども、事ならずして、ことし一周忌に及ぶといへども、其相續ならぬ事、跡のくり言に聞かねて、據なくして其時に及びて、叶秀之介改名させて、小祥を吊ふ、よつてもて其弟子中村の苗字を、當時三代目中村十藏秀之介事これを預る、今十藏若年なるを以て、眠獅是をとり計ふ分、

中村 岩藏

江戸 中村 竹藏

中村 四郎八

中村吉三郎

中村初藏

中村市松

中村重吉

中村大三郎  
今嵐吉三郎兄也

時に眠獅、所作事に扇の手を習ひ得んを勵み争ふ事  
をはやらせり、依て其中にして、直弟子又弟子なる事  
の耻辱をや遂る事有なん、我一と直弟子にならんの  
流行も、都會の一流一興にて、素人の門人となる所を  
又書加へぬる、

大坂之部

洲濱屋幸八

京扇屋つね

あづま屋此松

山もとや春野

ふじ屋菊八

つるや權八

日野屋しゆん

きせるや又八

大和屋市松

京都之部

大まつ屋くま

かぎやりく

西枡屋たつ

桑名屋琴井

かぎや友ぎく

万幸

桑名屋小大

桑名屋たく

富田屋卯の

多田屋呂間

大黒屋八重

きくやもこ

播磨屋忠藏

さかい屋音吉

いづみやもこ

壺中館榮樂

山もとや小なつ

いわた屋せう

ゑびす屋今藏

松屋や東吉

あふぎやいそ

富田屋虎吉

あふみやべん

たけやいわ

すはまやゆら

はりまや小作

京扇屋小傳

あづまやみや

ゑびすや春次

かぎやわい

西枡屋ため

内田屋いま

八百屋若大

内田屋ここ

大まつ屋みね

桑名屋萬代

大まつや小いそ

松幸おくに

富田屋來葉

西枡屋多かの

西枡屋あさ

桑名屋左近

八百屋そりやう

伊勢定右衛門

橋野良助

奈屋丸

鳥羽屋忠八

大津屋淀吉

大津屋多吉



世話人

洲濱屋幸八

同

させるや又八

大坂惣門弟預リ

近松軒

鳥羽屋大八

大津屋濱吉

鳥羽屋友八

鳥羽屋卯八

世話人

伊勢定右衛門

同

鳥羽屋卯八

京惣門弟預リ

富田屋善四郎

此人初舞臺より、黒木賣後、面に名高くして、女形の内に度々所作を出し、石橋なごもつこめたれども、立役になりて猶あまた、び所作をつこむ、其中に扇の手に妙を得て、やさしくも自由をなす事に愛て、斯のごとく素人の門葉多しとしるべし、

一 去年寛政元己酉の九月九日より、浪華の一世一代として、角の座にて所作を出す所繁昌なして、廿九日まで勤め、次に中の座にて、顔見せの助として、澤村其答招き下して、十一月十一日より、大切に所作かけて、顔見せ狂言を取交て、大に見物を悦ばせ、十二月三日までの大入にて、目出度千秋樂をうたふ、其

次第、

角の芝居中山福藏座にて、

大切

山伏攝待忠臣旗揃

大坂中の芝居  
所作事 化粧六歌仙 淺尾綱太郎座

康秀戀づくし 三下り

小野小町 澤村國太郎

官女 山下金作

官女 吾妻藤藏

同 市山太次郎

同 淺尾綱太郎

同 嵐源之助

同 坂東岩五郎

戀に様々有明の、月になんどのあふせこそ、ソリヤしれたこと月がこい、はづかしいやら、こはいやら、うれしいやらのにる枕、其おぼこいも又命、誰かれなしの情しり、やはらこいぞと浮名立、一世一代みてこいの、叶みんしがお目見へは、あたしつこいと云事か、姫ごせ獨を大勢が、百万べんの數取は、念佛こいと申也、四でう半でのしつほりは、夫をかこいと云ならめ、きうじのいらぬすへせんは、くはぬがそんじや持てこい、呼だす門口又しても、しれたせりふので、こいか、雪は白ふてお月様はいつでも、いつでもくまんな丸こいじやないかいナ、コリヤ又ゑらい、ゑらしこ

い、ちよつと盃いたしましよ、てうしもてこいで有ふ  
がや、おなごのおいごはひやこい、鳩にはこしよ  
りこい、鳶はこんでこい、からすはかつてこい、こい  
なはいないや、くいなは、くくく

業平  
小町所作事

本てうし

深草少將

中村京十郎

左近國經

山村友右衛門

仕丁

市川八百藏

同

三耕大五郎

同

關三十郎

同

姉川新四郎

同

山村儀右衛門

仕丁

叶 雛助

梓弓、引ば、元末、我かたに、よるこそまされ、戀の道  
のにも山にも、「春霞、たつな、いさはじさりこては、  
なびき給へと有ければイヤくもらじ胸の月、「我はれ  
んぼの、やみくく、戀しなん身は、おしからじ、「ア  
ラうたての御ことやと、拂ご猶も離じと、「袂を取  
て、引留ル、引く袖も、ひかふる袂も重きがうへのさ  
よ衣、重て來らせ給ふなど、「ふり切ルてには、思ひの  
たけ、心餘て、詞なく、「よみ人しらずとかへらるゝ  
詠人不知と歸らるゝ、

喜撰ちよんがれ

く僧が、住かは京の辰巳で、よをうぢ山とナ、人は云

也、ちやくくちやちやゑんで、咄こいちやがゑんの  
橋姫、夕べのくせつの、袖に移香、花立花のナ、こじま  
がさきから、一さん走に戻てみたれば、内の内義が、  
りんきの角もじ、牛も涎をながるゝ川せに、くごけば  
おちあゆ、我からこがるゝ螢を集て、手くだのがく  
文、唐もやまこも里の戀ぢは、山吹ながしの水ニてり  
そふ、朝日のおやまは誰でもかれでも、二世の契を平  
等院とは、さりとはくく、うるさいこんたよホヲ、

○所作事之次第

其答を小町として、初めに仕丁となりて、姿を替て口  
説き落さん事を請合て、後五役の早替り、

始時代

僧正遍昭

二世話

文屋康秀

三時代

在原業平

四世話

喜撰法師

五時代

大伴黒主

此姿にて末に實惡の役あり、所作にして所作にあら  
ず、其姿と氣持のかはりめに妙を顯はして、就中處  
處の所作事に肝を潰させり、夫凡所作にて評する時  
は、

第一

業平 雲上

第二

喜撰 柔和

姿のかはりめを評して云ふ時は、

第一  
喜撰 黒衣の詫し

第二  
康秀 戀盡しのうかれ

氣持のかはりを論する時は

第一  
康秀 老の戀衣

第二  
業平 梓弓のおさなしき  
立ふるまひ

引ぞわづらふばかりなる 取沙汰に、遍昭の俤の殊勝さ、黒主の威有て猛き、佞者の粧ひ至て強きも、心のいさほし、次に論するは始に出せる山伏攝待にて、佐藤の老母役、初め靜御前、江田源藏夫婦と知ての狼藉よりも、其姿そなはり、深く奥に旗揃のおだやかさ、此役は先年京都にて、親小六、此尼公の役をつとめ、娘と成て旗揃ばかりを勤めしとぞ聞たるが、功をつみてやしとやかさも、又同じ扇の手と膝のはたらき、頭の切りあんばいの、雲上さを見せておごろかす、凡所作事といへるものは、後口に花やかなる衣裳にて居並び、笛に大小の鼓より、太鼓三味線胡弓鉦鐘鐘なごに至る迄も並べ立て、拍子を合すものなるに、此一世一代の二度の亂曲に、其沙汰なく、漸く業平の所作に、鈴木万里が歌の出語りの風情にて、三絃と二人のみ、其餘は床カの一ふし、樂家のめりやすのみ、且は攝待より旗揃に至るまでも、若太夫ぶしも

床カの一曲にて、是はごうもと譽方をさへも、耻らふ計り、ひそまつて、見聞の感心も、自然の備にて、耳目のこたへは誠に前代未曾有のほまれは、他になくも思はれて、此二説は格別なるべくも思へど、其評をなすも、又彼素人弟子衆への寄り添ひも有べければ、時時の所作を又評して書並ふる、

其次第

無量

化粧六歌仙

名譽

忠臣旗揃

上手

鐘入之段まゝたき女

自然

千本櫻道行忠信役

器量

七寶演眞砂

天明五巳正月、曾根崎新地にてつとめ、同年十月京都につとめし所作事にて、椀久在所娘、土佐繪奴面賣女、融大臣、切に梶原にて、箴の鎧姿の所作、

風勢

梶原平次

安永七戌、顔見せ、源平たごへ盡しの中入、敵役姿にての扇流し、道服にての扇の手、  
功者  
武勇萬歳



天明四辰秋、京にて大塔宮序無禮講にて、相手嵐來芝土岐藏人にて、眠獅は村上彦四郎役、翌年大坂堀江市の側にてつとむ、

修行

蟻通し

安永八年十月、小川吉太郎座、京暇乞に嵐三右衛門と勤、

優美

小袖物狂ひ

安永八亥七月、嵐新平追善、角の座にて所作事を勤、

風流

おしなべて引や袖褻

天明六年十一月、京四條北側西の芝居にて、顔みせに來芝其答ともに、狐釣りの所作、又同十二月に堀江市の側芝居にて勤、

手練

道行對の花かいらぎ

寛政元酉七月、京四條芝居にて、伊兵衛來芝佐兵衛眠獅勤、

勇勢

關帝靈像

天明九酉正月、大坂中の芝居、二の替りに勤、立身

花筐たわげ貺石橋

明和五子九月、瀬川菊之丞追善として、反魂香狂言、又平女房と遠山の役、大切に是をつとむ、

石橋は元早川初瀬といひし女形、輕業にて獅子の戯れをなせしを濫觴として、其後享保十七年、江戸猿若座にて、元祖瀬川菊之丞工夫して所作となじ、石橋とぞ號け、度々出して譽れを得る、中村富十郎是を習ひて、瀬川代々中村を繼ぎもの、皆是を勤める度毎に當らずといふ事なく、雛助親小六も、是をつとむるこいへども、かたち同じうして、又一流ありしとぞ、其息子なれば雛助も父の流義をなす、其時はいまだ二十六七歳なり、左はいへども、元所作事は佐渡島長五郎弟子也、此長五郎は元祖佐渡島坊より續て、傳八といへる役者の子にて、所作事は凡此長五郎より始まる、此家に傳ふ七小町、或は邯鄲の四季杯とて有り、其四時の情をつとむる事とぞ、是等より六歌仙も工夫の付たるもの歟、今の澤村國太郎も、同じ長五郎の弟子にて、常に中よくして、此度一世一代のワキを勤む、眠獅をシテとして、小町一役にてあいしらふ事、又外になくぞ覺へて、俱におとなしき仕方の評、高くして沙汰よく、其自由猶前後にたどる役者もあ

らじとも、所作事其餘また色々有るといへども、大略  
して出す而已、

眠獅選卷之上終

眠獅選卷之下

抑嵐は前卷にしるせるごとく、嵐三右衛門三代目新平より續といへども、故有りて近世叶にぞ改める、雛助は寶曆元末年冬霜月より大坂にて三枿大五郎座へ十一歳にて出初しが初舞臺也大坂中村十藏座にて慶子二度めの石橋の年也○顔見せは黒木うりの所作事、少しながら初舞臺より只ものならずと云初られ、翌申年則金毘羅御利生の狂言有て予梅松をぞ勤、其冬同座の勤にて顔見せ、後面にて大に評よく寶曆二江戸にて梅幸元服の年也、大坂へ喜代三二度目來る、岩見太郎左衛門狂言二の替りに出○翌年同三西冬も、同座にて八瀬のお熊にて、母の怨靈付て、傘の下にて付聲より所作に掛り、増々沙汰よく、後々は出世すべきともいはれ、其年夏は遊行柳の狂言出て、柳の精魂はげし、寶曆三平九郎物くさ由良之介、京四郎定介座キノ二、寶曆三西松島茂平次大坂へ歸る、松本幸四郎團十郎下成、寶曆四戊二代目芳澤あやめ終、嵐新平終ル○同五亥年冬より、北曾根崎新地にて、山本佐吉座にて、顔見せは平假名狂言にて、大序に判官義經の役、次に間の物に蘆屋道滿出て、六の君役松右衛門山本京四郎○千島嵐小六○道滿京四郎○くづの葉小六にて大當りせし花街蛙の年也○同六子年は姉川新四郎座に

て、顔見せ夏姫にて、道成寺の所作事○此冬より京澤村國太郎座へ、父子とも住て、親小六六年ぶりて評高しく、此顔見世雛賣の所作にて大に受よく、是より△若女形之部に入、二の替り主膳之介子小太郎にての若衆形出立にて、乳母を殺せし仕打ち、しく、めきめきと沙汰よくなりて、二役君が代姫美しいと評判にて寶曆六子、助高屋高助終ル、中村仲藏立役にて成、瀬川菊次郎終ル、角の座二の替、天竺徳兵衛出する年同七丑冬も、同座にて時忠娘郷の君にて、丑の時参り義經の云ひ號ながら、殿の病氣にて逢はれぬ悲しみ杯も、受よく、寶曆七丑大谷廣治終ル、藤岡大吉終ル○同八寅冬同京澤村國太郎相座染松松次郎本座に住て△上上の位にて、顔見せは判官の妹みゆき、此比は澤村國太郎、染松松次郎、玉村辨之助三人と、此人互ひにはげみ合、前後を爭ひ、出世有りしなり、二の替けいせい花鳥にて、誰袖姫にて女形同士の泥仕合ながら、情を崩さぬ仕打と譽られ、三の替りは津國鶯塚にて、清少納言と、娘の白菊の二役ともに評よく○同九卯冬より同京都北側にて座本を勤て二の替り通神廓曾我にては、五郎時宗と大磯の虎の役、此春日高川にて清姫の役、寶曆九卯山下又太郎、芳澤崎之助、江戸より大坂へ歸る角二の替り、三十石大に當る、竹田與市鬼若にて當りし年也、此春小六木上上吉と成○山姥小六○快童丸平九郎、角の座二の替り、三十石の



年也、中村十藏吉右衛門と改る年也

○同十辰冬より、五年ぶりにての大坂

下りにて、姉川新四郎座へ歸り新參、顔見せは三浦大

助義澄娘玉琴にて、勘當の託言の仕打先沙汰よく、奴

系平を朝長とさとりての戀仕かけ、後酒をのみて大

力になりしよりの受殊更よく、當顔見せ古藤川逸風

引まはしつよく見へて、翌二月一夜付狂言にて、鐘

か鳴今朝噂の狂言にて、藝子のいろは、古初の藤川八

藏、新助の役にて心中出立大評判をとり、二の替りは

八文字屋眞鳥實記にては、助八妹となりて、賈勅使

より俊次郎に惚たる仕打、あつく手つよき取沙汰、寶曆十一年巳

十辰中村富士郎、市川升藏、大坂へ上る、角鐘岬の始り、寶曆十一年巳

藤川平九郎終る、角二の替り天狗宴、此秋市村龜藏大坂へ上、又京へ

行、所作事を○同十二年の二の替りより△上上と

りて、秋葉權現狂言にけいせい花月の役、次に御所櫻

堀川夜討討秘しのふの役、清水清玄にて櫻ひめ役、い

づれにも見物を段々嬉しがらせ、寶曆十二年申二の替り、

ろは行列山下又太郎終る、今村七三郎終る、秋葉權現角二の替り、

終る、中村助五郎終る、岩田染松終る、佐野川市松終る○同十三

未冬は、始て親子別れて、此人は角の座文七座に住

て、間の物双蝶々にはけいせいあづま役、次に菅原傳

授にては梅王丸女房お春親小六京出勤角は長五郎文七、長吉

兵衛の時○中ノ座大○同十四申冬、中にて三枡大五郎座

へ小六下り來り、同座にて、顔見せは扇屋小萩の役

にて、誠は敦盛と成仕打よく、間の物極彩色にて、娘

おなつの役、兵助三五郎、朝比奈七五郎大切にまゝ、たきの所作事、お

ぼこ人形等、中村久米太郎との一日替り、勤めも共に

評高き事、負す劣らずこの取沙汰、此秋大友眞鳥に

て、助八兼道の二役、雲井御前小六、主計吉右衛門ともに大に當り、此

時より大立者のしるしあると評判、寶曆十四申小佐川常世

○明和二酉冬、同三枡座にて△上上と成て、顔見せ

は乙姫にて、秀郷とのれんぼに迷ひ、龍宮へ歸り兼る

風情、二役こしも夏花にて、純友屋敷へ入込場も受

よく、間の物新薄雪物語の大當りに、こしもごまがき

の役、鍛冶屋娘おれんどもに大に評判よくて△上上

と成なり、次に夏祭に徳兵衛女房おたつ、此秋蘭奢待

に娘のおこのにて、嫉妬沙汰よく、坂東三八江戸より來、文

故障有て休み、明和二酉冬○同三三升大五郎、七座間の物戀女房狂言に

本七藏岩井半四郎と改中村歌右衛門相座に住て、顔

見せは秩父重忠女房お梶と成、奴みかん平を義經の

身代りにせんとはかり、よく顔を見れば、兄景清

なるゆへ驚き、後白狐通を得ての落合、所作めきたる

仕打より△上上と成なり、間の物相馬太郎にては美

女丸、後粧姫と替りての入組、次に本朝廿四孝に八重

垣姫にて、可愛らしき沙汰もよく増りつゝ、次に蛭小島にて誰袖役にて 相撲の行司はさも嬉しそふに見へて悦ばせ○當盆替りより、角の座へ中村歌右衛門座本分りて文七菊八座へ四月夫に付出て適討三國一に、曾我時宗役に大に見へを悦ばせての奇麗さ、貫八娘おいしの世話事、次に蘆屋道満に葛の葉の二役、あつぱれ出かし道満歌右衛門保名三五郎○同四亥冬角の座にて座本、顔見世は大坂村在所由來にて娘おひな、翌春一の替り、鱸庖丁出たれども、二日興行有て直に相休み、續てひらがな盛衰記出て、こしも千鳥の役、無間の鐘の沙汰よく松右衛門古八藏、源太彦四郎、延壽小六次に忠臣講釋出て十太郎女房おりへと平右衛門女房お縫の二役大体、次に逸風七回忌とて、夏祭り出たれどもやはり徳兵衛女房おたつの役、二度目だけの面白さ増して○同五子の春より、尾張名古屋へ行て、前髪にて反魂香の土佐の又平の吃役、大に土地を賑はせ、二役けいせい遠山にて、切に石橋にて、ここの外受よく、歸りて其年は遠方の勤のみ、子冬顔見せ、小六三右衛門三成、立役にて六法勤、京都へ二代目澤村宗十郎來りし年也○明和五子鷺助小四郎終る、四代目女形小四郎終る、二代目坂東彦三郎終○同六丑年は大坂西竹本座にて、山下八百藏座本を勤、間の物に双蝶々出て、ぬれ

髪長五郎とおてるの二役、娘役のしほらしき、夫には似よらぬ長五郎の手づよさこの沙汰よく、此年の評判△白の犬上上書となりて大入、角も同じ狂言出されたれども見古されし歟、おとなげないなごゝもいはれて、さ程にも入なく○同七寅、冬は京尾上糸助座へ住て十年ぶり也とて受よく、顔見せは石橋やつしの所作よく△上上吉と成明和七寅澤村宗十郎京にて死、坂東幸四郎市川團十郎に名展り○同八卯冬、京三柳徳次郎座にての、若女形の立者と呼れて顔見せ、けいせい靜原にて、後死靈の大力二役、浪の戸の沙汰もよく△上上吉と成る、此年菅相丞を勤め、次に近江源氏のみめう役の評判大によく、二やく四斗兵衛の手づよさより、秋は物くさ太郎の四ツ目、不破伴左衛門役にて奇妙がらせ坂東半五郎京へ來りし年○同九辰冬も、同京にて嵐山十郎座勤、顔見せは舞子お組にて、馬士三吉に傘さしかけ出る出端より、始終噂よく、二の替り櫻御殿に、櫻戸と正助妹おすがにての嫉妬故、正助に殺され、大切に石橋をつとめて、次第に評よく是より△上上黒吉となりて彌立物となり、わけて此狂言など、慶子役の儘ながら、慶子には似ぬ一流の見所あるとて、眼をはなさぬ



やうになりて、其年女非人も出し、又は妹春山のさだかにても當て安永元辰中山新九郎一世二代伴左衛門役勤、先市川團藏終る二代日瀬川菊之丞終る○安

永二巳冬は大坂小川吉太郎座へは四年ぶり、顔見せ

は白拍子雛鶴にての、うつば猿の稽古の仕打にて、賈

勅使での外題盡の口上、間の物管相丞と櫻丸女房八

重の二役も大休、市野川彦四郎彦三郎と改京へ出二の替りは小栗宗丹の

實惡、出來は大休ながら若女形から勤める實惡ゆへ

に、こぞつて見たがりての評判高く、立テに成て、今

少し甲斐ないど漸云ふ様に成て來て、次は雷電源八

の作替にて、角力取姿に、引續て立役の仕打のみなが

ら、次に大塔宮の三段目にて花園役、齋藤大五郎馬ノ頭古來介大に

沙汰よく、やつぱり若女形がよいともいはせ、次に切

狂言にお龜の役、小川英子與兵衛となりて、蚤の女夫

とて笑はせ、心中姿も珍らしく、次に愛護若にてたそ

かれ役を當、次に反魂香にて又平女房お吉と、けいせ

い遠山の二役、切に石橋と出世故悦多く、安永二巳松本幸四郎市川海

老藏に改○同三年冬は、中にて嵐松次郎座へすみ、顔見せ

は白拍子白菊役、梅幸同座によつて、間の物忠臣藏に

ては早野勘平役、梅幸由良之助天川屋の二役三ツめ六ツめども、是は

あまり沙汰も勝れし方にてもなかりしが、二役天川

屋女房お園大に評判よく、二の替り梅幸油はかり狂

言にては、象瀉御前の役、次に近江源氏にては、宇治

の方と母みめうと四斗兵衛女房との三役とも甚沙汰

よく、夫より嚴柳島にて、間淵角右衛門女房おくら、

是は格別にて春水一鳳に劣らぬ仕打と大に受よく、

菅原にて松王丸、女房ちよの役もよく、菅相丞梅幸、松王丸梅幸、白太夫歌

七、○同四年冬、藤川山吾の座へ出て、顔見せは狂女さ

くら戸の出端、先年寶曆七丑の年、親小六の仕られし

によく似て、又自分の持前ありて頼母しく、殊更其沙

汰よく、間のもの鳴神上人は大休、二の替りけいせい

鐘が鳴渡に、博多小女郎にて與次兵衛女房となり、後

誠の夫に出逢ひての驚き、氣のどくなる仕打よく、二

役眞弓御前にて、虚無僧出の見へよく、此年も若女形

大立ものながら、立役狂言の次第に手づよくなるを、

元トとして此末の秋を女形の名残りとして、九月二

日元服をなして、

「御最負をかはらぬ色や松の色　　みんし

となしぬ、京都の御見へには、一の谷熊谷と岡部六彌

太の二役ともにしつかりと悦ぶ人のみ、切に

親小六一世一代として、山姥の役にて快童丸となり



て、親子の情ばかりは、又逸風にもまさりしごまでも云はれ、其冬は大坂三枳松之丞座へ約束出来て、御暇乞とし、三浦大助の三石切、梶原仕打は立派にて見へよくも有ながら、熊谷にかはらぬ上下姿にて、どうぞ世話事姿で見たひ物との噂ながらも、

「冬の梅咲や變成なんしより

同

この摺物も出し、下りて大坂にての顔見世は、武田家臣鐵孫三郎にて、使者に來りての久米寺彈正めきし狂言、先仕打に申分はないが、今少し聲が落付かぬなごゝも云はれ、次に間の物忠臣藏にて、大星由良之助と勘平が母勘平嵐吉三郎の座は双蝶々出る○東の座にて藤松三十郎にて忠臣藏出て由良之介を勤是は持前にて格別、其場の愁つよく、由良之助は梅幸で見えたる間の間もなくして、色々の噂ながらも、此九月に立役ご成ての、十二月の始元服にまだ三月立ずして、是程の仕打は、兼て立役になる志し深き故、氣持の替りは甚よろしとも譽られ、位もやはり女形の儘にて△上上吉、二の替り花岡大仁は少しばかりながら、次に黒端狂言にて、獄門の庄兵衛、世話敵を珍らしがりて悦び、只聲を而已悔むばかり、尻からげの仕様までも嬉しがらせし上、次に團七九郎兵衛の役、四ツ目道

具屋場、肴賣さんぐりと奇麗にてよし、七ツ目舅殺しに、始て裸姿を見せて、夫を先悦ぶ聲の賑はしさ、其夏親小六、又々浪花の一世一代とて、山姥にて快童丸をつとめ、夫より暑の間宮島へ下り、盆前歸りし所、留主中芝居もめ有て、座本もかはりて、嵐七三郎座にて戀女房染手綱にて鷺坂左内、竹村定之進、お乳の人の重の井とひぬかの八藏の四役に、大に我を折らせての大入、各其氣もちの替りめ、女形は持前のくり出しながら、次にうそきたなき馬士姿大に悦ばせり、夫より十月八日を初日として、つゞれの錦を出して、春藤次郎右衛門役、正月の物を大ひに當、非人の場は左程にもいはねごも、甚六のせりふより、敵討に出るまでの姿の程よく、仕打に突張つよくと大評判、是を此狂言の初舞臺也、安永四未江戸坂京右衛門終る、坂田半五郎大坂へ顔見せばかり出る○同五申冬より角小川座へ移り、顔見せは伊勢海老の軽く和らみ、次間の物新薄雪物語に、秋月大膳は前評とは思ひの外、夫程にも云はず有しが、二役地藏の五平次の世話沙汰よく、二の替り國花万葉にて、若黨國平と石不動も大休、桃井市正は評よく、次に天満宮菜種御供にて、左大臣時平の實惡には、以ての外我折

らせ、大に受を取戻らせ、今に時平の笑まくと、狂言の名物と成、二役伯母覺壽の役、又後室のうちにての出来物、土師の兵衛との詰合幕までを悦ばせ、別して時平は格別の沙汰とも云はれ、大に入を取り、次にかしくの狂言に梶の長兵衛の平敵は、又去年の獄門とは又格別の出来、盆替りは鍋肥貞婦競に奴わび助の役にて、銀閣寺の仕打よく、後出世して梅幸と關守の隣合大によく、九月より千本櫻にて渡海屋銀平と鮮屋彌左衛門、佐藤忠信、狐との四役、彌左衛門は始ての親仁と珍らしく、知盛忠信大休と、狐忠信先出端二重舞臺のせり上も、めづらしがらせて大に受よく、分て國太郎靜にて、道行殊の外評判よく、すつけりご沙汰強くなり、中の座伊賀越にて唐木政右衛門役由男大當り、澤井父五郎藥屋早替り奥山大評判、次に先代萩、古舍柳うば政岡、女形にて當りを取○安永五申坂田藤十郎終る、中村七三郎終る、○安永六西中村桑太郎終る、先中村のしは終る、先市川八百藏終る、先吉妻藤藏終る、中村喜一、同七戌の冬も同座にて、代三終る、二代目藤川八藏終る牛追の顔見せ、亥の春は赤穂鹽竈にて、高の師直の添削より、鹽次を科に落す大にくみ深く、又も格別に uscita、次に大星力彌にての前髪より、元服しての仕打に奇妙を顯はして見せ、次に千崎彌五郎にてのうまい物やも大休、前の二役は別して出かしたる沙汰

より△(天)上上吉となり、續て金門五三桐の石川五右衛門、是又格別の大出来、世に知る所なれども、五右衛門の狂言多き中に、始中終とも此仕打を専らとして、眼を驚かすばかり、此盆替り棹歌木津川八景に、勘助の狂言も評よく、次に和田合戦女舞鶴に板額の役、梅幸あさりの與市にて、二人とも持合て沙汰よく、是又大に出かし、切につれの錦にて、春藤次郎右衛門、續て正月の沙汰始にまざる、夫より五雁金に案の平兵衛となる、是はあまり仕打水臭過るとて面白からず、中の座三五郎、十一年ぶりにて登り、二の替りをし鳥より、小栗宗丹、物ぐさなど續て出す○安永七戌二代目海老藏同八亥年も同座にて△大上上吉と成、顔見せ梶原平次にて、仕立も半にて病ふに狂はされての所作事甚だ見事、殊更立役になりてより、始ての扇の手奇麗、敵の姿にて、慶子入座二の替石井城女名和張に、浪人太郎左衛門と成、俄立身して後、將門の餘類と見顯はされ、慶子へむほんを残し切腹し、二役良助にて、末に裸にて冠を著せしまでも姿よく入しとはいへども、入りも餘りすぐれずして、次に慶子葛の葉を出さるゝにあしらふて、石川惡右衛門、大鏢にて不調法らしきを笑はせ、三詰蘆屋將監はてつゝりとしてよく、



二ツめ小袖物狂ひ計新平追善として、しとやかなる所作事、夫より切りに東鑑の三朝比奈は、見えよくて評判をこり、大藤内美雀、女房慶此冬は京都へ約束極まり、暇乞として土佐又平にぼつとせ、鬘も思ひの外よくはまり、仕内は大体大切に大津繪抜出し所作、藤の花かたげた振袖にての、鐘に恨みの姿うかれ、座頭から蟻通しまでも、眼を驚かせて、首尾よくつとめての上京十年ぶりにて慶同九子年、京染松七三郎座、顔見せ吉例として、鐵孫三郎にての使者、久米寺彈正のしとやかなる仕打、奥は釣鐘より顯はれ出て、道成寺のまねびばかり、二の替は金門五山桐、五右衛門にての大當り、いよく大立者に賞美せられ、此年菅原に松王丸と覺壽、稀世端役ながら、三役ともに受よくして、此夏秋の比より、江戸より相談に來るといへども出來がたく、漸く顔見せばかりの約束出來て○當冬十月より出立有、廿六日乗込、十二月朔日より木挽町森田座へ出て、江戸行紋を圖に改、今の三升堺町にて兄弟の口上を云ひしなり丁七唱にて、鐵孫三郎の狂言の通りも見心よく、只ものならぬどの沙汰ながら、土地に合ふの合はぬのも無理ならず、江戸役者上方へ來ても其様なもの、次に戀女房の

一平と重の井の二役の氣のかはりど、これまで手練有りし女形風に申分なきに我を折らせて、只餘日なきを殘ねんがらせ、とうとう首尾よく一杯の歸京故、顔見せは出ずして安永九子風吉三郎終る、三升大五郎終る○同十丑、正月より京山下座へ出勤有て、二の替りは若黨兵作と三浦荒次郎の二役、大体の評にて三のかはり、赤城鹽竈にて師直と力彌と天河屋の三役、山良之介梅幸師直は別して受よく、次に非人敵討相かはらずも、正月塲の沙汰のみにて、大に悦ばせ續ての大入、暑中は紀州の方より請招有りて赴き、盆狂言は鍋祭りにて、佐助にて田上半左衛門を殺して、女房お才の供して、敵討に出て、道にて無理に口説、聞入ざるゆへのなぶり殺し、夫より立身しての關寺の隣同士に、敵の立合も皆逸風このかたの仕打と悦ばせ、天明元丑小川吉太郎終る、大谷友右衛門終る、三升他人大五郎改○天明二寅年も同座にて顔見せは榮種御供も、大坂にかはらず三役ともに、評判ますく仕當て、二の替り和田大八を當、夫より忠臣藏出て、師直と山良之助定九郎は今少し仕様もあらんどもいへども、山良之助も若きにしてはど大體評よく、師直は遙にまされりこの沙汰、續てひらがな松右衛門大體にて、梶原平次



は是までの外々の仕立と違ふて、大名の二番息子のは仕打を悦ばせ、延壽梅亭、重忠梅亭、源太來芝、千鳥其答、○東の座長五郎八百藏、○西の座長五郎八藏、長吉儀右衛門、○關其吉双蝶々にて放れ駒長吉、ざんぐりと角力もやりかねぬばかりにて、角力取にてなき氣持、出來たれど入かひなく殘念、東鑑朝比奈評能く、物卿の伴左衛門さたよく、千兩幟の下羽川すぐれず、猶も妹春山の深七を大に出かし、かし、狂言の福清など存の外氣持輕く、何となく見ごゝろよく、近江源氏にては佐佐木四郎左衛門、和田兵衛と母みめう三役ともに沙汰よく、佐々木三郎、左衛門梅亭、坂東三津五郎、一代か勤大に當り、坂東三津五郎終る、二代日坂田半五郎終る、勢ひ月々にまして、天明二寅申山文七二世同三卯年も、京中山來助座、顔見せ山岡惣太にて、安壽對王御臺とも賣わたす場より、二役角田川の追納なども大體ながら、彼勢ひつよく此比並ぶものなく、二の替り衆の鳴渡に、家老山瀬織部と成て、後幻術にて皆殺し後安田山城がはかりごごにかゝり、後網を落され、三役早替りにて、若黨洞八主人の最期の介藉せんと寄りて、玉兎集を受取て、忍び落ての仕打を當てより△極上上吉と成て、するほどの事評よく、此秋大坂角の座助に下りて、鬼一法眼三略卷に、鬼若丸甚見へ仕打とも類な

く、次に鬼一の役、少し手に合はぬといへども、又是程にする人はないともいはれ、四番目大藏卿は、四の口ざつとしてよく、切に少し所作ありて、勘々由を殺してよりもよく、始終淋しからず、次に三十石にて、川浦瑞見と神道源八の二役、奥山との出合に、寂しき共云はれても、苦にもならぬ持前の仕打、次に千本櫻の道行と、四ツ目狐の場にて道行、其答との出合むかしにかはらぬ評にて、京へ歸り、天明三卯尾上菊五郎終る、中山來助終る、中山新九郎終る、嵐文五郎終る、市川彦四郎終る、同四辰春は四條に芝居なく、北野下森芝居にて、鬼一にて彼三役にて、北野芝居に斯入りし事、前代未聞とまでも云はれし大入、四月より名古屋へ行て、芙蓉虎寄里虹同座赤城鹽竈にて大入との沙汰有り、此暮、霜月より、勢州桑名に行て、千本櫻を出し、是も桑名には珍らしき大入、同五巳正月より、大坂北曾根崎新地芝居、坂東長吉座にて、戀女房染分手綱にて、江戸兵衛、鷺坂左内、竹村貞之進、沓掛村八藏と、お乳人重の井五役とも、大評判にて、北一枚に悦ばせにて、大に受よくなりて、次に非人敵討出で、次郎右衛門にて當、次に東鑑の朝比奈を添へ、又桂川の長右衛門添心中男となり、大切に濱真砂の所作事、田舎娘

椀久は、親小六が工夫仕置るよしとて、姿よりは又し  
ほらしく、次に土佐繪の奴大に當、次に面賣女夫より  
融大臣にて沙汰、末は簾にて梶原源太で鎧姿にての  
所作珍らしく、大に當て首尾よく京へ歸りしところ、  
京にても其當りし沙汰のみ聞へ待し程の事少し、芝  
居に故障有りて暫く休み、夫より大塔宮旭鎧を出し  
て、無禮講に村上彦四郎にて、藏人三五郎、馬頭武勇萬  
歳にて大に當、二の口齋藤にて、新七、花園國太郎太鼓の場意地の強の  
突張り、手しぶくして三の切、音頭の場とや角いへど  
も若き所なく、三の口より手しぶさの張りつよく、段  
切まで大にこたへさせ、次に金屋金五郎狂言に、伊藤  
空兵衛も評よく、當秋忠臣藏出て、加古川本藏、寺岡  
平右衛門、石堂右馬之丞、天河屋義平四役、大に沙汰  
よく梅幸追善として、由良之介  
役、美雀勤、師直七五郎○同六年は、子息嵐秀之  
助を座本として顔見せ、北條時頼記に三浦彈正役思  
ひの外面白からず、切に七寶濱真砂の所作事に、奴の  
仕立大に受よく有しに、入のかひなくして殘念、次に  
菅原に覺壽と松王の二役、前に替らず甚評よく、弓削大助  
新七、二階堂儀右衛門、原田大郎來助  
いく世國太郎、菅相丞山下八百藏是より△至極上上吉と  
なりて、大坂堀江市の側にて、正月より大塔宮旭鎧を

出し、齋藤太郎左衛門役、馬頭十岐藏人二三場とも大評  
判に、見物に肝を潰させ、四段目殿の兵衛にて、其容  
この所作少し、勿論序切万才も彌沙汰よく、次に秋葉  
權現にて日本駄右衛門、遠州幸四郎かたり場と宿屋  
場も大体評よく、夫よりつゞれの錦にて、春藤二場と  
もかはらず沙汰よく、夫より道頓堀へ積りても、釜が  
淵の五右衛門大當り、藤馬之丞幸四郎是  
切にて江戸へ歸る國性爺合戰、和  
藤内の役、二の口は茶の布子故、ちこ和藤内めかぬと  
もいへども、貝盡しの和らかみは格別、虎の場より三  
の口切とも、古風を守りし仕打と悦ばして、次に博多  
織にて、船頭小平次由男役も大体の評にて、後山姥を  
出し、子息秀之助快童丸としての仕打、此年親小六隠  
居して、法名是心といひしも、八月廿二日に行年七十  
七歳にて、目出度黄泉の道へ送られし、其孝心いふば  
かりなくも、夫より金毘羅へ下り、天明六年松本幸四郎、岩  
川湊元服、新四郎と成、嵐  
小六終る、中村富十郎終○同七年冬坂東岩五郎座へ出て、  
顔見せは菊地金藤、次の和らみ梅幸の姿を顯し、間の  
物伊賀越狂言唐木政右衛門役、鎗の傳授も由男流な  
らず、一流ある仕様に我を折らせ、次に大切眞顯記  
に、序眞柴久吉の役、殊之外見へよく、取捌きの仕や



うざんぐりとし格別よく、毛谷村六助役、團太鼓の所作の間は甚出來たれども、今では何でもないやうにも思はれたり、一味齋母もよくはあれども、榮種御供の覺壽程にはなく、先三役ともに評よく、切に用明天皇の鐘入所作にて、後傾城姿も受能、夏は長州三田尻とやらんへ下り、夫より下の關の方を廻り、盆後より京都芝居へ出て、苗字も叶と改、眞顯記を出して、一味齋の役と四役にて大に入を取、土地のめいりしを引立て我を折らせ、殊更切の角力は、國五郎との裸の見事さ、次に釜が淵の石川五右衛門にて、又候大入めづらしき程の繁昌にて、太切用明天皇鐘入の所作大古終る、二代目藤川八藏終る、中村仲藏江戸より角の座へ登る。○同八申年、布袋屋梅之丞座にて顔見せ、堀川夜討狂言にて辨慶の役、續て沙汰よく、切に其客來芝三人釣狐の所作は、少しのあしらひばかり、同師走又も堀江市の側へ、凡一座下りて同堀川夜討の辨慶、又々大坂にての評判にて大入、四番目藤彌太は左ほごにもあらねども、若い仕打ばかりにて、切三人の釣狐の所作、夫より道頓堀嵐文吉座へ出て、ひらがな松右衛門と平次景高前にかはらず、

延壽十藏、重忠十藏、源太三五郎、千鳥國太郎 次に薄雪の腹切場は、幸崎伊賀守

の役も大休、夫より赤城鹽竈にて、園部兵衛十藏、赤城鹽竈五郎國太郎師直と力彌ますく、評よく、京にてせし五人切かんばんは出たれども、狂言は出ず、當末二代目中村十藏終る、嵐七五。○同九酉年、市山太次郎座に住て顔見せは、例の鐵孫三郎の役なり、狂言の嚴重に極りしも、大立物のしるしを顯はし、次に問のもの物ぐさ太郎、扱看板が出ると、町中一統の案じも、是までおかしみは大藏卿ばかりにて、外にないがこの思ひも、上手になれば仕様はさまぐ、由男流をさらりと流せし工夫は、さすが立物丈の事と、見物は勿論樂屋までも、初日の夜の安堵勿論二の口の仕やうは軽くして、三の口はてつとりとした仕打、三の切に成て利休の仕打は驚き入つたと一統の受も、其安心と俱に云ひなしての悦び、伴左衛門役は、是まで度々つとめしゆへ、うまみをぬいてせし仕やうは、大に氣持は見上たれども、ちとさうり過る故、若手の見物は夫程にも思はず、次に加賀屋歌七、一世一代のもてなしに、薄雪に團九郎は、日本一といふても大事な輕さにくみに見へよく、てつとりとした仕打に見所多く、大至極上上吉と成、夫より小野道風青柳硯三切まで、小野道風六



爲十二の口大に仕打を出かし、二の切猶場の淋しきを

引立て、一入見心よく、次に大門口鎧襲に、齋藤庄九

郎の油はかり、昔の訥子當狂言を其後梅幸つこめし

故、今少しともいひ、夫より京へ登りて寛政元酉年淺尾爲十郎江戸へ初て下

る、此冬三升徳二郎元服して立役と成○同九酉年又も市山座にてけいせい

北國曙、柴田勝家役にて、大徳寺焼香場にて耻辱を

請、立歸る所は外に仕人はない程の事、二役奥方小谷

の方は、大体見へ花やかにてよく、三役淺井新三郎は

さしたる事もなく、關羽の靈像は見事ながら、顔が赤

過るの、首がちいさいのとさたもあれど、今に繪姿を

はやらせ、夫より又上京有りて、夏より安達が原にて

安倍貞任ながら、桂の中納言の公家姿評よく、四番目

一ツ家の婆は、親の記念とも思ひ出され、夫より木下

蔭狹間合戦を出し、大に名譽の者ともいはれ、來作の

役を片岡へ譲りて、齋藤道三を勤め、竹中官兵衛と石

川五右衛門の三役、誠に古今の出來犬清三五郎、千里八百藏、關路國太郎、久吉

儀右衛門次に戀飛脚に、梅川に其答、忠兵衛に眠獅つこめ

たれども、不評にて五六日してつれの錦を替りに

出し、則春藤次郎右衛門にてかはらぬ評判加村宇田右衛門儀右衛

門、高市武右衛門新七後に市川團藏、出勤にて高市役なつこむ此度は不殘役割行届きし故、

思はずも此役をせしめて、道行對の花かいらぎに佐

兵衛の役、來芝二人の花やかさをあらはして○同年

九月より、大坂ばかりを一世一代を勤度と申も、親小

六五十に成たらば引ヶよとの言葉、せめては三都の

一つなりとも、其遺情を守り度とて下りしが、長事も

御退屈とて、先其事なく、久米仙人の四ツ目五ツ目守

彦役、大体ながら子供のわやくなるを見るやうなご

ともいはれ、五ツ目久米仙人にて鳴神上人の役、これ

も練の鼠衣にて淋しきとも云はれ、古海老藏の云ひ

置し處をはつして軽くせんと思はれしが、思案の喰

違歟、始めはあまり勝れし体にもあらざりしが、九月

九日より右一世一代なる看板出し、木下蔭狹間合戦

大切に、山伏攝待を出されて來作の役、成程ざんぐり

として見よく、次に竹中官兵衛は舞臺へ出、初めてよ

りの出來とて見へよくして意地つよく、後犬清には

かられての無念の有様、骨身にこたへて軍師の格好

から、手負の俤昔よりたごへる役者もあらじとぞ云

はれ、次に石川五右衛門若ふ見せて手づよく、親子の

情をこめて位官の姿よく入りて、御殿の場は左ほご

にもなく、犬清、るは、千里のしほ、關路徳次郎、久吉他藏切の所作事は佐藤の老

母の役しつゝのしほ、江田源にて、先奇麗にて夫より旗揃の扇の手も、中々所作事といふにもなく、義太夫ぶしに合はしての雲上さにて淋しからず、誠に古今未曾有の役者なりとも云はれ、夫より口の場をぬいて、娘景清の三則景清の役、是又能仕立の出端の見へよく、切までも彼てつづりした愁にて、切に鐘入を付て、目出たく上京の筈の處、中の一座より角の座は稚き時の初舞臺のつこめ處ゆへ、一世一代も納りしが、中の座は又元服の舞臺初めに下られし一座なれば、中の座の顔見せの助として出くれよとの一座の頼みに、據なくけいせい兒々淵を晝狂言に出す、是は先年天明二寅正月、京にて勤られし狂言、其時の相手なればとて、澤村其答を呼下し一座にてつこむ、眠獅捨若の役にて、兒が淵へしづめにかけられ、石地藏を脊負ながら、淵より上る幕見へよく、すごひこの評にて、後になぎさの中將となり、かたりに來る場の人品骨柄、さりとては奇麗な仕立にて、仕打も先年よりははるかに見増り中の座へ市川八百藏、吾妻藤藏、江戸より初て大坂へ來りて、所作事をつさめ大當り大切に化粧六歌仙とて所作事、小町小野國太を口説落さん事を頼まれて、五人の姿にかはり

て、始僧正遍昭の時代の襲、次に文屋康秀の少老ての戀事もざんぐり軽くせられ、次に業平小町二人の所作の和らみはねぶつても見る事ならぬ雲上に安らけく、次に喜撰法師の墨衣の所作事、氣持と姿のかはりめ、身の取まはり軽く、大ひに肝を潰させ、次に大伴黒主にて、實惡の逸風仕立は常の事ながら、顔見せ狂言の仕打も軽く取納、目出度兩座共大評判の舞臺納め、小六在世にあらば、悦びもといはぬ人もなく、蟲負連中船の見送りに、祝ひませうしやんしやん、夫レ雛助稚名は岩次郎とぞ、寛延元辰年父に付て東武へ行、其年八歳古栢庭父小六懇意に付、岩次郎生立只ならず思ひ、雛介といへる名を付やる、小六暫く俳名となして、初舞臺より譲るごぞ、さればこそ暫くの江戸逗留にも、木挽町を勤るを、堺町にて今の三升口上を云、叶の字を圓に取なし付しもかゝる故也、栢庭を名付親と崇て、元より父に孝深く、卒に海老藏の髭にとまりて、かゝる羽をのす物ならん共思はるゝぞかし、

寛政二年

寛政二年庚戌正月吉日

書鋪

八文字屋八左衛門板

むかしより歌舞妓役者の中に、坂田大和山はやつし  
形の開山と唱え、京右衛門は都の實事師に名高く、團  
十郎は東にて荒事の祖と仰き、藤川は實惡の名人、  
片岡は敵やくの上手、金子吉左衛門は道外に妙を得、  
杉九兵衛は花車形の達人、小野川は若衆形の手たれ  
ものごほめられ、權七姫は若女形にて惣藝頭と稱し、  
其後上手名人とよぶものかぞふるにいとまなく、中  
頃に至りて栢庭訥子新四郎平九郎路考慶子など、皆  
それ／＼の持前の役にて、見物に感心させしに、當時  
ひな助なるものは、若女かたより出て立役と成、その  
余の役々を何やくにてもなし、世の人にたんのうさ  
せ所作事まで自由になすは、凡かふき狂言はしきり  
しより、このかたの名譽の人と呼ものなりけるに、去  
年の冬親の遺言を守り、いそしに滿る春を待ず、浪花  
の舞臺の一世一代を勤めて本意をこげしも、時に叶  
ひし譽れといふべし、よて初ふたいよりの役々の次  
第をしろして、四方の御好人の眠りの枷にそなへん  
と、寛政ふたつ春雨の頃筆をこるものは、八文舍自笑  
これを述る、



西澤文庫傳奇作書追加上之卷目錄

一妻敵討狂言の話

一伏見京橋喧嘩の話

一扇屋夕霧太夫の再評

一夕霧文書并文の寫

一簀笠雨談双吊物の畫

一阿波の鳴戸夕霧口說の文

一六樹園飯盛夕霧和文

一其磧自笑絶交の話

一操年代記の拔書

一淨瑠璃太夫受領號

一女鉢の木出語出遣の圖

一同一段正本の寫

一慶子追善摺物の寫

一後日の鉢木正本の寫

凡十四ヶ條

西澤  
文庫傳奇作書追加上之卷

西澤綺語堂李叟編

妻敵討狂言の話

享保二酉年八月竹本座淨瑠璃に近松平安堂が作にて、鍵の權三重帷子上下二段物は、妻敵討の書物の始と見へ、國は因州鳥取にて、藩中淺香市之進は、武藝の外に茶道を嗜み、一流の奥義を極め、眞の臺子の飾付は、印可の卷の認め一子相傳の外に傳へず、今度にて若殿御祝言相調ひ、お國に於て近國の御一門方を振舞に付、市之進の弟子の内に勤せさよと仰有、笹野權三郎は年若けれ共、好の道ゆへ此印可を受て役を勤めんとす、市之進妻お才は三人の子持にて、惣領娘お菊の聲に取たき望あるゆゑ、權三に印可を讓る、同家中に川側伴之丞と云は、かねて淺香の妻に心をかけ、妹お雪と權三とは兼てわりなき中なれば、權三をけのけ印可を受んと思へ共、權三の方へ役目仰付られ無念の余り、夜中淺香の茶室に忍び込、お才權三は數寄屋に入て奥義を傳ふに、お才妬ふかき氣質ゆゑ、

娘にかはつて愀氣をす、深更に及び男女二人茶室に入ての事ゆへ、伴之丞兩人の帶をもつて不義密男也と、舅岩木忠太兵衛へ告ゆく、兩人詮かたなく此場を落行、下の卷市之進江戸より歸り、三人の子を舅に預け、妻の弟岩木甚平諸共女敵うちに出立して、伏見京橋の上にて首尾能權三お才を討とる書り、文中には昔噂の高かりし様に書あり、此比有し噂ものと思わる、各の年數を文中にのせて、色情の淺深をのせたるは近松の働妙也、淺香市之進<sup>酉年</sup>四十九才女房お才<sup>酉年</sup>三十三才<sup>酉年</sup>三十五才<sup>酉年</sup>お才娘お菊<sup>酉年</sup>十三才<sup>酉年</sup>こ有、此狂言出たる事も西ゆゑに然書たる物か、是は都てお三茂兵衛の昔曆の裏を仕組たると見へ、何ぶん作意には自在を得たるもの也、され共常嘉永四亥年迄に、百三十五年ともなる古狂言ゆゑ、川側伴之丞の妹お雪の行衛なご立消となり、仕組足らぬ所も有、是より廿六ヶ年後、歌舞妓狂言に丹州笹山妻敵討と云外題、角の芝居春狂言に出たり、又重帷子より三十三年後、寛延二巳の秋中の芝居にて、高麗橋距躍念佛と云外題出たり、此角外題に享保二丁酉年七月十七日、今年卅三年に當妻敵討と記せり、然れば重帷子の年なれば、伏見京

橋にて妻敵討有し事明らか也、扱此高麗橋にての妻敵討は、役割重帷子とは變り、密夫は敵役なり、池田文治に民谷十三郎、夫政井宗味に山本小平治、女房おかねに富澤喜代崎との役割にて、此余に紺屋吉兵衛片岡仁左衛門、合羽屋九郎三に嵐三十郎と、二人の男達有て六段續の狂言也、是は此年に高麗橋にて、實に有たる事を鍵の權三の卅三年に當りしゆへ、め敵討といふ事を、角外題に出して仮たるもの也、

## 伏見京橋喧嘩の話

伏見京橋の喧嘩は、いかにも古き事にて、里見伊助といへる俠者の狂言にて、延享四卯年春角にて伏見京橋彌生戰、又安永六丙の盆中の芝居にて、伏見京橋諍質録と云外題を出す、此余此ごろ京橋の外題度々出る、享和元丙年の盆、攝州高槻の城下にて、盆踊の中にて人殺の有しを、名作切籠曙と外題して、中の芝居にて櫓屋お仙里見伊助と役名を呼しは、伏見京橋の世界人名を仮りたるにて、事皆伏見にて仕組たれ共、今誰にても高槻騒動と通稱して、里見伊助は伏見京橋の人名なる事を不知、前に云鍵の權三は伏見京橋、寛延の妻敵討は高麗橋にて、然も兩狂言とも盆踊り

の中にてなり、都で盆替りは昔は水狂言とて、皆水邊を遣ふものから、雷電源八の喧嘩は高麗橋、五厂金は安治川橋、出入の湊は新町橋、故人作者如才なく遣ひたる所感すべし、さればとて五條の橋といへば橋辨慶となり、瀬田の橋といへば俵藤太となり、渡始錦帶橋には陶全姜大内毛利の時代に遣へり、余戯れに東西花道と舞臺と塙の中へ、四ッ橋を躍上、世話狂言の仕組兼て腹藁あれども、いかに大道具好の芝居興行人も、頭を、ふるべしと思ひ捨ぬ、

## 扇屋夕霧の再評

夕霧の事跡は、前々の編に擧たりといへ共、もれたるを再び爰に出す、東都居館園の主人が作せしと云、夕霧文章といふ端歌あり、菊永檢校にさづく、菊永津山檢校につたへ、糸に合せて調ぶと云、何九年公界十年花衣氣儘に遊ぶ鶯の發端の辭は、稻津徹空翁が女達磨の贊也、近來東都より出版の隨筆に、吉原の全盛何某が方に價目せられ、九年の面壁は物、はといひしを、英一蝶が女達磨を畫賛せしといふは非也梅に廓の戀風や、其扇屋の金山と、名に立昇る全盛が鶯より梅に廓と波津の廓新町ときかせたる也、扇や金山折屋夕霧と二人の名を混じたる云ふは附會の説なり、俗に扇屋の金箱と褒たる詞にて、霧は山より立のぼるなれ松に柵らむ藤かづら、馴染て戀紫の曉ば也とるべし、松に柵らむ藤かづら、馴染て戀紫の曉の鴉もそれなりに松にし、らむと作せしを、柵らむと思ひ誤るなるべし、爰より近松翁のあわの鳴戸の



藤屋伊左衛門を心にこめ、松の鐘も憎まず、寐亂れ髪のみす

位の太夫に藤をかけた文也

ぼれて、好た同士の中さへも、鳥やれを、こゝら恨むはきぬきぬの情なり、憎まぬこいふは

寛闊なるを褒た仇に別れて丸一年、二とせ越しに音信も

是も阿波の鳴戸、吉田屋餅つき段口話の文句、去年泣て明してか

の暮から丸一年、二とせこしにおこづれなくを云

こちごご、恨を誰に夕霧が明石の浦の朝霧に古歌をかけたたり二世とかけ

しをつくぐと、もたれかゝりし床柱延寶六戌年正月六延寶六戌年正月六

霽没、花岳芳春信女、下寺町淨國寺に墓有、此塚は柳なくとも哀也、鬼

貫の句有、夕霧病床の床柱、近年迄扇屋に遺り有、今廢してなし、日蓮

大士池上本門寺にせんげの時、寄思ひを沈む、戀は浮世の何

かゝりの柱有、同日の論なるべし、思ひを沈む、戀は浮世の何

じやぞいな、達磨さん發端女達の賛あれば後に色事しらぬ

殿達は、玉の盃底がない徒然草色このまね男お前の裾の

本來は、滅てないので有るな物を、しよふ事なしの戀

しらす文意明らかれば云す、おしきかな文政十丁亥年正月、

夕霧百五十回の追善廊中扇屋にて營み摺物として配

るに、古代の遊女の圖を寫し、長山孔寅筆追悼の短冊

に村田春門詠あり、

人ならはなげくをなご、眞木柱、よりそふ跡にな

くさめやせむ

夕霧自筆の文の寫こゝには筆跡を示さず

こゝもごもこのふかんし申候くしくは御めにか

かり候上候べく候

御なつかしき折からよそ御しめしあさからすなが

めりいよくかわらぬ御やうす何よりめてたく

おもひり、此かたとてもおなしいうにいり、さ

れこ此ころは口中いたみそれゆへつとめそこはか

と成り、ごかくはるならではゆるく、ごも御めも

しなるましく候いよくすみもこにてまちわひ申

り、たつ三郎事なをく、せいだし申候いかふご

なしう成り、あわれはるはさらく御のほり候へ

かしおそく御こし候てきのとくにそんし候

十七日

きりか

八十様

參る御返事

此一帖の圖は、著作堂曲亭馬琴か簀篋雨談に出す所、享保

中余が板行の草紙物の寫し也、夕霧沒後四十一年也、

今迄百卅四年と成、延寶六年二月三日より、夕霧名殘

の正月と云歌舞妓狂言を出し、藤屋伊左衛門取田藤

十郎夕霧に桐浪千壽にて大に繁昌し、後寶永六年ま

で夕霧の狂言以上十八度出せしが、皆悉く繁昌せし

と云、是夕霧は浪華第一の名妓、坂田は俳優中の名人

なりしこと、是にてもしるべし、また淨瑠璃にては、

夕霧没して三十三年後、近松門左衛門竹本座にて、夕霧阿波の鳴門と云狂言を出しぬ、此淨瑠璃世におこなはれて、今歌舞妓にも是をする、其口説の文句に

（原本『愛敬昔男』の挿繪一葉を模寫したれども畧す）

去年の暮から丸一年二年ごしに音づれなく、それは幾瀬の物案じ、それゆへに此病、瘦衰へが目に見へぬか、煎藥と練藥と針と按摩でやうくご、命つないでたまさかに、逢てこなさにあまようと、思ふ所を逆さまな、こりやむごらしいごうぞいの、わしが心かはつたら、踏んで計おかんすか、叩ひて計置んすか、是死か、つてゐる夕霧じや、笑ひ顔みせてくだんせおがんです、エ、心つよい胴欲な憎やと膝に引よせて、叩いつさすつ、聲をあげ、涙亂れて髪ほごけ、わけも性根もなかりけり、

右吉田屋の段、口説の文を東都六樹園飯盛和文に書て、栗田信充が夕霧伊左衛門の畫の賛にかへたり、因みに爰に出す、

いぬるごしのしはすより、かそへ見給ふにはや一とせになり侍り、ごぞとしと年をこへ侍れど、おとづれ

をだにしたまはず、さるはいかばかりの物思ひかつもりぬらん、さてなんあいなさもまさりゆきて、かうさまにやせさらばひて侍るを、わきみの御めには御覽じいれぬにや、せんやくと丹藥はさら也、はりのくすしはらごりの人々にたすけられて、からうじてはかなき玉の緒をつなぎごゝめて侍り、けふたまさかに見へ奉れば、あまえてよろづかたらひ聞へなんと思ひ侍るを、なか／＼にうきめみせ給へるは、いかなる御こゝろにか、まろにあだなる心し侍らば、ふみにじりてのみおかせ給ふか、うちたゝきのみしてやみ給ふにや、今はたゞよはりによわりて、なかばはなきひととなりたるなり、ゑましき御顔をこそ見まほしけれ、きづよくおはすこそつらけれど、かきくごきつつ泣わぶるさま、袖たもごには空にしられぬ雨ふりいで、衣にぬひたる玉あられに、さそひて落くるにぞ、こよなきいろをぞぬらしそへたる、

### 其積自笑絶交の話

### 六樹園

八文字屋自笑江島屋其積のとは、既に前集に出せしが、爰に正徳五乙未年正月出版、三都芝居評判記三卷



のうち、役者返魂香京之巻の口に、口上評判作者其磧と書て、此返魂香の作者は、去春も目利講に印候通、八文字屋八左衛門方へ、去る卯の年口三味線と申評判を綴り候てより、年々八文字かたへ仕遣し、去々巳の年まで十五年が間仕候作者にて候へ共、八文字や身がち成仕形有之候に付、去年の春より此江嶋屋かたへ仕遣し候ゆへ、八文字方には去年々素人の新作者をやとひ、右年來の作者のふりを仕、世間の人様へかづけ申候、殊に去冬狂言本の口書に、めつたなる評判出し候とはいか成申分に候哉、去年御嘉例の作者の評判は、此返魂香と申本に御座候間、外題御吟味なされ御求め可被下候、尤八文字方々出申評判本、其外風流本共に前の作者とかはり、素人の新作にて御座候、自今は江島屋と申本の方は、御なじみの作者に紛無御座候間、珍敷趣向ども御よみくらべ被遊御覽可被下候、紛敷申者有之候ゆへ御斷申上候と有、是より六ヶ年後、享保五子年正月出版の評判記、都の花笠の序に、兩家の睦せしと見へて、八文字自笑、作者江島其磧、と兩名並へ、いつもの判を押けり、次に自笑問、是く其磧、一旦は世間の人様もおかしう思召ほ

ご筆先でいさかふたが、今は墨と硯の濃中となつて、互の作は外へ出すまいと相仕の契約、嘘でない本屋の商賣をする身が、此比大和山の顔みせの本に、作者其磧と二色迄名の出た新板の外題が見ゆるが、ありや人おごしの犬、其磧か子細がきゝたい、其磧身にとつては嬉し悲しの無才の僕が述作の草紙を、世間にお尋ねなされ下さるゝは本望の至り忝ない、一度そなたと一ツ心になつた上に、又外へ愚作をつかはそふ筈がない、今つくく思ひ出せば、前々書捨の反古共を置いて來たが、其取あつめ物に書そへて、其磧作とあらはし、あの方の評判本くるみに紛らはしう見せた物じや、自笑と一所に名書のないは、愚作と必思ふてたもるな、そなたの不審をはらそふ爲に分て斷を申ス、猶此以後も、外へとては山をあげた抱瘡と同じ事で、書てはならぬいひかはしがみつちやとなるはさて、子年正月吉日八文字屋八左衛門よりまや市良左衛門板と出したり、先の絶交の比の本は、嘉永四亥年迄百三十七年となり、和睦の本は百三十二年となる、近比の小説讀本の口上など、違ひ、昔の文には飾らぬ質朴なる事感すべし、



## 操年代記の拔書

「操年代記は新群書類從第六中に全本を收められたる此の拔書は畧す」

## 女鉢の木出語出遣ひの圖

操年代記下の卷に左の圖有、寫して其頃の容をしらしむ、圖は畧す此比の出語りに、臺なく舞臺に氈を敷、木偶に手摺も見えず、平舞臺に道具飾付其上にて出遣と見へたり、シテ豊竹上野少掾<sup>越前</sup>ワキ豊竹和泉太夫、三弦野澤喜八郎、最明寺人形近本九八郎、白妙木偶藤井小三郎、玉笹人形中村彦三郎、此狂言にて數多の徳分つき、北條藏とて土藏建たる事珍らしき當り狂言也、

## 北條時頼記大切女鉢の木 西澤一風述

行衛定めぬ道なれば、ノ、ノ、こしかたもいづくならまし、是は一所不住の沙門にて候、我此程は信濃の國に候ひしが、あまりに雪ふかく成候程に、先此度は鎌倉にのぼり、ざせんにこもり春に成修行に出ばやと思ひ候、やごりもがなと夕顔の、それにはあらぬ小家の軒、たる木まばらにかたぶきし、雪折竹のあげ簀戸や、主はひん女と思しきが年も三五の玉帯、ひさしの

雪をかき落し、おとせばゑりに袖口に、首筋もごにひやひや、ア、つめたやと手をふくも、下主近ふしてなをやさし、最明寺殿まがきにたゝすみ申くお女郎、越後より下總の檀林へ通る所化の僧、今日の大雪先へも跡へも参りがたし、すの子のはしに只一夜頼みまするご有ければ、ハア、おやすいことながら、主のるすに私がごめしまするもいかゞ也、わきをお頼なされませ、おいとし様やごあいきやう有、ムウ主のおるすごは扱はこなたは御内衆か、いゑく主はわたしが姉智、此比他國いたされて主といふは姉様、ナ、然ればこなたも主同前、江口の君がかりの宿に心ごむなと申たは、それは色あるやさ法師すみのおれか木のはしかといふやうな此妨主、色事の用心ならば氣遣有なごの給へば、娘もにつこご打笑ひ尤色といふ物は、みめかたちごは云ながらごふやら時のはづみでは、鼻そげでもいぐちでも、油斷がならぬと走りこむ、天下をさばく御身にも、此返答に行暮てイミ給ふぞ殊勝なる、世の中は、何か經世が留主住居、妻は手足も土大根蕪ぐなもつみ持て、歸る山路の白妙に、アふつたる雪かな、いかに世に有人のさぞ面白

ふ見給ふらん、それ雪は鷺毛に似て飛でさんらんし、人は鶴氅を着て立て徘徊すといへり、されば今ふる雪も、もと見し雪にはかはらね共、我は鶴氅を着て立て徘徊すべき、袂も朽て袖狭き、細布衣陸奥の、けふの寒さをいかにせん、あらおもしろからずの雪の日やな、最明寺殿是こそは以前の女が姉ならめと、なふなふ主のお方に候か、御らんのごとく旅僧の身、お宿の御無心申せしかど、主のおるすと有し故、待もふけたる御歸り、前後をばうずる大雪、今宵計の御めぐみ、頼入とぞ仰ける、げに／＼やすき御事ながら見苦しき賤がふせや、何とてお宿と申べき、いや／＼旅と云三界の、家を出たる世捨人、草の薙も我爲の、玉の臺と有がたし、是非に一夜との給へ共、あれ御らんせ我々夫婦兄弟さへ、住居かねたる躰なれば、とゞめ申さんやうもなし、是より十八町あなたに、山本の里と申てよきとまりの候へば、暮ぬ間に一足も、急がせ給へと云捨て、庵の内へぞ入にける、なら曲もなや、よしなき人を待つるよ、浮世の人の情なきも、我誤りと返りみて、あゆみつかるゝ計也、妹の玉づさ涙ぐみいたはしや御出家様、最前お宿と有しかども、姉様の心

いかゞと存、外にたゞせ置ませし、かく落ぶれしも前世の因果、責て出家にちぐうせば、經世様の武連もひらけ、後世の爲にもわるい事、なされた様にはよも有まじ、ごめてさへしんせませば、別に馳走は入まいと、わしや思ひますと云ければ、チ、やさしやよふぞ氣が附た、是程の大雪に遠くはよもやと表に出、なふなふ旅人お宿參らせふなふ、余の大雪に申事も聞へぬよの、いたはしの有様やな、もとふる雪に道を忘れ、今ふる雪に行方を失ひ、一ツ所にたゞすみて、袖なる雪を打拂ひ／＼し給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや、駒とめて袖うち拂ふ影もなし、さのゝわたりの雪の夕暮、かやうによみしは大和路や、三輪がさきなるさのゝわたり、是は東路のさのゝわたりの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく侍へど、一夜は泊り給へやなふ旅の僧、旅のお僧と招かれて、それは嬉しき心ざし、かりの浮世にかりの宿、返初ながら値遇の縁、一樹の影のやどりも、此世ならぬ契也、それは雨の木影是は雪の軒ふりて、うき寐ながらの草枕、是へこそはせうじけれ、いや玉づさ、せつかくお宿と申ても供養いたさん物もなし、お淋しから



ふがどふせふぞ、姉様幸ひ粟のまゝ、さもしけれ共お慰どひつ取出せば、ア、そんな物何のいの、折節わるふ九献もなし、お菓子はないかと夕霜の、おかぬ棚をやさがすらん、是御兩人、旅にしあれば椎の葉にもるごかや、粟の飯とは日本一の醍醐味、御馳走に預りたしこの給へば、やれゝそれはお嬉しやせめては何もきれいにど、萩の折箸かはらけも、よし有げ成もてなし也、耻かしやお僧様此粟と申物、古へ我夫世に有し時は、歌によみ詩に作りたるをこそ承れ、今は此粟をもつて、命をつぎさふらふぞや、げにや盧生が見し、榮花の夢は五十年、其かんだんのかり枕、一酔の夢の覺しも、あは飯かしく程ぞかし、あはれやげに我我も、うちも寐て夢にも昔を見るならば、慰む事も有べきに、なふ御らん候へ住うかれたる古郷の、松風寒き夜もすがら、ねられねば夢も見ず、何思ひ出の有べきと、そゝろに涙をうかべける、旅僧も哀れに催され、墨の袂をしぼらるゝ、更行まゝに夜寒さまさりひへ渡る、何をか焼火に焼てあて參らせんや、思ひ付たり我夫世に有し時鉢の木にすぎ、數多の木をあつめ持れ侍ひしを、ヶ様のさまにおごろへいはれぬ貧

の花ずきと、皆人々に參らせて、今は漸三本残て、あの雪を持たる梅櫻松、わきて夫の秘藏なれ共、今宵のもてなしに是を焼火と立んとすれば、ア、しばらくしばらく、是は思ひも寄ぬ事、御志は有難けれども、重て世に出給ひての御慰、無用になして給われとよ、いやいや、とても此身は埋れ木の、いつのさかりにいつの花、いつの時をか待べきぞ、唯徒成鉢の木を、御身の爲に焼ならば、是を採果汲水の、法の薪と思しめせ、しかも誠に雪ふりて、仙人につかへし雪山の薪、かくこそあらめ我も身を、捨人の爲の鉢の木伐共よしや惜からじと、雪打拂ひて見れば面白や、いかにせん先冬木より咲初る、窓の梅の北面は、雪報じて寒きにも、こと木より先さきだてば、梅を伐やそむべき、見じといふ人こそうけれ山里の、おりかけ垣の梅をだに、情なしと惜みしに今更薪になすべしと、兼て思ひや櫻を見れば春毎に、花少遅ければ、此木やねぶると、心をつくしそだてしに、今は我のみわひて住家櫻伐くべて、火櫻になすぞ悲しき、扱松はさしも實枝をため葉をすかして、かゝりあれと植置し、其かひ今は嵐吹、松はもとより常盤にて、薪となるは梅櫻、伐く



べて今ぞ御垣守、衛士の焼火はおため成、よく寄てあ  
たり給へや、なをざりならぬ御深切、寒さを忘れ、は  
だへは彌生きさらぎの暖氣にあたる梅櫻、花見る心  
地候ぞや、扱しもいか成人の御行末、男主の假名あざ  
名は何か申候ぞ、自然の時のお爲にも、何か苦しう  
候べき聞まほしと仰ける、ア、人がましやな古へを、  
名乗もさすがおもてぶせ、さりながら此上は、何をか  
さのみつゝむべき、是こそ佐野の源左衛門經世がな  
れる果、哀れと御覽候へや、扱も過にし建長四年、鎌  
倉は北條相摸守時頼公の御捌き、夫の經世は將軍の  
御供して在京の其跡の事、經世が父我爲には舅、さの  
の兵衛政經、故もなく人しれず、やみ討に討れ給ひ  
しを聞とひとしく我夫は、取て返し下向の時、一族  
の讒によつて鎌倉へも入られず、道より直に御勘氣  
さて、所領しやうるん召上られ、經世親子が累代の知  
行、一所も残らず伯父源藤太經景に押領せられ、生が  
ひもなき此有様、親の敵も大かたは推量にまがひな  
けれ共、實否を糺し討ん爲折々他國に身をやつし、跡  
ふりかくす雪の庵、雪は春にも消殘る、夕べもしらぬ  
ものゝふの、身の上あはれみ給へやと、さめぐとこ

そ泣居たる、實々それは聞及びたる物語、何迎鎌倉に  
上り其沙汰は候はぬぞ、さればとよ夫婦もさは存ず  
れ共、運の盡とて最明寺殿諸國修行に出給ひ、万機を  
いろはせ給はねば、天照神の岩戸にこもり、月日の光  
隠れしごとく、理非の別れんやうもなし、さりながら  
かく落ぶれては候へ共、取傳へたる梓弓八十梟はは  
りつめて、あれ御らん候へ、是に武具一領長刀一枝、  
又あれに馬をも一疋つなひで持て候、經世常々申せ  
しは、只今にてもあれ鎌倉に御大事有と聞ば、此具足  
取て投かけ、鏑たり共長刀かいこみ、やせたり共あの  
馬にかけ鞍置てふはと乗、女房に口とらせ一番に馳  
參じ、御着到につらなつて扱合戦始らば、敵何万騎有  
迎も一番にわつて入、手に立軍兵より合打合、ぶんど  
り高名譽れを顯はし、一方を責やぶり君のお馬のま  
つさきがけ、思ふ敵の大將とむんずと組でさしちが  
へ死んず身の、エ、口をしや此儘ならばいたづらに、  
きかんにせまりしなん命、何ぼう無念の事さふぞと、  
兄弟かつばと伏しづみ泣くごくこそ道理なれ、旅僧  
も至極のことはりに、衣の袖をぞしぼらるゝ、よしや  
浮世のうきしづみ、かくてははてじたい頼め、我世の

中にあらん限りは後の誓ひを願ひ給へやと、詞を残し残る夜も明方ちかく隙しろく、雪もおやめばさらば迎、いこま申と出給ふ、かゝる所へ佐野の源左衛門經世、古郷へ歸る錦の袖汗にひたしてかけ戻り、ヤア女房鎌倉にて敵源藤太に出合、首取て歸りしぞ、玉づさ諸共悦べといきをひ切て呼はれば、兄弟夢かと嬉しさの、そゝろうき立お手柄く、僧を止めて供養せし、佛の方便神の力、共に悦び給はれど、旅僧に語れば、重疊く、何をかつ、まん我こそ時頼入道最明寺道崇也、汝が慈悲心ふかきをかんじ、天よりさづくる幸有、こよひ寒氣をしのぎしは梅櫻松三本の、なさけにあたふる三ヶの庄、加賀に梅田越中に櫻井、上野に松枝合せて三ヶ三庄を、子々孫々にいたるまで相違なき條安堵の御判、三人はつと嬉し顔、中になを經世はく、悦びの眉を開きつゝ、さの、舟橋取はな

將其時の着到にちされ具足の武者ふりは思ひの外な

焚火の返報情にこもる三木の其名芳し經世が忠臣

五十回忌の追福も實光陰は  
矢車の紋所其縁による段書は  
加賀の梅田に寄御馴染の☆の替紋  
越中の櫻井に寄御存知の✿の定紋  
上野の松枝に寄御最負の☁の詔紋

よせて  
會稽雪後日鉢木  
本領合  
三ヶ庄

扱其後の雪降に細布衣のやさ姿は以ての外な

子ゆえの執着簞にのこす三人の其名懷し白妙が貞心

れし、本領に安堵して、お供の装束はなやかに、さくら榮へる北條氏、末代迄も香ばしき、梅の花びら五代めの、君が歸館を松の色、千秋樂とぞ祝ひける、  
豊竹越前少掾高弟豊竹筑前少掾と院本に奥書有、初編西澤の條に出せし、會稽雪後日鉢木の狂言は、天保八酉年九月中の芝居にて、故人中村慶子が盧生が夢の五十回忌の追善狂言によからんと、其益替り北の新地芝居にて、紅桔梗女團七の狂言大當りせしゆへ、九月始當り振舞にと、能勢妙見宮へ詣、多田の温泉に浴し、兩三日滯留の内、此後日鉢木に書たる也、其の摺物に、

造り物平舞臺向ふ一面の石垣城の塀、正面に見事なる大手の門、都て鎌倉城廓の體螺の音、遠責にて幕開くト右門の兩脇に又十郎友藏小手脚當陣羽織にてり、敷軍兵大ぜい隨がへ左右に立別れ陣床几に懸り居るやはり遠責生殺しあるべし友藏何と二階堂信濃の助殿、我君時頼公にはごふい

x



乍憚口上

さいつ比摺物にて御披露申せし元祖慶子五十回忌に  
何をがなと思ひよる家の藝の中にも北條時頼記は故  
人西澤一風の作にしてすでに淨るり外題角力の大關  
とまで世にもてはやされし名譽の狂言なれば此女鉢  
の木と定め侍りぬされど古めかしきもいかゞ今  
西澤一鳳が増補をせられしも所縁盡せざる所にして  
先祖も嘸嬉しからめととりあへずこたびの手向ぐさ  
となし侍るは身のつたなきをかへり見ずおこがまし  
き業ながら初日より賑々敷御見物に御入らせの程を  
吳々もねぎ上奉るになむ

一枝をたむける菊の白たへに昔をしたふ鴈の玉づさ

ふるき家名をつぎて追悼をつとむる

今の慶子がけなげさをよろこびて

名をあげし佐野の常世が狂言の後日を弔ふも手柄也けり

中村 富 十 郎

中村 玉 助

ふ思召にや、今日俄に陣鐘太鼓を亂調にひっかせ、狼  
烟をあげて關八州の大名を、此鎌倉へお召被成るゝ  
は、いかゞな義でふらうな又十郎是は安達彌九郎殿の  
お詞共覺えませぬ、都て治世に有て亂を忘れぬ武士

の心掛、夫ゆへ太平の御代に鷹野猪狩の催し、殊に賢  
君と呼ばれ給ふ時頼公なれば、深き御賢慮有ての義と  
存られます、夫は格別先伊豆相摸の諸大名は、大半若  
到殘る六ヶ國はいまだ相見へませぬ友藏いゝゝ觸

鎌倉御下馬先勢揃の段  
佐野の庄經世屋敷の段  
弓削の大助 中村芝翫  
佐の、松喜代 中むら梅太郎  
同、櫻之介 嵐、吉太郎  
同、梅太郎 嵐、三津吉  
原田六郎 中村歌七  
佐々女小五郎 中村又十郎  
二階堂信濃の助 中村又十郎  
建部源藏 中村又十郎  
伊具の十郎 淺尼大藏  
安達彌九郎 淺尼大藏  
河野左衛門 中村蘭九郎  
島山軍藤太 中村芝翫  
羽山丹治 中村芝翫  
三浦監物 中村東藏  
源藤太經景 淺尾與六  
北條時頼 中村歌右衛門  
西澤一鳳軒



を廻して、けふの着到追付軍勢も揃ふでト違責打込にふらふて、向ふはたゞ歌菊鎧がづら鉢巻り、敷なりにて、軍兵一又十郎あ人兜を持、旗持一人付そひ出て、花道能所にてしやんと留るれ見られよ、安達殿いまだ若木角髪亂れ出立ゆゝしき花の武者、何人の御子息なるぞ、奥床しふ存ぞる友藏誠に迥れの若武者、その名を承わつて着到に印さん、何とく歌菊さん候某は、月の武藏の兒玉黨、團扇指物改て祇園守も家の紋、旗の印も御存の、父は相州桐が谷、ませたやつめとお呵りもかへり見ず、此着到の數に加はり、何れも様や大將の、下知に随ひかけまくも、神か佛か釋迦が谷、それに續た領分の、苗字もその儘佐々目の小五郎吉晴といふ若輩者、宜敷御推舉願奉る又十郎ム、扱は佐々目の御子息よな友藏此彌九郎も同じ氏、同じ流れの一族なれば、よろししく取なし仕る、先城中へ早くく歌菊然らば御兩所後刻又十郎、友藏ムれ歌菊ハツト又違責きびしく軍兵二人づれ門の内へ入又十郎適れ末頼母しい小五郎殿ではムらぬか友藏左様でムる信のの助殿、あれ御覽被成ひの内ト向ふ戸屋向ふへうたすは、慥に常陸の御人數か、但しやはり鎌倉の軍勢かト此内又見り又十郎こちらは上總下總の一黨、あれくきら星の如く參着又十郎誠にいさましい出立じやなアト又違

込にて、花道が東藏芝藏壽郎大場橋懸りト蘭九郎又十郎播藏助六右四人づい、何れも陣立にて或は半切陣羽織銘々好の形り、旗さし物をかざし、兩方一時に出て見へ又十郎適れ勇々敷何れもの出立、よく並ぶ違ぞめ靜める御姓名を承り着到帳にひかへ、君の御前へ伴わん友藏各早く御姓名を名のられてよからう東藏仰にや及ぶ、非常の陣ふれ陣太鼓、聞とひとしくまつ先かけ、駈參つたる某は、そのかみ當國衣笠の城に、武名をとめし平氏の一族、大助が末孫三浦監物義村ト蘭九郎ついて當家恩顧の譜代、弓矢打物關東に、並び名越の出丸より、眞一文字にはだせ馬、あをりかけたる畠山軍藤太芝藏録も知行も輕けれど、君にもしろし召れたる小坂の郷に隠れなき、葉山の丹治直元とて、坂東一のなくれ者又十郎元より拙者新參の列も末座に月影の、照す武藏に名を得たる、河野左衛門宗貫壽郎連なる武名も御存の、時に取ては矢つぎ早、夜討朝かけ晝下り、手習師匠にあらね共、建部源藏一騎がけ播藏桃栗三年豊年の、兆を爰に桐ヶ谷、矢倉太鼓の一番に、其名も高き比企の時員ト六高名戰場十方旦那、拙者風情も着到に、鯨の味はまだしらぬ、千形入道福邊の兵丹大は扱ごん尻におくればせ、名のるもおこがま獅子が谷、ふちか谷なるさいそくに、大手搦手笹瀬の下

知、承つて一手柄、長尾の大部と帳面に皆々何れも着  
到おしるし下されト本舞臺へくる友藏時頼公にもお待兼、追付  
御前へ伴ふでト是れをきつかけ「いそげ共く」、  
弱きに弱き柳の糸の、よれによれたるつかれ馬なれ  
ば、打ごもあはれ共先へは進まぬ、足弱車の乗力なけ  
れば、追欠たりト謠打上る向ふ方、玉助ちぎれ具足に鎧長刀をか  
いこみ、騾馬の口を取出て来て、花道能所に直り、  
皆々をき玉助ハテきらびやかなる諸軍の出立、人々に  
かはり某が物、その數にあらね共、所存は誰にかおと  
るまじ、今此鎌倉の御大事と、聞とひとしく欠付し  
に、いまだ軍勢着到ならば、息つきあへず駈參せし、  
其甲斐有て諸軍の中へ加はるも、弓矢神の加護なる  
か、エ、悦ばしやなト向ふを拜んで留る、東藏あれ見ら  
本舞臺の人数皆々見て  
れよ、何れも東八ヶ國の諸大名、思ひくゝの鎌倉人、  
けふを曠との出立に、其様見苦敷武者一騎、推參せし  
は何れの何人蘭九郎誠にきたなきちぎれ具足に鎧長  
刀、おめず臆せずかけ付しは、馬鹿者とやいはん皆々  
但し亂心者なるか玉介イヤ全く以て狂氣にあらず、我  
も北條譜代の侍、東八ヶ國の諸軍勢を、鎌倉へお召と  
承り、扱は一大事ござんなれど、とる物も取あへず、  
其儘是迄欠付し某又十郎ム、譜代とあれば、同じ北條

の御家來、拙者義は軍勢別當を預かる二階堂信の、  
助道秀、貴殿の御性名承り升せふ友藏さやふでムる、  
此安達彌九郎も同じ役目、性名を聞て着到にひかへ  
ませふ、シテこなたの所領國は何國玉介イヤその義  
はお尋御めん下さりませふ東藏イヤそふでな  
い、同じ味方の性名を存せぬは我々が耻辱皆々サア  
苗字は何と實名は玉介イヤサ名もなき匹夫雜兵同前  
翫十郎雜兵匹夫といへど、名がなくては叶わぬ筈芝藏  
たゞし名がいわれずは、領分所領は何國それ承らふ  
か、玉介サアその所領は、伯父たる者に横領せられ、お  
羽打からし貧苦にせまる、無念のかいきやう又十郎所  
領がなければ扱は浪人皆々コリヤ名所を名のらぬ尤  
東藏道理であのざま、頬の皮厚くよくも此所へ翫十郎  
着到杯とは身の程しらぬ素浪人芝藏其浪人もさまざ  
まあれど、てんつるてんの一錢目もないからけつ浪  
人、是天竺浪人のうつむけでムらう蘭九郎殊に以て花  
やかなる、諸軍の中へあのざまは、悉皆黃金佛の來  
迎に、貧乏船が交つた同前皆々貧乏神とはよくムる  
フ、ハ、ハ、ハ、ト皆々笑ふ玉介大功は細きんのかへり見  
ず、斯淺間敷我身の上、いかやうに嘲弄有ても、さら



さら耻辱とは存せぬ、此上は何卒別當始、各の情を以て着到の數に友藏罷りならぬ、譬へ諸軍の執成でも、貴様のごとき見苦しい、家來が有ては時頼公の御耻辱玉介サア我君時頼公のおめにさへかゝりなば東藏我君には先達て勘當でもしられたか、追放にでもあつたか、ごふで落度誤がなくては、素浪人にはなるまい、翫十郎イヤ何れもこふいふ貧乏神の傍に立交れば、各や拙者が身の穢れ又十郎いか様此上はいそひで我君の御前へ皆々いか様さやう仕ろう<sup>ト皆々</sup>立上る玉介何卒拙者も諸共に<sup>ト共に</sup>立友藏ハテ叶わぬ事を<sup>ト突の</sup>玉介ササそこを<sup>ト共</sup>ごふぞ芝藏エ、ならぬといふに<sup>ト又突のける、</sup>右の通りにて、玉助取付を<sup>ト又突のける、</sup>けるのきたないの<sup>ト又突のける、</sup>出来合の惡口雜言有て、段々門の内へは入る、玉介門の内へは入ふとする、内方しやんと門の戸をしめる、玉介思入有てはつと投首する、又かすめた遠せめて、橋懸りより大八中つる菊五郎駒十郎同敷武者のなり、此内人靜に一人く出てくる、大八玉介に向ひ合せ玉介是は、<sup>ト追從する、</sup>勇々敷武者ぶり、御名床しふ存られます、<sup>ト大八返答なく</sup>め付てすれ違ひ、上手へア、是も劣らぬ御出立、白金物の打上たる、糸毛の具足ア、立派に見へ升る、定て名作ものご存られ升る<sup>ト何なさいふて取つく、中つるもがてんの</sup>行ぬこなしにて入替る、又菊五郎へ向ひ是は存よらぬ貴殿は、慥相州の何某殿ハテ珍らしい菊五郎イヤ身共は相州ではないぞ玉介エ、菊五郎そ

の隣の安房ぼう州、平郡の領主だ<sup>トにらみつけ上へ通る、</sup>玉介見<sup>ト</sup>へる拍子駒十郎<sup>ト</sup>に行當る、玉介玉介是は鹿相千万、御免下されい、<sup>ト駒十郎ム</sup>ふりかへつて一通付廻してすつと上手各も着到の御人數と見受、拙者がお願ひ四人の中へ加へ、城中へ御同道下されまいか大八イヤ下されまい、見る様子が殊の外匹轉武士、それをめし連ては我々が名をれ<sup>ト中つるヤおれそなやつ、</sup>此度の着到に目を驚かす身共が出たち、それに何ぞやちぎれ具足のぼろく、鎧、一所にいては武士の仁體がそこねるてや駒十郎見ればうろくきよろくと、色青ざめし貧窮男、我々が雜兵でさへ升形に残し置たに、その方等を召連てよい物か、菊五郎何れもごふか心得ぬ、あの者にお構ひなく共、我々は早く着到に付升ふか三人さやうがよくムらう<sup>ト皆々門</sup>大八天野の四郎中つる六浦左衛門、菊五郎大野郡八駒十郎安田十郎四人只今着到<sup>ト内方</sup>是へ門をひらく、四人ばらくこは入らふ見苦しい、外へはふり出して、又しやんと玉介チエ、是義は金門の戸を立る、玉助いるくこなし有て鐵に思へ共、世に耻かしめらる、此身の拙なさ、ア、貧は諸道の妨じやなア<sup>ト長刀を杖に突馬の綱をひいてしいな</sup>りこ成る此見へ遠責かすめチヨンく具廻る送り物城中陣立の模様、双方に逆茂木の書割、正面に小高き座を構へ、三ッ鱗の陣幕を張、此前に又



十郎友藏到着帳をひかへ居る、歌菊東藏蘭九郎芝藏  
始返し前の人數、皆々並よく相引にかゝり、遠責にて  
道具納る東藏二階堂殿安達殿、最早着到の人數相揃ひ  
申てゐるが又十郎今日君の仰によつて、關八州の諸軍  
残らず、觸を廻して召集め友藏性名印せし着到帳、是  
にて人數揃ひし上は、我君の御覽に入るでゐらう芝藏  
それはそふと、最前門前迄參つたちぎれ具足の侍は、  
ありやマア何者でゐらふな蘭九郎さればあれも少し  
社領でも付ました、小宮の社家か何ぞでゐらう東藏ま  
づ當時の諸侍には、見うけませぬ者でゐる、イヤもふ  
見すばらしい形りでゐつたト此時橋懸りより東藏君のお  
ふなりトふれる  
なりでゐる皆々シイト序の舞に成る橋懸りより、歌右衛  
門ちよつへい頭巾、大口直垂好みの  
形りにて出る、跡々長刀の結構成りし手箱を持、近習二人付出る、万六鷺  
介富士五郎慶藏皆々陣立り、數形りにて出る、万六敷皮を敷く慶藏陣  
床几を能所へ直す、皆々平伏する、歌右 歌右衛門約を違へず早速  
衛門敷皮の上に直り、陣床几にかけて  
の到着満足く、最早性名記録の通り揃ひしか又友ハ  
ッ斯の通りでゐり升るト兩人帳面を  
前へもち行 歌右衛門祝著くイヤ  
ヤ何道秀又十郎ハッく 歌右衛門そちに尋問ふべき子  
細は、今日着到の軍勢の中に、ちぎれ具足を着し、鏑  
たる薙刀を持、欠付し武者一騎あらんが心付ざりし  
か又十郎さん候その出立の武者一騎、いかにも着到に

はせさんじ御人數の中へ加へくれよと、ひたすらの  
願なれ共友藏イヤモあまり姿の見ぐるしく候ゆへ、  
様々頼めど取あへず、やはり御門前にうろたへさま  
よふておるでゐり升ふ 歌右衛門夫は幸ひ、その武者是  
へ早く伴ひ來れよ友藏ハッあの見苦しい、ちぎれ具  
足めを 歌右衛門いかにも時頼直に對面せん 東藏ム、君  
の御賢慮、扱はまさしく盜賊か謀反人 翫十郎いで我々  
が皆々召取つてト皆々立  
上るを 歌右衛門やれしづまられよ旁、  
夫に及ばぬ時頼對面すれば相わかる、佐々めの小五  
郎、其方一人門前へ參り、右の武者を此所へ穩便に伴  
ひ來たれ 歌菊ハッ畏てゐり升る 歌右衛門いそげく  
歌菊ハットトリ、數向へ走り  
は入る皆々顔見合 何の事じや 蘭九郎折角着到  
に付た我々謀反人と存たるゆへ芝藏召取て手柄をあ  
らはそふと存たに 菊五郎案に相違の君の御誼壽郎ハテ  
御對面の上様子が知れませふ皆々いか様さやうでム  
るト此内はたくにて  
歌菊出て花道より 歌菊仰の通りちぎれ具足を着した  
る武者只今是へ 歌右衛門それ待兼し、彌九郎早くと傳  
へい 友藏ハット立上り花道付  
際々向ふを見て 我君の仰ちぎれ具足に鏑長  
刀、隨分見苦しき武者、此方へ通り召れト向ふ戸屋 玉介  
の内にて  
ハ、アト大小入の合方に成り、玉介いぜんの形りにて長刀をかい  
込、しづく出て花道能所にて思わす、本舞臺を見てハッこ

跡すざりして、花道中程迄下りに居る、此内始終相方、此内又十郎本ぶたいの面々ゆびさし、玉介をあざけり笑ふ事あるべし

我君仰の武者 皆々只今是へト歌右衛門花道の 歌右衛門ヲ、

源左衛門經世か、ハテ珍らしい 玉介ハ、ハツト平伏し

歌右衛門面をあげい、過し比宿りを求めし旅の修行者、

見忘れはせまいなアト玉介につと 玉介ハツ仰のごとく、

其折からは常の旅僧とのみ心得、我君とも存ませね

ば、ぶ禮の段眞平御高免下さり升ふ歌イヤ不禮でな

い、其身は貧苦にくるしめ共、忠義を忘れぬその方が

誠心、感ずるにも猶餘りあり、其折我こそ最明寺時頼

也と、名のり聞せんとは思ひしかど、名を明さぬは其

方が心底をひき見ん爲、以前申せし詞の如く、當鎌倉

に大事あらば、早速に欠付んと言ひしに違わず、けふ

の着到悦ばしう思ふぞよ 玉介こは冥加なき其お詞、

經世めが骨身にこたへ有難ふ存まする歌右衛門ム、皆

の者、あれが咄しの源左衛門經世じやわい東藏扱はあ

の者こそ、お家譜代と承りし、佐野の兵衛經政が子息

皆々源左衛門經世と歌見れば其折申せしごとくち

ぎれたり共その具足、錆たり共其薙刀、關八州の大小

名の、見る目も耻ず花美を飾らぬ質素の振舞、武士

は斯く有たき物じやて 玉落ぶれし面目なさ、先刻門

外にて性名を名乗ぬも、先祖の耻を存るゆへ、斯く着

到には駄付ながら、所詮御門内へは通されまじと、心

いため歎きしに、御對面の上冥加に餘る君の御誕、何

れもよろしくお取なしを、願上奉り升る歌イヤく

一たんは其身を耻、名を名のらぬも尤、くるしうない

近ふ 皆々御意でムるぞ 玉ハ、ハツト膝行して本舞臺歌今

日我催ふしは經世が心底探らんが爲、又當參の面々

は訴訟の旨を聞んが爲、理非によつて沙汰有べし、我

民を撫育せん爲、薙髪をなして諸國を廻り、今鎌倉へ

歸國して、再び武家の柄を取れば、その方が本領佐野

の莊卅余郷、伯父源藤太經景が横領せしを取返し、

改そちに與るぞよ 玉こは重々厚き御高恩、いつの世

にかは報すべき、旅僧を君とは夢にも存せず、優曇華

勝りのけふの拜顔、恐れながら命あればでムり升る

ト歌右衛門も少々碎けたる 歌ヲ、我もさこそ思ふわい、誠

こなし、好の合方に成る

に思ひ出せば是も又衆の飯の一睡の昔がたり、いつ

ぞや信濃路より下野へ通りし時、比は嚴寒山路も里

も一面に降り積りたる大雪に、雲水の身も絶兼て、宿

りもがなご夕顔の、それにはあらぬ小家の軒 玉此經世めが隠れ里、雪折竹の揚簀戸や、垂木まばらに傾き



し、雪に埋るゝあれ庇歌一夜の宿と求むれど、主のるすに婦人の斷り、我は悉皆木の端か、炭の折かの沙門の身なれど、男女席をおなじふせずと、教の詞に是非なくも、山本の里とやらへ心ざし、數百歩あゆむ道筋、吹雪倒れに手足も覺へず玉其跡へ立歸り、御いたはしやと存るゆへ、其道筋を眺ぬれば、もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、袖なる雪を拂ひ給ふ有様は、定家が古歌に駒とめても思ひ當りてお跡より歌のふく旅の僧、御宿まいらせんと呼返されしその嬉しさ、思へば其日の雪景色、風雅の眺もごこへやら、ア、寒かつたゝ玉誠にその時はからずも、御宿とサア申もおこがま白雪に、經世が六の花ひらく歌焚火にあてし鉢の木に、もてなされたる馳走ぶり玉草の庭のいぶせきも歌玉の臺に宿りし心地玉値遇の出合も盡せぬ御縁歌一樹の影も三世の因み玉先其時は歌主と玉旅僧歌げに懷舊の玉雪でムり升たなア歌いでその時の鉢の木は、源左衛門ア、何やら玉恐れながら梅松櫻、某が秘藏と申せごさゝいな鹿木歌ホ、其返報に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝合せて三ヶ庄の墨付吳ん玉何三ヶの庄を安堵の御

墨付下されんとな歌ヲ、それ硯ゝ又十郎ハツト結構な硯を出す、歌右衛門さらゝと歌それトさし出す、友藏受取行、玉コリ書印を出してきつと押玉助いたゝきよんで見てヤ是君のトいふわ歌子々孫々に至る迄、相違なく安堵いたせ玉かさねゝの御厚恩、有難く頂戴仕つてムり升る歌經世その鏑長刀是へ玉何此長刀を歌鏑たり共經世が誠心、金鐵にも比すべき長刀、時頼乞ふて武士の鏑を賞翫いたす、是へゝ玉ハ、ハツト歌鏑にじり取、歌右衛門の前へもち行、歌右衛門よく見寄て長刀を請て、万六にもたせたる長刀をさつてさし出し歌此薙刀は先祖時政公より傳來せし神束と號し、一ふり取かへ遣はす、守護して持傳へよト玉介恟玉何御先祖より御傳來の御長刀をハ、ハツト玉介長刀を取皆々すりや神束の長刀まで玉は見給へや人々ト諺に「始笑ひしどもがらも、是程のみけしき、嘸浦山しかるらんト長刀を持宜敷舞ふて平伏する歌經世玉ハツ歌満足なか玉ハツト長刀を歌皆見いト扇らくチヨンよい侍じやなアト思わすあほく、皆々共におも入、玉助じつと辞義する、此見へよろしくひや幕

下の卷慶子追善、佐野の館の場は、いと長やかなれば卷をかへて次に出すべし、

西澤 傳奇作書追加上之卷終



西澤  
文庫  
傳奇作書追加中之卷目錄

一 後日鉢木の續佐野の場

一 同大切雪女鉢の木の段

凡二條

此齣の役者替名の次第

一 由解大助春行 中村芝翫

一 佐野源左衛門經世 中村玉助 一 伊具治郎義成 淺尾大吉

一 同末子松千代 中村梅太郎 一 原田六郎兼貫 中村歌七

一 同次男櫻之助 嵐 信太郎 一 源藤太經景 淺尾與六

一 同惣領梅太郎 嵐 三津橋 一 經世妻玉章 中村富士郎

一 同 六ッ花 中村慶治郎 一 雪女の精白妙 中村富士郎

一 同 吹雪 中村松代 一作 者 西澤一鳳軒

凡二條

西澤  
文庫 傳奇作書追加中之卷

西澤綺語堂李叟編

後日鉢木下佐野の場

造物三間の間二重見附金襖、上手落間網代塀、此前雪積りたる松の實木手水鉢、尤雪持下手跡へ寄て結構成馬部屋、窓より口幕の馬休めあるを見せ、此前寒紅梅柴垣のあしらい、尤雪持にていつもの所に風雅なる枝折門、是にも雪積らせ、舞臺前一面花道にも白木綿を敷、屋根にも白木綿を敷、硝子の氷柱下りある、都て佐野の館の模様、美々敷奇麗に有へし、平舞臺の眞中に三ツ橋、おぼこ、かつら、袴股立、雪を束ね、胴切のためし物にて木太刀を振上構へて、上の方に吉太郎同じく高股立、雪がけにて竹刀をもち中腰にて控へいる、下の方に梅太郎芥子坊主同じ形にて是も小太刀を持扣へいる、此後に松代慶治郎奴にてひかへ居る、右宜敷三味線入白囃子にて幕開く、吉太郎申々兄梅太郎様 胴切は都て腰の備へ腰の鹽梅と兼て爺様の教、おまへは夫をよふ御存でムリ升かへ三ツ橋弟の小しやくな事、一ツでも兄に生れたゆへ稽古もそれだけ早ひ、それで此雪を束ねて胴切の腕だめし、松千代その方もどつくりと見ておきや 梅太郎面白ひ兄様の手

の内見た上、わしは又雪を人形にして此小太刀で、から竹割か大げさの手の内を見せ升ふ 吉太郎此櫻の介は鍵の手の内、竹刀にて突留るはお望次第 梅太郎兄様はやう三ツ橋合點じや拳を堅めてこうト始終白囃子にて木太刀を振上ケ身構へして雪を胴切にする、仕掛けにて兩方 吉梅あへわれる、直に吉太郎梅太郎走りよつて、兩方の切口を見て 三ツ橋つばれ手の内 三ツ橋弟兄だけの手が有ふかの 梅太郎イヤ、めつたに兄様には負ぬ、わしも大げさの手の内ト雪をすつぱりとはすに切はなす、此内吉太郎竹 吉太郎是わしがけいこは又格別、上段は乾の鍵、直に下段の坤の鍵 三ツ橋ヲ、出かした弟ト木太刀にて打て、 吉太郎コリヤ兄様何とさつしやる 三ツ橋ハテ油斷するかためして見るト又梅太郎 梅太郎爺様の教、めつたに油斷はしませぬ 吉太郎お前はわしがト是より白囃子烈しく、三人一寸立廻り駒下駄をはき、手に目籠に蕪 富十郎是はしたり、三人の子供るぐな大根の入しを持出て 雪の庭で稽古とはあぶない、もふよしにしやいのうけい二郎それ奥様がおごめ遊ばす 松代マア、暫らくお休み遊ばせいなア 三吉梅は、様今のを御らうじ升たか 富ヲ、見たともく、兄の梅太郎が胴切、櫻の介が鍵、松千代が大げさ迄あつぱれの手の内、稽古の出精夫經世様が御歸館なされたら 嘸御褒美で有



ふ、また此母は奥庭の雪を搔わけ摘取て來た、是此大根蕪ゑぐなど、それ〳〵に民の辛苦をついやさず、手作りのはたつ物、是も昔の貧しき折を忘れぬ心の愼み、是そなたらはとつくりと知りやるまひが、此母が姉様、白妙様と夫源左衛門殿の中に出來たは惣領の梅太郎と二男の櫻の助、又此松千代は連合が鎌倉へ出府の折から、娯はしたにお手かゝり出來たゆへ、三男として國もとへ連歸つての御養育、その内姉様はお過被成、三人の子供は幸ひ血筋の此玉章、今經世殿と夫婦となり、三人共にわらはがほんそ子、義理ある中と隔もせず、母様〳〵と孝行にしてたもる心ざし嬉ひぞや、ヲ、是はしたり、此つめたひに心もない問ず語り、是取わけけふは姉様の御命日、佛様へも備へたし夫への馳走ぶり、跡は皆に相伴させ升ふぞや、娯ごもちやつと三人ともおみやを洗ふてやつてたもいこの慶松代ハイ〳〵畏りました<sup>ト角盥に湯を入、三ふてやる、此うち富士郎は二重へ上つ</sup>富サア〳〵ちつと稽古<sup>火鉢を引よせ火をつくらひながら</sup>も休み禪をはづし、奥へいて巨燵へでも當りやいのう三ッ橘イエ〳〵申母様侍は雪霜をいとはず、戦場へ赴けば常からめつたにかじけぬ物と父上のおしへ

吉太郎雪はおろか裸身で氷の中でも寐臥を致しておめにかけ升は<sup>梅太郎わしやつめたい事も寒い事もな</sup>い、稽古が面白ふムリ升すわいなア富ヲ、流石は經世殿のお胤程ある適れの心がけ、然しけふはもふ稽古をやめて三人中よふ遊んだがよいわいのう三ッ橘イヤ遊ばふよりは試合のけいこをサア二人共吉太郎兄様のいわつしやる通りサア松千代梅太郎おもしろい参りませふ三人そんなら母様<sup>ト双方よりお富ハテつめたいにもふよしにはしやらいで、娯共けがさゝぬ</sup>よふ氣を付てたもや慶松代畏り升てムリ升る三人後程お目に掛り升ふ松代慶サアかふお越遊ばし升ふ<sup>ト方になり、三人に付添松代慶二郎奥へは入る、富本にマアあの子供らがけなげさを見るにつけ、思ひ出すは姉様白妙様の御最期、いにしへ此佐野のわたりに貧しいお暮らし、其折柄鎌倉の騒動とき、經世様にはちぎれ具足に鎗長刀をかいこんでの御着到、此身は又用有て山本の里までいた跡で、留主の内何者ともしれず姉様を討て立退、大雪の夜に情なやお命消へし其悲しさ、今御出世のお身の上、浮世とは言ひながらわしが爲には現在の甥の子三人、他人の手沙にかけさす</sup>



まいと此玉章が養育の縁はいなもの、いつともなしに源左衛門様と夫婦になつたも、縁にひかるゝ子供が可愛さ、草葉の影の姉様、かならず呵つて下さんなへト愁ひの思ひ入、此時雪ちらく本に又けしからぬ此大雪、經世様には御領分の御順見、嘸おひへ被成れふに、女房のわしがあたゝかに、こふして居ては道にそむこふ、富貴にあつて貧しきを忘れずとやら、其いにしへを思ひ出して、そふじや、ト面白き詠らへの合方に成り、富十郎こなし有ての手拭かけの手拭をつむりにかけ、庭下駄をはき手箒を取て、あたりの雪をはき枝折門、また馬部屋の庇の雪を掻きこし、思入れ有てもマアつめたい事ではある程にト手なふくむ思入、やはの次第を打掛る、雪やほりちらく降る、向ふ方與六鼠木綿の着付、破れ衣い栗坊主にて雪もちのやぶれ笠、藁つさを背負ひはだしにて足なつま立、謠「行衛定めぬ道なればく、越方もいづく乍出て来るト此謠の内、本舞臺へ來て枝折門の外より富十郎を見て、與六申々お上臈、是は上方の胴樂坊主、子細有て下總邊へ通る者、今日の此大雪先へも跡へも参りがたし、すの子のはしにたい一夜明さして下さり升ふならば、忝ふ存升る富是は是はお安ひ事乍物堅ひ屋敷の内、殊に主のるすに私が留升るもいかになり、脇をお頼被成升せ與ア、是是そふもぎごふにいふて、浮世の人のつれなれば、我誤りと爰を立、歸つた跡からア、是申お宿参らそふ

のふと、呼かへすは知れてある、むだにあちこちさゝずこそ是非とも一夜さ富イヤ炭の折か木の端かといへど、やつぱり御出家情を商ふ江口の君さへ、西行法師をどめなんだと申升れば與ハテそれはずつと昔の事、今ではかふしつほりとした、此雪降の物ほしい時分と見て、此愚僧がト言ひ、すつと内へは入、笠さわらづきを取、後より富十郎に抱つく、富十郎悔りして富エ、滅相な何をするのじやぞいのう與イヤサ時のはづみには猪口でも鼻そげでもと言ではないか、是愚僧は少形りはむさけれど、顔の道具は揃ふてあるじやによつて、雪の降るのにお宿の御無心ト言々又抱付富エ、穢らしい、御出家だてら武士の妻をどらへて、慮外しやるどゆるさぬぞやトきつと與ハテそふいわずと雪の肌へに、此坊主めを富エ、いやじやといふにト兩人もみ合事宜しく有與ヤアくくそちや白妙ではないかト大に悔富何白妙とは與イヤサ源左衛門經世が女房白妙は、日外身共がハテめんよふな富イヤ其白妙といふは私が姉様、こふいふわしは妹の玉章與すりやア妹の玉章、ハテ兄弟とは云ながら姉の白たへに妹の玉づさ、てもよく似たなアトこなし有てシテ此家は富慮外ながら佐野の源左衛門經世が館與ム、扱は

姉の白たへが相果たる故、妹のそちを經世が女房に、兄弟ともにこりやしめおつたな富がてんの行ぬ旅の僧、姉様の御最期をしつて居るといひ、殊に夫の身の上迄與知らいでならふか、源左衛門經世が爲には現在の伯父、佐野の源藤太經景がなれの果富すりや兼て夫が噂に聞た、伯父景經殿とな與いかにも最明寺時頼公が計らひによつて、佐野一圓の所領を押領したる源藤太なりと、浪人の經世を最負して鎌倉へ呼寄身共追放、源左衛門に所領をあたへし執權のよこしまゆへ、武士を見限り世を捨坊主、所に此度越後守時兼公の見出しに預り、一ツの功さへ立ば、元の身の上にと則是トわらづこの大小を出し、腰にたばさみ上手へ通る富ム、一の功とは、扱は夫源左衛門殿を與越後守時兼公の御吟味に富エ、何と與玉章シテ甥の源左衛門は富今日は領分の順見與アノ此大雪にや富我身をいとわす民を恵むと、生れ付たる夫の仁心與ム、ハテなアト思入有て二重らふる、富十富ア、降るはく、駒どめて袖打拂ふ影も耶思入て、富十富ア、降るはく、駒どめて袖打拂ふ影もなし佐の、渡りの雪の夕暮與それは大和路三輪が崎富爰は名にあふ上野の、佐の、わたりの雪の夕ぐれ與ム、誠に白妙が最後を思へば富本にはかない姉様

のお身の上與てふご此通りの大雪に富雪にすゝぐの聲あれば、其時の悲しさ口惜さ與玉章そちや姉の敵が討たいか富女ながらも武士の娘與ハテしほらしい心底ト云ながら、すつと下りてだまし討に切かけ富こりや伯父様何と被成る、與イヤサ是は富始て逢た經景殿、過つる大雪の夜に姉様の最期の様子、委しう知つてゐると云ひ、今又此玉章を手にかへふとは與イヤサそふではなけれど、白妙が最期は現在甥の經世が女房ゆへ聞傳へて居る、殊に姉の敵を討たひといふ、其方何ぼう武士の娘でも、日比の心がけとくご手の内見やうと思ふてト引はづして又切付る富ハテ御深切な伯父御様、助太刀頼まぬ姉の敵は大方それと、雪の最期は雪であらはれ與ヤ、何と富サア是も實否を糺した上トトトンくご立廻りあつて、兩人共ツカくご二重へ上り、與六が刀をもぎとり、與六を追つめ胸ぐら取て、拔身をきつと突付乍ら何と是でも伯父御様、姉の敵は打れ升まいかなト與六身をちりめて思入、此時トヒヨに成り、向ふ方鷹二羽引糸にて本舞臺へ來てすぐに臺へひらりご飛向ふ方、ばたくにて芝翫歌七大吉陣笠ぶつ先羽織一樣の鷹匠好みのなりにて三人ツカくご出て花道に並び、中腰にて本舞臺を見て、鷹杖をふる、本舞臺の兩人も見へよく空にきつご目を芝翫紀の關守がたつか弓、白鳥と化して飛さりしは、七例も古き白鳥の關大吉身よかたゝさき一物の羽つかひ富それ鷹は三國に通傳して其來る



事久しいと夫の講釋與誠にあやしき鳩と鷹との争ひ  
芝夫中春に鷹化して鳩となるとは禮記に見へたり、  
また七月有て元の鷹に歸るか七日日本鷹狩の始りは仁  
德帝四十三年 大吉依納の阿口古といふ者怪しき鳥を  
奉る芝百濟の王子酒の君、始て此鳥を泉州百舌野の  
御狩にすへて多くの雉子を奉る富是は正しく時の  
變、今鎌倉にて仁心深き時頼公には、都へおるすを幸  
ひに、若殿照時公を追退け、伯父御越後守殿北條家を  
横領ある與それゆへ甥の源左衛門を味方に進める經  
景が計ひ、さすれば此身の立身出世芝勝べき鷹の忽  
にか七群る鳩に勇氣を亂す 大吉是北條家の忠臣心を  
一致になして、照時公を世にあらせんと云前表なる  
か富今鎌倉に羽をのす越後守殿の逆意、天のしらし  
む所かかセイヤ時頼親子滅亡の印 富何にもせよ大事  
を告る 與此雪中に芝鳥類のあらそひ 富ハテ怪しき次  
第を皆々見る事じやなア トどろくにて鷹をけ落し、鳩不殘天  
井へ引上る、與六ム、さお、こづく、富  
十郎引廻してさめる内、花 六芝鎌倉を御上使 富何思ひが  
道の三人ツカくこ入て  
けない御上使とは芝我々は北條家の家臣弓削の大助  
春行か七原田六郎兼貫 大吉伊具の治郎義成 芝則越後  
守時兼公の上意を蒙りか大鷹野の場所より直様當所

へ富鎌倉の御上使とあれば、イザ先是へト與六も與富お  
通りあられませふ ト合方に成り、芝翫か七大吉すつ 富雪深き  
さ二重へ通る、富十郎こなし有て  
越路に隣る此國へ、遠路のお入御苦勞に存升る 大扱  
はこなたが佐野源左衛門經世殿の御内方よな 富玉章  
と申升る 芝次にひかへし出家の身に似合ぬ兩腰をた  
ばさみともに出迎はれしは何人 與イヤ愚僧は則經世  
が伯父同苗源藤太經景大すりや先達て時頼公の御勘  
氣を蒙りしといふかセイヤく 伊具の次郎殿、大助  
殿にも御存ないが、所領にはなれ一たん出家なした  
る源藤太經景なれど、主人時兼公のお見出しに預り、  
一ツの功さへたてば元の武士、其取次は此原田六郎、  
それゆへ血筋の源左衛門經世が心底探らんと、我々  
より先へ此所へ 與武士は互ひと 原田殿の御推舉に  
て、時兼公の仰を受た拙者、歸參をすれば御兩所とも  
に傍輩、以後はべつことに 芝ハテ存よらぬ 源藤太經  
景、鷹匠の我われへ今の挨拶ノウ 伊賀殿 大誠に御歸參  
有たら、それが彼鷹も 傍輩犬も 傍輩 ト芝翫さ  
與六むつこして 芝大ム、  
ハ、ハ、ハ、 トあざけり笑ふ、  
與六むつこして 與イヤ御兩所何と云つしやる  
筋目正しい佐野の源藤太を犬とは何事、今一言承ら  
ふか トきつ  
なる か七いかにもそふじや、拙者が推舉の源藤



太、犬と有ては此六郎も武士が立ぬトどもにき芝ハテこ  
 りやいな事がお耳にさはつた、今治郎殿が犬といわ  
 つしやれたは鷹匠からの思ひ付、是世の譬へさ大ま  
 たまた譬へを以て言ふなら、足の裏に疵有物は、笹原  
 を得走ららぬと申でないか、さゝいな事にきつば廻  
 す、御兩人もごふやら心に一物が、セイヤ譬盡し置  
 つしやれ、日比から世になし者の左馬の助照時に心  
 をよせる貴殿達、それゆへ今日の上使も身共が望ん  
 で是へ加役與何わ格別、拙者を犬のお見立は千万  
 忝ひ、犬の手の内ごととお目に掛ふか大そりやこつ  
 ちに望む所、七武士に似合ぬ耳こすりより眞劍にて  
 芝ア、見事拙者を相手に與かおんでもない事芝大コ  
 リヤおもしろいト芝説、七與六大吉相手迎ひに反打詰ける、  
 此うち富十郎思入有て、此時真中へおしわけ  
 立富何れもさま、こりや何事でふり升るなよ、カイヤサ  
 今の雑言芝大あまりといへばトやほり双方  
 きつと成る富ハテ伯父  
 御様は格別、御三人は上使の御役目、その大切な御上  
 意の趣も仰聞られぬ其内に、聊な詞争ひにつのつて  
 刃傷に及び、お役目が立まするか四人イヤサそれは  
 富憚り乍大事は小事、些御鹿相かと存られ升る四人い  
 かにもト銘々しつ  
 さ下にいて芝大誠に珍事、ちうよふよか時のはり

合ト四人顔見  
 合せ一時に四人失禮の段御免下されト元へ直る富  
 十郎會釋して富シテ  
 越後守様々の御上意の趣、仰聞られ下され升ふなら  
 ば有難ふ存升る、芝イヤ其儀は源左衛門經世殿に御直  
 談、去乍御内室の心底承りたいはム、幸ひト合方に成  
 前の富十郎の持出  
 し目籠を引よせ、幸ひ、芝説最  
 さず時兼公大成程大助殿のよいお見立、蕪多くなは  
 是當時日影の御身たる照時公ッヲ、サ此蕪大根と二  
 ツの内何れへ心を寄るといふ、源左衛門殿の所存の  
 程與連そふからは是玉章、知らぬといふ事は有まい、  
 その心底が聞たい、芝大何とてふる是玉づさごの  
ト是にて合方、はつて、富十郎  
 めかこさ蕪大根を前に置いて富いにしへ筑紫に何某の押  
 領使有けるが、大根を良藥として朝毎に二つ宛焼て  
 食する事ひさしく、ある時敵不意に寄て來り四方を  
 圍み責入る所に、何國ともなく鎧ふたる武者二騎あ  
 らはれ出、命を惜まず防戦ひ、むらがる敵を追退け  
 る、時に不思議と其性名を尋るに、此年比我を頼みて  
 朝々に食せし土大根の精也と、其儘消へて危難を救  
 ふかすりや源左衛門殿にも、其大根にならふて時兼  
 公へ富すは今にも鎌倉に大事あらば、以前に替つて  
 さねよき鎧に五枚兜、最明寺様より預り奉る神束の

長刀かいこみ、丈なる馬に打乗て、此玉章に口綱とらせ、第一番に駈參す夫の心底ヨヲ、其心底はわかつたが、照時殿に見立たる蕪ゑを捨る心か富ホ、此蕪ゑなこそ、冬に育て、春をまつ、青陽の七種若菜鈴菜と和歌により、人の心は和らげど、又武に取ては墓目に用ゆる、矢の根は則蕪のかたちなりや、文武を兼し蕪の矢の根に力をそへ、惡逆不道の大敵を、亡す事は夫の胸に芝ム、扱はやはり鎌倉へ、忠義を盡す經世殿の所存とな富御先祖時政様より時頼様迄五代六代に至つて、照時時兼お二人の内、跡目定まらぬ執權職、是此ゑなも土大根も、同じ畑のはたつ物、何れに愚が有べきぞ、龐略に思わぬ夫か心底、それゆへ本國に引籠つての閑居同前大すりや何れへとも、心を決せぬ經世殿の心底富去ながら何事も經世殿は領分を順見のるすなれば、歸られ次第御上使の趣承り、直々返答致され升ふ與いか様甥の經世、他出とあれば芝大歸りを待てわれくも富暫しは奥の一間にて大芝長途の休息仕らふ與此經景は残り居て、源左衛門立歸らばおしらせ申そうかセヲ、そりや幸ひ、何かに心を付てな、合點か與心得ました富さ

様ならば何れも様芝大思へばく富ト又急度なるを、富イザ御案内申上升ふト奥へ成り、めいくこなし有て富ト先與六郎殿と兼て言合した通、甥の源左衛門が心底探つた上、弓削大助伊具の次郎めも、手次手にム、よしトうなづき思入、合方に成つて雪段ヤヲ、塞く、首筋も降り出す、與六かちけるこなしにてとがめつたにじはくと、エ、すさまじの雪ではある、ごこもかしこも縮み上るよふなト傍りを見て火鉢をさがエ、こりや幽な火じや、こりや焚火でなけりやこたへられぬト庭を見廻し、雪持の柴を取て來て向ふ殿の御歸館トよぶ、與六向ふ、與何だ殿の御歸館、ム、扱は源左衛門めが戻りをしらすか、ハテ御たいそうな、よしく歸り次第心底をためし見た上、只一討ト刀の鯉口をくつれさりにて、與六物の見事に二重にヨ、く、ごいつもおらぬに今のはごふだ、ム、扱は身か已前手に掛た白妙の死靈めがなす業か、何を猪口ごいなトきつと成る、犬ミ靈になやまさるも思入にて、二重より下へ見事にかへり落、すぐ刀に手かける、刀のわけぬ思入にて連理引の心、始終れさり大さるさる下座の柴垣の前に焼耐火すさまじくもへ、與六いくるさき事さまじく有て、ト正面へ立直り、又見事にボンさかへりもんぜつする、是をきつかけにさるくれさり「花も雪も拂へば清き袂シヤントやむ、直に雪の獨吟になる」かな、ほんに昔の昔の事よ、我まつ人は我を待けん、鴛のおとりに物思ひ、羽の氷る衾に啼音も無なさな



きだに、心も遠き夜半の鐘ト此内雪おびたくしく降る、向ふより徒士四人、菅笠紙合羽にて出るさ、次に玉助りつばなる上下高下駄にて、長柄の傘雪持ならさし、かけさせ跡を紙合羽菅笠の供大勢付添出て、花道中程にて立ちまゐり、四方をき玉助ア、降つたる雪かな、それ雪は鵝毛に似つと見てて飛て散亂し、人は鶴氈を着て立て徘徊すといへり、されば今ふる雪も元見し雪にかわらねど、我も今は鶴氈を着て立て徘徊す、又其古へは袂もくちて袖せまき、細布衣陸奥の、けふの寒さをいかにせんと、世をうらやみしが有難や、時頼公の御恵みによつて、世に會稽の本領安堵、誠に誰憚からぬ佐野の源左衛門此經世、あら面白の雪の日やなアト思わす供廻りの家來方を見て思入有て、玉介に傘をわたし向ふへ皆々引かへしては入る、此時又か「聞も淋しき獨寐の、枕すめて薄ざるくねさりにて獨吟」に響く霞の音も、もしやといつそせきかねて、落る涙の氷柱より、つらき命は惜からね共、戀しき人は罪深く、おもはん事の悲しさト玉介跡見送り向ふへゆかふとす、此時大さるくにて本舞臺に焼酎火もへる、花道付際へ富十郎二役雪女の拵白妙の幽霊にてせり上る、玉介きつと見てなア、次第に降つむ大雪の、歸る山路の白妙に、姿おぼろに行先を、さへぎるはム、扱は音に聞たる雪女が怪異をなすかハテいぶかしのト始終兼さり、ごろく富十郎じつと顔を上げて富イ、ヤなつかしや我夫玉ヤ、なんと富日暮れば淋

しき物を、あそ沼の鴛鴦の衾に比翼の契り、二世の誓ひも世に落ぶれ、佐野の船橋降積り、あるに甲斐なき夫婦が身の上、さいつ比鎌倉着到の其留主に、氷の及淡雪と、命も消し妻の白妙、雪にこがれて愛着の、姿は爰に雪女玉すりや女房白妙、不便やそちや迷ふたなア富アイ迷はにやならぬ我子の身の上、梅櫻松三ツの木の、榮を祈る親心、中に一木は取わけて、義利の柵せき兼る、御身の大事と家の浮沈、此身の仇ももろともに、はらす忘執おまへの心底、此世をさればうたかたの、滿れば缺る私か疑念玉我鎌倉へ着到の、跡にて空しくなりし其方、今活計の身の上を、思ふに付て思ひ出すは、そちが最期佛事法事の暇はもどか、子供の養育幸ひと、血筋を引たる玉章に、縁を組たる某が、戀慕と心得嫉妬の念に迷ふて來たか富イ、ヤ色即是空、色には迷わぬ輪廻にも引されぬ、有難いと吊ひ、今生を引たる私が思ひは源左衛門經世殿、御主人へ忠が重ふムんすか、但又親御へ孝行がおもふござんすか玉身舂八腑をわけられし、親の恩な須彌山に譬へれど、其親をはぐくみ先祖の氏を輝かすは、全く以て主君の御恩、すりや言すとも忠義が莫大



富そんなら彌おまへは玉ハテ孝よりは忠義が重いは  
富エ、嬉しうムんす、それ聞て落付升たわいなア「捨  
た浮世、すてた浮世の山かづらト又獨吟にて富士郎正面へ  
居直る、大ごろくにて富  
十郎をせり下る、寐鳥焼耐火ごる  
ごるやんご止む、玉介思入有て玉すりや某が心底を聞ん  
爲、ハテ迷ふて來たじやなアトこなし有て本舞臺へ來る内、  
與六心付起上り、あたりを見て  
ため息與ハテ恐しい今のはいよ、手に掛た白妙ト言  
ちやつと口に手をあてふりむヤア源左衛門經世か玉珍らし  
いて、玉介を見て悔りして  
や伯父經景殿トじつと眺め乍、入かわ  
つてすつと二重へ通る伯父ご呼からは、血  
筋の身共を忘れぬその方、先は安堵ト思入有て下に居る、  
玉介與六が顔を見て  
玉君子は其罪を憎んで其人を憎まず、經景殿ハテよ  
くいらつしやれたなアトこなし有て下に居る、奥方三子三人  
ツ橋吉太郎梅太郎出て來て  
父上只今御歸館被成升たか玉いかにシテ奥玉章は  
何れにをる三ツ橋母様は奥の間に吉太郎鎌倉より御上  
使様お入り故梅太郎何かの御心遣ひでムり升る玉ム  
ム何御上使のお入り、扱は越後守時兼公より與其方  
の心底探らん爲、弓削大助原田六郎、伊具の治郎三人  
共に此所へ、愚僧も俱にと仰を受けて玉すりやこなた  
にも與一ツの功さへ立ば時兼公の御家來元の身の上  
玉何にもせよ某立歸りし様子早く申上よ子三人畏りま  
したト三人は入、與  
六こなし有て 與イヤ甥の殿源左衛門、そちが世に

出たゆへ此經景は世に落ぶれ、心に思はぬ今道心、又  
元の侍になるといふても此ざま、此大雪に領分の順  
見は、我身をいとわす民を恵む、そちが仁心と最前  
玉章が詞、他人を恵むそちなれば、現在伯父の此源藤  
太經景も、天晴見ついでくれるで有ふなト此内又雪ちら  
介思入 玉雪は豐年の貢物、民の辛苦を見て我身をこら  
有て 玉雪は豐年の貢物、民の辛苦を見て我身をこら  
す領主の禁め、今活計の源左衛門、現在血筋の伯父御  
じや物、アレ、今降る雪も同前與銀世界に黄金の  
山をなして尊敬する氣か玉いつたん所領沒收の仇も  
打はれ與親はなきより親のかたわれ玉忠義は重いと  
はハテよく尋ねたよなアト雪を見て急度思入、此時奥  
方芝翫が七大吉出てきて芝源左  
衛門經世殿か七只今御歸館召れたか玉是は鎌倉のお  
歴々承れば御上使ごある先以て役目御苦勞に存升る  
ト三人を上手次かセイヤ何大介殿伊具殿經世殿へ早く御  
に玉介座につく  
上意の趣を仰せ聞られぬか玉御上意の趣逐一に承知  
仕たふ存升る大鎌倉の仰余の義にあらず佐野の  
源左衛門經世義は最明寺時頼公のお見出しに預り  
今に本領安堵の上本國此上野に引込病氣届けもな  
く、參勤の懈りは所存有てか何にもせよ、其實否を糺  
せよとある、武將宗尊親王の上意を蒙り、則越後守時

兼公の嚴命芝察する所先君最明寺殿の御高恩を蒙りし源左衛門經世殿、時頼公には道崇と改、今都嵯峨の奥に閑居の御身、まつた御嫡子たる左馬之助照時公には御身持放埒と佞人共の舌頭を以て、秋田家へお預けの御身の上大舊恩を忘れぬ經世殿今日影の照時公をもち立北條家相續の思し召か芝但し又自分の逆意を企本國に引込み、時節をはかつて北條を討亡し、鎌倉を横領する所存なるか何にもせよ、鎌倉の疑ひ立たる源左衛門心底篤と承らふ芝大此返答は如何でゐる玉こは思ひよらぬ御難題、時頼公の御舍弟たる時兼公また照時公には御血脉、何れを何れと計兼本國に引籠れば、逆意なりと武將の御疑ひ是非に及ばぬ此上は、ごくと思案を廻らし鎌倉へ申譯の仕らん、其疑ひ掛りし源左衛門に北條家代々の重寶神束の長刀は預置れず、某に請取歸れと時兼公が改ての仰與夫ばかりじやない、次手に三ゲの庄の御教書もノウ原田殿いかにも二色とも請取ふ芝イヤそれも逆意に極つた上の事、未不分明なる源左衛門申譯さへ相立なば二品を受取には及び升まいかよしテ又武將への言譯はな芝源左衛門殿逆意でないと言

誓紙を受取升ふか玉何と仰らるゝな芝今笑の中に劔を振り、互ひに疑ふ時節といひ、殊に貴殿は武將の御不審逆意でなくば鎌倉へ、不忠を思はぬといふ誓紙を認の渡されよと、是とても拙者が差圖ではなひ宗尊親王方の御内意玉すりや誓紙さへ相認なば芝自然と申譯は相立道理大誠に誓紙を書は戰國にまゝ有習ひ玉すりや何方以て心安ひ義かイヤそふもゐるまひ玉すりや又ごふしてかハテ其誓紙を認るば只の事我姓名を印せし下に肉身分しお手前が子息の内何れぞ壹人の首打て其血を血判にそへねばならぬががてんかな玉すりや忤が首打其血判にハテナア與何ぼう大腹中に吞込でも是ばかりは出来にくからふ、何をするも甥子の爲だヲ、そふだトツカくさする玉待た伯父者人こりや何國へ與ハテ知れた事奥に居る三人の子供の内身共が見わけて、そつと首を打放してやらふと思ふてト又行ふとするを玉介きつと留て玉ハテ御深切な思召かし肉身の忤でも切兼る經世でもゐるまい、御自分の御世話にやならぬ、立騒ずとひかへてト與六ム、こら下にいる芝既か七經世殿彌々誓紙を認召るか玉おこづきないはひ致さば逆意のおとがめ、三人の忤の内何れぞ壹



人首打取誓紙にそへてさし上ませふ芝すりや逆意なき條誓紙に認め、見事我子の首打て、渡すじやまで與ハテ澤山な子供の内、壹人は切ても大事あるまひ大其刻限も暮六ツ迄に玉先それまでは奥の間にて三人御返答相待申す<sup>ト歌に成り、互ひにこなし有て、芝翫、七大送りにな</sup>玉今日本の賢人ぞ、呼れ給ふ時頼公には、佛門に入て都の御閑居、照る日の神の岩戸に籠り給ひし如く、世はここやみに佞人はびこり、照時公を追退け、越後守外戚のいをふるうがむやくさしさ、態と本國に引籠り、照時公へ心ざしをはこぶ某を、逆意と有て武將の疑ひ、此言譯には三人の忤の内<sup>ト思ひ入有て、火鉢を引奇思案のこなし、奥より富十郎着流し</sup>富是はしたり、御歸館の様子は承り升たれど、御上使のお入ゆへ、よふく只今囁お冷被成たでムり升ふ、マアく是にて<sup>ト火鉢へ火を入るこなし</sup>玉奥玉章左様な事は、必共に言付召れぬ富イエく、あなたが日比のお示し、富貴に有て貧しきをわすれず、兎角以前の憂を思ひ出して、此身の慎みそれで私も<sup>ト云々をつ</sup>サアくよくよりて當り給へや<sup>ト火鉢を</sup>玉ム成程なア、拾年立ば一昔、浪人の身の夫婦兄弟、けふの煙りも立兼しが、其時は奥玉章富エ、<sup>ト顔見合おも入</sup>

玉そなたの年もまだ三五の娘盛で有たが、今で思へばア、きつふふけたぞやく富ふけた筈でムり升、三人のこの母じや物玉誠に春立は夏來り秋去れば冬に至り、光陰に關守なく、我身の上は目にもかゝらず子供が成人富兄は拾一中は九ツ乙は七ツ玉そなたが姉の白妙も富てふぞ今年が七回忘玉中陰の間は身共は鎌倉に有て、本領安堵の悦びに、いさみすゝんで立歸れば白妙が最期の悲しみ富劔の難もあなたはしら雪、こふいふ空に御最期と思へば、雪も恨めしい玉雪は花より花多く富むつの街に六道能化玉降敷庭に雪の塔<sup>ト是よりしつほりさした合方に成、又雪ちらくふる、富十郎庭下駄をはき、最前胸切の雪を石塔の心にて能所へ直し、二重へ上り合</sup>玉法名は眞月院花岳妙雪大姉富俗名姉上白妙様玉幽靈出離頓生菩提兩人南無阿みだ佛く<sup>ト兩人宜敷ある、奥方與六しろ目天窓一ツへついは</sup>與身共も馴染の佛じや、回でなる夜着を引かけ出かけいで<sup>ト前へ出る</sup>富ヤア伯父御様いつの間に與天窓も刺立此様に、ぬくく成たも皆甥の殿の影、時に源左衛門疑ひ立た申譯は何とする氣じや玉そりや拙者が胸中にムるわひ與甥の其方案じるは血筋だけ富私も血筋姉様の敵を、申我夫ごふぞ打して下さんせぬか玉ム、シテ白妙を討たる敵は、それと相知れ



たか富大方それと最前の詞のはし、慥に伯父御と  
ト與六の方へきつこ成る、玉ハテ事の實否もわからぬ内、玉介富十郎を引廻して 伯父御に向つてたわけ者めが與イヤ／＼源左衛門苦  
 しない、玉章も武士の娘姉白妙が横死と聞ば、敵が  
 討たいは道埋／＼、甥嫁の事身共が助太刀して討し  
 てくれふが、敵は何者じやサ、いへ／＼富サアその  
 敵は與よもやしれまいア、不便な事な玉此源左衛門  
 鎌倉の滯留中、先妻白妙を手に掛しは、おふかた道な  
 らぬ横戀慕、主ある女に無躰を仕かけ、聞入ぬ恨みど  
 てかよはき女を手に掛しは、よもや常躰の武士でも  
 あるまひ、しかも世に捨られし惡黨坊主の鉢ひらき  
 か、人非人の乞食非人めでサア有ふと、推慮したなア  
 玉章富アイそふじやわひなア、そふでムんす、十が九  
 ツしれて有のに、空々しいおいとしや、姉様をエ、こ  
 なたはのう與ア、是々そりや何をいふ、扱は此源藤  
 太が白妙を手に掛たと存じて、それで最前から身共  
 に向ひて白まなこか、伯父をにらんでひら目同前、源  
 左衛門が手前もあるのふ、身共はしらぬヲ、芥子程  
 も覺はないぞ、しらぬ事をば、惡事災難いかに女じや  
 と云ふて、ツイ推慮で姉の敵とは、コリヤ何とも迷惑

千万な事だわへトこなし有て下にいる、富十郎思入有て最前の  
 て富申我夫源左衛門殿、此雪は白ひ物か黒ひ物でム  
 んすかへ玉ム、何見ても雪程黒い物はなしと、面白  
 躰の俳諧にもかくいへば、水の體にて黒ひも斷り富  
 サア白ひはしれた雪なれど、黒ひと言が俳諧とやら、  
 夫を察してお前の心は玉夜を晝に雪の力や明り窓富  
 そりや宜士とやら云學者の故事玉イヤサ其先妻の  
 敵、そちが爲には姉の敵も、やがて討すは富姉様の  
 恨み晴さいで置ふか與ア、討すはよひが、邪推は無  
 用ト立、るを玉介が玉無用の用は夜着の袖、取ては形  
 見苦しく、有ても兩手は通されず、是が則無用の用  
 ト立廻富敵は討れず見のがされずト詰、くる玉女の手  
 裏にて夜着の袖を取  
 際しはしの辛抱富丈を延して棲辻あはト與六の首筋  
 りぬける玉ハテその時は名乗かけて與コリヤごふや  
 ら此身の綻びがト又ふり切立ふとする、玉是サ何事も皆推  
 慮じや驚くまひ與でもト富十郎を見る、富十郎よりふとす  
 富ありやもふ暮六ツ玉鎌倉へ有無の返答ト立上るト降  
 てわいたる雪空も富曇りなき身は晴わたる玉名にお  
 ふ佐野の夕暮に與じみ／＼消る悴が命ト立上る富十郎  
 富積る恨みの雪佛ト與六へ、る玉イヤ跡吊ふは出家  
 玉介突廻して

の役ト與六を下富何のあの經景殿がト與六ちやつ庭に向つて與南無  
あみだ佛ト又行ふとするな玉ハテ仇を情にコリヤ玉章  
ト手を取富十郎玉マア奥へ參れといふにト唄に成り玉介富十  
跡本つりが残つて與六そ與今源左衛門夫婦が五音では、  
身共が白妙を手に掛た様子、ありや推慮でないどつ  
くりとしておるわへ、此上は何も角も短兵急に佐野  
の所領をせしめた上に、夫婦共に返り討トきつゝなる、  
つて、ア、情ない又なやますか、コリヤ困つた物じや  
わへト二重にべたつりと尻居にへたる、此見へよかへし

### 同大切雪女鉢木の段

造り物三間の間、數寄家体本椽付、雪降積りし本屋  
根、上手落間連子窓付の塀柴垣のあしらい、此前に淨  
瑠璃出語、臺下手落間にして風雅な塀、庭木石燈籠の  
あしらい、皆々雪積り有、能所に鉢植棚に雪持の鉢の  
木幾つも並べある、家体の前に數寄屋障子一面にし  
まり有、やはり雪ちらくゝと降り、本釣鐘かすめて道  
具納る上雪風にさ野の船橋音す也、手馴の駒の歸り  
來る、道さへ雪に埋れて、遠寺の鐘の音も氷り、今は  
そびへし庭の木の、梢を拂ふ吹雪さへ、身にしむ思ひ  
源左衛門、常に動せぬ武士も、主家の爲と恩愛の、我

子の命わけ兼て、胸の氷も碎くる思ひ、始終を影に立  
聞と、夫の心白雪に、ふるふ足もとふみしめて、伺ひ  
居る共白ま弓、矢竹心の張つめてト能程に前の障子を引て  
にて、刀かけに大小をかけ、手を組思案の體、上手柴垣の間より、富十  
郎襦をいざりじつと伺ふ、上るりの跡床二挺のめりやす、雪おろし  
の玉先刻不思議になき妻の、白妙が姿を顯はし、忠  
と孝とはいづれがおもいと、よふす有氣に尋ねしは、  
合點行ずと思ひしが、今ぞ此身に思ひしる、鎌倉よ  
りの逆意の疑ひ、此言譯には誓紙を認め、我三人の悴  
の内、一人の首を討血判せよと上使の難題、さすれば  
三人の悴の中に、もしや彼若君の身の上を○イヤイ  
ヤ加様な事もあらんかと、玉章には勿論先妻の白妙  
にも、包み隠せし我子の素性、餘人のしるべきいわれ  
なし、ハテその意を得ぬ上思案工夫のとつおいつ、  
聞居る妻が身もわなく、左程大事の若君の、御身の  
素性今までも、包み隠すは胸欲と、恨の詞いゝたさ  
も、じつとこたへてしめなきに、涙は氷と成ぬらん、  
様子聞付一間より、子は親に似て利發者、父がまへに  
合掌しト兩人別々に宜敷愁ひの、こなしある、奥より三三吉梅サア  
父上様、私が首を早ふお討被成て下さりませ上首さ  
しのべて覺期の體、女房ははつと氣も狂亂、留に出よ



ふかごふせふかと、あんじる胸は幾瀬の思ひ、父はほとく打うなづき玉ヲ、悴、そち達は先程のよふすごとく聞たな三ツさちアイ逆意とやらの申譯に、此梅太郎が首切て、お渡し被成て下さりませ吉イヤ父上の申譯にはこの櫻之助、サアとく遊されて下さりませ梅太郎イヤそりやならぬく、首切らるゝは此松千代、サア爺様ぼんが首をころりと切て下さりませ三イヤ死るのは此兄じや梅イヤ弟の私じや吉イヤ中取てわしじやく、上互ひにあらそふけなげなさに、父はひと敷ひきこめ玉三人共に出かしたなア、いづれ不便に甲乙はなけね共、せひ一人は首討て渡さねば、鎌倉への言譯立す、もし此事を玉章の、耳にいばなさぬ中の義理を思ひ、邪魔せんな必定、時刻移らぬその内に、父が直々手に懸る、冥途へ行共残る共、かならず共に恨むなよ、覺期はよいか悴共上南無あみだ佛と觀念して、刀すらりと拔放せば、是なふ待てととんで出、そこ爰とに三人の、我子を圍ふ兩袖に、泣て居たのを顯はせり、夫もはつと思ひしが、態と突のけ聲あらゝげト此内富十郎ツカく出玉ヤア玉てよろしくミゝめて泣落す玉ヤア玉章か、最前よりの様子、定て物影より聞つらん、今改

て物語るにも及ばぬ、その方もしるごごく、忝くも北條時頼公最明寺殿と御名を呼、勿体なくも民の歎きをしろし召れんと、諸國行脚の姿と成り、遍歴し給ふ折こそあれ、降來る雪に惱され、此さの、渡りに行暮給ふを某御宿參らせしに、その比は貧しき暮し、何御供養申さんにも、あだでなく粟の飯を進め參らせ、更行まゝに夜寒さ増り、焚火にいとなむ物もなく、有合ふ庭の鉢の木の、梅櫻松を伐くべて參らせしに、その返報に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝今三ヶの庄を給わる、その縁を以て三木になぞらへ呼し、兄弟三人は皆時頼公の、御恩もあつき廣大無へん、せめては御嫡子左馬の助照時公を、御世にあらせんと、心を盡す源左衛門なりや、恩愛の盼なり共、主君の爲にはかへられぬ、あれ三人の悴共、君父の爲に死をいそぎ、首さしのべるけなげ者、父の手づから介錯する、妨げせずとこのけい上只一討と振上る、袖にすがつてさゝへる女房、サアくぼんをさ欠よる松千代、母は引留いだきあげ、梅も櫻もちりいそぎ、イヤちらさじと押かこひ、我身をかせにすりよりく富マアマアく待てたべ、お前は夫でも濟まふが、生先あ



る子を先だてゝは、義理もあるまだその中には、大事のくゝ育君の、イヤ育子を殺さす事はなり升ぬ、子の恩愛に引かれて、お主を思わぬ此母と、思召なら御上使への言譯には、此母を手に懸て言譯被成て下りませ上」是手を合せ拜みます、拜むわいのと聲をあげ、わつと計に泣叫ぶ、なさぬ我子へ立る義理、過分と禮のいゝたさも、こたへる臍腑はずたゝに、さくる思を張つめて玉ヤア聞譯なき玉章、鎌倉よりの仰には、愛子の命どれよとあれど、女のそちが首これよこの仰はない、なさぬ中の子をかばい、死したる姉に義理を立、此經世が逆意の言譯相立ず共苦しうないか富サア夫じやといふて玉さなくば忤を是へ出せ富サア夫は玉富サアくく玉なんど上何とくくと押詰られ、我身を切らるゝ苦しみより、百倍増る憂涙、消入ばかり歎きしが、よふく心取直し富成程心得ました、さりながら親子は一世の別れといへば、此世ばかりの契りゆへ、せめて先立その子には、暇乞をさしてたべ、是のみお願ひ聞届てたべ經世殿上「涙ながらに立上り、襦どればその昔袂もくちて、袖せまき、細布衣身にまどひ、姉が筐のつゝれ帶ト此時富十郎襦をさるゝいつ

ちの女鉢の木の姿になる、立上つて昔忘れぬ此姿、こふした憂目に陸奥のけふの歎きをいかせん上「あらかなしさの雪の日と、又さめくゝ泣しづむ、經世も目にもる涙を拂ひ玉實にや盧生が見し榮花の夢は五十年、そのかんだんの假枕、一睡の夢のさめしより、まだくゝはかなひ舁が命富是を思へば身を富て、此悲しさを見んよりは、貧しい元の身の上には、なぐさむ事も有べきに上「松風寒き夜もすがら、寐られねば夢も見ず、何思ひ出のあるべきと、そゝろ涙にくれけるが玉ヲ、それよ、更行まゝに時刻も移る、我いにしへ世にありし時、鉢の木をすき數多の木を集め持しを、いわれぬ貧の花好と、皆人々に參らせしが富今はそれには引かへて、是此梅櫻松と三人の子、わきて夫の秘藏なれど玉何是いまだ小枝の苧切、くべて煙となさんそれト諸いりに成、玉助刀を抜ふとする、富十郎一寸さへて三津橋をいばふ、玉助ふり切て刀をふり上る、富十郎二重ヘツカく上り、上下一寸連り引の心にて急度とめる、玉介刀をふり上ながら、合點のゆかぬ思入にて、上をふりかへつて急度見上る、一寸寐鳥にて富十郎直にちやつと富ア、是雪打拂ふて見れば玉面白やいかにせ飛下りんそれ上「先冬木より咲初る、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、と木より先立は、梅を伐やそむへきト兩人よろしく、富十郎富見しといふ人こそうけれ山里の耶三つ橋を突付乍

上「折かけ垣の梅をだに情なしと惜みしに富ごふマア是が上「今更新になすべしとは、かねて思ひきやト三津吉を後を廻して、吉太郎をさし付る玉介見て玉櫻を見れば春毎に、花すこし遅けれど富此木や佗るご心を盡し育てしに上「今は夫のみ佗てすむ、家櫻伐くべて緋櫻になすぞ悲しきト兩人よろしく愁ひのこなしにて切、梅父上ごふぞわしをわくる、さめる、梅太郎此中へわけ入てしをト取付てせむ玉介じつと見玉松はさしもげに上「枝をため葉をすかして懸りあれど、植置しにその甲斐今は嵐吹ト梅太郎を抱乍玉介を突廻して、上座へ直し、富松は三ッ桶と吉太郎を玉介の前へ突やりながらもごより常盤にて上「薪となすは梅櫻、切くべて今ぞ御垣守富衛士の焚火はお爲也、サア早ふ切給へト愁三津橋吉太郎を突出す、玉介始終富十郎のそぶりに、こゝろを梅イ付るこなしにて、ム、さ切くる、梅太郎ツカく下りてヤ母様、兄様より坊をト取つく富十郎、母様とは郎だきあげて勿體なひ若君様玉ヤ、なんと富是我夫三人の子の内に、此松千代君こそ勿體なくも、誰有ふ時頼様のおたね、おなかは替れど照時様の御舍弟君でムんせふがな玉ヤ、深く包みし若君の御身の上、ごふしてそちは知たるぞ、サ、手細を語れな、なんと上「語れ聞んご詰よれば、妻はつれなく顔打眺め富知らいでならふか經世殿、生ある内こそしらねども、此世をさりし

業通にて玉ヤ、なんとト二重へごつかさけてきつとなる、寐鳥うすごるくにて成る、床にて修羅よぶの相方に成る、富十郎玉助をきつと見上て富エ、聞へませぬ源左衛門殿、夫婦は二世とさく物を、あの若君の御身の上、譬へお前が胤にもせよ、生ある時は義理ある中、何のさもし分隔、寵略に思ひ升ふぞいなア、まして夫婦が大恩ある、時頼様のお胤じやもの、此様子をば最後のきはまだ、私に包み隠すとは、日比に似合ぬ無ごく心、もし恩愛にひかされて、いかなる不忠のあらふもしれずと、假に妹の姿となり、詞かはすは二世の縁、お主大事、夫大事我子可愛の愛着心、凝り固めて今爰に、あらはれ出し我一念上「是見給へと立上れば、今迄見へし粧ひも、忽柳の亂れ髪、花の姿もちり失て、身は白妙の雪女ト此時大ごるくにて焼酎火もへる、寐鳥にて富十郎引ぬきに成り、幽霊の姿となる、玉介急度成つてウ扱は白妙が靈、妹玉章の姿となり、あらわれ出しは我下借腹の忤と偽り、藁の上より育させしを、時頼公の御胤と、此世を去りし業通にて知つたる故、影身にそふて守りしか、ホ、ウ生ての貞女死しての操、出かしたなア、左程迄に思ふ者、是まで包み隠せしは、我誤り恨をはらすは則是上「懷中より取出す錦の袋は安堵の御教書玉始には三ヶの庄の御墨附、終に印給



ひしは若君の御身の上、二階堂信の、介が娘玉豊と女云に、假の契りの御胤宿り、平産の上男子ならば、その方が忤となし、養育たのむとある奥書、夫ゆへ連そふそちらにも、深く包みしその子細は、御臺様の嫉妬といひ、又我君の御舍弟たる、越後守殿の積悪、照時公を追しりぞけ、執權の職を横領あらば、まさかの時は照時公のおひかへと、人にしらすぬ我所存、様子といふは此通りじやわい上始てあかす松千代が、素性はすぐに白妙が、常盤の松の色かへぬ、操のかいみ曇りなき、育柄とぞしられけり、聞に白妙疑ひの、始てくる朝日の雪富エ、嬉しうんす忝ひ、おまへの心底きく上は、未來の迷ひも晴渡り、又血筋の妹に、此身の仇の經景を、討してもらへば恨もとけ、孝と忠義は戀の重荷、百とせ過て未來はやつぱり、半座をわけて經世殿上名残りは盡しておさらばと、する子供をかきのけく、姿は冥途へ雪女、かき消す如く失にけりト大どろくにて三人の子役より付をふりのけ、下座のよき所へ富十郎をけす、かけふんしやう雪けふりばつとちる子役三人 三大梅ヤア母様がごこへやら、母様のいの上「わつと泣出す三人を、なぐさめかねて折こそあれ、始終を影に伺ひ聞、あらわれ出し源藤太ト下手柴垣より奥六着

流し、刀を持ツ與雪女と妖て來た、白妙めが今の噂、松千代といふは時頼のたね、一ツの功はこいつのそつ首上「討取吳んと切つくるを、經世すかさずぐつと引つけ玉ヤア血筋と思ひ用捨致せば、段々つもの惡事の増長、女房白妙はこなたが手にかけて有ふな與ヲ、いかにも心に隨がはぬ戀の意趣、しばらく上て雪責の苦痛を見せてなぶり殺し、夫婦は一體うぬも一所に上「我慢の切先切付る、多たりとかはしてしんのあて、心地よかりし次第也、折から立出る以前の上使ト奥方芝翫、七大芝翫、大經世殿誓紙受取升ふか玉契約の吉ツカくこ出て通り某が、血筋の者の血判を仕らふかセヲ、其血判にはいで此松千代玉イヤ血筋の者は則是に上「伏たる經景引起せば、イヤ夫よりはと六郎が、ぎせいをとゝひる春行義成、無法の經景心つき、何をとかゝるその隙に、長刀引提玉章が、姉の敵と難立られ、わつと苦しむ經景が、血汐の穢れに池の氷もとけて逆卷水勢ト七子役にかゝるを、芝翫大吉きつとぎせい、與六玉介に切てカカこ出て、奥方富十郎もこの玉章役にて、前まくの長刀を持、ツカッるこ、見事に水氣上る、二重には大吉芝翫、七と立廻り、皆々きつと目な玉ハテ心得ぬ、今伯父源藤太が血汐か此池水に流れ入るとひとしく芝陽氣めぐつて氷も碎けか七忽水



氣卷上るは富ム、扱は江の嶋明神々、傳へ給ひし神  
束の薙刀、血汐の穢れに此ごとく大水氣を上る長刀  
の奇特皆々ハテあらそはれぬ奇特じやよなアなる水氣  
トきつこ  
納る與六ハ七皆與いでその長刀ハ七此小びつちよト兩方  
皆を突のけてハ七取卷、富最早遁れぬ姉様の敵芝大謀反  
る芝翫大吉ハ七立廻り、富十郎ハ與六ハ立廻り  
の一味の原田六郎玉紛ごもには母の敵ハ七何をト双  
んくトよき見へに玉まづ今晚は是切ト右宜敷打出し目出度幕  
てごつこいと納り

西澤  
文庫傳奇作書追加下之卷目錄

一 觀場性根玉の狂詩十七首

一同 畫の寫四枚

一 淨瑠璃難波土產發端

一同 女鉢木の評注

一 近松平安堂の肖像

一 冥途の飛脚評注

一 戀飛脚道行七役正本

凡 七ヶ條

西澤  
文庫傳奇作書追加下之卷

西澤綺語堂李叟編

觀塲性根玉之詩

不是尋常非人齊、銜敵兄弟蒲鋒栖、一卷檻因辛苦破、  
重代刀爲態物携、卑怯加村寐込伺、流石春藤途方途、  
任教後終遂本望、于今名殘大安堤、

右檻樓錦下之齣

漸定身替氣未平、檢使玄番勢縱橫、吞咳源藏刀欲拔、  
見首松王眼不明、幡顯帷出文庫影、梅飛櫻枯門口聲、  
有合乘物入死骸、昇送夫婦無限情、

右手習鏡第四齣

約束出入行不行、更使濡髮我屋迎、擲俵共盡相撲手、  
扣戶時呼盜賊名、異見於關聲彌抖、律義長吉首堪傾、  
誓言立處講中喜、事終遂結兄弟盟、

右双蝶々米家之齣

大星遊興日夜昌、面無千鳥手鳴方、斧九試剪生銷足、  
力彌竊渡密書箱、於爰叙自楷梯落、寺岡咄因愁歎長、  
蛻籠計略終仕損、水雜炊飲鴨川傍、

右忠臣藏第七齣

曾共三太法眼隨、皆鶴戀慕身上知、已殺淡海豈云駐、  
直名牛若欲與之、開襖忽現天狗像、取面卻驚鬼一姿、  
六韜授娘早切腹、主從難別此塲悲、

右鬼一法眼第三齣

貧家渡世草鞋營、借錢乞來感孝行、乘馬三吉無餘念、  
盛餅乳母祝誕生、八藏砥刀致言譯、桂政把杖立深更、  
豈圖火鉢有金子、門口爲突慕跡征、

右戀女房孝行之齣

庭移致影金閣寺、久吉智謀此地興、軍平迫立直信惘、  
雪姬被縛大膳憎、拔刀共怪龍映瀑、畫花却驚鼠切繩、  
借問慶壽何處在、更揚烟火三重登、

右信長記第三齣

盜賊事畢林未眠、開乎開乎菊之前、忠度已忍此家在、  
在屋竊歸其由傳、比與梶原催夜打、仁義六彌近曉天、  
可憐右腕終被落、戰死於軍一谷邊、

右一之谷第二齣

治世爲恨深編笠、欲來詠入蛙之爭、背顏老母異見勁、  
又手盛長返答明、教訓聞居源藏逼、去狀擲出女房驚、  
更拾小石當鐘處、相圖大鼓分死生、



右古戰場第三齣

殺舅團七氣愈雄、女房愁歎知始終、葛衣縫共戀慕綻、草履卵因親切同、結帶一寸拔協指、袒肩三婦押屏風、捕手役人來欲縛、貫緝掛首落備中、

右夏祭第七齣

手携燈籠花園回、言是齋藤追付來、欲立身替衣裳揃、爲取音頭踊躍催、覆宮出子夫婦意、拭目運眼上使方、無端拔刀打孫首、天晴忠臣鳴老哉、

右大塔宮第三齣

長持切錠出於安、五人又手頼万端、誕生在處小辨告、御運開初來現歡、把鏡委解島辛苦、舉顏漸語都愁嘆、山上時戰血氣男、云是非爾龜王丸、

右姬小松第三齣

聞弟密通置霜驚、卻訝門前嫁入聲、健宗難題含儕恨、道風神文老因情、縱使野未軒端々、莫必父上名字明、每手割竹被追卷、不知霑々指何行、

右青柳硯第二齣

世營鍛冶夫婦親、誦咒行者每日臻、愛戀思因狩衣益、離別爭爲荒神新、寶劔打處最後近、御經書終落淚頻、高松時來刺脇腹、初驚老母顯其直、

右磯馴松第三齣

內侍曾伴六代公、尋來和州上市東、家來彌助雲井近、娘之於里戀路工、梶原顯實羽織裡、權太直曲酸桶中、肝癢親父刺腹處、初語妻子共盡忠、

右千本櫻第三之齣

辨齋御供落鴉照、不知高定緣組虛、火摩猶遺兩家恨、鞘破忽出一通書、上使藏人卻殺害、覺悟千晴驚躊躇、紛失唐鞍雖取返、夫如無刀太刀何、

右愛護雅中齣

芝居意趣鬱不開、更待雁金鰲川隈、欄干近赦鯉口伺、下駄遠鳴橋板、一向誤入丈夫案、無息打殺強氣雷、可憐角左武連盡、五人歌行相談哉、此詩一字脫字あるべし

右雁金安治川齣

(右十七回各畫あれども略す)、

淨瑠璃難波土產

(右拔書及び「女鉢木の評註」「近松平安堂の肖像」はいづれも難波土產に載せたるものと同一にして、同書は「新群書類從第六中」に既に收めあればこゝに之を畧す)

冥途の飛脚の評註 附戀飛脚道行七役正本

近松門左衛門作

能川忠兵衛

冥途の飛脚は、正徳元卯三月五

日より竹本座にて、前狂言新いろは物語、切狂言に始  
て出る、今嘉永四亥年まで百四十一年になる、此のち  
傾城三度笠、又戀飛脚大和往來など外題を呼ぶも、  
舊は此冥途の飛脚より出て、少しの増補あるのみ、本  
文の舊本は余か撰當世榮華物語四編目中の卷に出せ  
り、此評に云上の巻段切は、淡路町龜屋の場より、屋  
敷爲替の金を持ち、堂島へ行をうかゝと、米屋町ま  
で歩行所、重井筒四ツ辻の段によく似たり、中の巻茶  
屋は、佐渡屋町越後屋と有て、梅川のせりふに太夫天  
神の身でもなしとあれば、店女郎なる事明らけし、丹  
波屋八右衛門は歌舞妓にて敵役に作したれど、冥途  
の飛脚の書かたを見れば更に敵ならず、道行相合駕  
に勝曼坂の事を述たるは遙に遠きより見渡したる心  
也、廓中の女郎禿まで、正月元日六月朔日勝曼愛染へ  
參詣する事、昔は今宮十日戎に同じく賑ひて、此日は  
門出も咎めず、出は入心の稀なりしも、中興絶て聞ず  
なりぬ、下の巻新の口村は博多小女郎波枕中の巻、心  
清町の段の裏を作せしもの也、是は梅川忠兵衛古郷  
へ行、小女郎惣七の方へ父惣左衛門尋ね行かの違ひ

にて、壁越しの愁ひ裏表の作意雙方とも本文を讀見  
て感すべし、扱此道行を享和三亥九月中の芝居にて、  
淺尾爲十郎一世一代に増補して、龜屋忠兵衛に淺尾  
奥治郎、梶屋梅川に叶珉子、馬士江戸六、下女お辨、つ  
るかけ斗治兵衛、針立道安、傳がば、垂井村助三  
郎、新口村孫右衛門右七役淺尾爲十郎相勤べき所、病  
氣にて淺尾工左衛門代りを勤大當りせり、太夫宮蘭  
美羽太夫、ソキ宮蘭志津太夫、三弦鶴澤文吉にて有  
し、此七役は地狂言計にて所作事ならず、天保二卯年  
盆替り、中の芝居にて中村歌右衛門梅玉道行の中へ、  
七役早替り所作事を勤し時、余作せし其役割は、新口  
村孫右衛門淺尾額十郎、梶屋梅川中村松江、針立道安  
嵐舎丸、お影參り藝者路江瀬川路之助、忠三妹お竹中  
村梅花、傳が婆中村歌七、蔓掛とち兵衛淺尾國五郎、  
福壽屋長命中山文七、龜屋忠兵衛万歳才藏馬士仕合  
よし藏、大和屋法六、願人坊主道安、娘お福右六役中  
村歌右衛門相勤む、元孫右衛門と七役のつもりなり  
しを、額十郎にさせ役割には俳諧師唄玉の相手は、垂  
井村助三郎に小川吉太郎を出したれ共、所作多けれ  
ば略して六役にて果しぬ、其時綴本の歌淨瑠璃出す



べき所出さず爰に其正本を書、造り物淺黄幕、並木の松雪降の体、在郷にて幕明ト花道より順禮古手買西の通て行節季ト雙方節季候同だいト紙屑てん紙屑順禮順禮に御報謝ト親ひ宅兵衛殿順門平殿古手彌藤治殿せきい傳藏殿同我々かく姿をやつし徘徊致せど古手かの梅川忠兵衛二人の者せきい一向に相見へぬは三人如何致した物でふらふ順イヤ此大和は生國なれば何れ一度は參るでふらふせきい然らば今一應尋ねて見升ふ古手せきさやふ仕り升ふ順何れもぬかり召れな三人心得ました四人おわかれ申すトわかれ東西へは入口に成「落人の爲かや今は冬枯て、薄尾花はなけね共、世を忍ぶ身は跡や先、人目を包む頬かむり、隠せど色か梅川が、なれぬ旅路を忠兵衛が、心細くもふたりづれト此内淺黄まく切て落す、向ふ遠見に在所雪ふりの書割二重のけれト此草ト手、松の實木、松の釣枝雪つもり有、此二重の上に歌右衛門着流し、二本差はうむりにて、手に三度笠を持、松歌イヤのふ江にきせている、松江着流しけいての形りにて居て梅川、そなたは廓より外へといふてはあるかぬに、雪道といひ定めて草臥たであらふ、持病の癢でも起りはせぬかや松イ、エ私よりお前の心遣ひ、それを思へばしんごうもムんせぬが、全体爰は何といふ所でムんすへ歌ヲ、爰はわしが生れ在所、四五丁ゆけば

實の親孫右衛門様の内なれど、不通といひ殊に今の身の上では、おめにかゝるは大きな不孝、直に逢も面ぶせ、其上そなたと一所に死んでは、師匠治郎右衛門様へ義理立ず、又義理の親妙閑様やおすはにも言譯立ず、そなたに科はない事なれば、どこへなりとも落のびて、翌日わしが召捕られ、お仕置に合て死だれば、一遍の回向香花をたむけてたも、是梅川頼んだぞや松マア、待て下さんせいなア上梅川もせきくる涙、今こな様のその様な、憂めは誰かさすぞいな、あじな一座の附合に、思われそめて思ひそめ、いとしつかへに可愛が癢、逢たいが色見たいが病ひ、戀しい顔が藥より、按摩様より灸より、氣合がよふなりや惡ふなる、お袋様の御機嫌が、そこねて見へぬあけの日は、ふみでくり出し口舌でとめよ、その揚屋の勤にも、やく待霄の鐘を恨み、お前に逢夜の曉は、きぬぎぬの鳥をかこち、笑ふてわかれ泣て待、流れの里の苦をのがれ、身儘に成て儘ならぬ、同じ浮世におんなじ花、吉野初瀬の常夏に、櫻がさこじやあるまいし、雪は白ふてお月様は、いつでも丸ひじやないかいな、譬へ掟にあふとても、ふたり一所に是此ごとく、手に手



を取てといだきつき、又とりかわし泣涙、袖の氷と閉あへり、忠兵衛もとも涙歌そふいふそなたの心なら二人一所に死出三途、あれくすいと向に見へる藁薈は、忠三といふて親達の家來も同前、久しぶりで逢たふもあり、今宵はむかふで夜を明し、たとへ死とも古郷の土松アイく夫は嬉しふごさんす歌何かの咄は忠三方にて松そんなら忠兵衛様歌梅川おじや上いたわる身さへ雪風に、こゝへる手先懷へ、あたゝめられたつあたゝめつ、石原道を足曳の、大和は爰ぞ古郷の新的口村へぞ着にけるト上手より雪もちの屑家を引出しこまる歌是梅川爰が則忠三が内じや、どれ尋ねて見よふわいの松わたしが居ても大事ないかへ歌ハテ何のかもふ事、おじやおじや忠三殿お内か、久しふお目にかゝりませぬ上「おこなへばすつと出たる妹のお竹 梅花アイく」ごなた様じやへト梅花在所娘の拵、前垂たすき下駄かけ火吹竹を持出 どれからお出なさんした歌ム、忠三殿にはお内義はなかつたか梅アイ忠三は手前じやが、兄様は今の先庄屋殿へ、ごこからムんして何の用でわせさんした、わしや隣り在所へ奉公にいて、近比内へ戻つたゆへ、兄様の近付しりませぬが、もし大坂の衆じやないかへ、こちの親かた

孫右衛門様の息子殿、大坂へ養子にいて、けいせんといふ者をたんと買ふて、人の金を盗み、その傾せんを手にて「ヤア走つたごやら、こつごやら、代官所からきつい御詮義、孫右衛門様は久離切て、おかみの構ひはなけねども梅血をわけた親子なれば、いとしや年よつてきつい案じ、兄さんも馴染ゆへ、もし此あたりをうろいて、見付られはさつしやぬかといかい氣苦勢「庄屋からは呼に來る、ヤア寄合じやの印判じやのご、節季師走に爰らあたりは、傾せん事でにへかへる梅ア、うたてのけんせんやのふ」しらねば遠慮もなかりける歌成程く、大坂でもその取ざた、わしらは夫婦つれで年籠の參宮、なつかしきによりました、ちよいと呼できて下さらぬか梅ヲ、それは安い事、一走り行てきませふが、爰からは大ぶの道、是女中様、まゝが仕かけてある程に、出來そこなはぬ様に、是さしくべて「下さんせやいのご、かたまへ下りに水鼻たらし、おいごよぢらかし出てゆく、跡に夫婦がうつごりと、暫し詞もなかりしが、泪にまじる袖の雪松あれまた雪が降るわいなア歌忠三殿の歸らるゝまで、内でしばらく待合そふ「いひつゝはいる

西受の、反古障子を細めにあけト窓より覗く、此松忠兵衛様見やしやんせ、雪風で寒けれど、よいけしきでムんすなア「見やる野風の畑道、後しぶきの雪ふきかたげていそぐあみだ笠、道場まいりぞつゝきけるト仕出し、下駄傘肩衣にて西「梅川見や今向ふへいかれたの通ひ道花道へはいる

衆は、在所の近付の衆じやはいの「ワキ」お前の念比もムんせふなア馬士歌「あいがねエとふけりやナアエ上「吾妻からげに頬冠り、腰に馬びしやく手に轡、こりなりしやんと鈴の音も、いさみて急ぐ片手綱ト直になれての歌に成り、東手を歌はやし方の臺突出す、西のかよい道が、歌右衛門馬士にて路之助ゆかたがけ、ぬけ参りの拵、馬に三味せん箱をつけ、面三ツ四ツな歌いめくしい畜生め、一番く立付、跡が出て中程にて立ずくみやアがる、何たばりでもこくかふん張め、箱根山でも通りやしめし、叩なぐられるなよ路あれサ馬士ごん、此雪道はすべるゆへじや、どれく跡足のわらんじがきれてある、マア向ふではきかへさせておやりよ歌エ、いまくしい上「エ、こゝ腹もひる、さがり口綱引ぱりあゆみくる歌サア姉さん、是からひら地だ、早く乗て貰ひ鯛の目だ路ヤ地口かへ、此三味線箱で乗悪いわいな歌エ、三味線かわつちや刀箱かと思つた、さみせん箱にしちヤアかわつたよふだ

路イ、エこりやお客様に貰ふた、延棹じやわいな歌ム、そんなら参宮をするのに是がいるかへ路サアそこが抜参りの女の事、路用といふては持て出す、此三味線さへ持て出りや、泊りくでお客をつこめ、お参り申たその上で、馬士ごんわつちや生れは江戸じやはへ歌ハ、ア道理こそ路五年跡にこつちへ来てな、本にくお馴染もなひ、ふつ、か者の道案内、うへうへの上町様が橋渡し、堂島せふか高麗橋かと、皆様の心はぼさつ米屋町、本町く啞じやムりませぬ、もはや御禮の安土町を越升て、道修まちかこうせうじ、安治川な御縁から、御最眞あまる尼か崎、沸がごときの泉町、歸る鹽町心納屋町何順慶町な事い、おる、唐物町へなど江戸堀へなりと、博勞町に久太郎町にくされと、平野町にいわれまして、ハモウ淡路町のお心かと、備後町の便もなく、御恩の程を大寶寺町、再び参りて會所町、いろく口に岩田町でも、木津川つよふいひ兼て、心の竹屋町をつぐくに、ざこばつとした口上を、隅から炭屋町まで、づいと申上まする歌よふ濱村屋ア時に駄賃がなけりや三味線で暇乞、駄賃に引たりく路イヤモだめのため迄お前のお世



話、そふして此馬に付た張子の面は何じやへ歌是か  
 是はね煩腦くこの娘がみやげに頼んだ此安面、  
 近所のがきへも手みやげじやて<sup>ト面を取上る、歌</sup>サア駄  
 賃がはりに一曲所望じやく路アイく合點じやわ  
 いなア路歌「三味せん」のなアやれ三筋の系の三瀬川  
 ア、やれ駒にひかれて花の浪花を暇乞ヤアあゝれ  
 「下妻のナアア、やれ檀所の御所化の事づけにア、や  
 れお久せうはまめなかねこそだつへヤアあゝれ  
 「下むらのなアア、やれ出店にかけし染絞りさア、  
 やれ梅玉め玉ごよくも染わけましたごなやアあゝれ  
<sup>ト路之助三味せん歌、</sup>歌ヨウく面白ひく、そんなら  
<sup>ト右衛門うかれて踊り</sup>一番錢別に爰でおれが、伊勢みやげ<sup>ト右の面を三方へつ</sup>  
<sup>踊歌</sup>「よいサこごしやお影で<sup>トヨイセ</sup>達磨さんもまい  
<sup>ハレハノセ</sup>足がヨウないので<sup>トヨイ</sup>施行駕サ、ヤア  
<sup>トコセヨイヤナハレハノサコレワノササ、</sup>なんでも  
<sup>ト是より路之助、曲ひ上</sup>行も送るもお影の歌、おつと音  
<sup>ト是にて路之助をのせかけ、歌右衛門つまづく、路</sup>頭ではやし立<sup>ト是にて路之助をのせかけ、歌右衛門つまづく、路</sup>  
<sup>路箱根なア八里ハナアンヨエ歌エ、</sup>ぼゝした報ひか  
 やらかせく<sup>ト早歌に成り花</sup>上世の中に商人でなく職  
 でもなく、杖一本で世を渡る、瓜のつるかけ斗治兵衛

さて、年は八十はつたつしたる達者物、あゆむ跡か  
 ら炮燂屋さむさでふるひ御隠居ご、聲かけられて立  
 留り<sup>ト西の通ひ道より國五郎、ほうろく頭巾、肩衣杖傘跡方</sup>國五郎  
<sup>歌右衛門せわやつし、ほうろくやの荷をかつき出て</sup>  
 ヤア誰じやごおもや、豆入丁の大和屋のほう六か、  
 師走商ひわ御苦勞く歌斗治兵衛様おとしに似合ぬ  
 お足もご、御げんきてふりまするなア國こりや茶に  
 してほうぢるか、年は八十齒も丈夫、耳も聞へる眼  
 は目がねかけず、現銀かけねなしじや歌國ハ、ハ、  
 、上笑ひながらにあゆみ行<sup>ト本舞臺</sup>國時にほう六や、  
 此マア土で拵た物を、その様に澤山に持て、何ほ程利  
 になる物で、ちご外の物ではねを折、もふらくやにな  
 るのがよいてや歌ア、勿體ない事いふて下さり升  
 な、今夢がさめての此商ひ、田畑かけ家屋敷残らず人  
 に取られたる、もごを糺せばおやま藝子にうかく、  
 と歌「赤い海道で巾着ひろたごなアズイ、あけて見  
 たれば古札ばかりでなアズイ」あまり叩くと思ふな  
 きせる、にくてすわりよか吸くちをしようが「さつ  
 まさつまごさしてはゆけご、いやなさつまのかな山  
 しようがへおもしろや國それで其身の樂じやく  
 歌もふらくじや上らくじやくと戯れて、急ぎく



て行にけるト是にて兩人上「大女子骸へ月のさゝはり

が、めぐり過たかはたゝと、牡丹餅腹ぶと名代もの

細き野道を傘で出かねる傳が婆々、栗毛荒馬緋威、關

取の嘶の種や道草に、大和万歳道連にて、愛敬有ける

あら玉道、いそぐ達者ぞ徳若きト西の通ひ道より、七傳が

衛門万歳の形り「七是目出たや殿、嘶するうち見やしや

れ、忠三が門まで來ましたわいの、イヤ又おいらの息

子と違ひ、お前方は錢もふけて親を養ひ、大坂へい

ても目出たやゝと人にすかれて錢もふけじや、マ

アゝゝ随分達者で歸らしやれや歌ハイゝ申婆々

様、その替り二月の末に戻る時には、みやげを買て來

てやりやんしよしづかにムれやッセア、是々才藏殿

でもせわしなひ、マア門出の祝義に立舞りて行がよ

い、どれゝ錢別心で冬の内から春まつゑんぎじや

ト財布より百の錢出して紙にひんねじて「サア万歳殿、内の清めをして下され

歌是は有難ひゝゝ、そんなら相手はいぬけれど、鼓も

舞もひとりして、さらば爰にて始めよふか「万歳と

や二人連なる万歳が、ひごりは峠でござゝと、跡

にのこりし万歳は山の麓で友よふ調エイすぽぼん

のぼんゝすつぽすほゝゝすつぽぼんと、打ては友

を呼て候、べらべんのべんゝべらゝ口をつかふ

ぎに、いふもお前のつらの皮、張と意氣地に二度の藝

子を引眉、すつべらはんのぼんとだまされて、三味線

蛸の出来るまで、勤たわたしでムリ升、野邊の小松

のひくにひかれぬ事はない、なアそふじやないがな

いかそふじやないかいな、百万年の御長壽と、祝ひ申

て通りけるト歌右衛門先に、七花道へは入る「上「憂事のつもれば雪が積

のたね、腹にでつかりてゝなし子、産月までもてうま

んど、おなかゝしくゝ針立のぐふあんじ、てもい

かれぬゆへ、親が引立此道へ、咄も呵るもふくれ頬

ト西の通ひ道より、舍丸頭巾羽織相口とし醫者の拵、歌右衛門またふ

くふり袖もめんやつし娘にて、傘をさし乍つれ立出て本舞臺へ來て

舍丸扱々徒ら娘にかゝつて、霜月師走の果に、不孝不

埒の爺なし子を孕んでおるを、親方が是は懷胎では

あるまい、ちようまんであらふちよふまんじやゝ

と、芝居果見る様に身持をかくし、歸さつしやつたは

て、親がしれぬ故、全體おのれは誰とつるんで其様

な腹にはなりおつたぞ、サ、それいへ聞ふサアぬか

そふぞ上「腹立まぎれにのゝしれば、娘はとかうの詞

さへ、たゞなくのはきゑんがわるけれど、十四のとし

に番太郎の四ツ兵衛さんに、あら〇〇を割ていふの

も身持ゆへ、それから横町のくうどんやの二八さん、夜食のぶつかけふるまはれ、それがこふじて大道で、たびくさしたる傘枕、とさんゆるして下さりませと、水涕垂し落しいる、道庵始終手を組て、覺へぬ針で多くの人の、腹へ針して殺した報ひ、針は立ねど腹のたつ程おこるは今まで藥代を、我等にしたかと思われて、いかり狂ふぞ道理なるト舍丸にらみつける、是より六段の合方、歌右衛門腹のいたむ舍ヤア、扱はけが付たか、エ、是途中といひ身共一人、コリヤくしつかりと心を丈夫にもて、のるなト六段段くはやめる、歌右衛門くるしむ、舍丸介抱して傘を見物の方へ直し、すてざりふにて介抱する、本つそりや出たはト胸りしてへたる、歌右のぬいぐるみにてひよつと出る、歌右衛門戀の重荷にやすや門舍丸胸りして、子役をさらえふとする、す安さん、あごをしごふてト三重に成り、赤子すりぬけ一さ丸跡ふて走りに入る、直に鳴物に成、歌寒の師走も日の六月も、若ささむさのなき坊主、奇妙ちよんがれくらづくし、白いゆかたに紅ひのふんごしごしと、雪道を寒紅梅のきてんもの、こなたへ來かゝる分限者は、福壽屋の長命といふ男、丁稚を打つれて行かいさまに聲をかけト西の通ひ道、文七分限者の形、頭巾羽織一本差、歌おつと丁稚の子役供して出る、双方本舞臺にて行合ひと旦那お物参りと見たはひがめか、願人が行て薄着

の夏衣一文くらいはいが栗のちよぼくれ聞て下さりませ文七扱もげんきな願人殿、ちよんがれといへど修行者殿、金太よ錢進せいでつちハイトはやみちが錢を出してや歌エ、有難ふ存升、さらば是にてやらかし升る歌、腰の釋杖ふり立て、丑寅の御方には、御一代の守本尊、ほぞんかけたか時鳥、八千八聲なくときく、森の木枯我からと、をはをからすの羽根ばたき、一文もなし梨子も礫もないお女郎、此方すこしもくいやいなし、襟袖口のふくろびも、綿さへ足にかゝりうご文七ヲ、願人殿ゑらいく是着て寒さをしのがつしやれト羽織をは歌エ、有難ふ存ます歌、赤いらしいと名にたつとても、したがよいぞや緋ぢりめん、ちらり白いはだへに雪の中なる紅ばいのいふてたもの、是のいふてたもの、ごふく來たりやごふきたり、鶴の毛衣げんけの毛衣、けれんごうち掛ぬつくりこつくり、くめる藏入すつしりく、粉米のなまがみこ、ん粉粒の二歩金か、鼈甲く共にひかれて臆てふや、万歳く万々歳ごつかりく結こむ、大金はすつしりく、向ふの小藏の小溝に鯉ちよつこによはり踊る拍子もおもしろやト文七もうかれて、頭巾きものも歌右衛門にやりでつちもはだかにし



て、歌右衛門にやる、大太鼓相伴入にて、歌右衛門頭巾を着て、文七釋杖をもちでつちもうかれながら、向ふへは入る、此時下座出ばやし引こむ、花道舞臺一面に白もめんを敷くよき歌あれくあそこ程に窓の内が松江歌右衛門かはを出してへ見ゆるは親仁様、段々の不孝跡、おゆるし被成て下さりませ松ア、あの緞子の肩衣が、孫右衛門様でムんすかいなア歌お年もお足もごもよわつた、もふ是が今生のお暇をでムり升る、随分お達者で お暮し被成て下さりませ松本に親子はあらそはれぬもの、目もごなら鼻筋なら、お前によふ似た事わいなア歌サア夫程よふにた親と子が、詞さへも得かはさぬは、何とした身の因果じやぞいのふ松私もけふがお顔の見始の見納め、申わたしは嫁でムり升、夫婦は今をもしれぬ命上も、とせの御壽命すぎ、未來でおめにかゝり升ふと、口の内にてひとりごと、夫婦諸共手を合せ、むせび歎くぞ道理なり、夫れともしらず恩愛の、子ゆへに迷ふ親心、孫右衛門は老足の休みく門を過、野口の溝の薄氷、すべるをとまる高足駄、花緒はきれて横さまに、どうと轉べは南無三と、忠兵衛もがけご出られぬ身、梅川あはて走り出ト額十郎の出より本行なれば略す

西澤  
文庫  
傳奇作書追加下之卷大尾



## 傳奇作書追加跋

近世専ら流行するものは腰かけの料理家と諸家の隨筆なり、文花日々にひらけ、物事自由なる世の中に、此二事は感すべき事也かし、矢大臣店との聞へは安けれども、山海の珍味嘉肴を小皿に盛、酒は池田伊丹の印ものを飲せ、濕氣魚切の斷りをいわず、また讀書に万卷の書を集すとも隨筆ととなへ、神儒佛より詩歌連俳野史雜書に至る迄、我好む書を拔書して、世に弘む、是をよむ人は隨筆學文とて博識家には笑るゝとも、早學文の司なるべし、此西澤文庫傳奇作書と題せる書は、梨園の作者の傳をあげて、後のちの卷は編者李叟が隨筆也、かゝる戯場の事を書たるは、諸家の隨筆に見る所なれば、いと珍らしき心地せられ、既に卷を次で前集殘編拾ふとあるうへ後集附錄續篇追加と七編に及ぶ、追々に書なば盡る期は有べからず、されど李叟は此七部にて筆をこゝめ、梨園の七書を唱へたき趣を言ひ越しぬれば、此ことわりを誌して聊跋にかゆる事しかり

時嘉永四庚亥初秋

皇都 西六條隱者 久貝老人

娘孝行記

付りいはの國  
手かけが原

座本

山下半左衛門

作者

都万太夫座  
富永平兵衛

上 女いしやのわたぼうしかはいらしきが命

付りいやしけれ共わけよしのおごこ

中 女きやうしやのぬりかたしゆせうらしきが命

付りわかけれ共心よしのおごこ

下 女むしやのはちまきいかつらしきか命

付りおかしけれ共うんよしのおごこ

一 ごとよをかのこうしつ

小かん太郎次

一 ごとよをか右衛門の介

外山千之助

一 こしやう八彌

若松かもん

一 こしもとおきち

かつ山千之丞

一 おなじくおなつ

さかたあいのせう

一 おなじくおかめ

みつしまもしほ

一 おなじくおふり

長をか六三郎

一 おなじくおよし

山むら小かん

一 下人久五郎

座本  
立役

山下半左衛門

一 山すみげんば

しか吉兵衛

一 しそくけんもつ

くごう十郎左衛門

一 おなじく弟市之進

三瀬左近右衛門

一 いもうごふぢがえ

櫻田しのぶ

一 こしもごわかば

あさる金彌

一 おなじくしげの

きし川みよし

一 いしやだうはく

いくた善六

一 兵ご娘おはる

はぎのさまのせう

一 弟松ら庄之介

山下才三郎

一 はらだ源八はゝ

はしもご平すけ

一 こしもご小七

いは井花のせう

一 おなじく小源

きり山まさのすけ

一 はらだげん八

あだち三郎左衛門

一 おちぶせん坊

藤木太次ゑもん

一 でし山ふし

四人

一 大むら彌三郎

山下又四郎

一 きくち彦六

中川金のせう

## 娘孝行記

付りいよの國  
手いけが原

## 三番續

## 第一

たじまの國主とよをかゑもんの介のからう山すみげんばが娘、ふぢがえのり物にのりやしきへかへり、侍共にむかひとゝさまの御きしよくは何と有ぞ、さん候今日はここの外御げんきにて、けんもつ様市の進様とおはなしをなされてござります、何兄さまたちのおそばにござるこや、やい侍共悦べ、とゝさまのきあひのなをる事をきいてきた、兄さまたちへ此よしを申せ、畏てかくと申せば、けんもつ市の進立出やあふぢがえ、父うへのきしよくのなをる事をきいてきたと有が、それは何事じや、さればとゝさまのおわづらひはかくしやうと承る、さまゝいれうをつくさせ給へ共さらにげんきなきゆへかなしう存、此間いすはらのやくしへ七日まふでをいたします所に、かくの病を七日が内にうけ取てなをさふと、はりがみに所を書付御ざ候故、やごへ尋参り候へば、則女いしやでたこくものでござんすが、いかにもなをさふ

と申故、もんぐわいまでつれて参ました、けんもつ聞何といふ父うへのびやうきを、うけ取てなをそふと申とや、さやうにつじくへはりふだをしてやまひをなをさふといふは、まいすものでやくにたつ事でない、たとへば其藥でちゝうへのへゆ有にもせよ、左様なかるゝしいものゝ藥をしんずる事はならぬ、ふぢがえ聞それでも若父上のおはてなされたらば、こうくはいなされふ、ひらにしんせ給へとせりあふを、げんばしやうじの内にて聞、こしもと共に手をひかれ立出、誠に他國のいを入るゝは將のちじよくといへば、けんもつが申も尤じやが、ふぢがえが何とぞへいゆのためと、悦つれて来る心ざしの程もあれば、藥はのまず共先あはふ是へとをせ、ふぢがえ悦それもんぐはい成女いしやに御前へ來れ、藥箱持も來れと申せとあれば、畏て女いしやわたぼうし打かつぎ御前へ出れば、藥箱持のじやくはいもの、つかつかと御前ちかくへ行ば、やいりよぐはいものしされしされとのゝしれば、はるかばつぎへをしなをる、げんばみて女いしやといふはあのものか、いまだわかいが、いだうに心がけ有はきごくな事かな、してそ



ちはいづくのものじゃ、さん候他國ものでござりますが、かくのわづひには家につたはるめいはう御ざ候、此國は御はんじやうの地にて候へば、此所へ参ひるめのためはりふだを致候所に、お姫さまのお尋にあひ、御前へ召出され一入有がたう存まする、しからば先みやくを見よ、畏てみやくをうかうひをししざり、お姫さまに承ましたは、中々大病のやうに聞ましたが、思ひの外おみやくはかるうござります、第一御きのむすぼれゆへ、かんねつとさま／＼みやくはかはれ共、もとは一つにて候へば、お藥をさし上なばさつそくへいゆなされませふ、して只今迄はごなたの藥を上給ひしぞ、いしやだうはく聞されば拙者がお藥を上ました、則びやうはかくしやうと見まして、くはんしつたうを上ました、こなたの見たては何とぞ、私もかくと見ました、わうれんしゆくしやなごをかみ致上ふと存じます、是は尤に存る、げんば聞見立があふておもしろい程に、女いしやの藥をのふで見よふと思ふ、是にて藥をてうがうせよ、畏てそれ藥箱持といへば、さいせんのじやくはいもの藥箱を持出る、なふそなたも是へ出おめみへしや、あなたが

んば様じやといへば、けんもつ市の進きしよくへんじ、やい／＼すでつちめはそちが下人どみへしが、そのものにさいせんよりのことばづかひ、がてんいかぬと思ふ所に、是へ出ておめみへを申せ、あれこそげんば殿よく見覺へよといふは、扱は父げんばにうたれしまつらひやうごが兄弟の子共よな、此國へ來り父上をねらふと聞しが、扱はをのれらにまがひなし、それもんこをうつてきやつらをのがすなど取まはせば、是は何をさはがせ給ふ、此ものは私がでしでござります、それ故今よりはおやしきへ参り、おり／＼はおみやくをもうかうひ申ためおめみへをねがひました、まつたく左様なものではござりませぬ、おかへしなされて下されませ、いやさ何程ちんじても、のがしはせぬどの、しれば、げんば聞やれまてぎやう／＼しい、よしは其もの共にもせよ、此じやくはいもの共が何程の事があらふとをししづめ、さあさあ藥をてうがうせよ、女いしやは是あなたがげんば様じや、重ておめにかかるためじやよく見覺へ給へ、扱はあなたが山すみげんば殿か、ゑ／＼くはほういみじい有様やと、うらむる心に思はず身ぶるひせし

をげんばきつとみてやいもはやのがれぬ、あのじやくはいものが身が名を聞て、うらむるまなこに涙をうかめ身をふるはしたる有様は、ひやうごがせがれ共にまがひない、何程ちんじてもかくれはないぞ、せひなのらぬごがうもんするが時に女いしや、是庄之介、そちは何がおそろしうて、涙をながし身はふるはしたぞ、ゑゝみれんな其心で、あのくはほうゆゆしきげんば殿がうたれふか、あね様は何を仰らるゝ、敵も是に聞てじやに、何おそろしうて涙をながさふぞ、こなたの仰らるゝはあれこそげんばじや、よつく見覺へよと仰られしゆへ、扱はあの人におやをうたせたがゑゝむねんなと思ふて、父上の事を思ひ出したれば、思はず涙がこぼれて身をふるはし升た、扱は父上の事を思ひ出して、それで涙がこぼれたか、おゝだうりじやと兄弟思はず涙にむせびつゝ、是々げんば何をかくさふ、此三年いせん九月九日に其方がうつた、まつらひやうごが兄弟の子、姉にはる弟に庄之介といふ二人の子じや、去ながら今日、是へきたは其方を討にはこぬ、きけば其方は病におかされ十死一生と聞、あゝ心もとないもしびやうしあらば、たれを敵じ

やといふて討ておやへはたむけふ、何ぞぞ病へいゆさせ、其後討はたさんため、さいはひかくしやうには家につたはるめいはうの薬有ゆへ、女いしやと成て今日きたは、其方が命をすくひにきた、げんば聞いやさいふまい、しからば女一人来るべきに、弟は何故同道した、庄之介聞さればおや兵庫が討れし時分、某はかくもんのためしのかたへ行有あはせず、それゆへ其方がめんていを見しらぬゆへ敵のおもてを見覺んため來つたげんば聞、むゝ身をたばかり討に來りなば、さつそく取まき討取べきが病氣を聞病をたすけ其いごにせうぶをせんため、薬をあたへに來りしと有ば、このたびは命をたすくる、やいじやくはいもの、何と只今でも身が相手になつたらばせうぶをせふか、何が扱相手にさへ成て下されば本望でござるおゝしからば心ざしがやさしい相手に成て、一き打のせうぶをしてとらせふ、けんもつ市の進退は御病中に何事ぞ、我らに仰られよつかみころし申さん、いやきやつらをころさんにはかごの内の鳥なれ共、じやくはいものをよびよせ取まき討たといはれては、此げんばが一ぶんがたゝぬ、其上某病中じやと有て、



あのじやくはいものが五人や十人は、かたうでにもたゝぬきづかひをするな、さあ兄弟のものをいそいでよいいをせよ、あねはる悦、かやうのばをねがひしにうれしやと、兄弟たちぬき立あがれば、げんばみておゝけなげな、子共侍共立上つて、けんぶつせよと、やりおつとれば、けんもつ市の進侍一ごにはらりと立、此いろめをみておはるは、先お侍なされて下され、一き打のせうぶをなされて下されふと有はかたじけない、とてもものに此しあひを、當月中のべて下されまいか、庄之介聞是あね様日比ねがふたる此しあひを、のべてくれひとはどうじや、さあ今我々がここで討はたした時は、あこでのこりおほがる人が有らふが、それはたれが、はて源之丞殿が、おゝ源之丞殿聞給は、残おほふも思やらふが、今に行衛のしれぬ人がいつ迄またれふ、どうでも今打はたさねばならぬと聞入すせりあへば、げんば聞さればそち兄弟の外に、まだねらふものが有か、おはる聞されば私がいひなづけのむこに、はらだ源之丞と申御座候、其行衛がしれませぬ、聞ば此近國にゐらるゝと承る、此人を尋出し一しよに本望がとげたう存まする、むゝ

聞へたこりやじやくはいもの、此げんばが一ごんけいやくしてからにはちがひはせぬ、當月中のべてとらせふ程に、其源之丞とやらが行衛を尋、一しよに來つてせうぶをせよ、庄之介聞いやくゝこなたは病氣のことなれば、あすの命も心もごない、是は尤じやしからば其方が家のめうやくををいてゆけ、其上藥迄もない、此きしよくで、まだ當月中などにしぬる事ではない、去ながら命にはさだめない、もし左様ないろめになつたらば、此方よりよびよせ本望をとげさせふきづかいをすな、兄弟悦然らば當月中相のべ、其後はじんじやうにせうぶをとげ申さんどけいやくし、れいぎをなして歸けり、げんばは子供近付某も其間に、若殿へ御かこくゆづりをなし申さん、其ようお願いといひ付おくへ入にける、こゝに右衛門の介のやかたには、こしもと共あつまりてみそをつきる所へ、下人久五郎はお使に行、うをかこご花いけをかたげ歸ける、こしもと共みてなふ久五郎、女計ではかい加ぬちとすけてたも、こりやめをあいていへ、手には物をもつてゐる、あしでみそがつかるゝ物か、はてさういはずとついても、そんならついてやらふ程に



をれがいふ事もきけよと、きねを持ちやうしにかゝつてみそをつく、所へ又こしもとおきちおくより出なふ久五郎そちはおみだいさまのお使に行、お返事もいはずに何してゐやる、こしもとおなつおかめ聞、なふおきち久五郎にはこちらがたのんでついてもらふ、久五郎はそなた一人のうけもちでは有まい、あまりしかりやんな、おふりおよしは、あのはづが有、久五郎とおきちとはよい中じやげなみた事が有、おきち聞そなた衆はな立かましい、其やうな事いふてたもんな、何をみやつたぞといさかひて、きねはうきにてたゝきあふ、所へみだい出給ひ是はさはがしい何事じや、やい久五郎、そちは使にやつた其へんじもいはひで、こゝには何してゐる、いつがいつ迄いやしい奉公をせふと思ふ、をれが若殿へいふて、引上てとらせふと思ふて、馬にでものりならへといへばあぶないといふて、何をするぞと思へば、女こしもどのへやへ行、まゆをたれてやつたり、おはぐろをあたためてやつたりしてゐる、それでやくに立か、どうで侍にはえ成まい、こしもどの内を女ばうにもたせ町人にしてやろふ、それが女ばうにほしいぞ、久五郎こしもど

が cah を一人く打ながめ、あのきちに致しませふ、おゝきちとはきいた事も有、さうであらふこの給ふ所へ、小性八彌あはたゞしくはせかへり、扱も今日山すみげんば御かどくゆづり致と申て、若殿をしやうだい申おく成ねまへつれ行、御供の人々をくもでゆひたる一間へをし入、何とやらげんばぎやく心のやうにあひみへ候、それ故先おしらせのため立歸ては候へ共若殿の義が心もとなきゆへ、あれへ参るといひすてはせ行ば、こうしつおごろき扱はぎやく心か、もしそれなれば此方にかくご有、其やうすがしりたいが、一家中は若殿の御供して行ぬれば、たれをつかはせふものもない、やい久五郎そちはみづからが見とゞけた所が有程に、げんば方へ行きやく心か又さもないか見とゞけてかへれ、此度若殿を御供してつれ歸らば、三千石のちぎやうをあたへからうにせふ、是ははなそぎ丸といふて大殿の刀じや、是をさいて侍に成つてゆけ、侍に成てもさきへゆきなばきらるゝであらふ、しんではからは三千石の地行もらふて何にしませふ御ゆるされませ、やい行ぬと手討にするが、すれば行ねばこゝでできますか、よいどこで

しぬるもおなじ事じや、參ませふとしづかにあゆめば、はてはやうこじてもつまげていそいで行、こしもご共立かゝりしりをつまぐれば、ゑゝ何をしをる、それは風ひいてゐる、しに、行がよい事かあはうらしいと、いろ／＼の事をいひ行かねるを、こしを押むりにつきやれば、久五郎せひなくげんばがかたへ行にける、かくてげんばは右衛門の介殿をしやうだい申、けんもつ市之進侍のこらず相つむる、右衛門の介の給ふは大殿のゆいげんには、某二十に成てかどくをわたせと有と聞しが、今年いまだ十七成にかどくをわたさふと有心入は何ゆへぞ、げんば聞御尤成仰かな、おまへは御存じ有まいが、まつら兵ご申ものを某が手にかけて討ました、其子共おや敵とて某をねらふ、此比其もの共にあふて、當月過ればせうぶをせふとけいやく仕つた、其上かくやまふの身なれば、某存命の内に大殿よりあづかりをきし、かどく家のてうほうを渡さんご存じしやうだい申た、それ／＼たからのしな／＼を物語申若殿へ相渡せ、娘藤が之承りて立上り、其しな／＼を／＼になかば程かたる所に、げんば俄にめをみつめ、くるしきこゑにて殿はいづ

くにござるぞ、あゝもはやおかほがみへぬ、なむあみだ佛／＼とつるにむなしくなりける、人々はこはかなしやごしがいに取付なき給ふ、所へおはる庄之介兄弟やしきへかけこみ、げんば殿には心もごなきやうすを聞かけつけ候といへば、右衛門聞召、扱はげんばがゆいごんに申た、兄弟のものといふはそちたちか、げんばは只今むなしう成しとあれば、兄弟はなむ三ぼうとあきれるる、庄之介はゑゝ口おしい、いせんの時討はたせば本望とぐるに、よしない人にへだてられ敵はえうたず、すぐ／＼とじがいするになつた、無念やこはらをきらんとすれば、あねをしごめそちはしぬるか、おゝこなたのいひな付の男にほだされて、しあひをのばし給ひしゆへ、おやの敵はしにうせたれをうたふぞ、じがいさするはこなたがさする、おゝさう思ふは尤じやが、男に心が残てしあひをとめたではない、尤げんばは一き討のせうぶをせふと口では申されたれ共、何とやら其ばのけしきが、取まいて討んやうにみへたゆへ源之丞の事をいひのばして下されといふたは、其ばのしほにいふた、其うへげんばしゝたるごは、聞た計でせうごがない、しがい



をみて其後のしあんにせよと、市の進にむかひうたがひをはらすためなれば、しがいをみせ給へけんもつ聞、只今かこゝゆづりの事がすまぬ、此方の用をしまふて後しがいを見せふ、長やへ行てまて、兄弟聞しからば待る申ぞと、先ざじきを立さりける、扱けんもつは市の進にむかひ、さあ望じせつは今也と、さしぞへをぬきだいにのせ、右衛門の前にすへ是殿げんばがおんをきたるものにはおひばらをきらす、こなたの今殿といはるゝも皆げんばがかけじや、すればおんをきたまひしこなたなれば、いそいでおひばらをきり給へ、我々兄弟がかいしやくいたす、右衛門聞何といふ、けらいのおひばらを主にきれとはめづらしい、扱は内々ぎやくしんを思ひ立共、おやげんばが有内はをしかくし、只今しゝたるをさいはひに、身にはらをきらせ此國をうばはんこの事か、おゝよいがてんか程ぎやくしんじや、のがれはせまいかくごせよ、右衛門聞主を討て國を奪はんとはそこな人でなしめ、ゑゝ無念な是迄こじがいせんこし給へば、藤がえすがり付兄共はあくをたくむ共、私は一所でなし御じがいとはもつたない、いやこゝをはなせとあや

うくみゆる所へ、久五郎大小をさしはかまのものだち取、侍のすがたご成つかゝとあゆみ來り、ゑもん殿の手を取何ゆへじがいなさるゝお待なされ、右衛門御らんじ其方は見なれぬものじや、殿には某を見わすれ給ふかふだいさうでんの、おゝ誠にそちは久五郎じやな、いかにも平のあそん久五郎のせう時かつ、けんもつ市の進聞けつかう成衣服をきて大小をさしたるゆへ、何ものぞと思ふたれば扱は下ろうの久五郎めか、はておかしいなりじやと打わらへば、いやさたごへきのふ迄はくつをごろふ共、其こうにより一國の大名にも成其れいをしらざるか、けんもつ市の進あざわらひ、下すのぶんとしてをのれが何のこうあらん、いやはやかたはらいたい、久五郎聞何某がゆいしよが聞たいか生れたる所は九州あそのこほり、七さいにてはりまの書しやさんへのぼり、しよがくのものに人一じをならつて千じもんをさごり、十三の年おやのかんだうをかうふり、日本むしやしゆ行して、大天ぐ小天ぐこのは天ぐめらをはりまはし、ならひえたる兵法は、げんりうねんりう、しんしんかげ、かしまかんごりふでんりう、ゐあひやはら力わざ



心にかゝる事なければ、我ながら久五郎はあつはれ  
きようもの、去ながら日本の内に某か主と頼まんも  
のなければ、我と身をかくし下ろうと成、水になひ  
からうすをふんで、くたびれたる時は、一すいの枕に  
かいこけたる有様は、心有ものはせいじんけんじん  
共いはん、所に今日おみだいの召出しにあづかり頼  
むと有一ごんによつて、若殿おむかひに來つた某を、  
げす下ろうとはすいさんな、かやうにいふたるぶん  
にては誠共思ふまい、さいた刀は三尺八寸お家のて  
うほうはなそぎ丸、ぬけばくびちるかいなちる、ちと  
久五郎が手なみをおめにつかへかこ、たちのつかに  
手をかくれば、けんもつ市の進きもをけし、左様のゆ  
いしよ有としらいでそさう申た、此うへは成程はう  
ばいでござるぞ、おゝさうなうてはかなはぬはづ、し  
て殿には何ゆへ御じがいはなさるゝ、されば聞てた  
も、げんばが相はてたれは某におひばらをきれとい  
ふ、何げんばはしゝ給ふとや、それはいかいお力おと  
し、忝若殿へおひばらとは何事ぞ、けんもつ聞いや私  
らが申でない、げんばがゆいげんなれば、はらをお切  
なされまいかと申事じや、久五郎聞此ゆいげんはが

てんがいかぬ、げんばにちきにとはふと、しがいをふ  
みつけこれげんば、殿にははらを召れとはそちがゆ  
いげんか、なせへんじをせぬ、大殿の御めがねにてし  
つけんをかうふり、國を預るものなれば、こんはめい  
ごに行共、はくは此世にごゝまつて久五郎が一ごん  
をきけ、をのれは大不忠のやつじやなせといへ、子を  
みる事父にしかずといふに、いき引取とぎやくしん  
をおこすせがれ共を、ぞんじやうの間にゆるしをい  
てやみゝゝとはてたは、なんと不忠ではないか、した  
が誠にしにはせまい、其身は死去といつはり、せがれ  
共にぎやく心をおこさせ殿を討て、其後そせいした  
るご世上にふうぶんさせ手をおろさず、お國をうば  
ひ取んとたくんだな、なんとげんばへんどうはごう  
じやと、よぎ引のけみれば、しがいとみへしは米だわ  
ら也、是はげんばは米になつたか、たわらををつ取を  
のれら一々打ころさふか、いやゝからうすふんだ  
ごどくにふみころしてのけふ、やいげんばいづくへ  
にげたぞとのゝしれば、げんばおくよりかけ出、やい  
久五郎をのれはおそろしいやつじや、成程そちがす  
いりやうの通、もとかくのわづらひといふも殿を討

んたののいつはり、其うへ身をねらふやつが有ゆへ、病死したるごいつはり、其者共にじがいさせ、身をらくらくと送らんためじや、此しあん我身ながらもあつばれでかしたと思ふに、見あらはされしよな、をのれ打ころすはやすけれ共、なんぞのやくに立ふやつじや、向後身に奉行せよ、地行をあたへん、此久五郎に奉行せよとはいひにくい事をいふた、此うへはそちが詞にしたがい、右衛門殿のくびを切てみかたを申さふが、ほうびは何をくるゝぞ、おゝほうびはそちが望にまかそふ、さあらばほうびには、げんば一家の者共がくび取ぞさあ渡せ、げんば腹を立すいさんなあれ討され、承て大せい一ごに取まはす、心得たりと久五郎たちひんぬききり立れば、おくをさしてにげ入を、をのれのがさふかとおひまはり、なんなくげんばを取てふせる、所へおはる庄の介は右衛門の介を手ごめにしかけ出、こりやゝ其げんばを討と此殿を討ぞ、久五郎みてじやくはいなやつらじやが、殿を手ごめにしたはいゝしいもの共じや、げんばがけらいでは何といふ者ぞ、いやゝけらいでないげんばは我々がおやの敵じや、そちに討せては討ふ敵

がなきゆへ殿を手ごめにした、何げんばは敵とや、すればたがひにいしゆはない、して其方がけみうは何といふものぞ、庄の介聞お、此三年いせん、かりばの遺恨によつてげんばに討れし、まつら兵ごが兄弟の子に身は庄の介といふものよ、すればそちはあねはるごいふたものか、おゝいかにも、名をしつてゐる其方は何人ぞ、某こそようせ、うの時おやがいひなづけ有、はらだ源之丞といふものじや、やうす有て國を立さり身をかくしゐたれば、兵ごの討れ給ふもゆめにもしらず、しうとの敵としらで、此げんばを今迄いてをきし、さわよつて本望とげよ、心得たりと兄弟はおやの敵覺へたかときりつくる、右衛門の介は國の敵覺へたか、源之丞もしうとの敵思ひしれと、さんざんにきりちらしごめをさし、家中皆一みなれば取巻れてはいかゞ也、若殿が大事じや先御供申立のかんど、ふしぎにふうふのたいめんし、右衛門殿の御供申立のきける、娘の身とおやの敵をうつことはげにかうゝのしごくなり

## 第二



とよをかのこうしつは女ぎやうじやにさまをかへ、こしもと四人御供にて、ぬりがさふかく打かづき、人めをしのびおち給ふ、然所へむかふより二十計の若侍、馬上ゆゆしく打て通る、折節川風はげしくして、こうしつのかさをふきおとせば、はつと驚ろき袖打かざして通らせ給ふ、かの侍きつとみて馬よりとびおり、あやしや人めをしのぶは何者じや、まつすぐに申せとやりを取ぎせいすれば、こうしつ聞召、いや我らはかうやさんけいのしゆ行じやにて候、あるひはしにんのしこつはつこつそりかみをこづかりかうやさんのこつごうにおさむる、しこつそりかみはけがれたる物成ゆへ天道へのおそれを思ひ、かさをかづき通る所に、風にかさをとられ候ゆへ袖をかざし通、それにふしんはなき所、いやさつゝむな其方達は、此度の國あらそひに付、人めをしのぶおちうごゝみへし、女の身としてかうやとなせいふた、こうしつ聞なむ三ぼうよしな事をいふてあらはれた、何をかくさふみづからは、とよをか右衛門の介の母よ、源之丞といふものゝはたらきゆへ、我子はいよの國へ立のき有と聞、行ゑをしたひ下る也、かの侍とび

しざり、私は其源之丞弟源八と申もの、兄源之丞が申付、おまへの行衛心もとなく存尋參る所に、是にて御めにかゝる段たいけいに存る也、こうしつ聞誠に源之丞母はまゝしき中と聞、それ故國をすて奉公に出られしと聞、此度右衛門をつれ國へ歸給ひしに、母ごのきげんは何と有ぞ、されば母も手がらをしてかへつたと申悦まする、いざ先右衛門様にたい面なされよと、いよの國へぞ歸ける、こゝにこしもこのお吉は、久五郎といひかはしたる中成が、國のさわぎゆへおやもごこくらへ歸、きけばいよの國にゐ給ふと聞、やしきへ尋來りあんないこへば、こしもと小七小げん立出ごこからござつた、私はこくらのきちと申もの、源之丞様の久五郎と申て奉公なされた時の、はうばいでござんすが、御めにかかり申たく候、ちよつと御出なさるゝ様にいふて下されませ、小七聞はてさうな人じや、こなたのいはしやると云て、殿様がここへ御出なさるゝ物か、それと只今は御るすじや重てござれ、そんならおく様にいふてあはせて下され、先いふて見よ程にそこにまつてゐさつしやれど、内へ入かくといへば、何こくらの吉といふ女が源之丞



様にあひにきたか、其女の事は内々おはなしできいた、あはふ程に是へとをせ、畏てかくといへば、きは悦び、ぼんをかり、おはづかしながら是はこくら島でござんす、みやげの印に上まする、扱私はいせん久五郎様、たがひに心やすういたし、いつ共なうよい中に成り升た、所に承れば此所へお歸なされ、世に出させ給ひしと聞、久五郎様とはいひかはした事もござりますれば、おめにかゝり私が身のかた付も致したう存参ました、扱はさうか女といふ物は、たれしも男のべんせつにたまさるゝぬしにござしやるまでもない、をれといふ女ばうがあれば、いづかたへもゑんにつき給へ、又をれがこなたより後の女ばうならば恨もあらふが、をさない時よりな付の有た女ばうなれば、いはふならこなたはてかけのやうな人なれば、をれがはらを立るはづじや、したが御奉公なされてござる内、さびしからふによりこうした事は有まい物でない、お吉聞いかにもけつかうなお詞でござんす、去ながらおめにかゝり申たい事もござんす程に、どうぞ一夜おはせて下されませ、いや一夜はならぬ、そんならしよやからよなか迄おはせふ、さいはひ

下やしきへござつたほごに、よびにつかはさふこの給ふ所へしうとめ立出、あれはみなれぬ上ろうじやたれぞ、いや是はこくらのお吉殿と申て、源之丞様いせん御奉公の時、はうばいでござんする、御國へかへらせ給ふを聞悦に参られました、扱はさうか、をれはこゝでかんきんをする程におくへ行給へ、やいこしもと共こゝへ出な、かんきんのじやまになるぞ、畏りましたとお吉諸共皆々おくへ入にける、時にふしぎや佛前のしやうじ四方へひらき、内にはふごうをさかさまにかけ、山ぶしぶせん坊だん上に上り、でし四人いらたかををしもみのりゐる、母みてなふおじやり、源之丞はまゝ子じやそれによつて、何とぞきやつをいのりころし、じつし源八に此家をつがせんと思ひ、弟のことなれば貴方を頼んだ何と印が有か、ぶせん僧聞さればそれに付相談いたす事有、先だん上をおり申さんだんをおり、扱べちぎてない、人てうぶくするには、よりと申て二十より内のいまだかせざる女をどらへ北へねさいたる山うつ木にて、しねゝゝといふてたゝきころし、人しれぬのばらへうづみ、三日と申うしのこくにしがいをほり出し、其

女がくびをきつてほんぞんにそなへれば必命おはる、其女をたれ成共よつて出し給へ、母聞さればさいはひこくらのお吉さいふ女がきた、此ものをよび出さふ程に打ころし給へと、こくらのお吉をよび出せば、何心なく来る所を、うしろよりでし山ふし共山うつぎにてさんくになきふす、こは何事ぞとお吉上るを、母立かゝり打ふせくぶせん坊じゆずをしもみてうぶくの法をいのれば、お吉さんく打ふせられ、さらく身に覺へない何故か様にし給ふぞ、ぶせん坊お吉を取てふせ、是は源之丞いひ付てころさするころを立なとけんを引ぬきむねへさし付れば、あゝころは立ませぬ、扱は源之丞様のおくさまを持給ふゆへををうるさう思召てころし給ふか、たとへころし給ふ共夜なか迄の命をたすけてたべ、おく様のお情で、こよひ源之丞様におめにかゝるはずじや、源之丞様にあふてころさしやるが誠かとはふ、母聞をろかなおくもそちをねたみて、夫婦してころすといふ所を、ぶせん坊けんにて心もとをさしつらぬく、お吉くるしきころを上、扱は夫婦してころすか、やい山ぶしめをのれいつはつてころしたらば三日と

過さず取ころさふぞと、あしはたゝす手にてはふてくるひあるくを、取て引上さしとをしくつゐにむなしく成にける、それくしがいをすてよといへば、山ぶし共立よれば、しがい其まゝつと立、やいころさいか程ころしたとあつてたましゐはしなぬ、此やしきの内ははなれまいぞとにらみつめれば、でし共おそれにげのけば、ぶせん坊きつとみて、扱々悪さうをあらはしてしゝたりな、やいでし共きやつはしんでゐる、じゆずにて打てみよ、おずくじゆずにてうてば、しがいは其まゝたをける、さあくゝ人しれぬのばらへうつまんとでし共にしがいをかゝせ、まゝ母諸共立さりける、はらだ源之丞は弟源八と打つれ歸、何其方はおみだい様にあふてお供して歸しとや、でかしたといふ所へこしもと小七文を持おく様よりお使に參ました、今日こくらのお吉殿と申人がおまへを尋ござりました、はやうお歸なされませとの事でござりますと、文を渡しかへる、源之丞文請取是はもはややしきじやと、松にかけたるとうろうにて文をみる、所へお吉がゆうれいあらはれ出る、源八きつとみてたちに手をかけぎせいする、所に源八が手に持



たるどうろうをのれとこくうへ上る、こはふしぎや  
 ときもをけし、其儘せつじしたをるれば、お吉がかた  
 ちはうせにける、源之丞ふりかへりみて、やあ源八是  
 は何とした、をさない時きやうふのむしがあつたが、  
 てんかんになつたか、やれ心をつけよといだきおこ  
 せば、源八けしきかはつてあゝらうらしい、こな  
 たはよくもおくをもたしやつたなふ、おくをさりた  
 まへそはすることはならぬ、やいそちはなにをいふ、  
 むゝ扱はせけんでいふ通、よめとしようめと中がわ  
 るい物じやといふ、ここにまゝよめなれば母と中が  
 わるいにより、ぢきには仰らしいで、そちにいひ付ら  
 れてさういふか、そんならそれ程にいはひでも大事  
 ない事を、いかにも相談づくでさらふは、おゝさらせ  
 いでをかふか、さらぬとそちもころす先女ばうめが  
 にくいと、かけ出れば引どめたんきなさらふといふ  
 に何事じやと、扱女房をよび出せばおく立出、今もど  
 らせ給ふかと、いふうしよりお吉がゆうれいあら  
 はれ女ばうに取付は、是もせつじしたをれける、源之  
 丞みて、今源八がそちをさらせふといふを聞、女心で  
 はつと思ふてきを失なふたか、そちとはをさないよ

りいひな付の女ばうなればさりはせぬ、たうぶん母  
 の心やすめにさらふとはいふといへば、源八は何さ  
 るまいといやるか、はてさるは其やうにたんきに  
 ふな女ばうつゝとよりおゝさらせいでをかふか、さ  
 あはやうさりやと、兩方よりつめかくれば、源之丞ふ  
 しんをなし、むゝ扱は源八とふぎをなし某にさらせ  
 をれをもころしをのれがあとでそはふといふ事か、  
 ちくしやう共めが、一つあなへかさねぎりにしてら  
 いせでそはせふ、源八聞らいせでたれとそひませふ  
 ぞ、こなたをらいせへつれて行ぞ、むゝふしぎや何と  
 やらことばががてんがいかぬ、先そちはたれじや、お  
 おをれはこくらの吉でござんす、われは又たれじや、  
 私も吉でござんす、はてがてんのいかぬ、さき程おく  
 が方より吉がきた程にあふやうにと、いふて文をこし  
 たが、扱は吉がれうが兩人についたとみへた、やい其  
 吉が何の恨あつて兩人にはついたぞ、さればこなた  
 のいひ付じやとあつてころされ、しがいをむかふ成  
 はらへうづまれた、其恨をいはふためについた、何こ  
 ろされた、まつたく身はしらぬ、扱はおくさまのしわ  
 ざか、むゝげに女はしつと深いものなれば、ねたみに



思ふてころしたこともあらふ、しからばせんぎをして敵を取てとらせふ、先兩人をのけと二人を取て引ふせ、たちひんぬきくはん念し刀をつき立れば、あゝくるしやのきまするゆるして下され、おゝさあらばのけよと刀をされば二人はさうへ倒れける、扱こしもと共をよび出し、源八にきぬをきせ、女ばうに水のをませよびいければやうく心付、源之丞はいこしもと共何とお吉がきたはじつしやうか、いかにも則私共と一所にやすみ給ひしが、ごこへ行給ふやらねやにはゐやりませぬ、むゝ扱は外にころしてが有とみへた、せんぎをせんと女ばうと打つれいらんとすれば、源八むくくとおき上り、あゝうらめしおくとつれ立、ごこへ行給ふぞ、やあさいせんのいたかと思へば、まだ源八に付てゐるか、急でかへれ、何かへれとは情ない、いひかはしたる詞の末、たがへまいとてあひたふてきたはひなふ、何のどがとてうらめしや、ごほりのやう成つるぎをぬいて、むねのあたりをさしとをさるれば、きも玉しゐもきへく成時は、うらめしながらもそなたのかほがみたかつた、女心でたゞひとり、のこへ山こへたにみねこへて、くる

はたれゆへそさまゆへと、ころされたる其有様残らず語、源八はおんれうに引立られ行んとするを、源之丞引とめ、やあ源八程のものが、れうにとられていづくへ行と、太刀ひんぬき打ふすれば、れうはのき源八やうく心付、むゝほんしやうに成つたかおうれしいと、右之様子を語れば、誠に夢共なく恨をいふと思ふた、是はころさせてがござらふ、せんぎの致しやうが有先こなたへと、皆打つれおくへ入にける、かくてまゝ母弟あじやりぶせん坊、三日過うしのこくにも成ぬれば、でし山ぶし共を引つれ、お吉をうづみしはらへ來り、それく土をほりかへし、女がくびをされ、畏てほりかへさんとする所へ、源八つゝと出、是は夜中に何ものなれば、はかはらへ來つてらうせきはする、母みてやあさいふは源八ではないか、何母さまおぢの御坊か、やい源八してそちは此所へ何しにきたぞ、されば私はさうれいに參た、さうれいとはたれがしゝたぞ、してそれにござまの者共はゐませぬか、あじやり聞是は身がでし計じや、むゝ扱御存じござらぬか、兄源之丞が死ました、それはけさまで内にゐたが、さればけふひる迄も成程そくさいにござ

つたが、何としてか物くるはしう成て、くれあひに俄にむなしう成ました、只今は右衛門殿を此方にみかた申、國あらそひの折なれば、兄源之丞がしゝたといは、みかたへ来るむしやも力をおとし、かせいも有まいと存、それ故ひそかに某計參つて、兄がしがいを只今うづみました、ぶせん坊は何と行力の程を見給ふたぢ、母聞されば女がくびをそなふる迄もない、法力故しゝたでござらふ、はてしぬるはずじやと悦べば、源八聞兄がしゝたる事を申せば、其はづじやと有ておなげきの色もみへぬが、しさいばしござるか、母聞おゝ是にはやうすが有、兄がしするからは今よりそちがそうりやうじやぞ、いかにもそれをねがひました、おゝ此うへはそちにつゝまふやうはないと、ぶせん坊がはからひで源之丞をてうぶくし、それ故お吉をころし此原へうづみし様子、一々残らず語れば扱は左様でござるか、何と源之丞殿お聞なされたかといへば、そば成らんだうの内より源之丞夫婦つゝと出、ゑゝうらめしいおちの御坊、某をてうぶくしとがなき女迄ころし給ふは何事ぞ、なふ母様まゝ子はそれ程にくい物か、なさない御心や、ぶせん坊聞ゑ

ゑ扱はたばかつたか、かくあらはれしうへはのがさぬと、山ぶし共やりのさやはづしつきかゝれば、源之丞夫婦源八は、心得たりとわたしあひ、こゝをさいごとはたらきしは、あやうかりけるはげみ也、山ぶし共はさんぐゝにきり立られ、かなはずしてにげさつたり、ぶせん坊是迄と、まゝ母を引立來り、是あねじや人そなたをさしころし、身もはらを切相はつる、かくごし給へところさんとする所へ、源之丞夫婦かけ付是をみて、なふ待給へ母の命をたすけ給はゝこなたの命もたすけ申さふ、おゝをれをたすくるならばべちぎないと、まゝ母をつきはなせば、源之丞はなふ母様、今より惡心を思召とまらせ給へといへば、母聞誠にかけ程迄かうゝ成夫婦をころさふとした、みやうがの程もおそろしや、此上はゆるしてたべと、ほつきの涙をながしける、所へ源八かけ來りぶせん坊に打てかゝれば、源之丞みてやれれうとすな、おちの御坊は母の命にかへてゆるしたすくるはずじや、きかずうたばかんだうじやぞ、いやもと母を惡人にしたも、おち坊主めゆへなればのがしはせぬぞと、聞入すなんなくぶせん坊をきりふせ、是迄こじかいせんと



すれば、源之丞をしとめなせしぬる、いやさかんだう  
うけて何かせんしんだがよい、やいそれはおちをこ  
ろさぬさきのこと、何をいふてもころしたればせひ  
ない、ここに右衛門殿國あらそひのじせつなれば、そ  
ちをころしては身が力がない、それでもこなたのか  
んだうじやといやつたもの、さあかんだうはゆるす、  
たんきものいざかへれと、打つれやかたへ歸ける、手  
かけが原とは此所を申也

### 第三

こゝに大村彌三郎と申者、きく地産六といふらう人  
の女ばうをつれ、なふおないぎ、又してもくめうと  
いさかひをして、なかうどじやといふてをれが所へ  
おじやるが、ぐはいぶんわるい、皆こなたのがわるい  
であらふ、せんどもけんくはしやつたゆへ、をれが色  
色とあいさつし中なをしをした、其時産六は念比な  
ればこそあいさつをしてくる、忝ないといふて、手  
を合なかるゝ、なくやうなしやうぢきな産六が、なん  
のわるからふ、おかたのがわるいたしなめや、いやさ  
うでござんせぬ、産六の誠になきやると思召か、あれ

はちやわんにゆを入れてそばにをいて、其ゆをめへぬ  
りて涙にしやります、私がちやわんへすみを入、そつ  
と取かへて其せうこをみせませふと、扱産六が内へ  
入ば、産六はしちやうをつり、中から又女めがと、あ  
しにてふみ出し、女がゐるこそこへは出ぬといへば、  
彌三郎女ばうにいひふくめ、かへしたぶんにてかた  
かけへかくし、さあおかたは先こちの所へかへした  
こゝへ出られよ、其時産六出るをみれば、すはだにぐ  
そくをきて出る、是はくなんとしたなりじや、おか  
たのきる物迄酒にのみ上るといやつたがちやうやと  
いへば、産六あんのごくゆをのみに立ちやわんを  
そばにをけば、女ばううしろよりそつとすみ入しち  
やわんと取かへをく、産六はゆと心得、あいさつをし  
てたもる心さしの程はわすれぬと、すみをめへぬり  
なきごゑにていへば、彌三郎はおかしがりはらをか  
かへわらひつゝ、有しやうすをいへば、ゑゝばけがあ  
らはれたと、扱夫婦中をなをり、女ばうはおくへ入、  
所へ庄之介來り、なふ産六殿ねんらいの親の敵は討  
本望とげました、それに付一みいたすわけ有て、此度  
國あらそひ有右衛門殿のみかたを申、明日いくさば



へ出る、こなたとはいひかはした中なれば、さいごの  
 さかづきせふためきましたといふ所へ、女ばう立出  
 る庄之介みて、あの女は某がおやの敵、げんばが娘ふ  
 ぢかえと申ものじや、此女を女ばうに持給へば、私も  
 念比をきつてこなたへ手むかひもせねばならぬ、い  
 や左様なやうすはかつてしら□□□□になつた、ふ  
 ぢかえ聞いや私はおや兄と一所ではござらぬ、うた  
 がはしう思召さば是にて相はて申さんと、じがいせ  
 んとすれば□□□□皆をともなひぢんしよへ行おみ  
 かた申さんと、打つれぢんしよへ行にける、かくて右  
 衛門の介は源之丞源八をはじめ(此の所十餘字缺字)  
 し給ふ、所へ庄之介は皆々をともなひぢんしよへか  
 へり、やうすを申上る所へ、てきのせいをしよせ、兩  
 方入みだ(缺字)ひけん、てきのぐんせい皆々討れに  
 げちれば、けんもつ市の進是迄と打てかゝるを、源之  
 丞(缺字)しやうこそめでたけれ

八文字屋八左衛門新板

熊野山開帳たきもこせんじゆ

三番續

上 新宮付りけいせいはいはだしまいり

中 本宮付りけいせいおけぶせのなみだ

下 那智付りけいせいくわんおんのしやうご

第一 けいせい十かいのまんだら

第二 あさづまが身うけ千兩道具

第三 おぐらがなさけ末代だうぐ

一 よこぞねかづま 座本あらし三右衛門

一 同 おとゝ富五郎 出來島小三郎

一 かづまみだい みづ木淺之丞

一 こしもごごよ うへむら吉三郎

一 同 さわ 山もと玉のい

一 同 しな つまや市之丞

一 いんきよ妙慶院 市彌源兵衛

一 からう川ごへしかの丞 宮崎八郎左衛門

一 同子 兵介 菊岡與次右衛門

一 おの川けんぎやう 立役柴崎林左衛門

一 しやもんしやうかい 坂田藤九郎

一 みよし清六 立役は山おか右衛門

一 さから忠左衛門 立役田代清左衛門

一 らう人てづか傳左衛門 敵役高岡むく右衛門

一 けいせいあさづま 女がたかも川のしを

一 かぶろうげんじ 市村辰之介

一 けいせいおぐら 女がた西川おかの介

一 かぶろどのい あらし龜之介

一 おもやごけおつね 女がた淺尾十次郎

一 女郎や九郎左衛門 谷澤傳九郎

一 ふかくさほうとうじ あづまさん八

一 から物や源三郎 音羽才三郎

一 くまの新宮のねぎ つ山平九郎

## 熊野山開帳 瀧本千手観音

富永平兵衛作

## 上

いせくまのゑ月参りの道心しやもんしやうかいは、  
けいせいおぐらをつれ立、くまのよりげかふするは  
やきしうのほごりまできたりぬ、むかふよりおの川  
けんぎやう、下人にびわばこをもたせこうりしが、く  
まのもふでさきくより、是々道心、毎月いせくまのゑ  
さんけいめさるゝは、しゆしやうせんばんに存る、心  
ざしをいたさんと鳥目百文取出し、御らんのごとく  
兩がんみへぬそれがし、よく心ざしをほごし給へ、  
道心うけごり是は御きごく、なるほごゑかういたさ  
んど、南む大じ大ひのくわんせおん、たすけたまへと  
おしいたいきごうる、おの川しばしとおしごめ、何と  
やらなれゝしき事ながら、おのゝがたにはくま  
のゝごわうのよけいなごはあるまいか、さもあらば  
一まいしよもういたしたい、おぐらきゝもうもくの  
身として、くまのゝごわうは何あそばします、定めし  
ぬれといふやふなことで、きしやうにいるのでがな

ござんしよ、はてわけもないそうした事ではござら  
ぬ、ちとやうすあるゆへごむしんの申、扱こなたのこ  
ゑをきけば女中じや御しゆつけのおつれか、いかに  
も左様でござんす、わたくしも心にふかいぐわんが  
ござんすゆへ、京ふしみよりはだし参りをいたしま  
した、かゞみのしたにひかふとぞんじよけいをこう  
て参りましたほごにおやくに立ませうと、くまのゝ  
ごわうを取出しまいらせ、申けんぎやう様、お前がた  
はほうゝのおやしきへおで入なされませう、今日  
はどれゑござんす、されば只今参る所は、よこそね様  
のおやしきよりおめしなさるゝ、此やしきにわか殿  
大吉様といふが有、此間おわすらいなさるゝにつき  
て、此ごとうめを召よせられ、おなぐさみにびわこ  
ひいてきけまますれば、御心にいつて、おそばをはな  
るゝ事がならぬと、語りければおぐら涙をながす、し  
やうかいきゝ是女郎、今のはなしは道すがらこなた  
の物語したのか、いかにも左様でござんす、おの川き  
きいづれもおやしきの事をよくしつてそんな何に  
ても御ようがあらば申たまゑ、おとりつぎおいたさ  
んさりながら、おのゝがたの心ざしおかんじ、よほ



ごひまをいれた、ごゑんあらば重てごたち様にふみ  
をおとしてかへりぬ、おぐらひらい取よんでみるに、  
此たびわか殿大吉様びうきの御やうじやうを御いん  
きよ様にてなさるゝしゆびをうかゝひ打んどかひて  
あり、おぐらけでんしとんで出る、道心おしとめ先ま  
たれよ、此うへはぐそうがちからと成わか君はと  
りかへさん、いや申御しゆつけ、げんざいわが子をう  
たんどいふものおみのがしにはならぬ、はなしてく  
ださんせごかけ出る、しかふ道同せんとつれ立行所  
へおぐらがおやかた九郎左衛門、大じんみよし清六  
あげやのごけいづゝ屋おつね三人は、おぐらいづく  
共なくいでしゆへ、方々たづねまわりしが、此所にて  
みつけ九郎左衛門かごよりとんで出、おぐらをさら  
へ、やいこゝなおうちやくものいづかたゑかけおち  
する、おのれゆへ此ごごくろうをするご、さんく  
にちやうちやくす、道心とんで出らうせきもののが  
さぬと、しやくぢやうおつとりかけ出る、扱はおのれ  
がつれのいたか、そいつ共にたゝけといふ、清六九郎  
左衛門がむなぐらさらへ、こりや九郎左衛門大夫が  
ゆきがたはしれた身ははしらせはせぬ、扱此間それ

がしをさまゝあつかうした、ふたこしをさいた此  
清六が一ぶんはごこでたつ、おのれのがさぬかくご  
うせよ、やいこゝな道心、おのれがつれてはしつたゆ  
へ身が一ぶんはすたつた、これゑでゝ身ははしらせ  
ぬしさいを、まつすぐに申わけいたせ、道心聞是はめ  
いわくぐそうは月まいりのぐわん人、此女は本宮よ  
りみちづれになつた、まつたく此方にはしらぬ是女  
郎、これゑ出ていひわけし、しゆつけの一ぶんをたて  
くれ、おぐら立出申だんな様、私は心にぐわんがござ  
んすゆへくまゝへまいりました、あの御しゆつけの  
しらしやんした事ではござんせぬ、扱清六様おつね  
様はらのたちますはこごわりでござんす、皆様もご  
ぞんじの通、わたくしごかづま様とのなかには子が  
ござんす、其子がさんくゝわすらいますごきゝまし  
た、あるにもあられず、さいわい清六様の廿日があい  
だあげてくださった、うれしやごおもひましてく  
るわをしのび出、わが子のためにくまのへはだし参  
りをいたしました、申てもこれは佛参り、こゝをきゝ  
わけてかんにんのしてくださいださんせ、つねきゝ大夫様  
だんくゝこなさんにはうらみがあれ共、わけをさゝ

ましてはもつ共におもひます、なんと清六様こゝは  
ごうぞ御りやうけんはござんせんか、清六きゝ成ほ  
ごきゝごけた、こりや九郎左衛門其方にうらみは  
やまゝなれ共、それを申はご大夫がためにならぬ、  
身がりやうけんには大夫を身請がしたい、何と身  
に大夫をくれまいか、是はけつこうな御りやうけん、  
いか様共御心まかせと大夫にかたれば、おぐらきい  
てうれしうござんすれ共、身うけのさうだんはやめ  
にしてくださいせ、わしにはかづ名様といふふかい  
ごのが有、たとへうけだされたとて、かづま様の事  
をわすれはいたしませぬ、すればおかしい事はない、  
せひにやめてくださんせと云清六きゝ、さりとは大  
夫申にくい事をよくいふた、それは心まかせ此うへ  
は其方とあいさつをきつた、其かわりにはそちがあ  
わせたい女郎にあおふ、かまへてにくしでのくどお  
もふな、つなきゝいかにもきこへました、しからば九  
郎左衛門殿手前は、清さまに三十日かわしませふ、さ  
あちがあなた大夫様かごにめしましませ、おぐら  
道心にむかい、申御しゆけ様、わたくしはふしみへ  
かへります、お前を頼ます今の命をたすけてくださ

んせと、ひろいしふみをわたしける、道心うけ取心や  
すかれうけとつたといふ、清六道心に一禮し兩方へ  
わかれける、扱もよこそねのやかたにみだい、こしも  
ご共をめし、大吉やうじやうのきうをする心みに、け  
んぎやうにすへてみんとおの川をよびきうをするしよさ  
こしもごのとよ一人のこり、皆々おくに入けんぎや  
うめをひらき何と人はなきか、先以年頃のねがい  
かなひ満足におもふ、さあしゆびがよいはんをせよ、  
とよきゝ、わしがかいてやつたはなんとさしやんし  
た、それはけさおとした、大かたぶんはおぼへた故か  
いてきたと出す、とよふところよりあい口取出し、け  
つ判する所へ、からう川ごへしかの丞きたり、此由  
見てみ付たく上へ申つげきつと法におこなわん  
ど、ゆかんとするをけんぎやうとびかゝつてくむ、心  
へたりとしかの丞、おのかわをとつてさへ、さりど  
はおのれはもうもくのいさぎよい、あくじをみつ  
られとてもしぬる命なれば、此しかの丞をあいてに  
どりしなんごみへた、此うへはゆるす命のおんに何  
にても身が申事をきけと、ゆひすてゝおくに入、けん  
ぎやうしかの丞がうしろすがたをつくゝみて、口

おしやもくせんあにのかたきを討そんじ、むげにかへしたるはらだち、さりなからくみごめられたる命助かりし事、是天道にかのうたりとよろこびおくにぞ人にける、ほごなくいんきよ妙じゆいんはしかの丞兵助、みだいこしもごにむかい、けふは大吉がきうをする、そちたちはわかい女の事、みるめもいちらしかるべし次のまへいてみぬがましと、むたいにざしきをおいだしあいのごを立、其口に兵介ばんのする、其ひまにしかの丞大吉をだましはだをぬがす、いんきようしろにまはりくぎおもつて大吉がせなかにてうくど打ければ、二本にて打ころされ、あつと計をさいごにてついにむなく成給ふ、此ころにおごろきみだいこしもごは、あついやら殊外なかせ給ふ、大かたにすへ給へごこへくのにのしる、いんきよしかの丞めごめをみやわせ、うれしやいきがないと、うつたるくぎのかしらにもぐさをのせ、ふごんにつゝみねさせおき、さあらぬていにてけんぎやうをやびこりやくおの川、わかこのきうを被成ておやすみなされた、枕もごにおりて、ごのいをいたせご、次のまに立出、うれしや大吉がきうをした、くたびれ

たやらねている、めがあいたらしらせご三人はかへりぬ、かかる所へごみの丞みやこよりくだり給ひ、おね君にの給ふは、ごのかづま様より大吉かたへのみやげもの此人形はわたくしがみやげごいだし給へば、みだい悦給ひ、大吉はけふかゝ様のきうをしてやらしやんしたそれゆへくたびれたやらやすんでいるはてそれはよういたしました、先あいませうごおくに入おこしてみればむなしきしがいい、ごみの丞けでんし是は何ものしわざやいけんぎやうおのれそばにつきたるゆへは、しらぬごいふ事は有まい、定めし是ははゝ様のしわざ、おそろしくもくぎにて打ころすごいふ事が有か、それ先けんぎやうをのがすなご取まく、おの川めをひらき、まつたくそれがしはぞんせず今は何かつゝまんぐわんらいそれがしはかたき打、すなわちしかの丞こそ其があにのかたき、うたんなばかり事に年比もうもくと成、此やしきへ出いる、かならずうたがい給ふなごいふ、所へしかの丞来り、わかこのかたきはけんぎやうのがさぬごいふ、おのがわきゝ、わかこのを打たしやうこや有、其時にせうをひろいし道心かけ出、しやうこはぐそうこれをみ



よと、かの一札を出せばおのがわみて、是はよと心をあはし今日かたきをうたんと、たがいにかためしきせう、是がしやうこにはたつまい、ごみの承みて、其せいしぞなくばかきやうこそあるべし、とかくけんぎやうこそ大吉がかたき、はやうてとげぢし給ふ、おの川涙をながし、ぶんていのまぎらはしきをしやうこにござられ、あさましいしをござる、あつばれきしうにおいては、かめいの六郎左衛門がばつりう、浅右衛門が運めいこゝにきわまつたり、覺はあらねぞせひもなしよつてうてよといふ、道心立より扱はおちの浅右衛門様か、私はいおりの介よごなのり、おやのかたきしかの承のがさぬといふ、ごみの承き、給ひかたき打にまがいなし、兩人をたすけてしかのせうをうてといふ、其ひまに浅右衛門しかの承をこつておさへ、あにのかたきおやのかたきと打ければみだいごみの承はさしぞへぬき、たぶさをきつて、これこれ浅右衛門いおり只今とんせいする、そちはみやこにのぼりかづま様系此よしをかたり給へ、さらばさらばと行方しらす成給ふ、かゝる所へ兵介かけ付浅右衛門のがさぬといふ、心算たりとおつばらいなが

おいするないおりと兩人つれだち一まづみやこへのぼりける、此さうごうによつて一家中皆ちりく成、いんきよめうじゆいんには、大吉が一ねんごりつきさまく五たいをなやます、其折ふしかつまみやこよりくだり給ひあくにんの母をくるまにのせ、さてみだいごみの承が行ゑをたづね出給ひしが、ある山中にてめぐりあひ悦給ふ所へ、大吉がおんねんくぎかなづちをもつて、妙じゆいんの打ころしめぐるいんぐわのむくいのはご、おもひしれと、いふかとおもへばたちまちあつきと成めうじゆいんのむくろをつかみ、こくうにこそはうせにける、かづま今は景迄ともござり切て出給ふ、みだいごみの承御あとしたわんどし給ふ所へ、浅右衛門いおりかけ付此由をきき、浅右衛門はかづまの行ゑをしたい行、いおりはみだいごみの承の御供申、きのくにおのがもごへぞおちにける

## 中

さがら忠左衛門といへるぶし、みよし清六にあわんため、ふかくさほうさうじゑ來りぬ、かゝる所にしも

く町のけいせい、あさづまといふ女郎これもほうとうじに参り、きやくでんのへいにかけてるはしごを、松のゑだにかけ其身もはしのこをのぼり、小ゑだにかゝるおびをさげくびをくゝり、うんといふこへに忠左衛門かけつけ、たちよつてなわを切したるおろし、きつけをあたるければ心づく、うれしやしなしはせぬぞと、よくくみればいもふとつまなり、こりやそちはつまではないか、何ゆへくびをくゝり、しのふとした、しておつと清六はなんとした、されば清六様ゆへくるはをでとふおもへ共、まゝにならぬゆへくびをくゝりました、扱はふうふいさかい、きづかいすなあに、忠左衛門がきた心やすふおもへ、いやこなさんはしらぬお人じやお、尤下人共が前お思ひしらぬと申か、扱は清六が其方をけいせいにつたかそちがそんぶんにしてやろふ、まづ方丈ゑ行やすまればと、さむらい共いたわらせ寺中にしのばせ、もゝだちとつて清六が行るをこそは尋ねける、かゝる所へ清六、浅づまがさいこの書置をみておごろき、かぶろのうてなもろ共、方々と尋わがすむ寺ほうとうじしにきたりぬ、忠左衛門みつけ是清六久しい、其方心

におぼへがあるうかくごせよ、清六聞取は久々のろう人殊におのくのやつかいになる、もはやめんどうにおもひ一もんのゑんのきらんため左様にはの給ふか、さもあらばさむらいにいふべきことばも有べきに、あまり成る一ごんちか比きにくい、こりや清六そのごくすくはいへ共、諸侍の女ばうをけいせいにするといふ事があるものか、何とぞよいなさるゝ私の女ばうをけいせいにつたとの給ふか、それは何をみて左様に申さるゝ、いやちんじても申わけは有まい、はてやきたいもない、女共はきよねんしも月に相はて、すなわち當寺にほうむり、それなるせきごうが、つまがはかでござる、忠左衛門聞何いもごつまはしんだと申さるゝか、これは何其心へぬ、只今こゝにていもこのつまにあふた、其ごんにいつわりあらば其方いけてはおかぬぞ、何が扱ぞんぶんならふ、其時忠左衛門下人に申付さいせん、女をよび出す、あさづま立出何事でござんすと云ふ、忠左衛門申けるは何と清六、これは身がもうこではないか、清六みて其方はあさづまか、これ忠左衛門殿、其女はしもく町の遊女でござる、何けいせいであ

るかどよく／＼みればいもうごにてはなし、大きにおごろきこれ女郎さいせんくびをくゝられたる時、そちはつまではないかごどへば、いかにもつまでござるごいふた、あさづまき、御尤にぞんじます、わたくしのながあさづまご申ます、つまが／＼ごいわしやんすゆへ、あゝつまでござんすと申ました、扱はみそんじた、これ清六いもうごはしんだかさりとてはおいしい事をした、さて其女郎が、其方ゆへにしぬるといわれた、しさいはいか様の事ぞ、清六罷出ちか比おはづかしいお尋にあづかります、是には段々やうすがござります、何をかつゝみません、女共にはなれてよりふごしもく町ゑゆさんにまいり、折ふしそれ成るあさづまがおもごし、しにました女に少しもちがいますね、それゆへ二三ごあいました、心入立ふるまい、是はご迄もにる物かなごおもひ、ついになじみをかさね、此比身うけをいたすけいやくを仕り、さむらいのはづかしや道具迄うりしろなし、金子五百兩迄ごゝのへ、此金子にてあさづまをくれるやうにごさま／＼に申せ共、千兩よりうちにてはならぬと申、もはや五百兩よりうへは何ぞあん致てもでませぬ、そ

れを口おしうぞんじて、しに／＼まいつたものであらふ、全くゑようにたわむるゝにてなし、たゞ女共がこいしさのあまりご涙をながしかたりける、忠左衛門おごろき扱は左様か、身がおやもこそこのふゆあいはてた、さいごのぢぶん其方ふうふがかんごうもゆるしおかれた、扱此女郎は身がいもうごに其まゝ、其うへ清六ご申かわしたご有事、いかにしてもみすてがたし、此うへは某がいもふごにいたさん、さいわいおや共がさいごのぢぶん、いもふごがかたへのかたみごて、にちれん大上人の直筆、十かいのまんだらをゆづりおかれた、これをそなたへゆづる大事にかけてもち給へ、あさづまき、これにまあ有がたい彌々頼あげますごいふ、清六忠左衛門にいふは、お心ざしまんぞくに存るさりながら、今物語申通金子が五百兩なければくるはを申ます事がなりませぬ、ム、きこへた／＼此うへは其金子も日ざりにちがわず、國本よりのぼさん、口めでたいさかづきを、上人のおまへでいたさんもつ共ご皆々打つれ入にけるしもく町あげやこけおらう人てづか傳左衛門立出、おつねをよびこれくわしや、此中たのまれたまんだらを、われらがか



ちゑをもつて五百兩にうり付た、あさづまごのにかねをわたそふとおもひ、かいぬしをつれ立てきた、つねよろこび、申太夫様ないゝの事がしゆびいたしまして、かねを今うけざるはづといふ、所へかいぬし源三郎きたり、是傳左衛門殿、金子をしんせてくだされ、心へたりとはさん箱より百兩づつみを取出し、これくわしや受とり給へとわたし、此うち百兩は拙者きも入ちんとふところへいれる、ごけいろゝゝにいへ共傳左衛門きゝいれず、惣じて道具のうりかいは、きも入が十ぶ一銀をさる法也、むりは申さぬといふせひなくごけ源三郎に申けるは今百兩わたくしにかしてくださんせ、太夫様の身うけの銀が五百兩たりませぬゆへ、此まんだらをおまへのかたへしんせられました、か様のせりふのかねをきも入ちんに百兩さられます、今百兩なければ身うけは成ませぬといふ、源三郎聞こゝろゑました六百兩のおやくに立ませう、さあちがいたといふ所へ清六きたり源三郎に一禮いひ、こりやくはしや、げんどのへ身がちそうに、大夫をよんであわせんと人をやる、おくらきたりてにかいるあがりこゝにているせりふさわざ有折ふしかづまは

おぐらにあい大吉がさいごのていをきかし、其後しゆつけをさげんとおもひ、しもく町へ來りしを、くつわの九郎左衛門み付下人あまた引つれ四方よりこりまわし、申こなたはかづま殿ではないか、れきゝゝのお大名が、われゝゝの銀子をすまさず、のめゝゝと此町ゑはござつた、只今銀子をおすまじなさるゝか、さもなければ此所の法にまかしておけぶせにするといふ、かづまきゝ給ひもつ共ゝ、今少しまつてくれよとわび給ふ、いやゝゝまつ事はならぬと、大せいおりかさなりむたいにはぎさる、ごけのつねこのていをみておごろき、おのれがおびをさき、うしろよりかづまをいだきはだをかへさせ、是九郎左衛門むごいしかた、銀はおれがすます、きづかひすなごかづまをいたわりうちにいる、九郎左衛門きゝいかにもごけのうけやいならばおつねにあづけと下人にいひ付ばんのさせ、其うへにてごけはご口に、おけをさか様につりかへりぬ、所へ清六あさづまおぐら傳左衛門出、おけぶせがあるときいた、みぐるしいに其おけこれといふ、傳左衛門きゝ女郎にあふても、かねをすまかねばあれじや、何ごかわゆひざまではな

いかさあつかうす、おぐらかづまとはしらず、くわしやさんおさましい何人じやゑ、ごけきいてかづま様とさゝやきければおぐらおごろきしのびくになげく、傳左衛門申けるは、なんごくわしやごこ人ははじめぬか、かみこ様きがついたと、皆々打つれおくにいる、おぐらは只ひとり涙をながし、こたつのふこんをかつきいる、所ゑごけ、せんのもち出かづまをよひこたつにあたらしこゝにてかづまにが、いよりおぐらおぐらおぐらおぐらのものがたりをきゝ、かづまごけとふざ有とおもひりんきのせりふ、かづまはらをたて、此ごころ侍のはがれたるもおのれにあふて大吉がやうすをしらせ、其後いか様共ならんごおもひ、か様のていになつたと、大吉がかいみやうをとりいだす、おぐらおごろき涙をながしわび事する所に人おとす、かづまおごろき、にかいゑあがるごけはゑくゑ行、おぐら身もだへしてなく所へ、傳左衛門まだらをもち出、是くらごの、此まだらをおがみ給へとさし出す、おぐらはらたてしらぬかほする、傳左衛門こゝにておぐらにむたひのぬれ有、おぐらはらをたてまだらをとり、傳左衛門を打、にげ様に

かのまだらをとたつゑなげこみおくゑいる、傳左衛門おごろき南む三ばう、源三郎にあふて何とせん様々しあんしおくに入る所ゑおぐらしのび出、清六がねやに入、かの四百兩の金子をぬすみいだし、かづまにわたし、兩人つれ立くつわのもとへ行、おい銀の濟しかへりぬ、あごに清六めをさまし、いろいゑせんぎのうへにて、傳左衛門がぬすみたりといへば傳左衛門覺なき事なればかんにんならぬといふ、源三郎は傳左衛門にさいせんのまだらをもごし給へと、三人いりくんだるせんぎの中ゑおぐらきたり、金子をぬすんだるやうすをかたりじがす、傳左衛門悦金子のやうすしれたるうへは、まだらも此女がぬすんだるにきわまつたりとなわをかけ、大くはんゑひく所へかづま來り、はらをきるべきといふ、みなくおしごめ共なひかへる、それより傳左衛門おぐらを引たて、ついにくびを打ごくもんにさらしける

## 下

たきもこのくわんおんおぐらとへんじかゝる、ふし

ぎをみせ給ふかづまほつしんして國を富五郎にゆづり傳左衛門  
のさんのかい万歳を打清六はあさづまなうけ出す、其後かづまくま  
ちやうする也

熊野山開帳終



業平河内通

座本小佐川重右衛門

都万太夫

立役杉山勘左衛門

上 大たぶさ 女どもみへとしおごこ

付りうひかふりして紫ぼうし

中 大しまだ ほむら共みへ手水鉢

付りはらかりすみけりりんきの枕

下 大いちやう よせい共みへつれ六法

付りおきつしらなみのごかなる國

一 ありはらのなり平

櫻山林之介

一 きのありつね

川上三郎左衛門

一 姉娘のさはの前

小かん太郎次

一 中娘井筒の前

神崎かりう

一 妹娘玉水の前

松本兵藏

一 ことよらのつぼね

つま木虎之介

一 こしもごさるだ

はな本井づゝ

一 同みどり

柳春之介

一 同わかな

よし澤小仙

一 同きしの

山澤竹之丞

一 同つはな

櫻山皆之介

一 そねの彌九郎

杉山かん左衛門

一 そねの一角

でき嶋小三郎

一 みかさ左衛門

柴崎林左衛門

一 弟もごめ

はや川はつせ

一 くま川大膳

澤井その右衛門

一 柴田左近

小さ川八郎右衛門

一 弟右近

近松勘之介

一 岩田兵之庫介

あだち三郎左衛門

一 はま松かもん

ちか松京之介

一 いそ竹金吾

宮崎彌津三郎

一 いはら木や彌左衛門

せんたい彌五七

一 たき山法印

柴崎龍左衛門

一 たつた武太夫

あら川十郎右衛門

一 おしげ

神崎ちさど

一 おさつ

竹中初三郎

一 村上がう右衛門

小佐川十右衛門

一 女房おはる

きり浪千壽

其外座中不殘出申候

# 業平河内通

作者富永平兵衛

## 第一

そもくきのありつねのそく女、井づゝのまへと申は、ならびなきびじんなればみかぎ聞召およばれ、きさきにそなへ給はんこ有けれ共、ありはらのなり平と、ふりわけがみのむかしより、ふうふのかたらひ有しかば、有つねきのごくに思召なり平とゑんをきらせんためとて、ならのふる御所にをひこめ、くま川大せんしばたさこんを相そへ、しゆござせられける、頃しもあらたまのとし立かへり、こよひせつぶんの夜なりとて、大せんさこんも御所にあいつめければ、いそ竹金五しばたうこんは年男に出立、升にまめを入てもち出る、扱大せんはさこんにむかひ、しきだいしせんしうばんせいおめでたうござるとあれば、金五うこんは升をもち、おにはそとふくは内へと、はやしおさめけるこそめでたけれ、扱さこん申けるは、是これ大せん殿、ゐづゝ様仰出さるゝは、こよひ年男のやくをおつとめなされたいと有事でござる、何とこ

なたにはやうすをお聞なされたか、いかにも私へも御あんないがござつた、しかしながら此ぎは何とござらふ、御たいせつなお身でかやうの下々のわざをなさるゝは、何共心へぬ事でござる、さこん聞いかにもこなたの仰の通り、私もさやうに存てござるが、ゐづゝ様に仰らるゝは、外の物のしる事でない、あまりきがつまる程になぐさみになされたいと有事でござる、しからばくるしうござるまいと存て、御意しだいと申てござる、大せん聞て尤でござれ共さりながら、申てもおまへさまは大事のお身なれば、もしもの事がござつては何共成ますまい、さこん聞て、尤さうでござれ共、しかしながらこなたと私とかやうにつごめまするからは、何の事もござるまい、しからば此よしを申上んとおくへ入、扱井づゝのまへは、わか衆のすがたに出立岩田ひやうごはま松かもんを御供にて、しづくと出給ひ、春の始の御よろこび、きはうにむかつて先いはひ申候おはん、ふつきばんぶくなをもつてかうちんく、そもくせつぶんのぎしきとて是はめづらしいなりではないか、時にかもん申やう、はいかりながらおひめ様へ申上りまするは、かや

うのおすがたで年男のやくをおつとめなされますは、何共がてんが参りませぬ、をゝいかにもそちはわけをしるまいによつてふしんをたてるは尤じや、おれが事はおさなひ時から、なり平様ごふうふのけいやくをした事なれ共、ご様のおつしやるは、玉水ごなり平様ごふうふにして、おれが事はきさきにたてるとおつしやる、しかれ共なじみの事なればいかにしてもなり平様の事が思ひきられぬ、又しても心のおにが身をせめるによつて、こよひは年男になつて、もゝの弓あしの矢をもつて心のおにをはらふて、なり平様の事をぶつとりとおもひきるがてんじや程に、皆のしうもそう心へてよからふ、なんどひやうごもはやじふんではないか、いかにもじふんでござりまするが、まだやく人が参りませぬ、ふゝまだやく人がたらぬとは、いな事をいやる、さればでござりまする、鬼が参りませぬ、はあこはい事をいやる、ごふじやや、いかにも御存なされますまい、こよひおにやくを致しまする物がござりますが、いかふおそふ参るごて彌左衛門をよび出す、彌左衛門はおにのめんを持出る、はあ是におりまするごいへば、ひやう

ご見て是はいかな事、なせにおそかつた、いやさいせんからおもてにをりました、それなら内へはいつてゐなんだいやおにはそこゝ申まするによつて内へはいりませぬ、いづゝ見給ひ、おにこいふはあれが事か、皆の衆がおにゝこいふによつてこわい物かとおもふたれば、そちがおにじやよな、はあ皆様はおににおしやりまするれ共、ないしやうは佛でござります、してそちはごこの物じや、私の國もとは丹後ごたんばのさかいで、おにがじやうやご申まする、したが只今はやごがへをいたしました、して又ごにゐるぞ、東寺らしやう門におりまする、私のぢいは大力でござりました、したがかたてござりませなんだ、それはなんとしてなかつたぞ、わたなべのつなに討おさされましたごいへば、人々わらひ内に入給ふ、かゝる所へなり平は女のすがたにさまをかへ、かごにのり來られしが、かごかき共かごちんをこひければ、せんかたなく彌左衛門をよび出し、やうすをかたり給へば、彌左衛門聞、いかにもおれがりやうけんしてやりませうごて、かごかきにいろゝせりふしけれ共、かごかきがてんせねば、それなら何程ほしい、されば



でござります、下たう人もらいませふ、それはなんほうの事じや、げたう人ごは一貫の事でござります、ふ聞へたそんならりやうけんせう、らんでまけや、一人がいふやう、らんごはいくらの事じやしらぬ、一人がてんして、はて五百の事じや程にまけてやらふ、是くだんな殿やすけれ共ませふ、彌左衛門聞、しからばさてせに十六文わたしければ、かごかきみて、こゝな人は五百らんのはづじやといへば、いや此方は十六らんかの事じやといへば、かごかきはらをたつる、こりやゝわれらは、おれを何じやと思ふ、おにじやぞよ、きのふもふたりまでござりまへてひごりは當ざにくふてしまふまひごりはやしよくにせふとおもふていけておいたといへば、かごかき彌々あざわらへば、彌左衛門はやがておにのしやうぞくして、おひまはせばかごかきはにげてかへりける、扱なり平は彌左衛門にむかひ、して先わしはごふしませふの、彌左衛門聞て、こな様はおれが女ぼうぶんじやによつて、此きじんのめんをきせねばならぬ、おにの女ぼうにきじんどいひまする程に、此めんをきてけいこをさしやれとて、けいこをする時内よりまめ

をはやしければ、彌左衛門はおにのまねをする時、おくよりしばたさこん同うこんは、かねてあいづの事なれはゐづゝの前をともなひ出、なり平に引合、井づつなり平のすがたを見て涙をながし、扱々あさまいお姿かな、いかに戀なればとて此やうな事が有物でござりますかと、たがひに袖をしぼらるゝ、さこんみて、いかにも御尤でござります、さりながらこよひのやうなよひしゆびはござりませぬ程に、思召だけをたがひにおかたりなされませいとあれば、なり平の給ふは、とかく此やうにせいたうがつよふて思ふやうにあふ事もなりませねば、此上はこなたをつれて立のきませふ、ゐづゝ聞召、尤そうでござりますれ共、こな様もあしよはの事なり、私はなをもつてあしよはなれば、もしもおつてがかゝり、二たびうきなをながしたらば口をしうござんしよ、其時は何ぞいたしませう、なり平聞召、はて其時はこなたをさしころして私もしにまするかごでござるかあれば、ゐづつ聞給ひ、とかくなり平をたいせつに思ひ、ちりやくをもつての給ふは、いやゝもはや立のきますまい、私には大事の男がござんす、なり平聞給ひ、何をや

くだいもない事をいはしやる、ざれごとも時による、さあゝはやうとあれば、ゐづゝきしよくをかへ、いやゝゝもはやいふてもらひますまい、きゝごもない、なり平たまりかね、何其男とは何ものぞ、さあなをきかんとあれば、ゐづゝどうわくして、是成さこんどあれば、さこんめいわくがりけるを、ゐづゝ見給ひ、是さこん、侍のひけう千万な事かな、そなた程かしこい人ががてんがゆかぬか、是なり平様はおれゆへにしぬるごおつしやる、何とそなたは是程の事がきがつかぬかとあれば、さこんゐづゝの前のちりやくの言葉とおもひ、成程私はおまへの男なりといへば、うこん聞もおへず、是ゝゝさこん殿、何とそれは誠か、ゑゑ口をしいしよぞんでござる、しつかいちくしやうなれば、もはやいけてはおかれぬと刀に手をかくれば、なり平やがてうこんがさしぞへひんぬいて、切かくれば、井づゝもさこんもおくをさしてにげ給へば、やれらうせき物よとて、あはてさはぐ所へたつたぶ太夫といふもの、かけこみしを、村上がう右衛門といふもの、武太夫をおつかけきたりしが、さこんを見てあやまつて武太夫とおもひ、くびをうつてかへりけ

る、くめ川大せんはなり平うこんをからめけん所へ、武太夫うろたへ出けるを、大せんみごがめ武太夫もともにからめける、かゝる所へがう右衛門女房を手ごめにしてかけ來り、大せんむかひ、ちか頃めんぼくもござらぬ、私人たがへをいたしました、則こよひのらうせきものは私でござるご、いひもあへず武太夫を見て、やあ武太夫め、おのれをうたんど思ひしに、人たがへして口をしやといへば、手ごめにせし女ぼう、是ゝゝがう右衛門殿、武太夫がおりますればわしがなんははれまする、こゝをゆるめて下されいひわけがござる、がう右衛門聞、おのれいたづら物め、さあ何成共いふてみよごつきはなせば、女ぼう武太夫にむかひ、是其方ごふぎな事は少ない、なせいひわけをしてたもらぬといへば、武太夫聞、是ゝゝがう右衛門少もふぎはない、といへごもがう右衛門がてんせず、其手はくわぬといへば、なり平つくゝ聞て、扱も世にはようにた事が有物かな、是もふぎごみへた、是ゝゝ、女ぼうといふ物はこわひものじや、きつごせんぎを召れよとあれば、女ぼうめいわくがり、こゝな人は何をいやる、わけもしらひで、見ればそな

たも女ごじやが女はたがひの事じやに、わるい物の  
いひやうじやといへば、なり平聞給ひ、扱もしれゝ  
しい、いひぶんじやとあればうこん聞、いやゝゝあの  
女ぼうのいひぶんを聞まするに、いかさまふぎな事  
なんどしそな人ではないが、がてんがゆかぬ是れ  
是れ女ぼう、何ぞふぎでないとの、しやうこはない  
か、いかにもしやうこがござんす、あの武太夫がおど  
しました文がござる、此戀がかなはずば、私をさしこ  
ろさふといふてこしました、すれば私のふぎではご  
ざりませぬ、こりやゝゝ、其やうな文はやくにたゝ  
ぬ、まさしう武太夫めはおびをどいてねてゐたでは  
ないか、それでもふぎではないか、女ぼういよゝゝめ  
いわくすれば、うこんみて、是ゝゝ、其ぶんではしや  
うこにはならぬ、其外何ぞしやうこに成さうな事は  
ないか、女ぼうしあんして、さればでござります、あ  
のものが申まするには、ごかく、がう右衛門殿いきて  
ゐられては戀のじやまじや程に、こよひがう右衛門  
殿をうたふと申ましたによつて、先だましておびを  
ごかせまして、其まに刀のめくぎをぬいておきまし  
た、是がしやうこでござんすといへば、さらば其刀を

見せられませよとて、侍共にこひみれば、大小共にめ  
くぎなし、扱は女ぼうにふぎなしと、がう右衛門もあ  
んどし、扱人たがへせしくびを出しませければ、なり  
平見給ひ、是こそ此方の打もらせしめがたきよごあ  
れば、がう右衛門ふしぎに思ひ、こなたにはみれば女  
の身として、めがたきとは心へませぬといへば、なり  
平右のしだいをかたり給へば、江右衛門よこでを打、  
扱はおまへはなり平様でござりまするか、いかにも  
段々承ました、御尤でござりまする、さりながらおま  
へのにくしとおぼしめさるゝものは私のくびを打ま  
した程に、おうれしうおぼしめしませい、なり平聞  
召、是ゝゝ其方は侍かと思ふたればめがねがちがふ  
た、やいうろたへ物、にくしと思ふ物を打もらして口  
をしう思ふに、なんじやうれしう思へといふかなん  
のうれしい事が有、江右衛門聞、いやいな事を御意な  
さるゝおまへは上ろうの事なれば、かれめはあら男、  
とてもお手にはかなひますまい、所をわたくゝの打  
とめましたは、いかいちうこでござる、やいその方  
はさすが下ろうじや、たとひ手にあふ共あふまい共、  
たがひにはたらひてこそ本もうなれ、人にうたせて



何のよろこびであらふ、江右衛門しごくして、はあ御尤でござります、私のあやまりました、ゑいゝしあんないたした、是くちと御せう申たい事がござる、大せん聞て、何事じや、いやべちのぎでござらぬ、さき程より段々お聞なさるゝ通、私のかたきは是成武太夫めでござれば、かれめは私の申請しました手にかけたふござる、又たり平様のめがたきを、私の打ましたれば、私はあなたの敵とてものがれぬ所でござりまする程に、私のくびをうたれます間、あなたのなれといて下されましたらば忝存ませう、ならぬならぬ、何をぬかすすらう人、おのれとてものがさぬ、あゝいかにものがれぬがてん参りました、こゝは何分にもおわび申します、ならぬ所がせうでござるごふござりまする共、私のくびをうたれます間、なわをおごきなされて下されませい、お侍衆さあちとの間頼まする、大せんはらを立、やいさすらう人、ならぬ、江右衛門聞て、いかに身はすらう人じや、侍の頼むといふに聞わけのないとて、やがて兩人を引立、なわをさく、大せんも侍共ものがさしどぎしめけば、江右衛門大せんにもかひ、やいさ何をばたつく、

おのれら侍かとおもふてはいろゝわけをいふに聞わけもない、こりや身は村上江右衛門といふて、いづみかはちにかくれもないもの、おのれらごさきのばたゝ侍二十や三十はくにする男でない、おそろくは一寸成共いごいて見よ、かたはしになぎたふすといふ所におくよりいわたひやうこの介はかけ來り、井づゝの前をなり平にわたし、是くなり平様、いづつ様に少もふぎはなけれ共、おまへのおためを覺し召ての事、扱又江右衛門殿おはたらき、忝しといへば大せんいよゝはらを立、やれ侍共のがすなこいへば、其ひまに武太夫はいづく共なくにげゆさける、江右衛門ひやうこの介ぬきつれて切たつれば、みなちりゝくにげうせける、扱ひやうこの介はるづゝをともなひ立のけば、江右衛門はなり平をともなひまづしのばせたてまつる、

## 第二

井づゝの前のいもうと君、玉水のまへに中はちゝありつねのはからひにて、なり平さふうふにならせ給ふべきを、あね君るづゝの前、ゑんを切給はん事をね

たましく思召、こしもと共をめしつれられ、しのびし  
のびに三々の明神へ参らせ給ひ、しよぐはんじやう  
じゆときねんある、所へそねの一角みかさのもこめ  
兩人は、あみがさふかく引かぶり、三わへさんけい  
し、神木にくぎをうつ、玉水見たまひこりやゝ一か  
くもこめではないか、そのほうたちは何の頼があつ  
て、おそろしい事をするぞ、兩人さうわくすれば返事  
らちあかず、忍いゝとかく、さゝ様へ申てきつとせ  
んぎする、一かく聞て、しからばまつすぐに申上ませ  
う、あのくぎはなり平様に打ました、玉水はつと思  
ひ、なり平様には何のどがゝあつてくぎをうつぞ、さ  
ればでござります、なり平様には井づゝ様ごみつゝ  
ゝなされてござりまするゆへに、おまへ様どの御ゑ  
んぐみがらちがあきませぬ、それゆへ御かちうもさ  
うごういたしまする、とかくなり平様のござるゆへ  
かやうにさはがしうござりまするによつてかやうに  
いたしまする、いやゝそれはわるいがてんじやな  
り平様にどがはないとかくあねさまのいたづらゆへ  
なればどがの有はあねさまじや、むゝ扱はあねごさ  
まにならばおまへもくぎをうたせられませうか、を

をいかにもあねさまはやうすによつてしれまい、と  
かくなり平様と縁ぐみのらちのあかぬもあねさま  
ゆへじや、もこめ聞て、さればでござります、此頃世  
間でさたをいたしまするも、おまへの其お心がござ  
りまするゆへ、あねごさまをのろはしやれまするか  
と申まする、かやうにしのびゝに御さんけいなさ  
れまするを兄さへもんが承りましてきのぐくに存ま  
して、我々をかやうにいたしておこしましてござり  
まする、はゝかりな申事でござりますれ共、おぼし  
召きられましたようござりませう、玉水聞給ひ、をゝ  
いかにもあやまつた此上は日のもとのあらゆる神か  
けて思ひとまらふ程に、さたなしにしてたも、あゝ  
何が扱其お詞にいつはりはござりますまいな、あに  
さへもんが承りましたらば悦びませう、しからば私  
はおいごま申左衛門に申聞せませうといへば、一角  
聞て、さいわい兄彌一郎かへりました程に申聞ませ  
ふ、玉水聞たまひ何と彌一郎はかへりやつたか、うれ  
しやさらばはやうあはふとあれば、こしもと衆はよ  
ころびて彌一郎様にみやげをもらはんと、みなゝ  
屋かたへ歸られける、扱そねの彌一郎は玉水の御ま

へに出ければ、玉水見給ひ彌一郎歸りやつたかなり  
 平には御そく才なか、井づゝさまへお文でもきたか、  
 おことづてがあらふの、いへゝゝ何のおことづても  
 ござりませすお文でも進ぜられませんかと申升たれ  
 共、何の事もござりませなんだ、こしもとつぼね取  
 つき、さあみやげをさせがみける、あゝかしましたい、  
 どれゝはさみ箱とつておじやとて、はこのふたを  
 あけ、いひけるはなんぞかわつたみやげをと存まし  
 て、なり平様と御だんかういたしました、こゝにもく  
 ろくがござります お引合なされませとて、書付をわ  
 たしける、先一ばんに人ぎやう筆、扱いものはしかのま  
 じない、是はなんぞ、いもをどうげのまごじやくし  
 とて、しやくしを出しける、扱あさま山さあこれはな  
 んでござりませう、そ、あさまはけふりの立所じや程  
 にかうろか、いへゝゝ、尤あさまにはけふりが立ます  
 るによつてひふき竹、扱其つぎはたが袖、ぬすみ人  
 舟、是はがてんのゆかぬ物じや、先ぬす人なればすり  
 でござります、舟はこぎまするによつて、すりこぎで  
 ござります、扱はおなぐさみでござりまする程に、是  
 をくじ取にいたしませふとて、大かたぬぎにてほう

引をはじめけるが、なり平の文をおとしけるを、玉  
 水ひろひ給ひ、是ゝ彌一郎、なり平様よりあね様の  
 かたへ文はこなんだの、いかなゝけもない事、こり  
 や彌一郎、此文はなんじや、うは書を見ればせいどう  
 様、ざい五よりと有、せいどうとは井づゝといふ事、  
 ざいごとは在五中將といふ事、なんと是でもこぬか、  
 はてわけもない、それはせいどうねんと申しんこん  
 寺へ參る文でござります、つぼね小袖をもち出、これ  
 これ彌一郎殿、此お小袖はゐづゝ様のではないか、し  
 れゝゝしいうそをいわしやるといふ所へ、ゐづゝの  
 こしもとさゑだは彌一郎おそしとてむかひに來りし  
 を、玉水の前なればゐづゝよりつかひに來るよしを  
 いひけれ共、玉水がてんせす、やいさゑだ、まつすぐ  
 にいへ、そちは彌一郎をよびにきたと、さればさゑだ  
 はめいわくがりていひわけをする、玉水はらをたて、  
 長刀にのせんとせしを、彌一郎引立かへしければ、玉  
 水いよゝゝはらを立、文ずんゝに引きさ給ふ、所へ  
 有つね來り給へば、彌一郎どうわくする、有つねみ給  
 ひて何共がてんのゆかぬていと、いろゝやうすを  
 尋ね給へば、つぼね次第をかたりける、有つねりつぶ



く有やい彌一郎、ごんごだうだんにくいやつかなこ、此上はいそぎるづゝがくびを打て參れこ有、彌一郎めいわくし、先一通お聞なされよといへ共、有つねせき給ひ、それ侍共いそぎるづゝがくびをうつて參れかしこまりましたとて、立ければ彌一郎聞て、是く侍衆、なぜに立騒ぐぞ、殿様にはおとしよられてらうもうなされて仰らるゝを、かしこまつたとは何と、立さわいでかしこまるゝか、下にゐやれといへばやいゝ彌一郎何と身をらうもうとはすいさんなりといかり給へば、彌一郎申様ちか頃はゝかり申事で御ざりますれ共、此義はこくと御せんぎなされませい、尤なり平様より文は參りましたれ共、其文はいこまの狀でござります、則此お小袖るづゝ様よりなり平様へしんせられましたれ共、ゑんを切からは此小袖もいらぬ物じやとておかへしなされましたといへば、有つね聞給ひ、扱はゑんをきつたか、そうとはしらいでらはが立た、此上は玉水もゑんごしたがよくひ、彌一郎くたびれであらふ、先々やすめとておくへ入給へば、皆々内へ入給ふ、扱彌一郎は一角を近付、扱々なんぎをした、身共はかへらうといふ所へ玉水

出給ひ、此小袖をきつと見て、ねたましやとて立給へば、玉水のしうしん小袖に取付、引上んとすれ共あらねば、彌一郎きもをけし、あきれてゐたりしが、一角やうゝなだめ入ければ、彌一郎も小袖を持、井づゝの方へいそぎけるこゝに井づゝのゑ野ざはのびくは、井づゝをあづかりゐられしが、たき山ほうゐんといふ物をかたらひ月待のあら行をしておはします所へ、彌一郎來り有ししだいをかたりければ、ゐづゝきもをけし何業平様よりいこまの狀がきたか、口をしやもはや月待してもやくにたゝぬと、なげき給ふのざわのびく聞給ひ、是くゝゐづゝ何とぞしてそなたにやゝをうませふと思ふて此やうなあら行をしてゐるかひもない、とかくいきて詮もない、此きたう刀でじがいしてしにやとあれば、彌一郎是を聞、何とやらこなたのいひ分一物有やうにおもふといへば、いかにもゑいがてん、おれは有つね殿にはそうりやうなれ共、下しやくばらとて此所へおひ下された、其うらみが有、ゐづゝも玉水もころしておれが家をつぐ、彌一郎聞もあへず、とつてふせやれ人よとよばはれば、たき山法印立出、扱々惡人かなとて野ざはの

ひくを引立ころし、井のちこへ人にける、扱彌一郎は  
ゐつゝをいたはりけるが、井つゝはかみをきり、て  
うすばちへなげ人おくへ入給ふ、扱彌一郎かへらん  
とする時玉水のしうしん小袖より出、かなたこなた  
とする所に、てうすばちよりゐづゝのかもじこび出  
でたがひにしんゐのあらそひはすさまじかりけるし  
だいなり、彌一郎はしばがきの内へかくれける、井  
づゝのめのごみかさの左衛門は、此の有さまを見付  
かけ來れば、兩人のしうしんけすがごごくにうせに  
ける、左衛門はつご思ひ、ゐづゝのねまへかけこみ引  
起し、是くゝゐづゝ様ゑゝあさましき心やごいらい  
ろゐけんをすれ共ごかく命はすつる共、なり平様の  
御事を思ひ切る事はならぬごあれば、さへもんはせ  
ひもなく、しからば爰を立のきなり平様にあはせ申  
さんご、すでにのかんごすれば、庭のすみよりのざは  
のびく、やれゐづゝその方ゆへに此くるしみをうく  
る、かたきをごつてくれよごさもすさまじくいひけ  
れば、さへもんあきれはて、人はなきかごいへば、た  
き山法印立出、しやくじやうをならし是はさへもん  
殿何ごした事ごごいふ時、おごしあなより井戸ほり

二人くびを出すをさへもんみて、是は何共がてんの  
ゆかぬていじや、是くゝ法印、まつすぐにおいやりご  
いへば、法印さあらぬていにてちんじける、時にさへ  
もん大地をふみ、やい地の下にゐるくせ物共、出ずば  
おのれらゝ々ふみころさんごいふ、井戸ほり共きも  
をけし、ゆるさせ給へごこんで出、イのてだてのしだ  
い大ごごらを打、かやうくゝの次第ごいふ所へ、又庭  
のすみよりそねの彌一郎がゆうれいごなのり、是れ  
これさへもん、地ごくよりみやげをごつて参りたり  
ごて、のざはのびくにをからめ出れば、さへもんいよ  
いよあきれつゝ扱は此物共、いろくゝのたくみをな  
しける悪人なればごて彌一郎さへもん心を合、悪人  
共をいましめける、

### 第三

岩田ひやうごはま松かもんは、なり平をかくまはん  
たの、山だちのすがたに成、ゆきゝの人をおひはぎ  
してゐたりしがかゝる所へ都より、おしげおさつ兩  
人ゐづゝのゆくへを尋ね下りしを、ひやうごかこも  
んすではぎごらんごせしが、よく見ればいもうご

成、是はくといふ所へ、たつた武太夫馬にのりて通りしが、人々を見付、岩田ひやうこの介殿でござるか、いつぞやはさうくおめにかゝつてござる、さてもり人々をほろぼさんごたくみまする、扱あの方のかまへはかやうく語り、此段を業平様へちうしんをいたすのであれば、ひやうごつくく聞、武太夫をとつてふせ、おのれちうしんではない、有やうにいへ、たばかりなり平様を、なん大もんへまねきよせ、やすくとほろぼさんごのてだて、かうにらんだまなこはちごふまいとせめければ、武太夫もせんかたなく、此上はまつすぐに申さんたすけてたべといへ共、ひやうご聞入ず、たちまち打てすてにける、此よしかくれなければ、玉水のまへはなり平様のてきなれば、大せんを一太刀うらみんと、南大門に出給ふ、所に村上ごう右衛門女ぼうおはるも、南大門に出けるが、たがひにりきみのあらそひせしが、兩ほうそれとなりのあひ、大門にむかひよばはれば、大門の仁王、女はけがらはし歸れといへば、仁王の物いふはめづらしいとわらひ給へば、仁王あいつのことはをい

ふ時、内より四天王となりの、手にくほこを引さげ、がうぶくせんといふ時へ、がう右衛門ひやうこの介其外の人々、思ひくにつけ來り、是く四天王、佛は人をたすくるやくなるにしかも佛法はんじやうのれいちにてせつがいせんとは、おのれ一人ものがさぬといへば、四天王はしやうぞくをこれば、仁王といひしは大せんなれば、人々おりかさなり、惡人共をたらげてなり平あづもろ共に、ながさちぎりもすへはんじやう、めでたかりける次第也

#### 二條通寺町西へ入北側

正本屋九兵衛新版

#### 業平河内通終



御曹司初寅詣

近松門左衛門作

上之虎物もふ兵法の手は曆の中段伊勢三郎  
卷 付りつゝおつゝまるねのまゝら

中之龍之龍女にふてあまいやつ佐藤次信  
卷 付り玉すだれ目をせる小判

下之獅御出の山もふ袋につめ込今吹の金賣吉次  
卷 付りさしれ石御庭のふいぐは

一源九郎よしつね

若衆方小の川宇源次

一しづか御せん

太夫きり波せんしゆ

一こしもごねのひ

きり波あふよ

一同わかまつ

はや川さのゝ介

一武藏坊辨慶

座本古今新左衛門

一いせの三郎義盛

立役中村四郎五郎

一上るり御せん

上村おりの介

一れいせい

山下かめの丞

一十五夜

よしをかみゆき

一鬼・ほうげん

宮崎だん九郎

一同手かけ小しば

さかた市彌

一娘かつらのまへ

おのへうこん

一いもごありあけ

をぐら山をのゝ介

一北しらかはたんかい

敵役三かさしやう右衛門

一さこうたゝのぶ

立役生島新五郎

一いもごまがきの前

ふちた大次郎

一清水坂あんじゆの姫

若女形あさを十次郎

一娘小いご

長しま庄のすけ

一しのぶ小太郎

山下小才三

一梅津さいしやう北の方

玉川千之丞

一同娘少なごん

鈴木辰三郎

一妹小がう

あさをつまばし

一こしもごおかめ

さかたをぎの

一同おたけ

山下かるも

一梶原平三景時

しが山ばん十郎

一らうごう犬間げんない

ごみ山十郎兵衛

一四條中島おしろいやお雪

小さはら友三郎

一同あぶらや娘おたね

きりなみきさの介

一同くはしや新兵衛

ゑぐち甚五郎

一江間の小四郎よし時

若林四郎右衛門

一かねうり吉次のぶたか

道外金子吉左衛門

御曹司初寅詣

近松門左衛門

上

ゆふべくの鞍馬山、いつあきらけき月をみん、扱も源氏さまのかみ義朝の八男、常盤腹には三男、源の義經は、平家の一門追討あり、勲功をおこなはるべきところにて、梶原が讒言によつて、頼朝義經御中不快にならせ玉ひ、鎌倉より討手上るよし聞えしかば、一先奥州秀衡がもとへくだらんと、紙子姿に古編笠、むかしにかはる有様なり、はあ扱口口なる春景色、我いにしへ牛若といひし時、鞍馬山にて人となり、何ぞ平家を滅し、父祖の耻辱をすゝがんと、よなく多聞天に詣で、祈誓したる其しるしにや、平家の一類こそごとく西海の浪にをつちらし、其賞莫大なりといへども、梶原父子が讒言により、兄弟の中不和になつた、一先奥州へ下り秀衡を頼み、二度義兵を擧げんと存る、靜は女の事なれば、義經はどの者が、女を具してはと都にこゝめ置た、又矢矧の上りは身共が事を思ひ焦れ死に死ださ聞く、うらめしいは我身じやと

歎き玉ふところへ、向ふより乗物かゝせ、武藏坊辨慶來れば、義經乗物の前に畏り、御乗物の内へ申上たきよしの玉へば、辨慶怒つて御輿の内へ用ありとは、かたじけなくも源の牛若君、今度鬼・法眼殿の聲に御なりなされ、たゞ今お越しなさるゝ、不調法な奴のそこを立退け、まだ退ぬかと編笠をとり顔を見合、こは我君かと歎くを侍咎め、これ辨慶どの、我君とはごなたでござる、辨慶まぎらかし、そうではない我君の御馬やの喜三太じや、まだ都にうろたへてゐるは、此乗物のお人ご一所に奥州へ下らんといふ事か、いやさやうでござらぬ、そとおめにかゝり申上たい事がござるといへば、靜は牛若と名をかへ、若君の姿となり乗物より出、是は喜三太かと取付きなげき、扱こそそちは卑怯ものじや、なせ奥州へは下らぬ、今の世に頼朝に睨まれては身がたゝぬ、今度鬼・法眼が方へ聲入をし、まさかの時は義經と名乗り討死をする、いまだ都にうろたへまはりゐるは、卑怯ではござらぬか、いや左様ではござりませぬ、靜は常々心にかゝる事があるといふ故、今日御乗物の先に立ちました、つねづね靜御前の仰りますは、奥州へ下るといふて、矢矧

の宿上るり御前と馴れ染めてござるご仰しやる、上るり御前はお果なされたご、此枕を冷泉十五夜かたよりをくりました、上るりは義經故こがれ死に死しましたご歎き玉へば、靜は枕もち上るり御前はおはてなされたか、喜三太ごて歎き玉へば、辨慶も涙をおさへ、喜三太さらばく、まづ明神へお参りなされご神前へ入り玉へば、義經は残りゐて、さりごはく女ながらも頼もしいは、此義經に成かはり、まさかの時は討死をするであろふ、早く奥州へ下り二度義兵を舉げんご云玉ふごころへ、辨慶來りまづお待ちなされ、靜御前の何やらおしやる事があるごいふ、所へ靜出玉ひ、辨慶ごめてたもつたかご、互ひに取付き心底を感じ歎き玉へば、辨慶申すは、目出度門出じや歎く所ではない、追付めでたふおつきなされごいへば、義經の玉ふは、何ご望みの虎の巻は見せぬか、かつらの前ご祝言はあつたかこの玉へば、虎の巻は家の重寶ごていまだ見せませぬ、祝言にはうご致しなした私が智恵を出しまして、私の申すのは、八島の合戦に大勢の軍勢を殺した故、千部の法華經を書き供養を致す、其間は女ご肌を觸れる事はなりませぬごい

ふてをきましたご話し玉へば、是は出來たご笑ひゐる所へ、二十歳あまりの若侍來り、刀を抜き指より血を出し、起請文に血判を押し、辨慶を頼み、これむさし殿、これを義經公へお上げなされて下されごいへば、辨慶怒つて、大將たる御身へ不調法千萬なごいへば、侍申すは是むさし殿、こなたも西塔のちごではないか、義經公北野詣の折ふし見染しよりこのかた、暮れば戀慕の床にしづむ、其思ひのたけを一通の起請文に指を添へてさし上ます、お取次を頼みます、武藏聞いてあなたには念者がござる、ならぬ、それは何者でござる、直に申さふ、聞たくばいふて聞せふ、鞍馬の天狗じや、侍聞てお言葉のお情けも、せひならぬごならば、腹十文字にかき切て、一生義經の惡魔となり思ひ知らせん、先辨慶が首取てご飛でかゝるを、誠の義經おしごめ、拙者義は此籠にをる素浪人でござる、左程に思召すならば、私が取持ちませふご靜に向ひ、是義經さま、あの者が只一言のお情ご申す、かなへてつかはされませいと、扱侍に向ひ、こなたの思召人はごふでござる、左様でござる、然らば此起請文の奥がきに、こなたの心底、こんじやうの思ひで、忝いご



書きて下されと硯を出し、書きて貰ひ、起請文を取り、若侍はゆくゑも見えず成ければ、辨慶はかぞでを祝ひませふと、義經しづかも共やかたの内へ入玉ふ、所へこしもこ子の日、若松は、最前の枕もち出あげて見んとするを辨慶かけ出、それは大事のかたみの枕とせり合ふ、おけて見ればしやれかうべなれば、きもを潰しこしもこいづゝの内へ投入ける、所へやはぎの宿上るり御前の女房達、れいせい十五夜は琴笛を持來り、辨慶を頼み、此琴はやはぎの宿長殿の娘、上るり御前の御琴、一とせ牛若殿、金賣吉次の馬追冠者となり、奥州へ御下向の時、一夜の契をこめたまひしが、三とせがうちには御迎の參る御約束なれ共、いまだ御約束の參らぬうちに、上るり御前はそれを思ひ死におはてなされました、其時のよひのくはげんの琴、又此笛はとうくはう坊も御存知の笛、御かたみにつかはされました蟬折と申御笛、御寺へ上て下さんせ、何ごとも昔語に成ましたと歎けば、扱は十五夜冷泉か、おれは武藏じや、なつかしやと涙を流しゐる所へ、井筒のうちより上るり御前の幽靈あらは出れ共、十五夜れいせいが目には見えず、辨慶あせつて、

こなたはごつからごつた、ヲ、おれは義經の紙子の上にをはれてゐた、やはぎの上るりがなき面影の、これまであらはれ出たるぞや、はかなき昔を語らんと、琴引寄かきならし玉へば、辨慶は琴に合せ、小唄をうたひをさめければ、姿も見えず井筒がくまに隠れうせければ、辨慶みなく涙と共に入にけり、かゝる所にゐまの小二郎義時馬に打乗り、證人の若侍、軍勢引具し、法眼が屋敷をおつこりまき、切て入んとするを、まて侍共、いふても頼朝の御舍弟、尋常に名乗て切て入と、大音聲、北條の四郎時政が嫡男、江間の小二郎義時討手を蒙り罷り向つて候、義經やおはします、おりあい玉へと罵れ共、音する者もなければ、侍共きつていれ、承つてこみ入ところを、義經これに有やと駈出玉ひ、やあ見ぐるしや雜人ばら、此義經が太刀先きにまはらん者、一人にてもいきかへらんや、義時に一言云事あり、出あへこの玉へば、義時かけ出見れば口つちじやが、義時に向つて用ある時は、をのれは何者じや、何者とは、義時久しいな、世にありし時は、兜を脱ぎ腰を屈めたる義時が、見知ぬならば名乗りてきかせふ、征夷將軍右大將頼朝が弟、

源義經じや、義經公は身が見しりてゐるが、をのれは義經公の家來、龜井の六郎じやな、このばは義經公の生涯のばじや、此様にいふてもわれは合點がいかなか、此小二郎は義經の討手に向ふた、龜井の六郎ならば此場はたすかれ、扱はさやうでござるか、成程龜井の六郎でござるが、奥にござるは三代そうおんのお主じや、其首を取んごするをよそに見てやあるべき、片岡くまい伊勢するが、忠信ひたち武藏坊、かう申龜井の六郎まで、一人として我君の御命にかはらんと願ふ、何と女でもうたしやるか、義時聞て、義經と名乗るからは女でも討ねばならぬ、それほご義經はにくうおぼしめすか、兄弟多しといへ共、惡源太義平、中宮の太夫ともなが、此人々はよくにお果なされ、ながらへてゐるごては、頼朝公、蒲殿、扱は義經、ひごせ浮島が原にて御對面申たりし時、只今より惣大將を義經に下し玉はるごありしかば、諸國の大名一ごうに、あつご首をさげしに、五尺に足らぬ義經が、今身の置き所がない、義時にいけんが致したい、所々の合戦に、男女の數およそ十万人余りも殺したが、今義經が身にむくうた、たごへ義經と名乗らふごまゝ、た

すけてくだされ、義時聞て、義經とあればたすける事はならぬ、ごこの秋六はらに登つてゐれごも、侍共に申付、義經の事は身が耳に入れなご申渡してござる所に義經公慥謀叛とある證人が出來ました、それは何者でござる、時に侍證人はそれがしじや、義經見玉ひ、最前の浪人か、それには證據があるかごの玉へば、最前の起請文を出せば、義經見玉ひ、これが義經の直筆じやごは、義時詮議かくらふござる、先おのれは何者じや、侍申はおのれ龜井の六郎じや、何と義時ごの、義經の謀叛ははれましたぞや、誠の戀路と思ふて、身共が量見を以て取持てやつたに、ふたごきにならぬに六はらへ註進をしたな、誠に鬼一が一類に、たにかいといふ惡僧がある、内々鬼一が家に望をかくるご聞た、扱はおのれは頼まれたな、おのれまつ直に白狀せよごの玉へば、義時かの侍をこつて投げ責付くれば、りやうじをさしやんすな、成ほご申ませふごいへば、義時聞て、今迄はごせいをし、侍のやうにあつたが、女の聲は何奴じや、成程白狀致しませふに、命をたすけて下さんせ、私は鬼一法眼が手かけ小しばご申ますが、かつらの前は私がほんの娘でござん



すが、北白川のたんかいのいはれますには、牛若を殺し虎の巻を奪ひ取たれば、かつらの前ご夫婦に成、私もらくく／＼にさせふといはれました故、此様な形になりましてござすんといへば、扱は知れた助けぬ奴なれ共、女なれば助けるご引のくれば、飛のき侍共がつてんか、義時共に討取とうつてかゝれば、義時驚き小柴侍共をおつけ行ば、義経は井戸の内へ隠れ玉ふ、所へ辨慶は静を肩にかけ出れば、侍追かけ来るを取ては投げく／＼防ぎゆく、所へ小柴は又駈來り、最前の龜井の六郎はまことの義経じや、討て取れご井戸の内へ入んとすれば、義経かけあがり、せひに及ばぬ是迄ご腹を切玉へば、侍首を切らんとする所へ、義時駈付け侍共を追散し、是も腹を切らんとする所に、井戸の内より義経聲をかけ玉ひ、義時をこゝめ玉へば、こなたは腹を切はなされぬかといへば、義経いやをれば腹を切らぬこの玉ふ所へ、上るり御前の幽靈あらはれ出、魄はめいごに赴けども、魂は此世にこゝまゝり、お身代りに立たると、忽ち消失せきごうに成玉へば、みなく／＼奇異の思ひをなし、伏し拜み玉へば、義時申は、一時も早く奥州へお下りなされといへば、

義経聞玉ひ、義時鎌倉の首尾を頼む、是ご申も大ひ多聞天の御じひと、ふし拜みく／＼わかれく／＼になり玉ふ、ごに鬼一法眼が娘かつらの前、妹有明は、惠方参りをしかへれば、鬼一立出、けふは身が家の吉例、兵法のつがひぞめじや、ごこへいきめされた、兄弟聞玉ひ、惠方参りを致しました、ふ、見れば見馴れぬ者が供をして來たが、何者じや、左様でござんす、妹が大勢の参りでふみはづし、橋の下へおちましたを、あの人が介抱をしてたりました、聞ば奉公の望みが有といはれました故、連て参りました、禮をいふて下さんせ、鬼一禮をいひ、奉公にかゝへる、これは身が姉娘じやが、髯殿がある、以前は歴々なれ共、仔細あつて名をかへてござる、それ牛の介殿を呼べといへば、静は牛の介に成り立出給へば、めみへをし、成程律義そふにござる、あのやうな者がきんじよで使ひますにはようござると、挨拶すれば、鬼一聞てこなたの氣にさへいれば、一段でござる、妹は茶の間をこしらへ、これは又お經をあそばすかと、かつらの前ご打つれ、鬼一は内へいれば、牛の介は奉公人と呼び、國元を尋ね、我在所にも戀がはやるか、夜更てから手を



打つ時は来いよ、我を頼む事があると、耳に口寄せいへば、其様なことはなりませぬ、しつかいそれはつゝもたせといふものでござる、合點せず次の間にゐる所へ妹有明出玉ひ、奉公人に近付、牛の介と姉様とはもうこじやが、ついに枕を並しやんせぬは、氣に入らぬそふな、ごふぞおれに肝入て下さんせといへば、奉公人挨拶する所へ、かつらの前出玉へば、妹は逃げ入玉へば、かつらの前さまゝぬれかけ玉へば、牛の介合點し玉はぬを、無理に引立入玉ふ、所へ北白川のたんかい御見舞と案内すれば、鬼一立出たんかい御出なされた、今日は身が家の兵法の遣ぞめゆへ、人をつかはした、たんかい申は、先以て新春の御慶めでたふ存る、いつもあのしやうぎにござつて御見物なさるゝに、今日は是にござるは何と思召てのことでござる、さればでおじやる、身は老衰いたしたゆへ、今日よりして身が目鏡を以て、此しやうぎへなをす者がござる、たんかい聞、これは忝ない、法眼殿の二弟子と申すは此たんかいより外にはござらぬ、忝なふ存じますと禮をいへば、いかにもゝ、その牛の介殿御出なされといへば、牛の介出床几になをり玉へば、

たんかい見て是牛の介、禮義を忘れたな、法眼殿の弟子は此たんかい、なせ座上にはなをる、いせんは歴歴な侍と、世におちぶれた故禮義をしらぬそふな、いやたんかい身其が今日の座上は、法眼殿さしづ故床几になをり申が、御不審にござるか、たんかい聞て何と法眼殿左様でござるか、鬼一聞、成程ゝ身が家に世に、なき虎の巻がある、牛の介に譲り與へてござる、それゆへ今日の上座を許し申た、たんかいきもをつぶし、これ老ぼれ、其虎の巻が望ゆへ、十七年以來春秋を送り、師匠とあがめ禮義を勤めた、此たんかいにはなせゆづらぬ、法眼聞玉ひ、是たんかい、牛の介師匠はな、忝くも鞍馬山の大僧正、平家を西海の浪におつくだし玉ひし御身、われはそれ程血臭い目にはぬ、牛の介殿には成まい、たんかい聞、成程聞へた、然らば牛の介としあひを致し、勝負を致さふといへば、法眼竹刀持出で、牛の介に渡すゝめ、容赦なく此しないにて、首の骨を二ツ三ツ打てやらしやれといへども、誠の義經ならねば迷惑し辭退すれば、法眼申は、相手にならしやれぬと、譲り申した虎の巻を取かへします、日頃僧正坊に習はしやつたはこゝでこ

ざる、靜聞玉ひ、扱は相手にならねば虎の巻を取返さしやるな、せひに及ばぬ勝負は時の運、たんかいがやり先にて死するならば、此事を辨慶に傳へてたべこ、打合さんとする所へ、最前の奉公人見て、たんかいを笑へば、たんかい腹を立、おのれ下郎なれ其惡言がにくい、相手にならうといへば、奉公人相手になり、さんざんにたんかいをたゝき伏せければ、法眼牛の介みなく、悦びあへば、法眼たんかいに向ひ、あのやうなる下郎に負けては、いまだ修行が足らぬ、随分精を出しのされといへば、たんかいめんぼくなくあやまりました、先おいこま申さす、しかし牛の介殿には意趣がござる、明日しんけんで参ふと、暇申してかへれば、法眼かつらの前内へ入玉へば、牛の介も入んとするを、最前の奉公人、牛の介やらぬ、最前法眼ごのより受取た虎の巻物を渡せ、其虎の巻に望かけてござる、身には主人が有、先牛の介と名乗るが合點がいかぬ、牛の介聞玉ひ、身は源の義經じや、渡すことはならぬと、互ひにせり合、しないにて打あひ、虎の巻を取て伏せ、身を何者と思ふぞ、義經公の家來伊勢の三郎義盛、虎の巻を奪ひ取んとつくり馬鹿となつて來

た、渡さぬかとしめつくれば、靜聞ひ玉、伊勢三郎が顔は見しりてゐる、十八の年元服したが、そなたには前髪がある、をゝいかにも元服致したけれ共、是は付まへ髪じや、そちは何者じや、わしは靜でござる、義盛聞、靜めじやと、乳を見様子を聞顔を見合、互ひにきもをつぶし、扱我君はいつ奥州へ御立なされましとこいへば、よしもり聞て、初寅の日はや二十日餘りになる、先法眼もそなたを誠の義經様と思ふてゐる、したくを致し、明日立ませふといひ枕を見て、はるゝの道此枕は何でござる、靜聞玉ひ、是は上るり御前のしやりかうべが内にござると、上るり御前の物語りをし、ごろりゝとねぶるうちに、枕うごき出、則ち上るり御前の幽靈あらはれ、執念き顔にて睨へ玉へば、靜申は、扱はこなたは上るり御前殿か、朝夕法華經かきたむけさすに、ひきやうにござるぞや、あら怨しやな、その方ゆへ義經様には見捨られ、今奥州へ下り添ふと、いかではなちやるべきと、をつかけ給ふを伊勢の三郎諸共、法華經を讀みゐる所へ、小柴は鎗引き提げ來り、牛の介と思ひ、上るりの幽靈をつきこめければ、しやれかうべなればあきれたる所



## 中

を、義盛取て伏ける所へ、法眼みなくかけ付見れば小柴なれば、鬼一怒つてをのれは身が手かけの小柴ではないか、小柴中は此上は有様に申ませふ、たんかいに頼まれ、虎の巻を盗みに参りましたといへば、鬼一手討にせんとするを、義盛取付、申てもかつらの前様のお袋と申、おなげきもいかなれば、お助けなされどわびごとし、命を助ければ、小柴悦び、只今の命をお助なされましたほうおんに、ちうしん申ごがござります、たんかいが熊坂の長範と偽り、今夜うちに参りますといふ所へ、たんかいは弟子大勢引具し大音聲、熊坂の長範、虎の巻に望みある故、是まで寄せ來りたり、切入れ者共と切て入るを、義盛がけ出こりや、たんかい、おのれが企は小柴がみないふた、一人も餘さじと切て出るを、押へだて女房達は、小太刀を抜いて渡りあい、侍共を切てすつれば、義盛はたんかいを討てすつる、所へ義經辨慶かけ來り、辨慶法眼に向ひ、靜を今迄は牛若と偽りおきました、誠の牛若はこなたでござるご、みなく對面し、是と申も毘沙門天の御利生、鞍馬山へ參詣し、其後奥州へ下らんごうちつれ詣でたまひける

扱も佐藤忠信は義經の跡を慕ひ、都なれや東山四條河原中島へんに徘徊し、よもを詠めてゐたりける、然る所へ梅津宰相の娘少納言は、こしも少々召つれ玉ひ、祇園参りのかへるさに、吉彌が店に腰をかけ、忠信と顔を見合、じつとしたる目の内に、互ひに戀を合せて、さまく戯れ玉ふ所へ、町の年寄かけ來り、町の衆を呼び大事が出來た、鎌倉より梶原殿が御上りなされ、めしうごを召つれ御出なさるゝといふ所へ、梶原平藏景時は忠信が妹まがきの前、娘小糸を乗物にのせ來り、乗物をかきすゆれば、妹眞垣梶原に向ひ、忠信が妹娘を死罪に仰付らるゝことは情ないことじや、殊に兄忠信殿は、義經公の郎等にも、一騎當千の人、其首此様に色が違ふては、はぢのうへの耻辱、是におしらいやもござる、兄様の顔におしらいをさせ、幸ひ伽羅の油屋もござんす程に、繕らふて下さんせと歎き給へば、梶原聞て、誠に齋藤別當實盛は、鬢髭を墨に染たることもあれば、苦しからずと、おしらいをぬる所へ、信夫の小太郎駈出、小糸と顔を見合



せ、こは小系様か、まがき殿かと取付歎き、つぎのぶ様は八島合戦に討死なされ、忠信様がさきをかゝせ、私があそこをかき、むれたか松の土中に籠ましたがこいへば、まがき聞玉ひ、是はつぎのぶ様の首ではない、忠信様の首じやこの玉へば、宰相の娘少納言は駈出給ひ、何是は忠信様の首じや、わしは忠信様といひなづけの少納言でござんす、首に取付歎き玉へば、梶原聞て、忠信が女房は清水阪のあんじゆならではないかと思へば、あんじゆは手かけで已れは本妻じやな、侍共しはれど、少納言しのぶの小太郎諸共に縛れば、少納言の玉ふは、たとひいひなづけなれ共、忠信殿と一所に死するは嬉しいこの玉へば、まがき聞玉ひ、是につけてもあんじゆ殿はきこへぬ、是なる梶原があんじゆに心をかけ、忠信殿は殺したと、首を見せれば、子まである中をふりすて、今は梶原と夫婦になつてござんすと語り出し、歎き玉へば、梶原怒つて侍共引立といふ所へ、八十ばかりの翁鳩の杖に縋り來りければ、梶原見てあら不思議や、ついに見ぬ尉じやがいづくより來り玉ふぞ、是はつぎのぶ忠信が親佐藤庄司でさふらふなり、娘や孫が生擒れしを助け

ん爲に参りたりと、梶原をたばかり、生擒をかこひ、繩を解き、身をまことの庄司じやと思ふか、義經公の御内なる佐藤忠信じや、をのれ逆櫓の意恨によつて義經公を纔言したな、主の敵のがさじと討てかゝれば、梶原は後をも見せず逃げにける、少納言は聞玉ひ、扱はお前は忠信様か、わしはいひなづけの宰相が娘少納言でござんす、夫婦の契約をし、是に付てもあんじゆめは、にくいやつじや、子まで有中をふりすて梶原と夫婦になりをつた、何とぞ思案もあるべきと、みなく打連れ宰相の、館へこそは人玉ふ、こゝに金賣吉次は、なにはの梅をになひ來れば、あんじゆはなにはの土賣となり來り、爰にて逢ひさまく話をする所へ、宰相の御臺來り玉ひ、此屋敷の家來でもないが、ごこの者じや、私は鞍馬の者でござるが、さる御所様より頼まれまして、なにはの梅を取に行まして、私もなにはの土うりでござんすが、頼まれまして行ぞ、梅津の宰相様へ参ります、それは梅津の宰相の御臺じや、是が則やしきじや、われに頼むことがある、あの俵は、此屋敷のあくたやちはぶみの反故じ

や、大儀ながら此小判をやる程に、かつら川へ捨てくれど頼み、御臺は内へ入玉へば、梅持土賣悦び俵を持て行んとすれ共動ねば俵をあげて見れば、女の子なればきもをつぶし逃る所へ、少納言の妹小がうの前來り玉ひ、こなたは目がわるいになせにこゝへはござつたぞ、お袋さまのおしやんすは、此俵の内へ入れば目がなをるとおしやんした故、はいりましてござんす、今俵の内で聞てゐますれば、桂川へ流せといはんすこなげき玉へば、梅持土賣も、おいたはしやと共に涙を流しける、小がうの玉ふは、をれがかゝ様は心が邪慳にござんす、此ことは沙汰なしにして下さんせ、土賣の女中は、私もあのお人様の様な娘を持てゐます、おいとしやお目がわるふござりまするか、目を見て進ませふと顔を見きもをつぶし、お前は佐藤忠信様と、清水坂の あんじゆ様の中にできましたお子ではござりませぬか、其お子が此屋敷へはどうしてござりました、小がう聞玉ひ、忠信様は此屋敷へござりまして、をれが姉様と夫婦になつてござんす、それゆゑ此子も屋敷にござんす、あんじゆ聞て忠信様は聞へぬと怨をいひ、娘に向ひ、こな様は母にあひと

うはござんせぬか、小さい聞玉ひ、かゝ様にあひたう思ひまして、明暮泣てゐまして、此様に目を泣きつづきました、又父様のおしやんすは、かゝ様は畜生じや、子供がある中をふりすて梶原とめうごになつてゐさしやんすほごに、かゝ様のこご思ひ出すなどいひ付てござんすと、涙を流せば、あんじゆ涙共に、あんじゆが梶原と夫婦になつたには様子がござる梶原がかしい奴で、忠信が首じやとて見せました故、何とぞ敵を討んと思ひまし、梶原は大名なれば思ふやうにはなりません、あんじゆはわざと夫婦になりました、忠信殿には聞へぬと怨みをいふ折ふし、ひとへ切の音すれば、あんじゆは小がうに向ひ、今のはたれがふきましてござんすぞ、小がう聞玉ひ、わしがあね様がひとへきりが好きでござんす故、毎日忠信さまの吹いて聞さんす、女聞き、私もひとへきりがすきでござります、あの障子のわきで聞して下さんせ、成程聞しませふが其なりでは人が咎めませう程に、そこにわしが着る物がござんす、それを着てござんせ、こしもと共が咎めましたらば、今日参りましたこしらとじやといふてござんせと、小督小糸は内へ入玉へ



ば、あんじゆ梅持は障子のわきに聞入るゝところに、障子  
をさつと明れば、少納言は忠信に向ひやかましいに  
一へぎりを置さんせ、こしもと床をこれと炬燵にあ  
たり寐入ば、忠信はあんじゆとはしらすねまより這  
出、こしもとが傍へ寄り顔を見合せ、驚き逃げて寐間  
へ入る所へ、少納言ゑんへ出玉ひ、そこにゐるは何人  
じや、あんじゆ申は、私は今日参りましたこしもとで  
ござります、扱はそうか、あれにござるはおれが殿御  
じやが、いつもこちらから詫言をすれ共、今日はあちら  
から詫言をさせねばならぬ、そちは碁は打たぬか、  
私も打ますと、少納言あんじゆ碁を打つところに、あ  
ら恐ろしやあんじゆの嫉妬の一念、蛇と顯はれ、少納  
言の首に喰ひ付けば、あ痛く、この玉ふを聲に、忠信  
驚きあんじゆを取て椽より下へ投げ、あれ清水坂の  
あんじゆじや、おのれ憎くい奴の、今おのれが一念蛇  
となつて大事の奥にくひついた、覺があらふ、今にて  
はいひわけがおそひ、助ぬ奴なれども、口に思ひ控へ  
て助ると、睨み付ねまの内へ入給へば、あんじゆは涙  
を流しゐる所へ、梶原が郎等犬間の源藏かけ來り、あ  
んじゆを見付おのれは是にゐるか、身が主人の梶原

殿の、ねくびを取んとする其太刀風に目を覺し、おの  
れを討んと思す所に、いづくともなく逃げうせた、此  
間万々を尋ねめぐる所に、よき所にてあふた、侍共討  
てすてよといふを、源藏が刀を取り、こりや女と思ひ  
あなごるか、少しいひたい事がある暫く暇をくれい  
是忠信殿、あんじゆが心底は是にて晴れませふと、侍  
共ををつちらさんとするを、忠信さんで出あんじゆ  
をもし伏せける所を、侍共討んとするを、おし留め、  
こなた衆は武士ではない、御家來が危く見へます故  
かけ出留めましてござる、身は梅津宰相が家來でご  
ざるが、此女が見へたらば討てすてよと主人が申付  
てござる、只今討てすてますと、あんじゆを殺す眞似  
をして、ねまへおし込み只今討てすてました、源藏見  
てお、出來したり、主人が申は身に首取てかへれと  
申付ました、首を取らねば舁らぬといふうち、障子  
の内にて、かゝ様そこにござるかど歎く聲に、源藏  
見咎め、今のは何者でござるござせいすれば、忠信  
氣の毒がり、たばこきせるによそへ、先此きせるが  
侍の道にては、智仁勇の道と申、夫婦の中にてはが



ん首が夫、吸口が以前の女房、らうが今の女房、此らうが挨拶にて、又そはれまい物でもござらぬと、色色あんじゆに余所ながら物語りし、源藏に向ひ、あの首は私に下されませい、身がてがらにして主人に見せましたい、其かはりには忠信が行衛を申ませふといふ所へ、梶原侍引具し來り、何とあんじゆが行衛は知れたか、源藏承り、あの者があんじゆを討てござる、忠信が行衛はしました、梶原扱はうろ

人々を助ん爲の智略じやと討てかゝり、追かけ行ば、忠信は太刀抜き、梶原は吉次が討であらふ、侍共のがさじこ、くもでかくなは十文字、さんくゝに切ちらし、息をつぐ所へ、吉次信たか走せ飯り、梶原は追散した、義經公も辨慶も、諸共身がたちにござる、一所に奥州へ御供をなされと、皆々ど打連れ信たかの、宿所へ急ぎたまひける

## 下

たへ者が、忠信はあいつじや、侍共討て取れと討てかゝりければ、忠信は碁盤にて戰ふて、梶原が上にごんと打付て、侍共を追駆け行けば、梶原は碁盤をかたげ床几にし、少納言あんじゆ小いごを生擒ゐる所へ金賣吉次は忠信が妹、まがきに繩をかけ來り、お手下の百姓でござりますが、此女は忠信が妹でござるが、やぎりを越へ逃げますを生擒參りました、まだ注進がござりますは、義經の郎等に、武藏龜井伊勢駿河常陸坊などいふあふれづはもの只今寄せ

扱も三條吉次のぶたかゝ屋敷には、義經公奥州の御門出さて、春のはじめの御悦び、誠にめでたい女まんざいごりくゝに、御祝儀を祝ひ奉る、扱義經は夫よりも奥州さして下り玉ひける、源氏の御代の御繁昌、幾年重ねし姫小松めでたかりけるためしなり。

勢駿河常陸坊などいふあふれづはもの只今寄せかけます、御油斷をなされますなご心をゆるさせ、生擒を圍ひ棒ひつさげ、そこな梶原のげぢくゝめ、おれを誠の百性じやと思ふか、三條の金賣吉次のぶたか、

去方より生嶋新五郎殿へ進上致し候  
生々々乎御藝身振  
狂歌  
鳴蜩見飛上浮レ心  
いくとしもくるんお  
新春忠信大々當  
ほきしばるにて

五ご萬まん年ねん都みやこ置おき度たぎ人ひと

まんねんまでもさま  
ぐのげい

二條通寺町西へ入町

正本屋喜右衛門新板

御曹司初寅詣終

紅葉橋 いさなはし 當世名護屋大踊 座中 不殘

勇士郎 いさなり 掛踊 かひり 傾情一張弓 ゑざうしや  
威五郎 いごろう 雷電 いかづち

大あたり大狂言 五ばんついき

- 第一 元服 丹前の七つ道具たるぼし髪  
第二 諫言 玉祭の揚灯籠の八もん字  
第三 勘當 祭禮の大屋敷の草すり引  
第四 夜討 仙術の木葉絹の袈裟衣  
第五 記念 世繼の御教書まあら人神

五ばんついき役人付

一 北でうの四郎時正

一 はこわう丸

一 おに王新左衛門

一 だん三郎

一 はこねべつたう

一 ごちうくわいざん

一 山中うねめ

一 みしまかすへ

はやま岡ゑもん

市川團十郎

市川長十郎

さる若山左衛門

みやこ彌五郎

市川又三郎

市川藏五郎

四の宮團之丞

一 畔川かづま

一 北てうみだひ

一 いもごまんじゆ

一 かめつる

一 をつた

一 小野川こうたう

一 もなか

一 きせ川

一 そめ川

一 二の宮ごけ

一 二のみや次郎

一 くごう犬坊丸

一 小しやう數馬

一 をなじく

一 けわひ坂少將

一 かぶろきくや

一 やりてすぎ

一 またのゝ五郎かげ久

一 くごうすけつね

一 にたんの四郎

生島小てう

袖さきかゑる

はやま門之丞

もりをか入江

竹中喜世之介

山科十郎兵衛

筒井歌之介

もり岡なには

中村源のすけ

水木竹十郎

袖をか小太郎

早川傳五郎

くめ川主膳

もり岡虎の介

中村源太郎

袖をか春の丞

てき嶋孫三郎

村山平左衛門

四の宮源

鈴木平き



一そがの十郎助成

一子すけ若

一大いそのとら

一かぶろもじの

一青物や徳兵衛

一けいせいかめぎく

一同くらはし

一そがのはゝ

一すまふぎやうじ

一くごうさへもん

一大とう内

一う大將よりこも

一せんじばう

一太刀取しのさき五郎

一しんがいのあら四郎

一いくよ

一狂言作者

山むら長大夫座

寶永戊子年七月吉祥日

生島新五郎

山村ら若太夫

筒井吉十郎

生島初三郎

荒川藤左衛門

四のみや平八

もりをか入江

小かん太郎次

四のみや平介

小川善五郎

中村傳八

四の宮万次郎

みをぎなには

山中平十郎

ふじ田平藏

生しま新藏

津打治兵衛

樋口半右衛門

千秋万歳

叶

## 傾情一張弓 ゑほしかみ

## 第一

わたの原やそ嶋の浪しづかにて、枝をならさぬみよなれや、爰に相州ゑの島の辨才天北でうの時正こんにう有、いさめのぶがくぞおもしろき、是は扱置箱根には河津が二男箱王丸、くわんくはつ成形ちにて、やつこどもをあつめ、七つ道具をもたせ打あいねぢあい力わざ、げにすさまじいきほひなり、かゝる所へはこねのこちうくわひさんはとう三郎を伴ひ來り、此ていを見ておごろきさんぐにしかり、とう三郎もそがの老母より使に來りしやうすをかたり、かねて出家をねち男にお成なされんどの事、御老母様御聞なされ、それゆへにもしげんぞくなされなば、御かんどうこの御使に參つたご、さまぐといさむれ共、箱王聞入ず、某がげんぞくは父河津様の仰なりといへば、をのくけうさめおはてなされた河津殿が、何とて左様の事を仰られうぞとあらそへば、河津殿に合せんと鬼王をよび出せば、おに王罷出箱王様御げ

んぞくの事は兄十郎様の仰なり、親なき時は兄を親とせよとあれば御同前、是見給へと十郎よりの文をさし出し、そのうへ先住別當さまへも、此段々を申上たれば御せういん有て後住様へ、御狀つかはされしと取出せば人々をごろき、扱はさやうか、此上はか程望にまかせん、去ながら後日のごがめもいかなれば、何とぞ名有大名をもゑほしをやとなし、げんぞくません、まづくこなたへくとおくをさしてぞ入にけり、時正のや形には七夕まつりごて、時正の妹まんじゆの前、こしもと召つれ歌を吟じ居給ふ所へ、北でうのみだいうてなの前出給ひ、只今のお歌の心はいかふおもしろふござんす、成程あの心は水からがのみ達ました、歌の通にねがひをかなへてしんませうとあれば、まんじゆははづかしげに、よいやうにこの給ふ所へ、かすいち來りさまぐなぶりたわふれる給ふ所へ、をの山かうとう手引主膳をつれ來り、よも山の物語かすいちとせり合、くび引をしこしもとつばね立かゝり、こうたうをおくをさしてそ引て入、跡にうてなの前まんじゆかすいち三人のこり、さあ人はない、主膳をよびやとよび出し、万じゆの前の

手を取て、むすぶ契そわりなけれ、□□主膳むいむく  
むくわんの身として、おそれ有とじたいすれば、うて  
な聞給ひ、尤なりと時正のゑぼし装束取出し、是をそ  
なたに□□是をきれば、諸大夫の官に成、すればお  
そるゝ事はないと装束をきせ、たがいの契りをむす  
び、さあおくにまつてゐる□□□はやうおじやと、う  
てなまんじゆ入給へば、主膳かすいちさあしゆびは  
よい此装束さへとれば本望ぞと、かすいち目をひら  
き悦び歸らんとする所へ、うてなまんじゆ出給ひ、な  
せおそいぞとかすいちを見て、そなたは目をあきや  
つたかと、をごろき給ふ所へ、時正出給ひ何共ふしん  
はれぬ、様子をまつすぐに申せとあれば、しからば申  
上んかすいちと申は偽り、誠は箱根の別當手引と申  
は二の宮の一郎、かやうにいたしまいる事よのぎに  
あらず、箱王がか様くのしゆびと、一々残らず語り  
何とぞ時正殿のゑぼし子にと願申度存れ共、御心底  
を憚り扱こそゑぼし装束を盗、母のふけうのそせう  
のたねにもと御名をかたり申べきため、かくのしあ  
わせ何事も御めん下され候へと、一々語れば、扱は左  
様か先箱王にたいめんせんとあれば、おつぎ迄相つ

めをりまするとよび出し、いかにも願のごとく時正  
がゑぼしごとなすべし、去ながら當分はならぬ、其子  
細は此北條のいへは、辨天のかごなきものにかめう  
をゆづる事かなはぬ、定紋のみつうろこも辨天より  
さづかりし所たるによつて、某が一子ゑまの小四郎  
七才になれ共、いまだかみやうをつがせぬ、そのはう  
も是より大願をおこし、さいわひくらの内には辨天  
よりさづかりし、みつうろこをくわんじやいたしを  
く、此内に入行法し辨天のかご有しるしを見せよ、其  
時かめうをゆづらんと皆打つれて入給ふ、扱時正は  
うてなまんじゆ箱王おに王ごう三郎二の宮次郎を伴  
ひ、御ざ舟をしつらいゑの島にさんけい有、ふなばた  
へうてなひそかに出、箱王をまねき、我はもごここ  
がおば河津殿の妹ふせやといふもの成が、よりこも  
公るにんの時、いもせのかたらいをなし、みたい共成  
べき身が、北條のいもとあさ日の前にへだてられし  
むねんさに、さるによつてわざと時正のつまご成、何  
とぞ此うらみをはらさんと思へ共、中く女の力に  
はかなはぬ、おこを頼何とぞ時正をころし、我恨を  
はらしてくれよとあれば、箱王さらく聞いれず、ぶ



だうなりといけんすれば、人に大事をかたらせ、今さらならぬとはいわせじと、はこ王が手を取兩人ともすいちうにしづみ給ふ、此をこに人々をごろき出、おに王どう三郎かつぎあげんこつゝいてこびいれば、うづまく波まに大じやのかたち、箱王めがけをいめぐる、あなたこなたさかけまはりしが、ふしぎや大じやはうてなの前となり、せんざいゝゝ我は辨才天女なり、箱王汝が心ざしせつ成をかんじ、今のふしぎをみせしなり、さいせんおことがおばといゝしも、汝がこゝろを引みんため、時正をがいせよといゝしなり、みなこれおことが心ざしをみんため、此上は願のごとく時正のかめうをうけつぐべし、必うたがふことなかれこの給ふこへと諸共に、有つる夢さめて御ざ船ごみへけるは、時正のやかたとなりほうざうの前に箱王はじやう系をちやくしふしいたり、時正人々立出たがいにふしぎの夢がたり、此上はかめうをゆづりあたへ、けふより北條の介五郎時宗となるべしと御盃をたびければ、をのゝいさみそれよりもわかれゝになる

## 八もん字

## 第二

折ふしの哀はあれど、玉まつる秋こそ増れど夕まぐれ、ごう犬坊介友は、おゝぢ介清のうらぼん祭、嶋立澤へひやうさんせしが、こゝにけわい坂の少ゝゝいとなまめきて是もはか參と打みへ、犬坊と出合いゐろたわぶれいる、にはかにかみなりしきりになれば、犬坊をごろき乗物の内にかくれ、少ゝゝはかのうちにかくれいる、かゝるごころにそがの五郎時宗はちゝかわづが存生の比より、かみなりぎらいなればとて、べう所に來りいつも神なる時はかをめぐりて力をそへ、けふもこゝに來りしが、餘りをびただしきに少ゝゝをごろき、らんどうよりこびいづる、五郎取ておさへ、みれば女なり、何者なればわがちゝかわづがらんどうへ、女のみとして入たるそ、なのれゝゝといゝければ、少ゝゝききもあへず、あのらんたうは水からが父のはかなれば、はいつたがふしぎかといへば、彌心へぬ、扱は兄十郎の心をかよわす虎御前か、いへ虎ではござんせぬ、さては何者ぞ、わしはそがの五郎時宗様のつま、けわい坂の少ゝゝす

ればかわづ様は、水からがごと様、わしはお前の女房  
じやわいのふ、五郎おごろき、さら／＼覺へぬといへ  
ば、どうよくな兼々箱根に御入の折から、折ふし□□  
の御袖を送り、色々心をつくしました、その上十郎  
様とふかい中の虎様は、わしが姉上郎、兼々十郎様の  
おまへのこと仰られ、何とぞげんぞくして力共なり  
てくれよとの事たび／＼き、ました故、ぎりこい  
とでこなさんに、ほれましたと様々いへば、五郎よろ  
こび、扱はそうかしからば夫ふぞ盃せんといふ所へ、  
犬坊でうしたづさへ出、聞た／＼めでたい、こゝは介  
友しやくせんと取持、□□□□外の女を女房にもつ  
とは替り、此少將はくるはでの御大夫、大分の金銀な  
ふては持れぬ女房、見事其才覺が成か、成まひ□□色  
色と惡口すれば、五郎こらへ兼石塔引さげ打ころさ  
んどかけ出る、犬坊もせきたう追取たがいこふよ  
と見へし時、またの、五郎へうさん□□此ていを見  
ておしとゝめ、五郎に向ひ、その方は見限りはてたる  
しんてい、かね／＼きけば汝らは身には大切なる望  
有と聞つるが、此所にて犬坊殿と口論をしあいはて  
ごの命が残つて、本望はとぐるぞ、とさま／＼と心に

こめてかんげんし、まづその大太刀見ぐるしし、さし  
ふるしたれ共、さしかへをゑさするぞと、一こしをお  
たへ是に一生に一度大切の用に立せんため、をくる  
ぞとよそながらいひふくめ、犬坊をともないてこそ  
歸りけれ、五郎少將跡見をくり、有がたし／＼さあ是  
よりけわい坂へ伴はんど、うかれ／＼歸りたり、爰に  
大磯くるのはの内には、ぼんのおごりさい中聞ゆあせ  
道をにたんの四郎くせつして歸るさに、向よりらう  
しんの侍引ぐし來り出合、やあ四郎殿か介さまかこ  
互に物語をし、扱四郎にさま／＼いけんをし、かさね  
てかやうの所へ御出御むやうといふ内に、くるはの  
おごりのこへにうかされ、おごり出せば、にたん見付  
互に大笑しわかれしが、介は侍共諸共はさみ箱より  
おごりゆかた取出し、さあ／＼をそひぞ／＼といさ  
みにいさんでくるはをさしてかけゆけば、にたん跡  
より見付、是はならぬをせ／＼と跡につゝいて入に  
けり、爰に中の町青物や徳兵衛かたには、そがの十郎  
はしかをして、虎かたよりあづけをきしが、けふは虎  
御前ひま入有て、きせ川かめつるかんびやうに來り  
し時、少將が妹上郎かめぎく來りしを、十郎さま／＼



たわふれしを、きせ川かめづる腹を立せりあふ所へ、  
さら來り此ていを見てくせつする、十郎は腹を立、今  
迄つとめをもせず、某に立たる心底をむになして、け  
ふつとめに出る、さもししいしんていと腹を立れば、虎  
聞それはこなたのためで、けふはつとめに出るため  
とは、さればけふの客は敵介經それゆへとめをき、何  
ぞ本望とげさせ申さんため、少將が方へもいひ遣  
はし五郎さまもよびにやりしといへば、扱はさうか  
とよろこびある所へ、徳兵衛來りけふの大じん介經  
がごらさまにおごりかけんと、けいこさいちうとい  
へば、さいわひく、此方よりも、おごりにここよせ  
打ごらんうれし、めでたし、ちよのはじめの一おご  
りををごり行こそいさぎよき、扱くるはには大おご  
り初り、介經十郎五郎其外のこらずおごりに出、介經  
を取ておさへて、ほうかむりをされば、やうふ介信な  
り、人々おごろき何共がてんまいらぬといへば、介信  
泪をながし、兄弟が身にはふかい望有、眼前只今介經  
よとなのれば、とつておさへたさ程の事を、此介信に  
かくした、如何様にしてどうたり共、申まいとわざと  
介のぶと偽り只今様子を見出した、まゝ敷中なれば

へだつるか、兄弟五つや六の比より、某がやうしとな  
したは此願をとげさせんため、其上さい前よりあげ  
やのていしゆと云は、其方と虎とが中の子、某が孫成  
をみんなに下し、ちい孫ののりをさせぬ、うらめ  
しき所存やと様々かきくごき恨給へば、人々誤りま  
つたくへだつる心底にはあらね共、か様の事御さう  
だん後日に御なんぎかけ奉らんもつたいなし、ひ  
そかに兄弟心を合せし計なり、忤の事は本望達して  
後くせ者の子なりとて、誅せられん事不便なれば、み  
んかんに下、忍ばせをき、なき跡に出家をもとげさせ  
ん爲と泪をながし、様くと申ければ介信とくしん  
有、扱さいせんの青物やをよと近くよびよせ、取て  
おさへきやつは兄弟も見わすれつらん、其方達が兄  
京の小二郎なり、介經に頼れ今日兄弟を討ごらんと、  
計よしつたへ聞ゆへ、某も來りたり、それあますなど  
切むすべば、小二郎はにげうせたり、よし／＼かさね  
て本望はとぐべきものぞ、こなたへとみな／＼うち  
つれかへらるゝ

### 草ずり引

### 第三



若宮八幡の御神事近々にて參詣をびたし、十郎介成はすし見世を出したる海道に、女順禮二人くわんじんするを色々たわむれ、一の鳥を迄すしをやらねばならぬと入にけり、所へ介經大藤内を伴ひ、順禮を見てたわふれある所へ、十郎歸りお盃をささはぎすしを出し取持けるに、介經十郎を見出し、左様に淺ましいみんなにくだつたり、不便やと盃をしたみしたいのしたみをのませ、しんけんをぬきすし一疋切先にさし着せんといへば、十郎おめすくいければ、介經をそろしき心底とねめ付、扱二人の女順禮を近付、一人は十郎が妹二の宮のごけ、今一人は二の宮の二郎女の姿となつて來りたるはいぶかしい□□いへば、十郎聞、二の宮太郎世をはやうさり申すかなしみに、順禮を思ひ立し所に、二郎も女姿となり、女づれにて順禮いたさん、□□まつたく外に所存なしといふ内に、すしのおもせにしたる虎が石、大藤内介經兩人が上にだうとをけば、二人はあわて□□侍共も立かかりのけんごすれ共、此石男をゑらび上らねば人々いかりをなし、十郎を討とらんごひしめくをおつちらし、扱介經に向□□の親の敵うごんげの花待え

たる心地、さあ二郎さうく五郎をよべといそがせる時、二郎立歸り五郎様は北條一けにさそはれ□□御參詣と申せば、十郎泪をながし、扱もく我々はよく敵にゑんなきものかな、今討も安けれ共、さぞや五郎がはいなくおもわん、重て本ゐを達せんと問ながらに立歸る、哀なりけるふせいなり、介經見送りの石を取てなげのくれば、藤内驚きさはごの御きれうならばなご此無念なていは何事ぞといへば、藤内さにあらず誠にきやつら兄弟が心ざし、たうごてんちく我朝にもためしすくなき所存、うたばうたるべき心底成にけふも五郎がゐ合ぬとて、手ににぎつたる敵をたすくる心ざしあつぱれぶしじや、重てめぐり合本望をさげさすべし、それ迄はさらばごいひ捨歸りしはげにいさましきふせいなり、若宮のさい禮山鋒をびた、敷引渡せ、爰に大磯より出たるわだ酒盛のやたい、そがのざしきの前にて所望しければ、虎は十郎が形ちご成、少將は五郎が姿、五郎は朝いなご成草すり引迄しかたをなし、一々に語りしは面白かりける次第なり、其時そがの母立出、盃せんご虎を見しり十郎ごのわけをも語り、盃をすれば、少將もお

盃をとねがふ時、母大にふけうし、をのれゆへにこそ箱王がげんぞくし、かんだうをしたるなれ、わが子の敵に何の盃をとかわらけ打わり、少將がいせうをはぎ、さんぐにてうちやくし給へば、五郎物かげよりさしのぞき、沮をながすていを見て、あれは何ものぞとあれば、少將がけらいなりといへば、こりやく／＼爰へこいとよび、箱王が母の命をそむきし事、父河津殿のうたれ給ひし様子、物語あれば五郎たまりかね、母じや人かんだうをゆるして下され、かたきうたねばならぬといふ、母聞其方は何ものじや、はこ王でござる故、箱王と見たによつてさいせんのござくいふたいう／＼七年迄のかんだうと有時、十郎立出せうをすれ共かなはず、いけてをけば物思ひ、手打にせんといへば、母いよく／＼腹を立、それは母にあてゝの事成か、とかく水からが長いきこそうらめし、じがいをせんとさはぎ給ふを、人々おしごめ、おくに伴ひ入にけり、あとより又やたい引出しをくのゝみかり、すまふまい所望／＼といひければ、河津またのがすまふまひすまふはまたのがかちたりと、たからかにこそよばわつたり、そのとき母はかけ出て、てんかにかく

れなき河づごのゝかちたるすまふを、またのがかちたるとはきつくわいやと、なぎなたふりまはし、一人もとをさじときしよくある所へ、またのははせうゆたかにきたり、このていを見て、おししづめ十郎をよびいだし、もつともすまふはまたのがまけたれども、どうじ御せんをつとむるまたの、まけたるとは申がたく、かれらがれうけんとうざのさくいをもつて、かくは申つらめ、それはそれ大せつの御神事をさまたげ申きつくわいやと、すけなりをさんぐにてうちやくし、はかま引さきふみつけ／＼、てうちやくすれば、母はいよく／＼はがみをなし、なみだをながし給ふ所へ、五郎かけつけ十郎をとつてひつたて、またのをうたんとはがみをなすを、十郎いさめておしとゝむ、またの見て、やいうつけものども、なんぢらはかね／＼／＼どうすけつねをも、をやのかたきといひ、また此またのをかたきとねらふよし、さやうにうろたへたる心体にては、なか／＼本いはとげられまい、なんぢらがかたきといふは、まこと此またのゝ五郎なりとすまふのいしゆにてあかざはやまにて、とをやにていごめしものがたりしければ、十郎よろこび、



さあねんらいのかたきこそしれたれ、うてやうて五郎とたちあがりしが、やれまてそのはうは、はゝのふきやうのあればうつてもうつたになゝぬ、ゑゝくちをしやさいひければ、母はきゝもあえず、たゞ今のものがたりをきいて、河づのうらみさいせん十郎のてうちやくにあひ給ふ、いきぎをり、かれこれもつて許されず、かんごうもふきやうもゆるすぞ、きやうだいよつてまたのをうち、母が心をやすめてくれよ、はこねごんげんもしやういん、かんだうはゆるしたとあればまたのゝ十郎五郎かはゝ見合有がたふ、ぞんじますと母に向ひ、御かんきをゆるされんため、かやうかやうどかたり、さあゝめでたしゝゝとをのゝゝいさみてかへらるゝ

## けさ衣

## 第四

さるほごによりとも、公ふじのみかりの御ゆふあり、しかる所に、いくとしへたるいのしゝ、一疋かけ出し、せこをあらしちかづく者もなき所に、にたんの四郎かけ出をふつまくりつ、いぎみければさしものしゝもたまりかね、がんくつ□□□いりしがほごなくひ

つかへし、いでけるをにたんなんなくつきとめければ、ほうでうすけつねしんがいかけつけ、□□お手柄お手柄とほめわたるときにさきまさ、此所はいかなる所ぞとひ給へば、所のものうけ給わり、これはいにしえよりふじの人あなと申ならわし候といへば、此うちをぎんみせよ、さうじていのしゝといふものかけゆく所をひつかへしたるためしなし、ひつぢやうこのうちになにもものぞあるにきはまつたと、せこをいれてさがしければ、はくはつたるらうじん、このはごろもをちやくしていづる、さてこそとなにものなるぞといひければ、われはこれ九郎よしつねのかしんひたちばうよとかきつけて見せければ、すけつね見てよりとももの御せんへひかんといひければ、さきまさおしとゞめ、なんぢまことのひたちばうならず、まなこのひかりしゆせきまで、いまだとしわかなるにまぎれなし、いかにゝとせめつけ給へば、まこととはわれは河津がばつしせんじ坊なりと、はくはつ衣をぬぎすてかたちをあらわせば、さてこそしからばなにとてこれにしのびしぞ、さればきみはおほぢいとうがかたきなれば、このみかりをさいわひにね



らいより、うちたてまつらんしよぞんなりといひければ、時正さらに聞入ず、さやうに申てはたすけれぬ、そのほうはほかにのそみありての事と、すけつねがことをよそになしてといけれども、せんじばう心にありのまゝに申なば、兄十郎五郎がねんらいねらふすけつねをうたんするさまたげにならんはひつちやう、よしわれはこのところにてくびうたれんと一すじに思ひきり、きみをねらいたてまつるよし申ければ、せひなくそのよし申上る、よりともきこしめし、しからばときまさにあづくるなり、つみはかさねて申つけんと御かりやにこそいりたまふ、さても十郎五郎おにわうとう三郎とらせうくは、かりやにて、さまくになわふれて、とかく母のなげきのつよければ、かたきはうたじとおもひさだめしとて、酒のみあそびてゐる所へ、またの、五郎きたり、このていを見てさんぐにしかり、かんげんすれば、せひもない、このうへはなにをかつゝむべきとて、かきをきとりいだし、こよひかぎりとかくのごとく、おもひさだめて候へども、おにわうきやうだいとらせうくもしやかくと申なば、よもやいきてかへらんとはま

うすまじきとおもひつゝ、わざとかくのしあはせといへば、またのきいてをごろき、おにわうきやうだいとら少將もせひにをいて御ともといへば、そのこゝろざしと見しゆへに、いまゝではかくした、せひふるさへかへりて、はゝにかうくをしてくれよ、もし此事をそむかば、おにわうきやうだいは七生までのかんだうとらせうくは、らいせのたいめんかなふまじと、いかりつないつくごきければ、人くちからなく、わかれくになりにつくり、さてこそ五郎はかりやにしのびいりし所に、またの出あひ、さいごのいごまごひをし、かめぎくを手びきとし、御所中にみだれいり、すけつねをうちをほせければ、またのほうちやうたち出て、このうへはなはをかゝれと兩人をいましめてかりやをさしてぞ引にける

### あら人神

### 第五

さるほごにとら少將は、すけわかをともなひふるさごになみだながらにたちかへり、はゝにこのよしいひければ、はゝはなみだにふししづみ、とも口さへんとなげかるる、さて五郎ときむねは、ちうせられしが

たましいのこつて、はこねにきたり、べつたうにたい  
めんしけるを、よりともき、およびたまひて、すなは  
ちすけわかをめしいだされ、よつぎとなしほんりや  
うをあたへ、五郎十郎を兄弟のあら人神といわ、せ  
給ふ、げに有がたやみちのみちたる源氏の御よ、せん  
しうばんせいめでたくともなか、く申ばかりはなか  
りけり

右狂言者木挽町山村長太夫座五番つゝき大狂言惣  
子共惣立役銘々所作無殘所相改今板行者也

寶永五年<sup>戊子</sup>七月吉日 木挽町七丁目

ゑざうしや三左衛門板元

北條巳歲辨天  
文學武運不動

傾城三鱗形 五番續

第一

はこ入のくわんじよ  
よろこびありや  
今日力足蹈初吉

第二

柳さくらのあねいもさ  
さいわいねれに  
邪姪寛濶色初吉

第三

大もんぐちの松かざり  
なわしませ  
艶郭御敵打初吉

第四

すめばむぐらし  
きやらのやご  
生賛酒壺吞初吉

第五

源氏かごでのなり  
ひごさしまなふ  
出生寶船乗初吉

五番つゞき役人の次第

一まぶち平馬の助

市川又三郎

一しばた藤ぞう

にし村三郎四郎

一根ぶ川三ごう

しのづか新平次

一あか澤彌五郎

かまだ瀧右衛門

一まんげつのまへ

まつしまていか

一あさひ御せん

津川半太夫

一源のよりこも

はまざき磯五郎

一土肥彌太郎

いくしま初太郎

一たしろくわんじや

四のみや小八郎

一つちや三郎

あまつうこん

一藤九郎もり長

そめ川七郎兵衛

一大庭の平太

小川善五郎

一女郎きんざん

竹中喜世之助

一かぶろ左京

たきい松五郎

一さなだ與市

四のみや平八

一またのゝ五郎

ごみ澤半三郎

一北條のよしごき

中村七三郎

一同 ときまさ

四のみや源八

一けさごせん

はや川はつせ

一かほる姫

いくしま大吉

一行かい

なんぼく孫太郎

一もりごを

中村傳九郎

一あいきやう三郎

中川半三郎

一源のわたる

すゞき平左衛門

一ちばのすけ

の川うげん太



一 かづさの介

一 ころも川

一 長沼しん

一 かしわや甚六

一 女郎や彌惣右衛門

一 女郎よし川

一 同かよいち

一 あげや清六

一 せうじもり時

一 かちはら源太

一 よのすけ

一 うしわか丸

四の宮小源太

山本勘兵衛

はや川傳五郎

あきた彦四郎

くわばら長五右衛門

たま川小もんご

まつほくめの助

中村五郎四郎

市川勝平次

ふじた所三郎

ふじもとなにわ

山村長太夫

元祿十四辛巳曆正月大吉祥日

千秋万歳樂

叶

## 傾城三鱗形

## 第一ばんめ

爰に北條の四郎時まさ侍ひ、中間ごもに馬をひかせ出、さておのゝへ申ス、先以て主人北條殿は關八州に肩をならぶる大名もなく、殊に御惣領には小四郎義時さまと申て文武の道にかなひ、御きりやうゆゑしき御かた、次はあさひの前まんげつの前といひ、これまた世にたぐひなき御形なれば、皆人心をかけぬものもなし、しかるにあさひさまには、御父時政公武連長久の爲とあつて、神馬を鶴ヶ岡八幡宮へひかせらるゝ、すなはち鶴ヶ岡は當年の恵方なるによつて、かくの通り、且又御妹御まんげつ様には、御父上御長命のためとあつて巳待のなさるゝ、これもことしは巳の年にあたる故なり、そうゝ御兩人の方には此神馬をひかせ、八まんぐうへ参り給へといひわたし入ル、さて妹御まんげつの御方には、巳まちをして遊び給ふ所へ、姉様あさひ御せんはきたらせ給ひ、さきはごは巳待をし給ふとあつて、人をたもつたゆゑに、

これまではきました、とあれば妹もよろこび給ひ、さて今霄おまへを呼びにやりましたは、ちとお話し申たい事がござんしてのこと、その仔細は夕べ不思議の夢を見ました、所はいづくともしれず、高き山の上に参ると思へば虚空より月日がおち、私が兩の袂へ入ルと思へばつい夢がさめました、とても二ツの月日がおつることは合點のゆかぬことと思ひ、判じてもらひませうと思ひ、さてこそ御出を願ひました、とあればあさひつくゝ聞給ひ、これはなにさまよろしからぬ夢のやうに思へば、とかく此夢は姉が貰ひませうとあれば、いやゝそれは迷惑、御大切な姉さまへ悪い夢をやりますことは氣の毒なとあれば、いやいやそうではない、なんでもそれほどのあたいをやりて、夢を賣買すれば、その賣る人にも又買かふ人にも、なんの障りがなければ、此夢はとかくおれが買ひませう、その代りには常にそちが望みのからの鏡をやりませう、とあれば妹も大きに悦び給ひ、しからばさやうにいたし申さん、まづゝこなたへ御入り、ごみなゝつれだち入り給ふ所へ、兵衛のすけ頼朝は伊豆の國に流され、伊東がたちにおわせしより、仔

細あつて又北條方へうつり給ひ、をりくあさひ御せんを見染め、なにとぞ忍び入り、思ひのほごをも語らんと、土肥土屋たじろさて藤九郎盛長をはじめ、鳥さしの体にもてなし、此所へ來り給ひ、どやかうかがひ給ふ折ふし、あさひ御せんも出給ひ、いろく濡れありて、後には互ひに夫婦の契約をなし給ふ、時にまんげつ姉君に向ひ、今更頼朝さまと姉さまの夫婦におなりなさるゝは、わしが見ました夢を買せ給ふゆへなり、とみなく悦び給ふ所へ、大庭の平太御入りといへば、盛長思案して、頼朝あさひその外、人をうちへ入れ、さて大庭に對面して長話をしかけ、うちへとをさぬやうにすれば平太腹を立て、それがし此所へ來るは、あさひのまへが方へ忍びものあると聞しゆへ詮議のためきたる、盛長聞て、してこなたがなせ忍びものを御詮議、といへば、あのあさひはそれがしが、北條にもらひ置きたれば、それゆへにかくの通り、といへば盛長おさへ、此方に兵衛のすけといふ夫があれば罷りなるまい、と詰合ば大庭腹を立て、それ討取れ、といへば頼朝をはじめ皆々立出さんざんに切り結ぶ、大庭かなはず逃げ行くを、盛長切り

伏すると思へば、有し館の景色忽ち變り、江の島の岩穴のていとなる、時にあさひ御前は辨財天へ參詣あり、はや下向道になり、つばねをはじめ乗物をかゝせきたれば、あさひ出あひ、やれく不思議なる夢を見たる、と夢の仔細を語り給へば、つばね聞いて、いよいよやがての内に頼朝さまと、夫婦におなりなされませう瑞相おめでたや、と悦び館へかへり給ふ所へ、爰に大磯の女郎きんざん、これも江の島へ忍びて參り、岩穴へ籠る体にて入ル所へ、佐那田の與市は頼朝の願書を箱に入れ、千歳の体にて出れば、北條の小四郎義時は翁の体にて出、股野の五郎は三番叟の形にて、おのく辨天へ參詣し、さて與市義時は時の祝儀いわぬ、みなく岩穴へ入ル、股野は三番叟を蹈み、同じく穴の内へ入らんとする時、きんざんは下向して飯るに互ひにあひ、路をふさぎ、いろくぬれをする所へ佐那田、義時立出、なせに股野は來りあはぬ、といふうちにきんざん義時を見付け、さまく怨をいへば、義時氣の毒がり、いろくいひ紛らかせども聞入れず、此上は屋敷へ飯りいひわけをせん、と飯らんとするを股野押止め、あのきんざんにはおれが惚



れた、それがしにくれよといふ、いやかなふまじ、とせりあひ既に切り結ぶ、時にかのきんざん氣色を變へ、われは此島の辨財天なり、義時弓矢とつてくんしに私なし、いよくわれを念するに於ては、北條の家に九代相守るべし、又わがかへる跡に三枚の鱗有べし、それをとつて旗の紋になすべし、いよく頼朝にかしづき、旗を揚げ火急に平氏をほろぼすべし、その外股野大庭の輩行末仇をなすとも、わがゝげ身にそひ其の難を防ぐべし、まことの姿これ見よ、と二十尋の大蛇となり、股野をめつけかゝり給へば、景久恐れて、只何事も許させ給へ、とふるひわなゝくうちに、大蛇はもこの女となり、三ッ鱗を義時に與へ失せ給へば、義時有がたしと頂戴し、悦び館へ飯りける、爰に親時政は頼朝を聲にこり、やがて義兵を擧げんと悦びの酒宴をなす所へ、大庭股野きたり、まさしく時政は頼朝を聲にこり、平氏をほろぼす謀反人なり、といへば時政聞いて、それに證據あるや、證據はあさひがすけ殿の子を懐胎したる、といへばいろゝ陳ずれども今は早、腹を割いて詮議せん、といへば時政も是非なく今は、や、あさひを討てすてん、といふ所

へ、小四郎義時立出なに事といへば、かやうゝの次第といふ、義時思案して、ゑい此上はせひもない、とてもすけ殿の身の上大切なれば、此義を申さねば咎もなき頼朝公を罪に落す、即ちあさひが懐胎は、それがしと密通致してのこと、速に腹切らんといへば、時政聞いて、さては頼朝の身替りに咎を忤が蒙るとは思ひながら、知らぬ体にて、さては己れは妹と密通して懐胎とは畜生の仕業、斬つてすつるも刀汚し、七生までの勘當、此上は都へ登り、清盛へも時政があやまりなき事を申しひらかん、とすけ殿をかばひ義時を勘當して、大庭股野をたばかり返す、北條が心のうち頼もしかりける次第なり。

## 第二ばんめ

きよ水の地しゆの櫻の花盛り、老若貴賤參詣する、爰に北條の時政は都へのぼり、是も清水へ參り給ふ、尤も都におわします衣川といふは時政の妹なりしが、過し頃夫にわかれ、二人の娘を寵愛し、うき年月をおくり給ふ、姉は袈裟御前、妹はかほる姫といひ、月にもたとへ花にひとしき姿なるが、是も清水へ參詣あ

る所へ、遠藤武者盛遠、並びにあいきやうの三郎は、盛遠とちけいの契約して、同じく風俗きよらかに、参詣する折柄、けさ御前かほる姫を見て、盛遠は妹のかほるにむたいの戀慕をしかけ、さんく言葉をいひ募る所へ、源渡は妹かほると、夫婦の契約なれば、見へがくれに是も清水へ参りしが、此体を見て盛遠をさんく惡口すれば、今は是までと互ひに抜きあはんとする所へ、時政清水の舞臺より見つけ、やれまてよといふて兩人を押止め、さて盛遠をさんくに叱りふせ、さて渡殿、あの通りのたわけやつなれば、万事は身に免じて堪忍をしたまへ、やあそれなるは袈裟御前、次なるは妹かほる姫、殊の外成人いたした、ご悦び給へば袈裟御前も妹も、これはひさくにて對面をいたしました、母さまにもお前が都へお上りなされました様子をお聞なされ、早うお目にかゝりたいと朝夕おほせられます、同じくは是より、都へお越しなされませい、ごあれば、いかにもさやうに致さう、聞ば妹かほるとは、是なる渡ごのと婚禮致したとある、なるほど夫婦中はよいかとあれば、姉聞給ひ、それはく中のよきことごうも申されぬ、いやこれ

につけても私とお前のお惣領義時さまとはいひなづけばかり、未だお目にかゝりましたことも、ござんせぬ、渡さまと妹が中のよいを見ましても、早う義時さまと夫婦になりたう御ざんすごあれば、義政聞たまひ、なるほど其方と倅義時とは夫婦の契約なしおいた、是につけても義時めは不届やつ、しかしいはねばすまぬこと、義時は現在の血を分けた妹あさひと密通してしかも子まである、せうじんの畜生じやと存じ勘當したごあれば、袈裟ごせん驚き、義時様に限りさやうの不義はなされまい、推量するにあさひ殿がわるい、此上はあさひごのに逢て怨をいはん、といへば時政大きに叱り、その畜生めらになんの怨をいふ事があらず、思ひきれごあれ共、中々思ひきられぬ、ご慕ひ歎くごあはれなる、時に盛遠立寄り、やれく是は笑止なる事かな、此上は渡殿こなたと相談がある、幸ひ義時を勘當ごあれば、姉御はやもめじやないか、然らば其方が姉を女房に持ち、妹かほるを身にくれ給へといへば、いよくたわけをつくす、ご大きに怒れば時政おし止め、やい盛遠是ほどの歎きの上に、時もこそあれ、夫程の辨へもなきうつけもの、さあ飯



るまいか、と叱り給へば、今は盛遠怒をなし、此うへは時政どもいへのうごうを斬割んど、飛びかゝるを渡まん中へ押入り、暫くまで、此塲を立退き、重ねて事のいはれまいものじやない、よし夫程の心底ならばかほるは勿論、身が命なり共やらんほごに、先づ此所は穩便にして給れとあれば、おうくその儀ならばかほるは其方に預けた、いかにも預つた、と互ひに怒りをおさへ、館々へ販りける、さればにや盛遠はかほる姫を戀わび、今は戀の病に伏し沈む所へ、梅のせきだいに枕を添へ、衣川の館より使來れば、あいきやうの三郎出あひ、使のやうすを問へば、かねく盛遠様かほる殿の事を戀慕はせ給ふ、その執心重き病となり、かほる姫は夕べ相果ましてござる最期のちぶんには、せめてのかたみなれば此梅と枕を盛遠様の方へ遺すやうにご申し置きましたにより、扱こそ持參致しました、といへばあいきやうの三郎驚き、盛遠殿もかほるゆへに命も絶々に見え給へば、是は氣の毒なることかな、此よしあからさまにいはふかいふまいか、と思案する内に盛遠狂亂ごゝろにて立出、さてはかほる姫は死たるや、あら戀しや、と筐の枕を取

持ちいろく現なき事をいひ、既に絶入る体なれば、人々慌て、それ水よ藥なご、みなく騒ぎ奥へ入る所に、盛遠やうく心を取直し、忙然としてゐる所へ、かの梅のせきだいよりかほるが姿あらはれて、私はこなたの思ひゆへに相果しました、今より執心を思ひ止つて下されと、此所は上るりにていろく思ひ切らすることはいへば、盛遠いよくあこがれ、たとへ死たりとも放ちはやらじと、取つかんとするを振放ち、見えつかくれつする内に、かほるがにせ幽靈を見付け、さては某をたばかること腹立やと、取て伏せる所へ、母衣川も出あひ、是にはだんく様子があれば、先づく心を静めて仔細を聞けとあれば、さあ仔細はごうじやとつき放せば、その時母は、そちがかほるに戀慕のこといふても、渡といふ夫があれば、邪のうき名が立つ、甥なり姨なりふびんに思ひ、とかく此戀慕を思ひ切せんと思ふて、最前のやうに計ふた、此上は聞わけて思ひ切てくれよ、と泣つくごいつ意見あれば盛遠聞て、然らば今宵一夜ばかり、心に從せ給へ、といへば姨大きに腹を立、前代未聞の大惡人、それはならぬと、かほるを連れて販り給ふを、盛遠おし



止め、叶はぬならば母を殺す、と刀を抜いて押しあつればかほる迷惑して、その儀ならば母様を助け給へ、なるほご心に従ひませう、とやうく心を宥め、母をば館へかへし、その身はあとに残り、いろく盛遠とぬれをして、此上は夫渡殿を殺し給へ、幸ひ明日は禁裏の御番なれば髪を洗はせ、其上にて酒を強ひ寐させ申さん、洗髪を證據に斬り給へ、といへば盛遠悦び、契約して別れくになりけり、その後渡の館には、姉袈裟御前を振舞によび、いろく酒宴する内に、かほるが袖より書置が落ちしを、姉袈裟御前拾ひ給ひ、かほる渡の目を忍びて、書置をつくく見て大きに膽を潰すてい、されども心に思案して、まづく夫婦のものを奥の一間へ寐させ、その身ひとり残っていて、さてもく盛遠は不義ものかな、此書置を見れば今霄かほるは夫の身替に立ち、相果るとの書置なり、さりとては貞女かな、しかし其方は殺すまい、おれは義時殿に別れてあるかいな、獨身なれば、妹の身に替て盛遠に討れん、と思ひ定めて髪を洗ひ、根よりふつゝと押切り、盛遠が忍び来るを待ち給へば、案の如く盛遠忍び入て、洗ひ髪を證據に、袈裟御前を刺

し通し、立退んとする所へ、火の廻りの番のもの提灯ともし立出、此よし見付ける内に、渡夫婦衣川もみなみな驚き立出、やれ狼籍ものよと詮議する内に、盛遠は渡を殺したると思ひ、館へ立入れば渡出あひ、是は盛遠かといへば、盛遠驚き、其方は討れたると聞たるが息才なるか、といへば渡此言葉に心をつけ、まづ盛遠を返すな、さて女房かほる、此儀は其方がしだいではかなはぬことまづすぐにいへといへば、成程是には様子が御ざんす、と盛遠が不義の段々をいひ、さてこなたの身に替り相果んと思ひ、書置までを致しました、とやがて書置を尋ぬれども無ければ、是は合點のゆかぬこと、と難儀する内に、袈裟御前は息の下より、書置のないは道理、その書置はおれが拾ひし故、とかくおれが身に替らんと思ひ此仕合なり、とても世になき我なれば、相果ても苦しからず、尤も盛遠殿をも助け、願はくは出家となし、我跡を弔ひたび給へ、とついに空しくなり給へば、渡をはじめみなく涙にむせびける、時に盛遠今は早これまで、身は是迄と腹を切らんとすれば渡おし止め、そちが腹を切れば侍じや、なんぞや畜生めを切腹とは推參、いでなく

びにせんと立寄り、やがて元結を切て、さあ首は打た、いづ方へも立去れ、といへば盛遠聞いて、首は打ずして元結を切りしはいかに、といへば、只今袈裟御前が遺言なれば斯の通り、さてはさよやうか、と涙を流しゐる所へ、股野五郎が郎等あまた押寄せ、此所に北條時政があると聞いた、いふても謀叛人なれば搦めとらんと思ひ、是まで来りしと罵れば、盛遠怒つて爰は某が出家のかごで、憂世のくひを抜きおさめなれば、いでもの見せん、とさんぐにおつちらし、さて人々に暇乞して分れける、かの盛遠が發心おそれぬものこそなかりけれ。

### 第三ばんめ

爰に股野の五郎が家來長尾の新五は馬に乗り、侍共を召しつれ、さても北條一家の者どもを方々尋ぬれ共今に巡りあはぬ、聞けば小四郎義時は、伏見の遊所町にきんざんといふ女郎に深く逢ふといへば、とかく色町へ立こへきんざんに逢ふて行衛を尋ね出すべし、これによつて主人股野殿もかの里へこへ給へば、又かたぐも頼朝あさひが行末を随分尋ね出せ、と

それぐにいひつけ入に、爰にあいきやうの三郎が家來木村の文三は三味線屋になり、主人三郎は女房の姿になし、世を忍びゐる所へ、佐那田の與市は編笠かぶり立入り、三味線を誂へんといへば、夫婦のもの立出さまぐ、三味線を弾き、弧弓をすり馳走する時に佐那田、成程そのやうな三味線を拵へて貰ひたい、併してんじゆに紋所を頼みたい、その紋所はひあふぎじや、といへば亭主聞いて、是はいかさま、色町への御進上ものと思はるゝ、しかしひあふぎはどの女郎様の紋所じや、といろく思案して、いや思ひ出した、是はきんざん様の紋じや、何とさやうでござりませぬか、といへば佐那田聞いて、成程さやうじや、しかしきんざんといふ女郎に逢ひたいといふは、少々尋ねたいものがあるゆへなり、と物語りする内に、女房は佐那田が顔をつくぐ見て、何とそなたは佐那田の與市殿ではないか、といへば佐那田も女房が顔を見て不思議をなせば、その時女房、卒爾ながら與市殿ならば申したい事がある、某はあいきやうの三郎じや、といへば與市聞



いて、その三郎殿が女の体は合點がまいらぬ、いかにも合點が參らぬは尤も、某も盛遠出家の後は、世を忍びかくの仕合、といへば、さてはさやうか、と互ひに互ひにおちあひ、さてさいせんも申す通り、三味線を誂へきんざんに逢ひたいといふも、何卒義時殿に逢ひたさのまゝなり、といへば幸ひかな、母が方にくまい置た、といへば、是は嬉しや、とやがて義時を呼出し、みなく對面して悦ぶ所へ、遊女町のくつわ、三味線屋の甚六が所は此所か、と尋ね來り、やがて義時に逢ふて、是は幸ひの所であひ申した、二貫目の揚錢のあればさうく拂ひ給へ、とさんく、耻ぢしめる、與市聞かねて、此上は身が金子を渡さう、くつわどもを連れて屋敷へゆけ、といへば與市が家來共ゑせ笑ひ、さても太い若衆があるものだ、われくは錢百文づゝにて雇れて來た、そなたが屋敷はしらぬ、と大きに耻辱を與へしは、情なかりしありさまなり、くつわ共腹を立て、此上は家の鍋釜なりとも外してとらねばならぬ、と腹を立れば甚六聞いて、よいよい此上は家の内にあるほどの物は、何でもかつて行け、といへば皆々立入り、古き三味線或は鍋釜、古き

櫃などを取持ち飯れば、甚六見てよいく、此上はたくへた金がある、と小判を澤山に取出し見すれば、是はどうしてたくわへた、といへば各々をかくまふ程の者が思案なふてはならぬ、今迄の所帶道具は古くなつて飽き果た、さあ此金で初買をせう、といへば、是は出來した、とてもものことにいざおすまいか、さあおしもせい、はや色里への談合して入る、此所は伏見の色町花の景色の面白く、あまたの女郎道中して、時めく風情賑々し、折しもきんざん禿やりてを連れて道中する所へ、袈裟御前は陸奥といふ傾城になり、是も道中してぎうのひたいをぬきいろく戯れて、皆皆揚屋へゆく、さて義時甚六は大臣になり、佐那田を草履取にして、女郎共を集め遊びある所へ、きんざんが禿使に來て、わる口の判じもの故に、後はきんざんと大きな口説になる所へ、陸奥は獅々舞の体をなし、丸はんを獅々頭ににして、二人の口説を直さんと、舞ひ戯れしは面白や、それゆゑ互ひに中をなをし、酒宴をなして遊ぶところに、きんざんに相方の客長尾の新五は、大きにせいて立出れば、やがて義時を陸奥が後へ隠し、さあらぬ体にてゐれば、新五はやがてき



んざんを呼び、さあ何事も今霄限りじや、その方は身が六百兩で請出し、あすは國元へ連れ販る、といへばきんざん驚き、是は私にもそうした事を知せもなく無体なる事や、と歎けば、亡八が合點して、身請する上はさあ引立よ、ときうの五兵衛きんざんを引立てば、いかにも行くまいじやない、したる暇乞したいものがある、と義時の方を見ていへば、陸奥心得、これこれ暇乞がしたいとは、おれが事であらふ、成程暇乞をしませう、といふて其身が義時になり、いろ／＼暇乞する心の内、互ひに憐れをこめし風情なり、今はこれまでさあきんざん此方へ、と引立二階へ揚りしは情なかりし次第なり、あとに残りし義時陸奥又は甚六佐那田をはじめ、呆れはてたるその風情、陸奥つくづく見て、餘りにいたはしければ、私が思案であの大臣を殺し、きんざん殿を取返して進ぜうといへば、それは御心底嬉しいけれども、もし仕損じていかゞといへば、陸奥聞いて、はて仕損じて顯はれたらば、わしが死まする、しかし是程に心を盡すもとは、こなたに私が惚れたゆへなれば、君ゆへに死る命少しも惜からじといへば、とかく此上は互ひに心を合せ、随分た

ばかつて討つべし、といひ合せ、やがて甚六が福祿壽のていになり、女郎ごもに囃させ、いろ／＼可笑きていをするれば、大臣長尾の新五はきんざんを連れ、二階より下りて、やれ／＼騒しうて、うもならぬ、何を笑ひ給ふ、最早明日は國元へ立つものなれば、何でも可笑い事をして、慰めてからいたいといへば、陸奥聞いて、されば此甚六殿がおかしい事をして見せん、今のやうに笑ひました、なほ此里の暇乞に慰めませう、しかしきんざん様をすこしの内此方へおかしといへばそれではおれが手あきになるといへば、其代りには陸奥殿をかしませう、げにとはそうもせい、とやがて新五は陸奥といろ／＼、酒を飲み戯れになす内に、甚六は女郎幫間に里のはやり歌をうたはせ、その紛れに陸奥は大臣新五に刀を抜き心もとを刺し通し、あつといふを幫間女郎何事といへば、又はやり歌に取紛らかし、知せぬしこなしさま／＼ありて、ついに新五を刺殺し、今は早大臣様は殊の外酒に酔ひ給ふほごに、皆々休み給へといへば、幫間や女郎は何心もなく内へ入る、後にて甚六陸奥きんざんはさあしすましたりと、やがて義時を呼出し斯といへば、義時立

出、先づは陸奥殿の心底、お禮は申盡しがたし、しかしこなたはいかさま様子ある方と思へば名乗給へといへば、陸奥聞いて、今は何をか包みませう、私は都において衣川が娘袈裟御前、と申ものなるが、北條の義時殿といひなづけの者なれども、仔細ありて義時殿は勘當の身となり給へば、何卒尋ね逢んと思ひ、都を紛れ出ました所に、人商人の所業によりて此里へ賣られ、斯る勤をしまするも、皆義時ゆへとかたれば、今は名乗いでば叶ふまじと、我こそ許嫁の義時なりと互ひに落合給ふぞうれしき、しからば立退んといへばきんざんは、して私はどうしたものぞといへば、義時間給ひ、やれ是程の事を思ひわけぬ事があるものか、そちは後に残つてしにませう、そうくこなさま方はお退なされたがよいといふ所へ、ぎうの五郎兵衛は、股野五郎となりかねて己れを尋ねんが爲に、斯様に形を糺したり、それ遁すなどいへば、やがて斬結びになり、散々に戦ひしが、股野五郎斬立られ、いづくともなく逃行ば、今は是迄なりと一先立退き給ひける、

#### 第四ばんめ

さる程に頼朝あさひ御前は、盛永が親庄司盛時を連れ、東の方を落ち給ふ所へ、梶原源太景季、又は藤九郎盛長平氏の下知に従ひ頼朝を尋ねる体、尤も盛長は源氏に志深けれども梶原が心底を思ひ、互ひに疑ひをなし、後には梶原も盛長も、源氏一味のものとなり悦ぶ所へ、源の渡是も夫婦づれにて落合ひ、聞けば小四郎義時は、紀の國の邊に忍びあるよし、一先づ行衛を尋ねんと、皆々打連れ入り給ふ、こゝに小四郎義時は、袈裟御前と夫婦の契約なし、子をもうけ憂き年月を送り給ふ所へ、盛長並びに源の渡尋ね來り、對面して女房袈裟御前を見て、大きに驚く体、義時不審をなし、仔細を問へば渡聞いて、正しくあの袈裟御前は、盛遠が手にかゝり相果た、その袈裟御前は是へは來る筈がない、定めて幽霊ならんと争へば、義時も合點ゆかず不審をなせば、袈裟御前今は早や顯れたるやうに思ひ、幼きものゝ小袖に、心のたけを書置して、泣々館を立出る、さて書置を見れば那智の瀧壺に、千年の齡を経る大蛇なるが、深き望あつて、袈裟



御前の形となり、年月あひなれ子中をなしたるなり、然るに北條の家には、江の島の辨財天より、三枚の鱗を得たまふ、此鱗を取れば鬼畜無慘の苦しみを逃れ天上の化を受くる、さるによつて斯まで形を偽りつき添ふといへども、源の渡袈裟御前が世になき事を語るに依て、せひなくもこの瀧壺へ皈るものなりとの書置を見て、義時は勿論渡盛長、みなくきもを潰す体、義時深く歎き給ひ、たとへ大じやともいへ、畜類ともいへ、一子までまうけたる中なれば、何しに別れ果べきや、殊に此子をふびんとは思はぬかと、歎き給へば渡聞き給ひ、よし／＼此上は今一度てだてを以て、親子夫婦の名残を惜ません、その計略は酒壺に酒をたへ、此子を生贄の如くにして据へ置ば、必ず必す形を顯はすべし、先づ／＼此方へとて、皆々かしこへ行き給ふ、去程に遠藤武者盛遠は、煩惱即ち菩提にて、今は早や文覺上人となり給ひ、行力の爲なれば那智山に閉籠り、一七日瀧に打れ、あたりの松に繪像の不動をかけおいて、一心不亂に觀念ある、心の内こそ樂もしき、

▲もんがく上人荒行の段  
かほるひめ

上るり太夫

虎や喜元口豊島小源太夫正本

「たまばこのくさのゆかりもとへがし、われをほりにわくらは色もこく、夕日は花の時雨じやものを、染よ田舎も京鹿の子、しめつゆるめつゆわせておいて、水はつめたや薄情、しやんどかつくは戀衣、表裏なきよしなか染は、すいた殿御の色小袖、艶と情の二ツもん、あのとを山の霞に千鳥、それは及ばぬおぼろぞめ、月の光はもちろんしないた水鏡、影を洗へばおのづから、桂男も色白や、五尺手拭はぎ高くもすそかいからげたかい／＼しくもさめぬまにせうせんたくを、せんたく／＼せんたくしよやれ、艶と色との覺ぬまに喜元、あだなれや身ほごの山の奥にきて、人目稀なる谷の戸に、田舎なれどもめづらしき、初音あげたる鶯の、聲にひかれて文覺は、物洗ふたる賤の女をつく／＼と打詠め、ひなには稀にみめかたち、斯まではてし身なれども、雪にはぞつと身ぶるひして、昔を爰に思ひでの、さてもかほるが面影に、似たりや／＼とばかりにて、只めがれなく打まもり、浮々見だれていたりける小源太○「見る人あるともしらぎぬを、ざん



ぶとひたし振りすゝぐ、谷の流の瀬々に散る、露の玉川さら／＼と晒す細布むねあわで、もすそいといふわ／＼と、折から白き細脛の、見へつかくれつ細めけば、文覺これをうか／＼と、しせんの色に失ひし、魂かろきその風情、のびつかいみつやるせなく、身をもだへしが、今は早覺えず山より轉び落ち、顔と顔とを見合せて、呆れはてたる計りなり文覺▲やあ是はかほるじやないかかほる▲文覺様か▲いやさ何の譯もいはわずに取付て泣きめさるゝ、しかも手なれぬしわざ、まあ是はごういたした事ぞ▲なるほど御不審は尤、わしはこなさま故に獨身になりました▲ひとり身とは合點ゆかぬ、其方には母もあり渡といふて夫がある、それが獨身とは心得ぬ▲さればでござんす、一度はこな様の心を背きましたか、思へばおいとしい心じやと思ふて、夜の寐覺にも云出しましてたれば、母様や渡殿のお聞なされ、不義者じやとあつて館を追出されました、それより迷ひまがふて、此様な賤の女になりますも、一度こなさまに巡り逢ふて、心のたけをもちひほごき、其後は兎にも角にもなりませうと思ひました、とかく世をたてる身でもな

い程に、わしを尼にして下さんせとなびき給へば、文覺もあはれに思ひ、なるほど其心ならば尼にしてやらふ、幸ひ此谷川の流で髪をも洗ひ給へ、とあればかはる姫聞給ひ上るり」げにいにしへは一筋を、千すじとなでし黒髪に、繋ぐや猛き大象も、情らしきに和ぎて、手ごとに露の玉くしげ、今は光もおぼろなる、谷の流を見渡せば、岸の青柳おのづから、風にそよぎてくしけづるだに、折からの景色まで、物のあはれやしりぬらんせりふ▲さあかほる髪を洗ひめさつたか、最早剃髪すれば、名號より外はない、殊にあれをお見やれ、あの日の傾く所が西でおじやるか南無阿彌陀佛といふて手を合せめされい▲すればあのお日様のお入なさるゝ方が西方でござりまつするな、嬉しやお前を戒の師に頼みまして、只今尼になりまするは、これもよく／＼の縁でがなござりませう上るり▲」ごく／＼とくかはる姿をも、いそがせ給へと勸れば▲文覺やがて立かゝり、髪下さんとしたりしが、よく／＼見れば色もなき、水さへかはる面影の、花はいつしか谷川の、ちりかゝりたる水鏡、思へばくもる心の内、げによくある煩惱の、離れがたくや思はれけん、ごき亂し

たる黒髪を、おしなでく打もたれせりふ▲これかほ  
る、よしない事ながら女は髪容といふて三十二相の  
第一じや、尤も思ひ切て髪をおろしたいは聞えたが、  
もしも悔しい心があつては出家になつたかひいがな  
い、何とどうあつてもおろしめさるゝか▲是はした  
り愚なことを仰やります、三十二相といふは唐の揚  
貴妃にぐし君上りり▲「或は褒似王昭君、越の西施の  
類こそ、美人の褒は有ものを、身は數ならで心から、  
色なき里の色なれば、散とも誰か惜むべきせりふ▲ま  
してかうしたさもししい營みを致しますれば上りり▲  
髪はむ□□かかたちかほこゝろを亂す如くにて、足  
手の爪はけうごくも鶯鵬とや見え申さん、あら耻か  
しやとほのめけば▲いやくそれは卑下なるぞや、  
此文覺が見る目には、せいたいがたていたにかうる  
りの墨をすり、さつと流すに異ならず、又は手足の爪  
はづれ、鶯鵬とは曲もなし、さあ執心の眼には十はら  
どをの指までも瑠璃の如くに見へ申さん、いかにい  
かにごありければ、姫はめもなく打笑ひ、もたせ風な  
る御心ち、今さらかゝる褒れ来るびく人もなき心の  
ほご、笑はん爲の御なぶりか▲我を忘れて文覺は、何

しになぶり申べき、可惜柳の髪容、剃りて返らぬ昔の  
夢、結ぶも解くも心ぞやせりふ▲さあ爰に談合がある  
▲談合とはどうでござんす▲はて尼にならぬが談合  
じや▲それでは獨身で何も面白い事がござんせぬ▲  
さあそれ寄り口じや、尋ねたらば何處ぞに面白い事  
があらふ▲いやく何處にも思ひ付がござんせぬ▲  
思ひ付がなくばおれが思ひ付ふ▲えいこなさまは氣  
が違ひましたの▲なるほご氣が違ふたゆへにかうじ  
や上りり「是非此上は今迄の、袈裟も衣も捨坊子、きの  
ふに變るあすか川、流れ渡りの世の中に、氣儘がよい  
ぞかほる姫、いかにくゝと寄添へば▲岩木にあらぬ  
戀もみぢ、うつろふ色はほのくゝと、あからむ顔をふ  
りあげて、いつわりながら神無月、たが誠より嬉さを  
昔は袖に包みしが、今こそ身にも餘るぞや、變り給ふ  
なかはらじと、世に睦じきその風情、正体なふこそ見  
えにけれせりふいや幸ひ酒をもち合せた、二世までの  
盃をせう上りり▲それくゝごありければ、かほるに  
つこと打笑ひ、然らばさし申さん、げに尤どゆふ日か  
げ、うつろふ色は櫻花、時雨になして戀衣、はや染め  
かへす邪淫の罪、文覺次第に飲み酔ひて、先づは暫く



休むべし、是へくんと手を取て、あたりによりしかんせうに、むりくうせんと足を伸べ、膝を枕に寐ねたりし、不敵なうこそ見へにけれ小源太▲「さる程にゆうやう西に風消えて、雲かうさんにみちしほの、湖水の浪はごうくうつくとして憂にだいすせきたんの燈火無明のおんしゆに酔ひ伏すを、よき隙なりと窺ひよる、時に不思議や、懸置し繪像の不動の持ち給ひし、利劔おのれと抜け出て、かほるのあたりへ近付ばおつ拂ひくゝ爰を先途と争ひしは、すさまじかりける次第なり、さしもの一念や、暫し利劔に恐れて、つく息は天を焦してしばしが内しらせて見ゆれば、利劔は又もこの繪像にうつりける、時に文覺手足を伸べ、やうくとして起上り、かほるが氣色をつくゝ見て、最前よりも愚僧めが、やうすありとは知たれども、猶々事をはからん爲め偽つて色をなす、察する所鬼畜の生、我行力を妨げんと、化して來るに疑ひなし、さあ正体を顯すべし、いかにくゝと罵れば、かほる今は詮方なく、さて見咎め給ひしな、今は何をか隠すべき、我こそかほるが姉たりし袈裟が執心、その元は那智山の大蛇なり、然るに北條義時に天龍の鱗あり、それを取べき爲に、死たる袈裟が形を變へ、今義時にあひ馴れて、時節を窺ふ折ふしに、源の渡いつしかに我形を見咎る、それゆゑあかぬ別れをなし、舊のすみかに飯れども、なほしも残る一念にて、鱗を取るべき心あり、然れ共その方は義時に縁あるもの、ごして對面なすなれば、我大望を遂げ難しと、かく形をへんまんして行を妨げその上に、魂を掴み裂き、我本望を達せんため、かほると成てたばかれども、見咎められし腹立や、よし此上は今一度行を妨げ、一命をもらではおかじと、夕べの雲すわくゝ動く風のほど、眞砂を飛し古木をぬき單に形は龍宮のしもつおつとり歩み寄、勢ひ天地に動揺して、身の毛もよだつ計也、文覺ちつとも恐れずして、一心の誠を以て一祈り祈らば、なごや明王々々のげばくにかゝつて動れじ、うんだらだかまん万法一如と聞時は、いかで障碍のあるべきやと、責めつけくゝ祈りける、餘りに強く祈れて、八万四千ごうが蛇の鱗は劔に異ならず、あるひは巖に火焰をたて、又は虚空にめんくゝたる、火の雨頻りに大事をやく、なほもしんいの通力にて、そばなる岩をおつとりあげ、手玉に取てくるくゝくゝ、くるり



くるりとひともちりふたもちりねぢしいはの勢かゝつて慕ひよる、文覺いよゝゝ觀念し、天に向つて呪を唱へ、大地を蹈んでけんらうの、奇瑞をまねけば追の執念、はや手も力もつき弓の、八島の浪の立かへるを、おひ拂ひゝ祈りのけたる其行力、おそろしゝとも中々に、申すばかりはなかりけり、時にかほるは絶へ入しが、不思議やそでのうちより、ひらりと飛んで失せにける、かゝる所へ義時も渡も來り給ひ、文覺に對面し、はじめ終りを聞てみなゝゝ驚き給ひける、さて義時はおさな子を池にゑにそなへ給へば、親子の別れを思ふにや件の大蛇は、袈裟御前の姿となり、そなへし我子を慕ひ、又は酒壺の酒を飲み、戯れたりしその風情、面白かりける次第なり、其後酒にほれゝゝ酔ひ心なる魂を、文覺祈れば忽ちに、誠の姿を現してそのたけ二十尋の大蛇となり、今は定佛なしけると、上人を禮拜し、瀧壺に飛んで入りたりしは、不思議とも申ばかりはなかりけり

## 五ばんめ

爰に鞍間の牛若君、奥州秀衡を頼み、時節を待ち給ひ

しに、此度兄頼朝北條の聲となり、義兵を舉げ給ふよしを聞給ひ、忍びて伊豆の國へ立越へ給ふと聞しかば、又頼朝公より佐那田あいきやうの三郎を、道まで迎ひに遣し給ひ、人めを忍ぶ事なれば、鷹狩の體にもてなし來り給ひしが、牛若やがて鷹をあはせ給へば、いづくともなく鷹それて行けば、皆々跡を慕ひ追かけ入り給ふ、折ふしあさひ御前は敵の者に襲はれ、ごある伏し木の蔭に忍び給ふ所へ、牛若鷹を尋ね來り、嫂めとは知らいでいろゝゝ濡れある所へ、大庭の平太來ればやがて牛若はかしこへ立隠れ給ふ、時に大庭來り、ふとあさひを見付け、是は幸ひの所で對面いたした、定めて頼朝が行衛をしりぬらん、その上は頃執着したる女なれば、奪ひ取り飯らんど、いろゝゝ邪の戀慕する所へ、牛若立出いろゝゝなぶり敵の邪魔になり、其後我こそ牛若丸と名乗り給へば、大庭驚き、然らば討て捨てんと長刀取直し、切てかゝれば牛若やがてわたり合ひ、散々に切むすび、やがて大庭を討て捨て、あさひ御前をともなひ、伊豆の國へぞいそがるゝ、さる程に頼朝は江の島へ參詣あり、下向になれば御座船に召れ、四方の風景を見給ひ、さて文覺上人

に向ひ、此度貴方の志に依つて平家追討の院宣を給はり、殊に父義朝の髑髏を拜し奉り、平家を討つべき門出なれば、牛若もろとも軍法を語り給へとあれば、文覺辭するに及ばず、烏帽子ひたゝれを給はり、昔しの盛遠となつて、一々次第に語られしは面白かりける次第なり、かゝる所へ股野五郎、小舟のうちに形を隠しゐたるが、やがて顯れ頼朝を一太刀にせんと飛びかゝるを、文覺やがて傍なる碇をおつとり打てかかれば股野も剛の者にて、互ひに碇を引合ひしが、文覺力まさりにて、難なく碇を引き奪ひ、かうべ微塵に打碎き、今は是までそうく御座船をいだせくといへば、不思議や浪風頻りにして、牛若丸に討れし大庭が執心顯れ出れば得たり賢し文覺は、珠數おし揉で祈り給へば、大庭が幽靈忽ちに、惡鬼となつてしたひよる、かゝる所へ有難や、辨財天はあらはれ給へば、眷族十五童子は、みなく利劔をひつさげて、揉み合ひもみあひ魔王を中におつとりこめ、やがて降伏し給ひしが、不思議や魔王は白虎となり、大福德の辨財天、是はうべんのそのけしき、有難しとも中々に申すばかりはなかりけり、

巳ノ正月吉日千秋万歳

木挽町六丁目

ゑぞうしや三左衛門板

京ひながた

立役江戸

多門庄左衛門

名代

座本

龜屋

山下半左衛門

立役大坂

山下又四郎

(表紙の短冊)

座本 けんぶつは山下一はい入ましたお仕合

多門庄左衛門

江戸 かんぜんふうの四天王くらまの多門で

付り あづまの仕出し本むらさき

かほみせ  
大あたり

京ひながた

ふや町通

八文字屋八左衛門

並になにはの染出し梅のもやう

山下又四郎

大阪 トラつたり又四郎鼠ちうこうの大でけじ

大夫 おかた役はうちついたお上手左馬

上中切

よめ入

よふにた物が兄弟になる

よめ入

よふにた物がおちおいになる

よめ入

よふにた物がめうごになる

井ニ大小ぶし大おどりの小歌入

一 殿ひめむめのまへ

大夫でき島小太夫

一 いもご松のまへ

同 山本かもん

一 おばぎみ

かめ四郎三郎

一 松のまへの おきよ

山本なにわ

一 同じくおしな

すいきしげまき

一 同じくおかん

山本市之丞

一 同じくおいご

今村彌太郎

一 つぼね

若井久四郎

一 むめのまへ 小はる

高島林之丞

一 同じくおだまき

さの山花さき

一 同じくおつや

つゝゐ吉十郎

一 まひ子おゆき

かつ村半太夫

一 おほるなにはの助

立役山下又四郎

一 さゝき時之丞

山下佐五右衛門

一 東木みどりの助

立役多門庄左衛門

一 小性やなぎの助

かつ村もん之丞



一同じくいおり	ふちた皆之丞
一同じく千十郎	山下まつ井
一おとは山とみ五郎	宮崎だん之丞
一九重殿みだひ	玉川千之丞
一はつ花のまへ	せ川竹之丞
一弟吉じやうの介	よしおかもどめ
一おちだん正左衛門	大山万左衛門
一こしもとおせん	小櫻友三郎
一同じく小まん	おぐら七五郎
一同じくおりん	よしおか染之介
一同じく小ぎん	竹中花ざり
一おにの金十郎	ふち村宇左衛門
一つちのかん四郎	くが六郎右衛門
一いなづか京右衛門	座本山下半左衛門
一女ばうおくま	大夫岡田さまの介
一よこた孫左衛門	だうけ山田ちん八

大小ぶしおごりの小歌

一よいく、かしまうらからノ、うらからくたから  
ぶねがついたとさ、詞かほの若やくとし男、よいこと

よいことよいく、ことくよいことぶきをいはふ  
て、ことふれが参つた、詞是やこなたへごめんなれ、  
來年のゑほうは、さるどりの間をばとしとく神とさ  
だめて、かのへたつのはじめ、卯の十六日はまめ  
まきだ 詞わつとつかんでよいやさ、かしまおごりを  
ばちちつと、ちとくちつと、おんごりびやうしに  
かゝつて、是やこなたへ物とはふ、先此月は大かの、  
はて大ともく二月小、お、三四大五は小々だ、それ  
六月は大よの、□□くくどつこい、七八月は小と  
さだめて、九月は大のきく月、十月はがつてんか、霜  
月しわすは大々、きはめてくしつかとさわめて大  
小元とさだめた

千秋万歳

京ひながた

第一 あづまの仕出し本むらさき

江戸 多門庄左衛門

なにはの染出し梅のもやう

大坂 山下又四郎

座本  
山下半左衛門

扱おことはりを申上まする、何がなおなぐさみに成  
ますることをと存ますれ共、かほみせにははじめ  
出まする子共が、廿人もござりまして、まそつとせり  
ふを云して下され、私は打かけがきて出したい、わ  
しはまひがまいたふござるのと申て、私一人をせが  
みまする、外のしばいのやうに、狂言づくりはかゝへ  
ませず、内外共に一人して仕りますれば、しぐみもで  
けぬでござりまふ、去ながら春々にも成ましたら  
ば、何ぞおなぐさみとなりまする事を、いたして御め  
にかくる義もござりませう、かほみせ狂言は、祝義迄  
じやと思召て御らんなされて下りませ、すぐに狂言侍  
共こいどをくへいらんとする所へ 大夫さまの介女ばう

おくま出、是々またつしやれ、かほみせでいそがしい  
に何の用できた、さればけふはこなたの御見物がた  
へかほみせなさるゝ、ぶたいのしゆびが、どうかこう  
かど心もどなさに見にきました、むゝ尤、さいわひじ  
やそなたも皆様へおめみへ申しや、是は女房共でこ  
ざります、私は事おゝいゆへ何かのつけゝけを、半  
ぶんは女房共にさせますでござります、そなたもお  
禮申しや、皆さまへ申上まする、私がなんぞのやくに  
も立ふかと思はれましてか、大坂よりよびのぼし、女  
房ぶんにはいたされしましたれ共、ぶてうほうな私で  
ござりますれば、おつ付しそなたをいたすでござ  
りませふ程に、皆様を頼上ます、御ひいきをなされま  
して、よいやうにおつしやつて下されませ、是そちは  
みなれぬ娘をつれてきたがたれじや、是はあんま取  
の妙立ごのが、わしがかご通つたればよびこふで、ま  
ひ子衆じや大名がたを望るゝ、まだはつじや程に、こ  
な様にようして下さんせと有ゆへ、つれて参りまし  
た、はてよいきりやうじや心へたが、今の内は成ま  
い、かほみせの座つきの有間はしやうじんじや、こな  
たはなんのこといはしやる、はてはつじや程によ

してくれじやないか、ごんな人じや、まひの手をよう  
をしへて下されこのことじや、おれはわるふ聞た、し  
てしたじが有か、おゆき聞、四五ばんござります、頭  
取宇左衛門聞四五ばんなればこのやうなでもらちが  
あきます、はてわるいせうふまはしじや、さあなん  
ぞまふて見やしやれ、そんならほうかどう舞升ふど  
扇をひらき、おもしろの花のみやこやこさも見ごど  
にまひおさめれば、扱々きようなごほめる所へ、ゆゝ  
しき侍供引つれ來りあんないい、京右衛門御ふう  
ふは内にござるか、身が參つたよしを申給へ云ば、  
をくへ入、ごなたやらみなれぬお侍が御出なされ、御  
ふうふ様は内にかとお尋でござります、おくま聞其  
はづじやと立出れば、侍みておくま様、御さしづにま  
かせ參りました、ようこそ成程内にゐられ、きげんが  
よいお入なされませ、御かんごうの私ばはいりても  
大事ござるまいか、わし次第になされよと連入ば侍  
は、さしうつぶきゐる、京右衛門はごなたでござる  
と、みればかんごうの弟なばかほふつてゐる、女房  
は、けふはおめでたい日じや、是はおとゝご大なるに  
はの介じや、御かんごうゆるし御たいめんなされま

せ、なにはの介かほを上、私義六年いせんに御かんご  
うをうけ、大坂へ下り、あの方で役めをつとめました  
れば、皆人様の仰らるゝには、兄弟とて扱も京の兄に  
ようにたごあつて、人なみゝの役めを、しゆびよう  
つとめました、是私がはたらきと存せぬ、前ゝおま  
への御引まはしにあづかつたゆへ也、罷上りせめて、  
あしての御奉公成共仕りたふ存れ共、いやゝいま  
だみじゆく成私なれば、皆人様の思召ふは、大阪へ行  
役めをしあげたと聞たが、あれでここが上つた、やは  
りいせんの又四郎じやなご、仰られふ、時にはおた  
めにはならないで、かへつて、兄にちじよくを付与と  
存、當年今月の今日迄待てはござれ共、都こひしう  
存、一つはおまへのかほがおがみたさに、罷上りまし  
てござる、御かんごうをごゆるされ、御せわにあづか  
り何ごぞ京の役所を、つとめますやうに頼上まする  
と云ば、京右衛門聞、役めが身になごあるがそれは  
しらぬ、先口上はきゝごことじや、女房聞それは私が大  
坂で見ましたが、おまへに其□□□や曰て云やうに  
身はもたれぬ物じや、そちがかんごうはあゝしやう  
ゆへよ、なをりはせまい、身は女房より外に、女にゆ



びをさいたこともない、せいじんと云はおれじやと云ば、まひ子のおゆき京右衛門が袖を引、こな様のいはしやんすには、けふまひをならひたいと云てこい、おれが内に置いて、女房をさつて、そちを女房にせふと聞たゆへきましたと云ば、京右衛門きのごくがり、云まぎからず、女房腹を立、だまらしやれ、おれをさつてあの子を持ふとは、おとなげないよういはれた事じやといへば、めいわくさふにうつふきある、女房はなにはの介にむかひ、私がいはずにゐまするがあくしやうがなをりませいで、女でさへあれば、半きゐの下女迄手をかけられぬはない、こな様ちとゐけんして下さんせ、御尤じや是兄じや人、おまへのがようござらぬ、なにはの介が御ゐけんを申おたしなみなされ、京右衛門せきめんしあやまりました□□ゆるし給へ、やあそちがゆるされにきたでないか、然らば云たいこともいはず、みぬふりをしているはつじや、それに兄へゐけんは何事じや、しんきやうのれいをしらぬやつがなんの心がなをらふ、人でなしめがかんごうはゆるさぬ立てゆかふ、扱はゆりませぬか、おゆるされたくば人に成てこい、なにはの介むつとし

是京右衛門殿、かんごうをゆるさるれば兄、時にはいかやうに云れても、立けにけられたと有ても、兄なればはらも立まいし、身が一ぶんも立が、かんごうの身なればそなたは京右衛門、身はなにはの介たにんよ、殊に身は大忍治部の大夫方へやうしに入た侍じや、それに大せいなみあるばで、人でなしとは、なせちくしやうにおしやつた、さあ此云はけがないと、侍の道なればゆるされぬ、へんどうはごうじや、京右衛門わらひ、何そちを人でなしと云たがみゝにかゝつたか、おゝさすればそちは侍か、おゝくごい、然らば人でないことを云てきかさふ、是へ出よと太刀おつ取ばお承らふと是も刀をさし、かたぎぬ取てつゝとよる、女房は是は何をおつしやるぞ、はて女のしることでない、是はじつごとのつめひらき、のいてゐよ□□なにはの介身を人でなしとはさあ承はらふ、おゝされば汝は治部の大夫へやうしに行た、其おやたる治部の大夫を、おとは山とみ五郎と云物にうたし、其敵をゑうたぬは人といはれまい、むゝそれで人でなしか、是さ其敵をうたため、此度都へも上つた、いつのなん時敵にあふまい物でない、せうぶは時のうん、もし

かへり打にあふまい物でない、誠に父のかたちと云ては、こなたならでしがむ人もない、こんじやうのなごりに一めおがみたり、其上兄おやたる人にふけうをゑてゐれば、天のどがめあつて、本望もどげまいかと思ひ、是へかんどうゆるされに來つた某が人でなしか、さあへんそうがないとゆるさぬと刀に手をかくれば、いや其心で身ごゐてにならふや、すいさんなど兩方あやうくみゆれば、女房中へわつて入は何事ぞ、なにはの介様おまへのがわるい、何がわるふござる、されば先詞がちがひます、おやごじやと思ふて兄様をおがまふためきたと有、其心が誠ならあまさかさまの事を仰られふ共、へんどうはないはづじやが、おやごに手むかひなさるゝかどうぞと云ば、一ごんのりにつまり、あやまりましたとをしする、こちの人のもうない、それ程に云いでも大事ないことを、さればあれはたんき物ゆへなをつたかと思ふて云て見たが、まだ其心ではおぼつかないぞ、なにはの介は然らば敵のくび取參らばかんどうを御ゆるされふか、おゝくび取人に成て來らばゆるさふ、忝ないこつゝ立かへらんとするを、女房よびかへし、云ても

大事のかぞ出じや、京右衛門殿かんどう御ゆるしなく共、かぞ出いはてやらせ給へ、おゝよう云ためたふ本望どぐるやうに、につこりとわらはふ、然らば先おまへ御わらひなされ先そちからわらやと、一ごにからゝと笑ひ、なにはの介いとま申はせかへれば、京右衛門は女房諸共をくへ入にける、こゝにゑだ殿やかたには、姫君松のまへ雪見のちんを立給ふ、てうのはじめのいはひのせきはんを、はうゝへくばる、松のまへこしもと引つれ出給ひ、つばねお寺様へもやりやつたか、けさ又介に持してやりましたが、何してゐるやらまだかへりませぬと云所へ、うかゝもごれば、こりやうつかりといへば、きもつぶし重箱を取おとす、姫は其やうにしかりやんな、又介はお寺様へ參りましたれば、おちやのこを忝なふござります、それはごぶらひごごじやと思召たか、こしもごおかん聞、いやのしをそへてやりました、又介のし付てしんじやつたか、其のしはおれがくふた、是はさもしいかゝつた事でない、何をおれ計がわるいやうに云、皆がこと云たらはづかしからふ、何もいはるゝ事はもたぬ、おゝ夕べもちやだんすをあげ、是々じやと、



ぬすむまねをし、ふどころへ手を入、是はお寺様から  
禮文でござります、姫ひらき見、かうしよく百のうぐ  
はんとよみ給へば、それは取ちがひましたと文出せ  
ば、それ皆ごらへておこすな、よふで見る、何々一女  
道はきのつきたるによき物也、せんきのおこつたに  
は、おきよをだいてねて、こしをさすらしてよし、お  
きよ聞是はめいはくな覺はござんせぬ、まだ有うば  
の心はへらのごとし、おれがいつわりてへらをいつ  
つかふたぞ、さふでない、へらとはごくつぶしと云事  
じや、にくいやつのご、おいはしらかす、こしもごお  
いと、お姫様のすまたと書て有、又介聞それよみぞこ  
ないじや、お姫様の姿にひでん有じや、ひでんではご  
うぞ、皆聞てゐるゆへ申されませぬぞ、みゝへ口よせ  
さゝやけば、そんならかうと、ばんにあはふと云けい  
やくし、ひでん有とはかうじやと云所へ、からうさゝ  
き時之丞來ればきもつぶしおしすぎる、姫の給ふは、  
おば様からそなたをよびにきたは、ふしんをすなど  
云事ではないか、其ぎもお尋ゆへよいやうに申たれ  
ば、ごかく姫君のきのはるゝやうに、ふしんを急で立  
よと有、よい時にはめでたい事がかさなります、今

日おば君一もん衆をあつめ、私を召れ仰らるゝは、松  
のまへにいか成人をも迎へ、とゑだの家をつがせよ  
と有、もし思召入の殿ごあらば、私へ仰られませ、お  
望の男ごそはせませふ、それはうれしい成程思ひ人  
が有、それをおつしやれませ、云してから跡で、其男  
ごはならぬと云やんなや、そんないふぞと又介がか  
ほを見給へば、云などかぶりふれば、いはねばらちの  
あかぬ事じや、時之丞はさあおつしやれ、ごの大名様  
でござるぞ、いや大名の娘が、大名ごふうふに成は有  
來つてふるい、そんならおくげ様か、いやおれが男に  
持たいと思ふはつゝと下々じや、時之丞聞、だまらし  
やれようござらぬ、すでにこなたのあねご梅の前様  
が、すいた男でなければ持ぬと有ゆへ、大殿が家はつ  
がされまいとあつて、ふぢいおの下やしきへのいて  
ござる、それゆへ大殿御りんじうの時某をめされ、あ  
ねはあの心なればせひない、いもご松のまへにぶけ  
かうけをもむこに取め合、とゑだの家をおさめよご  
の御ゆいげんこなたも聞てゐながら、大名が大名ご  
ふうふに成はふるい、ぶけもいやくげもいや、下々□  
□□ようはおつしやつたのふ、そりやならぬ、そなた



がたれ成とすいた男もたす云ゆべじや、そんならよめ入の dankau おいてもらはふ、ごんらしいとはら立給へば、時之丞いやさ此事計は我まゝにはさせぬ、又介きのごうがりゐるかはを見、おのれがじたい身をしらぬやつじや、いやしいさまでおそばちかう参り、あだことぬかすゆへあのやうなお心にならしやる、おのれには身がひまをやる立てうせふ、又介せひなう行んとす、姫は又介行な、時之丞はまだうせぬかといかれは、姫はそなたはあれがしつたことでもなにいなさふとは、それでもおまへがゑんにつくまいとおつしやる、はてそんならよめ入するは、然らば大名と御ふうふにならしやれや、おゝくごい、それでこそよけれ、今のやうにしましたはおためを存てじや、つばね何ごと成といたしおなぐさめ申しやと、きげんを取をくへこそ入にける、又介はしやくしをこしもとに持し、おれをまねいでたも、是でまねくと三年の内にしぬるぞや、三年はまだるいと、五六本取出し一々持し、皆よつて五六本でまねいだら、命がちまつて、五日か三日の内にしぬるであらふ、それはいらぬこと、云中に、おいとはおれまねいでやら

ふと云を、姫引のけこしもと共したゝるい、又介がそばにな、をくへ行よぎふとんしき枕二つこしらへておけ、はやう行としかり給へば、皆をくへ入、又介はゑゝごんらしい、今しぬるやうもあれ共、またそうはせぬ、とかくはやう出たがよいと、行んとするを姫引といめ、そなたは何をはら立るぞ、何がはらが立とは、此方はうつくしい御すがたじやが、姿より心がまされた、こなたとおれとは人しらず、せいし迄取かはしてゐる、こなたの心にはなぐさみに、おれをなぶらしやつたの、され共云かはしたことは有おれがうらみをいへばあしいと思ふて、時の丞とだんがうで、今日おば君が御祝言の義を仰られた、思召入の殿ごはござりませぬか、いかにも有、それは大名かくげか、いや下々じや、いや下々とはふうふにはさせぬと、さんゝしかられそんならごう成とせふと云て、心にはそまね共せひなうゑんに付と思はするため、是口はでけたが、たくむ事はしれるは、其中へかまいもせぬおれがはいつた、やい又介いやしい身で、おそばへ行たはことをつくゆへじや、ひまをやつたと云ておひ出し、あごでゆるりとそはふため、じやないか、お

れが心をしつてゐて其やうなことをやるからは、よい出てゆきや、おゝこなたがおひ出すと、又るじりに成ていつ迄もゐると云はふるい、やつはりこなたのたくみにのせられ出て行ますがうれしいか、又此やうなどうい男もない物じや、よう見ておかしやれお姫殿と、ゆかんとするを引どめ、ゑゝしんきなそなたのけて外の男は持ぬ、まだだましたらぬか、其心ならさいせん時の丞が尋る時、又介とふうふじやとなせいはしやれぬ、それはそなたの、此事はたれにも云ないやる、又云とそなた身のなんにならふかと思ふていはなんだ、是時之丞が聞て、下ろうの身でお姫様にふぎをなしたとがとて、うでをぬくか、あしをへしおるか、ごんとくびをうたれても、又あたまからつまさき迄、じよきゝとたばこ切やうにきざまれても、しぬる命はたつた一つ、おれはこなたゆへ命をすてゐる、ひけうにはないはいのお姫殿様、むゝ云なんだゆへはら立か、やいこしもと共とよび出し、おくへ行時之丞に、おれは又介とめうになつた、外の物とゑんはくまぬと云てこい、心へました、又介は是ゆくまいゝ、お姫様のおためにならぬ、其御しんていな

ら忝ない、それでもむり計云て、しなふの出て行のといやる物、いやごこへも行ずそばにゐませふ、きげんがなをつたか、成程ようござる、そんならこよひあふけいやくで、けふをゝと待てゐたあそこへおじや、又介聞扱は御しんじつ私と枕をかはされふな、さあゐてだかれてねるはいの、又介はつとどうはくし、ああさふじや、おまへのは皆誠じや、私がいつわりじや、此義は某が玉しゐより外へ出さぬ事なれ共、おまへのお心がせつないふり切て出ゆかば、おまへはじがいをもなされふゆへ、一通り身の上をおはなし申ませふ、是はあらたまつた詞じやが、ごうでござんす、されば私は生れついた下らうでもござりませぬ、せつしうにおいて、大ゑなにはの介と申もの成が、おやと頼んだる人を去物にうたせ、其敵をうたんため、有時は舟おさ馬かた、又有時は中げん小ものと成やしきゝを一か月程づゝ、奉公にはいり尋るかたきなければ、其やしきをも出、此おやかたはひろいことなれば、もしや敵のまぎれゐる事もやと、先々月かやうの姿と成御奉公に参り、みれ共敵なければさうさうおやかたを出べき所に、おまへ御姿をちらと見、扱



もく、あのやうなお姿も有物か、かやうな女郎とせめて一夜の枕をかはしなば、人上の思ひで共いはれふすれど、心もうかくと成ました、過つるいのこの夜、おまへの私をひそかにめして、やい又介そちは物思ひ姿じやが戀をするさふな、もしおれならばどう成共じやぞやと、有がたいお詞にあづかり、やしきを出かね今日迄罷有、今有がたいおなさけにあづかりなばよもわすれはいたすまい、時にあすが日に敵にあふたりとまゝ、おまへに心が残つてみれんのはたらき、本望をどげぬ時は、せんぞ迄のちじよくなれば、お聞といけ下され、私には御いとまを下され、敵をしゆびよう打なば、おもてむきからゑんを申て、ふうと成でござりませふ、只今は思召きられて下されませ、やあ是々こしもと衆、思はずはなしたかまひて大事のことじや、たごんして下さるゝな、是手を合ますぞ、姫君聞左様の御かた共存ませなんだ、こりやこしもと共あなたは大事の御身じやぞ、聞た事□□たどへ私がこがれじに、すればとて、おまへの本望とげさせ給ふさはりに成事なら、成程思ひ切ませふ、それは忝ない、思ひ切は切ましたが、何やらたらぬや

うに有、かぞ出をちよつと、しんきさふにのたまへば、いづれかぞ出いはひませふかと打つれをくへ入給ふ、然る所へ侍共大せい花がさをき、手にくづぼうを持来る時の丞出、雪見のちんの御ふしんがいそぐゆへ今日中に地をつきかためる、せい出しつゝいたがよい、扱お姫様はふうりうなだてすきなれば、後程まじりて、千ぼうづきに出なされふ程に、きをつけずと、こしもと衆やらのやうにいたせと云付をくへ入ば、こしもと衆皆花がさにて千ぼうづきに出る、所へ松のまへなにはの介諸共、花やかに出立、千ぼうづきに打まじり、踊りひやうしぞおもしろけれ、侍共めくばせし姫君をうばい取を、なにはの介侍共を引たをし姫君を取かこふ、所へだんの丞おは君諸共立出、侍共なんとした、しそこなひましてござる、ごんなやつらの、是松のまへないく、其方へ心かけふみをつかはした身はだんの丞じや、身が文を手にもとらず身とふうふにはいやといはるゝと聞たなれ共某がゑ思ひきらぬ、それゆへ侍共を千ぼうづきにして、うばひとらんとする所に、下らうめがじやまと成た、身が女房にせねばおかぬつれて行ぞ、姫聞おれはそなた



はいやじや、おば様あいつをいなして下され、おば聞  
あなたはだんの承殿と云お大名ゆへ、おれがゑんを  
むすんだふうふに成たがよい、なにはの介聞、是お姫  
様おば様もがてんじや、あなたとめうごにならしや  
ませ、そちがさふいふはづか、ひけう物が、おれは外  
に男は持ぬと取付なき給へば、是此通じやかへられ  
よ、扱は姫がみつつうの下らうが有と聞たがおのれ  
か、侍共あれしばれ、なにはの介いかつて、ごこへお  
のれら、よつたら此ぼうでたゝきころし、千ぼうづき  
やゑいとなど、地へつきこんでやらふぞ、だんの承は  
らを立、おのれのがさぬとつめかくれば、なにはの介  
刀おつ取あやうき所へ京右衛門が女房おくま、長刀  
ひつさげかけ付わつて入、是は戀のかうろんとみへ  
た、私がらちあけませふお待なされ、だんの承聞然ば  
取持て埒あけよと立のけば、なにはの介は何やつな  
れば手づめのじやまをすると、かほをみてきもをけ  
し、おくま様是へは何としてござつた、さればいな所  
へめいよな物がきたでござらぬか、こなたが此やし  
きへきて色にまよひ、大事の望をわすれてござると  
云事を、ぬしがきかれて是へきて手打にせふなどゝ

いはるゝゆへ、わしはこな様がおいとしさにけふ此  
やしきへしのび入御ゐけんを申さふと思ふ所に、さ  
わがしいゆへ、出てみれば、まだあくしやうがやまい  
で、戀ゆへ打はたさふとや、こゝでしんでは侍が立ま  
い、おれがつれにきたもごらしやれまいか、なにはの  
介つまり、あやまりました、おゝござれとひつ立、是  
お侍よう待て下さんしたと、ゆかんとすればをさへ、  
身が戀を取持ふと云て、かへりてらちがあくか、はて  
らちはあいてござる、此男がじやまに成でないか、そ  
れをつれてかへれば、跡はこなたのまゝじや、いやさ  
あの姫にがてんさせ、身をねやへともなへ、それがな  
らぬと、其かはりに我を身が女房にする、それはだん  
かうがならふ、わしには男が有でもなしでもないでもな  
し、去ながらわしを女房にもたしやると道具がいる、  
何成とこしらよふ、先やりが二本と紙のぼりうしろ  
に立つじくで是はふぎした物でござると云、こゑ  
をこしらへねばならぬ、じぶんからさむいに、木のそ  
らですゝまふより、よしにさつしやれ、こいつは身を  
なぶるか、姫はおくまに取付ごうでも此男をやるこ  
とはならぬ、なにはの介は是おくま様、本望をとげ

ふと云も侍のぎり、又此所をすて行ばなさをしらぬ、ぎりを立てばなさがすたる、よいおれさへすつればよいと、はらをきらんとするをおさへれば、姫はなふあなた<sup>が</sup>がしなしやると、いきてはるぬとめて下され、お熊みて扱はくさりやうたの、是お姫様、あなたはとみ五郎と云おやの敵有、それをお打なされねばならぬ、はなれとむなふ思召ば、此やしきを出一所に敵をねらひ給へ、一所に行て大事なくば、それこそ所望じやと打つれ行んとし給へば、まてく扱はなにはの介よなそれのがすな、む、身が名を云てのがすなと云一ごんに聞所有、汝は何物じや、お、某こそ治部の大夫を打て立のいた、嵐山とみ五郎、今だんの丞と名をかへてゐる、扱は敵か、めんていをしらず名をかへしゆへ尋あはなんだ、天□□□我となのつて出たうれしやと悦べば、おくまは今ぞ本望とげ給へ心計のすけだちをいたさふと、長刀を水車にふりまはし、侍共を切立れば、むらくはつとにげて行、とみ五郎むすどくみあやうき所へ、なにはの介覺たかと切付取てふせ、おやのかたき思ひしれととめをさし、今ぞ本めうとしやと姫君にいただき付、所へ京

右衛門はしり出、お、でかしたく、身もかけ付やうすを見たが、あつばれなはたらき、それでは京の役めもつこまらふと悦びおくへ入にける、山下又四良大でけく

## 第二

江戸立役 多門庄左衛門丹前六法あたりました

あらおもしろの初雪や、東のそらをあとにみて、行もかへるもあふ坂山、かち侍大せい、小性いおり千十郎さきをはらひ畏つて、東木みぎりの介、□□はじめての京上り、一ゆりゆつたふり出し、げにたんせんのみ中、其中村にきりやうふうぞく其ま、こはつき迄うつります、おぼろ□□□かげはやせのさと人、おはら木かはひく男のしだし也、然る所へ京右衛門のからう、よこた孫左衛門來り、おまへの兄ご中村七三郎殿も、私が大□□□かひに參つたゆへ、こなたの御上京もおそさに御むかひに參つた、みぎりの介聞さればく、せつしやが兄も、いかい皆の御やつかに成ましたげな、おちかたからのぼれと申こしたゆへ、おぢにあいたし、一つはこゝのへ殿へむこ入じや、是がちとおとなげなうは有、扱江戸とはかく別でござる、



くわなのわたしをこへてござれど、はや山の木たち谷の水おと迄いとゆうくと、はたごやの女迄ふうぞくやわくと、こゝさへ是なれば、すいごの水のふだせつしやが、京女郎にあはん事およびもないこと、のぼつておちにちじよくをあたへふより、くはなからかへらふと存たが是迄きて都をみぬも残りおゝさに、こゝ迄のぼつてござる、ひとへに頼まずぞ、孫左衛門聞、あたまから長老はない、すでにこなたの兄七三郎殿初てみめへの時は、何とやらきのごくに存たが、だんくに役めをでかされ、殊にいとまごいの役めを、大きにでかされました、とかく京へしゆ行にきたと思召、尤てござる、初めから長老はないと有詞で力をゑました、孫左衛門はいざお供いたさふ、いやすぐにおちかたへ参ると云事を、柳の介と云物に、九重殿へ申てつかはした、おつ付かへらふ今少待給へ、心へましたと待ゐる所へ、こし元小はるおだまき帳とすゝりを持出、皆様がたへ申ます、私らがお主は、お大名のお姫様でござりますが、すいた男を持ふと有て、京へ男をぎんみにお上りなされました、それでいづれも様の御きりやうを付ます、付られて下されま

せ、是はかはつたことじや付られませふといへば、一ツ男せい高にもなしひくうもなしよいかげん也、いろ白くめふたかわ、はなみごと也、かはゆらしきと一々付、忝なうござんすと、まくの内へ入所へ姫梅のまへこしもとつれ立出よいきりやうと云はあの人かと、そばへより給へば、みごりの介はもしお上郎様、私はまだ女がござんせんそれで女房を見立に上りました、見られて下さんすまいか、はて同じやうなことじや、云ながらはわしはみずとおかしやんせ、もしおまへのきに入ましてもわしがいやでござんす、はじめて京へ上り、女にきらはれて一ぶんが立ぬ、此上はおれがほれぬかねばおかぬ、是はちときがでけておもしろい、わしもほれらるゝきじや、そんならちと見ませふか、何をかげんをといだき付、よいはごふところへ手を入、是はなんでござんす、はてちでござんすとたはふれ給へば、孫左衛門みて、ほんによいめうとじや、私共もかたつきませふと、こしもとを千十郎いおりへ一人づゝわたし、其身も小はると打つれ、皆かしこへぞ入にける、然る所へ柳之介立かへり、九重殿やしきへ参り、仰の通申でござり



ますれば、こうしつ様の、むこ殿よりのししやこなたへと、おそばちかふめされ、成程京右衛門殿方へ御入なされ、むこ入は吉日をあらため申つかはさふとおへんじでござります、私もついでお姫様を見やうと、かなたこなたといたしければ、みすのあいよりちらとみました、それはくうつくしいこと、私をごらんなされ殿ご様の人なら、むこ入まで待ごをな、しうげんのおさかづきをしんせますと、此さかづきにてうご参り、是をみごりの介様へしんぜまして、其さかづきを持てきて下されと有て、則さげちうが参つた一つ上りませ、いや祝言のさかづきは、一家一もんあつまつて其ばでする、此とちうへさかづきは、ぶてうほうなかへしてこい梅のまへ聞、いやそれはせけんなみ、こゝのへの姫君なればこそ、祝言のさかづきを此所へおさしなされた、是はのふでしんぜられませ、みごりの介聞、おれはこなたのまへのまれぬゆへじや、さりとはすいかな、然らば此さかづきをさへた、姫にのましてこい、梅のまへ聞、こゝは一つ私があいしてやりませふと、一つうけのみ、なふ是は毒しゆじやと色かはればみごりおどろき、扱はし

うとが方に悪心有てのしわざか、又は姫が外におつとを持、某上りしゆへ身をころさんためか、やしきへかけ入んと、行んとする所へ、孫左衛門はしり出おし止、先待給へ、こしもと共はごこへ行しか姿もみえず、是は女郎はしなれさふなと云ばみごりの介立より、なふ心は何と有ぞ、女郎くるしげに私はしにまする、おまへに云置事が有、わしがしんだあとに、外に女房持て下されな、おゝきづかいし給ふな、そなたより外に女房は持まい、先こなたはいづくの人ぞ名はなんと云ぞ、女郎聞、わしはあのと云んとする内に、いきたへむなしく成給へば、是はごうじやとなげき給ふ、孫左衛門はおしのけ、しがいへきぬかけ置みごりの介は、行ゑもしれぬ女郎の□□身がはりにしんだ、やしきへ行せんぎせんとかけ出給へば、柳之介おれも一所に行ませふおのれはつれ行ぬ、はてこなたはねんじやおりや若衆一所に行、其若衆がごくでころしても大事ないか、ぶ心中物めが、おれもごくとはしらなんだ、ぶ心中じやない、まだぬかす、心中のよいと云は今の女郎、かりのたはふれに身がはりにし、給ふ、是を心中物と云と、きぬ引のければしがい

なく、白玉上りうせにける、みごりけうさめゆめではないか、所はやはりあふ坂山あらふしぎや、扱は某に心有女郎の念が來つて命をたすけ給ふよな、玉しゐのかよふからは、かたちのないはづはない、たとへ日本は云におよばず、ぼんなふの山戀のうみ、とびこへはねこへ戀しと思ふ女郎を尋あるいておくべきかどこくうにかけ出給へば、皆あどをしたふて行にける、こゝに九重のやかたには、けいぼだん正左衛門は、金十郎勘四郎と云下人を、あを鬼に出たゝせ、やう□□されば火の車、引やく人がたりませぬゆへ、あか鬼の半兵衛とて、こうしやなやつをやといましたと云所へ、半兵衛へ出れば、けいぼは、やいやうすを云てきかさふ、姫に□□□□云のはまゝ子、弟吉じやうの介はほんの子じや、女なれ共惣領じやと有て、大殿が姫に家をつがせと有ておはてなされた、それゆへ姫をころし、吉じやうの介に家をつがせたふ思へ共、めつたにころしても跡がなんぎゆへ、おにをこしらへこよひ姫がねやへ入、おやにふかうゆへつかんで行しと云て、火の車にのせ門を出、ころしおもしろかけよど川へしづめにかくるさう心へ、半兵衛へ聞、私はなぐさ

みのおにがあるぞ存やとはれてきた、人ころすことなりませぬと、いなんとするを引とめ、大事をいはせいやと云と今ころすが、せひない、心へました、然らばあいづの大この時出よと云付をくへ入ば、半兵衛はおれはひやうしごとはへたじやおしへてくれと云ば、二人はをしへてかしこへ入所へ、人をとすればこかげへしのびある、こしもと共よぎふとんざしきへしきをくへ入、半兵衛はそつとよぎの内へかくれる、所へはつはなこしもとつれ出、かゞみを見給ふ、半兵衛よぎよりかは出しのぞく、かはかゞみへうつれば、なふこはやおにがある、いや何もござんせぬ、扱は心でみへたか、おれもねる皆やすめと有ば、皆悦びをくへ入、姫はふとんへねて、たれぞきてよるの物きせと有ば、半兵衛よぎかつぎ姫の上へねる、是はたれじやわるいこと計と、にげ出、やいこしもと共とよび給へば、皆出そちはどこからきた、姫はにくいやつあすでもむこ様が御入なされたら何と云はけせふ、半兵衛ははてきすがついていやといはゞおれが女房にせふ、おのれがやうなやつはいやじや、してそちがむこはなんと云、おゝ東木みごりの介様と云侍



じや、是を聞にげゆかんとすれば、とらへればひらにはなしてたも、いやとらへて置云わけさす、それではしなねばならぬ、何をかくさふ其みごりの介がおち、身は京右衛門じや、みごりはあふ坂より行ゑがしれぬと有、もし此やしきへは入てゐぬか、何ぞやうすあらふと存、此姿で是へ入こふだ、所にひだうのたはぶれはせまい物じや、おちがおいよめの草をかつた共いはれまい、是ではら切、姫聞なふ待給へ、ほんの事があつたではなし、おまへと私さへいはねばすむ、おはてなさるれば、ふぎに成ます、さふじや誠に下ひもとかふとしたまでじやと云所に、たいこなる、いや誠にこなたがはつ花殿よ、けいぼだん正がたくみで、かやうくしてころすはづじや、身はやはりおに、成こなたをつれもんを出、みごりの介を尋合ませふと、おにのめんをきひつ立出る、所へだん正おにの姿と成二人のにせおにつれかけ来る、所へ吉じやうの介はせ來りとこへ□□ぬ、だん正いかつて、此女はおやにふかうの大ざいにんゆへ八万ちごくへおとす、それ火の車にのせよ、京右衛門聞、いかにざいにんざいにん、いそげとこそ、くはつくくと云ば、扱もぶて

うほうな鬼めかな、やい惡人こそちごくへおとせ、あね様はあちら向てござれといへば、三年もこちらみずにござる、正じきなあねごを惡人とは、おちのあかおに、せうづがはのむり云うばが一所に成つて、あねごをうしなひ、跡で何とようしたでないか、おにとはでけたくはつくくのこゑを、さゝんざにうたひなさふと思はふが、さふうまふはおれがさせぬ、だん正ゑゑあらわれたのかぬかと、けんにてつくを、心へたと切付ればにげて入、あを鬼姫君をつれゆかんとするを京右衛門をしふせる、吉じやうの介は鬼めのがさぬぞ、京右衛門めんをぬぎ右のやうすをかたり、一先やしきをのき給へと、おさへしにせ鬼に姫君をおはせ、やしきをおちて行給ふ、おつてかゝれば京右衛門吉じやうの介、取てかへしおい行給ふ、其あとへ又おつて來り姫を引立る所へ、みごりの介通り合おつてをおつばらひ、やうすを尋給へば、私はこゝのへの娘はつ花と申物成が、けいぼおちだん正の惡心で、ころされる所を、京右衛門様と弟吉じやうの介のはたきで、是迄にげのびしと一々の給へば、扱は身にごくもらふとしたもけいぼがしはざよ、則身はみごりの



介じや、こは殿ご様かといだき付、おまへにあふたれ

ばこしがぬけたあふて下さんせ、あまへた事計、野道で人がみぬ程におふてやりませうと、おふて行給ふ所へ、梅の前のさゝし、こしもと引ぐし来る、おまへは夢にあふて身がはりに立た殿ごじや、夢中の詞に外に女房は持ぬと云て、其女をなせつれて行給ふ、ねたましやとうらみを云ば、げに誠あふ坂であふた女郎じや、はつ花はいやおれが殿ごと、兩方たがいにせりあへば、みごりの介は、あゝ扱命が二つほしうてならぬ、一つは君に奉り、一つはそさまと二世そはふに、まゝならぬとの給ふ所へ、だん正おつかけ來れば心へたと切付給へばにげて行、所へ吉じやうの介京右衛門きたりたいめんし、めでたいときは切ぬがよい、二人の姫はおれが男いやわしがのとせりあい給へば、京右衛門聞、先江戸より上つて女にきらはれいで仕合、月がはりに二人共にもとど打つれ入給ふ、

### 第三

口上云

皆様へ申上まする、しうげんめでたふおさまつて、祝義のおごりをいたします、よろしう御ひやうばん

を願上ますと、大小ぶし大おごり、

八もんじや八左衛門新板

一のたにさかおとし 三番續

付りいくたのもりおきくぎつね井にみかげのもり七兵衛ぎつね

上 しゆゑんくまがへ

あにぶんはかたきにてはなかりけり

中 百しやうかげきよ

かたきうつうでのほねこそつよけれど

下 あづましづか

たびやごりはるのよもしづかならで

一源九郎よしつね

むめだ八十郎

一かめいの六郎

すゝきさくや

一かたおか八郎

市村七十郎

一わしのおの三郎

すゝきうこん

一いせの三郎

ちか松かんの介

一するが次郎

と山千の介

一むさし坊べんけい

澤村十郎次

一くまがへの次郎

立役あらき與次兵衛

一ひら山すへしげ

三原十太夫

一弟平山くま次郎

大もりたつ右衛門

一かぢはら平藏

ふじ川しげ右衛門

一あつもり

今村半の介

一みだいもみぢのまへ

玉村つやの介

一こしもとさごろも

にし川おかの介

一いがの平内左衛門

こきん新左衛門

一あく七兵衛かげきよ

座本大和屋甚兵衛

一かげきよが子

みつき金五郎

一いくたのせうじ

さいごう五兵衛

一むすめおきく

太夫みづきたつの介

一同いもとおしも

きしだ小才次

一同おかし

みつしまもしほ

一同おしげ

玉村あさのせう

一らうにんみかげかん介

松永六郎右衛門

一しづかごせん

いわい平次郎

一こしもと

おのへもんど

一同じく

玉澤左源太

一あまがさきせんごう仁兵衛

山田ちん八

一女ぼう

こかん太郎次

其外座中不殘出申候

## 一谷坂落 三番續

## 第一

源九郎よしつね、平家ついでとうのゐんせんかうふり、頃はげんりやく元年やよひ中じゆん、みわたせばうなばらかすみ山とをく、なみのをどごうくたり、平家は竹のそのふのすへはなれば、しいかくわげんにはくらからね共、ぶりやくの道は中くいたらず、さあればとてかたく、是をあな取べからず、ときにもせいびやうのほまれ有、のこの守のり經、さつまの守たのり、もりとしもり久、いくさ大將にゑつちうの二郎兵衛、かづさの五郎兵衛、あく七兵衛かけきよ、らんぐいを引てろうじやうせり、又みかたに大將此よしつね、したがふ物にむさし坊べんけい、かめいかたをかいせするが、又大手に平山のすへしげ、くまがへの次郎なをさねを初、一きたうせんのつわ物也、かたきぎよりんにかゝらばくはくよくにひらき、かけ引を某がげちにしたが、い、一せんに打やぶらんはあんの内と仰らるゝ所へ、いせの三郎するが二郎はせ

さんず、大將ごらんじ何と一のたには、さかおとしに成所やある、さん候我々けんぶん仕候所に、きしにこへてけはしく、人間のかよふべきとは思はれず、いはまをつとふほそ道一つ有とはいへ共、くんしはやうきに近付すと申せば、只はまべを打て出、ひらせめになされなば、らくじやうたがい有まじと申、よしつね聞召、是程の城を日數をこめおとさんに、何の事か有べき、其一の谷をさかをとしにして、一こくに打つぶさんこそ、ちぼうけいりやく共いふ、其上此よしつねが一ごんいひ出せし事、ひるがへす事なし、兩人はあどに残り命をながくもて、ぐんせい共よういせよこの給へば、いせするがこはなさけなき御ことば、命は君に奉りし我く、に、ごまれとはなさけなし、大將聞なんぢらが申も、一り有ばあしくはきかね共、らんせいの時はがせつを以おさむといへば、大將がおくるゝことばをきいて、しそつおくるゝ、よしつねが今のことばもしそつをいさめんためよ、其方にむかつてのりつぷくでなし、さあちかうよつてようだいをかたれ、畏つて兩人、一の谷のあんないを々々かたれば、よしいか程のなん所成共、よしつねがむね



に有と、諸ぐんせいを引ぐし、一の谷へぞむかはるゝこゝに平家侍いがの平内左衛門は、びやつこを見付、弓に矢をはげおつかくる、きつねはおはれ、あつもりのやかたへにげ入ける、をくよりこしもと立出、こは平内様か、みだい様の御出なさるゝといふ所へ、みだいきつねをかこひ出給へば、平内見付いんとする、みだいおさへ、何ゆへ此きつねをころさんどはする、さん候ぢん中できつねあらわるればらくじやうすると申、ふきつにて候へばそれ故いまするおのきなされ、みだい聞そちは此城は、まだらくじやうせぬと思やるか、もはやおちて有、一もんの衆ははや舟にのりおち給ふ、つまのあつもり様は、其方のつれおち給へば、だれ有て此城の大將とならん、すればらく城といふ物、此きつねの來りしは、まだ神のりしやうも有と思ふ、平内聞ふきつ成きつねをなせ左様には仰せらるゝ、さればみづからはいなり明神の申子じや、それにきつねのあらはるゝは、まだ神のちかひが有と思ふてうれしい、ころさする事はならぬ、平内聞、承れば尤に存る、いかにもたすけ申べしと、きつねをよびよせ、やいそちは今ころさるゝはづなれ共、みだ

い様のおなさけゆへ命をたすくる、ちくしやうといひながら、某がいふ事をよくきけ、御一もんは申におよばず、べつしてあつもり様の御命に、べつぎないやうにまもれと、念頃に申せば、みだい立より、命をたすくる程に、あつもり様のかげ身にそひて、まもりの神と成べしと、こまぐゝといひふくめはなし給へば、きつね悦て草村へ入にける、みだい平内にむかい、只今は何ゆへかへりしぞ、さん候あつ盛様、あをばのふゑを御しつねんなされしゆへ、取りに參りました、みだい聞おれがしあんが有、今は先わたすまい、あつもり様のふゑのことは、くはんどう迄かくれがない、みづからが此城にふゑをふいていたらば、てきはあつもりのましますと心へ、此所へをしよするであらふ、少でもひまをもらはば、其間にあつもり様のおち給ふといふ物よ、ここに此ふゑは、御手になれさせ給ひしなれば、せめてあつもり様にそふていると思ふて、みづからが手にふれたい、其方は立かへり、ふゑはみづからが手よりわたさふといふたと申せ、平内聞げにおまへの此ふゑをふき御座候は、てきはあつもり様と思ふべし、たとへくみふせたり共、女なれば命に

べつぎは有まい、其まに少しでも君のおちのび給ふなれば、然らば立かへり君をおとし、おつ付むかいに参るべしと、おいとま申行にける、こしもとは先おくへ御入と、みだいをともない入にける、ゆふべの空のくものなみ、しゆらのたいこやなみのつゝみ、かせんのちまたにがくのおと、あをばのふるはおもしろや、ここにくまがへの二郎なをざねは、只一人しのびて此所へ來り、ふるのねに聞入、扱もおもしろいねかな、あつもり殿はまだ此やかたにまし升な、此みとせいせんに用事有都へ上り、おむろの花一見に立こへし、其時あつもり殿ふるのねを聞、あまりおもしろさにみぬ戀にあこがれ、とうざを書いておくりしが、誠お若衆じやは、其まゝへんかをくだされた、それゆへはだをはなさず持っている、其後源平かせんをあらそふ、某しのび此所へ來るは、ついぞあつもののおかほをみねば、とうぞ御めにかゝりおとし申さんため也、何ぞぞ内へ入たいと、長刀のゑにてもんをつけば戸びらあけば、是はもんがしめずに有、さいはひじやと、もんの内へ入ば、みだいあつものすがたに成打かゝり給へば、くまがへ打物たゝきおとし取てふせ、某に

むかつて太刀打はすいさんな何物じや、いやさ某をくみしいた其方は何物じや、おゝ身はかくれないと、なのらんとせしがしあんし、身ははるかすへの名もなき物成が、ふるがおもしろさに聞にきた物じや、何ふるをきゝにきたとや、其方はくはほうな物じや、某がくび取大將よしつねにみせなば、引上侍に成であらふ、某こそむくはんの太夫あつものよ、くまがへはつどきもをけし、引おこし御かほをつくゝみて立のき、扱ゝうつくしい事かな、何とぞしておさかづきがいたしたいと、こしにつけしひやうたん取ふところよりさかづき取出し御そばへそろゝと立より、おまへがあつもの様でましますか、是はあづまのにぎりぎけにて候が、かせんを仕りせいのつきたる時は、一はいのみ心をはらし候、おまへも一つ参り候へとさし出せば、はてそなたは心のやさしい人やと、さかづき取上是はあぢななりじや、さればそれはくまがへさかづきと申まするといへば、是で思ひ出した、いつぞやおむろのくはげんの時、くまがへの二郎といふ侍某に心をかけ、ふるのねに我が玉のをもたへぬべし、さくらの花は春はさきけりと、歌をおくら



れし、心ざしをかんじへんかをしたが、其くまがへ殿  
はごぞんじでないか、成程念頃にかたります、則其さ  
かづきも、くまがへのし出されしゆへ、くまがへさか  
づきと申す、扱は左様か、然らばくまがへ殿にあふ  
と思ふて、一はいのまんと引うけ一つほし、なふこな  
たを頼む、あつもりが申是は衆道兄弟けいやく、かた  
めのさかづきじやといふて其くまがへ殿へしんせて  
くだされ、もはや思ひのこす事もない、某がくびを取  
給へ、くまがへさかづきおしいたゞき、あらうれしの  
心ていやと、引うけのめば、なふなこたへはさゝぬな  
せのみ給ふ、いや某がのまいでたれがのみませふ、私  
がくまがへにて候としゅうをかたり、いざゝおと  
し申さんかたにかゝらせ給へ、扱は左様かとの給ふ  
所へ、あつもり來りなふくまがへ、兄弟けいやくのさ  
かづきをいたゞくこのまんとし給へば、是はそなた  
はたれ人じや、はてあつもりじや、いやおれがあつも  
りじやとせりあい給へば、あつもりは是みだいくま  
がへの心ていはしれた、有やうに申されよ、時にみだ  
い誠はあれ成があつもり様也、私はみだいもみぢの  
まへにて候と、一々やうす語り給へば、扱は左様で候

かど申所へ、平山のすへしげ大せい引ぐしかけ來り、  
やあくまがへてきはあつもりとみへし、何とてうた  
ぬたゞし平家に二心有か、くまがへ聞されば只今あ  
つもりをくみとめし所へ、又一人あつもりが出たる  
ゆゑいづれがあつもりならんと思まがふている、某  
が存るにはあつもりはさきだつておち、是は小性共  
があつもりとなのり、命にかはるとみへし、なぎさの  
かたへおちたであらふおつかけん、其方もおつかけ  
られよ、平山聞いやゝゝ尤平家の一もんはおちたれ  
共、あつもりは此やかたに有にきはまつた、其中があ  
つもりじや、二人共にくびを打、大將のまへにてじつ  
けんにいれん、くまがへ聞いやゝゝ何物共しれざる  
くびを二つ持て出、此内にあつもりがござらふ程に  
みはけてくだされと、うろんなる事はいはれまい、其  
上某がくみとめたるてきなれば、ころさふといかさ  
ふと某が心しだい、其方はかまふな、むゝ其ことばが  
らは平家と一みじや、くまがへ共にのがさぬと打て  
かゝれば、心へたりとくまがへ、みだいもろ共太刀ぬ  
き、平山をおつちらす、あつもり是迄と思召、さしぞ  
へをはらへつき立、是くまがへみだいとよびかへし、



さあくまがへ其方が手にかくび打て、あごをこふてたべとの給へば、こはなさけなやとなげく所へ、平山かけもごり打てかゝる、くまがへみだいをおしける、其ひまに平山かけより、あつものくび取にげかへる、くまがへなむさんぼうとおつかけんすれば、みだいは是迄とじがいせんとし給へば、こはまち給へとおしとめる、所へ平内來り、やあくまがへのがさぬぞ、くまがへ聞やれてきではないぞ、てきでない物がなせみだいを手ごめにする、されば只今平山のすへしげが、あつもの殿を打、くび取てかへりし、それゆへみだいの共にじがいとの給ふゆへ、それをこめてゐる、平内聞いよくうろたへた事をいふ、敦盛様は身が御供申た、なふ御出ましませといへば、あつものかけ來りなふみだいかご取付給へば、くまがへおしわけつくぐみて、はてふしぎな、只今うたれ給ふあつもの、くびのあらふはづがない、平内いかつてうたれ給ふが誠ならば、其しがいを出してみせよ、おしがいこそあれと、さい前のしがいを引出しみれば、ふしぎやきつねのからだ也、くまがへ是はとあきれゐる、時にみだいは平内にむかい、是はきたいや、扱

はびやつこが身代りに立し物ならん、平内げに左様にて候と、有しやうすを一々かたればくまがへ聞、扱きてきたいの事かな、いざ先をとし申べし、大せい一所はいかなれば、平内殿はみだいを御供し、都新くろだにへむけおち給へ、某はあつもの殿をつれちん所へかへり、めしつかいの物にしておき、しゆびをみて都へおとすべし、時にみだいはあをばのふるをあつよりへわたし、めでたくおい付たいめん申べしと、御いとまごいなされ、兩方へわかれ給ひける、かくて源氏の大将よしつねは、一の谷をまつくだしに、おめきさけんでおとし給ひ、一こくに平家をおつちらし、かち時つくつてちん取給ふ、所へ平山御前に參り、あつものを某が打取て候と申上る、大将聞召おゝあつはれなてがら、くんこうはかまくら殿より仰出さるべし、それく帳面にしるせとの給ふ所へ、くまがへはせさんじ、あつものを打取候と申上る、大将聞やあくまがへ、あつものは只今平山が打取しと申、則帳迄にしるしたり、所に又其方が打たるとは、たゞしあつものは二人有か、時に平山つゝと出、是くまがへ、あつものは某が打取た、何事をいふ、いやさ某が打たり

と、兩方せりあへば、よしつね聞召とかくのろんはむやく、やいくまがへあつもりをうつたといふせうこが有か、さん候くみふせて候時、あつもりの給ふは我くびをよしつねの前へ出さば、ごくもんにさらされんが口おしい、其方侍と思ふて頼む、くびをばかいちうへしづめてくれよと頼まれしゆへ、くびはうみへしづめ、印にあをばのふるを取候とさし上れば、げに是はあをばのふる也、して平山が打たといふはいかに、さん候某はふるなごをせうこにいたさぬ、あつもりのくびを取て候と、くびをつゝみしきぬおしあけ御前へ出せば、ふしぎやきつねの首なれば、こはいかにときもをけす、くまがへ立より扱く、あつもりのくびはきつねじや、げに思ひつけた此の一の谷にはふるきつねが有て人をばかすといふが、扱は其方をばかさんと、あつもりに成、馬にのりさきへ行しを、あつもりと思ひ打取給ひしな、其馬とみへしはわたくりであらふ、さしものはなんばんたうきび、よろひはほしなであらふと打わらへば、よしつねみてゑゝ畜しやうにたぶらかされて、うろたへ物めが大事の帳迄よごした、さうく是よりかまくらへかへれ、や

いくまがへでかしたく、くんこうはかまくら殿よりおこなはるゝであらふと、ぐんせい引ぐしがいちん有、平山はめんぼくうしない、がてんのいかぬかほつき也、くまがへみて、是あごでさんようしてあふ物でないぞ、まだきつねのごうるいがあらふ、ばかされぬやうに、ごこぞでまもりでもいたゞいてかへられよと、打わらひ立かへれば、やいくまがへ、某かやうのちじよくを取もおのれゆへ也、のがさぬと打てかゝれば、すいさん也と切合せ、なんなく平山切ふせる、平山が弟くま次郎、こはむねんど大せい一ごに打かゝる、所へあつもりかけ來り、やあくまがへあつもり成ぞと打てかゝり給へば、くま次郎扱はあつもりか、一所にのがすなど打てかゝれば、くまがへ長刀のゑにてあつもりを打ふせ、でつちめがすいさんな、あつもりとは何をいふぞと、くま次郎をおつちらすあつもりは是心がはりかくまがへ、なせ某を打ふせる、いやさこなたの名をかくさふためじやといふ所へ、くま次郎又おつかけ來る、兩人心へたりとさんくゝに切はらひ、さあしゆびはよいいざのかんど、くまがへあつもり手に手を取、一先其ばを立のきける、



## 第二

女房おきくはかごをばかつぎ、さきへあゆめばあとから七兵衛、子をせなにおい、一のたにをおりんとすれどけはしき坂で、女房は七兵衛がぼうに取付てさきへおるればあとから七兵衛、子をおろしつゝ、一のたにをばゑいゝつきて、やうゝふもとへおりにける、女ばうはなふあればうづがあとにいまする、おろしてやらしやれ、はて先あそこにおけ、あいつをここへおろせば、さしあいできうくつな、ちと心をはらしたがいと、女房がしりをたゝけば、子は坂の上より、ようゝさまぬれ申といへば、女房聞しやうのわるいがこなたにて、あのいふ事をきかしやれ、おれがごこにしやうがわるいぞ、はておれとめうどにならしやつたも、しやうのわるいからじや、そんならせけんの女房持物は皆しやうがわるいか、いや女房持もちうが有、こなたのやうに女房をうばふといふは、しやうのわるいでないか、其上おれは兄弟が四人有、わしがあねで皆おなじや、おれにほれてうばはしやつたればまだよいが、いもどにほれ取ちがへうば

はしやつたやらしれぬ、はていちごさふ女房を、めききせいでうばはふか、成程そちをみてうばふた、いやおれはついごこなたをみた事はないが、ごこでみさしやつた、おゝすま寺でそちはこしもとをつれ、ゑんまをかけていた、むゝそれか、それはわしがいもどのおしもじや、すればいもど、取ちがへおれをうばはしやつたか、さあいもどさへうつくしいさかいて、あねはなをよからうと思ふてぬすんだと、いろゝごいひなをせど、皆いもどこの事なれば、扱もあくしやうなゆだんはならぬ、さああの子をおろしてやらしやれ、わしはこゝでわらびを取と下にいれば、七兵衛は子ををろしに、一のたにへ上る所へ、二八計の女來り、なふこゝは女のおりられる所でござるか、いやいや女のおりられる所でない、あの下成女もむりにおりてこしをぬかしていやります、はてきのどくやこなたを頼む、どうぞおろして下され、いかにもおろしてやりませふが、此所にはをりるじふんがござるそれ迄待給へ、其間名所をおしへ申さんと、めい所にかこつけさまゝとたはふるゝ、たに成女房はなふこちの人もはやをり給へやいぼうずとさまは何して



いやしやるぞ、子聞よそのおなごだかれてじやといへば、ゑ、しやうわるがとはらを立、七兵衛をだまし皆下へおろし、さだめて出あい女であらふと、りんきしたびの女をさらへ、かほつくくみて、はてふしぎや、みたやうな人じや、さればわしもこなたをみたやうな、女房聞してこなたの所はいづくぞ、わしはいくたの物で名はおしもといひまする、何おしもか、おれはあねのおきくじや、なふ扱はあね様かと、悦びたためんしたりける、おしも申はおまへのうばはれ給ひしを、父上いかいおはら立で御かんごう有しを、いろくそせう申たれば、少御心やはらぎしゆへ、私かやうにしをびて、おまへの行ゑを尋候所に、只今たいめん申うれしさよ、いざ御ふうふ共にやかたへ御入有、父上にわび事をなさるべし、しゆびは私にまかせ給へと、人々をつれいくたへきたり、七兵衛にむかいおまへは是にしばし待給へと、あねおきくとおさないをつれ、おくへ入にける、所へいもおかちおしげ立出、あね様のおかへりなされ、是程うれしい事はない、あね様をうばい給ふ男をみると、七兵衛をみて扱もよい男じや、是へよびお近付にならんと、をくへ

よび入れば、七兵衛あくしやう物にて、いろくどうそをつき、いもど共にたはふる、所へ女房出、父上の御出といへば、いくたのせうじ侍引ぐし立出、おきくごみつづの男といふは其方か、りふじんにうばれしゆへ、殊外きつくはいに存た、然れ共子迄でけた事なれば、ふくりうをやめたいめん申と、さかづきをさし給へば、七兵衛おしいたゞき一つうくれば、それそれさかなとあれば、おしもは太刀一ふり持出、是は家のてうほうなれ共むこ引出物にしんせらるゝとわたせば、七兵衛をしいたゞき、御たいめん有さへ忝ないに、てうほう迄下さるゝだん、めうがもなきしあはせなり、お、扱其太刀は其方のしつていやるはづじや、私は百性の事なれば、太刀のやうすは存ませぬ、いやくおぼへがあらふ、然らばそこ中をみませふと、ぬきかけよくくみて、げに是は承りおよふた太刀でござる、一とせ八島のみだれの時、あく七兵衛かげきよが、さいかいのそこへしづめし、あざ丸と申太刀也、是がこなたのてへは、何として入ましたぞ、むむすればあざ丸といふをたしかにみしつたな、それがすなといへば、侍共取てかゝるを、心へたりと、

よるものを七八人取てなげ、こはらうせきな何事ぞ、せうじ聞、いやさ其あざ丸をしつてゐるうへはのがれは有まい、なんちは景清じやのがさぬぞ、あゝをどたかし、よそにも人のきくぞかし、其あく七兵衛かけきよといふは、平家の侍大將、左様な物にゐるもいや、只ごみん百性とはの給はで、かけ清とは何事ぞや、せうじ聞いふな、あらはれた、此度かまくらよりとも公より、かけ清を打て出せごふれがまはつた、もしかやうのぎを、わきよりそにんせられては、某一家たやさる、それゆへ其太刀をみせたれば、あざ丸といふからは、かけきよにまぎれないぞ、是おやち某をよしば其かけきよにもなされ、かやうにむこしうとのさかづきをいたし、まご迄有でないか、それをそにんなされたごま、こなたのつみものがれまい、おまごがいきていれば、其ゑんにひかざる、ゆへ、さいせんをくでさしころした、何せがれをころしたとやなむさんばう、女房はなふなさけなやと歎くを、七兵衛はつきたをしおのれも皆一所じや、さいせんよりの事は、某を此所へまねきよせんためのたばかり事で有しよな、某こそかけきよじや我子のかたきの

がさぬと、太刀ひんぬき切むすび、なんなくせうじを取てふせ、むねにかたなをおしあつる、せうじはやれれうじすな、是にはやうす有、まごごもころしはせぬそれつれて出よといへば、おしもやがてつれ出る、かけきよみて是はがてんのいかぬ、ごうした事でござる、おゝふしんは尤じや、其方に頼む事が有、それゆゑ其方の心を打みんためじや、誠にあつはれな侍じや、何と頼まれてたもらふか、何が扱いかやうのぎ成共、いなと申さふやうはない、おゝうれしい、誠に平山のすへしげはくまがへにうたれた、其すへしげが弟くま次郎といふ物、我ゝをほろぼし、此いくたのさとおふれうせんとする、それゆへ一るい大かたうたれ我ゝ計りに成た、某はとしよつたれば、かれを打事はならぬ、其方はおきくとふうふなれば、此事を頼みくま次郎を打てもらはふと思ひ、心ていを引てみた、頼むといふは此事也、扱は左様かおきづかいなさるゝな、私がためにこなたはしうと、しうとはおやよ、其こなたをうたんとするくま次郎なれば、某がためにもかたき也、さつそく打つて望をかなへ申さん、ゑゝむねんはいにしへのかげ清ならば、大せい



を以さつそく打取、御心をはらし申さんに、くま次郎はいせいつよし、我はかく百性のていなれば、しばらくもじこくをうつすがむねんな、かく成はてしも何ゆへぞ、源氏はさかへ平家は日々におそろへるゆへ是につけても思ひ出すは、いで其頃はげんりやく元年、三月十八日のことなりしに、源平兩ちんのかいがんにはつて、たがいになせうぶをあらそふ、のりつねの給ふやう、何ぞぞよしつねを打、はかりごとやあるとの給ふ、かげきよ心に思ふやう、はうぐはんなればさて鬼神にてもあらばこそ、命をすてはやすかりなんと思ひ、のりつねにさいごのいとまごい、くがに上ればげんじのつわ物、あますまじとてかけむかふ、かげきよ是をみてく、物くしやといふひかげに、打物ひらめかいて、切てかゝればこらへずして、はむかいたるつわ物は四方へばつとぞにげにける、のがさじと、さもしやかたぐよ、一人のとめん事は、あん内物こわきにかいこんで、何がしは平家の侍、あく七兵衛かげきよと、なのりかけく、手取にせんごとおふて行、みおのやがきたりける、かぶこのしころを取はぶしく、二三どにげのびたれ共、思ふかたきなれば

のがさじと、とびかゝりかぶどをおつ取、ゑいやと引ほごに、しころはきれてこなたにこまれば、ぬしはさきへにげのびぬ、はるかにへだて、立かへり、さるにてもなんぢ、うでのつよきといひければ、かげきよはみをのやぐびのほねこそつよけれと、わらひてさうへのきにける、むかしわすれぬ物語、をごろへはてて心さへ、みだれけるぞやはづかしや、此世はとてみいく程の、命のつらさすへちかし只頼むぞよ頼むこのたい一ころをきゝのこす、是ぞおやこのわかれ成、かげきよはきづかいなさるゝな、くま次郎は打てしんずると、かほふり上みればこはいかに、せうじむすめ其外の侍皆うせはて、やかたごみへしは草村の石どう計りのこりしはふしぎ成けるしだい也、かげきよおごろき、こはゆめかうつゝか、うつゝかと思へばもらふたるあざ丸はこゝに有と、ばうせんごあきれいる、女方申やう、扱はおまへの私をうばひ給ひしあとにて、父上やいもごはくま次郎といふものにうたれ給ひ、其かたきをこなたに打てもらはんため、父上のぼうれいかりにあらはれ、頼み給ひしものならん、かげ清聞げにそふじや、誠に今迄有ごみし人もなく、



又かくいふ我もござまらず、一もつうじやう又むじやう、尋ねみればもとはくう、梅もとみへてのきくさの、みつばよつばにこのづくりせしも、あれあふちの木からすのころ、おや子のさかづきめでたいといふて、さんさのころと聞しは、うら風なりけり高松のおと、いはほと成てこけのむす迄といはひしも、地水火風空のせきさうよな、くうの身がむぐらの我にたのんだか頼まれしぞ、かたきはうつぞうかみ給へ、なみあみだ佛とゑこうして、いざ女房かへらふと、おや子三人かへりける、きたいなりけるしだい也、こゝにらうにんみかげかん介といふ物、七兵衛所へ来る女房立出、るすでござりますといへば、はてあいたい、が、よいこなたに申ておかふ、べちの事でもない、平山のくま次郎といふが、こんど此所のしゆござなられしが、兄すへしげはきつねのわざゆへくまがへにうたれし、それゆへきつねは兄のかたきじやといふて、此所のきつねをかりたやす、それゆへやくにさゝれて、家一けんになな一つづゝわたす某はぎやうじゆへわなを持てまはる、七兵衛かへられたら此通をいひ、きつねをつり給へ、女房聞きつねといふ物は、

しやうねのをそろしい物でござんす、つる事はむようになされませ、天ちくでははんどく太子のつかの神、たいたうではゆう王のきさきさうじとげんじ、我朝ではごばのいんの上わらは玉ものまへ、其しうしんなすのせつ生石と成、てうるいちくるい迄命を取しと有、つり給ふ事はいらぬ物、かん介聞、物語をきいてはおそろしい事じや、おれもつりますまい、わなもすてませふ、女房聞其わなといふ物をちよつとみせ給へ、おゝやすい事と取出しみますれば、女房はつけしきかはる、かん介みて、はてきつうこはさうなこはい物ではない、して是はどのやうにしてつる事でござんすぞ、おゝしかたをしてみせませふと、わなをつき立、是がねずみのあぶらげ也、そも此あぶらげと申は、ういきよかんきよ、ちんびさんせうであげた物なれば、此にはひが十丁四方へひゞくと申、此にはひがはなへ入と、かのきつねがのさりゝと出て、くはふゝとする後にたへかねくいかゝるを、わなを引しめたたい物じやと、しかたをすれば、女房はきつねのごとくしたりける、かん介はゆうべよりはうばうへわなを持て行きたびれた、ちとこゝでやすま

ふといへば、女房めいわくさふにてさけ一つ参りませど、さけをしいてのまするうちにも、わなへこゝろをうつしうろくする、かん介はさけにゑいねいれは女房はおびをさき、上成小袖をぬぎ、かん介がかほへかぶせ、かのわなへねらひより、ゑゝはらのたつ、此わなゆへおゝくのきつねをつられた、いでかたき打せんとつゑふり上、ちよこくとはしりよりてうと打、あぶらげのかざに心とられ、思はずやかんのかほと成、かん介おき上り、なふおないぎ、かほかちがふたといへば、なふはづかしやとおくのねまへにげ入ける、かん介きもをつぶし、扱くおそろしや、七兵衛ないぎはきつねじや、七兵衛が此ていをみたらば、おれをもうらみるであらふ、先かへりませふと、かへらんとする所へ、七兵衛かへり内へ入みれば女房がきる物おび取ちらし、まくらさけさかづき有ければふしんをなし、かん介を取てふせる、是なんとする、おゝみつけた、何みつけたとや、そんならはら立るも尤じや、さりながらそちとおれさへ心を合いはねば、ないぎの名もたゝぬといへば、やい此だんに女房をかばふか、女も共にかさねる、まおとこめといか

れば、やい何おれをまをどこじやといふか、それは見つけやうがちがふた、是にはやうすが有、一通をきいて其後はいかやうともいたせ、おゝいふ事あらばいへど、かたなをうばいさあ申せ、さればそちは此きる物何かのていをみて、まをどこといふさふながさふでない、そちが女房はきつねじや、はてひけうななんぎをのがれんとて身が女房をきつねにするか、いやいつはりでないと、右のしだいをかたり、きつねのかほと成おくへかけ入し、それゆへ人がみねばよいが、もしそちがみたらばおれ迄うらみるであらふ、見ねばよいがといふ所へ、そちがもごつてみたといふゆへ、きのごくやといへば、そちはま男を見付たといふ、見付所がちがふといふは此事じや、いやく左様にいふとあつてもがてんがいかぬ、然らば女を是へよび出し、きつねならばせひもなし、人間ならばのがさぬぞよ、おゝ又きつねならばいひぶんが有ぞ、おゝいかに先其間なはをかゝれど、わなのなはにてしばかりかたはらにおき、扱女房を何としてみんとしあんし、やあもごつたぞ、風がふいてかみがそこねた、かゝみ持てきてなでつけてくれよ、女房かゝみを持



て出、むかふに立、かみなでつくる、かゝみへうつるほをみればきつね也、七兵衛是はといへば女房はつとおくへにげ入、七兵衛がをり、かん介がなわをとき、扱くめんぼくない、此上は某をいかやう共なされど涙をながせば、おゝ心ていを思ひやられていとし、某は先かへるといへば、七兵衛聞こなたも見付給ひし事なれば、是にござる時女をよび出しわけを申、やはり是にいるやうにいたしたいおゝ左様になされ、七兵衛は女房をよべば、しやうじの内よりいや出ますまい、せひ出よならそせうがござります、私にひまを下されなば出ませふ、おゝどう成共せふ先出よといへば、女房のかほにて、しほくと立出る、七兵衛みてくるしうないぞ、たとへやかんなればとて、今迄のなじみをわすれんや、扱はいつぞやいくたにて、おやといふたもゆうれいでも有まい、いかにもそれも皆私がしはぎにてござります、私がおやぎつねは、平山のすへしげにころされました、それゆへするゑしげはくまがへにうたれしゆへ、平山が弟くま次郎きつねは兄のかたきじやと申てけんぞくのきつねを皆ころしますゆへ、其かたきを打てもらひ申さんた

め、かりにふうふとなり、いくたにて頼みしも、おまへをたぶらかしました、いよくくま次郎を打て下されませ、たとへいかやうの事有共、あの子が十に成迄みそだてんと思ひしに、あさましきすがたをおまへに見付られ候へば、かはす枕にも心がをかるれば、もはやふるすにかへる也、なごりおしきはあのわか也と、涙ながら立ければ、七兵衛引とめ其だんはくるしうない、先あの子にいとまごいもせよいやくわかをみては心がみだれあしし、只かへすく若が事を頼む也、何としたか此程はよに入て三ごつ、おそはれ候ゆへ、いしや殿にみせ候へば、目頃かんけなゆへ、むしが出たと仰せられくすりを下されました、わしがはりばこにござんす程に、みつぶづのましてくだされませ、あゝなごりをしやといふをば、いただきとめればすがたはきへ、小袖計りぞのこりける、かん介子をいただき奥より出、やれ此子にいとまごいさせふと思ひしに、はやかへりしかや、是七兵衛尤そちとはゑんをきらふが、此子に心がのこらふ程に、此子をつれいくたへ行なば、母があらはるゝであらふ、いとまごいをさせ給へ、七兵衛聞いかに、しからば子を



つれいくたへ行、女房があらはれなば、むりにつれて  
かへらふ、其間こなたを頼むぞと、涙ながら子をいだ  
き、いくたのもりへ行にける、かくて七兵衛子をふご  
へ入になひつゝ、いくたへ來り尋れ共、有かさらにし  
れざれば、何とかせんごあきれしが、某といもせの道  
あれば、はづかしう思ひあはぬとみへし、きつねとい  
ふ物はわなにかゝる物なれば、此子を其やうにせん  
と、ふごにこれをきやい母にあはさふ程にこうして  
いよ、某もすがたをかへきつねに成ていたらば、出る  
事もあらふと、もとよりよいの事なれば、ふごの中  
よりきつねのおもて取出しかぶりつゝ、やい母が出  
ると云ても、此やうなめんをきて出るであらふ、こ  
はい事ではない、是はめんじやと、きつねのすがた  
となりける、所へあんのごとくおきくぎつねとび  
出、子を見て涙をながすぞあはれ也、七兵衛は何と  
ぞしてとらへんと、さまゝとだませ共、心かしこ  
き物なれば、さらにとらへられず、草村へぞいりに  
ける、七兵衛はあきれいる、所へ女房のかたちにて  
いろよき花を持て出、わかにとらせばいだきつゝ、  
ちをのます其ふせい、ちく生といひながら、おや子

の心ぞやさしけれ、七兵衛は涙ながら、のこへ山こ  
へたにみねすぎて、くるはたれゆへそなたゆへと、  
涙と共に申つゝ、きつねと同じやうにくるい、とら  
へんとすれどかなはず、又草村へ入にける、七兵衛あ  
きれ、かほごにしてもかへらぬな、よし此上は此子  
をころしはら切しなると、すでにあやうき所へ、かん  
介かけつけをしとめ、やれくま次郎が、きつねがり  
をするといふて大せいくる、其方をみたらば、かけ  
きよといふて、のがすまいが何とする、何くま次郎  
がくるとや、かれは源氏なればもとかたき、女房と  
ゑんはなれしもきやつゆへ也、是にまつて打とらん  
といふ所へ、くま次郎來り、やあきやつは景清じやの  
がすなと、大せい打てかゝる、かけきよ心へたりと、  
あざ丸ひんぬき切拂ふ、所へ女房あらはれくま次郎  
を取てなぐる、かけきよすかさず切ふせる、女房は  
あゝうれしうござる本望とげました、さらばとかへ  
らんとするを、かけ清いだきとめ、せめてあの子が  
十に成迄そだてゝくれよといふ、かん介は侍共をお  
つちらし、子をいだき立かへり、七兵衛ないぎをとら  
へたか、つかまいてはなすなつれてかへれ、おゝはな

しはせぬせひもごりてくれよと、むりにつれてかへりける、きたい成けるいもせかな、

### 第三

しづかごせんは旅のよいし、出んどし給ふ所へやどの女房立出、こは何事ぞしづか様、おまへの事は一とせよしつね様西國へ下向の時此大もつのうらに御さうりう有、其よしみゆへおまへを此せんごうふうふにあづけおかせ給ふに、いづくに行せ給ふぞ、さればよしつね様はよりとも公ごふはにならせ給ひ、あづまへくだらせ給ふと聞、それゆへ御あどを尋ねて行、扱は左様か然らばこちの仁兵衛成共、供につれさせ給へ、されば仁兵衛はがてんで供をしてたもるはづじや、扱は左様かわしにはかくして何共いひませぬはらの立といふ所へ、仁兵衛はふるごうぐやをつれ來り、おれはおふしうへ行ゆへ、しんだいをしまふ、だうぐをうるかふてたも内へ入ば、女房是を聞いよくはらを立いさかい、後には仁兵衛だうぐやとけんくはすれば、皆取さへ先だうぐやをかへしける、女房中はかやうにはらを立るも、おれにか

くし給ふゆへじや、しづか様のあづまへござるなら、是をろ銀にし給へと、小判五兩やれば、仁兵衛うけ取そちはかやうの心じやに、おれはむごいごうぐをうらふといふた、こらへてくれいと中をなをり、扱たびのよいし、しづかの御供し、あづまをさして下りける、こゝにいがの平内左衛門は、あつもりのみだいをつれおちけるが、源氏の世なれば身をかくさんため、みだいもろ共馬かたにさまをかへ、あつもりの行を尋ねける、所へ仁兵衛しづかの御供し此所へ來り、馬をからんと平内といさかふ、かゝる所へよしつねはべんけい其外のらうごう、皆山ぶしすがたにて來らせ給ふ、しづかごらんじ、なふ我君かと御たいめん有、所へくまがへ道心と成あつもりをつれ來り、こはよしつね公にてましますか、あつもり殿とはやうす有ゆへ命をたすけ、都くろ谷にしのばせ候、所にかちはらさがしに來り、それゆへ是迄おちて參り候が、あごよりかちはら追かけ參るといへば、みだいは何あつもり様かと悦びたいめん有、よしつね聞召、某かくるらうの身と成も、かちはらがざんげん故也、さいはいじや此所で打とらんごの給ふ所へ、かちはら大せ

い引ぐしおつかけ來り、のがさぬと打てかゝる、心へ  
たりと人々はぬきつれてわたりあい、こゝをせんご  
とたゝかい、なんなくかぢはらを打取、先かご出よし  
と、あづまへ下らせ續へばひで平悦びたかだち殿と  
あがめける、

八文字屋八左衛門板



當麻中將姫まんだらの由來

付り三月三日しほひのゆうらん  
井にけい母は二人きやうだいの中

上 あをきがはらやなみまの神

付りあらはれてしる下女がいにしへ

中 いでそのころはならの京

付り御いたわしやおや子のわかれ

下 二上がたけにむらさきのくも

付りごよなりたへま寺をこんりう

中將姫ごくらくのていさうをはすの糸にており

給ふ事

ぼさつねりくやうけい母のしうしん四天王たい

じ

くじやくほうわうおんがくのまひ佛法はんじや

う

右大臣ごよなり

中將ひめ

まゝはゝ

いもふごさよひめ

金澤五平治

女がたかも川のしを

爲川茂十郎

おきの万太夫

一 こしもごすま  
あかし

一 中務之丞はる時

一 たつ田重助

一 三保の藏人頼ざね

一 けいぼ

一 子息せうく

一 おはしたごすへ  
いふた

一 久米の八郎光重

一 同女ばう

一 弟久米の藤太

一 弟久米の伊織

一 下女みさき

一 下人ごら藏

一 けんみだい

一 せきのこの與市  
みよしの源太

ふじたゆきへ  
きり山平太夫

立役瀧岡彦右衛門

金や金五郎

川上三郎左衛門

平井吉郎次

若衆た出来嶋小三郎

山本宇左衛門  
染田宇兵衛

座本荒木與次兵衛

花井喜世三郎

梅田八十郎

宮崎彌津三郎

女がた松本玉のい

てき役小野山宇治右衛門

立役さるわか三左衛門

こよ田たん右衛門  
はつこり二郎左衛門

## 當麻中將姫まんだらの由來

### 上

はるなれや彌生三日のしほひとて、われおそろじとすみよしにあゆみをはこびうみつらをみわたしいつはいさけのよいきげん、はま松のこかげにまく打まはし、くんじゆの人をみる中にさう三條のくらんど、頼さねの一子少將、御供には久米の八郎がおごゝいほり、下らうとらぞうにべんさうもたせ、わざと御身をやつししうぐ三人すみよしにもふで給ふ、せうせう仰けるいかにいおり、げに此うらの名所あつはれわこくのふうけい、むかふにみへしはあかしがた、ひやうごのみさき一のたに、あはじの嶋もめの下に、みゆるなぎさのあまを舟こぎわたるよとおひ、是をながめてさけ一つのむべし、げにあれなるひがたにやすみ心しづかにながめんこの給へば、とら藏かしこまりべんたうおろしいたりける、其折ふしとよなりのそく女中じやう姫、御いもふとさよ姫其外こしもごあまためされまくのそとへ立出給ひ、少將のお

もかげを御らんじ、やいぐこしもご共あの若衆さまは正しく少將さまとみた、おそばちかくふよりそごお物語のしたい事も有、皆々供してこい少將のそばへ立より、申くこの給へば、少將はあみ笠かつぎこなたの事にて候か何の御用にて候ぞ、そりやそりやおかほがみゆるはこの給へば、こしもご共は口をそろへなむあみだぶつこいふにおごろき立歸り、扱もうつしひ若衆かなといふ所へ、おくがらう立田十助立出、是々こしもご衆びろう千万何事でござる、又お姫様にもはしたのふぞんじます、はかりながらおたしなみなされませい、まくのうちはもじやもじや致します、中將姫聞召されば其事あれにござるはよりぎね公の御しそく少將さまじや、ないないもふとさよ姫の心をかけていやる、其上けふしほひにこどよせおれもみつくお物語のする事も有、何とぞおめにかゝりたさに今のごとくどやかくとした、十介承り扱はあなたが少將様でござりますか、お姫様それはてがわるふござります、おいもごこの戀をとりもつかほゝなされまして、旨い所はしてやるがつてんじや、さよ姫あねご様じやとおもふてこゆだ

ん被成ますなといへば、いや／＼まつたくそふではない、先さよ姫がおもふ心をちよつとしらしたい事じやこの給へばいもふご君聞召、さん候若少將様におめにかゝる事もあろふごぞんじ、たんざくに歌をかいてまいりました、是はさいわいごこしもごすま同あかしに仰わたされ、此たんざくを少將様にわたし返歌をとりまいるべし、かしこまり候ご少將の御前に参りこゝにてたんざくをわたす少將うけとり給ひ返歌をなされけるを、こしもご其悦うけとり歸りよろこぶ、すま少將の御前へ罷出、是はめづらしいおすがた、さつそくながらしゆくん中將姫、みつ／＼御物語申たきよし申こし候、少將聞召いかにも今日此所にておめにかゝるはずじや、しからは御供申さんごまくのうちへいりにける、中將姫立出めづらしや少將様、ない／＼おはなし申そふご存じふみしんせました、こゝでおはなし申ませふ、やい／＼みなもの者ちこわきるよれ、十介かしこまり申お姫様是におりますもの其はお手まはりの者、殊にしゆ人のぎをさた致すものはござりますまい、何事にても御ゑんりよなくお咄なされませい、姫聞召いかにも／＼そうじや、

しからばかうした物語をまたすでもいふな、扱少將様の義ではござりませぬ、私程世に淺ましいものはない、ちぶさににては、様にわかれみなしごご也、殊に只今のは、様はけい母、いかなる御事にや私をにくうおほじめさるゝ事、ま事にわらはがたちすなをなるに付、きさきにたてんなごゝの御うわさも有、母様のおぼしめさるゝは私さへなくば、これなるいもふごを天上のまじはりすべきものとおこ、只これのみおぼしめさるゝ、其うへにお前様のは、子ご私のは、様ごは御兄弟、お前のは、ご様より、何ぞ中將姫をいけおくぞ、はやくころしていもふごをきさきにそなへるしあんをせよご、ひ／＼にししやがまいります、其せうこは是なるさよひめがよふつていやりますひごろにくい／＼ごおぼしめすに又ぞやお前のおふくゝ様が、さま／＼の事を仰こされます故、わたくしの身がいつくてたごふごおぼしめされまます、母様の惡をたのものにははなされませず、お前様を頼おふくゝ様ゑいけんを申てもいいなは、すこしはお心もやわらぎませふごぞんじ、此所でおめにかゝりお物語ます、少將聞召いづれおもひはお



なじ事、私も母様とはまゝ、しい中にて、折もがな私をうしないおごご大助に世をつがせとふおぼし召、みお心の有に今何を申あげたごあつて、中々御せういんはござりますまい、お前様や私は、いかなるひとがおやとなり子となりました、はてせめころさるゝをまつばかりでござりますと、泪をながし給へば、十助申けるは御兩人様の御しんせつ中々おいたはしうぞんじます、御物語のうちに私御兩所のおふくろ様へ御いけん申あぐるしあんの仕りおきました、其義は少將様のかたには、くめの八郎と申御家老、又御方には、はるときと申しつけん、御兩人ゑ右のおもむきを申入、ごいけんをいたさせなば、よもかしお心のなをらぬ事はござりますまい、お心やすふおぼしめせ、まづおさかづきと申上る、さよ姫聞召申あね様、私が事はなんとしてくださんす、中將姫きゝ給ひいかにもわすれた、申少將様、ないゝ、さよ姫が御しうしななと申ます、今日程よいしゆびはないふうふのおさかづきをしてくださいんせ、何が扱ごうなり共この給へば、ごら藏は悦、いでさけかふてまいらんと立出る、十助悦まづゝまくのうちへおほいらなされませい

と、皆々つれだち入にける、かゝる所へろう人ごみへし侍二人、まくのうちをのぞくこてあしをふむ、いやりよぐはいものさむらいのあしをふんで御めんこいへばすむ事か、かくごうせよといへば、手をさげわびるにかんにんせずばはてせひにおよばぬ打はたすぶんど、たがいに身ごしらへする所へ、少將いほり立出さまゝ、あつかい給へござらにきゝ、わけねば、少將りつふくましまし、さふらいとおもひあいさつしてくやしい、めんぐゝ心まかせにいたさるべし、あいさつ是迄成さいらんとし給ふ、兩人のものいかつてさふらいをさらゑてぶしでないとはしたながな、今一ごん申てみよ、其座をたゝせぬといふ、少將きゝ給ひ、何某をのがさぬとはおかしい事をいふものかな、いかにもあいてになるべしとすでにあやうき所へ、ごら藏一もんじにかけ付少將いほりをかこひ、是々旦那きやつらが口論はつくり事じや、さい前さけごりに行さきでこいつらにあふた、其時きやつらぬかす事は、少將がみへた、にせけんくわをしたらば定めし少將があつかいにでるであろふ、所をとりまき打てすてんどしぐんでするけんくわじや、其しやうこ

にはあれ、兩人のやつちかひ にならんでおるぞ是  
十助様お前には少將様ひめ 君系御供なされ、あごは  
某がうけとつた、心得たりと、十助少將姫君の御供申  
歸けり、虎藏いおり悦もはや心やすしと、兩人にわた  
しいさんぐにきりむすぶ、いおりはふかであまた  
おいここかしこにたおれふす所へ源太與市かけ付く  
びを打んとするを、ごらぞうおごり出、與市源太を切  
てすて、いおりをかいほうし一まづこゝを打ちのき  
ける、さる程によりぎねの北方、此度すみよしにて少  
將を打もらしむねんたぐいなきまゝに、はしたのこ  
すへいくた、兩人のひそかにちかづけ、その方共にた  
のみおいた事は何としたぞ、さん候只今是るまいる  
はづてござりますといふ、所へ下女みさききたれり、  
けいぼ悦まねきよせ、扱々そちはかわゆいものや、し  
たじたなれごつまはづれしおらしく、いにしへさこ  
そゆかしけれ、いづくいかなるものなるぞ、みさき承  
り、さん候はらからさもしひものにもなく候、ひと  
りのおやはしさい有て嶋にながされ給ふ、のこり給  
ふは、をばごくみ申さんため、か様のさもしいみづ  
しぼうかう仕り候、けい母きいてさこそく扱そち

にちまたのみたい事がある、よの義ではない、おれが  
ひぞうにおもふ少將が、そちを、めみてこがれわす  
ろふ、戀にへだてはないが情をかけてくれまいか、み  
さき打わらい何つがもない私をおなぶり被成ます  
か、いやくまつたくなぶりはせぬ、わが子が戀ゆへ  
わすろふをおやの身としてみすておかれふか、せひ  
かなるてくれよと、目につばをつけ、そら泣してみせ  
給へば、みさきは嬉しく扱はま事にて候か、何が扱其  
お心をむげにいたしませふ、扱はかなへてくれるか、  
しからばこよひしのぶべしいかやう共仕らんど悦内  
に入にける、しすましたり嬉しやな、此事しゆびする  
ものならば、その方兩人の者にべにの花のやうな小  
判を五十兩づゝごらすべし、沙汰なしくといふ、嬉  
しや小判をもらおふと口へは、けいぼはおくに入に  
ける、こすへいく田はのこりつゝ、目をそろへて嬉し  
や五十兩づつもろふたら、おれもそなたもあきんど  
の所へよめ入せうと、高唱する所へくめの八郎が弟  
くめの藤太來り、せうじのこかげに立ぎし、つかつ  
かどよつて兩人をこつて引よする、いく田こすへど  
うてんし何事あそばすといへば、藤太系せわらいさ

れば我いく田にないない心をかけ、折もあらば某が  
心程をかたらんとおもふ所に、只今あふた、おくゑい  
らんごめさる故だきつかふとしたが、そそふなふた  
りながらにだきにいた何といく田、是ほごにおもふ  
ているが心にしたがい身が女ばうになつてくれまい  
か、やくたいもない何事をいわしやんす、侍みやうり  
きよこんはない、はてこな様さへ女ばうにしてくだ  
んすならわしはごう也共といふといふ、嬉しやらち  
があいたさりながらおれはよくがふかうてしきかね  
かいる、それもござんす、むゝかねもあるかそれは何  
ほご有ぞ、五貫目ござんす、其かねはごこに有、今も  
らいます、たれに、いやそれはいふ事がなりませぬ、  
めんやうな事をかくすこりやこすへ、そちもかねが  
あらば、あに八郎に女ばうをさらし、そなたとふうふ  
にしたい、なるほごわしも三貫目ござんす、そちも三  
貫目有か、ごこからもろふといへ共さらにいわず、藤  
太兩人のごつておさへおのれしぶとい女かな、はく  
じやうせぬにおいては只今ころすと大刀をぬく、お  
ごろき有のまゝにいへば、さも有べしと引たて、ひそ  
かにおくゑしのびける、かゝる所へみさきは手しよ

くおもつて少將のねやゑしのぶ、所へせんみだいの  
ゆうれいあらはれ、いかに少將われはいにしへの母  
也、此女にこごばにてもかわしなば身の大じとなる  
べし、ごかくしゆけの身ご也、わらはがあとをもねん  
ごろにとふてゑさせよ、あらはらだちの此女や、はや  
はやかへれとさんぐにうち、かきけすやうにうせ  
にける、少將も涙をながしおわします、かゝる所へけ  
い母きたり、みさきくごよび給ふ、みさき申ける  
は、いかに悪なればごてあゝおそろしや、もはやかへ  
りますごいへば、いやいなしはせぬと少將のそ  
ばへつきやり、申ごの様くごよぶ、よりぎね何事な  
りご立出給へば、あれみたまへ少將が、下女のみさき  
ごふぎをいたした、かねて申さぬ事かきつごせんぎ  
あそばせといへば、頼實りつふく有、しよせんみるも  
はら立打てすてよごの給ふ所へ、せんみだいのとお  
ご國てる、藤太いく田こすへを引たておごり出、まつ  
たまつた、是頼ぎね、まつたく少將がふぎではない、  
是けい母のなすわざ、此よしをき、付さい前某せん  
みだいのゆうれいと也、段々やうすをき、ごゝけた、  
其せう人は此二人の女じや、けい母おごろき其まゝ



こずゑいく田を引よせ何とおこらがしやう人か、但し少將ごみさきがふぎのしやうにんか、さん候少將様ごみさきはふぎにきはまつたといふ、國てるおごろき扱はきやつらはうらかへりしな、それはともあれたゞしき少將に何とがあつてころさせん、わるくよつてけがするなと仁王立に立給ふ、みさき立出、是は何共心得ず扱はかやうのたくみにせんため、ごがなきわたくしまでをつみにおごすしやん、是大この様少將様ご私のふ義はさゝく、ござりませぬ、けいはいかつていやく、汝ごふぎばかりにあらず、少將ひめごもふぎが有、藤太聞いていよく、心得ぬ事何とそれにはしやうこや有、くごい事しやうこのうて大事をいおふかそれくしやう人ごよぶ、寅藏おごり出、成程少將殿ご中將姫にはふぎにきはまつた、ちてうこは是也ごしほひの折からさよ姫のかたへかきおくれしあふきをいだしみせければ、頼ざねひらきみ給ひ少將か下跡にまがふ事なし、いよくのふぎもの、それくひつたご有ければ、此しやうこにいふべき事なく藤太御供仕りおくをさして人にける、あごにのこるはごら藏、くにてるにむかい是々くに

てる某は今迄少將様のぞうりをつかんだ下ろうじや、少將様にいた時はじつがたをしたが、いかにしてもあはぬによつて此度けい母にたのまれ、あく人となつたゆへ三百石のちぎうとりごなつて、少將をごつておごした、その方ものがさぬといふ、扱は一つばいくふた、おれをつみにおごした悪人打て本望ごげん、これみさきみ事きやつらをうごふか、いかにもすけ太刀いたしませふ、ヲ、嬉しい然ば某が女ばうじやごいそがしい中にたわむれごら藏を打てすて、みさきをさきにたて、先そこを立のきける

## 中

頼ざねのしつけんくの八郎光重、さふらいにおりをもたせごよなりやかたへ使者に來り、ごりつぎにかくといふ、ごよなりのかうけんはる時立出、ひさしや八郎殿、先以先刻のおふるまいには殊のはかな御しゆで扱々たべゑひましたそれははる時手がわるい、ざしきをぬけてもごるごいふ事が有か、某しはおうらみにぞんじた、御もつ共く、扱おししやのおもむきはいかていの義でござる、さまでない事ならば

御家來にも仰付られいで、さればしゆ人よりぎね申は、ごよ成公に直におめにかゝりけん上物をも指あげ、其後御口上を申せご有事でござります、是はあらたまりたるお使者、然ばごよなりへ其段御ひらいたしませふご、おくに入、右之段申上る、ごよなりふうふ立出給ひ何ぞ申頼ごね殿よりくめの八郎が使者にきたご有かはやくごうせ、八郎罷出かしこまりけん上物を指あぐる、ごよなりみたまひ使者ご有所に何やらんしん物にあづかつた、定めし拙者が好物のまんぢうであるふ、八郎がいらるるうちひらいてしやうくはんいたそう、はる時ふたをひらけご有、かしこまつてはる時ふたをとつてみればなまくび也、はつごおごろきらごのごくふたをする、ごよなり仰けるは何ぞてふたをさらぬぞ、さん候御らん有てゑきなき物、そうくくだしおかるべし、いやごよはる時、頼ごねこんるにしておくらる、しん物某見ずして何ぞ返事をするものぞ、よし何にもせよはやくみせよ、いや御身のけがれ御ようしやあそばさるべし何いみものじやごいふか、しからばそくたいしてけんぶんせんごかんむりしやうぞくぬがせ給ふ、はる

時せひなくふたをさる、ごよ成おごろかせ給ひいかに八郎是は何共心得ずよりぎねもきんりしゆごの人、身をけがしてさんだいならぬ事はよくしり給ふ、所に是はまづ何ものくびぞ、八郎承りさん候其御くびは、よりぎねが二子少將様くびでござります、何ごいふぞ少將がくびとはいよくがてんがいかぬ、してくやうなごがありてくびを打、某かたへはよこされた、さん候少將義は御そく女中將姫様ごふ義のみつつう遊ばされたゆへ、御りつぶくのあまり某に仰付られ討奉り候、御しあんのうへにていかやう共おへんじくださるべし、ごよ成あきれ給ひ、さしたつてごうわくした、はる時よろしくはからへ、はる時申けるは某ごても十方にくれ候、まづ八郎殿にはおかへり有べし、およばすながらあごより御返事はなさるゝであるふ、八郎きいてなる程御もつ共、それはたの沙汰申ても御家、しかるうへは御そうだんの中に某がありてもくるしからぬ事、心おかれずごも仰せきけらるべし、はる時き、御言葉もつ共にぞんずる然ばごもく御しやん頼人ご、兩人まゆをひそめ、やゝあつてはる時申けるは是八郎殿、某存るは

先此御返事はさしおかふと存る、しさいは、もつ共ふ義はふぎなれども、もうさば是は戀ぢのならい、御ふた所ながらめなしおとこなし殊に御一家、先いつたんどよ成公へ仰せこされ、其うへにてはいかやうになさるゝとあつて、おうらみをもうさず、はやまつて少將様のくび打てつかわさるゝは、此はる時はのみこまず、少將を討てつかわすうへは、中將姫を討ていだせといわぬ計かしこまつたと申て姫君のおくびはゑうつまい、此うへはめんゝかうに仕らんと存るか何とおぼしめすぞ、もつ共なれ共それでは後日のおためがあしかろ、してためあしきとは何をもつて申さるゝ、されば中將ひめ様にはきさきにもそなへんどちよくぢやう有しをうけたまわりていながら、ふぎしたを其まゝ指置ては、天子のちよくをそむく、それおぼし召て少將様のくびを討てつかはされた、此方よりはうつてだしたに其まゝすておくどあつて、一ツせんにもどりむすば、何とおためであるふか、いやいな事をいわるゝ此義について一ツせんにおよぶがこわいといふて、只今姫君を討てだそふか、それは其時のうん、よりぎねのかたには一つき

どうせんのくめの八郎殿、またとよ成がかたはみふせうなれ共、中つかさの承此はる時、はなゝしく打じにを仕る迄よ、もしうんつきなば某ひめ君の御くび討奉り、はらきつてしぬるより外なし、いやとよはる時左様よどりむすんでは事なし、此そうだんもいぬ也、某が存るは一ツたん姫君を御供申、よりぎね公の御目にかけ、段々御ごく心なさるゝやうに申てみよ、さすが又それほごにあるとも有まい、いやまつ姫君を其方ゑわたし、頼ぎね御りつぶくのうへなれば、わが子のかたきそれうてとあつて討た(脱字お)給へば、おろか成はる時、其時にこそ此八郎がこゝにありとむねをたゝく、何心にあるといふ事か、もしひめ君をうたせて其跡にてもこゝにあるといふて、むねをたゝいてすむ事か、しよせん是迄相だんはすまぬとも、立とつてかけ出る、八郎おしとめいづくゑ行ぞお返事を申に行、まてゝはる時、それはけつきのゆうじやといふて、ぶしの家にはもちいぬといふ、おろか也八郎そちほごにこそなけれ、ぶしのみちを少しは、ぞんじたゆへ、かるゝしくしゆくんはゑうたぬ、此はる時があらん間おめゝとひめ君をわたそ



ふか、人でなしのさむらいは心やすくおしうのくびをうつ、少將様にはほいのふおぼしめさるゝであろふといへば、八郎はる時がそでをひき、つぎのまへよぶ、心得たりとそりうつて行、人でなしとはたが事ぞおのれが事よと、すでに打はたさんとするを、とよ成兩方をししづめ給ひ八郎はる時がしんてい、いづれをいづれ共りやうけんなりがたき忠臣、ちか比まんぞくにおもふ、さつする所はごかく子をひとりもたぬとさへおもへば、たれにうらみもない、せひにおよばぬ中將姫を打てだせ、はる時八郎おごろき是はま事にぎよいなさるゝか、おろか也兩人ないし所のごばつをかうむる法もあれおもひきつた、ひばり山へともない、さいごみぐるしからぬやうに打てすてよ、すなはちたちどりはくめの八郎に申つくる、罷立よと涙をながしの給へば、はる時申けるはこはおもいよらぬ事をうけたまわる者かな、せめて某にたちどりを仰せつけらるべし、おゝ事はり也其方事はひめがめのと、みるめもいかゞとわざと申つけぬ、さ程におもはゞけんしを申つくる、はやゝ打てまいれとおくをさして入給ふ、はる時は八郎をうたがふ、又八

郎ははる時をうたがい、たがいに目じりにいかりをなし兩方へこそわかれける、程なく中將姫の御供申ひばり山へ御供し、しきがわしかせすでにさいごごみへし所へいもふとさよ姫其外こしもとはしり來り、中將姫にいだき付わらはがふ義を御身様にかけて申事、天めいおそろしく候いかにはる時八郎、あね様をたすけわらはをうてこの給へ共、左様には成がたしとひきわけ、これゝこしもと衆はやゝ御供申てかへれといかりければ、ちからおよはず御供申皆やかたにかへりける、其後はる時いかに八郎彌々御くび打奉るかおろか也、はる時仰せなれば只今打と大刀ぬくを、はる時は迄とおなじくぬきつれ、八郎に手おおせ姫君の御共申こかげにこそは婦りける、所へ八郎が女ぼうかけ付おごろき、光しげをかいほうしはる時あごをしとふておつかれたりかゝる所へ、頼ぎねのみだいはしりきたる、はる時こかげより立出けいりやくをもつてけい母を打、さあらぬていにている所へ八郎女ぼうにかいはうせられはる時をみ付やいゝはる時姫君はいよゝ打たか、おろか成くびは某が打たてまつゝたといへば、ゑゝ人でな

し三代そうおんのお主を打奉るごいふ事が有か、はる時ゑせわらいさいふおのれは又しうたる少將様はなせ打た、今いふはゑきなき事ながら何しにおしうをうとふぞ、さいせんのかびは某がおとゝいおりがくびじや、何ごいふいおりをお身替りにたてたかでかしたく、左様にはあるまいとおもひうたがうてはやまつた事をしたゆるしてくれよ心やすふおもへ姫君はたすけおいた、何共心得ぬさい前みせたくび何ものがくびじや、あれはけい母がくびじや、是姫君はこゝにござるごあはせければ、八郎悦よりつきなげく、所へ中將ひめのけい母かけつけうつてこれとげちをする、はる時八郎心得たりとかひくゝりけい母がくび打おとし姫君をかたにかけ、八郎をかいはうし、よろこびいさんで少將のおわします、藤太がたちへいそぎける、

下

かくてごよ成頼ざねは此度けい母にまかされ姫君わか君むなしく也給ふにより、くけてんご人のことのはにかゝり、おのれごみしりぞきひばり山に來り給

ふこ、にてひめ君わが君はる時八郎にめぐりあいたまふかゝる所へみやこより、ちよくし來る、頼ざねごよ成をめしかへされ中將姫はかみをおろし大和の國たへま寺をこんりうしはすのいごにてまんだらをおりあらはし給ふ、所へけい母しうしんきたるをたもんぢこくそうちやうこうもく四天王あらはれたいじをし給ふ佛法繁昌

かほみせ箱傳受 三ばん  
きやうげん っき

直傳寫  
正本屋九兵衛

上 都にかくれなきたへまひめ

付タリさけにしなくある事

中 都にかくれなきぬれおそこ

付タリこひにしなくある事

下 都にかくれなきにせゆうれい

付タリうたにしなくある事

一とみ原くるすのどのごけ

龜 四郎三郎

一あねたへまのすけ

とみさかさまの介

一いもとまつらのすけ

松本たまの井

一こしもとおつま

竹中市彌

一からう小わたしやうげん

村山平右衛門

一いもごふしみ

みつ辰之介

一女ばうきよす

玉川 三彌

一からうかぢ川大しん

大さわ團七

一いもご小きよ

岩井花之丞

一弟かぢ川市三郎

音羽勝之丞

一伯父常らくゐん

市はや金十郎

一弓頭棕はし伴左衛門  
詰衆

一いしや原ぎうわん

一市のせくない

一たの上しんの丞

一大原二郎左衛門

一はゝ

一よめおかん

一は山一學

一いはた早之丞

一せんごうでん吉

一女ばうおまき

一びくにせいぼ

一同 りんせい

中川六郎左衛門  
にし川金左衛門

みくに彦作

むらかみ竹之丞

おのへたかの丞

市川團十郎

まつへ間三郎

村上市之丞

坂田藤九郎

大和屋甚兵衛

宮さき平三郎

玉村淺のせう

長岡六三郎

はやくも梅之せう



## 箱傳受 三番續

座本村山平右衛門

## 第一

こゝにぞみ原くすのどのとて、公家一人をはします  
が、せいでせいでにあいはて給ひ、みだいくにををさ  
め給ひ、御子二人おはしますませますあねたへまの介は、  
せんはらいもごまつらの介はいまはらにて二人おは  
します、からうには小わだしやうげんとて、ぶんぶ二  
ごうのゆうしなり、又おいやくにかち川大しんは、大  
あく人也、爰に又市のせくなひとてび男おはします  
が、ないくあねたへまの介どのへ、かよひなれこ  
よひも、たの上しんの丞を御ともにて、かよひ給ひ  
しが道にてしん丞まことに、かちうあまたあるなか  
に、わけてそのほうをこまにつれるはなさけぶかい  
人じゐると思ふてつれるあいだ、かまへて此やうなす  
がたとなつてかよふご人にかたつてたもんなや、を  
ろかな事を御意なされます、御ためになりませぬ事  
を申さうようは御ざりませぬかやうに御いでなされ  
ます道のに、ごもおぼつかかなふ御ざります故、わたく

しかたよりこひねがひまして御どもをいたします、  
そつとも御きづかいなされますな、何といやる道の  
ほごもおぼつかないによつてごもをするといやる  
か、それはみなおれにおんにきしやる事ではなひそ  
ちもあのふじ見にほれていやるゆへ、わたくしおご  
もいたしませふ道のほごもおぼつかかなふ御ざります  
ご、いやる、をれはをんにはきませぬあやかりもの  
じや、しかしもはや屋しきへきたご、てをうてばう  
ちよりふじみ見出たれじやいやくない様で御ざりま  
すか御はいりなされませいと、手をざりてはいるし  
んのせうみて扱々はらのたつ事じやご云所へふじ見  
出こな様はなせはいらしやれぬ、うゝたれぞまつて  
御ざる物であらう、たれをまつていませふ、おれが  
やうなにくまれ物じやもの、うゝこなた様はにくま  
れものでござるかいかにもにくまれ物もく、にん  
ほんあめが下でおれをにくまれ物はたつた一人も御  
ざらぬそのにくまれ物ををれがたつたひざりいとし  
いと手をこつてうちへいる、かゝる所に市のせくな  
いはかたなにて、小ゆびをきり出たまへば、たへまの  
介御らんじいそぎかたなをざりこれはだうした事で

御ざりまするかやうの事は、下々のする事で御ざります、ちまたしなましやんせ、すればわたくしのゆびをきりたがはしたのふみへますか、是はみなこなたのさしやる事じやなせなればあのながまくらはなせきらしやつた、いかにもあれはこな様にみどがめらりうご存、きりました、いかにもそれがしこのあいさつをきろうごおぼしめしての事よ、それならばそれぞはおくせられいでいや／＼さやうの事では御ざりませぬ、あまり御出なされぬ故まちなね、しせん、此まくらもいらぬご存、きりました、こな様のあまりつれなき故、みなこな様のさしやる事じやいかにもわたくしがこなた様がいとしさにきませぬ、いやいとしくば毎日も御出なさりうはづで御ざります、いやうけたまはればめうこうにちは、あごめのきわめが有ご承はりました、然らば其上でさだめし御ゑんへんのきはめもあらうご存、それ故かよひませぬ、いやこな様ばかりこひ事を御意なさるゝ、こな様ご、ちぎりましてたれごつまをかさねませふ、うゝしかれどもこなたには御母子様が御ざる、事にまゝしい中、其上からうごも有ば其ひやうじやう次第、其上おや

へのかう／＼ご申物よ、いや／＼かうした事にはをやも、からうも、いるものでは御ざんせぬ、ちごふし見ごふたりの中を御らうじませいご云所へ、しんの丞内よりかへらねばならぬごふりきり出るを、ふじみおいかけ出是しん承様をれがかへさぬ何がはらが立ます、うゝをれががてんのせまいごをもやるが、あのまくらにきりのごうの文所をなせつきやつた、あれはこな様のもんがつたわたくしの紋がふじ、ふじごつたごを一つにして、花鳥ごみせましたいや／＼あれはきりのごうじやをれごふたりの中をきりのごうじや、やいそこなぶしんぢう物、いや／＼あれはつたで御ざる、いや／＼きりのごうじや、ひめ君御らんじくない様あれ御らんなされませいうちやましい、こな様にはつよい御心じやわたくしは御かへりのあごではなきて計りいまする、うゝわたくしごてもなごりはをしう御ざるごなきければ、それはあまりきうに御ざります、ふじ見みてあのようにならない様には、御なきなさるゝにこな様もかはいかちごないてくされませい、いかにもわたくしはなく事はきらいおやのしにめにもなきはいたさぬ、くない御らんじ

やいしんのせう、なきとむなくとも、ぎりにもないてやりや、しんの丞うけ給り、南無八まん大ぼさつをよそせんじやうに出て、ゆみやとつてのはやわざは、いこくのはんくわい張良かんしんにもをこるまじ、たごは、大六天のまおうなりとも、とつてひきよせたいひどうちにとぞんずるそれがしなれども戀と云物はとなきけるが、もはや八ころのとりもなきわたり候へば、早々御かへりなされませい、いかにもわかれをおしみかへるさをわすれた、ふじ見あんないにし、もはや御かへりなさる事はなりませぬ、ばんの衆がつめました、こよひは御とまりなされませい、いかにもかたじけなうは御ざりますけれどもこよひかへらずばやしきがさうごういたしませふ、是へしのぶと云事はたれしつた物もないと云所へ、ふじ見かけ入まだならぬ事が御ざります御いしやのほつきやうが上られましたが何とした物であらうまづこのうはぎをきせまし、かくしをく所へ原きうわんをみまい申ます、お姫様の御き色もこん日はここのほか御きげんで御ざります、いかにもきしやくもよいほごにもはやくすりをのむまい、いや御みやくをうかい

その上でをくすりはごめませふ、みやくをみてはあ御姫様には、御くはいたいのみやくがうちます、ふじ見き、ほつきやうそさうを、をしやるな御姫様には殿様もないに、御くわいにんごは、いや此ほつきやうがそさうは申さぬ、そをたい、みやくは六みやくうちます、しんかんじんはいいめいもん是六つ、いとお姫様のは十二みやくうちますすればさうわんが見る所、ひがめではあるまい、うゝがつてんいたしました春は人のきが上へくわくとしてみやくがかずがおほ御ざりませふ、そあらなは、何で御ざります、是はこたつじやふじ見ごの是は何で御ざる、是はひおけでござります、うゝ女良衆のそばにはひをけやこたつはおかぬ物で御ざるわるすればひをけがこけてけがをするもので御ざるひおけや、こたつは御むやうになされませい、さるほごにうへつかたのこたつはあじなこたつで御ざります、こたつにはなが御ざります、うゝすればこたつのていのみやつたか、なるほご口のあるまで見ました、うゝちかごろはづかしい、さりながらおんみつにしてたむろばうれしかろう、なにがさて御姫様の事で御ざりますればたごは、命



でもさし上ますたいにくいはこたつで御ざります、此ほつきやうがしるまいかと存ましていまする、出ましてほつきやうたのむとあるならば、こたつが、かへりたきじぶんにはあののり物へのせまして、すつとかへしませふず又まいりたいと申ますじぶんにはのせましてすつとをしませふにたいにくいはこたつで御ざります、くない出、ほつきやうどのちかごろはづかしいていを御めにかけました、こたつが物を申ます、なにござうわんどのおれをみしらしやつたか、いかにもみしりました、おまへはくない様では御ざりませぬか、いかにもさやうで御ざる、何がさて御心やすうおぼしめしませい、たいにくいひをけで御ざります、しんの丞出、お前はついと御ちかづきでは御ざりませぬども、わかいものゝ事で御ざりますほごに頼み存ます、うゝひをけ出られまして御ざります何とぞして、かへしてくだされ候らはゝかたじけなふ御ざります、いかにものりものにのりて御かへりなされませいと、兩人かへるあとにて御ひめ様に申上ますぎが御ざります、殿様御はてなされますきざみそれがしを召よせられ、三年もすぎであるな

らば此箱をあね君たへまの介様に、相はたしますようにと御ざりました則御よつきわめの箱で御ざります、何といやるぞ大殿様よりあづかりをきいませれがしにわたするとあるいかにもうけとろう、けれども此箱をめぐうごうちにち、もつていづるならば母様のいまゝでかくしをきたとをぼしめそうもはづかしいほごに、此はこはからうのしやうげんにわたしたても、きうわん承りさてくふかき御しあんいかにもしやうげんにあいわたしませふ、もはやおいごま申上ませふ、いかにもいまのこたつ様の事をたのむとをくをさしていり給ふ、きうわんはからうのしやうげんはをくにつめてあるげなしばらくまちいる所へ、しやうげん出、いやきうわん御出なされたか、ただいまやしきへかへりまするがこなたへ御姫様より御つかいが御ざる、なにわたくしに御姫様よりの御こゝ上の御つかいと御ざるか、しからばあたりに人もなきあいだ是にてうけ給はらう、べつきでは御ざりませぬ、此はこは大殿様おはてなされしせつわたくしにおゝせられ候は、三年もすぎたらば、此はこをたへまの介様へ相わたし申様にと御ざ候、則御あごめ

のはこにて候故、御ひめ様へ指上候へば、御姫様には此はこを今までかくしをきたと、母様のおぼし召もはづかしいほごにからうしやうげんに相わたせとの御つかいで御ざります、うゝ御ひめ様の仰せらるゝはあつばれな御しよぞんじやが、何ともがてんがまいらぬはかすならないでもかろうしやくをかふむりし、某にはじきに仰せわたされいで、そちにあづけをきなさるゝ段一ゑんがてんがまいらぬ、しかしながらまづうけとりませうと云所へおくよりかち川市三郎かけ出めいやうな事じや今まであつたと思ふたがはてふしぎな事じやこそでをふるいたづねまわる兩人みつは是市三郎何ををとしやつた、いや物ををこしましたふみかいかにもふみで御ざります、ひろわしやつたらくだされませい、きうわんふところよりかみをとり出しうはがきは何と、はてくだされませいごせけば、いや是ははなかむかみじや、はてきのごくじや、はてなんぎな、まづしやゑんよりいでゝつぎのまへゆきたればこしやうの吉十良殿がついとをりやつて、をれがをびをしなをしてはあ、あればよいがとをくへかけ入、しやうげんみてきうわんいまのは

何で御ざる、さればがてんがまいらぬ、わたくしはがてんいたした、あれはあくしやうで御ざる、すれば戀か、いかにも戀で御ざるうゝきのふも、しやゑんさきをををつたれば、喜三郎が市三郎の手をとつて、いたによつてそこをば、きをどうして、とをつたれば是ほつきやうとことばをかけられたによつて、何でをじやると云たれば、御むしんながら市三郎に狀をやつてくれと云たによつて、狀をやつたれば其へんじがいかい事あつたが、其あとはしらぬ、しやうげんきゝおてまへが狀をとりついだか、いかにもそのたうりじや、うゝすれば侍二人ははらじや此ぼうずは、あほうばらいかしぱりくびじや、きうわんふるいわなゝく、しやうげんみて、ぼうずおれを何ものじやと、おもふてはゆふたぞ御家ではかたうしをきをする、某をよくゝたわけにしてはゆふたぞ、きうわんきゝ、なにときかしやるぞ今のゆめにみたいと云事じや、うゝゆめならばゆめのやうにはなしたがよいに、さればそちにまことにきかしやるによつてそれでまことにはなしましたそれならばよいが、今のは物があると、わるうゆふている所へ、市三郎出、はてあつて

うれしい、二人は唯わるうゆへはなにこやゝみに  
さわります、いやこなたのみゝにさはる事は申さぬ、  
それでもみゝにさはります、なせあて事をいはしや  
る、うゝみゝにさはればされどもで御ざる、こなたは  
たいさきのふみをだいにかけてひろはしやれ、う  
うはてきやうこつな人がある物じや、そのふみは是  
で御ざる、はて人に物をおもはすような、たとへきや  
うだひのどころへゆく状なりども、先われにみせた  
がよい、なにもつゝむまいとゆふたではないかと、状  
のうはがきをよみ、小わたしやうげん様まいる、かぢ  
川市三郎より、是がなにじや、たうからゆふたがよい  
にどふどころへいれるを、きうわんみてやいからう  
ぬすびとよと、あふぎでうちこけまはりてわらへば、  
ゆるせゝと手をあはせわびれば、いやいまのふみ  
をそこでよふでみや、よみやらぬとたごんをする、い  
かにもかきてをそばにおいてよむもあたらしい、そ  
れならばよもふと、ひらきよむに、なにゝ三とせい  
せんよりそい参らせ候事ひとへにふかき御ゑん、た  
だなに事も、ゆめのよと存御なつかしく存たてまつ  
り候、さりながら此たびあいさつを御きりくださる

べく候、われらはけふはゝ、あすはゝ、たゞ物ご  
とあぢきなくくらしたるゝ、小わたしやうげ  
ん様まいる、かぢ川市三郎、是はなにじや、あらたま  
つた、何がめにみへてあいさつをきうふ、わけもない  
事計り、うゝすればこれほごにゆふてもかわゆふ御  
ざるか、うゝきうわんごのまへはづかしけれども身  
にかへてもごをもふている、それほごにをもふてく  
ださるならばはなしませふ、本此御家はふたつで御  
ざるぞやそれ故あにの大しんとてもゆだんは、させ  
らるなどゆふ事で御ざる、いかにもがてんしたそれ  
ならば先やうきへかへろう、きうわんはをくへつめ  
ます、二人はうちつれかへる、

## 第二

扱よつぎの日にもなりぬれば、かちうのこらずじや  
うらくゐんへ相つむる、二人の姫君は女良衆にいざ  
なはれ、さくらゑだをかざしつゝ、さもをもしろう出  
給ふ、かゝる所へ、小わたしやうげんは、かぢ川市三  
郎に御あどめのはこをもたせ、おのゝ御まへにさ  
しあぐる、じやうらくゐんは御らんじて、何と此はこ



はしやうげんのこんにちのちそうにぢさんせられたは、すぎちうでもなし、をりでもなし、何で御ざらう、しやうげんうけ給はり、いや今日御あごめ定の御はこで御さります、なにこ此箱があごめ定る箱か、いかさまにもうへには是非と云もんじがすはり、御ふうも殿の御はんじやが、しからばげんざいのをとゝなればそれがしにあづけなさりやう物が、しやうげんに御あづけなさりうはがてんがいかぬ、うゝそれがしはしゆつけといゝ、ながそでといゝ、それゆへしやうげんに御あづけなされた物よ、いかにも此は家のけいづといゝ、かんじやうたいしき御家じやが、二人ながら女子の事なれば、此はこしだいであごめがさだまると云物じや、いそいでしやうげんふうをきりてあけてみや、はあなにこ大しんごのあそばせませい、いや殿のおめがねをもつておあづけなされたいそいで御ひらきなされ、しからばさやういたしませうかど、ふうをきりひらけば中にはきんぎんのひやうたん二つ出る、きんのひやうたんは、あねたへまの介様ぎんのひやうたんはいもごまつらの介様へご御ざりますと、しばらくかんがへはあ、おめでたう御ざ

ります、御よはあねたまへの介様の御もちなされます、侍衆御よろこびなされませひ、はあおめでたう御ざります、大しんみてやあ、しやうげんごのはこのうちひやうたんがふたつあるをみて、御よはあねたまへの介さまじやとは身は一ふんがてんがまいらぬ、やあしやうげんごの、うゝあらほごしました事をすでにこのうへにも是非と云もんじがすはりましたすればせはこんにち、ひはきのふすれば今日御よがきはまつたと云物、又せはいちひはつぎで御ざるすなはちせはこれとよむ、すればたへま様の御よにきはまりました、大しんきゝ人ほご口がしこひ物はない、あかいを、しろい、白きをくろいともいへばいはれる物じや、みなこなたのは一ずといふ物じや、いやいちづといふ事は、御ざらぬ、たへまの介様ご、御みだい様ごはまゝしいなかで御ざる、いやはやとかく物は申さぬがよふ御ざると、たがいにせりあふじやうらくゐん御らんじ、いやとかくあのひやうたんのなかでしれるであらう市三郎、あのひやうたんのなかをみよ、市三郎だよりほかへ出し、ぎんのひやうたんはすはります、きんのひやうたんはすはり

ませぬ、かち川大しんみて、おゝおめでたい〜御よ  
はいもごまつらの介様に、きわまりました、ぎんのひ  
やうたんはたちましたすれば御家がたちました、い  
よいよすはりました、又きんのひやうたんはこけま  
すは御いへがこけましたのいやたをれましたとある  
は、御家はまつら様にきわまりました、しやうげんき  
さいや〜申てもきんは七ほうのたからそのうへそ  
うになをしてみれば、金は人の主とよむ、水はさかさ  
まにながれはいたさぬ、ちよりあめはふらねば天よ  
りさうもくもせうせず、天よりあめがふればちより  
さうもくはせうする、そのもごみだれてすへのをさ  
まるものはあらじ御よはたへま様に極りましたと、  
あらそふ、みだい御らんじ大しんしやうげんせりよ  
ふ事はいらぬ、たへまはあねじやによつて、たへまに  
よはきはまるしやうらくるん様あねたへまの介様に  
よをゆづりとふ御ざりますが、なにこいたしませう、  
はてそれはしんじつで御ざりますか、みなこたな御  
一人のきをかねとかくと申す、此うへは大しんし  
やうげん、たがいにいしゆをのこさずたがいにだん  
こをしめしあはしやなにがさて、しやうげんどのさ

きはごは、いらざる事を申、りよぐはいをいたしまし  
た、是はいたみいりました御あいさつで御ざるさて  
たまへの介けふよりはそちはくにをしやるほごに  
そうこゝろや、いやわたくしにご御ざりますはかた  
じけなふ御ざりますが、いもごまつらの介へ御ゆづ  
りくだされましたらかたじけのふ御ざりませふまつ  
らきこし召、いやおまへの、御つぎなされませればわ  
たくしとても、をなじことと御ざります、みだいきゝ  
給ひのふたへまの介けふよりは、くにのかみなれば、  
上ぎへあげませふこちらへおじや、いや御もつたい  
ないぎで御ざります、しやうげんみて、いやみだい様  
しだいになされませい、おまへのためには、おやご様  
おまへは御なづけばかり、万事ともにみだい様の御  
さばきなされませひでかなひませぬ、たごひにしを  
東ひがしを西と御意なされても、御意しだいによ  
う御ざりますこちらへ御なをりなされませひと、なを  
し、とてもものに此ひやうたんにかとくさうてんし  
ゆと御ざりますが御きはめのおさかづきをなされま  
したらよふ御ざいませふ、いかにもたまへの介、ごり  
あげこちへたも、是は御もつたないぎで御ざりま

すおまへはをち様からいたゞきたう御ざります、まつらの介きゝ給ひ、いかにもさやうがよふ御ざりませふ、はて、こゝな子はなにをしりやつて、わがみはうちへはいりてほうらいのこしらへをしや、ご、むりにうちへつぼねつれゆき、扱たへまさかづきをしや、いやおまへよりくだされませい、しやうげんみてやつぱりそれみだい様しだいになされませい、いかにもと、のまんし給ふとき、市三郎さかづきをうちをとす、大しんみてすいさんなやつと、手うちにせんと、こんでかゝる、しやうげんをしごめまづまち給へ、御尤どもくで御ざる、先待たまへ、さて市三郎、何としたそさうな事じや、ごふしたぶてうほうじや、いやけがで御ざります、いやくけがごいふはちよつとした事がけがごいふ物じや、御姫様の御うけなされたさかづきをうちをとしけがごはいはれまい、いかにも御ひめ様のおうけなされたさかづきを、みだいに御さしなさるごゆふ事はあまりごいへば、ほうになき事じやごそのいちづに存それゆへふごけがをいたしました、うゝそれならば御ことはりを申さうと、扱たゞいまの市三郎がぶてうほうは、おひめ様よ

りおさかづきをみだい様へ上らるゝはあまりご申せはほうになき事と、存候いちづに存それゆへぶてうほうご申ます、たゞ物はいわひから御家はかすおうを御なりなされて、くわつくわごいたすがやう御ざります、たゞ物にはおにご申事が御ざります、市三郎が只今のはごくみをいたした心で御ざいますほごにあのおさかづきで御めでたう、あがりませひごゆふ、姫君ごりあげのまんごし給ふを市三郎さかづきをとり、すぐにのみはらをきりしする、しやうげん大きにをごろき、やれ市三郎くごよばわる、たれじや、しやうげんじやが、まづ刀をはなせ、いやしなぬやうにはきりませぬ、のふ御ひめ様何事も此しやうげんを、おたのみなされませいや、もはやさらばもけすがごごくにしゝにけり、しやうげんみて、なむさんぼうと八方にめをくばり先ひめ君をうしろへかこひ、やい市三郎そのほうはあつぱれ、おしゆうの御やくにはたつたよな、むかしもしやかのいごにだいは有、こそうの子にしゆん有と申、誠にふびんなしにをしたよな、あゝさてみなあく人がしわざじや、やいそこなあく人ごもようもたくんではころしたな、此御姫



様にはごくしゆはあげぬ、そこなあくにんごもら、おのれらよつてみよかたはじよりなでぎりにする、しやうらくゐんきゝ、しやうげんごく酒なればおのれをのがさぬ、そのさけはたれがもつてきたさあゆつてみよ、しやうげんきゝ、はあ誠にせつたいせつめい、一ごのふちんこゝなりと、はがみをなして控けるが、いしやのぎうわんのふしやうげんくちおしい、おれとてもだまされた、そのさけはじやうらくゐんより出た酒じや、何此さけがじやうらくゐんよりでたか、それならば先お姫様をあづくる、さていづれもの前へでゝ、さきほごはちかごろぶてうほうを申しました、じやうらくゐん様より出ました御酒なれば、何しにごく酒で御ざりませふ、申てもたへま様はげんざいのめいごなり然らばなにしにごくをあたへなさう、此市三郎はらんきいたしましたさうに御ざります、此うへはいくたびもめでたうおさかづきをいただきますふ、先じやうらくゐん様あがりませい、いやおれはのまぬ、然らばみだい様あがりませい、おれはげこじや、大しんごのまいりませい、おれはきんしゆじや、はあそれならばさいせんごくしゆと申しました、

あやまりが御ざりますほごに、わたくしが一つたべませう、じやうらくゐんみて、しやうげんのみやるか、わたくしがたべましたらおまへもあがりますか、いかにもせんばいでものもふ、さあおれがしやくをしやうごよる所を、とつてふせ、やいぼうず此ようすをまつすぐにかたれ、さなくば只今さしころす刀をむねにあてければ、のふ命をたすけてたもはくじやうせふ、あの大しんがゆふには此事しごふせたならば我をげんごくさし、まつらひめごふうふにして此くにをさめふといふた、うゝそれをこなたにはしやうゐんさせられたか、いかにもふうわりごのつた、うゝぼうずのやくはしやくそんのをゝせにはたごひもゝをきりても人をたすくるとのおしへじやなんぞ人をたすくる事はさておき、げんざいのめいをころすがこれがぼうずのやくか、大しんみてやいこのくにをおうりようせんとはおれがたくんだ、うゝ此ぼうずはずんぐくにしてもあかぬけれども一つはくじやうをする又は殿のかたはれなれば命はたすくると、とつてなげ大せいをおつちらし先ひごまづ直のきけり、扱いもごまつらの姫はこしもご下やしきに

おはします、かゝる所へこさはふみ箱もちかへりしが、大原二郎左衛門あそをしたいつけうちのてい  
をみる、こさはをさしごせんへ出、かへりました今日  
はしゆびがよふござりまして御へんじまでとつて  
まいりました、御うれしう御ざりませう、いかにもば  
んに御いでなさりうとあるとかいみにむかいこしも  
とかみをなでいる、二郎左衛門しばらくもんぐわい  
にたゝすみ刀にてへいきりぬき内へいり、いこうな  
こそでをふどころへいれるば、姫君のかゝみにうつ  
る姫君の給ふはみなこゝはさとはなれた所じや程に  
ようじんをしたがよいぞ、はて御姫様の何をつがも  
ない事を御意なさるゝ、たとへぬす人がはいればと  
て、女でこそ御ざりませふけれ、長刀をもつて首をち  
よつきりごきりませふ、おゝそれがよいぞ、二郎左衛  
門おごろき、きる物をかへてにげんとするが、又立か  
へりごらんとし、おもはずひめ君のかをがうつるを  
みてひたすらそばへより姫君は、こゑをたてなとか  
がみををしへ給へば、四人のかをが鏡にうつるちか  
づきより四人かををみあわせ、わつとゆうてちに  
けり、姫君こゑをたてなやいそこな物、そちは此やし

きでみなれぬ者じやがたれじや、はあわたくしはぬ  
す人で御ざります、いやゝぬす人ではあるまい、  
ぬす人がぬすびとゆふはづがない、まつすぐにな  
のれ御意で御ざりますほごに申ませう、わたくしは  
大はら二郎右衛門と申ますらう人で御ざりますがそ  
のいにしへはやせ馬にもこしかけ、さびやりの一す  
じももたしましたがながゝらう人いたしました故  
おはをからしました、さきほご御けらいの女良衆が  
御かへりのときうちのていを見ますれば、何かけつ  
こうなきる物を見まして、ふつとでけごゝろでいた  
しました、いかにもはらからのぬす人では御ざりま  
せぬが、かやうにあらはれました故はのがれやう御  
ざりませぬいかやうともおこゝろまかせになされま  
せい、うゝいかにもらう人をしたならばこうあるで  
あらう小さよそれをやりや、是をやりますればぬす  
人においで御ざりますと、二郎右衛門見てなみだを  
ながしてゝいかやうともなさりう物がかへつて  
御ほうしをくださいされ、しやうぐせゝわすれはいた  
さぬ、わたくしふせいの物がきやらをもちましたと  
てたがまことにもいたしますまい、たゞもごします、

いや是はかねで御ざる、はめかねで御ざいませうともかへします、いやそれでは御姫様の御心がむになります、ひらにいたゞかしやれ、それならばいたゞきませふ、扱々めうがもなきしあせごなみだがす、然る所へ伴左衛門おもてをたゞき、はあくない様が御出なされましたが此人をなにぞせふ、先うちへはいりや、扱をもてをあげこしもごきもをつぶし、ちがいましたと、かをゝみれば、伴左衛門にてはてきよろきよろごなんで御ざる、おれが此やしきへこまい物がきたやうにはてさて、扱御姫様には御きしやくがよさそふに御ざります、御やしきへ御かへりなされませい、いやおれはやしきへはかへらぬ、うゝ此たびのぎてさやう御意なさるゝごぞんじます、此たびのぎは一家中べつしてそれがしがたくみました、うゝなにこいやる此たびのはそちがたくみか、それは又だうぞわけがあらう、いかにもこれは戀からで御ざります、はてそれはおもしろい、だうぞはなしやいや、はづかしふてはなされませぬ、いやちつともだいいじないそれならはなませうが此ようにあいをおきましてはなされませぬ、それならこゝへおじや、

まいりませふか、こしもと衆御意がおもふ御ざるによつてまいりますと、姫君のそばへより扱たれが、わたくしが、おれにほれました、何とにくう御ざりますまい、なにのにくからうぞとせなかを叩き、扱ごうぞ、さればあね君をころし此くにをおうりうせんとたくみました、ひめ君きゝ給ひ伴左衛門をつきたをしやいそこなちくせうめ、おのれはやうもおれにほれたな、おのれはみせしめにもせふけれども、戀どゆいおるほごに、いのちはゆるするそこなちくせうめ、伴左衛門はらをたて二人のこしもとをこつておさへ姫君をすでにさしころさんとする所へ二郎右衛門とんでいで、伴左衛門をこつてなげ人々をたすくる伴左衛門みて、うぬめはなにやつじや、名はゆはぬ、いやなのれ、ゆふなとおつしやる、扱はおのれはしのび男じやな、いやさすりじや、そこなあなからかごぬけしたごさんぐにきりあい、伴左衛門をおつちらし、小さは手をおい、そのひまに二郎左衛門はきり物とりわがやにかへり、

### 第三



かゝる所へ一學早之せうきたり、小さよが手をおふたをみてたづねければ伴左衛門が來り、お姫様をうばいとりかへりたりと、かたるそれなれば先そちをつれゆき、ひめのあごをたづねんと出けるが、くらはくらし道みへず、姫君はまよいゆき給ふが、はかはらのふる井のなかへおち給ふ、一學あごをしたふてゆき給ふが是もをなじくをち給い、はやのせうあごよりきたりさてもくらしい事と、たづねかねしが、かたはらより女のこゑとしてそこにいざが御ざるはまらしやるな、うゝごこじやおしへてたもと、手をのばし手をとり、とつてをさへ先なはをかけてそばなる松にゆいつけ、扱一學くごよばわれはこゝにいます、一かくあげてください、はてがてんゆかぬとやうやうたづねさあがれ、いやまだしたに人がござるしんだそうに御ざるが、まづこれからあげませう、いかにもご先ひきあげさて一かく上りはやのせうはむかうのひをとりゆきみればまつらひめなり、兩人なげきかなしみ、いやころしてをしばりておいたと云、それをつれて御ざれ、いかにもごかの女の所へゆき、やいそこなたぬきめ、をのれせうたいをあらはせ、さ

なくばたゞいまさしころす、いやさやうのものでは御ざりませぬ、さてもけつねの子はつらじろと、さてあれはたがはめたゆはねばおのれをさしころす、はあ御侍はいこうせかしやますとみへました、またあいななき事なれば、まづくすりをしんせて御ろうじませい、はあくすりはなし見ごろしにする事のかなしやとなげく、これにくすりが御ざります、わたくしがごくをいたしてしんせませふ、それならばをくすりをとりのませば、きがつきその禮に早のせう、はをりをもち、ちかごろで御ざりますすれど是をしんせます、さてくかたじけのふ御ざります、かさねてゆるりと御禮申ませふと、かへるさて二郎左衛門は女ぼうを、ひつたて出己れにくいやつ、此はをりをもちかたみとおつしやるとは、やいふぎ物め、うゝ此はをりにはゆいわけが御ざるが、さてあのきりものはどこからとつて御ざつた、何を、かみ様二郎左衛門殿は手かけぐるいをしやりますと、たがいにせりあいるる所へ早之せうはまつら姫をつれ來り、先此人をあづくるといへば次郎左衛門みてこそでをかづき、かくれるを、しうとめみて、おかたあれ手かけめ

がきたわいの、女ぼう出いや御女ろう様いや御内ぎ様是はなにぞして御出なされましたさて此はをり故めいはくをいたしますゆいはけをしてくだされませいいいかにもこゝろへました、さて次郎左衛門をみ付いやぬす人ごのかこれへ、伴右衛門がまいりますほごにたのみます、こゝろへましたといふ所へ、伴左衛門來り人々わたしあい、伴左衛門を、うちおゝせよろこび内へぞいりにける、さてこゝにせんごうのでん吉は、二人のびくにをふねにのせ、さもおもしろくこなたをうたひけるが、いやゝそちをこゝへあげる事はならぬほごに、むかふな吉助が所へ上てやすまそと、先米つかい錢をとつてこうとかへる、然る所へでん吉がわか衆來い、いろゝせりふある事すみかへり、かゝる所へでん吉女房は、こま商人になり是もおもしろく色しなをこゑをはかりにうりかはばたへ出、こちのふねがきてあると、ふねにのる所へでん吉は米せにふごんをもちきたり、三人色々とせりふ有しが、でん吉は身をなげる、女ほうびくになげきかなしむ、でん吉ゆうれいになり出、あらむねがくるしい一ぺんのねむぶつも申てたも又びくにの事もたのむ

もはやかへる女ぼうみてなげけば、おれはじやうごうでないによつていきふごおもへばいきる、それならいきてくだされそんならはいきやうごふねへこびのる、又むかふより、小わたしやうげんはたへまの介、まつらの介、一學二郎左衛門ごもない、出しが、西の方よりかぢ川大しん侍ごもをひきつれきたりふねをからんと申せしが、しやうげん、はやくもみつせせんごうにかくとしらせふねにのせ、うちかへし川の中にてたゝかいついかぢ川大しんをうちおゝせ、残るさむらいごももことごとくうちおゝせ、めでたくほんごくさして下り給ふ、人々の心のうちせんしうばんせいごさいみすゝみてかへり給ふ、

#### 西ノ霜月吉祥日

女  
筆今川假名手本

付り身請は間夫この  
中あき誓紙の條々

上 あふ夜の枕 よりそふてふしみの里

中 たびねの枕 ふりつけてすいかさうげ

下 へいさんの枕 まきそめてさなへの祝ひ

并三浦ノ和田左衛門めいごの置みやげ

一 色道しきどうを知しらずして女郎じやうろうにふられ床どこで勝利しやうりを得えざる

ことごと

一 浮氣うわきげんじやう潜上このを好み無益むえきの金かねをたゝき上あがるしゆもく

町まちの色いろを樂たのしむ事

一 少氣せうきの輩やうばい嶋原しまはら狂くるひを遂とげず磯いそせゝりにて身代令しんだいほう

一 没落らくせしむるする事

一 大粹たいしゆいの輩やうばいよし原通はらがしよひに末社まつしやの手てくだを見みながら

一 そこらを致ちかし免事めんじ

一 三ヶさん津色ついろ里諸ざしよ分鏡ぶんきやう好色へきしよ壁書へきしよ如件

一 右五卷來る六月朔日より本出し申候

八もんじや八左衛門

- 一 うの花うたのすけ
- 一 おくあをばのまへ
- 一 つばね高はし
- 一 娘おゆり
- 一 こしもご小ざらし
- 一 こしもごしのぶ
- 一 こしもごおかる
- 一 七川兵部左衛門
- 一 弟外記左衛門
- 一 ふぢ岡彌次兵衛
- 一 下女おたけ
- 一 同おたま
- 一 同おなつ
- 一 下女おかめ
- 一 中間谷右衛門
- 一 中間定事
- 一 中間九郎介
- 一 中間角藏
- 一 うかゑ八郎左衛門

- 立役村山平右衛門
- 若山さよの介
- 玉川千の丞
- 大夫市村玉柏
- 村上初十郎
- 浅田かほる
- 山本春の丞
- よし澤左源次
- 敵役若林四郎右衛門
- 立役名留川源左衛門
- 市川だん右衛門
- 大夫神崎かりう
- 松本三五
- 山本松重
- 竹中吉十郎
- 藤田九八郎
- 浅田善右衛門
- 大谷彦三郎
- 松本友十郎
- 立役山下京右衛門



一三わら九郎左衛門

村山長九郎

一あげや八わたや次郎介

小の川宇□□

一けいせいみな川

大夫山本かもん

一おろせ庄九郎

立役小の川宇源次

一はたごや十兵衛

青木源□□

一出女おかや

花川さくや

一同 おまつ

霧波□□

一同 おさん

松本半彌

一同 おいち

富永半左衛門

一びくにんていさん

霧波おこの介

一同 せいじゆ

若林万太夫

一同 けいしゆん

松嶋半七

一すゝか半太左衛門

實惡藤川武左衛門

一女房おたつ

霧波たきゑ

一こしもとおさら

中村左門

一同 おきわ

筒井もんど

一こしもとおざん

若山こでん

一下女おまん

わかい久四郎

一ざうり取小六

筒井万十郎

一みな川いもおせん  
一こつまの作太夫

霧波民之介  
道外金子吉左衛門

## 若後家卯の花重

しゆもくにこ  
まる今のせみ

大當り

## 第一

あをばの前はつばね高橋こしもと残らず鉢巻し、長刀かいこみかひくしく立出れば、たかはしは扱養ひ君さまへ申上ます、此たちの一万丁の御知行所、大殿様の御はてなされたれば、家老共が我儘致しお前をうしなはんとしたくみゆへ、私がお供申立のきまする、姫聞き嬉しく、いざ立のかんこの玉ふところへ、家老七川兵部左衛門同弟外記左衛門はせ來れば、高はしはじめこしもと共長刀かまへ近付ねば、是は何とも合點參らぬ、承ればお姫様に、屋敷を御立のきなさるゝとある、我々にも御知せなく是はどう致した義にて候ぞ、姫聞召やい尋ぬるに及ばぬ、汝等兄弟が心を合せ、みづからをうしない國をこらんとある企と聞きそれゆへ國を立のく、外記左衛門聞き、是は思ひもよらぬ事を承る先やうすを仰せ聞けられませ、姫聞召されば大殿御臨終の三日前にそち兄弟を召て仰せらるゝは、姫一人の事なれば和泉國大と

りにござる將監様の子息、卯の花うたの介様をよび迎へ、夫婦となして家をおさめよこの御遺言、それに今に入てくれぬはそちたちが逆心ゆへでないか、外記左衛門聞き其儀は百日の御ごふらひ過ると、拙者が和泉へ參り委細を申入たれば、成程、家の事うたの介様をつかはさふと有て、御契約を申販りたれども、此うたの介様には伏見の撞木町の傾城、みな川と深ういひかはし外の女房は持ぬといふて、傾城町に入びたつてござる、此事が親子へ聞え、沙汰の限りなと有て勘當なされ、今では御行衛がしれませぬ、それゆへはうく尋ねさせまする、□□聞きいやそうはいはれまい、うたの介様は、親殿の御勘當うけ、そち達を頼みに夕部屋敷へ御越しなされたげな、そなたがむごう突出し、寄せ付ぬと□□□□見付たお侍があつて聞知てゐるぞ、む、然らば其者に合したまへ、おくそれくといへば、すばつこう成る男一腰をさし立出、やあ外記左衛門、夕部そちが屋敷へ行た□□□ようつれなふ追出したな、身はうたの介じや、兵部左衛門聞き、私は夢々存じませぬごゆるされませ、外記聞き其儀に就てはや申譯がござりまする□□□其儘

取て蹈み付れば、兵部たかはし是はいかにご取まはせば、外記は是兄じや人、内々某此家に望をかくる、夜前此のうたの介が屋敷へ來りし□□□身が此家をおさめんと思ふての、さあごいつらもよつたらば一々くびを取ぞ兵部聞き、すれば實正逆心を思ひ立たか、おんでもないこと、扱は其心底□□□某も其思ひ立で高はしご申合せ 姫を殺し、此國をしてやる合點で、其うたの介といふは藤岡彌次兵衛といふ浪人者を、うたの介にといつてそちに合したは、つねづね□□□□たゝすかたい者なれば承引せまい、汝が國にあつては望が遂げられぬゆへ、國を追拂ふための企じや、さては左様か先姫を擲めふと、青葉の前其外こしもと□□□□繩をかくれば、姫はるゝ口惜や高はしを乳母と思ひ、かへつてだまされたか、外記打笑ひ、何を悔みてもかなはぬぞ、扱兄貴聞えぬはおれが國を取と、こなたへ半分□□□□じやに、こなたはおれに隠してよう此企をなされた、おゝそれはそちが心を疑ふてじや、こらへてくれよ、いやこらへぬゝゝござんゝにたゝけば、あゝ痛いゝゝ、是高はし殿、こなたの娘□□と夫婦の契約あれば、おれは聲じ

やに、同じやうに隠したまふは怨みに思ふござんざんにたゝけば、あゝいたやゝゝ、兵部はさあ一時も早う先姫が首を討て、外記聞き、是は思案ごころじや、せきますまい、某が姫の首を討ばこなた方の望はしてやるが、主を討たば悪人じやと私を惡う申さう、姫君を討ち悪人といはれふより、こなた方の首を切り、善人といはれた方がましじやと、姫こしもこの繩を一々切はごけば、兵部高はし興さまし、扱はおのれは一所じやといふてたばかつて身が悪事を聞たよな、おゝよい推氣の付やうがおそい、夜前あの男がうたの介殿と云て參つた、捕へて詮議せんと思ひしが、いやいや戻したらば企のやうす顯れんと思ひ助けたれば、てうご身が推量の通り是へ出た、扱こそとわざと悪人になり、そち達が企みを見拔たは、なんごあちでござらふがの、兵部腹立物ないはせそ打取れと、侍共討てかゝれば、心得たりとこしもと其槍突きかけ戦ふを、外記は大勢に割て入りさんゝに切立れば、皆叶はじと逃げ去れば、兎角私屋敷へ御供申さんと青葉姫を先に立、我家　さして飯りける、誰身の上も戀なれや、うかる八郎左衛門はお百合をつれ、伏見街道



を通れば、撞木町の壁越に、三味線の音きこゆ、さて  
そちを連れて走りたれば、定めて追手かゝらふ、おれ  
が名をかへて云たがよい、そちゆへうたゝと歩け  
ば、今からおれが名をうたと云たがよい、心得ました  
あゝきつう腹が痛ふござんす、まだ七月が産月なれ  
ば、けがつかふ筈もないがあの壁のきわで暫し休ん  
だらなをらふと寐さし、きる物裾へかけ、提灯の蠟燭  
の心きるとて火を消し、是は暗い何とせふぞといふ  
ところへ、傾城みながはへいの上へ出て小聲にて、な  
ふそこなはうた様じやないか、八郎左衛門替名を呼  
ぶと心得、おゝうたじや、そんなら下して下さんせ、き  
つうづゝない足さし出してゐますといへば、八郎左  
衛門はお百合が胎内の子を下してくれといふと心  
得、はてやくたいもないおろす子はならぬ、足引込め  
て辛抱しや、お百合目覺し何をいはしやんす、今物云  
たはそちでないか、皆川はそこに女の聲がするが、其  
女をつれてのかしやるかへ、おれを下すまいといは  
しやるの、こなたとは二世まで變るまいと起請取か  
はした、今取て來てこなたなんとするぞ、待ていやし  
やれど、壁の下へ降るところへ、卯の花うたの介手提

灯さげ來る、所へ皆川又堀の上へ出、是起請取て來た  
と堀より飛び下り、こなたは私を捨てよう外の女を  
つれてのかしやるぞ、怨みさまゝいへば、迷惑な口  
も腐れそのやうなことはいひはせぬ、八郎左衛門是  
を聞き、もしゝりやうげ違ひでござります、此女房  
共は懷胎でござる壁ぎわに寐させ置ました所に、お  
ろしてくれゝとあるゆへ、女房が子をおろしてく  
れど申と心得、おろす事はならぬと申たは私でござ  
る、みな川聞き、こなた様の名は何と申ます、只今はう  
たと申ます、それでじや扱はこなた様のお名もうたか、  
私はうたの介と申此女郎といひかはして罷あり、是  
みな川今宵此裏の壁のもごまで來いと、文をおとし  
やつたがどうした事ぞ、されば此中わしを買ひます  
江戸のみわら九郎左衛門と申は、いかい粹な客で親  
方と談合し、身請金をがらりに渡し、明日夜があくる  
とわしをつれ、直に是より江戸へ立ます、こなた様には  
なれ江戸へゆく事はいやじや、連て走つて下さんせ、  
はてあたりにもあるにご口とめれば、八郎左衛門  
は是お百合、そちが嫁入する晩に裏門より出、どうぞ  
思案してくれいとあるゆへ、連れて走りたればこそ

今めうとじやと一所に連るじやないか、急な場は走るにしくはない、誰しもかやうな事のあるまい物でない、追手が来て問へばとて身も侍じや物、それを有やうにはいはぬと聞がしのやうに申せば、うたの介はお志忝けない、さあ走るにしくはないと皆川をつれ立しが、走る覺悟をせなんだゆゑ、路銀の用意がない、そなたは持てゐるや、いや守りならで何も持ませぬといふを、八左衛門金五兩紙に包み投げはり、誰ぞ拾ひゆかふまでといへば、うたの介は押頂き、御志死ても忘れぬ、はて禮いふ手間で早う立のかれよ、忝ないと駈出しが、向より提灯あまた人あしが見ゆる、九郎左衛門□□追手と見えし、南無三最早是までといへば、八郎左衛門はこれく氣遣ひせられな、先此番小屋へ忍び玉へ、うたの介聞きいやそれではなたの御身の難儀に成、いや其時は□□□働き玉へと、番小屋へ兩人に入る、お百合向ふを見て、いやあの提灯の紋はわしが屋敷の紋じや、こちらへの討手さふなといへば、八郎左衛門は南無三ほうといへばうたの介出こゝは私にお任せなされと、兩人共に番小屋へ入其身一人立てゐる所へ、藤岡彌次兵衛侍共に提

灯とぼさせ駈け來り、舟の上り場で尋ねたれば、た□□□申た、吟味せよとうたの介を見付こなたへ尋ねたいは、若い侍が振袖の女を連れ此道を通りませなんだか、いや左様な人は見ませぬ、供の侍やあ□□□づゝみがござりますと廣げて見て、是はお百合様の小袖じや、是があるからは此邊を詮議せよ、其番小屋をさがせと大勢立寄るを、うたの介おさへ□□□□□左様な人はござらぬ、私が證據に立升る、むゝ扱はお百合様をつれ立のいた、うかる八郎左衛門といふはそちじや、それ繩をかけよ侍共かけよるを、ごこへ寄たら首がないぞ、せひもない有やうに申さふ、某は去人の娘と今宵番家で忍び合ひます、其娘に合せとむないと存じ、番小家を見せまいと申事じや、疑の上は其□□□合せ申さふが、そなたが尋ぬる女郎でないときには何と致されふぞ、はてお百合さまでないと身が首をやる、むゝ其お百合殿といふ女郎のお顔は見知てか、主をしらいで尋ねに來れふか、尤々合せ申さふと番小家より皆川をつれ出れば、それ打燈あげよと顔を見て、是は違ふたといへば、何と最前申た通り、いでお首をたまはらふ、いや其段はあやま



つた、いやさ首を取らねばおかぬと刀を拔ば、やれ逃  
よにげよと皆後をも見ず逃げ去りける、八郎左衛門  
お百合出で、扱々おかけで忝いと禮をいふ、皆川向  
ふを見、あれ曲輪の者共が九郎左衛門を先に立て來  
る、何としませふぞ、八郎左衛門聞き、只今の返報に  
こゝは某受取たと、兩人お百合を番小家へ入る所へ、  
九郎左衛門大勢つれかけ來り、こりや其方は皆川が  
腰おして走せたうたの介じやな、のがさぬぞ、むゝ大  
かた同じがくにくるよ、身は左様な物でない、いやま  
ぎらはしい、此番小家を詮議せよ、まつたく何かく  
そふ某は去娘と此内で忍びあふ、其娘が羞しがれば、  
此内を見せることはならぬ、みせぬからは皆川に極  
つた、して又皆川でない時は、はて其時は首をやる、  
てうと思ふ通りじやとお百合をつれ出て、是が皆川  
か、はて違ひました、さあ契約の通り首ごらふ、いや  
まだ詮議が残つてあるとせりあふ所へ、彌次兵衛大  
勢引具しかけ戻り、やれお百合様じや扱は汝が八郎  
左衛門か、のがさぬと取まはせば、うたの介も駈出で  
抜き合ひ切むすぶ、其まぎれに彌次兵衛はお百合を  
つれて立返る、八郎左衛門は九郎左衛門と切結び、曲

輪の内へ入、うたの介は侍共をおつ拂ひ番小家より  
皆川を出す所へ、揚屋八幡屋治郎介駈來り八郎左衛  
門といふ侍を九郎左衛門様其外大勢取まはし、皆川  
様をいづくへ走せたと、ほうで取まはし詮議最中で  
ござります、なむ三寶其難義は皆われゝゆへなれ  
ば見のがしにならぬ、是皆川そちは此塀を乗越へや  
はり曲輪の中にゐたていにして其詮議の中へ出てた  
も、時には八郎左衛門の難義はないといふ物じや、成  
程私さへ出たら事は濟みまふが、こな様と一所に立  
退ことがなりませぬ、いやそれは此二郎介と心を合  
せ今雷の内に又盗み返す、こりや二郎介がてんして、  
吞込んだといへゝと、めはちきして申せば、成程吞  
込みましたみな川聞、こなさんの請合からはそんな  
ら曲輪へ戻りますと、うたの介を踏へ壁を乗越へ曲  
輪へ返る、うたの介は扱々すいとはいへど遠は女じ  
やは、曲輪へ戻つたらば九郎左衛門が取逃すやうに  
して置ふか、八郎左衛門に難義させては、侍の義理が  
立ぬゆへに、だまして戻した、此心底を知せてくれよ  
と、涙ながらの玉へば、二郎介は御心底おいとしや  
と共に涙ながし曲輪の内へ返りける、程なく明六ツ



の太鼓の音、扱ははや夜があくるそふなどいふ所へ、九郎左衛門は皆川を駕籠に乗せ先へ立、其身も駕籠に乗り大門口を出れば、二郎介はお供申見送りに出る、皆川はうたの介かしこに忍びゐる方へ目をやり、是二郎介さん、こなさんの女房にならふと云た女郎がわしにいひ置れました、たとへいかやふなことがあらふとも、かまいて外に女房を持て下さんすな、身は百里二百里隔て、鐵で繋れてゐたと儘、抜て來てこなさんに添ねばおかぬと、いつてくれといはれしましたと、余所事にしてうたの介へ知すれば、九郎左衛門は駕籠急げ〜といへば、皆川せひなく駕籠の内より見合せ、忍び涙に伏し沈み江戸へ下るぞあはれなる、二郎介も涙ながらかしこへ入ところへ、八郎左衛門來り、是うた殿某曲輪にて様々ひまを入れゐたりしは、其間に一里なり其落ちのびさせふ爲なるに、思ひの外皆川曲輪へ戻り玉ひ肝を潰した、あれ九郎左衛門が江戸へつれ下りし、こなたと心を合せよい場に奪ひとらふ、いざござれ、いや〜私は思ひ切りました九郎左衛門はよい身、私は浪人もの皆川を眞實かわいと思ふなら、よい身になる方へ遣したがよい

と存じ、ふつゝりと思ひ切ました、それでもこなたなくば、はて一期つれそはふと思つた女房に引わかれ、これが悲しうござるまいか、是夜が明け人が見れば人立がする、外聞がわるい、いや大事ござらぬ腹一ぱい泣かねばならぬ、はて埒のないい〜、女房よび出し意見させふと、お百合〜と番小家を見れば、うたの介は、扱はこなたは何もしらぬそふな、お百合殿は最前の騒ぎの中に、追手の□□つれて販りました、何ゆりは奪ひ販りしとやと、腰を抜き泣ば、是々人が見まするわいの、いや立ても大事でござらぬ、女房を取かへされ、是が泣いでゐられふか、腹一ぱいなく、扱□□□□もおれも同じ思ひじや、不思議にあふて志をうけた、又御縁があらば御めにかゝらふ、さらばさらばと名残惜めど涙は盡す、兩人共に泣き悲しみ別れける、爰に青葉の前□□左衛門屋敷へ入玉ひこしもと共を召れ、此中入玉ふ外記の内方お百合の心うき〜とし玉はず、何がな慰みをご尋ねたれば、中間下女打まじはり、臺所で下々のわざ□□□□すが見たいとある程に、中間共をよべとあれば、畏つて中間谷右衛門定平九郎介御前に出る、下女たま中は、こ

ちが思ふは此中から奉公にはいつた中間の空兵衛□  
□□とはめうこそふな、點頭うなづきやうて囁いてゐる、中  
間共聞き、成程そふじや空兵衛をよふでこふ、そちは  
たけを呼出し詮議せよ、姫聞き是は何より面白から  
□□□此通りを云つて見せふと、こしもと打つれ  
奥へ入給ふ、下女共はおたけくと呼立れば、はてや  
かましい聞てゐるわいの、中間衆がいふには、奥様が  
我々が手業を見て慰みせふとの事じやげな、じたい  
此奥様は殿御が氣に入ぬさふな、屋敷へござつてか  
ら碌に殿御と寐さしやれぬと譏る、後へお百合出れ  
ば肝潰□□大事ないく、其そしる話が聞たいと思  
ふての事じやどの玉ふところへ、中間皆々出る、あの  
後な中間は何といふ、空兵衛と申ます、むゝあの空兵  
衛どれやら念頃□□□があるげな、下女共聞き、そ  
ふでござりますと、おたけが顔ながめ詞揃へて申せ  
ば、たけはおれが顔を見ていな物のいひやうじや、但  
し空兵衛殿おれに惚ていやしやるか、何□□□おど  
れがおれに惚てく女房になりおつた、お百合腹立、  
其様な徒があつては是に置事はならぬ、たけ出てゆ  
け、おたけはさあ空兵衛殿一所に出ふ、そちにこそひ

まやれ空兵衛にはひまやらぬ、奥様それを聞ふばか  
りじや、最前空兵衛と泣きかけで泣しやつた、あぢや  
らんすの、是空兵衛殿いとまの印しおこしや、おゝ十  
代をやると一腰投げ出せば、其儘引抜きあの人を切  
ておれも死る、空兵衛おしとめ、こりやたけそちを去  
つたは、おゝ今霄死るゆへ縁を切た、身には以前深  
い女房があつた、此娘が身が事を思ふて今の男の心  
に従がはぬ由を聞き此上は身は死で見せる此事は  
ふ爲かやうのていに成てゐる、空兵衛といふは八郎  
左衛門、お百合我身の上なれば是はく皆の者兩人  
が中直しをせふ、下女共は奥へ行け、中間共は外記様  
の戻らしやるか臺所へ行き見てゐよ、畏て皆々かし  
こへ行ば、後にてなふ八郎左衛門様ふつゝりと思ひ  
切る程に、やはりおたけを女房に持て死すにゐて下  
さんせ、おゝ其心なればなんの死ふぞ、たけおゝよう  
いはしやんした、お百合は是にけ今霄外記様留守じ  
や、たつた一度合せてたもと頼めば、たけ氣を通し火  
を伏消し合る所へ、中間共下女共といひかはしゐれ  
ば皆あいに来る、所へ人音すれば八郎左衛門お百合  
うろたへ一ツ帶を兩人して出るを、てつしんくらま



ぎれに兩人をつかまへ、火をもつて來いといへばこしもと手燭持出るを、顔を見て火を吹き消し、やい皆の者は詮義すればごいつらも命がない、そこを思ふて火をとばさぬ、此内に女の分は皆奥へはいれといへば、皆悦び拜みく内へ入、侍共火を出せといふ

ば、大勢火を持ち出る、是々身は外記が兄兵部といふ者、こなたは八郎左衛門と聞いた、大小をやり身に大望があるが頼まれて下されふか、名まで御存知の上只今の御恩一命を進上いたす、然らば申さふ某此國に望あつて一たん思ひ立たれ共、弟外記に詮義せられ、其首臺に髪を切り、今てつしんと出家の身になつてゐる、今霄は外記が他行致した道にて打取て玉はれ、中間共も其通り心得よ、八郎左衛門聞き心得ましたと、中間引つれ走せ行き外記と切結び來り、太刀打とし外記を搦める、てつしん悦ぶところへお百合姫君だけ諸共槍ひつさげてつしんやらぬぞ、てつしんは是家の系圖は盗み出せしといへば、八郎左衛門私にお渡しなされど請取り懷中し、其儘外記が繩はごけば、兵部は叶はず逃げゆく、八郎左衛門は是外記殿、お百合を腹な子共に渡す、女房になされて下さ

れ、心得ました、又おたけはこなたへ進上致す、何よりの物を忝ない、お姫の聲君を尋ね御ふうふに致しませふと皆打つれ内に入にける、

## 第二

道中の出女口早に泊らしやんせくといひ立る、皆川は駕籠に乗り小六を供につれ通るを、比丘尼共御參宮の下向勸進入れさんせと小歌うたふてついて來る、皆川は此半太左衛門様はおそい、こゝらで休んで待合して行ふ、びくに共は此竹屋といふ所がよい座敷もござんす、あれへお入なされませ、おゝそなた衆も來て、歌うたふて聞しやと、皆打つれはたごやへ入る、程なふ皆川が姉聲鈴鹿半太左衛門は下男に荷を持せ來る、山伏は柿の頭巾輪袈裟かけ鋤杖振り立二日は三日の大明神、一々やらしやれと尻について來る、最前からついて來た錢ごらさふと巾着あけ、仕合な奴じや錢がないこりやこまがねくれる、何と大盡であらふが、是は見事じや三匁はあらふ、是で酒をかふて今夜は樂むじやと、立販るを呼戻し、銀貰ふたら米買ふといひひそうなものを、酒にして樂ふとは以前



が思ひやらるゝ、よい目でござる前かたは大分銀つかいました、人にやるとても小判を十兩五兩、一兩より少なうやつた事はない、餘り過て親が勘當して此体でござる、いや面白い奴じや身も酒を好いてたべる、なんご身が行き宿へ來て酒一ツ飲みあひたい、成程參らふと打つれ行く、小六出もしゝゝ是におちよ様がござります、直に泊りたいと仰やります、おゝ心次第にせよ、扱かはつたたいを同道した□□是へ出酒をのめやれと申せ、畏つて奥へ入、是山ぶ女連じやが此酒の見事さそちも成まい、然らば我等見事な肴を致して參ふと、勝手へ入、所へ皆川出る、山ぶは大□□□肴にし持出る、うたの介なれば皆川はつと扇を翳す、半太左衛門はそれはどうじやと扇を取れば、うたはきもをつぶし扱も久しやゝゝといふを、目はちきすれば、其儘そ□□□比丘尼をとらへ久しうあはなんだ、比丘尼ていざん聞きおれは見しらぬ、さふでもあらふ最早八九年になれば見しるまい、おれはよう覺へてゐる、此お女郎□□□たでござります、身が女房じや、扱はお内儀様か、私には國元にいひ名付の女房が待てゐますに、女のかたりに逢ふてうか

うかと、此ざまになつてあるく、是から國への□□□もたふと立て出れば、皆川は是男盃の埒もあけずにいなさぬと、手を取を突倒せば、半太左衛門刀押取り身が女房をなせ突倒した、されば私が手を取玉へば□□□□疑をうけては男が立ぬゆへ、つき放しました、尤じやゝゝ去ながら女房がとめた一ツ飲で販つてたもれ、皆川どうあつても盃の埒明ねばいなさぬとむ□□□□半太はやはり其姿くづすまいゝゝ、女郎の口説に其儘じや、そこを肴に酒つけとつゝこのむ、皆川は此男といひかはした女になつて挨拶したら何とござんせふ□□□□いへまい所望ゝゝ、そんなら是男、江戸三界へ行先の男は死だゆへ、此度上るもこなたにあはふばかりじやと、こふいひさふな物じや、半太は面白いは我等山ぶし姿と頭巾をきしや□□□さふ共ゝゝと又酒のめば、うたは是つまらぬことをいふな、其心底の者がなせ又あの男を持た、あの人は姉聲なれども道中ゆへ女房じやとわざといふ、なんどこなたは此女郎の姉聲□□□□酒に酔ひうつゝに、さふ共ゝゝ姉聲じやとどうどこけ寐る、皆川小比丘尼どもをいなすれば、ていさんはこはい戀

のしやうじや、私らが目をぬくくと思はさんせふが伊勢道はぬけぬぞへと、□□□ける、皆川うたをかしこへつれのき、此形には何としてならしやんした、されば揚屋次郎介を頼んで借た三百兩の金が、利を書上げく今千二百兩に成てある、餘りきつふせがむゆへ上□□をはしりた、それは氣遣ひさしやんすな、私を身請した九郎左衛門といふ侍は、誠は江戸よし原のみはら屋四郎兵衛といふかね持のくつわじや、此度死だ譲り金三千兩貰ふて奈良の京へ上ります、奈良の三條へ尋ねてござんせ、金をすましてござんと夫婦になるといふ所へ、はたごやの亭主十兵衛戻り、やい男共お尋ね物がある、お客は奥へと皆川を内へ入る、うちは頼冠しぼう持いる所へ大勢來り、某は京天満屋作兵衛手代甚兵衛といふ者じや、うたの介といふ者千二百兩金おいながらはしりた、此所に山ぶとなりあるよし、所の代官様へ斷り捕へに來た、其方冠をどれ、うたは聞き山伏詮議ならば爰に一人寐てゐます、誠にゐるはと、半太左衛門は山伏頭巾に錫杖持ちゐいふすを引起し、そちはうたの介かといへば、うたともく錫杖ふれば、それ捕へよ、こは

狼籍なとせり合ふ内に、うたの介は人に紛れて逃げる、奈良の京半太左衛門家へ、大阪こつま作太夫女房おせん夫婦づれで尋ね來り内へ入ば、半太左衛門が女房おたつ出、作太夫様よう上らしやんした、おせんは姉様お久うござんす、江戸へ行しやんした姉の皆川様はたよりがござんすか、されば大分譲り金貰ふて上られたゆへ此家も買ふた、今はおちよといふ逢はせふと内へ入る所へ、皆川出、作兵衛様頼むことがある、此度もらふて上つた三千兩の譲り金を半太左衛門様の請取て、私を座敷へ追込めて外へ出る事もならぬ、金の手に入るやうにして下さんせ、成程思案せふと打つれ奥へ入る所へ、若い男來り案内乞い、私は撞木町のおろせ庄五郎と申者、此ふみを皆川様へ進せて下されませ、ちよつと御めにかゝりたい、角藏聞きそれに待たまへと内へ入、半太左衛門へ渡す、ふみ披き見、かやうくと囁き内へ入、角藏表へ出成程ふみ進せたれば、あはふと仰せらるゝと内へ入、おたつ酒にゐい寐てゐるそばへつれ行く、今は皆川様をおたつ様といふ、人が來たらば蒲團の下へ隠れたまへといひ含め内へ入、庄五郎は是おたつ様お



たつ様と枕元へよる、所へ人音すれば其儘蒲團の中へかくるゝ、所へ半太左衛門出で蒲團取て見、其儘兩人が胸ぐら取る、お辰膽潰し、そなたは何人で爰へ入り難儀さする、お前が来いと仰せゆへ参りました、半太左衛門聞き、扱は身が女房を知らずに来たな、しればいひ分はないそちはかくれ、おたつ庄五郎を引留め、おれが不義のないといふこと埒明けていねといふ、所へ皆川が出れば是おちよ、道中でもこちの人と寐やつたげな、おれは疵付け追ひ出そう企じやの、半太左衛門聞き道中の間あの人のそばへねやつた事もない、皆川聞きいや成程毎夜ござつた、それは不粹ないひ分じや、さあ私は不粹なゆへ、遂に一夜も心に從ふことはない、半太左衛門迷惑がる、庄五郎は男衆に風呂敷包を預けましたそれを戻して下され、角藏出で是々ど渡すご其儘取てふせ、身は彦阪一平次といふ侍じや、此奴がわざでござる、うた様よりのお文を渡さふ爲め、おろせの庄五郎と僞つて参つた、文を請取せたふが、いや見ませぬ、其文は何としたと責めれば半太左衛門氣の毒がり、それ落したであらふが、いかにも落しましたといふ、然らば太儀ながら半太左

門殿尋ねて出したまへ、さないといつにいはさするが、はて迷惑など懷中より取落し、是々こゝにござる、皆川讀みてすればこなたはうたの介様の家來衆か、成程左様でござります、此上はおたつ様にあやまりはない御夫婦の中よう添ひたまへ、お返事を明日取りに参りませふ、拵へて置て下されませご我家へ飯りける、皆川は兄弟打つれ奥へ入、後にて半太左衛門角藏を近付け、最前の文にうたの介から金をおこせといつてこしたれば、皆川を兎角外へ出さぬやうにせよといふ所へ、作太夫出なふ皆川が内々椽の下からぬけ道を拵へ置、うたの介方へゆくこて今入つたといへば、やれ男共椽の下を搜せと皆々下へ入る、半太左衛門も椽の下を覗きゐる内に、おせん皆川を後にかくし門へ逃げ出る、作兵衛も隙を見て逃げ行きけるぞ危ふけれ

### 第三

かくて皆川逃げて出、大徳屋といふ呉服屋の内へ逃げ入、びく尼ごも出是は久しや、道中で御めにかゝりました、なふ此内にお前の鈴鹿で逢しやんした殿御



が、煩ふてござんすといふ所へ、うたの介ふどん敷かせおもてへ出、皆川がなつかしや、撞木町であふた八郎左衛門はもと身が家來で互ひに名乗あふて、今は此呉服屋となつて、おれをかくまふてゐるといふ所へ、半太左衛門は町の年寄□□□□皆川を見付たらへ、それ成は道中での山伏め、それた、けと取付けば、脇ざし抜く、やれ出あへくといふ、女房おたけ駈出留める所へ、八郎左衛門戻り、是はお年寄様どうでござる、半左衛門出□□□□やうし娘なるを、あのうたといふ男が密通し走らせた、む、皆川殿と思ひやふた中ならば、此方へ貰ふて夫婦にしませふ、□皆川には男がある、(十五六字缺ク)くる、女房皆川はいや三十兩金をくれと有て、之れを書いてやりました、八郎左衛門抜き見て□半太殿、是は三十兩(七八字缺ク)にした物、女房皆川とあるも女房は書添たのじや、墨色が違ふてある、殊に娘を女房にしたといはるゝならでんごへ出て云て見よといふ所へ、ぼうぐわん侍引具し來り、(十五六字缺ク)るでないかようばけて來たな、兵部鼻のぼうし取て捨て、うたの介、是にありと聞き、半太左衛門と心を合せ、ぼうぐ

### 八文字屋八左衛門板

わんどなり生捕ん爲なるに、あらはれたと打てかゝる、所へ平次駈付け半太左衛門を□□□□左衛門兵市を切伏せ、お國の敵を打た、いざお國へお供申さん、皆川殿はお手かけ、青葉姫様は御本妻になされよと、うたの介の御供し國入あるこそめでたけれ

兄曲輪水性 三番つゝき

有卦入万倍曾我

弟箱根土性 大あたり

第一 ごもろだいこ 思ひ羽の鳥

第二 かたみの文箱 ひれふる鯉

第三 かりばのまく すそのゝ駒

▲扱お断申上まする

役者紋揚弼 三ツノ津 三 卷

付り當りのつゝく束穴は

一二の替り藝品定

第一 金具の京蒔繪

第二 泥書の江戸畫

第三 朱書の難波傘

右二の替り大評判

三月三日より本出し置申候

一 源のよりいへ

一 ちばのつねたね

一 にたんの四郎

一 ぎいの彌太郎

一 けいせい龜ざく

一 同 かめづる

一 同 きせ川

一 同 手ごし

一 かぶろ

一 やりて

一 下男

一 あげや長三郎

一 みうらや下女りん

一 祐のぶ下人つやの介

一 ひにん

一 ひにん

一 工藤いぬばう丸

一 うさみの三郎

一 そがの祐のぶ

澤村吉松

澤村政五郎

市山金十郎

市山辰十郎

藤川正松

嵐花まつ

辰岡玉菊

さの川市松

辰岡品菊

小倉山万四郎

尾上源次

大原藤八

市山仙介

さの川妻橋

よし澤四郎七

市山傳藏

其外あまた

玉川みやこ

澤山春五郎

辰岡染右衛門

一 大いそのとら

一 そがの五郎時宗

▲是より二役の分

一 みだいまさこの前

一 二のみや

一 けはい坂少將

一 みうらのかたかい

一 祐つね女房万かう

一 そがのらうば

一 かち原平三

一 みうらや三右衛門

一 さもろ御ぜん

一 かまや武兵衛

一 六十六部正心

一 御所ノ五郎丸

一 あわしま徳太夫

一 片かい下人與も八

一 そがの十郎

一 わだのよしもり

一 工藤祐つね

一 百性<sup>か</sup>與五兵衛

一 小林ノあさいな

以上

大夫辰岡久菊

大夫嵐 小六

岩井甚之介

岡島元太郎

坂東豊三郎

大谷彦三郎

笠屋又九郎

市川權藏

春山源七

立役春山源七

三保木義左衛門

實惡三保木儀左衛門

大谷廣次

立役大谷廣次

以上



兄曲輪水性あはくるわのりしやう  
弟箱根土性おとこはにこれのつちしやう

有卦入万倍曾我うけいりまんばいそが

都万太夫三の替り  
大谷廣次大當り

## 第一

千世のことぶき鶴が岡、八幡宮の神前にて、頼家公御具足着の御祝儀、御母政子の前つれて御出あれば、梶原仁田千葉土肥をはじめ、諸大名しかう有、御祝儀にさま／＼のおごりはじめ、虎少將も御しやくによばれ来る、所へ神主姿ゆふだすきかけ、虎少將と色ばなしの所へ、朝夷母巴と、陣太鼓をになひ出、此度伊豆のちか平謀叛に、荏柄の平太一味せしゆへ、三浦は一家、和田九十三騎閉門仰付られ、父義盛も出仕ならず、くはたいに母巴と某、太鼓擔ひ三日が間持あるくと、神主を見、こは我君様じやとかうべを下ぐれば、ゑ、此なりで頼朝とはしらず、よい慰みであつたにこの給へば、御装束着せかへる、政子様頼家公諸共、お待ちされてござると、頼朝を御供申をくへ入、巴いふ、祐經此度伊豆の次郎が討手の役、此大太鼓の中に入てゐ、我々が何をいふぞ聞ん爲、どういんひじのは

かりごとじやと云を聞、曾我の五郎敵祐經を見知ぬゆへ、少將となり女の姿に成來り、是を聞かくせし刀を抜き、太鼓切破は二ツに成、中に何もなし、朝夷これを見、南無三君より預りし太鼓を破て何ぞせふとうろたへぬれば、母巴はやい朝夷、汝は木曾義仲のたね、頼朝を討て無念をはらせ、五郎いざ奥へ切入んといへば、朝夷□□木曾殿討れ、こなた生擒れ死罪の所を、君義盛へ妻に下され、三年して某誕生したれば、和田殿の子でござる、巴き、いや／＼辨慶は三年三月めに生るゝ、老子は八十年で、生れながら白髪はへたりと云ふ所へ、祐經出仕と云ば、五郎太鼓の中に隠るれば、巴も奥へ忍ぶ、祐經來り、是は朝夷殿か、大磯の虎少將が來たとある、ごこにゐますぞ、かたい／＼身はおり／＼參ると、素袍引取りこしまきはおりにすれば、祐經見て、長ばおり持せた、それ／＼と取出すを見れば、ひしかきに秋野の、いほりにもつかう、是は曾我殿原がもんじや、成程くるわ通ひに金一兩に賣たを身が買取た、其賣主是へ出よと云ば、六十六部出、曾我中村を通りたれば、金一兩に買てくれと有ゆへ買取り、祐經様へ上たれば、金百兩下されたと云

ふ所へ、奥より祐經呼立れば、御前へ行にける、五郎聞かね、太鼓より飛出し、六十六部を引捕へ、此羽折此中見えせんぎするに、己れどうして持て來たと責れば、有やうに申ませふ、あばらやの内に、此羽折が見えたゆへ、此棒で搔き寄せ取り、祐經様へ賣りましたと云い、さんく、踏み殺さんとするを、朝夷おしとめ、いつ殺しては、賣ぬ云ひわけがない、とら六部がかいなに、大盗人と入ぶくろさせ、是で盗んだ印、五郎百杖打て、それは唐土の成敗と、さんく、打ふせる、朝夷見て、もよいは、命が有まいと引のくれば、虎につれられかしこへ入、朝夷顔へ水打ば、六部氣が付起上ればでかしたく、今のでは、十郎五郎が、曲輪通ひとまるであらふ、六部聞、私は十郎様一万と云時、乳を上たうばでござる、御兄弟の曲輪通ひとめんため、お前のさしづにてかくの通り、何とぞ祐經へ奉公に出、敵をお打なさるゝお爲に成ませふ、朝夷聞き、惡人となつての忠はめづらしいと、悦びかしこへ入にける、所へ祐經が弟宇佐美の三郎、万かうをつれ出、六部を氣を付け、是は祐經殿の御臺じやと云ば、先達て様子は聞た、何と奉公するなら、侍に召抱

へふと有ば、忝ない、少將と申すは曾我の五郎、女姿となり祐經様へ近付ん爲といへば、万かう聞き、汝今より近江の小藤太と付け、犬ぼうが家來にするぞ、忝ないと打つれ奥へ入、頼朝の御前には、祐經伊豆の次郎討手の、おいとまの盃下さるゝ、銚子少將につげと有ば、五郎つゝとより睨みあふ、祝儀の御能は楓狩、小藤太白鞘卷の刀持出れば、祐經五郎にやる、手を握りしめれば、血流れ柄の鮫赤くなり、赤木作りの刀となる、所へ巴、衝立蹴破り、長刀を頼朝へ討つくるを、朝夷引とり繩かくる、五郎は女かづら引脱ぎ、鎧着んとするを、虎狀持添へ引とめ、是は曾我の老母の文ちぎれると母のお手ちぎれるといへば、道理につまり引かぬる、朝夷五郎を止め、此場に兄十郎がない先待、いつまで待ますぞ、おゝ兄は水性そちは土性、五月には有野に入るそれ迄まで、るゝ無念など三方噛み砕きとゞまりし勢ひこそはすさまじけれ、かくて大磯揚屋長三郎方へ、三浦屋三右衛門來り大騒ぎ、かま屋武兵衛片かいに惚れ、親三右衛門に貰へど、五郎に心あるゆへ戀かなはず、腹立奥へ入る、十郎來りきせ川に逢ひ、祐經伊豆の次郎詮義の爲、曲輪へ來る



由、教へてたもと頼めば、きせ川聞き、さまぐ物賣になりござる、曲輪の衆ちぎして通るが祐経殿じやと教へかしこへ行く、所へ小藤太扇賣になり来る、曲輪の者皆々ちぎして行く、十郎祐経と合點して扇の地紙買んといへば、取出し見せる、見れば庵にもつかう、虎が紋、是は若侍衆が、虎に惚れたれど、十郎ふかまゆへ戀かなはず、腹立にころさう爲じや、煙草下されど、煙草入へ金十兩入れ返せば、取出し戻したまへば、請取其場を立去りける、十郎揚屋へ入り見れば、逆澤瀉の鎧、賣物と張紙あり、揚錢の方に渡し置、賣物とはどうじや、長三郎聞き、されば三百兩の方じや、さあ金渡さるゝか、有まいゝそれ男共と、棒振上げ取巻く所へ、祐経駈付け様子を聞き、お侍の御難儀、幸ひ是に持合ましたと、金三百兩こなたへ御用に立ますと、取出し揚屋へ渡せば、長三郎請取、相濟ましたればお前の鎧と、賣物の張紙これば、十郎はさてさて忝ない、金子持参仕るまで、此鎧お前にごめ置下されませ、いやゝ質物は取ませぬ、御笑止に存じ御用に立ます、然らばお名は何と申ます、いやこなたのお名、御宿所も存じておりますれば、私が名を申すに

及びませぬ、其心からは仰られまい、追付返辨申しませふと、十郎は別れてかしこへ行にける、小藤太來ればだんゝと話せば、私も最前煙草入戻しさまに、金十兩入れやりたれども、合力受ぬとて戻された、お前と知ては受られまい、扱詮議致せご知れませぬ、然らば身が衣裳そち着替、扇賣に身がなると、互ひに着替る所へ、十郎見れば最前の扇賣結構なる衣裳不審をなす、小藤太は、そちが曾我の十郎じやな、大小竹ぺらか、此かななべのかね同前と、さまぐ悪口すれば、十郎無念がり、一心で付通すと、扇おつ取り、かん鍋付ぬき酒出る、祐経見て、其扇折れといへば、へし折る、十本出しこれ折れ、十郎力出せご折れぬ、身は祐経じや、一本の扇はそち一人、十本はそへ力五郎と一所に來て討て、道理を云て飯れば、十郎はるゝ五郎はごこにゐるぞと、尋ねてかしこへ行にける、百性與五兵衛旅妾にて大磯へ來り、女郎衆をながめ、遠州かけすかの女郎はごなたぞ、教て下されといへば、小藤太聞き、それは何年になる、十二年になります、先女郎買ふて、しつぱりと尋ねたがよい、買ませふ金がござりませぬ、それは身が出してやらふと、揚屋へつれ



行き、是は身が客じや、女郎よふで合してくれ、心得ました、新造の手ごし様がよからふと、云つてやれば、八文字の道中姿揚屋へ入る、與五兵衛見て、おれが賣れて來た娘も、あの通り勤するであらふと、しほしほとなり心浮ねば、手ごしはおれは氣に入らぬさふな、女郎かへて遊ばんせ、ふつて奥へ入る、やりて杉、はしり出口に行を、與五兵衛引とめ、こなたは久しう大磯にか、あゝ三十年もやりてしてゐます、そんなら尋ねたい、十二年以前に、かけすかより賣れて來た娘、今の名は何といひます、知らしやりませぬか、幼名は、おせんおひやくと申ました、それは今御全盛で、大磯の虎少將様とて太夫様じや、あゝ急がしと云すてかしこへ行にける、小藤太うしろで聞、そなたは何ぞ、私は其虎少將の親でござります、十二年以前に女房共が人にだまされ、二人の娘を奉公に出し、跡で曲輪勤と聞、氣上り狂氣いたしそれに取込みる、此正月に相果升たゆへ、娘尋ねに來ました、それには證據が有か、懷より秋葉山の札取出し、姉は七月生れゆへ七枚、妹は五月生れゆへ五枚、母が手にて、おせん、おひやくと書き、娘共が守りへ入、此方にも持てゐます

と、取出し見すれば、是慥なる證據、先奥で酒一ツのまふとつれて内へ入、小藤太出、みれば秋葉山の札、取忘れあるを拾ひ取、ところへ虎奥より出、そなたは以前逢ふた、六十六部でないか、成程そふじや、今は祐經様の家來近江小藤太 廻國したは二人の娘が行衛尋ねん爲、身は遠州かけすすかのもの、姉におせん、妹におひやく、身は兄弟が親じや、虎きもをつぶし、そふ仰るには證據がござんすか、おゝ秋葉山のお札に母が手で、おせんおひやくと書付有と、取出し合せ見、成程母様のお手じや、さてはお前が父様か、おとなつかしや、嬉や、そち身請して、祐經様の手かけにする、悦べといへば、虎けでんし、わたしは云ひ替した男あればいやじやといへば、親のいふこと脊くか、せひ身請するといひ奥へ入、虎難儀し、書置してゐるところへ、與五兵衛出、煙草入から取落した、爰に江戸繪のやうな物はござらなだかと、うろく尋ねる、虎見て、此男だまし、殺して貰はふと、色をしかけ蒲團しき、いざねやうといふ、ところへかたかい出話する内、與五兵衛蒲團の下に、相口書置あるを見讀みて、そなた死る書置じやがどうじや、されば私

は大磯の虎と申、十郎様と深ふいひかはした中を、父様が身請して、祐經の手がけにするところあるゆへ死まする、虎とあれば遠州かけすかの生れ幼名をおせんといはなんだが、成程そふいひました、おれはそちが父じやと取付ば、最前親にあひしと段々をいへば、それはおれが落したお札じや、さてはお前がまことの父様か、母様はおまめか、此正月に相果た、おひやくに合してくれといふ所へ、きせ川來り、中の町に十郎様口論してござるといへば、虎は走り行く、十郎行違ひ來る、小藤太奥より出る、與五兵衛は、札を拾ふて親じやとなせ詐つた、小藤太聞、身が親になり、祐經の手かけにせふといは、詮方なく自害でもするであらふ、時には十郎様、曲輪通ひやめばお爲、もと某は、御兄弟へ乳を上し乳母、月さよが子彦六と申もの、祐經へ奉公に出しも、御兄弟敵討たまふ手引の爲、此團扇は、河津三郎様、奥野の狩場で、御持なされた團とさし出せば、與五兵衛聞き、身も河津様の家來、鬼王庄司左衛門が忤、生國ゆへかけすかへ飯り百性となりし段々いへば、十郎聞き、今より鬼王新左衛門と名乗れ、忤ないこれ彦六、そち團持たればだん三

郎と呼び、身が弟にせふと、兄弟の契約するところへ、虎少將つれ立來るを、一間へ入鬼王少將を切る、虎があつては、十郎様心亂る、故手につけた、きせ川聞き、少將様死でござるといへば、扱は取違へ親の名乗もせず、おひやくを殺した、是もお主の爲、ゑかうせんと、大せい題目となへとふらふ所へ、下女のりんつれ來る、裏のろじより與茂八出れば、あれは何のとふらひぞ、少將様不慮にお果なされ、其とふらひ□□□□武兵衛來り、かたかいを肩にかけ行く、向ふより曾我の五郎、道ふさぎ通さぬ、つれの男だて取付を、さんぐに蹈み、ご□□□□こめば、武兵衛をはじめ逃げかへる、五郎が勇力、聲を揃へてほめにける、

## 第二

大磯の虎は、揚屋の二かいの障子あけ、少將のおし鳥の思ひ羽が五郎様へやりたいとありしが、今死なれたればあまた出□□といふ、かたかいおん鳥ごらへれば、五郎かへてほしいといふ、戀かなへて下さんしたら、梶原様に貰ふて置た、狩場の切手しんぷと内へ取にゆく、五郎はかしこへ入にける、かたかい切手



文箱へ入れ持出る、ところへ武兵衛出さまゝ口説  
ご、承引せねば付通す、文箱を池水へ投込む、武兵衛  
難なく殺し、懐なる金取る、非人共これを見、わけ口  
下されと取付、さんぐに投げて立退く、與茂八來  
り、死體見て肝を潰し、ろじより内へ入る、池中より  
大鯉出るを、飛び入り鯉を抱へ、難なく岸へ上り、腹  
をわれば、中より文箱出る、是富士の御狩の切手、か  
たかい様の心ざし、五郎様へ進せふと、悦び持て行に  
ける、かくて曾我の館には、河津殿十七年忌明日な  
れば、十郎は五郎をつれ來り、せひ今日勘當ゆるされ  
ねばならぬといふ所へ、朝夷紙子一枚着て、ふるいふ  
るい來り、親義盛が勘當うけた、二の宮と夫婦になる  
といひ入れあれば、こゝにかくまふてくれ、五郎が勘  
當がゆるさする狂言拵へた、十郎聞きそれはどうぞ、  
されば虎が土産の此面が幸ひじや、此地藏菩薩、老母  
信仰すれば、拜みに出らるゝ時、身が此鬼の面を着  
て、五郎勘當ゆるし、河津が敵を討せ、さないと八大  
地獄へ落すといふ時、十郎は地藏の面着て、勘當ゆる  
したら、河津を極樂へ救ひとらふゝといふと、母が  
勘當ゆるすと、いひ合するところへ、老母出地藏ぼさ

つを拜むところへ、朝夷面取り違へ地藏の面を着れ  
ば、十郎鬼の面着て、せりふ違へば母をかしかる、と  
ころへ義盛來り、五郎箱根にありしを、朝夷が男にし  
た、それで勘當、五郎に咎はないゆるして下され、承  
引ないと、朝夷を手打にせんと太刀を抜けば、十郎も  
五郎を手打にすると刀抜く、母おし止め五郎が勘當  
ゆるせば、朝いな殿もゆるさるゝか、せふ事がない、  
五郎勘當はゆるす、祐信殿存生の内、敵打はならぬと  
いふ、ところへ祐信出、河津十七年、墓參りといひ、内  
は出和田殿へ行き頼んで、勘當の訴訟して貰ふた、や  
い十郎、そちは祐經に金三百兩借たとある、敵の金返  
させふ爲、千葉北條へ行き借用して來た、是を返せ  
と、さいふに入れ投出し、母が身が存生では、上へお  
それゆへ討ぬといふ、是見よと肌ぬげば、腹切、狩場  
へ行く刻限になつた、急げゝといふ、鬼王ごう三郎  
馬引來れば、兄弟うち乗る、祐信見て、敵を首尾よふ  
打て、是までと腹帶解けば息絶る、養父の情、兄弟は  
富士の狩場へ行にける、

### 第三



五月廿八日、そが兄弟富士の狩場にて、親の敵祐經を討つ、十郎は仁田四郎に討れ、五郎時宗は、五郎丸を女と思ひ侮り大勢おり合ひ縄かけ、ついに御前へ引れける、頼朝御覽じ、祐經は親の敵打は尤、狩場へ切入りしはいかに、されば我君はおふち伊東の敵、それゆへ切入りました、兄十郎討れぬれば、冥途へ追付く、早く首討たまはれ、心底残さず申段、あつぱれ剛の者、富士の裾に宮を立て、兄弟あら人神に祝ふべしとのたまへば、梶原いふは、十郎は祐經に金三百兩返さねば盗人じや、其金腹へ入れ祐經死骸より取出し、五郎縄を切り、梶原に飛びかゝるを、朝いな草摺引、大當りと町中の御評判く

八もんじや八左衛門板

新群書類從第三終

明治四十一年八月十五日印刷

明治四十一年八月二十日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町二丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯兼  
發行者

市島謙吉

東京市神田區蠟燭町八番地

印刷者  
武木信賢

東京市神田區三河町三丁目四番地

印刷所  
武木印刷所







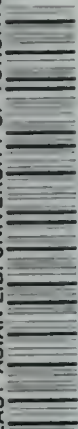
太公五年二月

孝成帝





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5053